

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第93集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第13集

三ツ寺Ⅱ遺跡

本文編

1991

群馬県教育委員会

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

東日本旅客鉄道株式会社

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第93集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

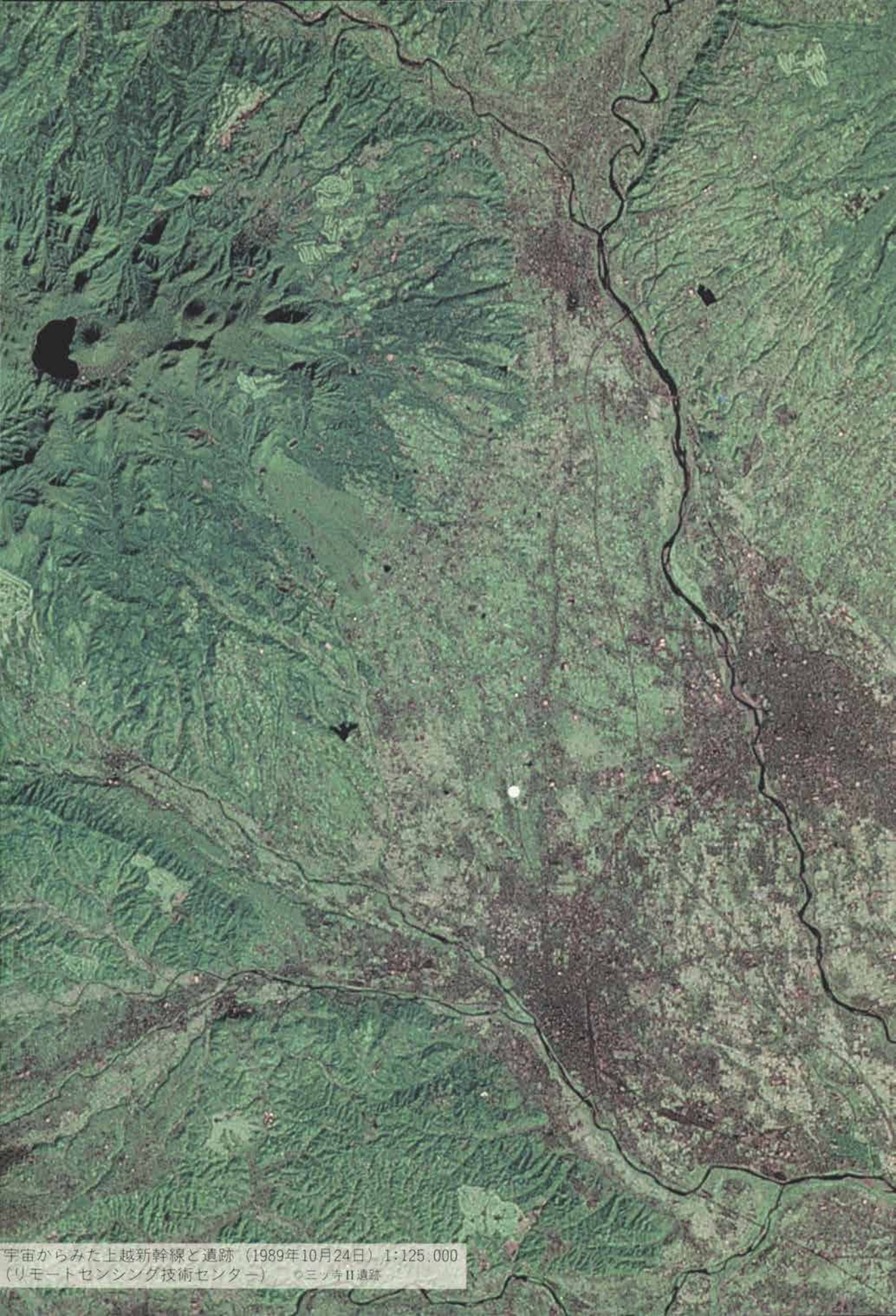
第 13 集

三ツ寺Ⅱ遺跡

本文編

1991

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社



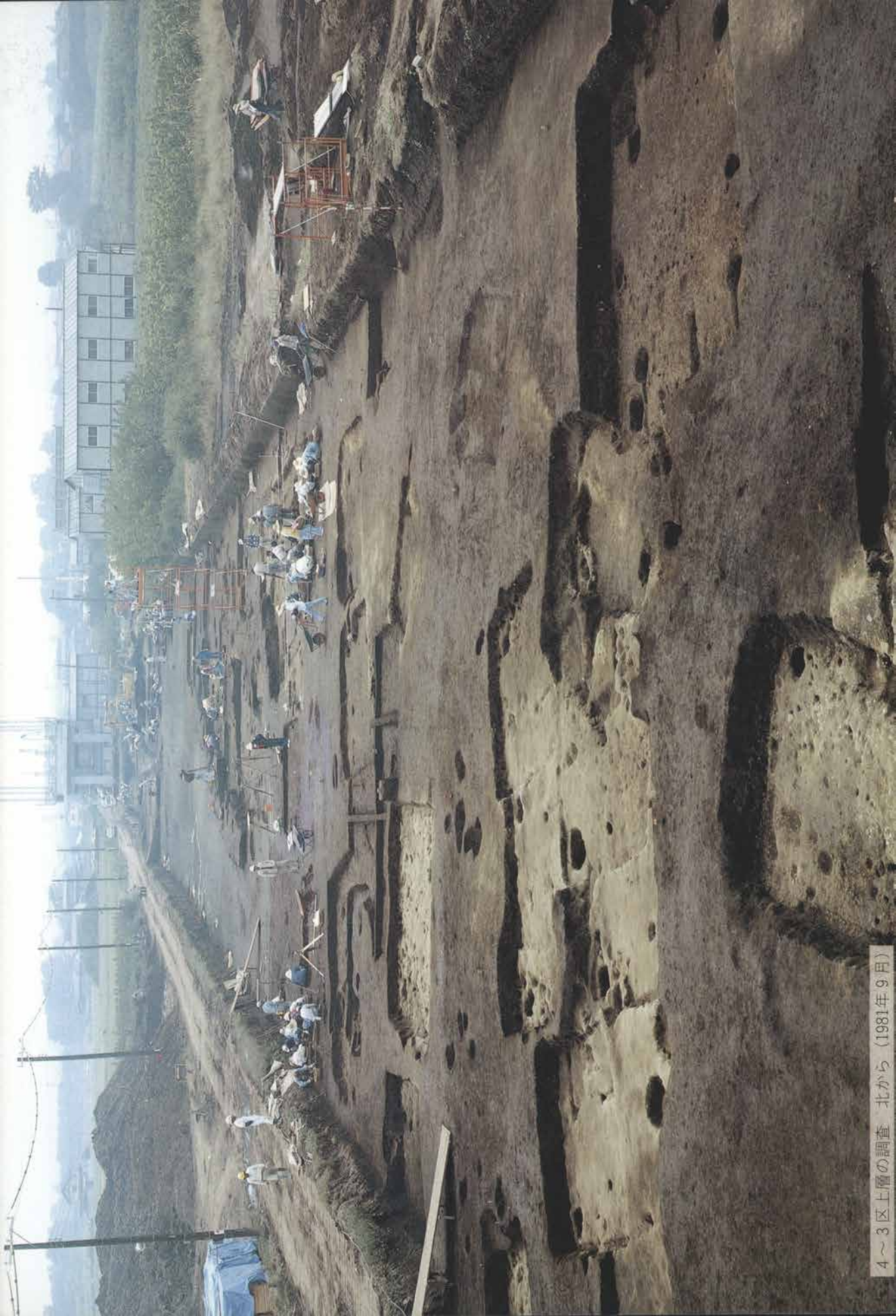
宇宙からみた土越新幹線と遺跡（1989年10月24日）1:125,000
（リモートセンシング技術センター） ●三ツ寺II遺跡



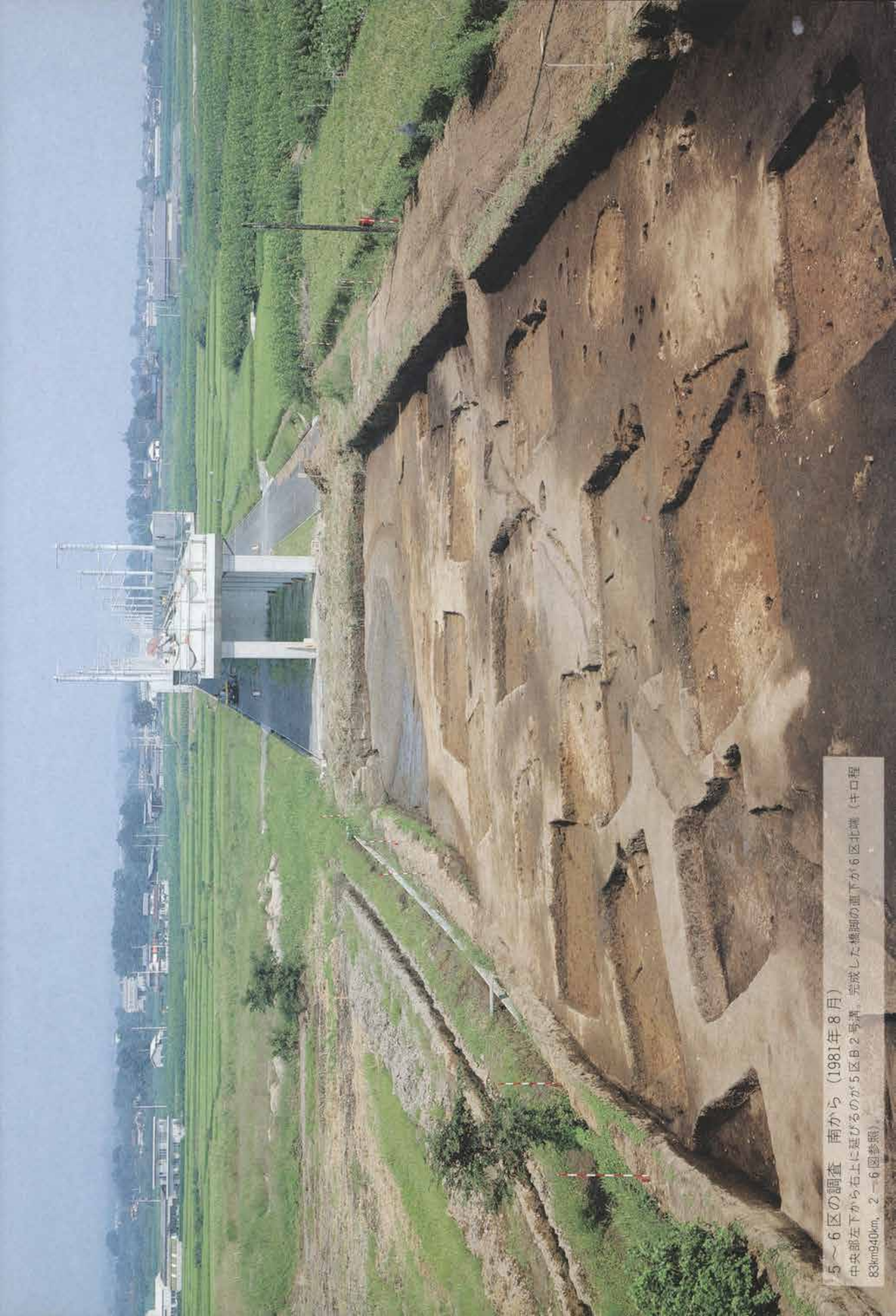
調査前の遺跡（1974年3月2日）1:4,000



調査中の遺跡 (1981年7月)

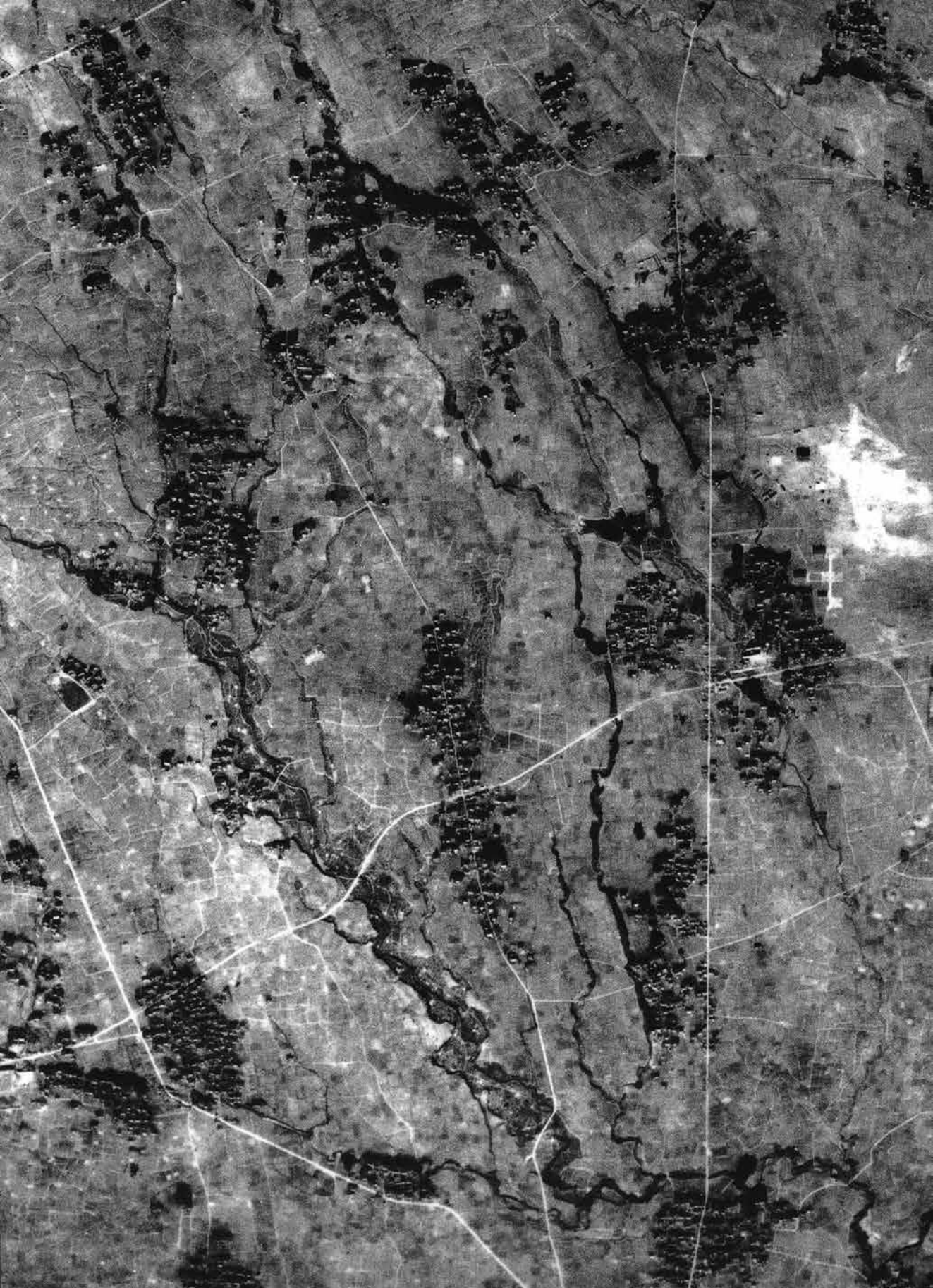


4～3区上層の調査 北から（1981年9月）

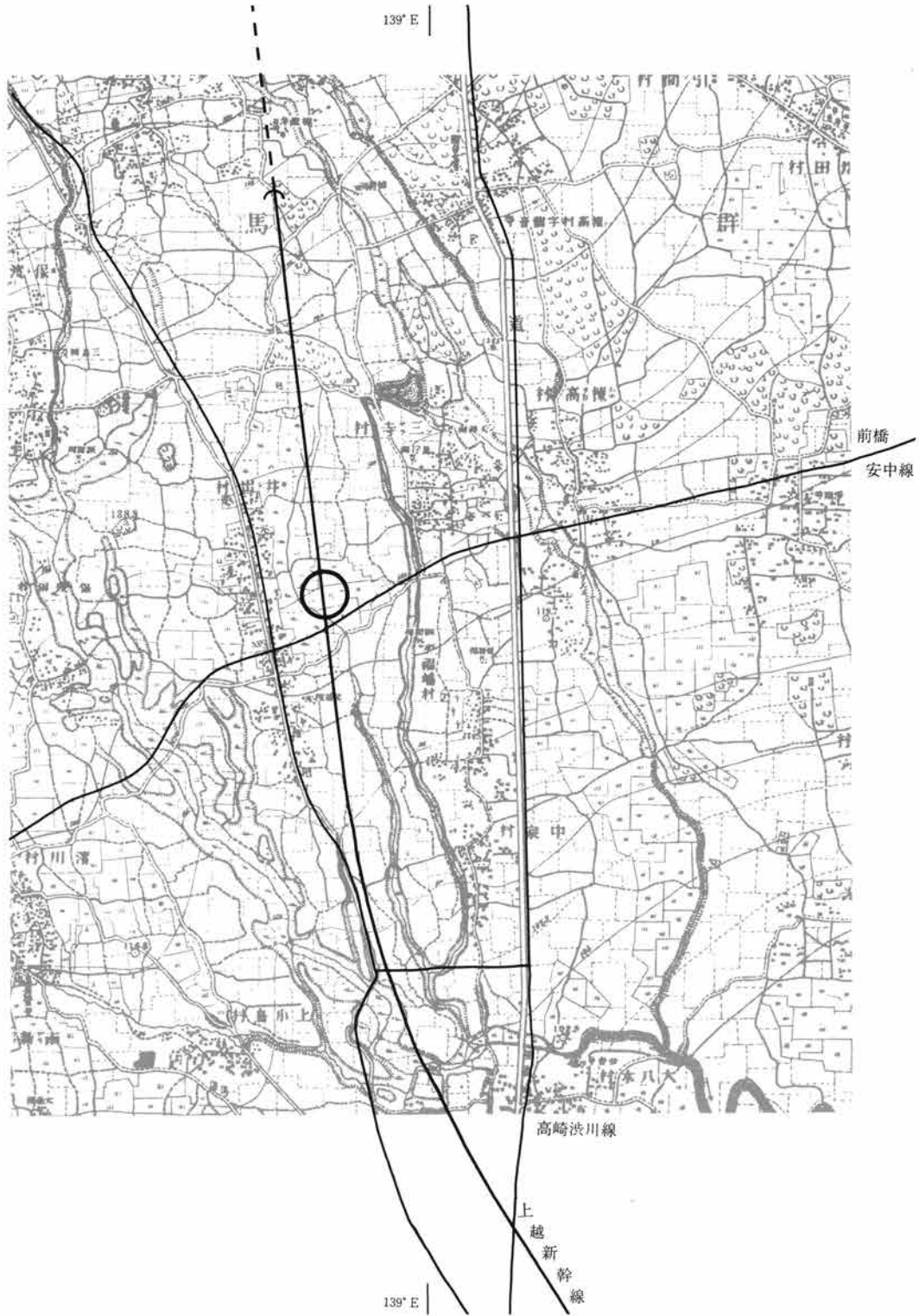


5～6区の調査 南から（1981年8月）

中央部左下から右上に延びるのが5区B2号溝。完成した礎脚の直下が6区北端（キロ程83m940m、2-6図参照）。



遺跡地周辺の地形 (1947~1951年) 約1:20,000 (米軍)
中央部が三ツ寺II遺跡。三ツ寺I遺跡や保原田古墳群が見える。



遺跡周囲の地形（1880～1884年）1:25,000

第一軍管地方迅速測図に現在の諸路線を合成した。

1880～1884年（明治13～17年測量，参謀本部陸軍部測量局『金古駅』1:20,000）

1986～1988年（昭和61～63年現地調査，国土地理院『下室田』『前橋』1:25,000）



5区27号住居出土遺物

カマド周辺・床面・貯蔵穴出土の一括土器。最も遺存状態が良好であった。火災住居か。
『資料編2』576頁参照。

序

昭和56年度に全国で調査された遺跡の中で、最大的话题を提供した遺跡に、群馬はもとより日本で初めての古墳時代の豪族居館跡としての三ッ寺I遺跡があります。全国から多勢の見学者がこの三ッ寺I遺跡に見えました。本報告による三ッ寺II遺跡は、この三ッ寺I遺跡の北に接してあります。三ッ寺II遺跡は、三ッ寺I遺跡と並行して発掘調査されていましたが、三ッ寺I遺跡ほど注目をあびていませんでした。しかし、三ッ寺I遺跡の隣接地にふさわしく、古墳時代の住居跡277軒、奈良・平安時代の住居跡93軒の大集落跡が調査されました。また、三ッ寺I遺跡に隣接する地点から木簡や140点にのぼる墨書・刻書土器が出土しています。

これらの遺構・遺物は、昭和62年度後半より報告書刊行のための整理作業を行いましたが、3年余りの歳月をへてようやく「写真図版編」「資料編1」「資料編2」「本文編」の4分冊よりなる調査報告書を上梓することができました。

本報告書を上梓するに際し、日本鉄道建設公団を始めとする調査関係者の皆様に、改めて深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告書が一般県民・研究者に広く活用されることを願い序とします。

平成3年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

- 1 本書は上越新幹線建設工事に伴う事前調査として、昭和56年度・昭和58年度に実施した、群馬県群馬郡群馬町大字三ッ寺所在の三ッ寺II（みつでら に）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 三ッ寺II遺跡は事前の分布調査で34地区と呼んだ地点であり、所在地は次の通りである。
 - 1区：大字三ッ寺字桁街道537・536番
 - 2区：大字三ッ寺字桁街道536・533・532・528・527・529・526番
 - 3区：大字三ッ寺字桁街道527・525番，字八幡街道456・461・469・470・459・460番
 - 4区：大字三ッ寺字八幡街道470・471・479・480・483-1・483-2・481-1・481-2・482-2・482-1番
 - 5区：大字三ッ寺字八幡街道482-2・483-2・491・492番，字西原道西404・403・400・83番
 - 6区：大字三ッ寺字西原道西400・399・398番なお、昭和50年作成の『群馬町文化財地図』所載の「桁街道遺跡」は、上越新幹線路線の西側（キロ程83km580m付近）に相当する。
- 3 本分冊は全4分冊（『本文編』『資料編1』『資料編2』『写真図版編』）で構成する、三ッ寺II遺跡の発掘調査報告書のうち、『本文編』である。『本文編』は遺跡全体にかかわる内容と、調査の成果に関する内容を掲載している。個別の遺構・遺物は『資料編1』『資料編2』に、記録写真は『写真図版編』に掲載した。
- 4 調査は群馬県教育委員会を通じ、日本鉄道建設公団の委託を受けて、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った。

第一次調査：西側道敷き・本線敷き ；昭和55年度；昭和55年5月～昭和55年12月
第二次調査：東側道敷き・2区西側道敷き；昭和58年度；昭和58年9月～昭和59年3月
- 5 整理事業は群馬県教育委員会を通じ、東日本旅客鉄道株式会社の委託を受けて、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った。整理期間は昭和62年度（3カ月）・昭和63年度（12カ月）・平成元年度（12カ月）・平成2年度（12カ月）の4年度（計39カ月）にわたる。
- 6 遺構写真については各調査担当者が、遺物写真については当事業団技師佐藤 元彦が担当した。金属製品・木製品のサビ落とし・保存処理は、当事業団技師関 邦一・嘱託員北爪 健二が担当した。
- 7 本遺跡出土資料の科学的分析・鑑定、これに伴う原稿執筆は、下記の方々をお願いした。多大なる指導・助言をいただき、記して感謝の意を表する次第である（敬称略）。

人骨鑑定：聖マリアンナ医科大学第二解剖学教室 森本岩太郎
石材鑑定：群馬地質研究会 飯島 静男
地震跡：通商産業省工業技術院地質調査所近畿・中部地域地質センター 寒川 旭
テフラ・ローム層鑑定：群馬大学 新井 房夫（調査中）
獣骨鑑定：前群馬県家畜登録協会常任理事 大江 正直
- 8 本遺跡の第一次調査は、上越新幹線の大宮起点開業を一年後にひかえた、本線敷き調査の最終段階であり、第二次調査は、本県における上越新幹線関係遺跡発掘調査事業の最終段階であった。この間、地元井出・三ッ寺地区の地権者、多数の発掘作業員ならびに教育委員会の関係者には多大なる御協力をいただいた。記してあつく感謝の意を表する次第である。
- 9 本書の執筆・編集は森田 秀策（高崎市立並榎中学校，1章1節）・女屋和志雄（5章）・関根 慎二（縄文土器の観察）・高島 英之（5章3節）・外山 政子（6章1節）・関 晴彦が担当した。
- 10 本遺跡の出土遺物・記録等は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本書の構成と内容は次の通りである。
 - 「本文編」：調査と整理の経過、立地・周辺遺跡と基本土層、調査概要、時代別遺構全体図、木簡出土地点（説明と考察）、考察とまとめ、番号順遺物索引・番号順住居索引（この分冊）
 - 「資料編1」：1・2・3区の遺構と遺物（遺構番号順の掲載、個別遺構写真は遺物出土状態優先）、遺構説明→出土遺物図→遺物計測値表の順に掲載
 - 「資料編2」：4・5・6区の遺構と遺物（遺構番号順の掲載、個別遺構写真は遺物出土状態優先）、遺構説明→出土遺物図→遺物計測値表の順に掲載
 - 「写真図版編」：遺構写真→遺物写真、各区とも全景→ブロック→個別遺構（遺構番号順）、個別遺構写真は完掘状態優先で掲載
- 2 遺構番号は調査中および整理の過程で欠番としたものがあるが、番号の付け直しはしていない。
- 3 遺構及び遺構図の方位は磁北を基準としている。グリッド設定の基準とした新幹線中軸線（直線）と磁北とのなす角度は、N1度21分40秒Eである。
- 4 遺物に付けた整理番号は、出土遺構と無関係に4桁の通番を付けた。番号は0001から始まり、1691で終了しているが、これらは報告書掲載の対象とした登録番号の意味であり、整理番号のない遺物は他に多数存在する。掲載したものを含めると、土器の破片数は約10万点である（略完形品や接合破片は1点と数える）。また、遺構所属の遺物整理番号は、原則として連続した番号ではない。したがって、遺物の整理番号による出土遺構の判別は不可能である。番号順遺物索引を本文編巻末に掲載した。
 - ただし、本書掲載の遺物整理番号は、下記のようにすべて同じ遺物を指している。
 - 遺構計測値表中の遺物番号＝遺物出土状態写真中の遺物番号（同定できたもののみ）＝遺物図中の遺物番号（出土遺構番号順に掲載）＝遺物計測値表中の遺物番号（出土遺構番号順に掲載）＝写真図版編の遺物番号
- 5 文中または一覧表中で、浅間山および榛名山（二ツ岳）を給源とする火山灰・軽石（テフラ）を略号で表現したものがあ。それぞれの降下年代は次の年代観をとっているが、執筆者により多少異なる場合もある。本文編では統一を図らなかった。
 - 浅間A軽石：天明3年（1783年）
 - 浅間B軽石：天仁元年（1108年）
 - FP ：6世紀中頃（榛名山二ツ岳）
 - FA ：6世紀初頭（榛名山二ツ岳）
 - 浅間C軽石：4世紀中頃

目 次

本文編

第1章 経 過

- 第1節 調査に至る経過 …………… (森田 秀策) …… 3
- 第2節 調査の方法と経過 …………… 12
- 第3節 整理の経過 …………… 19

第2章 立 地 …………… (21)

第3章 概 要

- 第1節 土 層 …………… 33
- 第2節 各区の概要 …………… 35
- 第3節 時代別概要 …………… 39

第4章 全 体 図

- 各区重複関係図 …………… 43
- 各区時代別遺構全体図 …………… 55

第5章 木簡出土地点－調査と成果1－ (女屋和志雄)

- 第1節 1区1号井戸 ……………137
- 第2節 木製品について ……………148
- 第3節 木 簡 …………… (高島 英之) ……154
- 第4節 墨書土器について ……………157
- 第5節 ま と め ……………169

第6章 考察とまとめ－調査と成果2－

- 第1節 三ッ寺II遺跡のカマドと煮炊 …………… (外山 政子) ……173
- 第2節 三ッ寺II遺跡の地震跡 ……………205
- 第3節 ま と め ……………239
- 第4節 三ッ寺II遺跡出土人骨について …………… (森本岩太郎) ……243
- 第5節 三ッ寺II遺跡出土の獣歯・獣骨について …………… (大江 正直) ……251

- 索 引
- 1 番号順遺物索引……………271
- 2 番号順住居索引……………284

《資料編 1》

1 区	3
2 区	57
3 区	121
出土遺物図	221
遺物計測値表	283

《資料編 2》

4 区	344
5 区	543
6 区	673
出土遺物図	681
遺物計測値表	745

《写真図版編》

遺構	1 区	図版 1
	2 区	図版 35
	3 区	図版 97
	4 区	図版179
	5 区	図版315
	6 区	図版410
遺物	1 区	図版418
	2 区	図版434
	3 区	図版449
	4 区	図版479
	5 区	図版512
	5 区遺構外	図版532

挿図目次

1章

1-1図	上越新幹線ルートと遺跡の位置	(2)
1-2図	三ツ寺II遺跡調査区	15

2章

2-1図	上越新幹線関係高崎北部～群馬町の遺跡	(22)
2-2図	三ツ寺II遺跡周辺の地質	23
2-3図	三ツ寺II遺跡付近の航空写真(1971)と微地形	24
2-4図	榛名トンネルのボーリング調査 (鉄道建設公団)	折込24-25
2-5図	調査前の新幹線路線沿ひ断面	折込24-25
2-6図	調査後の新幹線路線沿ひ断面と キロ程表示	折込24-25
2-7図	近傍の遺跡	25
2-8図	遺跡周辺の耕地図	27
2-9図	三ツ寺村字限絵図	28
2-10図	耕地整理前の字境	29
2-11図	三津寺村壬申地引絵図	30

3章

3-1図	各区の代表的土層と採集位置	(32)
3-2図	基本土層	33

4章

4-1図	遺構全体図索引	(42)
4-2図	遺構重複関係図1・1区	43
4-3図	遺構重複関係図2・2区	44
4-4図	遺構重複関係図3・3区1	45
4-5図	遺構重複関係図4・3区2	46
4-6図	遺構重複関係図5・3区3	47
4-7図	遺構重複関係図6・4区1	48
4-8図	遺構重複関係図7・4区2	49
4-9図	遺構重複関係図8・4区3	50
4-10図	遺構重複関係図9・4区4	51
4-11図	遺構重複関係図10・5区1	52
4-12図	遺構重複関係図11・5区2	53
4-13図	遺構重複関係図12・6区	54
4-14図	全体図の表現	54

全体図1	縄文・弥生時代1・454~483m	55
全体図2	縄文・弥生時代2・478~506m	56
全体図3	縄文・弥生時代3・500~528m	57
全体図4	縄文・弥生時代4・524~552m	58
全体図5	縄文・弥生時代5・549~577m	59
全体図6	縄文・弥生時代6・575~602m	60
全体図7	縄文・弥生時代7・600~627m	61
全体図8	縄文・弥生時代8・624~652m	62
全体図9	縄文・弥生時代9・648~677m	63
全体図10	縄文・弥生時代10・674~703m	64
全体図11	縄文・弥生時代11・698~727m	65
全体図12	縄文・弥生時代12・721~749m	66
全体図13	縄文・弥生時代13・746~774m	67
全体図14	縄文・弥生時代14・771~799m	68
全体図15	縄文・弥生時代15・798~827m	69
全体図16	縄文・弥生時代16・824~852m	70
全体図17	縄文・弥生時代17・849~877m	71
全体図18	縄文・弥生時代18・875~903m	72
全体図19	縄文・弥生時代19・901~929m	73
全体図20	縄文・弥生時代20・912~940m	74

全体図21	古墳時代1・454~483m	75
全体図22	古墳時代2・478~506m	76
全体図23	古墳時代3・500~528m	77
全体図24	古墳時代4・524~552m	78
全体図25	古墳時代5・549~577m	79
全体図26	古墳時代6・575~602m	80
全体図27	古墳時代7・600~627m	81
全体図28	古墳時代8・624~652m	82
全体図29	古墳時代9・648~677m	83
全体図30	古墳時代10・674~703m	84
全体図31	古墳時代11・698~727m	85
全体図32	古墳時代12・721~749m	86
全体図33	古墳時代13・746~774m	87
全体図34	古墳時代14・771~799m	88
全体図35	古墳時代15・798~827m	89
全体図36	古墳時代16・824~852m	90
全体図37	古墳時代17・849~877m	91

全体図38	古墳時代18・875~903m	92
全体図39	古墳時代19・901~929m	93
全体図40	古墳時代20・912~940m	94
全体図41	奈良・平安時代1・454~483m	95
全体図42	奈良・平安時代2・478~506m	96
全体図43	奈良・平安時代3・500~528m	97
全体図44	奈良・平安時代4・524~552m	98
全体図45	奈良・平安時代5・549~577m	99
全体図46	奈良・平安時代6・575~602m	100
全体図47	奈良・平安時代7・600~627m	101
全体図48	奈良・平安時代8・624~652m	102
全体図49	奈良・平安時代9・648~677m	103
全体図50	奈良・平安時代10・674~703m	104
全体図51	奈良・平安時代11・698~727m	105
全体図52	奈良・平安時代12・721~749m	106
全体図53	奈良・平安時代13・746~774m	107
全体図54	奈良・平安時代14・771~799m	108
全体図55	奈良・平安時代15・798~827m	109
全体図56	奈良・平安時代16・824~852m	110
全体図57	奈良・平安時代17・849~877m	111
全体図58	奈良・平安時代18・875~903m	112
全体図59	奈良・平安時代19・901~929m	113
全体図60	奈良・平安時代20・912~940m	114
全体図61	中世以降・不明1・454~483m	115
全体図62	中世以降・不明2・478~506m	116
全体図63	中世以降・不明3・500~528m	117
全体図64	中世以降・不明4・524~552m	118
全体図65	中世以降・不明5・549~577m	119
全体図66	中世以降・不明6・575~602m	120
全体図67	中世以降・不明7・600~627m	121
全体図68	中世以降・不明8・624~652m	122
全体図69	中世以降・不明9・648~677m	123
全体図70	中世以降・不明10・674~703m	124
全体図71	中世以降・不明11・698~727m	125
全体図72	中世以降・不明12・721~749m	126
全体図73	中世以降・不明13・746~774m	127
全体図74	中世以降・不明14・771~799m	128
全体図75	中世以降・不明15・798~827m	129
全体図76	中世以降・不明16・824~852m	130
全体図77	中世以降・不明17・849~877m	131
全体図78	中世以降・不明18・875~903m	132
全体図79	中世以降・不明19・901~929m	133
全体図80	中世以降・不明20・912~940m	134

5章

5-1図	木簡(1:2)	(136)
5-2図	竈串(1:2)	(136)
5-3図	第1期~第IV期変遷図	140
5-4図	第1期~第IV期遺物集成図	141
5-5図	三ツ寺II遺跡1区1号井戸	143
5-6図	1区1号井戸出土土器集成(1)	144
5-7図	1区1号井戸出土土器集成(2)	145
5-8図	1区1号井戸出土土器集成(3)	146
5-9図	1区1号井戸完掘状況(南から)	147
5-10図	1区1号井戸石敷部全景(南から)	147
5-11図	1区1号井戸出土土製品(1)	149
5-12図	1区1号井戸出土土製品(2)	150
5-13図	1区1号井戸出土土製品(3)	151
5-14図	県内出土竈串	151
5-15図	1区1号井戸出土土簡	156
5-16図	1区1号井戸出土墨書土器集成(1)	160
5-17図	1区1号井戸出土墨書土器集成(2)	161
5-18図	1区1号井戸出土墨書土器集成(3)	162
5-19図	1区1号井戸出土墨書土器集成(4)	163
5-19図	刻書 奉・葎田・上の字の分類	164

6章

1節-1図	カマド模式図・各部の名称と計測位置	173
1節-2図	炉で使われた土器のサスのつき方 (熊野堂遺跡第II地区出土)	174
1節-3図	カマドで使われた土器のサスのつき方	175
1節-4図	古墳時代のカマド(1) 1区14号住居	177
1節-5図	古墳時代のカマド(2) 1区14号住居	178
1節-6図	古墳時代のカマド(3) 5区36号住居	180
1節-7図	古墳時代のカマド(4) カマドの構造・袖材と焚口天井材	182

1節-8図	古墳時代のカマド(5) カマドの構造・カメの焚口天井……………184
1節-9図	古墳時代のカマド(6) 石の支脚と高さの調整……………186
1節-10図	古墳時代のカマド(7) 高杯と杯の支脚……………188
1節-11図	古墳時代のカマド(8) 小型甕の支脚……………190
1節-12図	古墳時代のカマド(9) 袖の長いカマドと短いカマド……………192
1節-13図	奈良時代のカマドとカメ……………194
1節-14図	平安時代のカマド(1) 土師器のカメを使っているカマド……………196
1節-15図	平安時代のカマド(2) 羽釜・土釜を使っているカマド……………197
1節-16図	置き去りにされた土器(1)……………201
1節-17図	置き去りにされた土器(2)……………202
2節-1図	検出した地震跡の分布……………206
2節-2図	3区24・25・26・29号住居……………208
2節-3図	3区51・57号住居……………209
2節-4図	3区52・55・56号住居……………210
2節-5図	3区53・54, 4区74号住居(1)……………212
2節-6図	3区53・54, 4区74号住居(2)……………213
2節-7図	4区77・60号住居……………214
2節-8図	4区70・71・73号住居……………216
2節-9図	4区10・68・70・71・73号住居……………217
2節-10図	4区70・73号住居……………218
2節-11図	4区154・155号住居……………220
2節-12図	遺構と地震跡の前後関係……………222
2節-13図	関東地方の近代地震……………222
2節-14図	西埼玉地震における井水混濁区域・ 土砂噴出区(下)……………223
2節-15図	古代地震の震度V以上の推定範囲……………226
2節-16図	二ツ岳を中心とした半径14kmの範囲……………228
2節-17図	北関東の活断層の分布と r_s ・ r_e の 推定範囲……………230
2節-18図	地震跡検出遺跡の分布と震度V・VI ($M=7.5$) の推定範囲……………233
2節-19図	西埼玉地震で地鳴りの聞こえた範囲……………234
2節-20図	三ッ寺I遺跡の地震跡(東側道)……………235
3節-1図	片岩系?の小石を含む甕 (5区48号住居1248)……………239
3節-2図	三ッ寺II遺跡時期別住居分布……………折込240-241
4節-写真1	3区2号土壙出土女性人骨の 頭蓋前面観……………244
4節-写真2	3区2号土壙出土女性人骨の 頭蓋左側面観……………245
4節-写真3	中切歯切縁に見られる 異常摩耗の比較……………246
4節-写真4	3区2号土壙出土女性人骨の 主要上・下肢骨片……………247
4節-写真5	3区3号土壙出土女性人骨の 頭蓋前面観……………248
4節-写真6	3区3号土壙出土女性人骨の 主要上・下肢骨片……………249
5節-1図	獣骨出土状況……………254
5節-2図	馬上下顎骨における出土馬歯の 部位模式図……………255
5節-3図	牛上下顎骨における出土牛歯の 部位模式図……………255
5節-4図	遺存体実測図①……………256
5節-5図	遺存体実測図②……………257
5節-6図	遺存体実測図③……………258
5節-写真1	出土獣歯・獣骨①……………259
5節-写真2	出土獣歯・獣骨②……………260
5節-7図	平安時代における遺跡別出土馬歯・馬骨 を有する馬の年令分布……………268
表1-4	整理経過……………20
3章	
表3-1	土壌分析……………34
表3-2	三ッ寺II遺跡検出遺構……………35
5章	
表5-1	三ッ寺II遺跡1区1号井戸出土 木製品観察表……………152
表5-2	三ッ寺II遺跡1区1号井戸墨書・刻書 土器施書部位一覧表……………159
表5-3	三ッ寺II遺跡1区1号井戸墨書・刻書 土器一覧表……………165
6章	
表2節-1	古代の地震一覧(5~11世紀)……………225
表2節-2	活火山とその近傍に起きた 最大規模の地震……………228
表2節-3	北関東の活断層一覧……………230
表2節-4	群馬県内の地震跡調査例一覧……………232
表3節-1	三ッ寺II遺跡時期別住居数……………240
表5節-1	地区別遺存体出土点数……………253
表5節-2	時代別遺存体出土点数……………253
表5節-3	地区別遺存体出土個体数……………253
表5節-4	時代別遺存体出土個体数……………253
表5節-5	遺存体の出土状態……………261
表5節-6	遺存体の形態的特徴(歯)……………261
表5節-7	遺存体の形態的特徴(骨)……………262
表5節-8	出土遺存体計測値(歯)……………264
表5節-9	出土遺存体計測値(骨)……………265
表5節-10	出土遺存体を有する獣類の年令 及び大きさ……………265
表5節-11	時代別馬の年令及び大きさ……………266
表5節-12	時代別牛の年令及び大きさ……………266

表目次

1章

表1-1	上越新幹線関係遺跡発掘調査の経過……………4
表1-2	包蔵地番号と遺跡の名称……………11
表1-3	調査経過……………17

第1章 経 過



三ツ寺II遺跡から南を望む 手前は三ツ寺II遺跡1区B軽石下水田、奥のクレーンのあるところは三ツ寺I遺跡で安全対策工事中。

調査・整理の経過

一次調査＝昭和56年度，1981年5月13日～1981年12月18日，本線敷・西側道

二次調査＝昭和58年度，1983年9月1日～1984年3月31日，東側道・2区両側道

調査面積＝計10,140平方メートル

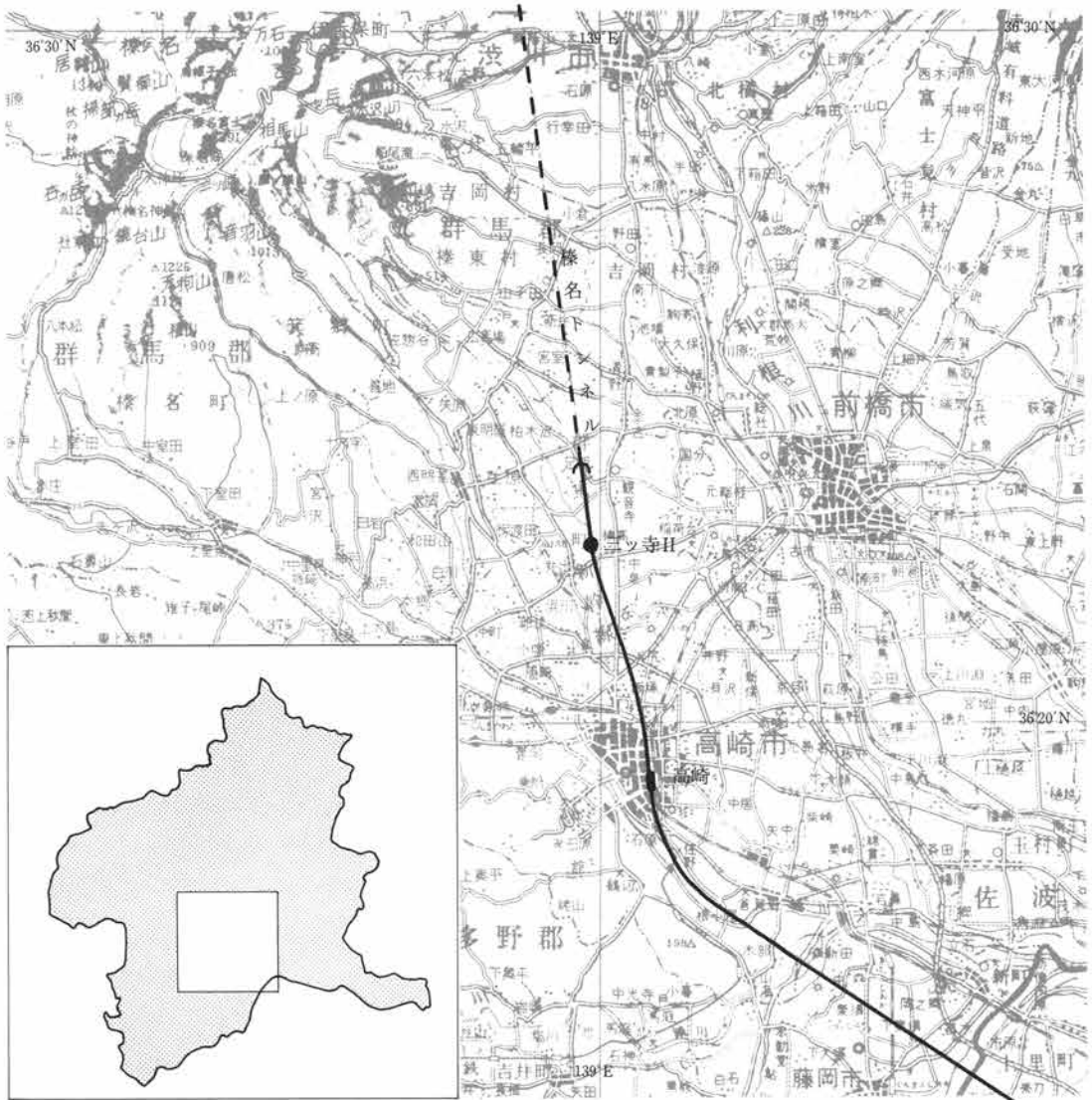
整理第一年度＝昭和62年度，1988年1月4日～1988年3月31日，準備

整理第二年度＝昭和63年度，1988年4月1日～1989年3月31日，遺物整理・『写真図版編』準備

整理第三年度＝平成元年度，1989年4月1日～1990年3月31日，遺構整理・『資料編1・2』準備

整理第四年度＝平成2年度，1990年4月1日～1991年3月31日，校正・『本文編』準備，刊行

全4分冊



1-1 図 上越新幹線ルートと遺跡の位置

第1節 調査に至る経過

森田 秀策

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 上越新幹線の建設と埋蔵文化財の保護 | 2 上越新幹線地域の発掘調査のすべて |
| 3 ミツ寺II遺跡の発掘調査に至るまで | 4 大規模発掘調査の舞台裏 |

1 上越新幹線の建設と埋蔵文化財の保護

100年にわたる鉄道の発達によりわが国の交通は人や物の輸送だけでなく、社会的にも文化的にも近代化の指標としての役割を果たしてきた。昭和39年10月1日に開通した東海道新幹線は、長距離都市間の所要時間を短縮する機関として一躍脚光を浴び、複数の新幹線建設への足がかりとなった。昭和45年5月18日には、全国新幹線鉄道整備法が公布された。この法律には「新幹線鉄道の路線は、全国的な幹線鉄道網を形成するに足るものであるとともに、全国の中核都市を有機的かつ効率的に連絡するものであって、この法律の目的を達成しうるもの」と規定されていた。翌昭和46年1月、東京と新潟を結ぶ上越新幹線の基本計画、そして同年4月には整備計画が矢継ぎ早に発表された。そしてさらに同年10月には日本鉄道建設公団（以下鉄建公団と略記）は、二十万分の一地図という大縮尺の地図で路線を発表、群馬県下では、埼玉県境の藤岡市から上越国境の利根郡水上町まで、三市三町四村を通過し、県内通過約71kmのうち約45.7%はトンネルであること、駅は高崎と、上毛高原（仮称）の二駅というものであった。このような国の動きに対して、県では既に昭和44年11月に、新潟・埼玉両県と東京都と共に上越新幹線建設促進同盟会（昭和47年には上越新幹線建設推進協議会と名称を変更）を結成して建設の早期実現を運輸省などに陳情してきたほか、昭和46年1月の基本計画決定以降、駅の誘致運動が活発化、水上・沼田・渋川・高崎・藤岡駅の設置運動などがあった。そして、路線発表後は、県庁全体としての連絡調整に当たる機構改革が行なわれ、先ず昭和46年4月には企画課内に幹線交通対策室が新設され、先行していた上武国道と関越自動車道の対策係に加えて、新幹線対策係が加わり、さらに47年11月には幹線交通課（その後、53年4月には交通対策課）が設置された。

一方、文化財保護についての対応をみると、戦後は一貫して昭和25年制定の「文化財保護法」の通り、対策が講じられてきていたが、昭和30年代半ば頃から大規模な開発行為が目立ち、それと共に、埋蔵文化財の無秩序な破壊行為が顕著するようになった。そこで文化財保護委員会（昭和43年からは文化庁）は、建設省や日本道路公団などと党書を結んで、埋蔵文化財の保護に当たっていた。そして新幹線の建設に当たる鉄建公団との間でも昭和41年4月の段階で、「日本鉄道建設公団の事業施行に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する党書」を締結していたことにより、本県でもこの党書に基き対応していくことになったものである。

従来、文化財の保護行政に当たってきたのは、群馬県教育委員会の社会教育課の文化財係であった。しかし昭和40年代に入って急激に増加した埋蔵文化財の保護対策や、本県を通過する大規模な建設プロジェクトの上武国道と関越自動車道（新潟線）に加えて上越新幹線地域への対策については当抵小規模な人員では対応できないことが分かってきた。そこで県教委では先進県での事例も参考に、

昭和47年度から文化財保護室（室長以下10名）を発足させ諸準備に当ることになった。すなわち、この年5月には鉄建公団から県へ委託してきた関連公共事業調査の一つであった埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、93カ所にもものぼる個所をリストアップした。この個所は調査範囲が広範であったこともあり、鉄建公団側と協議したところ22カ所にしぼられることになった。そしてこの数は、昭和48年度以後の発掘調査の実施段階になって、若干の増加があったが、榛名トンネル以南の群馬町内では南から井出（東下井出，村東），三ッ寺Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，保渡田，中里が包蔵地であった。

昭和47年度における1カ年の諸準備を経て、翌48年度からは、上武道・関越道・上越新幹線のいわゆる三幹線地域の埋蔵文化財発掘調査が実施されることになり、県教委では文化財保護課（定員30名）として独立、本格的な機構整備をして、上越新幹線地域については埋蔵文化財第三係が担当した。この組織は昭和53年に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団と、55年に県埋蔵文化財調査センターの発足に伴い、調査部門と行政部門の機能分担が分かれるまで続いた。

2 上越新幹線地域の発掘調査のすべて

昭和48年4月1日付けで、群馬県教育委員会（教育長山川武正）は、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局（局長原島龍一）との間で、「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」（全体の協定書）と、同日付けで調査し年度の「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査

表1-1 上越新幹線関係遺跡 発掘調査の経過

年次	年 度	調 査 期 間	場 所	遺 跡 名 (区 分)
1	昭和48	S 48年 5月～7月 8月～10月 11月～12月 10月～49年 4月	利根郡月夜野町上津 利根郡月夜野町上津 利根郡月夜野町上津 高崎市下小島町	十二原遺跡 大原遺跡（一次調査） 大原遺跡（二次調査） 下小島遺跡（一次調査）
2	昭和49	S 49年 4月～50年 3月 9月～10月 9月～50年 3月 11月～50年 3月 S 50年 3月	高崎市大八木町 利根郡月夜野町上津 高崎市大八木町 高崎市上佐野町 高崎市上佐野町	融通寺遺跡（一次調査） 大原遺跡（三次調査） 熊野堂Ⅱ遺跡（一次調査） 舟橋遺跡（一次調査） 寺前遺跡（一次調査）
3	昭和50	S 50年 4月～7月 4月～7月 10月～51年 3月 10月～11月 10月～12月	高崎市上佐野町 高崎市上佐野町 高崎市木部町田端 利根郡月夜野町水沼 利根郡月夜野町洞	舟橋遺跡（二次調査） 寺前遺跡（一次調査継続） 田端（寺東地区）遺跡 前中原遺跡（一次調査） 洞遺跡（予備調査）
4	昭和51	S 51年 4月～5月 4月～52年 3月 4月～10月 7月～10月 10月～12月 6月～11月	利根郡月夜野町水沼 高崎市下佐野町 利根郡月夜野町 利根郡月夜野町 利根郡月夜野町深沢 利根郡月夜野町	前中原遺跡（二次調査） 下佐野Ⅰ-A区遺跡（一次調査） 洞Ⅰ遺跡（一次調査） 洞Ⅱ遺跡（一次調査） 深沢遺跡（一次調査） 藪田遺跡（予備調査）

年次	年度	調査期間	場所	遺跡名 (区分)
4	昭和51	10月～52年3月 S52年3月	藤岡市森 高崎市下佐野町	森遺跡 (予備調査・本調査) 下佐野II (川窪, 川籠石) (一次調査)
5	昭和52	S52年4月～6月 4月～8月 4月～53年1月 4月～12月 9月～10月 10月～53年3月 S53年1月～3月 1月～3月 1月～3月 1月～4月 2月～3月	高崎市下佐野町 藤岡市中 高崎市下佐野町 利根郡月夜野町 利根郡月夜野町 高崎市下佐野町 群馬郡群馬町中里 高崎市大八木町 群馬郡群馬町保渡田 高崎市下佐野町 高崎市内上佐野町	下佐野II (川窪, 川籠石) (二次調査) 中I, II遺跡 下佐野I - B区遺跡 藪田遺跡 (一次調査) 洞III遺跡 (一次調査) 下佐野II遺跡 (三次調査) 中里天神塚古墳 熊野堂II遺跡 (二次調査) 保渡田遺跡 (一次調査) 下佐野I - D区遺跡 (一次調査) 舟橋遺跡 (三次調査)
6	昭和53	S53年4月～8月 4月～54年3月 4月～5月 4月～5月 5月～7月 4月～9月 7月～12月 9月～54年3月 9月～10月 10月～12月 S54年1月～7月 1月～3月	群馬郡群馬町保渡田 高崎市大八木町 高崎市内上佐野町 利根郡月夜野町 高崎市阿久津町 利根郡月夜野町 利根郡月夜野町 群馬郡群馬町三ッ寺 利根郡月夜野町 利根郡月夜野町 高崎市下佐野町 群馬郡群馬町井出・福島	保渡田遺跡 (二次調査) 熊野堂II遺跡 (三次調査) 舟橋遺跡 (四次調査) 前田原遺跡 (予備調査・本調査) 田端遺跡 (一次調査) 藪田遺跡 (二次調査) 洞III遺跡 (二次調査) 三ッ寺III遺跡 (一次調査) 洞I遺跡 (二次調査) 洞II遺跡 (二次調査) 下佐野I - C区遺跡 熊野堂I遺跡 (予備調査)
7	昭和54	S54年4月～9月 4月～11月 4月～11月 8月～55年3月 8月～55年3月 11月～55年3月 12月～55年3月 S55年1月～3月	高崎市大八木町 利根郡月夜野町 群馬郡群馬町三ッ寺 高崎市下佐野町 高崎市内上佐野町 高崎市木部・阿久津町 高崎市下佐野町 群馬郡群馬町三ッ寺	熊野堂II遺跡 (四次調査) 深沢遺跡 (二次調査) 三ッ寺III (二次調査) 下佐野I - D区遺跡 寺前遺跡 (二次調査) 田端 (寺東・田端) 遺跡 (二次調査) 下佐野II遺跡 (四次調査) 三ッ寺I遺跡 (予備調査)
8	昭和55	S55年4月～56年4月 4月～9月 S55年4月～56年3月 5月～12月 5月～6月 9月～11月 10月～11月 S56年1月～8月	高崎市下佐野町 高崎市木部町 高崎市阿久津町 高崎市下佐野町 高崎市下佐野町 群馬郡群馬町井出 群馬郡群馬町三ッ寺 群馬郡群馬町井出・福島	下佐野II遺跡 (五次調査) (き電区分所区域を含む) 田端 (寺東) 遺跡 (三次調査) 田端遺跡 (三次調査) 下佐野I - A区遺跡 (二次調査) 下佐野I - D区遺跡 (三次調査) ※井出村東遺跡 (一次調査) 三ッ寺I遺跡 (緊急調査) 熊野堂I遺跡 (一次調査)
9	昭和56	S56年4月～8月 4月～56年5月 5月～12月 5月～9月 12月～57年2月 12月～57年1月 S57年1月～3月 3月～4月	群馬郡群馬町井出 高崎市阿久津町 群馬郡群馬町三ッ寺 群馬郡群馬町三ッ寺 高崎市下佐野町 群馬郡群馬町三ッ寺 高崎市大八木町 高崎市下佐野町	※井出村東遺跡 (二次調査) 田端遺跡 (四次調査) 三ッ寺II遺跡 (一次調査) 三ッ寺I遺跡 (一次調査) 下佐野II遺跡 (六次調査) 三ッ寺I 関連河川県道区域調査 熊野堂II遺跡 (五次調査) 下佐野町I - A区遺跡 (三次調査)

年次	年 度	調 査 期 間	場 所	遺 跡 名 (区 分)
10	昭和57	S57年 4月 4月～9月 5月～11月 5月～11月 9月～10月 12月～58年3月 S58年 1月～3月 2月～3月	高崎市下佐野町 高崎市大八木町 高崎市木部町 高崎市阿久津町 群馬郡群馬町井出・福島 高崎市上佐野町 高崎市大八木町 群馬郡群馬町三ッ寺	下佐野I遺跡(四次調査) 熊野堂II遺跡(六次調査) 田端(寺東地区)(四次調査) 田端遺跡(五次調査) 熊野堂I遺跡(二次調査) 舟橋遺跡(五次調査) 融通寺遺跡(二次調査) 三ッ寺I遺跡(二次調査)
11	昭和58	S58年 4月～10月 4月～8月 9月～59年1月 9月～59年3月	群馬郡群馬町三ッ寺 高崎市大八木町 高崎市下小鳥町 群馬郡群馬町三ッ寺	三ッ寺I遺跡(二次調査継続) 融通寺遺跡(三次調査) 下小鳥遺跡(二次調査) 三ッ寺II遺跡(二次調査)

注1 昭和48年度～昭和54年度は群馬県教育委員会文化財保護課が調査、昭和55年度以降は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査を担当した。

注2 ※印は群馬町井出村東遺跡調査会の調査

委託契約書」(年度ごとの契約書)を締結し、正式に発掘調査が開始された。

上越新幹線建設地域における埋蔵文化財調査は次表のような経過をたどった。

当初の計画では4～5年で終了の予定であったが、①要発掘調査面積の拡大、②文化層が二重、三重と複合する遺跡が多かったこと、③用地買収とのからみで遅延した個所が多かったこと、④工事関係から調査個所を変更又は移動を強いられた場所があったこと、⑤県北地方(月夜野町)では冬季期間の発掘調査は厳寒又は降雪のために不可能であったこと、⑥当初は側道が予定になく、地権者会との交渉の結果工事区域に含まれて、調査区域が拡大されたこと、⑦側道部分を一括調査をした方が効率的であったが、建設工程との関係で、数次にわたる調査方法がとられたことなどにより、結果的には11年次にわたる長期間となったものである。

3 三ッ寺II遺跡の発掘調査に至るまで

前述のとおり上越新幹線の建設にかかわる埋蔵文化財の包蔵地は当初22カ所、その後増加して25カ所にのぼることとなった。調査に着手するためには用地が買収済みである場合が原則であるが、当初建設には絶対反対を唱えていた地域が多かったこともあり、予定していたとおりには容易には調査入りが不可能であった。

最も早くから条件が整ったのは利根郡月夜野町上津の十二原地区(中山トンネル出口付近)で、ここで本県最初の調査に入ったのは昭和48年5月のことであった。この年度後半に入り高崎市下小鳥町内では借地により調査が始まったが、この時点では側道を付ける協議以前のため12m幅の本線敷のみの調査であった。二年度以降は高崎市内の上佐野町や木部・阿久津町内、そして月夜野町内の洞や薮田地区、藤岡市内も調査が可能となるなど順次調査個所が広がってきた。

このようにして群馬町内を除いては調査に入ることができるようになったが、なぜ群馬町だけが他の市町村より遅れたかについては理由があった。昭和46年11月4日、群馬町における地元説明会で示

された5万分の1地図及び2,500分の1地図が、10月14日の県下ルート発表(20万分の1地図)に比べて三ッ寺から井出寄り(西寄り)に変更されたとして特に井出地区住民が反発して反対行動を起こし、三ッ寺地区でも抗議集会を行うなど両地区の住民感情が険悪となった。鉄建公団側は群馬町当局や地元代表者に対し、ルート選定の経過を説明し、2500分の1地図のルートが最終案であることの理解を求めた。その後、昭和47年6月から昭和49年2月にかけて群馬町町長や各地区区長等により結成された群馬町新幹線対策協議会や地権者会からトンネル化、防音ドーム等の設計変更を含む陳情がなされるなど交渉が続いた。昭和49年10月8日、地権者会において井出地区を除く他の地区は測量杭打ちについて原則的に同意、町長も同月28日町議会において受入れを協議したが井出地区の対策委員が依然として反対の意志表明をしたため態度を保留した。同年12月16日、公団側は測量調査の実施について町長に申入れたため、翌17日対策協議会と地権者会で審議し、公団側が地元要望に対して誠意をつくした確認書を交換した結果、井出地区を除く全地区の測量が了承され、昭和50年2月14日から中心測量が開始された。

昭和52年に入り年度当初の県教委と鉄建公団との定例協議においてこの年の9月には群馬町三ッ寺地区で工事発注予定であることが示されたが、直ちに文化財調査に入る情勢には至らなかった。というのはこの年度は、まだ高崎市、藤岡市、利根郡月夜野町内における調査が全国的に展開されており、新たな地区における調査に着手できる余猶がなかったのである。

昭和52年度後半に入り、榛名トンネル南入口付近の群馬町中里、保渡田、三ッ寺III遺跡周辺の用地買収が進み、12月に入ると年内に試験杭を打ちたいとの計画がもたらされ、急ピッチで文化財調査の諸準備を進めることとなった。こうして翌53年1月から群馬町内で最初の調査が保渡田遺跡ならびに中里天神塚古墳で開始された。この地区の調査は8月まで続けられ、引続いて唐沢川以南の三ッ寺III遺跡の調査が9月から翌54年11月まで続いた。

井出地区においては昭和51年6月から7月の段階で区長名で再三にわたり路線変更に関する文書の交換をしたものの具体的な進展をみせず、以後群馬町長を仲介として長期間にわたる交渉が続いていた。昭和53年3月9日に至り、公団は測量立入りについて協力を要請したところ、井出地区の役員会を3月13日に開催「文化財調査の名目で測量を認める」ことになり、測量の細部については更に話し合うこととし、5月10日以降諸条件について協議の上、耕作上支障をきたさないことと道路整備について配慮することを条件として測量杭が打たれることになった。

昭和53年度から54年度にかけての文化財調査は依然として月夜野町(深沢、洞、藪田、前中原)、高崎市(田端、舟橋、下佐野I II、寺前)、群馬町(保渡田、三ッ寺III、熊野堂I)などで調査体制をフル回転して進行していた。井出地区の調査可能との情勢の変化があっても、鉄建公団側の要望する早期調査入りは不可能の情勢であったことから、鉄建公団側の考えている調査期間では群馬県教育委員会(昭和55年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)という一機関ではとても消化し難いことが明らかとなった。そこで今後なお残っている調査予定箇所をおよそ折半し、その一部を他の調査機関へ委託することとした。鉄建公団側が在京の大学機関などと折衝を続けてきたが、容易にはみつからず、ようやく山武考古学研究所へ依頼することになった。こうして昭和55年8月、群馬町井出村東遺跡調査会(会長群馬町教育委員会教育長土屋利雄)が発足、群馬町井出村東遺跡の調査(一次昭

和55年9月～56年3月、二次昭和56年4月～8月)が実施された外、なおも在京大学への折衝が続けられたものの結果的には、実施に至らなかった。

昭和55年10月になり、井出地区の埋文調査が進み、工事に着手できたこともあり、前橋安中線をまたぐ橋脚工事の必要から三ッ寺I遺跡の緊急調査を実施したところ、他に類例をみない重要な遺構が検出されて、にわかになら注目されることとなった。

鉄建公団と県教委との間で行われていた定例協議は殆ど毎月実施されるようになり、どの遺跡も調査の促進方を強く要望されるようになり、作業員雇傭などでもマイクロ等による輸送などでも便宜をはかることとなった外、問題の三ッ寺I遺跡の調査では安全をはかるためシートパネルを打つ本格的な対策をとるなど経費的にも相応の理解を鉄建公団側に求める動きもあった。

こうした情勢のもと、昭和56年5月から三ッ寺I遺跡の本格的な一次調査と期を同じくしてそのすぐ北側の三ッ寺II遺跡の発掘調査(一次調査)に着手することになった。単位遺跡での着手は上越新幹線地域の群馬県下での着手は最後の遺跡であり、また側道を含めた二次調査も最終段階となったものである。

昭和56年8月21日、国鉄は東北新幹線は57年6月、そして上越新幹線は57年11月の開通予定と発表した。53年7月に榛名トンネルが榛東村新井で陥没したり、更に54年3月に中山トンネル高山工区や四方木工区で異常出水するなどの事故があったが、その中山トンネルもようやくこの56年12月23日に貫通したことから以後、文化財調査促進にける公団側の主張は執拗になった。従来県庁内で行っていた定例協議も三ッ寺IIの現地事務所で行うようになったし、公団側も上部の責任者が現地へ出席するようになった。また調査の進行もラーメン(橋脚)ごと公設定、調査終了と同時に大型工機(ベント)を導入するという切迫した対応が続いた。9月から11月にかけては、130人にのぼる大勢の調査作業員で毎日が発掘オリンピックの観を呈した。こうした懸命の努力の結果11月18日、三ッ寺II遺跡の本線敷きの調査はようやく終了にこぎつけた。

昭和57年6月23日に東北新幹線の太田・盛岡間、57年11月15日に上越新幹線の太田・新潟間が開通し、営業開始となった。太田・新潟間270kmが1時間45分で結ばれたのである。

そして昭和57年から58年にかけて各遺跡の側道部分の調査を実施、三ッ寺I遺跡では58年2月から10月まで、三ッ寺II遺跡では58年9月から59年3月まで実施して、昭和48年5月以来11年次におよぶ世紀の大発掘調査のすべてが終了したのである。

なお、本項のうち地元交渉の経過については、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局編『上越新幹線工事誌(太田・水上間)』によったものであることを明記しておく。

4 大規模発掘調査の舞台裏

三ッ寺II遺跡の報告書は、上越新幹線地域の埋蔵文化財調査の最終版ということもあって、この11年間における全体の経過の中で印象的だった大規模発掘調査の舞台裏あれこれをメモしてみたい。

(1) 地権者交渉

埋蔵文化財の対象は土地である。その用地が鉄建公団による買収が終わった所や立入りについて承諾が得られた所なら何ら問題がないのだが、初期においては公団職員ともども地権者交渉に出向いた

ことも再三に及んだ。月夜野町上組では文化財が矢面に立っての交渉が5回、それも農家を相手のためいつも夜間の設定で、最終段階では公団の若い職員が県教委側職員になってまぎれこむという場面もあった。高崎市小鳥町や大八木町では地権者を指導する農協組合長を相手にした借地交渉も続けられた。「公団相手の測量には応じないが文化財調査ならやむを得ない」とする地権者の承諾は、発掘調査対象地は即公団の必要とする用地に外ならなかったのも、ある意味では県教委は鉄建公団側の完全な前衛部隊としての役割りをも果していた。交渉を何度も重ねて落ち着いた以後は、人間関係も密になり、ひいては文化財、文化遺産に関する理解を深めて普及の機会にもなったこともある。

(2) 作業員の雇傭

埋蔵文化財の発掘調査には何といても人手が欠かせぬ要件である。調査個所に近い周辺から来ていただくことを原則としたが、農村部でしかも農閑期ならいざしらず、農繁期に入ると激減したり、都市部にあっては人集めに本当に苦労した。今は大量の土砂の移動には重機を使用するため人手は軽作業が主となっているが、それでも時によると重量のあるものもあるので男衆が欲しい時がある。当然若い人は少なく大半は高年令層が多くなり、ある所では転倒して入院騒ぎも生じたことがあったし、労務災害で労働基準監督局から査察も受けたこともあった。最初はすべての人が素人であるが、半年や1年もたつと、文化財の知識や理解も身につけてきて調査も次第に効率的になってくる。完形品の土器などが発見されると興味が倍増し、熱心に仕事が進むことも多々みられた。直接的には労働力の代価として賃金収入が目的であり、「孫に小づかい銭がやれていいおじいちゃんになった」と喜んでいた老人が何人もいたし、特定の期間であったとしても当該地域に落ちた現金はある意味では地域の活性化に役立った筈であるし、一方では経験学習を通じた社会教育の場でもあったと考えている。作業員の方々が一方的に学ぶ場であったというだけでなく、調査に当たった職員にとっても地域の先輩から人間関係のだいじさをはじめ、その土地にまつわるさまざまな情報を聴取する機会ともなり、相互交流の場でもあったからである。

(3) 調査事務所

長期にわたる調査の基地としてプレハブの調査事務所は先ず第一に必要であった。最初は新しくても何年か経過し、また何か所か移動すると次第に痛んできたりした。地盤にもよるが二階建てのプレハブでは重量も加わり傾いて手直しも生じた場所もあった。事務所の建設に当たってその用地が問題である。公団団地内なら問題ないが大半は包蔵地のため移動を必要とすることから、隣接地を借用することが原則であった。従って現地入りに際しては用地交渉から始まるのである。当然空地などはないから借地料を支払っての交渉となる。周辺での相場を基準とするが、建設現場では先行している大手建設業者の建設現場事務所等の借地例があり、かなり相場がよいのだが、参考とせざるを得なかった。また発掘場所の借地交渉の場所でもそうだったが、耕作物のある場合の収入補償については建設部局の持っている補償基準表を参考に積算したが、本県に多い桑樹などでも根刈り、中刈り、高刈りの違いがあることをはじめ、用地の面積では官民、民境界の立合い、ことに傾斜地では高所、中所、低所のどこを境界にするかとか、地主と小作人の補償金の受取り割合についてなども土地によって慣行の違いがあることなども知ることができた。

調査事務所に欠かせないのは電話と電気、そして水道とトイレである。何れも臨時的な設置である

が、特別に人家から離れた所でない限り一定の期限を待てば準備することが可能であった。市町村における上水道の普及などと相まって生活向上のパロメーターでもあった。

(4) 調査担当者

長期にわたる調査に従事した職員の生活にも変化があった。最も大変であったのは月夜野町内での調査であった。多くの職員は前橋や高崎周辺の居住者であったから、往復70kmもの通勤は無理で、特別の場合以外は現地で宿泊した。最初は旅館へ泊ったりしたが宿泊料金がかさむことと食生活のこともあり、民宿に変わったりした。時には公団の宿舎に特別便宜をはかってもらったこともあった。独身者にとってはともかく妻帯者にとっては苦勞の多い日々となった。

(5) 調査の四季

月夜野町内においては1～3月の厳冬期は発掘調査期間から除外した。それでも11月後半から12月にかけては谷川連峯からたちまちにして雪が舞ってくる。昭和48年度に調査した大原遺跡では3カ月に1回の割合いで雪に見舞われた。

年間を通じて本当に好い季節というのは何日もない。春と秋にそれぞれ何日か野外の方が気持のよい日があるのは確かであるが、夏の炎暑のもとでも、また冬の厳寒の日でも休みなく大地との闘いは続く。大地にも個性がある。藤岡瓦の粘土を産する藤岡市の森や中遺跡では硬質の土壌の中の居住地を苦心して発掘した。熊野堂II遺跡では2m近い埋土の下から水田址を検出し、三ッ寺I遺跡では湧水がわく居館址の周堀から数多くの木器類を発見した。シートパイルを打った調査現場はここが最初であったが、健康な身体でないとならぬのが埋文調査である。時には風邪もひき現場を休む時もあるので複数配置でないと長期調査は不可能でもあった。

(6) 現地事務所と本庁

発掘調査はすべてがある計画のもとに予算を要して遂行される。本庁（文化財保護課）では委託先の日本鉄建公団をはじめ市町村教委や文化庁、県庁内諸機関との交渉をすべて担当した。秋の段階での次年度予算の編成、6月や9月段階での補正予算編成、4・5月段階での決算や監査資料の作成、そして毎月の作業員賃金の集計や支払い、現地事務所の設営や撤去などの外、細細とした事務が連日のように続いた。公団や庁内幹線交通課との定例協議の外に不定期の協議も多くあった。日常的に現地へ出ている職員との意思疎通をはかり、他の班がどう動いているのの動向をつかむために給料日を



▲三ッ寺II遺跡の調査事務所

課内会議として運営もしてきた。一方、埋文調査についてはしばしば県議会の一般質問や常任委員会でも質問が出され、またマスコミは絶えず注目的であったし、三ッ寺Ⅰ遺跡の保存問題のように時間をおかぬ対応が欠かせぬ要件でもあった。こうした意味で、現地の調査と行政機関とが緊密な連絡と体制の下で動くことが常に肝要なことである、というのが11年に及ぶ調査で得られた一つの結論である。

表1-2 包蔵地番号と遺跡の名称

上越新幹線建設に伴う発掘調査により多量の遺物が出土し、膨大な記録類が保存されているが、発掘調査を実施した時点での地点名称と、報告書作成時に整理されて付けられた「遺跡名称」は一致しないものがある。また、包蔵地番号はおおむね県南から若い番号が付けられているが、一部に包蔵地番号と南北の順とが逆転している場合もある。そこで、本遺跡の本線敷・側道敷の調査がいずれも最終段階であったことにちなみ、以下にそれらの対照表を記して後日の活用を図りたい。

包蔵地 番号 JS	地点名称	報告書 名称	報告書 番号	遺物注記	備 考
6-1	森	森・中Ⅰ・中Ⅱ遺跡	2集	JS6-1	元JS6, JS森もある
6-2	中Ⅰ	森・中Ⅰ・中Ⅱ遺跡	2集	JS6-2	
6-3	中Ⅱ	森・中Ⅰ・中Ⅱ遺跡	2集	JS6-3	
7	寺東	田端遺跡	9集	JS7	寺東地区
8	阿久津	田端遺跡	9集	JS8	田端地区D区
8	田端	田端遺跡	9集	JS8	田端地区A・B・C・E区
13	下佐野Ⅱ	下佐野遺跡Ⅱ地区	6集	JS13	下佐野Ⅱ
14	下佐野Ⅱ	下佐野遺跡Ⅱ地区	6集	JS14	下佐野Ⅱ
15	下佐野Ⅰ	下佐野遺跡Ⅰ地区	11集	JS15	下佐野Ⅰ・A~D区
15	寺前	下佐野遺跡寺前地区	11集	JS15寺前	JS15-2もある
21	舟橋	舟橋遺跡	12集	JS21	
22	下小鳥	下小鳥遺跡	16集	JS22	大八木町・下小鳥町
24	融通寺	融通寺遺跡	15集	JS24	24地区 (=南半)
25	融通寺	融通寺遺跡	15集	JS25	25地区 (=北半)
26	熊野堂	熊野堂遺跡(2)	14集	JS26	最初の熊野堂
27	東下井出	熊野堂遺跡(1)	3集	JS27	旧称東下井出遺跡・1~4区
33	三ッ寺Ⅰ	三ッ寺Ⅰ遺跡	8集	JS33	略称三ッ寺遺跡 (=居館)
34	三ッ寺Ⅱ	三ッ寺Ⅱ遺跡	13集	JS34	木簡出土地点含む
35	保渡田	三ッ寺Ⅲ・保渡田遺跡・中里天神塚古墳	5集	JS35	三ッ寺Ⅲの北側
36	三ッ寺Ⅲ	三ッ寺Ⅲ・保渡田遺跡・中里天神塚古墳	5集	JS36	FA下住居出土土器セット
51	中里天神塚	三ッ寺Ⅲ・保渡田遺跡・中里天神塚古墳	5集	JS51	
69	十二原	十二原・大原・前中原遺跡	1集	JS69	
70	大原	十二原・大原・前中原遺跡	1集	JS70	
76-1	洞Ⅰ	洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡	7集	JS78-1	
76-2	洞Ⅱ	洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡	7集	JS78-2	
76-3	洞Ⅲ	洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡	7集	JS78-3	
78	藪田	藪田遺跡	4集	JS78-4	
79	深沢	深沢遺跡・前田原遺跡	10集	JS79	
80	前中原	十二原・大原・前中原遺跡	1集	JS80	県内最北地点
81	前田原	深沢遺跡・前田原遺跡	10集	JSマエタバラ	前中原の南側

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

本遺跡における調査は第一次調査（本線敷き＋2区を除く西側道敷き）、第二次調査（東側道敷き＋2区西側道敷き）の2回にわたって行われた。調査着手の時点で2区本線敷きには、すでに新幹線橋脚が建設されており、本線敷き調査は不可能の状態であったため、一次調査では2区の調査は行っていない。発掘調査当時の事務局関係者は次の通りである。

《第一次調査》昭和56（1981）年度、昭和56年5月13日～昭和56年12月18日

常務理事 小林起久治，事務局長 沢井良之助，調査研究部長 井上 唯雄

庶務課長 近藤 平志，調査研究第2課長 長谷部達雄，調査研究第3課長 細野 雅男

庶務課主事 国定 均・山本 朋子・柳岡 良宏・笠原 秀樹・吉田 有光

調査担当 1・4区＝細野 雅男，3区南半＝飯塚 卓二・坂井 隆・井川 達雄，

3区北半＝下城 正・女屋和志雄・小安 和順，5～6区＝長谷部達雄・関 晴彦

調査員 外山 政子・新井 順二・宮下万喜子・三浦 京子



▲1区下層の調査 多雨対策としてテントを張って調査した。

《第二次調査》昭和58（1983）年度，昭和58年9月1日～昭和59年3月31日

常務理事 小林起久治，事務局長 白石保三郎，管理部長 大澤 秋良

調査研究部長 松本 浩一，調査研究第2課長 秋池 武

庶務課主事 国定 均・山本 朋子・柳岡 良宏・笠原 秀樹・吉田 有光

調査担当 下城 正・女屋和志雄，調査員 外山 政子・新井 順二

調査区は大宮を起点とする新幹線建設用中心軸を南北の基準方向とし、キロ程83km500m以南を1区、以北を100mごとに2区、3区、4区、5区、6区とした。南北の中心軸は直線であり、これと磁北とのなす角度はN 1度21分40秒Eで、わずかに東側に振れている。

東西方向は従来の基準に従って中心軸をMラインとし、3mごとに西側からI J K L M N O P Qのラインを設定した。すなわち、南北方向は大宮を起点とする新幹線のキロ程で現し、東西方向はこれと直角なI～Qのラインで表現する。各グリッドは3m×3mを単位としたが、調査区内の1地点はアルファベットで現す3mの間隔と、新幹線キロ程で表示することになり、東西方向での細かい表示はしていない。調査区は全体で南北484m、東西24m（西側道敷き6+本線敷き12+東側道敷き6m）の長方形メッシュをかぶせたことになる。

なお、現地で調査地点を確認・照合する場合は、キロ程「83K980M⁴」の銘板が橋脚東側に埋め込んであるので、参照することができる（2-6図参照）。



▲2区西側道の遺構確認（北西から）



▲水没した3区南端（北から）



▲3区東壁の土止め工事（北西から）



▲3区明け渡し後の調査（北東から）

《1区～6区のキロ程》大宮起点（1981年鉄道建設公団図基準）

1区：83km455m～83km500m	2区：83km500m～83km600m
3区：83km600m～83km700m	4区：83km700m～83km800m
5区：83km800m～83km900m	6区：83km900m～83km939m

1区の調査範囲は83km500m以南～猿府川であるが、1区南半は着手当時水田となっており、多量の湧水が予想されたため、調査範囲から割愛した。さらに1区北半のキロ程83km455m～465m付近では、予想通り湧水が多く、掘削の危険度が高かったため、下層の調査は断念した。

ところが、三ッ寺I遺跡の調査進展に伴ってその北限域が追及課題となった8月中旬、掘削工事中にこの水田部から遺物が出土したため、8月20～24日のあいだ緊急に調査した。この地点は本来三ッ寺II遺跡1区南半部に相当していることから、「三ッ寺II遺跡木簡出土地点」と呼ばれることになった。木簡出土地点は三ッ寺I遺跡と三ッ寺II遺跡との中間に位置し、便宜的な遺跡境界とした猿府川から北へ約50mの地点にある。三ッ寺II遺跡1区南限から約20mである。木簡出土地点の調査は、その調査契機と調査内容が特殊であることから、本分冊（本文編）第5章で報告することとした。

北端の6区のうち、キロ程83km940m以北の部分は、着手時点ですでに新幹線橋脚が建設されており、調査は不可能であった。6区の低地をさらに北上すると三ッ寺III遺跡の乗る微高地となり、唐沢川の低地を挟んで保渡田遺跡・中里天神塚古墳へと連なり、榛名トンネルに至る。



▲重複著しい4区北半の調査（南から）

2 調査の経過

第一次調査は新幹線建設工事の工期との関係から、重機を導入して表土を剥ぎ、上層の調査→掘削→下層の調査という手順でおこなった。具体的には、表土掘削→杭打ち→遺構確認→1/100遺構分布図作成（遺構数量の把握と調査計画立案のため）→上層個別遺構の調査（個別記録作成）→全体図作成→上層掘削→下層の調査（以下、上層と同様の手順）とした。全体の工程は1区から順次6区まで実施する予定であったが、これも工期との調整を図るなかで6区-5区の調査も同時進行となり、建設工事のブロックごとの明け渡しを求められた。この間、調査の進行に伴って別の遺跡の調査を担当していたグループが、当該遺跡の調査終了後ただちに合流して調査班が増強され、一時期には南北約300mの間に4班が入り、南北両端から分担して発掘調査を進めた。

最終的には4区-5区間の下層の調査段階で調査区が隣接状態となり、縄文時代遺構の調査、及び地山確認のためのトレンチ調査をもって第一次調査を終了した。第一次調査の最終段階は南北両側で建設工事が進められ、大型重機のうなりや杭打ちの喧噪の中での発掘調査となった。

第二次調査は三ッ寺I遺跡の側道敷き調査に続いて実施され、一次調査で未着手であった2区の東・西側道敷き、及び1区・3～6区の東側道敷きが調査の対象となった。すでに生活道路が付け替えられて利用されていた地点では調査不可能であり、また調査区の幅が6mという制約の中での発掘



▲5区表土掘削（南から）



▲5区上層の調査（北から）

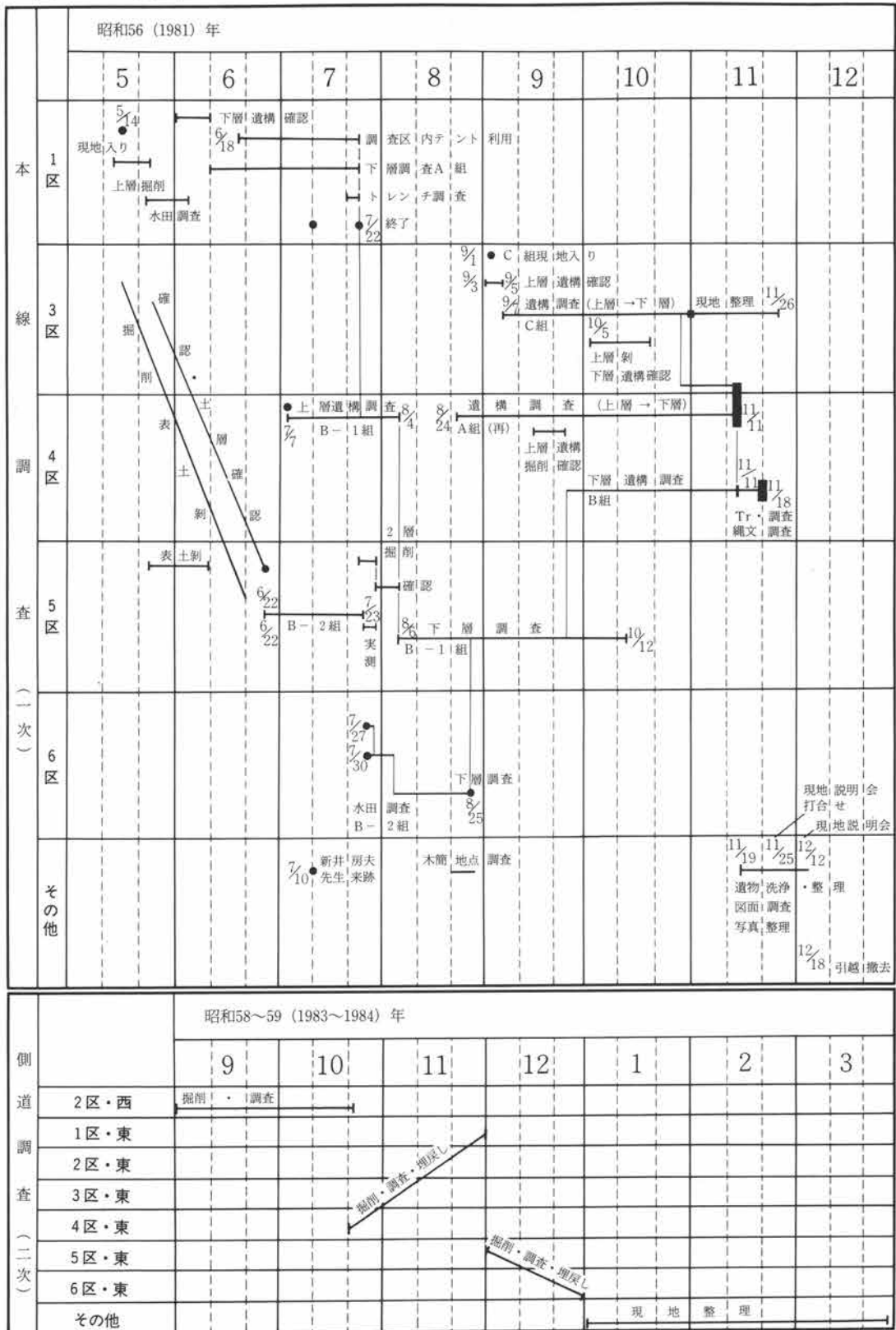


▲5区下層の調査（南西から）



▲5区 工事迫るなかでの調査（南から）

表1-3 調査経過



作業であった。一次調査と同じ原則で調査基準線を復元・設定したが、2回に分けて調査をおこなった遺構では、遺構実測図がピッタリ一致しない場合や、わずかの幅の未調査部が存在してしまったもの、一枚の遺構記録写真では報告できないものもある。

これらの間の調査経緯はやや複雑な経過をとっているため、表で示した。なお、昭和56年12月12・13日には、地元群馬町の南部コミュニティセンターにおいて、現地説明会を開催し、多数の人々の参加を得た。特に記して、関係者の皆様に感謝の意を表したい。

本遺跡の発掘調査は昭和58年度末の昭和59年（1984年）3月31日で終了し、これは同時に、昭和48年5月の月夜野町十二原遺跡（No.69）から開始した、上越新幹線関係埋蔵文化財の発掘調査事業の終了でもあった。

《調査面積》一部に重複あり

第一次調査	6,840平方メートル
第二次調査	3,300平方メートル
計	10,140平方メートル

《成果報告》これまでに公表された調査成果は次の通りである。

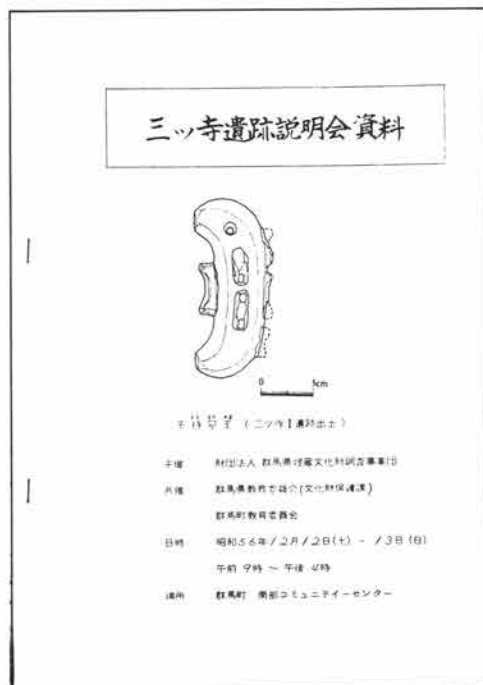
- 『年報1』群馬県埋蔵文化財調査事業団，昭和57（1982）年
 女屋和志雄「1981年出土の木簡-群馬・三ッ寺II遺跡」『木簡研究』4号，1982年
 『年報3』群馬県埋蔵文化財調査事業団，昭和59（1984）年
 『群馬県史資料編4 原始古代』群馬県史編纂委員会，群馬県，1985年
 『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第8集 三ッ寺I遺跡』本編，159頁，昭和63（1988）年



▲6区-5区クイ打ち（南から）



▲調査事務所で図面整理



▲現地説明会パンフレット

第3節 整理の経過

本遺跡の整理事業は昭和62年1月から平成3年3月にかけて、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理期間は4年度にわたり、報告書は全4分冊の構成とし、原稿類が揃い次第、分冊ごとに印刷・刊行するという方針で作業を進めた。各年度の整理作業は下記の通りである。経過は表で示した。

第一年度（昭和62年度） 昭和63年1月4日～昭和63年3月31日（3カ月），1988

出土遺物の所在確認・内容点検、記録図の所在確認・レイアウト設計、遺構写真の所在確認・レイアウト設計・コマ選別・プリント。記録図枚数2,643枚。

第二年度（昭和63年度） 昭和63年4月1日～平成元年3月31日（12カ月），1988～1989

出土遺物の接合・復元・写真撮影・実測。遺物破片数約10万点のうち、1,520点を実測し、852点の写真撮影を行った。遺物トレースはすべて終了。遺構写真を整理して報告書掲載分を選択し、遺物写真の掲載分と併せて設計した。写真図版編原稿作成終了。

第三年度（平成元年度） 平成元年4月1日～平成2年3月31日（12カ月），1989～1990

『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第13集三ツ寺II遺跡－写真図版編－』として一分冊を刊行。遺構図・記録写真等を参照しながら遺構説明原稿を執筆し、全376軒分の住居原稿と、溝・土坑等の文字原稿は終了した。図版・写真を準備して、翌年度の『資料編1・2』の原稿準備終了。遺構白黒写真枚数12,936コマ。

第四年度（平成2年度） 平成2年4月1日～平成3年3月31日（12カ月），1990～1991

『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第13集三ツ寺II遺跡－資料編1・2－』として



▲出土土器の接合



▲掲載遺物登録



▲土器の拓本を採る



▲器械による土器実測

第2章 立地



2区西側道の調査 手前の細い交差する溝状遺構は、古墳時代後期の住居と重複する榛名山二ツ岳FAで埋没した畠。

36
25' N

139 E



36
20' N 138 59' E

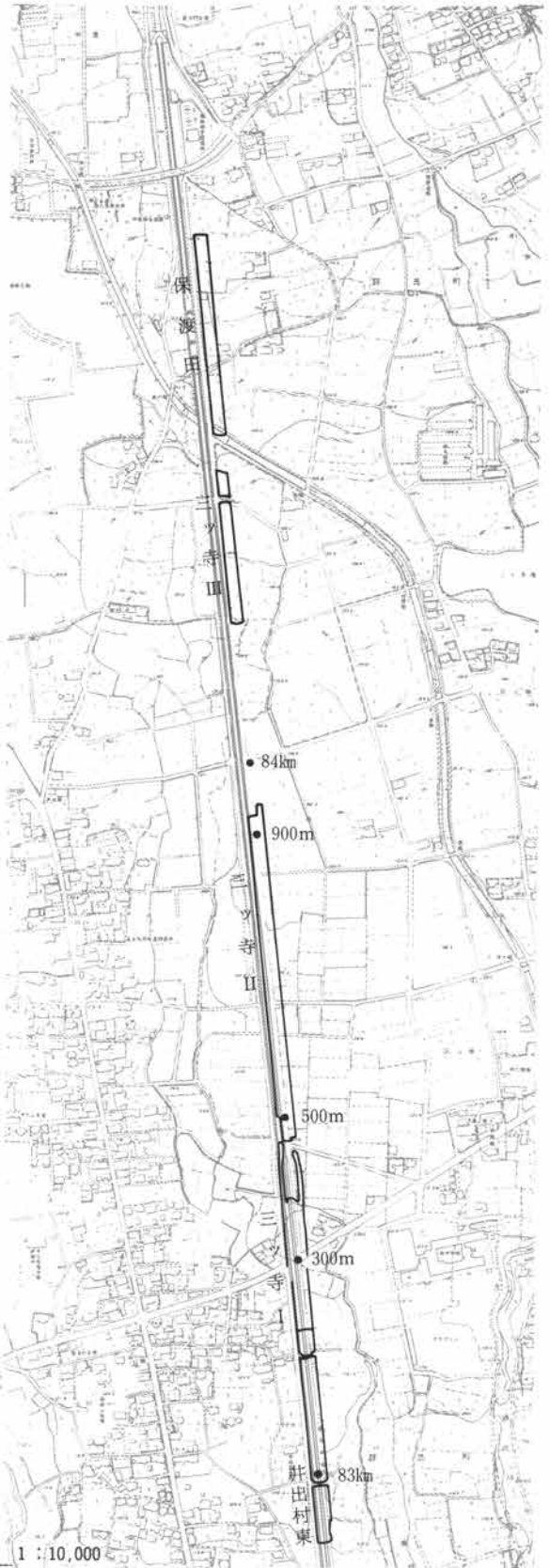
139 E

139 1' E

昭和63年 平成元年
3月 下釜田 前 橋 9月

1 : 2.5万 国土地理院

2-1図 上越新幹線関係
高崎北部～群馬町の遺跡



1 : 10,000

原図：昭和61年群馬町都市計画図
(1 : 2,500)

1 遺跡の位置

- (ア) 北緯：36度22分30秒，東経：138度59分42秒，磁針方位：西偏約6度50分
- (イ) 国土地理院地形図：1/2.5万『下室田』，1/5万『榛名山』
- (ウ) 国家座標：第IX系，座標値：X = +41.7～+42.2，Y = -75.1～-75.3
- (エ) グリッド設定基準 = 新幹線中軸線，中軸線と磁北とのなす角度はN 1度21分40秒E

2 周辺の微地形と地質

本遺跡は榛名山南東の「相馬ヶ原扇状地」から「前橋台地」にかけての緩い傾斜地にあり、遺跡地東側に唐沢川、西側に猿府川が流れ、ほぼ平行して南流する二つの小河川に挟まれた微高地上に立地する。標高は南端1区のキロ程83km450m付近で125m、北端に近いキロ程83km900m付近で131mであ



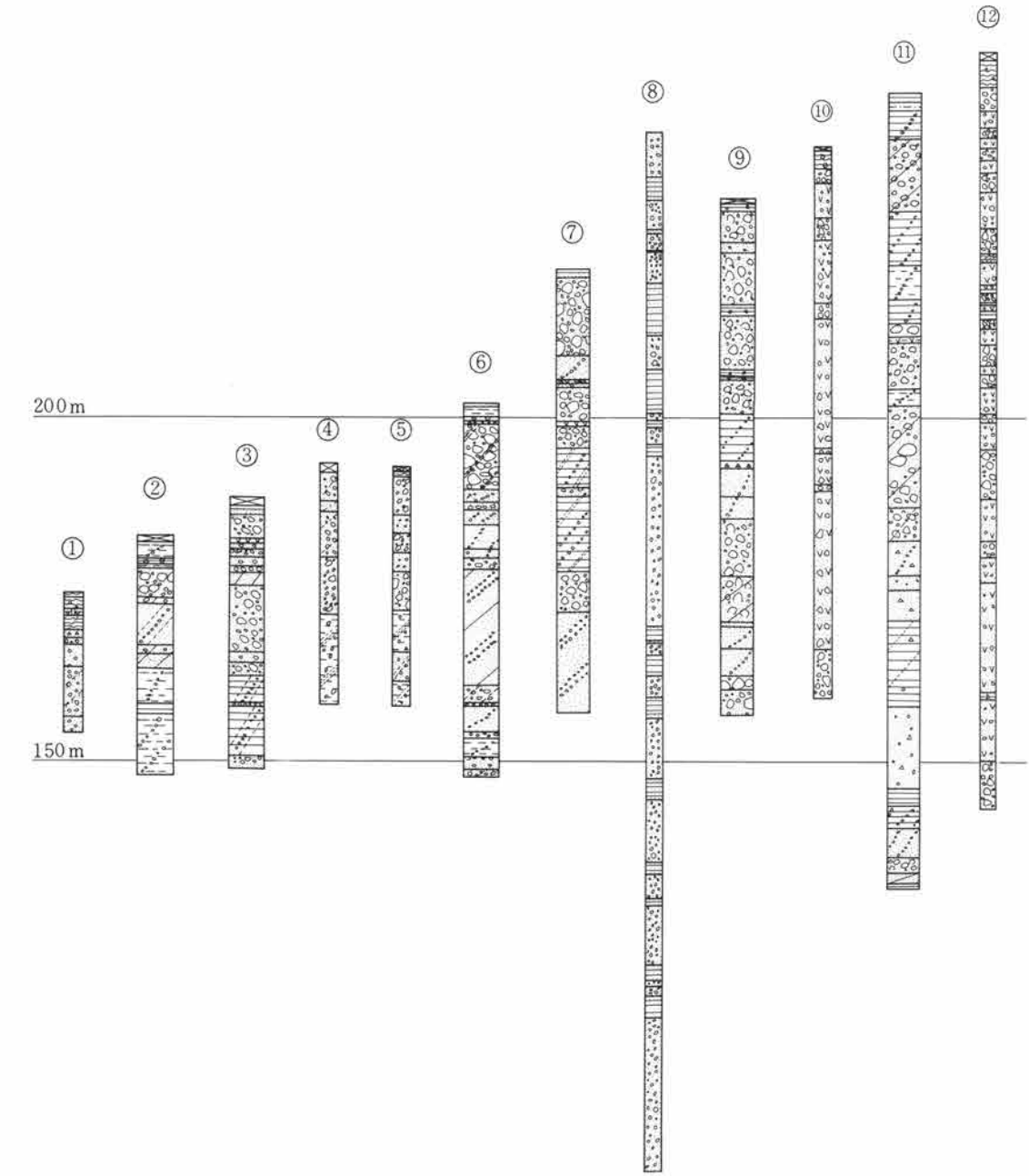
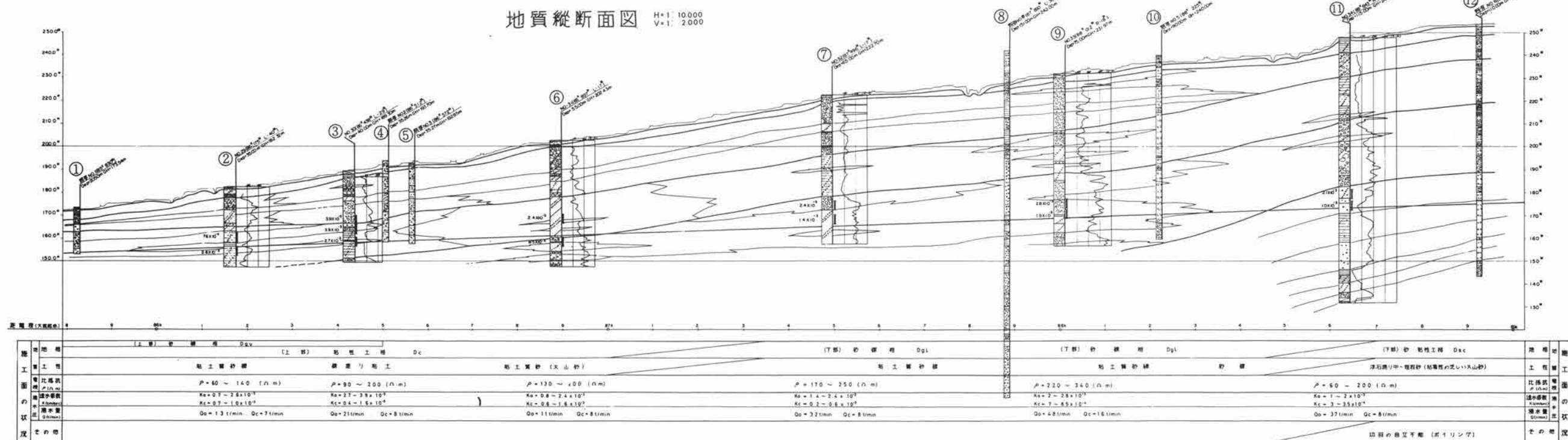
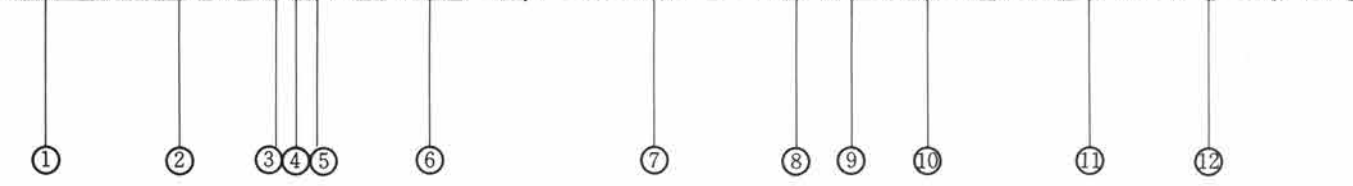
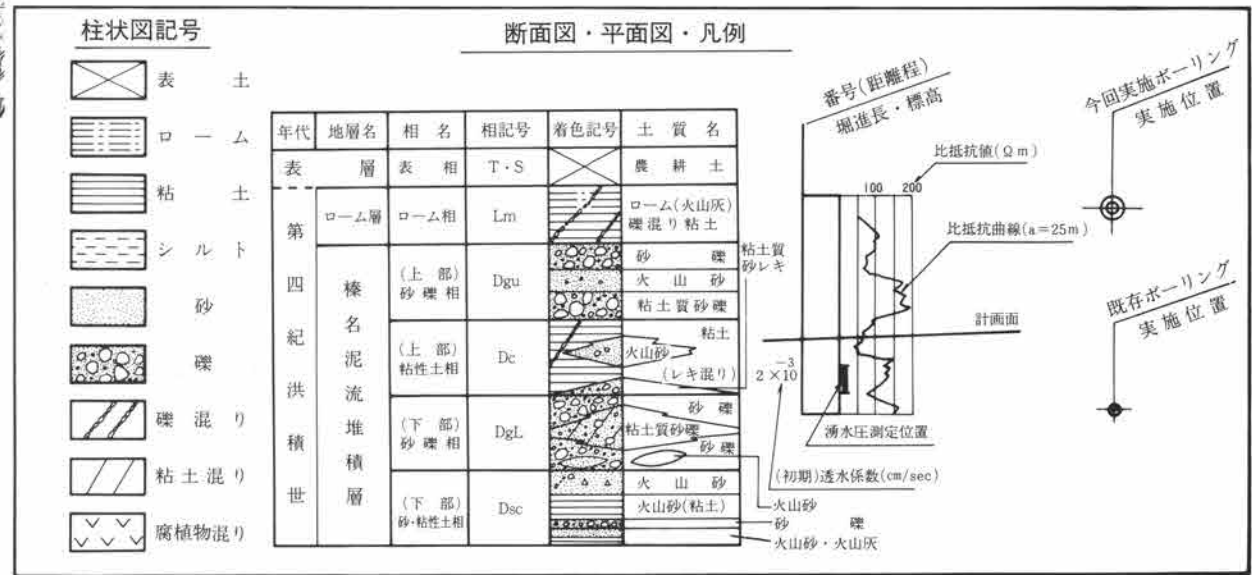
2-2 図

三ッ寺II遺跡
周辺の地質

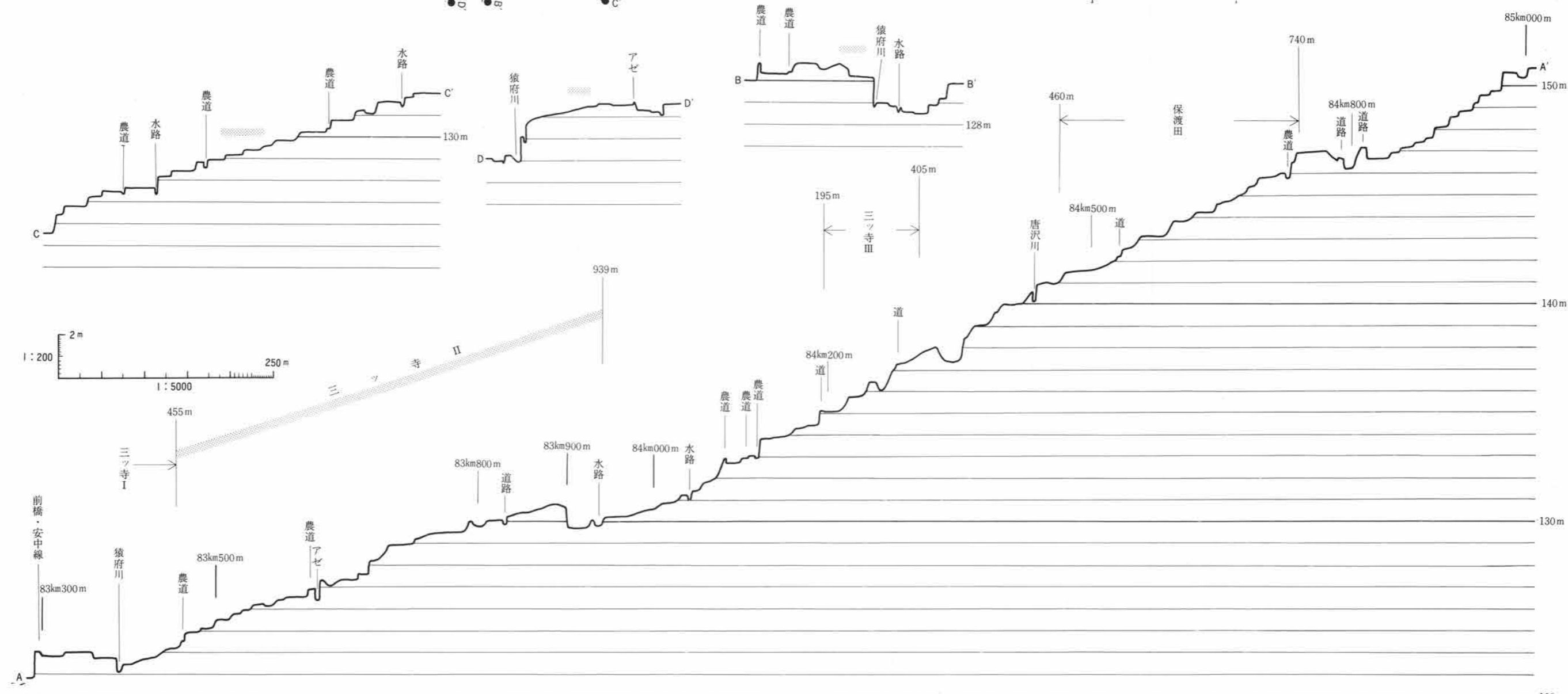




2-3図 三ッ寺II遺跡付近の航空写真(1971)と微地形



2-4 図 礫名トンネルのボーリング調査 (鉄道建設公団)



2-5図 調査前の新幹線路線沿い断面

2-6 図 調査後の新幹線路線沿い断面とキロ程表示

1 調査後の断面

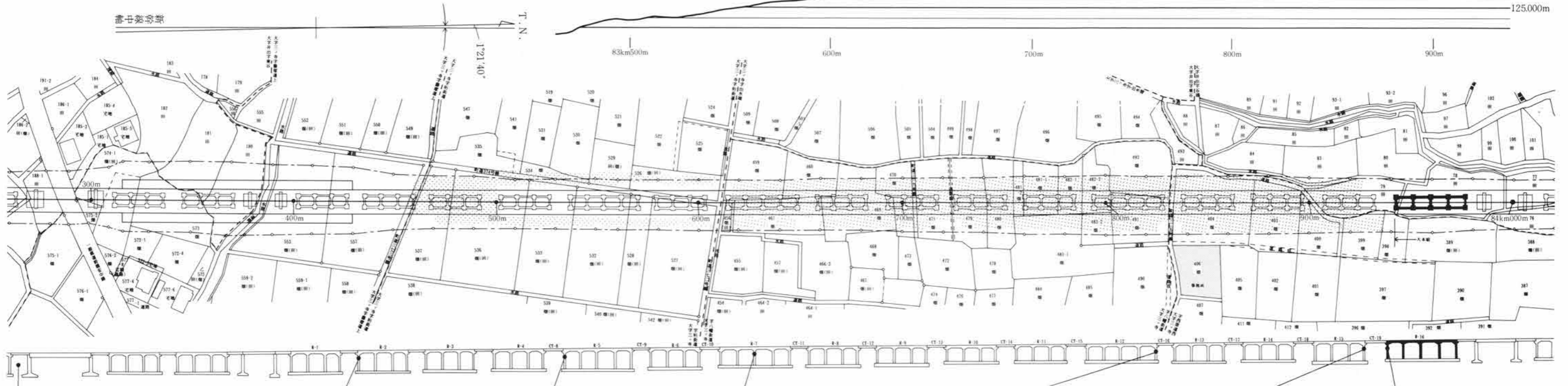
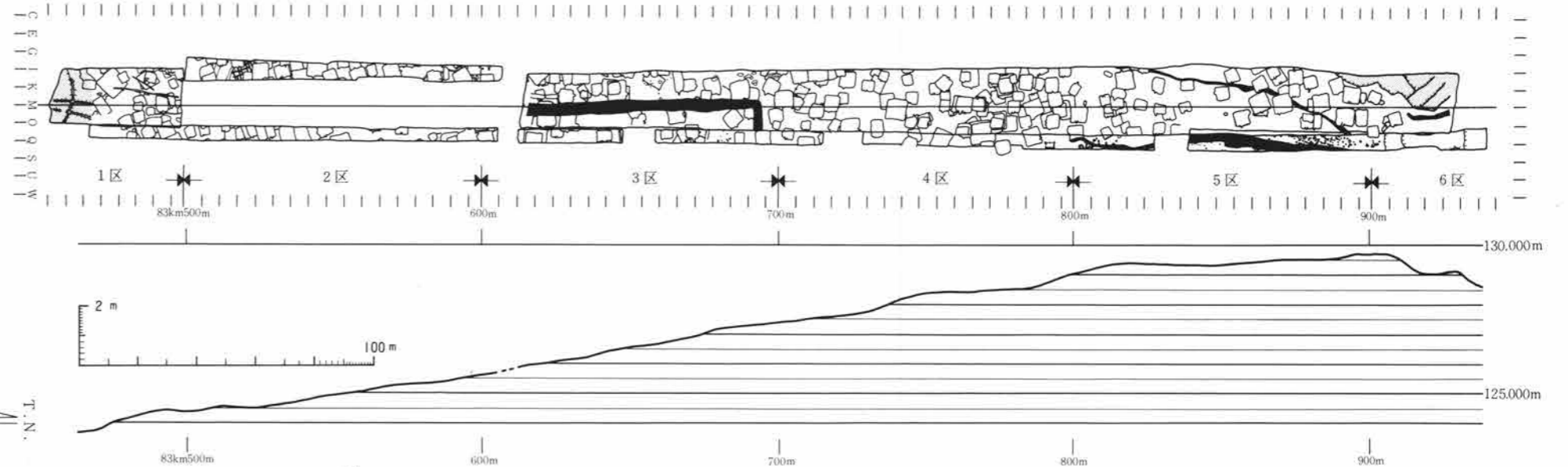
調査終了後、地山が露出した段階の南北通しの断面をみると、南端・北端の水田跡が低いことは調査前と同様である。1区～2区南半は平坦となっているが、2区の北半は傾斜があり、3区は南へ向かって傾斜する。3区と4区との境、および4区と5区との境には傾斜面があり、5区は中央部がややくぼんでいる。住居が最も密集するのは4区で、重複の激しい区である。5区は南半よりも北半に集中し、しかも古墳時代中期頃の住居が多い。垂直方向は水平方向に比べて、10倍に強調されている。

2 調査時点と橋脚のキロ程表示

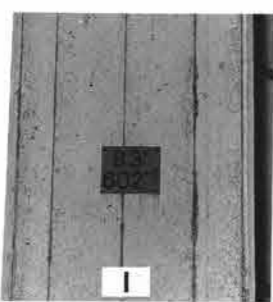
調査着手時に鉄道建設公団から受け取った図は施工前の設計図であり、大宮を起点としたものであった。竣工後、起点の移動または設計変更による調整が行われ、調査時のキロ程表示とは異なる銘板が貼り込まれている。周辺の調査が今後行われる場合を予想し、調査区と新幹線の橋脚との同定をしておく。基準となるのは、6区の940m（調査区北端）以北の工区が、それより南側の工区と全く異なる施工者によって建設されていることであり、この銘板は三ッ寺高架橋の「R-16」に貼り込まれている。

3 三ッ寺I遺跡の説明板

県道前橋-安中線と新幹線とが交差する地点の東側道際に、群馬町教育委員会によって説明板が設置されている。1990年6月調査。



《キロ程表示》
1981年5月調査着手時点
公団図キロ程=83 k m 435 m
1990年6月調査
キロ程表示=83 k m 602 M⁵



《キロ程表示》
1981年5月調査着手時点
公団図キロ程=83 k m 536.7 m
1990年6月調査
キロ程表示=83 k m 705 M⁵



《キロ程表示》
1981年5月調査着手時点
公団図キロ程=83 k m 631.7 m
1990年6月調査
キロ程表示=83 k m 800 M⁵



《キロ程表示》
1981年5月調査着手時点
公団図キロ程=83 k m 828.4 m
1990年6月調査
キロ程表示=83 k m 980 M⁵



《キロ程表示》
1981年5月調査着手時点
公団図キロ程=83 k m 931.7 m
1990年6月調査
キロ程表示=84 k m 100 M⁵



り、周囲の水田から約1mほど高くなっている。6区の調査区北端では、5区との比高85cmを測る。

遺跡ののる微高地の周辺は、地質図でみると(注1)、第四紀更新世後期の『礫・砂・泥・及び火山灰』(Q₂)となっており、榛名山は『輝石安山岩』(aP、更新世後期～完新世)である。榛名トンネル掘削に先行するボーリング調査によれば(新幹線軸線に沿って)、標高173.54m地点で地表から20mの深さまで榛名泥流堆積層を確認し、標高247.55m地点で115mの深さまで礫混じりの粘質土が堆積する(2-4図、注2)。

3 周辺遺跡と現在の耕作地

三ッ寺II遺跡北側には比高3mほどの低地を挟んで、標高139.5mの高まりにのる三ッ寺III遺跡があり、さらに北方には唐沢川を境として保渡田遺跡が所在する。唐沢川は本遺跡の東側300~400m付近を南流する。

西側の猿府川は本遺跡ののる微高地の南西端(かつて桁街道遺跡として群馬町が調査した地点がある、注3)を迂回し、南側に接する三ッ寺I遺跡付近で屈曲し、再び南流して約1.4km南の雨壺(あまつば)遺跡付近で唐沢川と合流する。さらに300m南下すると、井野川に合流する。

現在の土地利用は遺跡地周囲が水田、やや高いところはほとんど桑畑等の畠作を営んでいる。新幹線の路線に沿って地形の傾斜をみると(2-5図)、三ッ寺I遺跡と三ッ寺II遺跡との中間、三ッ寺II遺跡北端の83km900m~84km000m、84km800m付近のところにくぼみがあり、傾斜変換点は三ッ寺I-IIの中間地点である。三ッ寺I-IIおよび三ッ寺II遺跡北端部は、浅間B軽石下の水田が検出された

位置に相当する。84km800m付近は中里天神塚古墳の南約400m付近に相当し、唐沢川が北西-南東へ新幹線路線を横切る部分の北東側(押出橋の東側)に当たる。押出橋の南西部は保渡田東遺跡で、奈良~平安時代の住居が検出されている。

本遺跡の北西約2kmの榛名川西岸では、標高150m前後に立地する保渡田III遺跡が調査され、浅間B軽石下の水田跡が検出されている。平安時代末頃までに、この山麓は小河川の谷筋に沿って水田化されたと考えられる(注4)。

路線を横断する方向の断面をみると、路線の東側が高く、西側が低くなっている。東側の微高地は幅約300mの南北に連なる畑地となり、東限は唐沢川である。西側では2-5図のD-D'断面で約2.5mほど西側が低い。この低地は猿府川の流路に沿った水田となっている。



2-7図 近傍の遺跡

昭和50年10月発行
群馬町文化財地図
(1:20,000)

4 微高地の復元

昭和48年の調査着手前の航空写真と地形図でみると、1区から3区にかけての東側には、北北東—南南西およびこれに直交する畦が見られ（字桁街道・字藤塚道上）、明らかに後世の区画整理の痕跡を示している。この区画の記録をたどってみると、第二次大戦後の米軍の撮影した写真（巻頭図版6、昭和22～26年）、昭和年代の耕地図（注5）の三者とも同様の区画を記録している。ところが、『字限繪図』（注6）ではこの区画が見当たらず、微高地南端の畦は「U」字形を呈して北東側へ丸く伸びてゆくことが解った。

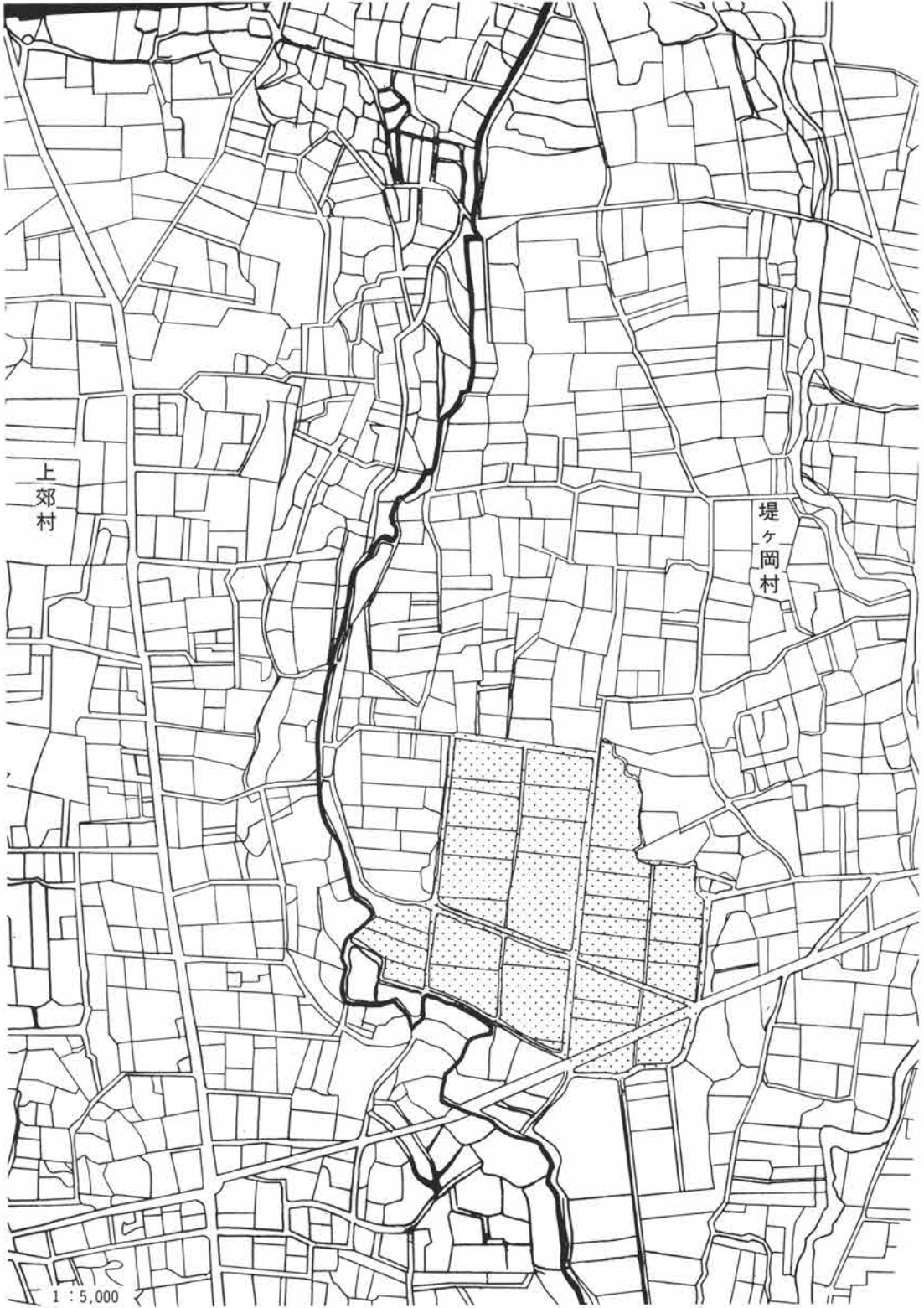
この件に関する事情を説明する史料に『堤ヶ岡村誌』（注7）がある。同書の「中部用水」の項に「三ッ寺西田地区の変態性耕地整理」という一文があり、水田を畠に変えた事情が記録されている。それによれば、この付近は「昔から水源に乏しく降雨を唯一の頼りとする水田のため、年により稲が枯れる早害や植付不能の場合が少なくなき……」、大正15年8月26日に「水田を桑畑に変え」ることを関係者全員一致で決定した。実際の耕地整理に至るまでには種々の経緯があったが、昭和2年2月28日に起工し、3月中旬に工事が完了した。この整理にかかわる地域は、「八幡街道の一部、藤塚道上の大部、藤塚道下の全部桁街道の一部、出水端の一部面積7町5反7畝」と記録されている。これらの地域は、まさにここで対象としているところに相当し、昭和初期に区画整理された地域と考えられる。さらに、明治6年頃の『壬申地引繪図』（注8）には同様の区画が描かれているが、参謀本部陸軍部測量局の『金子驛』（いわゆる迅速図、巻頭図版7、明治13～17年）では不明確である。

この丸く納まる微高地南端の畦は、北東側から伸びる低地地形を反映したものとみられる。さらにこの低地を越えた東側には「字堂山」と呼ばれる微高地があり、これと三ッ寺II遺跡の微高地とで逆U字状に低地を囲んでいる（注3）。調査では1区の83km470m付近を北限とする浅間B軽石に覆われた水田跡を検出し、中世以降の溝のなかには北東—南西の方位をとるものがあることから、この低地地形は浅間B軽石が降下する頃までには水田化されたと考えられる。また、1区の平安時代までの住居跡が東側へ寄るほど北側へ退いてゆくことも、この地形の平安時代頃の姿を物語るようである。これらのことから、本遺跡ののる微高地は北北東—南南西の方向をとり、南端は大正末年頃までは以前の地形を保存した『U』字形をなしていたと推定される。

三ッ寺I遺跡のボーリング調査では（注9）、「猿府川は深さ約9mのU字状をなす谷で植物繊維を多量に含む黒色土と砂層が互層をなして堆積しており、極めて緩やかな流れであった」と推定されている。「南濠と西濠は洪積台地を人為的に掘削している」ことが確認されているので、居館の濠を掘り下げた頃には、三ッ寺I遺跡と三ッ寺II遺跡との中間地点は低湿地であったことが解る。

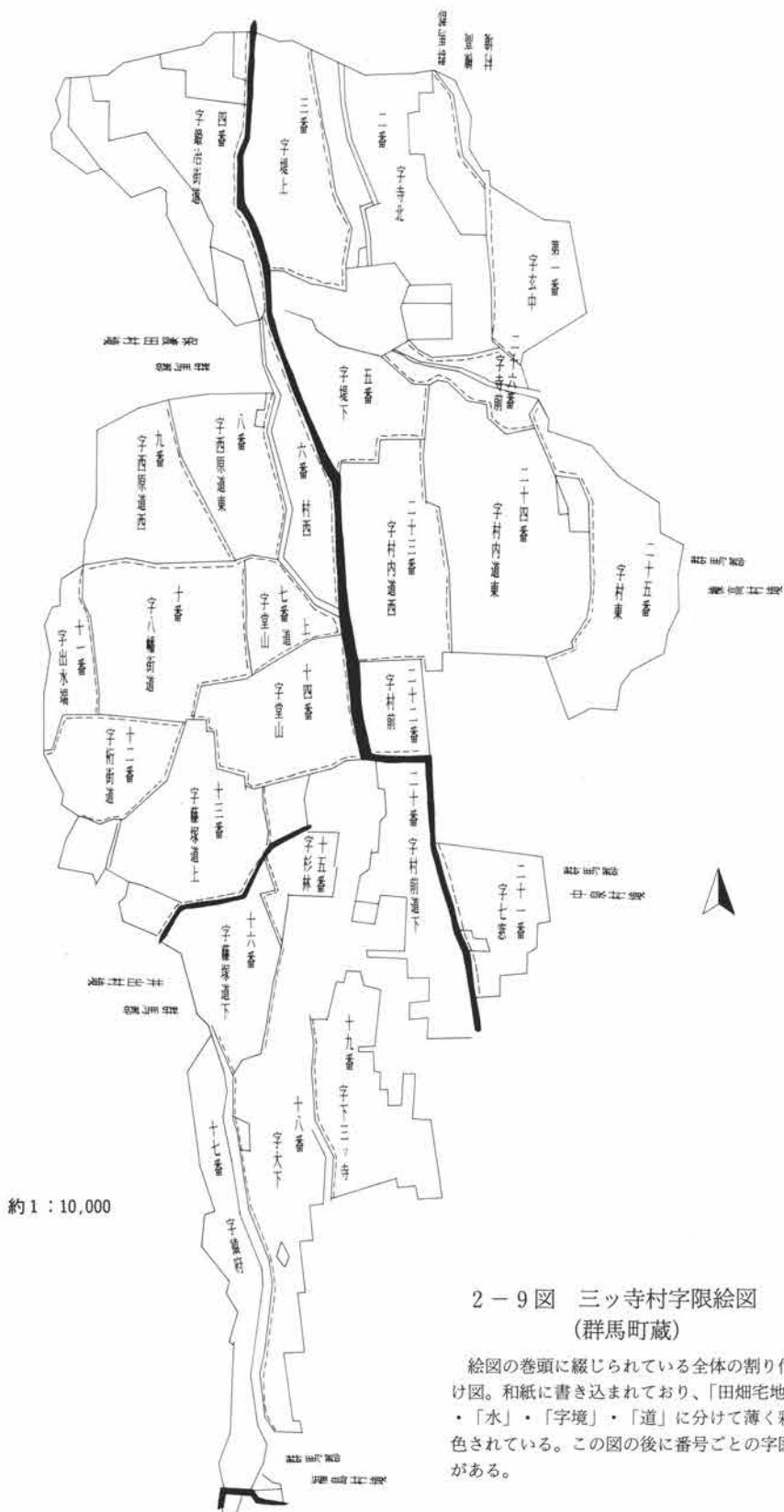
三ッ寺居館ののる微高地が居館築造以前に独立の高まりであった可能性もあるが、三ッ寺I遺跡でのボーリング調査と南・西部の濠の地山整形からみれば、井出村東遺跡ののる微高地から切り離された可能性が高いと考えられる。

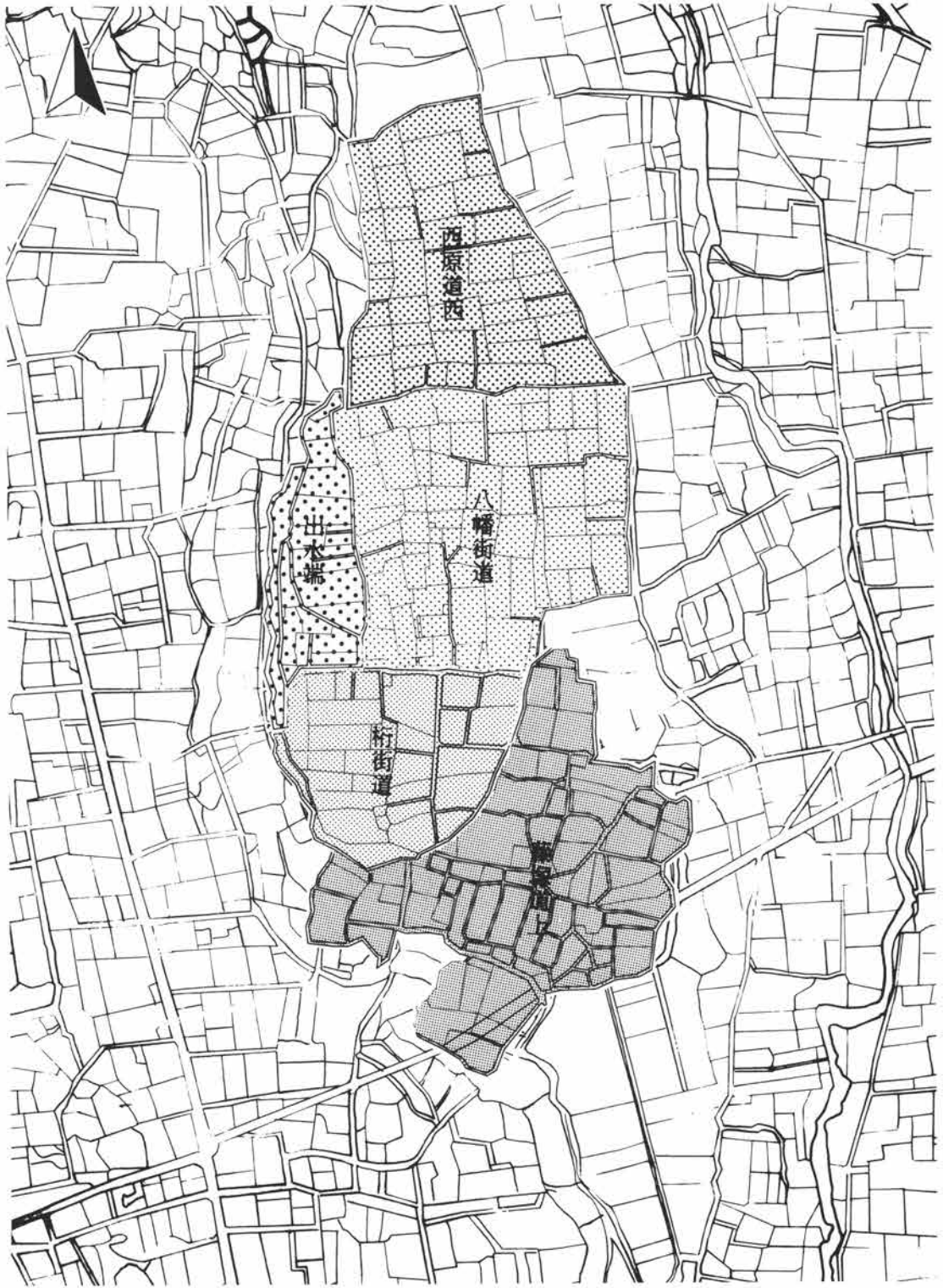
周辺の尾根筋の大半が略北西—南東の方向に傾いているのに対し、三ッ寺II遺跡ののる微高地と薬師塚古墳ののる微高地の両者が、北北東—南南西の方位をとっていることは現状で筆者に理解できない様相であるが、火山堆積物を取り除いた旧地形の復元に重要な要素を占めると考えられる。



2-8図 遺跡周辺の耕地図

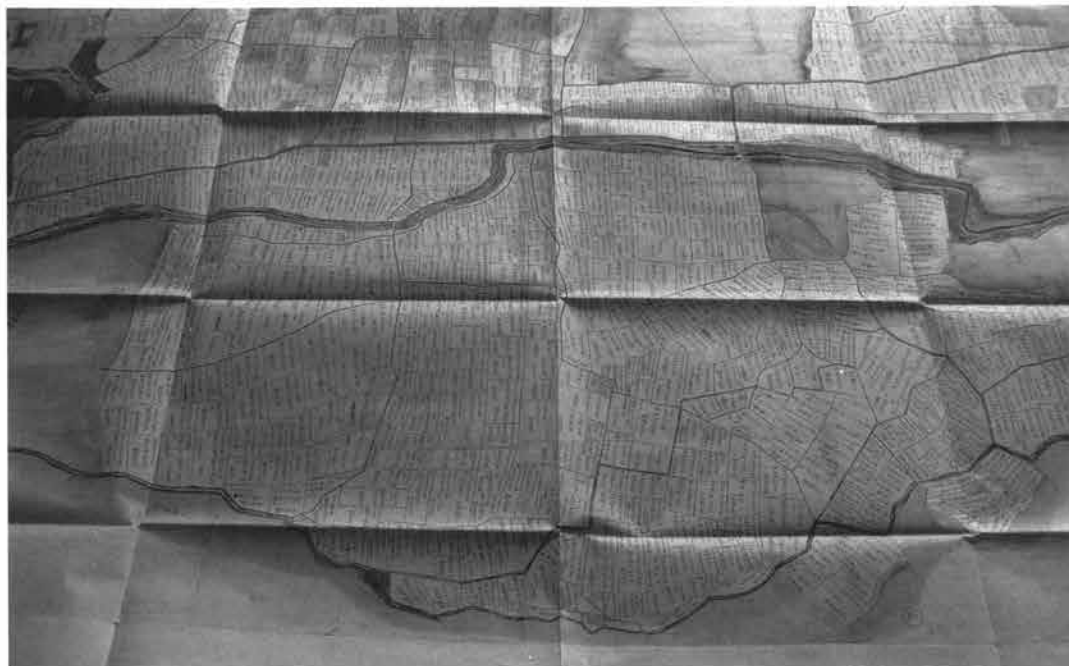
黒線を境として左側（西）は上郊村（かみさとむら）、右側（東）は堤ヶ岡村（つつみがおかむら）に所属する。黒線はほぼ猿府川に相当し、両村の測量はそれぞれ東西から黒線で図面が終了する。図面の素直な突き合わせでは合成できなかった。





2-10図 耕地整理前の字境 (約1:5,000)

耕地図に字限絵図の一部を重ねたもの。『九番西原道西』・『十番八幡街道』・『十一番出水端』・『十二番桁街道』・『十三番藤塚道上』を合成した。水田→畠という類例の少ない変更を施した土地である。



2-11図 三津寺村壬申地引絵図（県立文書館蔵、部分）

畳3枚ほどの大絵図である。鮮やかな彩色が施され、『字限絵図』に酷似する字境が記録されている。写真は西側からみた三ッ寺I-三ッ寺II遺跡付近。

なお、周辺の遺跡と立地に関しては、本シリーズ第5集『三ッ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』および第8集『三ッ寺I遺跡』に詳しいので、そちらを参照されたい。（関）

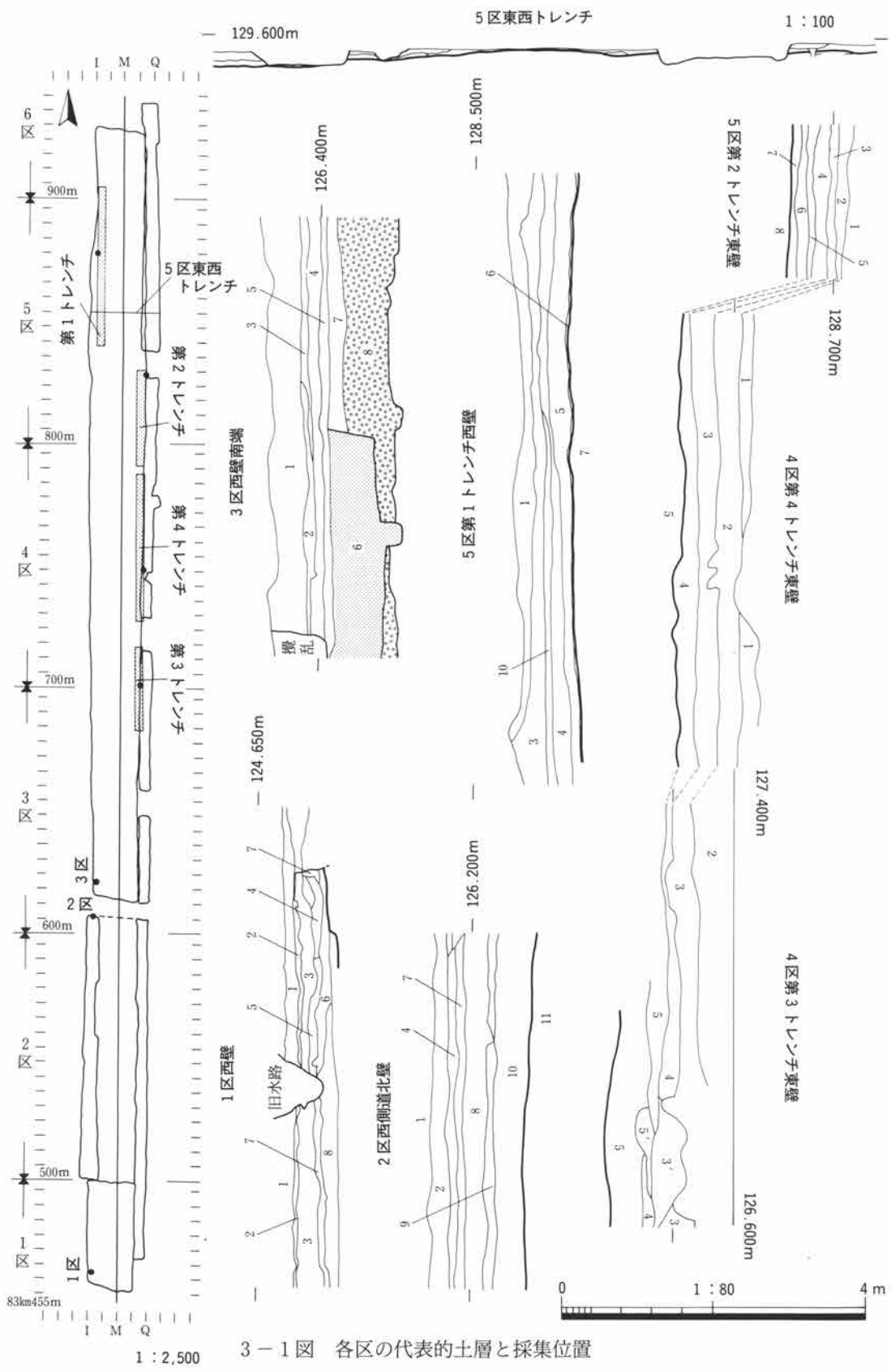
注

- 1 『100万分の1日本地質図-日本地質アトラス（1982）-』第2刷 地質調査所 1987
- 2 日本鉄道建設公団原因に加筆。地質図読み取りの力不足のため、図を掲げるに止どめる。
- 3 『群馬町文化財地図』1：1万 群馬町 昭和56年
- 4 『保渡田III遺跡概報』群馬町教育委員会 昭和58年、『保渡田東遺跡』群馬町教育委員会 昭和61年、『群馬町の遺跡』群馬町教育委員会 昭和61年
- 5 『耕地図』は猿河川付近の南北線を境として測量図が分かれており、両図を合成しようとする、扇形の弧を接したようになってしまう。つまり、両図とも東西に離れたところに扇の要があって、一端を合わせると他端が離れる。これは測量上の系統的な誤差とみられる。掲載した図は歯車を合わせるように合成したもので、地図学上の常識を外れているかも知れないことを記しておく。作成年代不確定だが、昭和年代と推定される。
- 6 群馬町蔵。閲覧・複写の便宜を図っていただいた。記して感謝の意を表したい。
作成年代不明。同時保管の井出村（現在の群馬町井出）分が明治9年となっており、記載の仕方が類似していることから、同じころに作成されたものであろう。この図の上に、薄い和紙で区画整理後の図が挟まれていた。
- 7 堤ヶ岡村誌編纂委員会『堤ヶ岡村誌』昭和31（1956）。群馬県立文書館の御教示による。
- 8 群馬県立文書館蔵。閲覧・写真撮影の便宜を図っていただいた。記して感謝の意を表したい。
作成年代は未確定。“地租改正図”よりも前に作成されている。
- 9 『三ッ寺I遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988

第3章 概 要

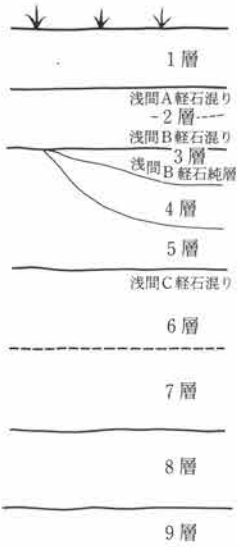


3区から北を望む 中央右手から下へ向かう変色部は3区1号溝。周辺の住居・溝を切っている。



3-1図 各区の代表的土層と採集位置

第1節 土 層



3-2図 基本土層

1 基本土層

本遺跡の調査区は南北約480mにわたっているため、それぞれの調査区における土層の堆積状況は細かい点で一致しない部分がある。しかし、全体の様相はおおむね同様と認められるため、ここでは各区の堆積状態をまとめた、基本的な土層を示す。基準としたのは2区西側道の土層である。なお、各区で採集した土層は3-1図の通りである。

1層 灰褐色土

表土。2区ではこの層の上に整地用埋土がのる。粘性強く、浅間A軽石を少量含む。

2層 灰褐色土～茶褐色土

上位に浅間A軽石、下位に浅間B軽石を含む。鉄分多く、粘性強い。3区1号溝の切り込み面は、この層の直下。

各区土層

[1区西壁]

- 1 灰褐色土
- 2 灰色砂 (浅間B軽石純層)
- 3 灰茶褐色粘質土、B軽石混じり、鉄分、水田跡
- 4 黒色粘質土
- 5 灰褐色粘質土+黒色粘質土
- 6 灰褐色粘質土+FAbk、混じり
- 7 黄褐色土 (FA)
- 8 灰茶褐色粘質土+浅間C軽石

[2区西側道北壁]

- 1 客土 (盛り土45cm)
- 2 灰褐色土 (表土)、浅間A軽石を含む、粘性強い
- 4 茶褐色土、浅間A軽石少量と鉄分多く含む、粘性強い
- 7 暗茶褐色土、浅間B軽石・鉄分を少量含む
- 8 暗褐色土、浅間C軽石・鉄分を少量含む
- 9 黒色土、浅間C軽石を多く含む
- 10 黒色土、粘性強い
- 11 黄褐色土、ローム層

[3区西壁南端]

- 1 表土、浅間B軽石を全体に含む
- 2 浅間B軽石純層
- 3 褐色土 (FAの二次堆積か?) + 浅間B軽石
- 4 褐色土、粘質、FAの二次堆積か?
- 5 黄褐色土、粘質、FAの二次堆積か?
- 6 48住覆土
- 7 暗褐色土 (浅間C軽石を全体に含む)
- 8 47住覆土

[5区東西トレンチ]

- 1 黄褐色土、ローム

[5区第1トレンチ]

- 1 ローム、茶褐色土、ブロック状、砂質、小石を含む
- 3 ローム+砂、茶褐色、ザラザラ
- 4 白褐色土、砂質
- 5 4+黄白色粘質土
- 6 黒色粘質土、ベトベト
- 7 灰色砂、小石を含む
- 10 淡褐色砂

[5区第2～4トレンチ]

- 1 青灰色、砂質 (硬い)
- 2 黄褐色粘質土、鉄分
- 3 黄褐色粘質土+ブロック状砂質土 (硬い)
- 4 白色粘質土、鉄分を含む
- 5 白色粘質土、鉄分が少ない
- 6 黒色粘質土、軽石を含む
- 7 2層+6層
- 8 黄色粘質土

3層 灰褐色土

砂質土。浅間B軽石の純層。1区・6区では、この層の直下に水田を検出した。

4層 灰茶褐色土

水田耕作土。遺構確認面①。粘質土。1区・6区で確認。2～5区では検出なし。

5層 黄褐色土～茶褐色土～暗褐色土

浅間B軽石を含む。遺構確認面②。この層で平安時代住居を検出した。4～5区のA類溝はこの面で検出した。

6層 黒色土

浅間C軽石を含む。遺構確認面③。粘質土。2～5区で確認。この層で古墳時代住居・畠を検出した。

7層 黒色土

軽石を含まない。粘質土。クロボク。6～7層は漸移的に変化し、分離できないところもある。縄文時代住居はこの層の中（古墳時代住居の掘形調査）で検出した。

8層 黄褐色土

ローム層。遺構確認面④。砂質土。再堆積ローム。この層で縄文時代土坑を検出した。

9層 褐色土～黄褐色土

砂質土。

2 土 壤 分 析

調査中に群馬大学新井房夫先生が来跡され、土壌の分析をお願いした。以下、聞き書きによる結果を記す。

表3-1 土壌分析

サンプル番号	外 観	採 集 位 置	所 見
1	灰黄白色粘質土	5区42住カマド内粘土	FA混じり、C混じり、細かい軽石。
2	灰黒色土+軽石	1区10住下	上部ロームの特徴をもつ、浅間の系統である。
3	灰白色土	1区10住下	上部ロームの特徴をもつ、水流の影響を受けて淘汰されたもの、粒が揃っている。
4	灰褐色砂利	1区10住下	上部ロームの特徴をもつ、上部ロームが洗われ流されて堆積したもの。
5	灰色砂利	1区10住下	上部ロームの特徴をもつ、上部ロームが洗われ流されて堆積したもの。
6	黄色粘質土	1区10住下	上部ローム。
7	灰白色粘質土+ 灰黒色粘質土	1区10住下	上部ローム。

昭和56（1981）年7月23日サンプリング、9月24日聞き書き

第2節 各区の概要

1～6区で検出した遺構については、『資料編1・2』の各区の概要で報告しているが、ここでは各区の特徴的な遺構について記し、ポイントをおさえておきたい。各区で検出した遺構数量は、表3-2の通りである。

表3-2 三ッ寺II遺跡検出遺構

区	遺 構	時						代			欠 番	小 計
		縄 文	弥 生	古 墳				奈 良	平 安	不 明		
				前 期	中 期	後 期	(古)*1					
1	住居	0	0	0	1	20	2	(1)*2	13	—	—	37
	井戸							1				1
	溝						5			15		20
	土坑 水田						12			9	2	23
								1				1
2	住居	0	1	1	6	37	15	—	—	—	—	60
	溝						7					7
	土坑						6				2	8
	畠						2					2*3
3	住居	1	1	0	13	29	17	3*4	10*5	0*6	2*7	76
	掘立柱建物								1			1
	ピット群	1?					1?					2?
	井戸						1		1	6		8
	溝						6			6*8	4	16
	土坑	9					2		2	12+4*9	13	42
	竪穴遺構									1		1
4	住居	3	0	0	11	58	22	13*10	29*11	0*12	21*13	157
	掘立柱建物						2		1			3
	ピット群									1		1
	溝									22+6	8	36
	土坑 畠	19					32			140	43+3	237
						2		1			3	
5	住居	0	0	0	20	20	4	5*4	19	—	1*14	69
	ピット群									3		3
	溝						3			88		91
	土坑									42	5	47
6	住居	0	0	0	0	0	1	0	0	0	—	1
	溝									1		1
	土坑								1	1		2
	水田									1*15		1
小 計	33	2	1	51	167	139	22	77	361	104	957	

*1 時期分離できない；*2 古墳～奈良と推定したもの；*3 同一地点で重複があるため2面とした；*4 古墳～奈良と推定したもの2軒を含む；*5 奈良～平安と推定したもの1軒を含む；*6 出土遺物なし=35住(弥～古)，60A住(古～平)；*7 65住=34住，67住=欠番；*8 1溝=中世館跡(室町)?，16溝=2溝；*9 4=2(土坑)+2(墓)=中世；*10 古墳～奈良と推定したもの8軒を含む；*11 奈良～平安と推定したもの1軒を含む；*12 152住=古墳～平安；*13 52住=111住，83住=欠番，87～100住=欠番，108住=24住，115住=109住，123住=欠番，133住=欠番，140住=欠番；*14 18住=欠番；*15 一面5枚

1区

上層では浅間B軽石下の水田一面を検出した。この水田跡は、三ッ寺I遺跡北側で検出した水田跡と一連の遺構と考えられる。2区寄りにやや高くなる場所では、略南西-北東方向の溝と、略東西方向の溝とを検出している。水田跡と関連するものかどうか不明。下層では本遺跡最大の規模を示す22号住居がある。壁溝内に小ピットが巡り、カマドを北東辺に設置する。2区寄りの西半では重複が激しく、住居プランが調査区西側に広がることと湧水のため、十分な調査を行うことができなかった。キロ程83km470m付近を境として、北東-南西方向のラインが住居を営む南端となるように見える。北西側の高まりに、住居の分布が広がるとみられる。

2区

新幹線中軸線の両側12m分は、未調査である。西側道の南寄り、キロ程83km518m付近では、榛名二ツ岳FAで埋没した畠跡を検出している。この畠跡は、周辺の住居によって切られており、住居よりも古いことが確認されている。本線敷き部分にも、同様の遺構が存在したと推定される。

東側道中央部の58号住居は弥生後期（樽式土器）のものである。壺・甕等を出土し、床面中央部に達する浅間C軽石の純層が自然堆積している。

3区

上層では、新幹線中軸線にほぼ沿って、南北に調査区を貫く1号溝（大溝）を検出している。1号溝は3区北端付近で直角に東側へ曲がり、



▲床面の精査（南西から） 1区22号住居は一辺8mの大型住居で、本遺跡最大の規模である。



▲2区西側道掘形全景（北から）
2区の本線敷は未調査で、東西の側道敷は二次調査で発掘した。



▲3区下層の調査（北から） 古墳時代面の遺構を調査中。手前は縄文時代前期住居の地割れを掘り下げている。

調査区外へ延びている。南端はキロ程83km615m付近で東側へ曲がる部分を検出しており、南北80m前後の規模となる。五輪塔や中世の土器を出土し、中世の館址とみられる。ほかに、中世とみられる井戸・土坑・溝を検出している。

下層では多数の住居と土坑を検出している。縄文前期(57号)・弥生後期(30号)・古墳前期(50号)の住居があり、そのほかは古墳後期～平安時代のものである。30号住居では、床面からわずかに浮いた状態で、黒色土混じりの浅間C軽石が自然堆積していた。

3区と4区との境付近では、縄文時代の土坑を幾つか検出している。また、同じところで、北東-南西方向の走行を示す地割れの跡を検出し、この地割れ付近を境として、南東部が低くなり、北側の4区に向かってやや高くなる。この北東-南西の方向線は、1区で検出した水田跡との境をなす線と同じ方向である。

4区

本遺跡中、最も遺構数の多い区で、上層では長短・広狭の溝群と、多数の土坑群を検出した。溝・土坑の用途等は不明であるが、溝の一部は畝の可能性もある。これらの遺構の下位からは、奈良～平安時代の住居を検出している。なかでも北端に位置する1号住居は、北東隅にカマドを設置し、煙道が対角線方向に延びる平安時代の住居である。鉄製鎌(柄部木質遺存)・円筒埴輪のほか、特殊な円筒状の土製品を出土した。この土製品はカマドの構造材と推定されるが、類例が少なく、断定できない。

下層では古墳時代後期の住居が密集して検出された。3区・5区に比較して、重複が著しく、遺構の切り合い関係とプランの検出に時間を要し、調査は難行した。155号住居では、住居確認



▲3区51号住居の地割れ(北東から)
住居の対角線に平行して階段状に割れていた。落ち込みは住居内土坑と柱穴。



▲4～5区の奈良・平安時代面の調査
(北から) 橋脚は2区の本線敷部分。
3～5区は南北300mの区間。



▲4区下層遺構の掘形調査(南から)
4区北半の最も重複の激しい部分。建て替え痕跡や床溝の大半は掘形調査で検出。

面でF Aを含んだ畠跡を検出し、カマドは地割れによってズレを生じていた。畠跡と地割れとの重複関係は未確認であった。同じく、東側道の146号住居でも、確認面でF Aを含んだ畠跡を検出している。14号住居は南側に半円形の張出部をもち、数回の建て替えを行った住居で、4区なかでは特大である。

縄文前期の住居は78・86・153号の3軒を検出している。86号住居は比較的遺物の遺存が良好である。

5区

上層では多数の溝を検出した。C1号溝は現在の道路の下位に位置し、平安時代以降のものである。B2号溝は5区なかを北東-南西の方向に走り、古墳時代後期の住居よりも古い。この溝の走行方位は、1区・3区で確認した高まりの走行と同じであり、さらに、現状で読み取れる6区北側～5区西側の水路の方向とほぼ同様である。101号溝は東側道で検出した南北方向の溝で、覆土に多量のF Pを含んでいた。この溝のキロ程83km860m付近には略方形に広がる部分があり、その南北両側にはピット群が確認されている。

下層で検出した27号住居は、遺物の遺存が良好で、セット関係を示す資料を提供する。5区では奈良・平安時代の住居がやや少ない。

6区

住居1軒と溝・土坑、及び浅間B軽石下の水田跡を検出している。1号住居は古墳時代としか限定できないが、本遺跡検出住居の北限を示すものである。西側は低地となっているため、住居群は東側に分布するとみられる。



▲ 5区奈良・平安時代面の掘削と遺構確認（北から） 住居の重複は4区よりも少ない。左手は未着手の東側道敷。



▲ 5区27号住居カマドの調査（南から） 遺物の遺存状態は最も良好であった。



▲ 6区B軽石下水田の清掃（南から） 調査区の北西端に位置する。右上から左下にかけて浅い谷が入る。

第3節 時代別概要

ここでは各区を通して、時代別に遺構の概要を記す。本遺跡の遺構は、縄文・弥生・古墳・奈良平安・中世の各時代にわたって検出されているが、主体となるのは古墳時代である。検出遺構表で「不明」としたものは、出土遺物・重複関係等から、上限のみ限定できるもの、あるいは全く限定できないものを含んでいる。これらのうち、浅間B軽石（テフラ）を含む層の上位で検出したものの多くは中世～現代に所属するとも考えられるが、積極的な根拠を示せるものはごく一部である。以下、時代別に記す。

縄文時代

住居は3区57号、4区78・86・153号の4軒を検出しており、いずれも諸磯式・黒浜式頃の前期の所産と見られる。そのほか、3区-4区の境としたキロ程83km700mを中心として、縄文時代の土坑とみられる3区21～32号、4区141・143・144・155号土坑があり、それらの時期は住居とほぼ同じである。4区224号土坑はキロ程83km760mのLライン付近にあり、1417の深鉢を出土した。

弥生時代

住居は2区58号、3区30号の2軒である。両者とも「樽式」土器を出土しており、弥生後期とみられるが、覆土下位に自然堆積した浅間C軽石の様相が若干異なる。

古墳時代

5区B2号溝は5区の住居よりも古く、微高地の縁辺と平行しており、注目される溝である。確認面（浅間C軽石を含む黒色土）から推定して、B2号溝は弥生時代後期をさかのぼらないとみられる。また、本溝の下限は、重複する36号住居との関係から、古墳時代中期である。出土遺物は手づくね土器2個体のみであるため、集落を取り巻く「環濠」であった可能性を否定できない。しかし、調査範囲内に限定すれば、弥生後期～古墳前期の住居数とその分布状況からみて、古墳時代中期に掘り込まれた可能性が高い。東側道で検出した南北の走行を示す101号溝は、覆土に榛名山二ツ岳FPを含み、両岸に小ピットが分布する。両溝と本遺跡の集落の展開とは、密接に関連するとみられる。

2区50号住居は、本遺跡唯一の前期とみられる住居で、東側道のキロ程83km600m付近で検出した。付近の住居と重複し、50→51→52号の順に新しい。50号は浅間C軽石を多量に含む黒色土で埋まっていた。器台（0268・0269）・甕（0270）を出土している。

中期とした住居は、5世紀後半～末とみられる住居を指す（注1）。この時期の住居は6区を除いた1～5区で検出しているが、各区の検出住居数に占める割合では、5区での20軒（30%）が突出する。その他の区ではいずれも20%以下である。

後期の住居は圧倒的に多い。全376軒のうち165軒（44%）を占め、時期分離できなかった60軒を加えると225軒（60%）となり、検出住居数の半数を越える（注2）。後期以後、集落が継続して展開したことを窺わせる。

奈良平安時代

「奈良時代」とした住居数が少ないのは、分離できなかった古墳時代所属住居に、一部が含まれているためか。「分離できない」住居は出土遺物が小片であったことや、出土位置の確かな遺物がないためである。これらの住居は、古墳時代から連続的に営まれていたとも考えられる。

平安時代の住居は77軒（20%）を検出した。古墳時代の住居数に比較して、やや少ない。浅間B軽石（テフラ）の純層で埋没した水田跡を、1区南寄りと6区北側とで検出している。浅間B軽石の降下为天仁元年（1108年）とすれば、平安時代末頃に営まれていた水田と考えられる。調査区の南北両端で検出していることと、両端が現在も湧水の激しい低地であることを合わせると、新幹線用地は明らかに微高地を貫いており、両端の低地がこのころまでに水田化されたことが判る。

中世以降

検出遺構表では、「不明」の項で数えている。3区1号溝は、五輪塔の一部や青磁破片を出土し、遺構の形態から居館跡と考えられる。3区14号溝は東側道の調査で検出したもので、本線敷に近いところで直角に南へ曲がり、形状不明となる。土師質土器（0424）を出土した。

3区5号井戸は覆土に浅間B軽石を含み、中から土師器杯（0662）・軟質陶器鉢（0663）を出土した。2・3号土坑は人骨が出土していることから、墓と考えられる。古銭・土師質の土器が出土している。40・42号土坑も重複関係・出土遺物から中世のものと見られる。

4区－5区で検出した多数の土坑と、A類・B類の溝の大半は中世以降のものと推定されるが、明確な根拠をもたない。5区C1号溝は現在の道路下で検出したもので、平安時代の21号住居を破壊して掘り込まれており、中世以降と推定される。出土遺物の大半は、周辺からの流れ込みである。（関）

注

- 1 「資料編」での略半世紀の区分のうち、5世紀代に限って「5世紀末」としたのは、筆者の力不足に起因する。一貫した時期区分とするためには「5世紀後半」とすべきであろうが、ここでは保留しておきたい。
- 2 「古墳時代後期」には、7世紀代のものを含む。



遺跡地から西方に見える浅間山（1981年）

第4章 全体図



4区から南を望む 著しい重複を示す住居群。中央奥は3班が並行して調査中の4区～3区。

縄文 奈良 中世
弥生 古墳 平安 不明

				940 m
20	40	60	80	912 m
6 区				929 m
19	39	59	79	901 m
				903 m
				18
				877 m
				5 区
17	37	57	77	849 m
				852 m
				16
				827 m
				15
				799 m
				14
				774 m
				4 区
13	33	53	73	746 m
				749 m
				12
				727 m
				11
				703 m
				10
				677 m
				9
				652 m
				3 区
8	28	48	68	624 m
				627 m
				7
				602 m
				6
				577 m
				5
				552 m
				2 区
4	24	44	64	524 m
				528 m
				3
				506 m
				2
				483 m
				1 区
1	21	41	61	455 m
				454 m

M
ライン 4-1 図 遺構全体図索引

4章の前半は遺構の重複関係図、後半は検出遺構の時期別全体図を掲載している。

1 遺構重複関係図

すべて《旧→新》の順に新しい。

- 1 区……………43頁
- 2 区……………44頁
- 3 区……………45頁
- 4 区……………48頁
- 5 区……………52頁
- 6 区……………54頁

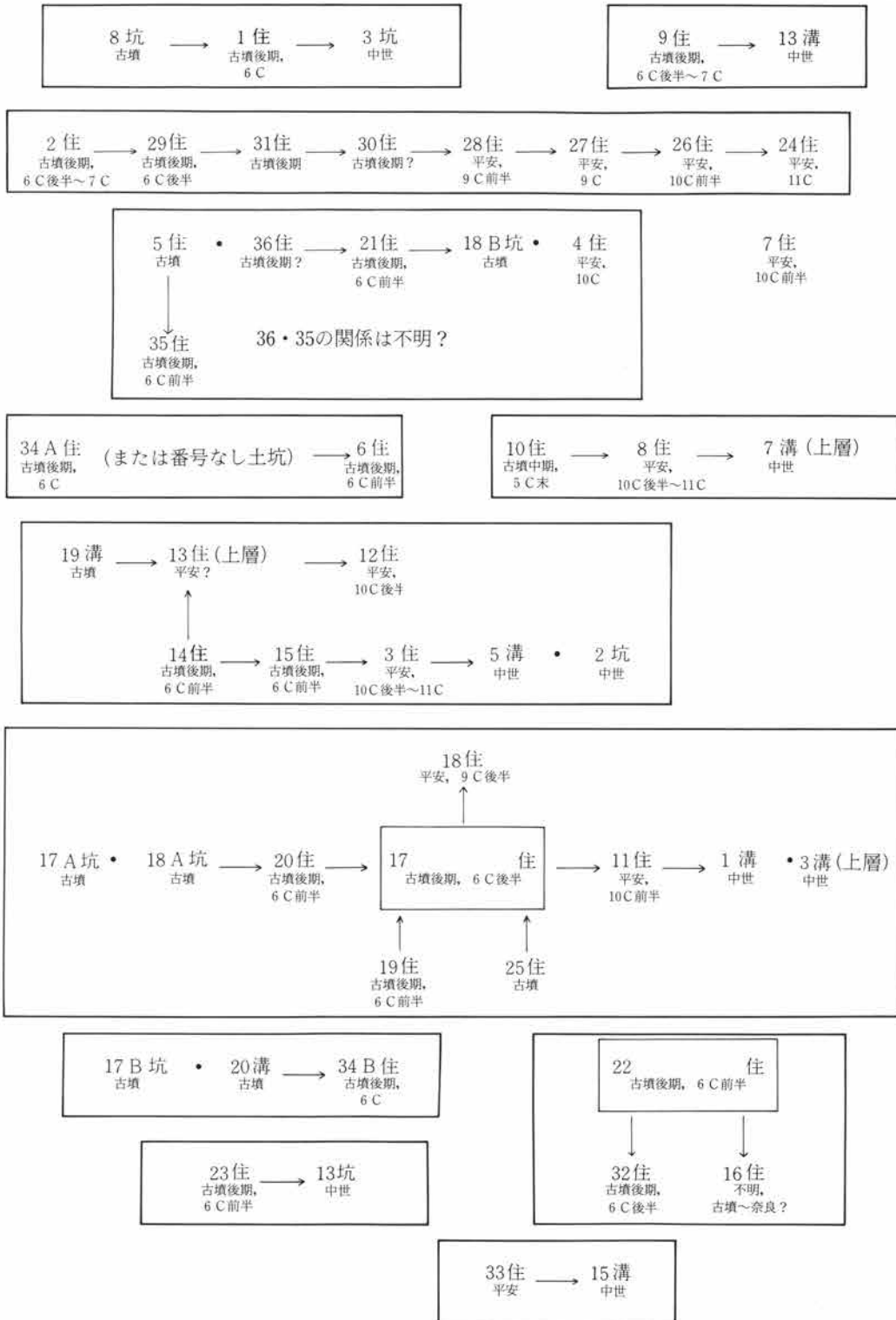
2 時期別遺構全体図

- ①右手が磁北である。
- ②各頁とも左右は29m分、前後の頁に重なりがある。
- ③遺構図の上方は重複関係、下方は出土遺物番号を遺構ごとに示す。
- ④『資料編1・2』の個別遺構の記述から探す場合は、キロ程・ライン・所属時期を読み取る。
- ④「弥生～古墳」の住居は「古墳時代」の図に、「古墳～奈良」の住居は「奈良・平安時代」の図に掲載する。
- ⑤各時期とも20頁構成

- 縄文時代・弥生時代……………55～74頁
- 古墳時代……………75～94頁
- 奈良・平安時代……………95～114頁
- 中世以降・不明……………115～134頁

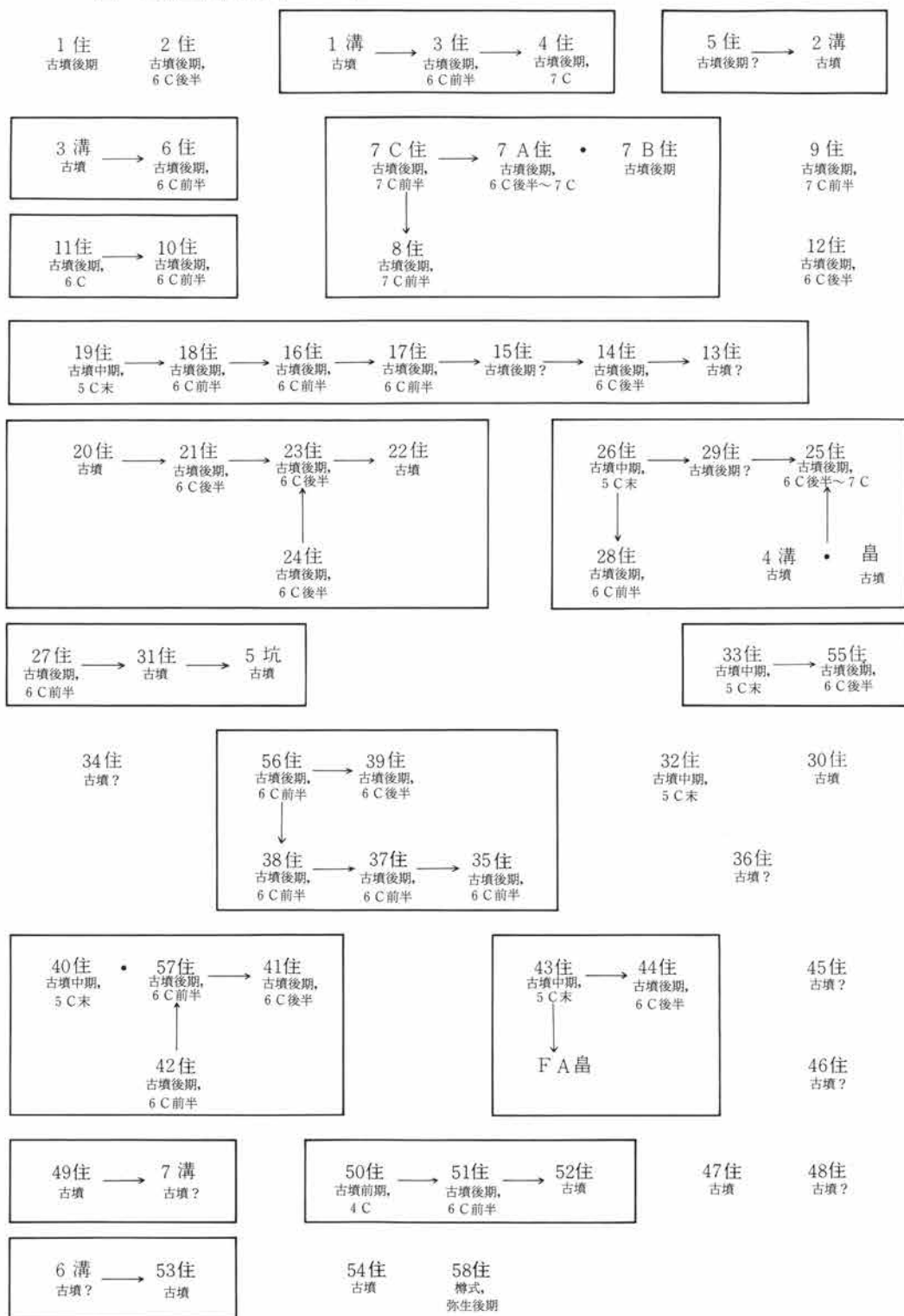
4-2図 遺構重複関係図1・1区

〔旧→新〕



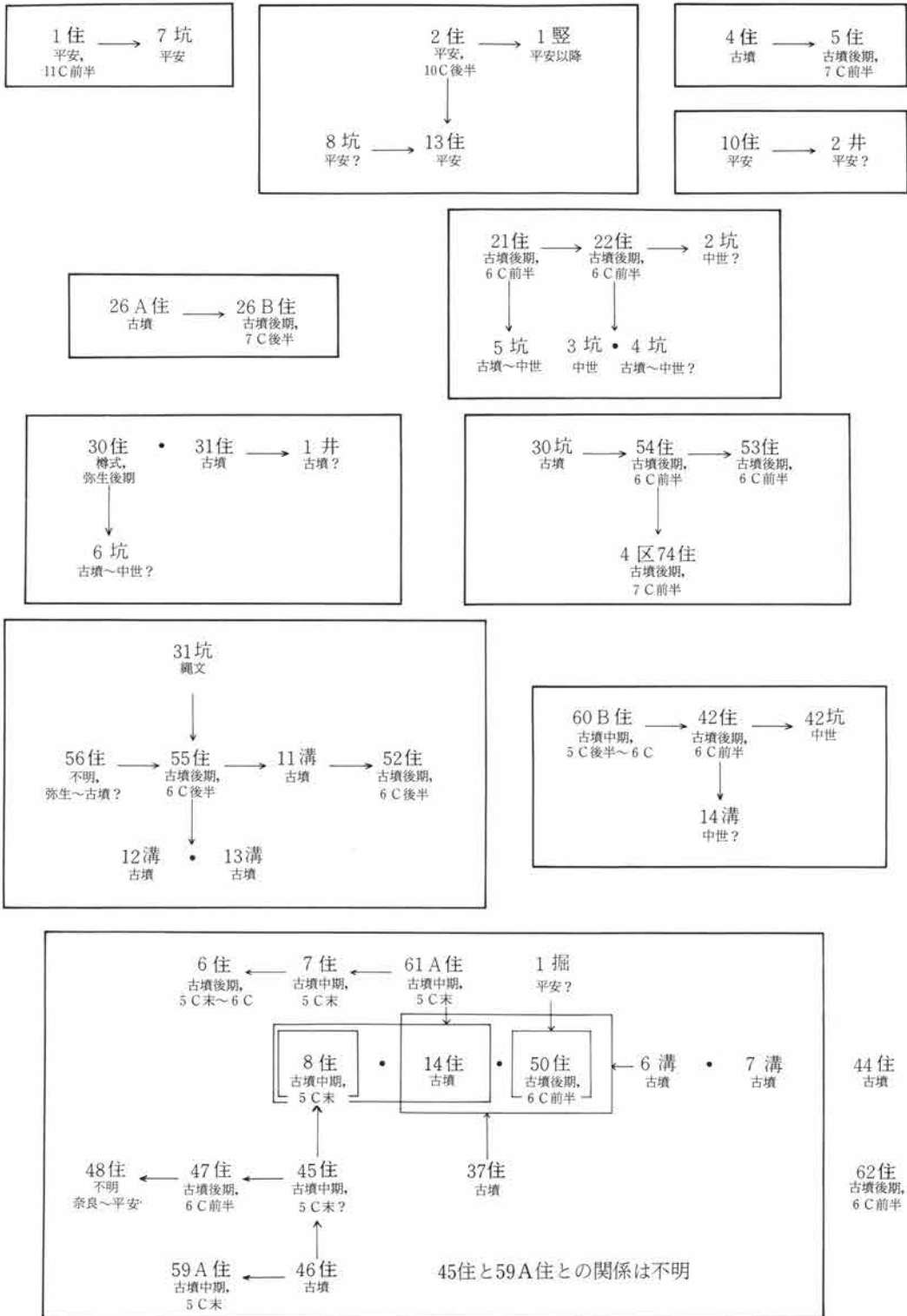
4-3図 遺構重複関係図2・2区

(旧→新)



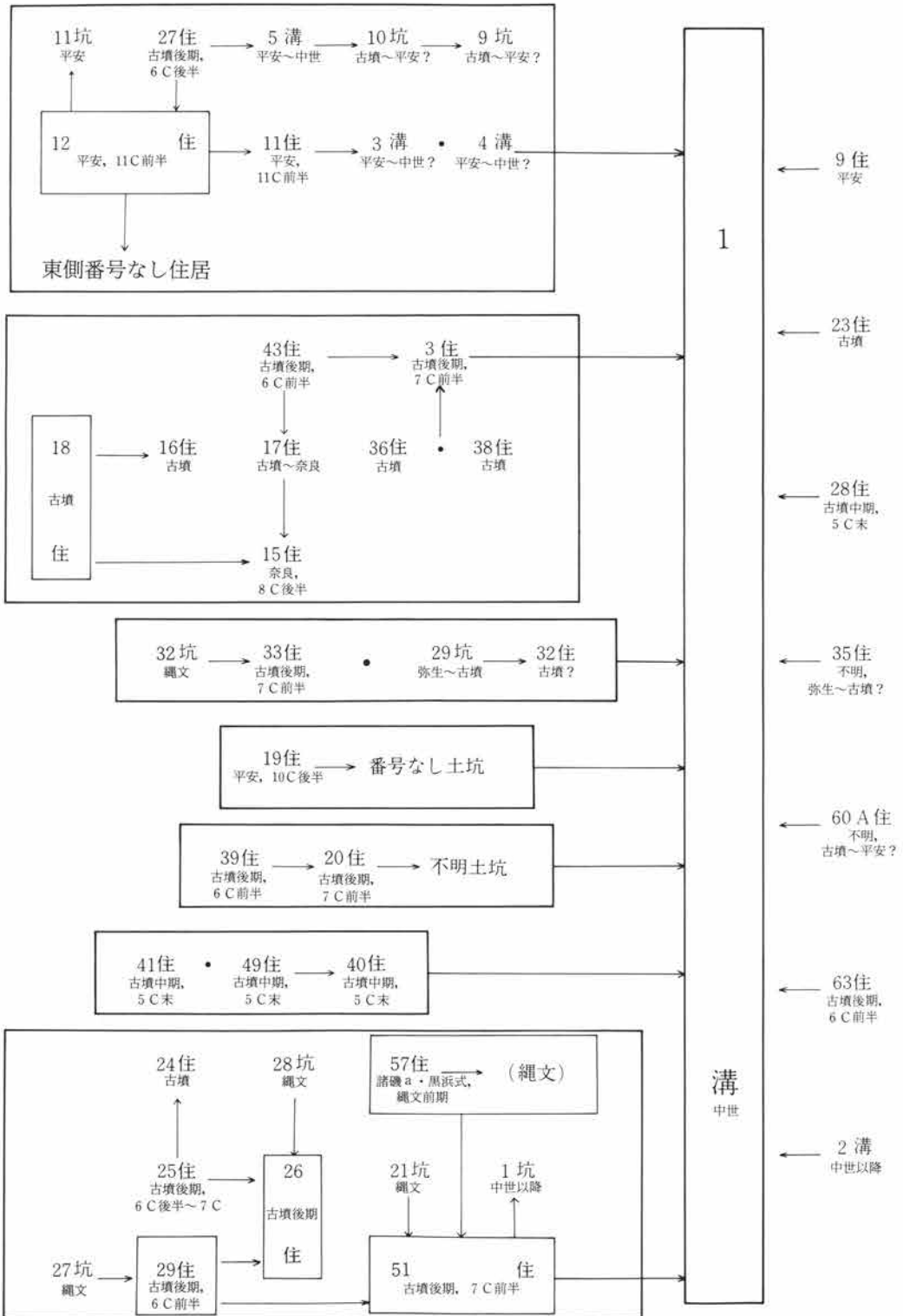
4-4図 遺構重複関係図3・3区1

[旧→新]



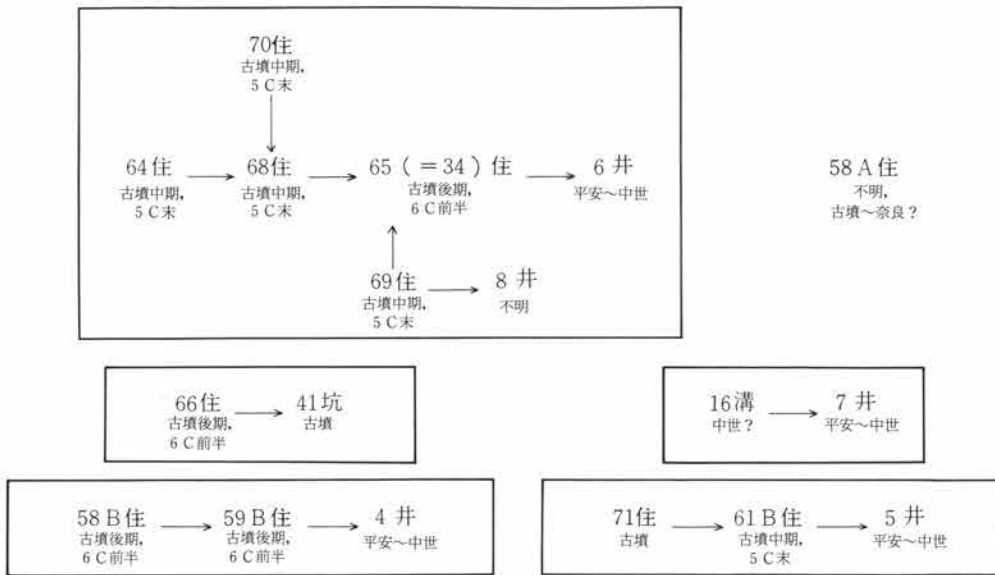
4-5図 遺構重複関係図4・3区2

(旧→新)



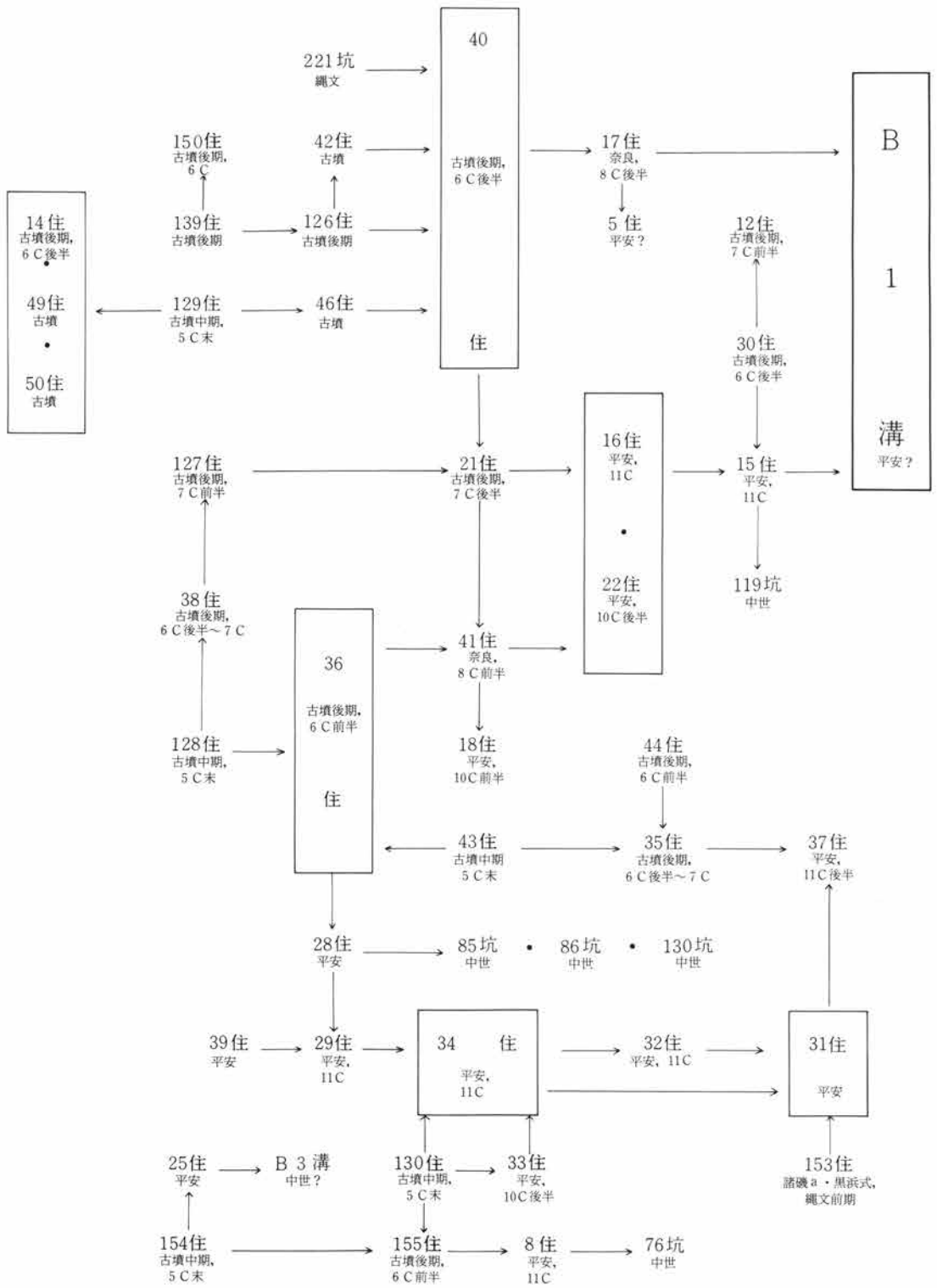
4-6 図 遺構重複関係図 5・3区3

〔旧→新〕



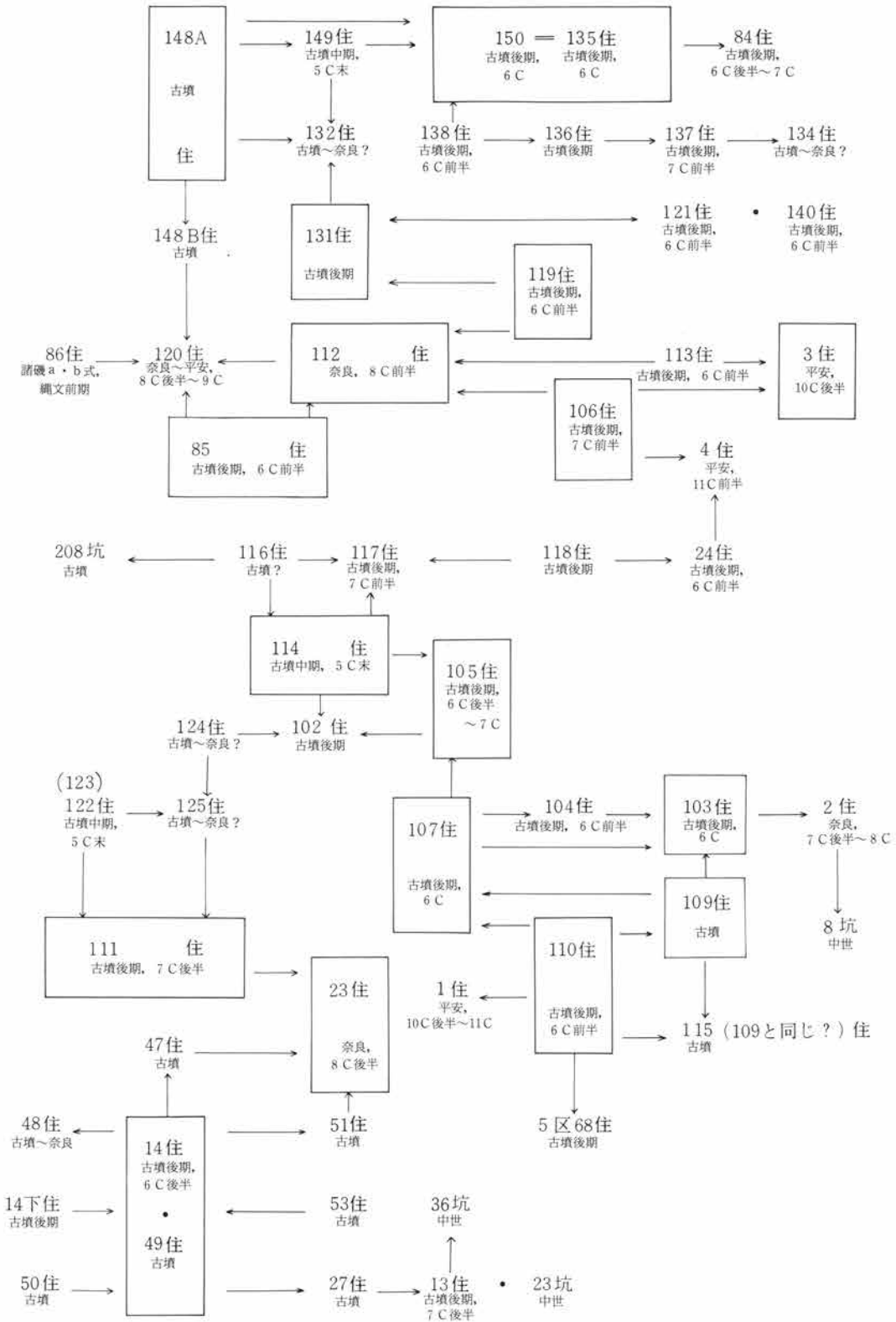
4-7図 遺構重複関係図6・4区1

[旧→新]



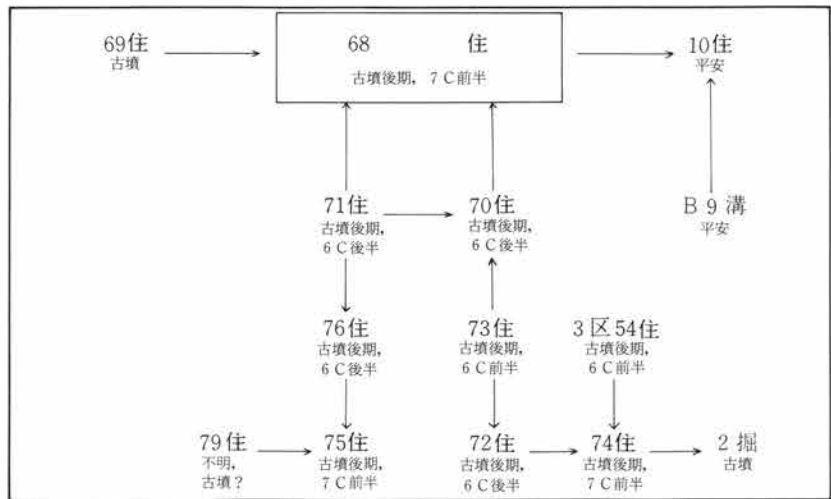
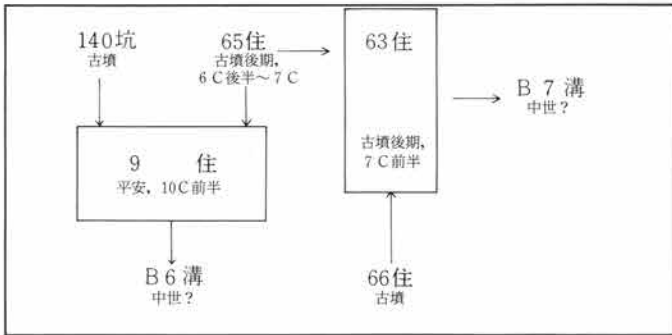
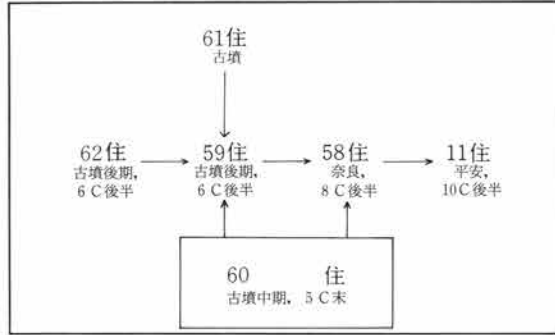
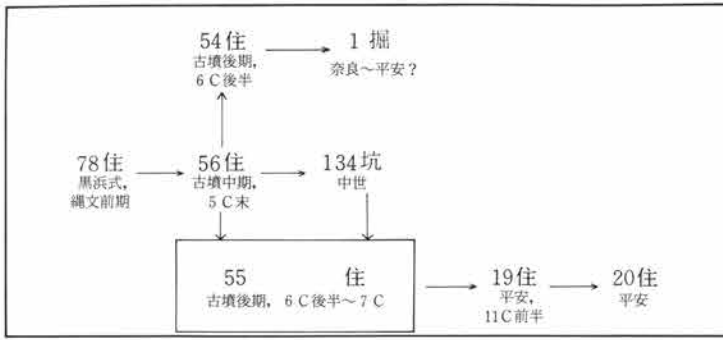
4-8図 遺構重複関係図7・4区2

(旧→新)



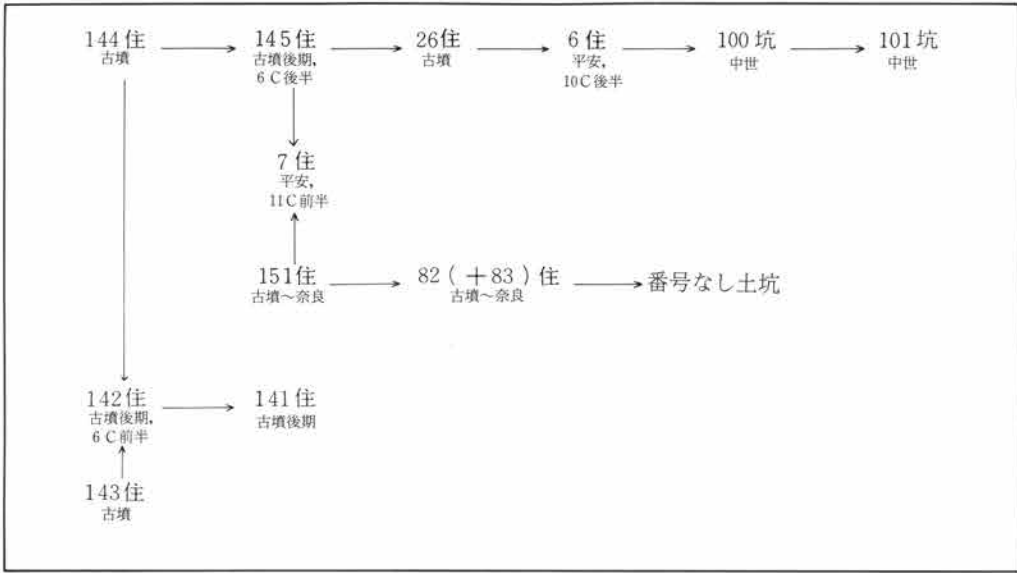
4-9 図 遺構重複関係図 8・4区3

(旧→新)



4-10図 遺構重複関係図9・4区4

[旧→新]



45住
平安,
11C後半

57住
古墳後期,
7C

64住
古墳

67住
古墳?

77住
古墳後期,
6C後半

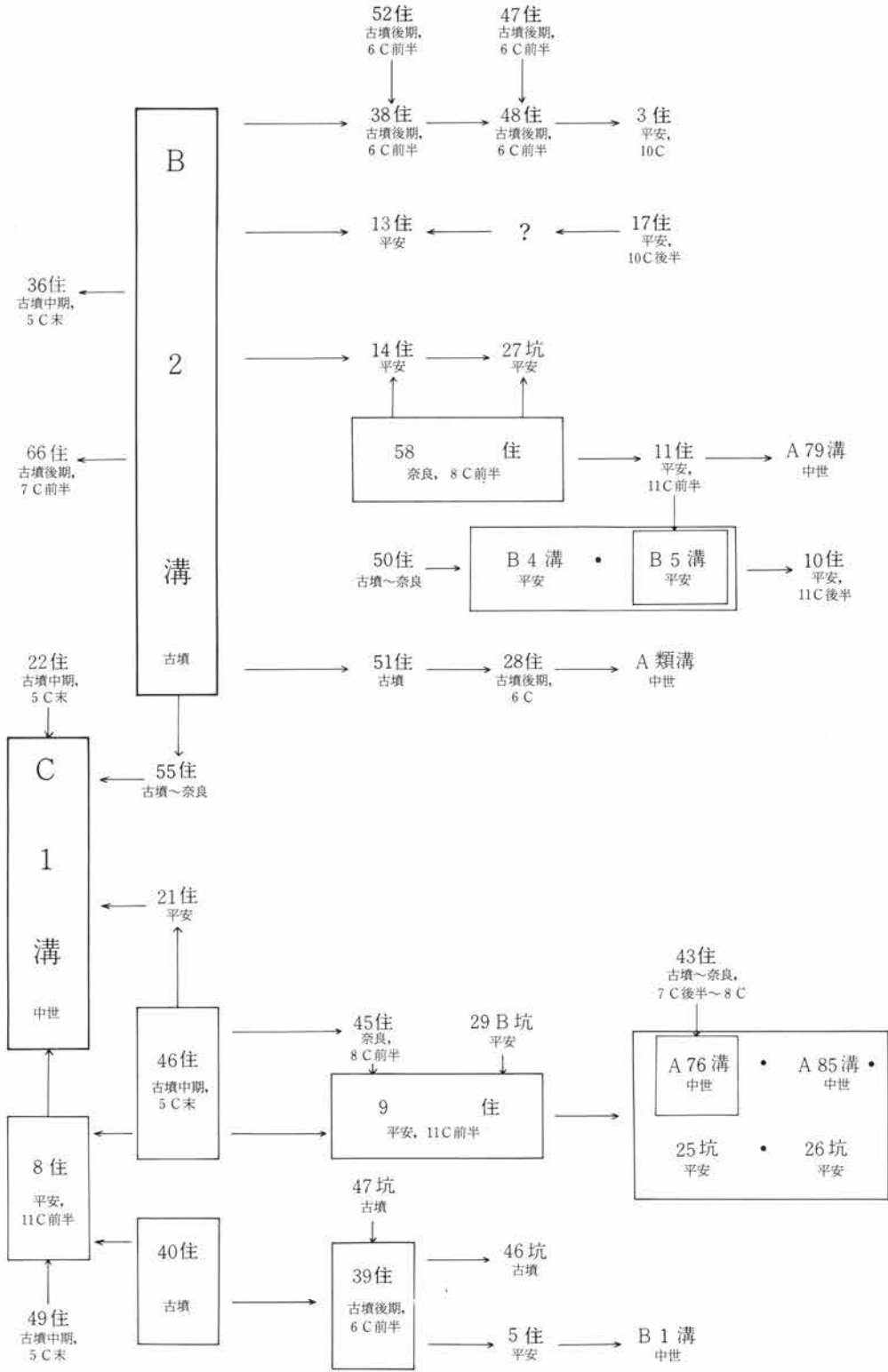
80住
古墳

81住
古墳後期,
6C後半

101住
古墳後期,
7C前半

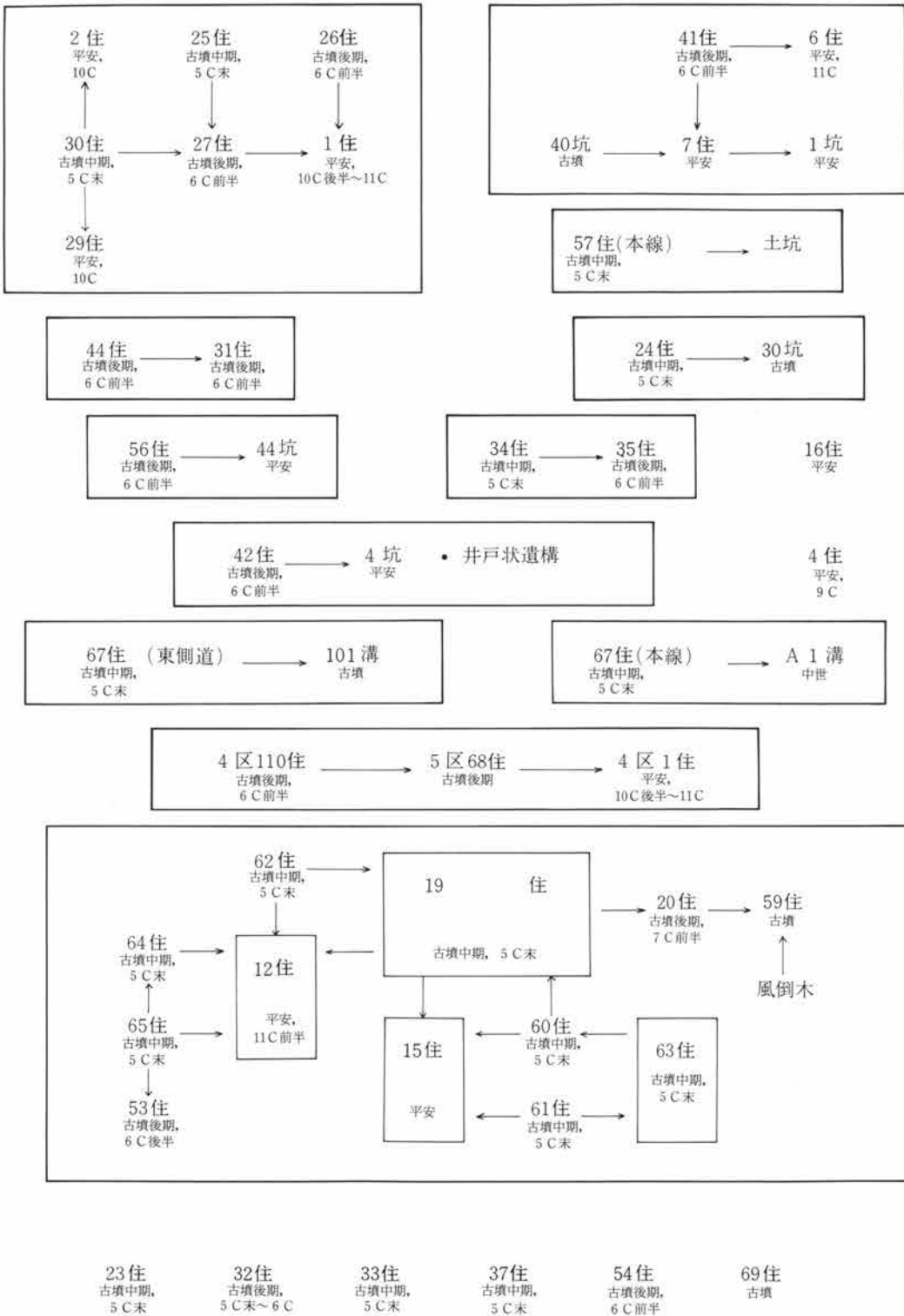
4-11図 遺構重複関係図10・5区1

[旧→新]



4-12図 遺構重複関係図11・5区2

〔旧→新〕



4-13図 遺構重複関係図12・6区

[旧→新]

B 1 溝 → 2 坑
不明 不明

1 住
古墳

4-14図 全体図の表現

◎遺構メモ

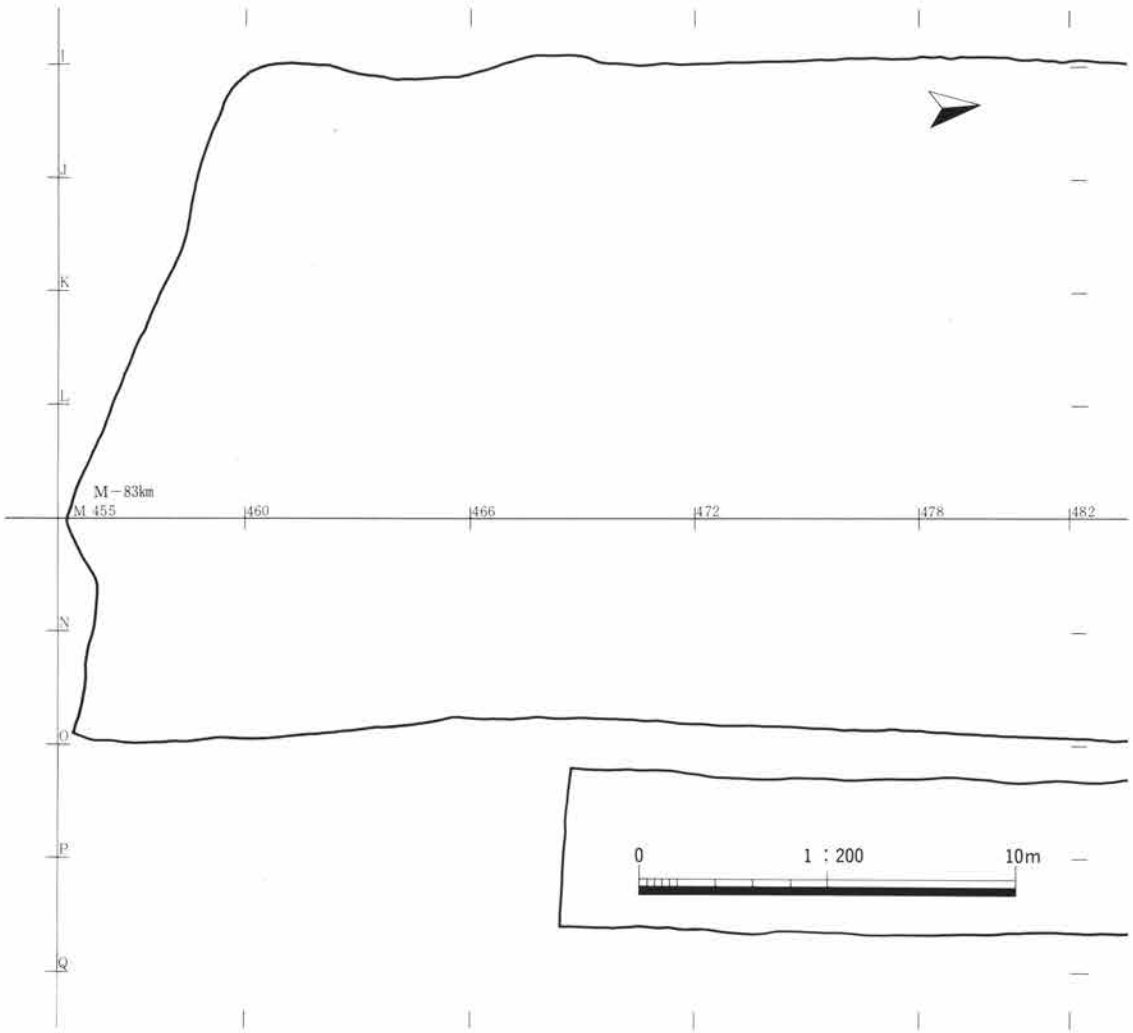
- ◎遺構の前後関係〈旧→新〉
- ◎太字遺構は「資料編1・2」に個別図があることを示す。
- ◎全体図中央の線はMラインを示し、数字はキロ程を表す。

全体図

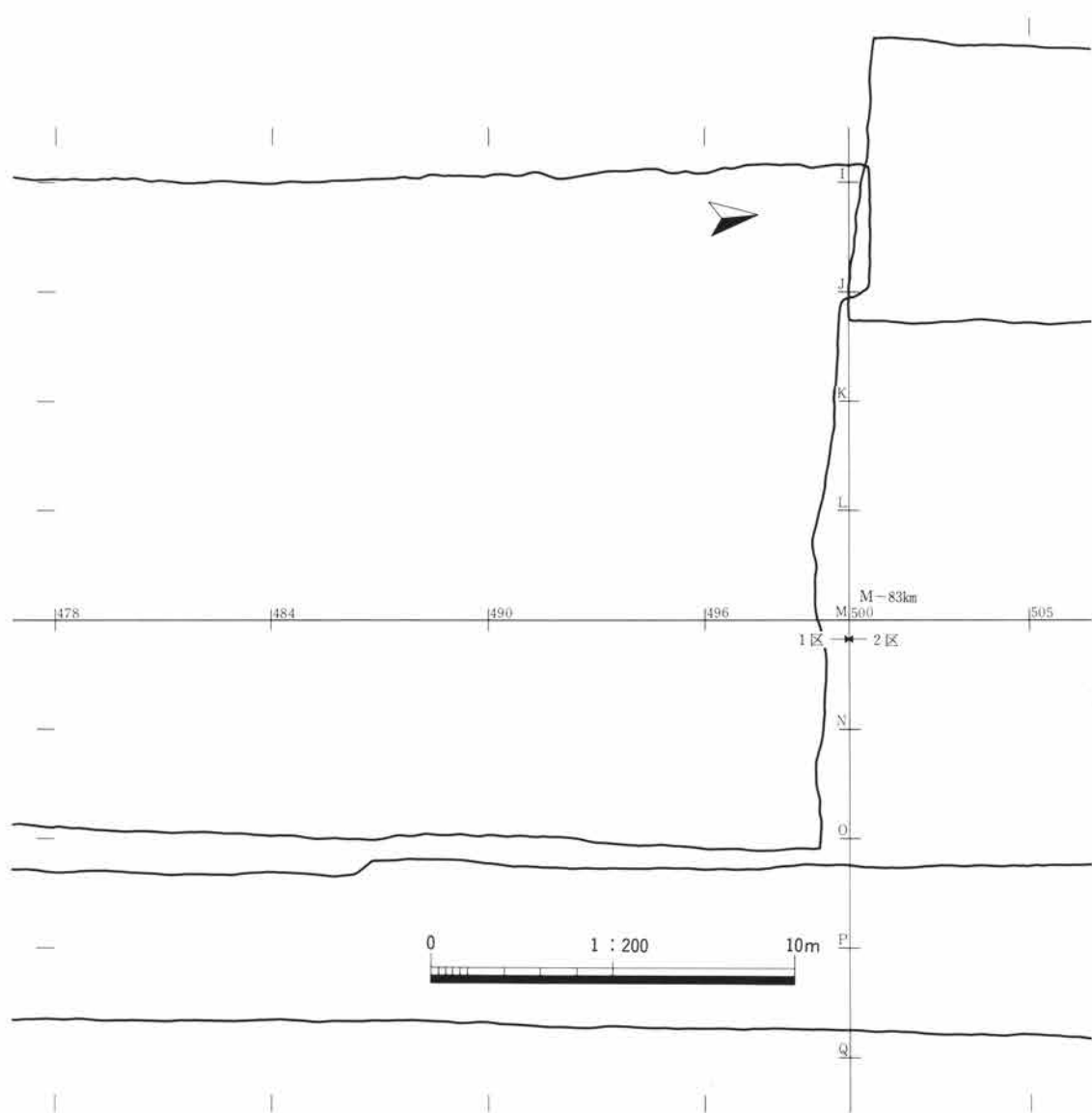
Mライン

◎遺物メモ

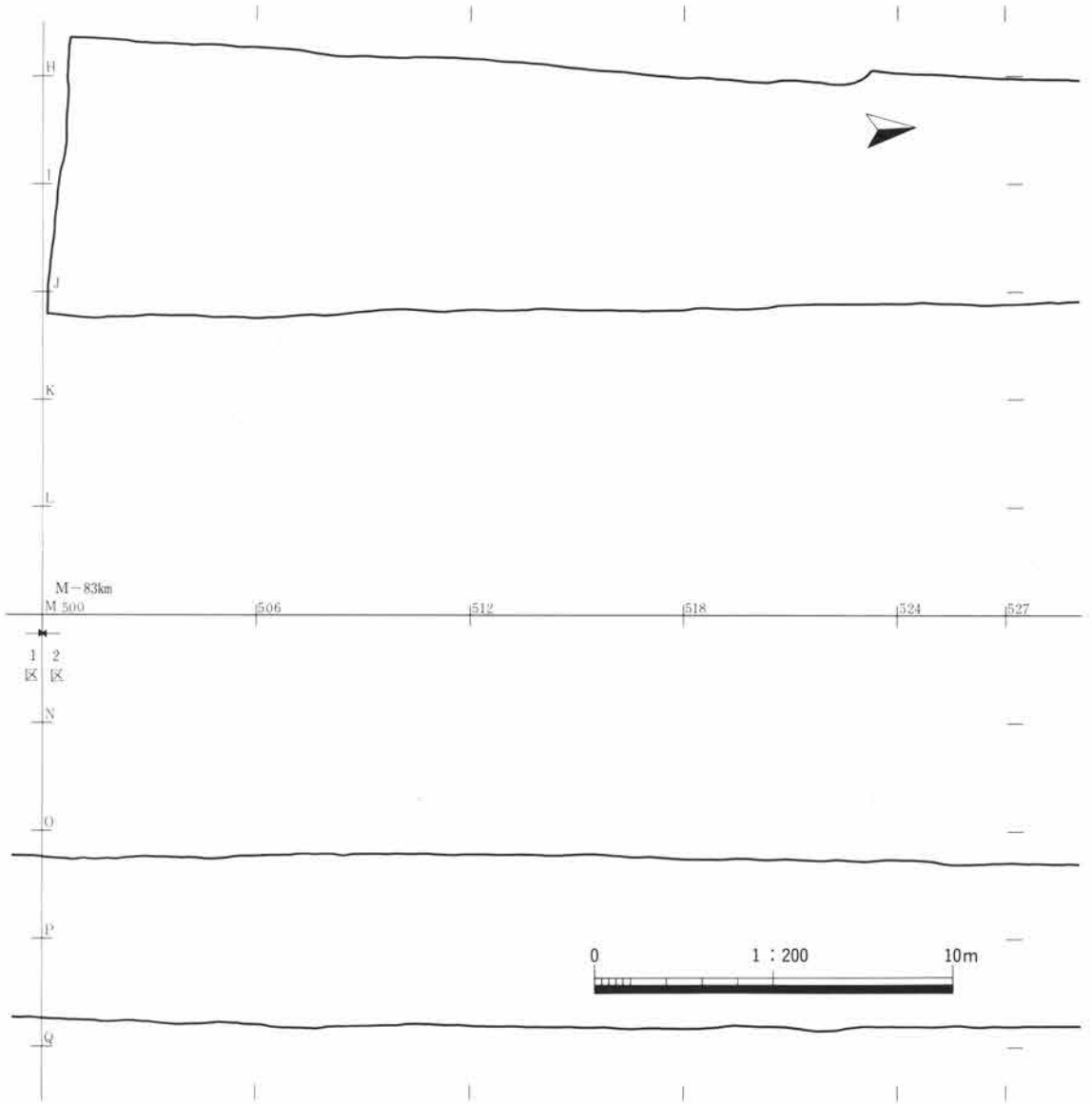
- ◎「住居番号：出土遺物番号」で示す。
- ◎遺物番号は遺構番号と無関係な通番である。
- ◎遺物の番号順索引は「本文編」（本書）の末尾に掲載した。



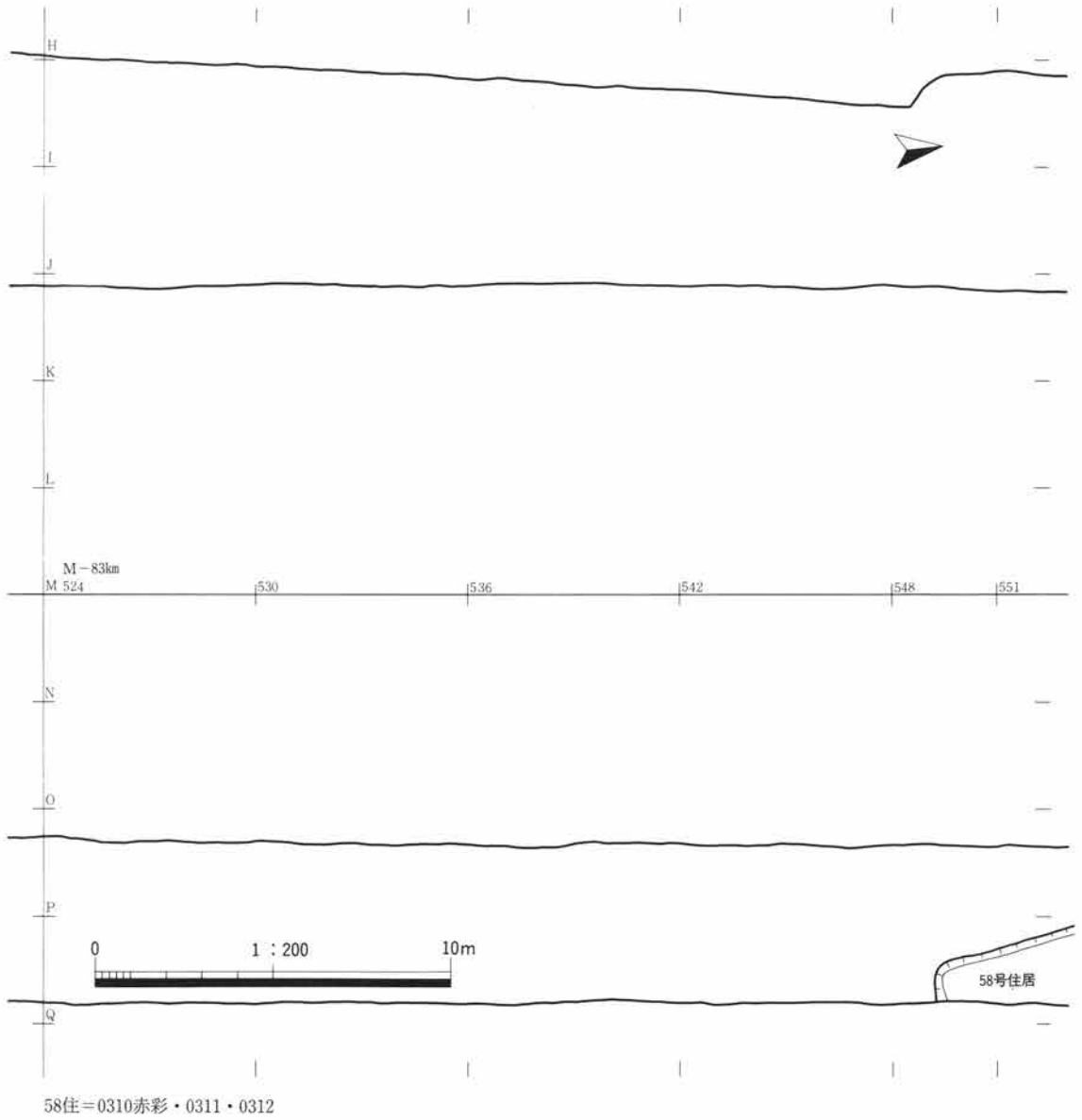
全体図1 縄文・弥生時代1・454~483m



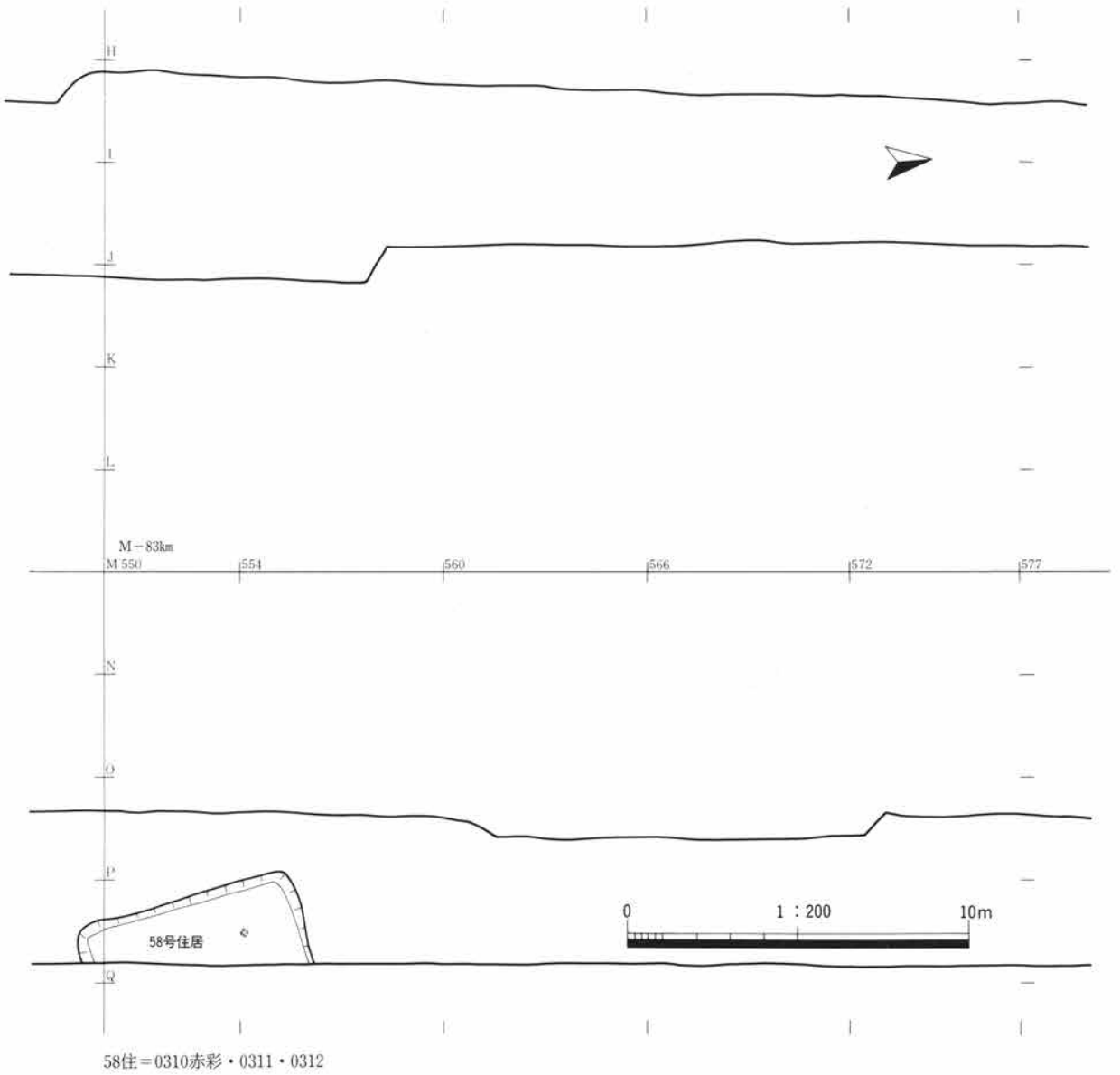
全体図2 縄文・弥生時代2・478~506m



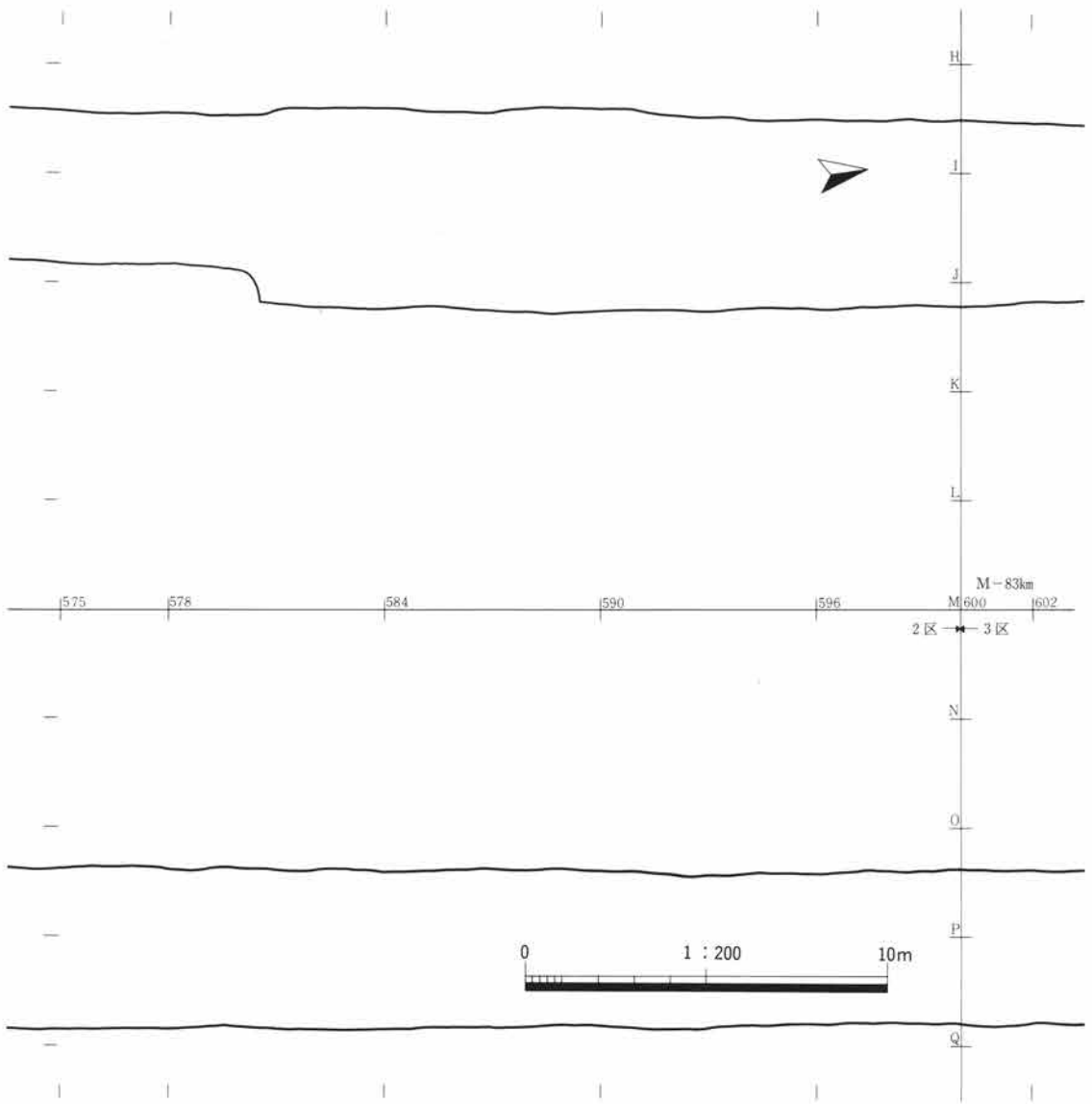
全体図3 縄文・弥生時代3・500~528m



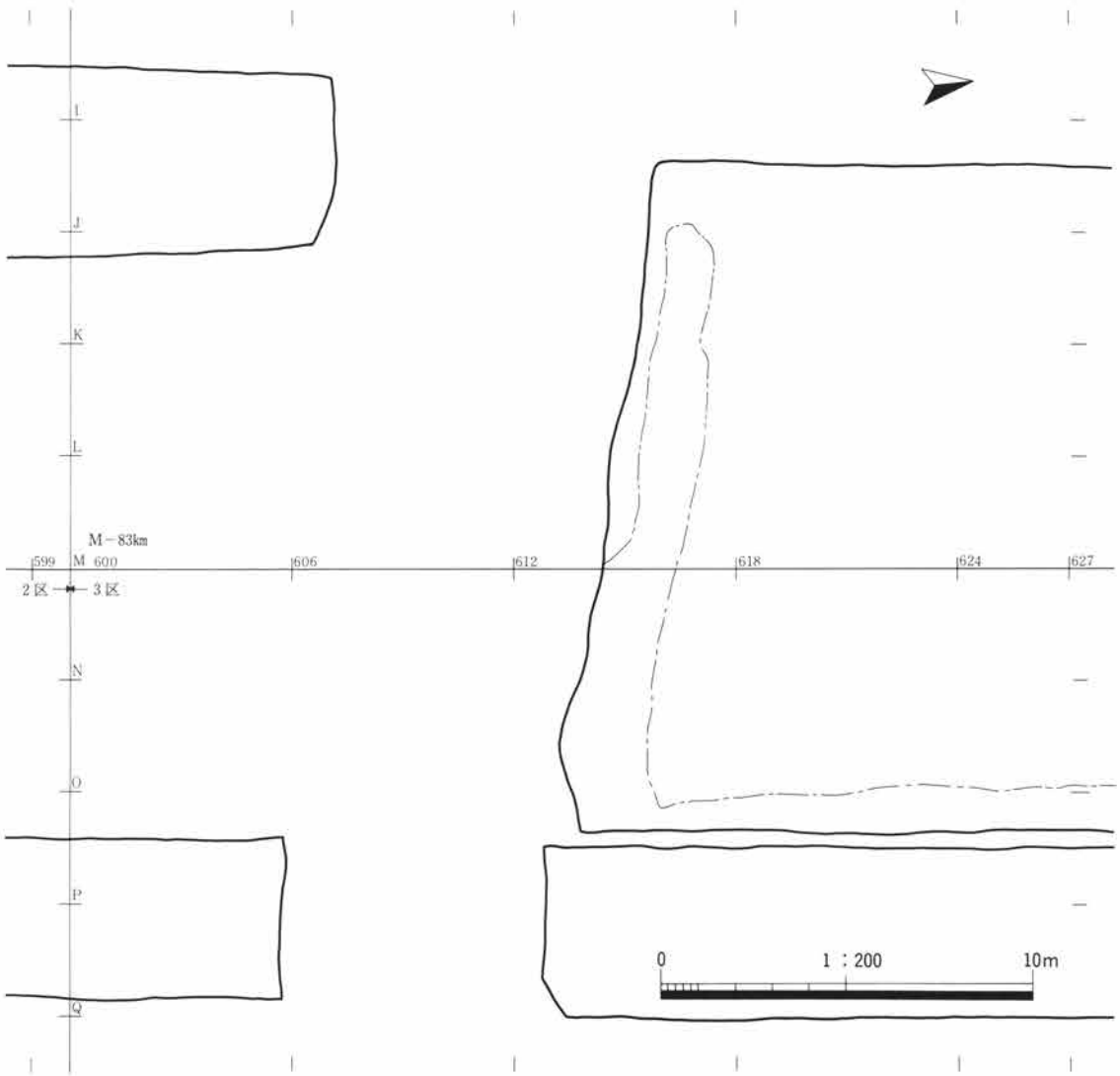
全体図4 縄文・弥生時代4・524~552m



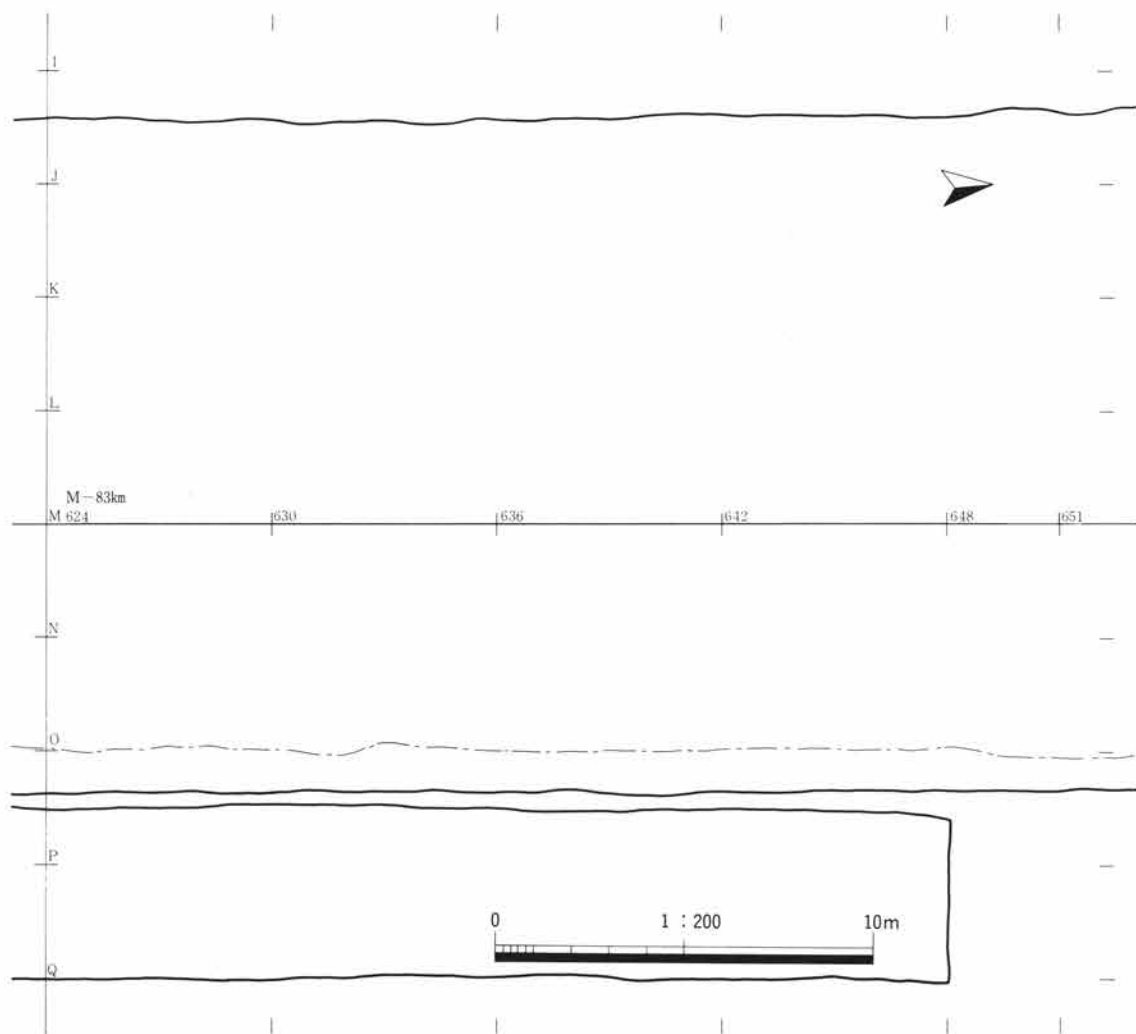
全体図5 縄文・弥生時代5・549~577m



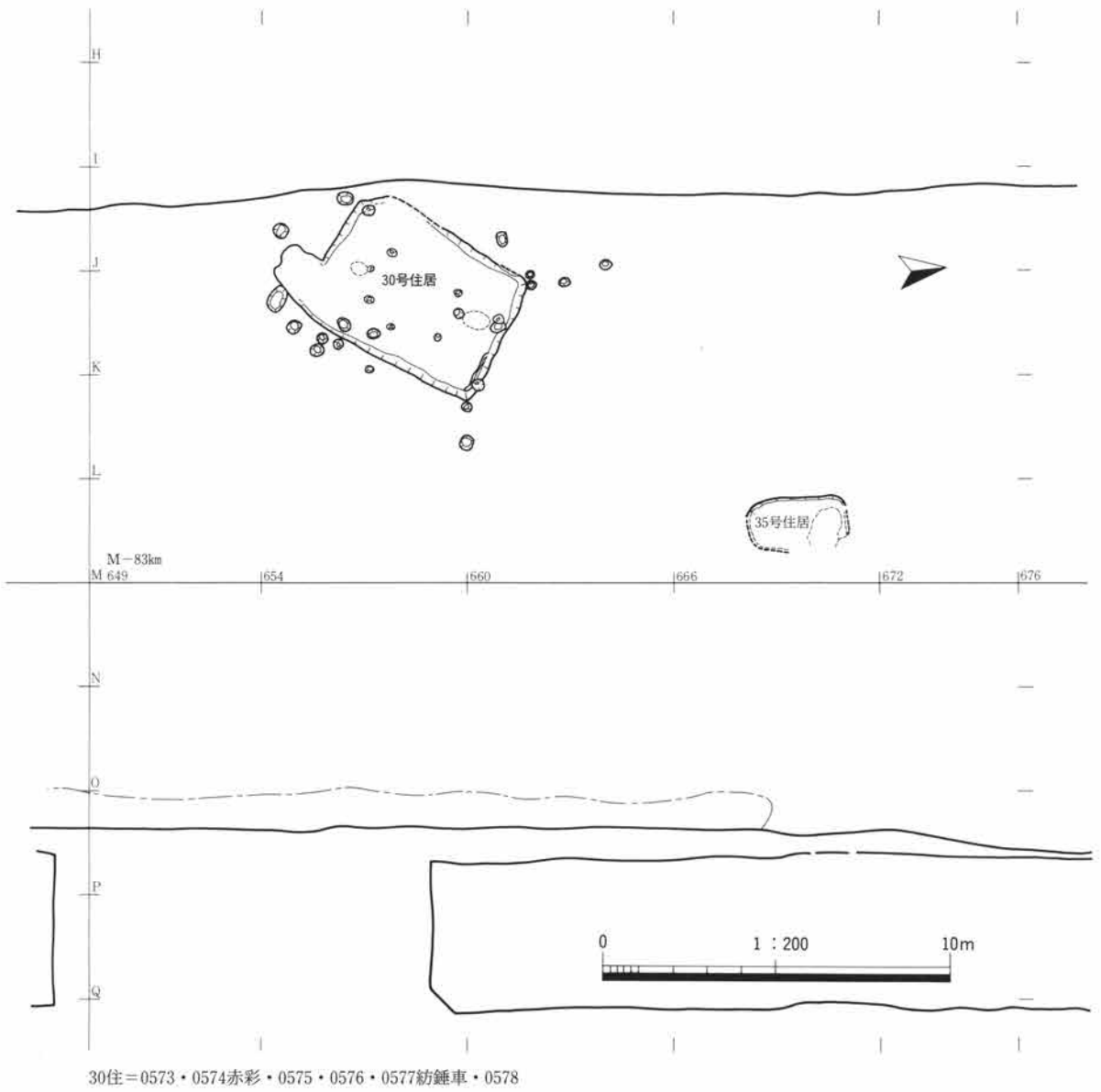
全体図6 縄文・弥生時代6・575~602m



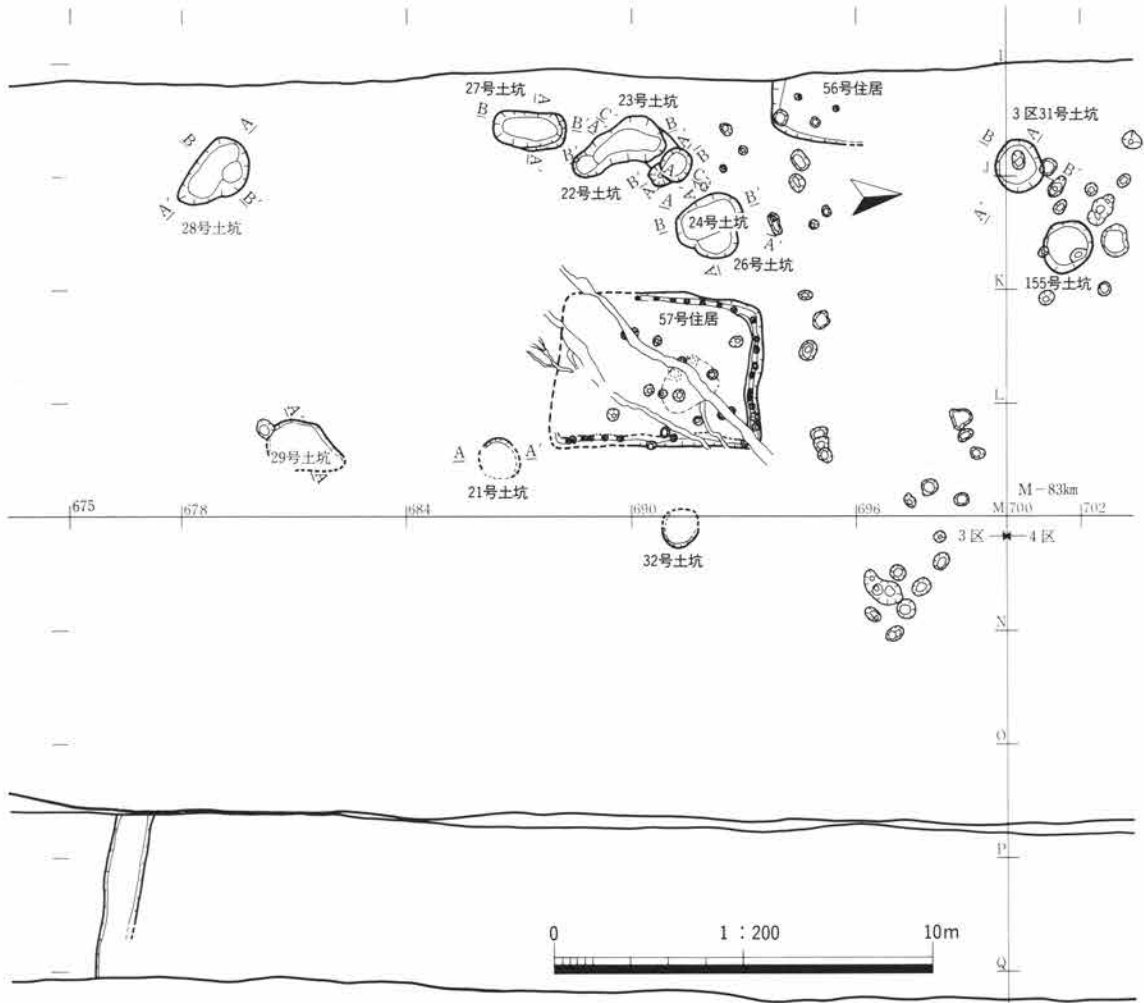
全体図7 縄文・弥生時代7・600~627m



全体図8 縄文・弥生時代8・624~652m

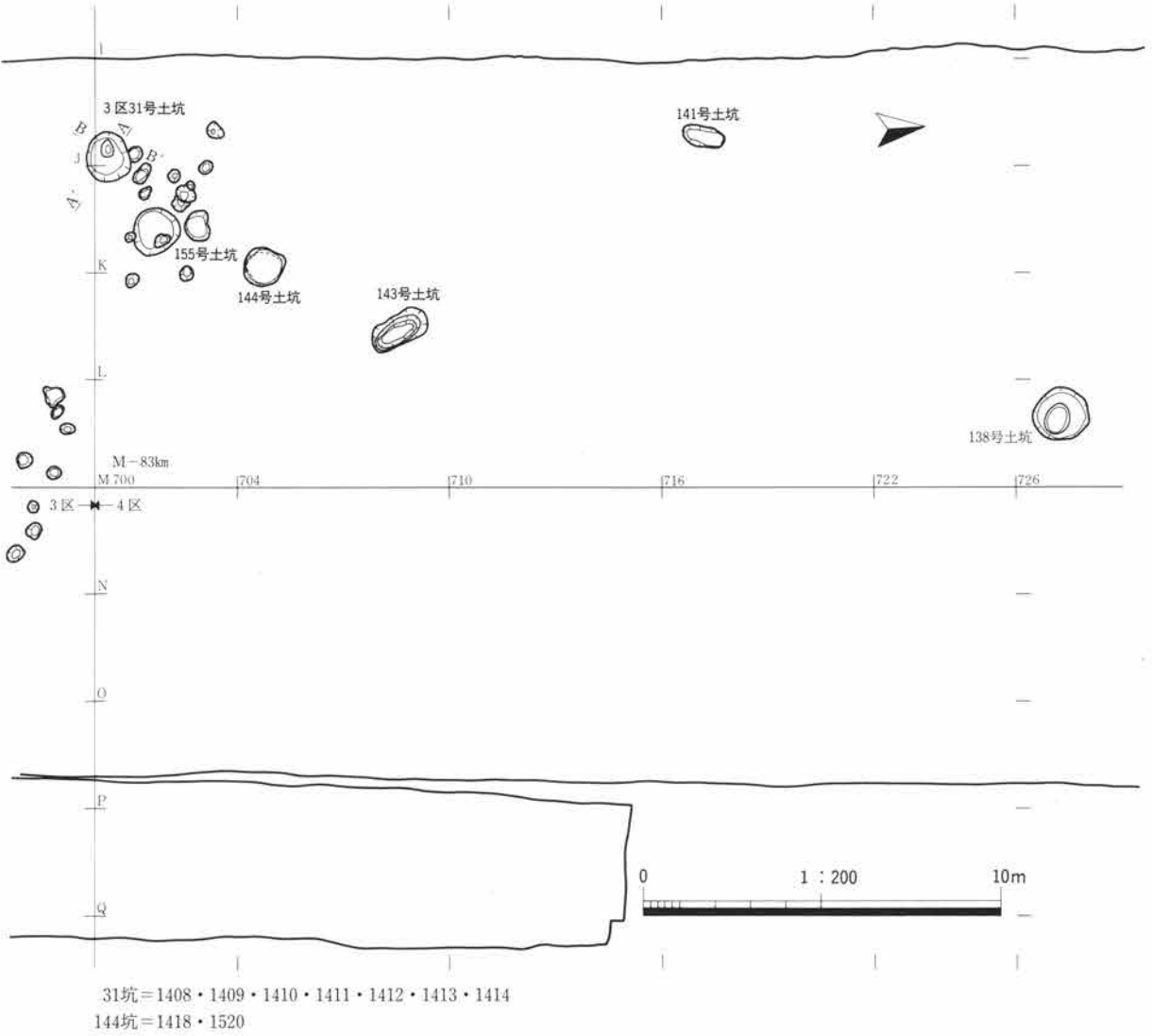


全体図9 縄文・弥生時代9・648~677m

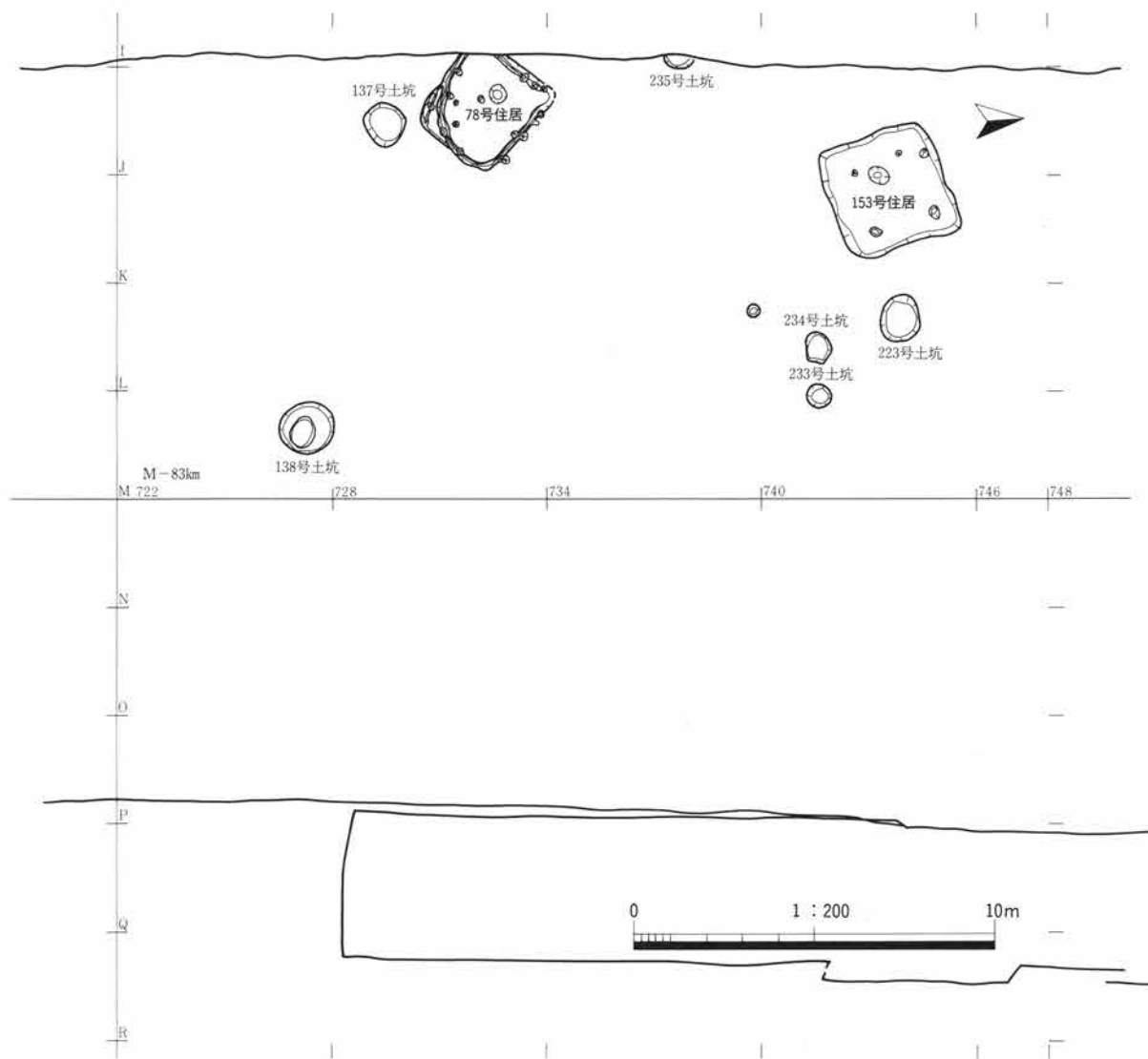


- 57住=1338・1339・1340・1341・1342・1343・1344・1345・1346・1347・1348・1349・1350・1351・1352・1353
 1354・1355・1356・1357・1358石鏃・1359・1360・1361
 21坑=1392・1393・1394・1395・1396・1397
 22坑=1398・1399・1400・1401・1402・1403・1404
 28坑=1405・1406・1407
 31坑=1408・1409・1410・1411・1412・1413・1414

全体図10 縄文・弥生時代10・674~703m

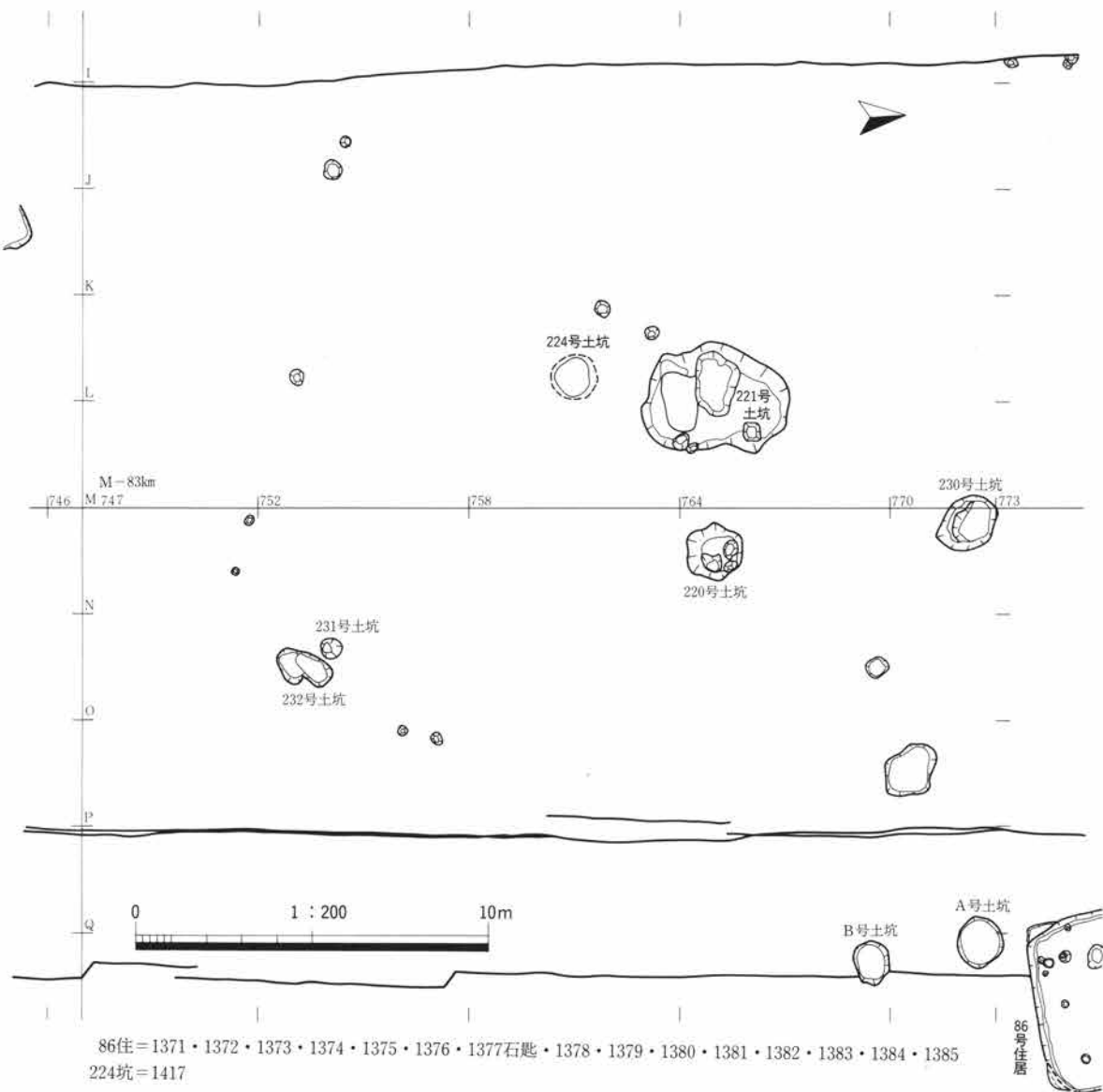


全体図11 縄文・弥生時代11・698～727m

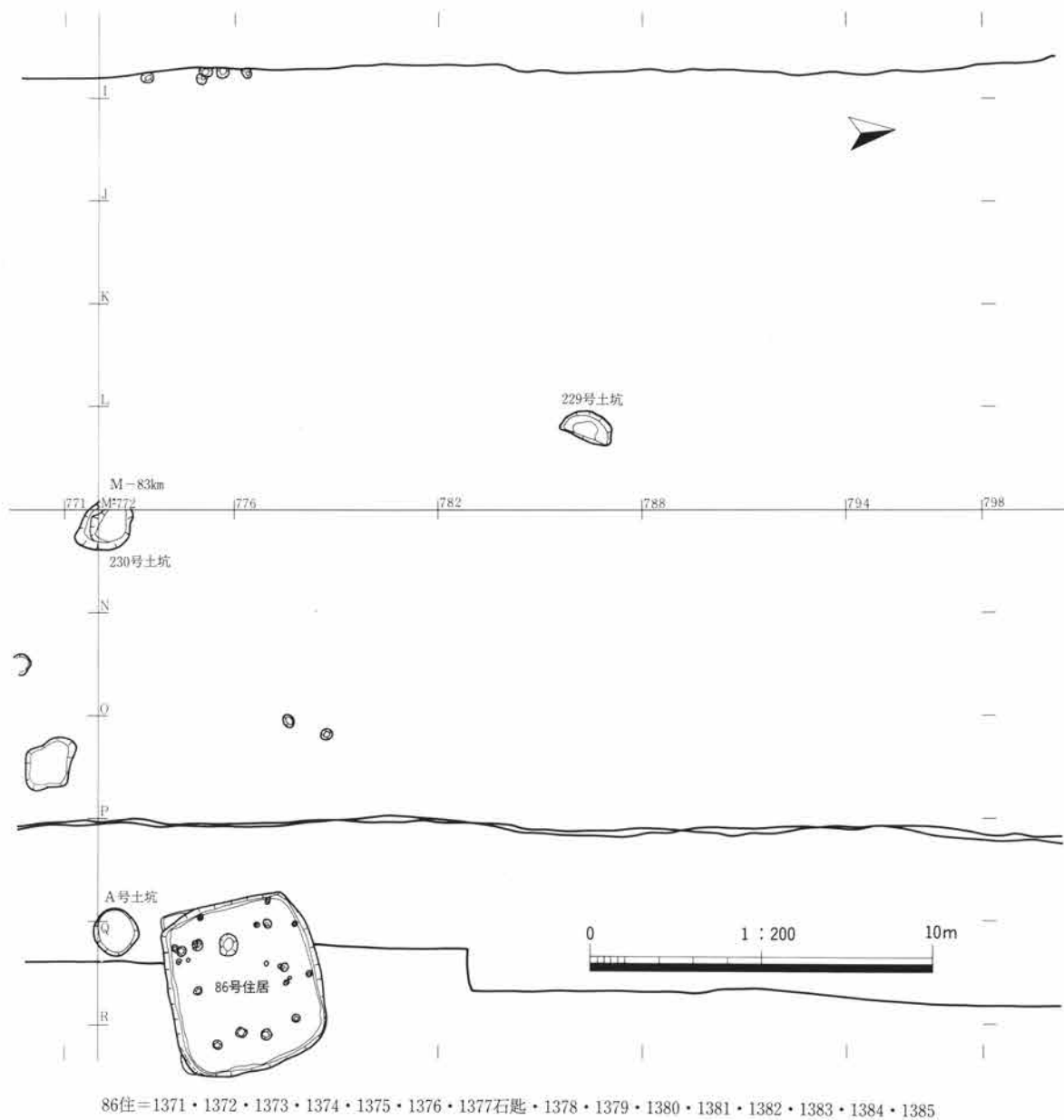


78住 = 1362・1363・1364・1365・1366・1367・1368・1369・1370
 153住 = 1386・1387・1388石匙・1389・1390・1391・1442
 223坑 = 1416

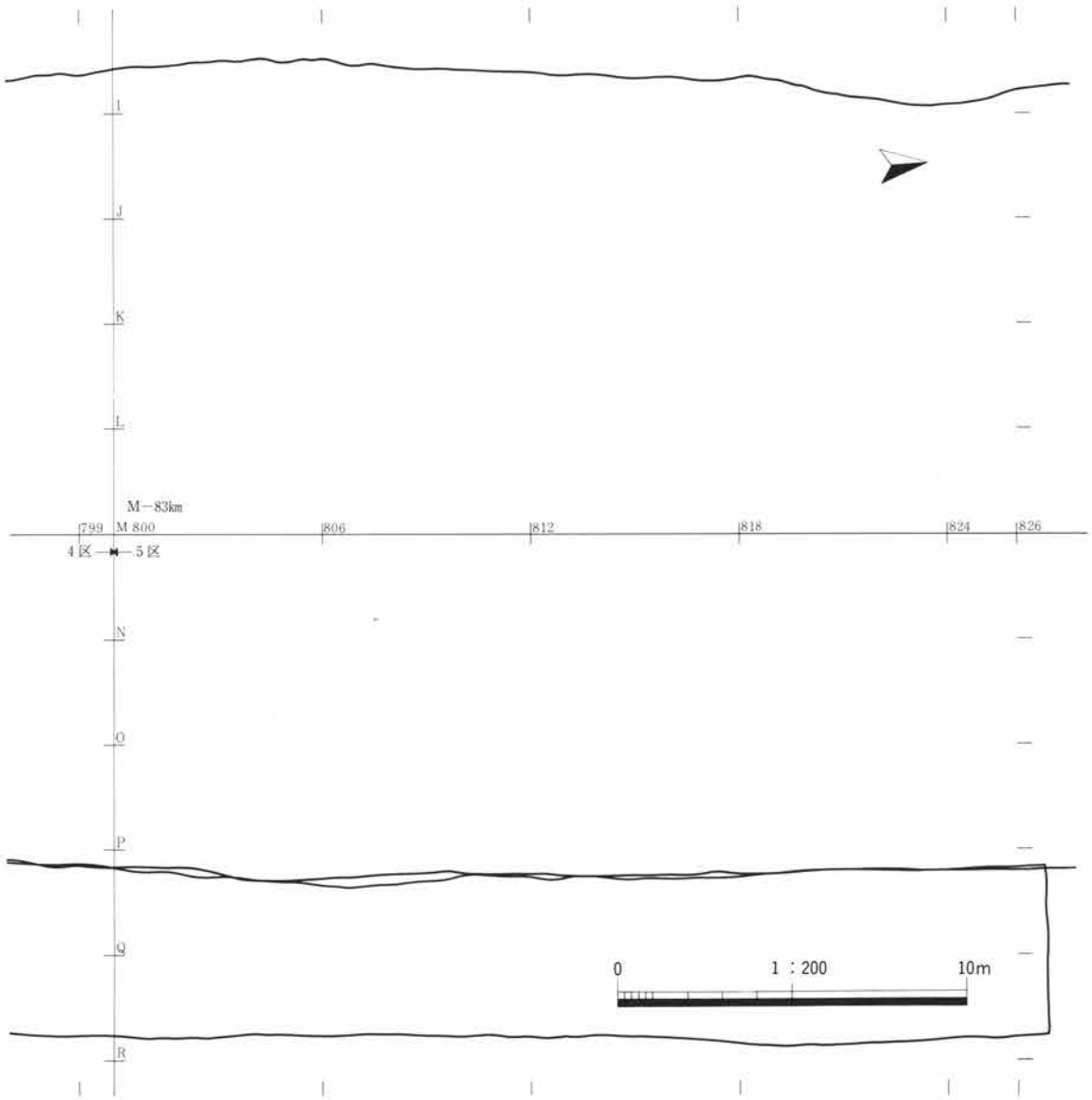
全体図12 縄文・弥生時代12・721~749m



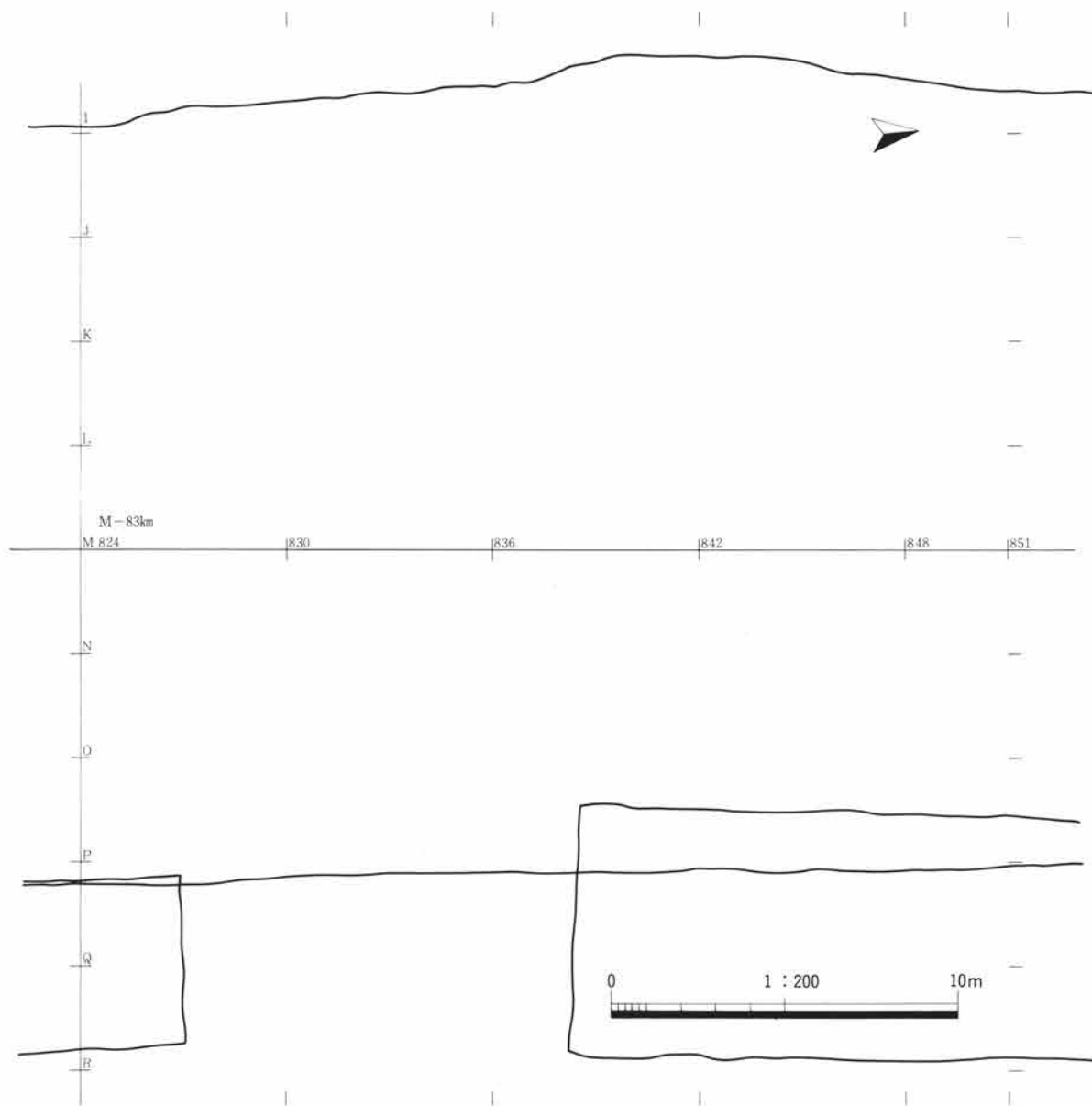
全体図13 縄文・弥生時代13・746~774m



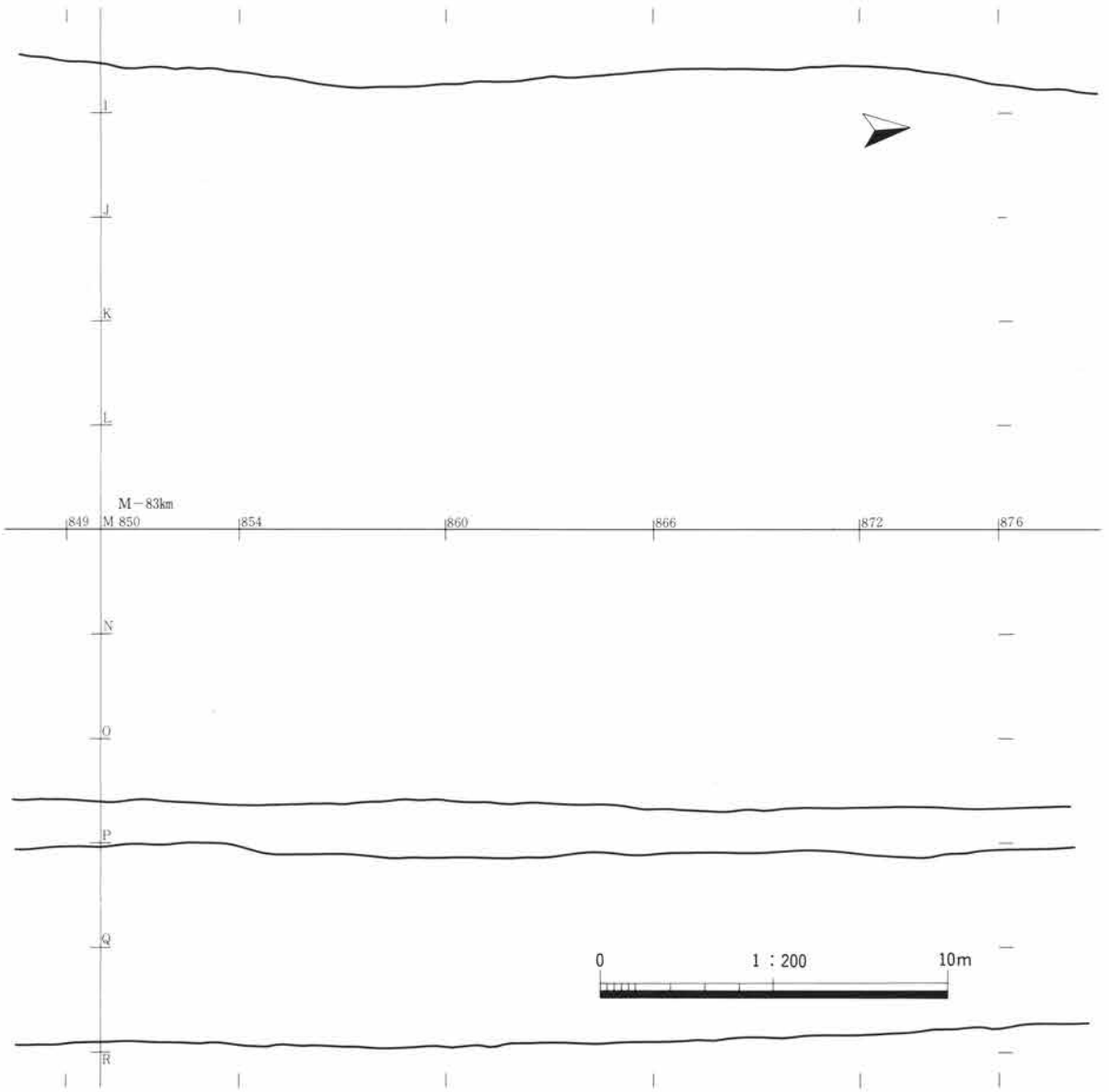
全体図14 縄文・弥生時代14・771~799m



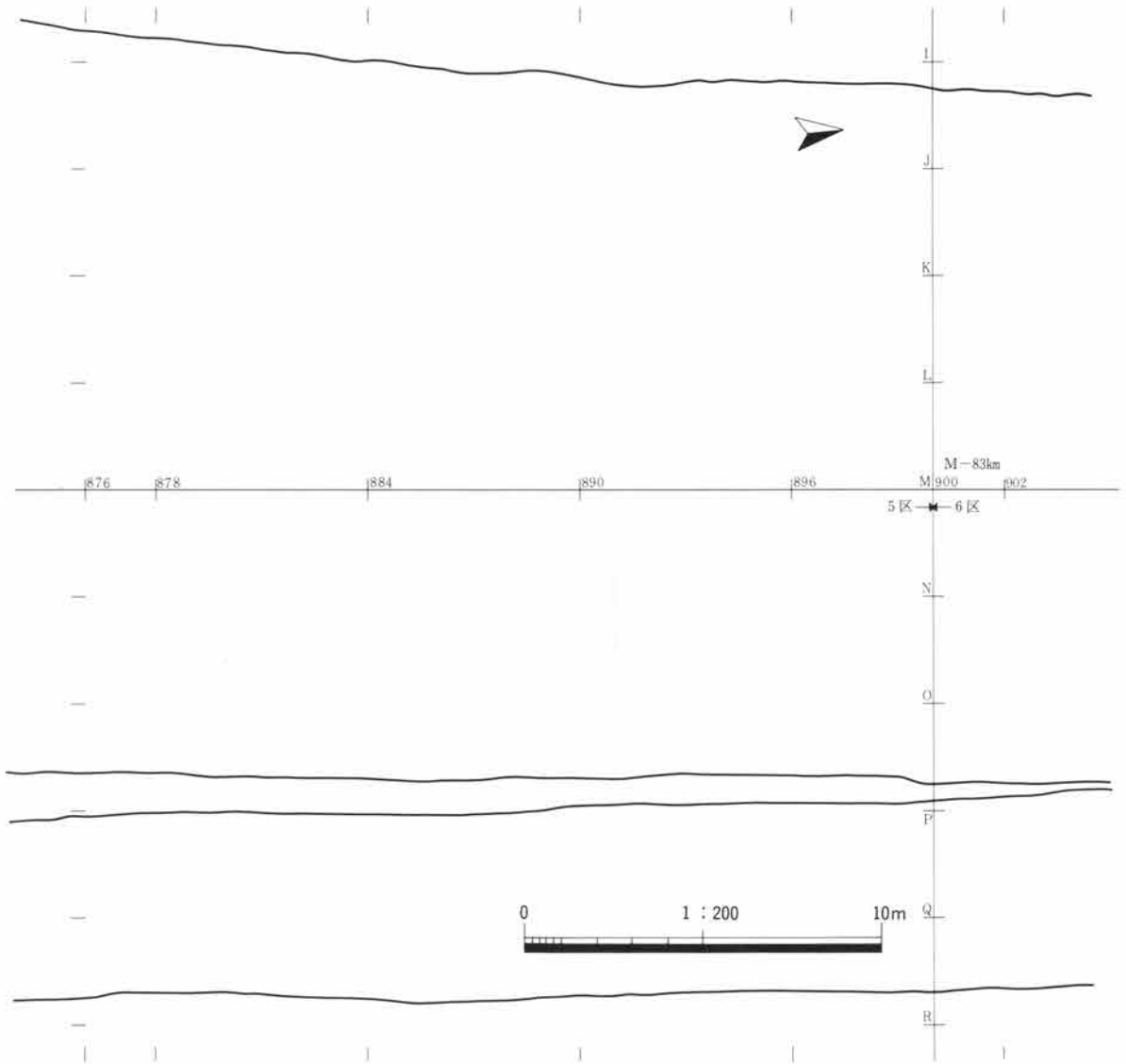
全体図15 縄文・弥生時代15・798m～827m



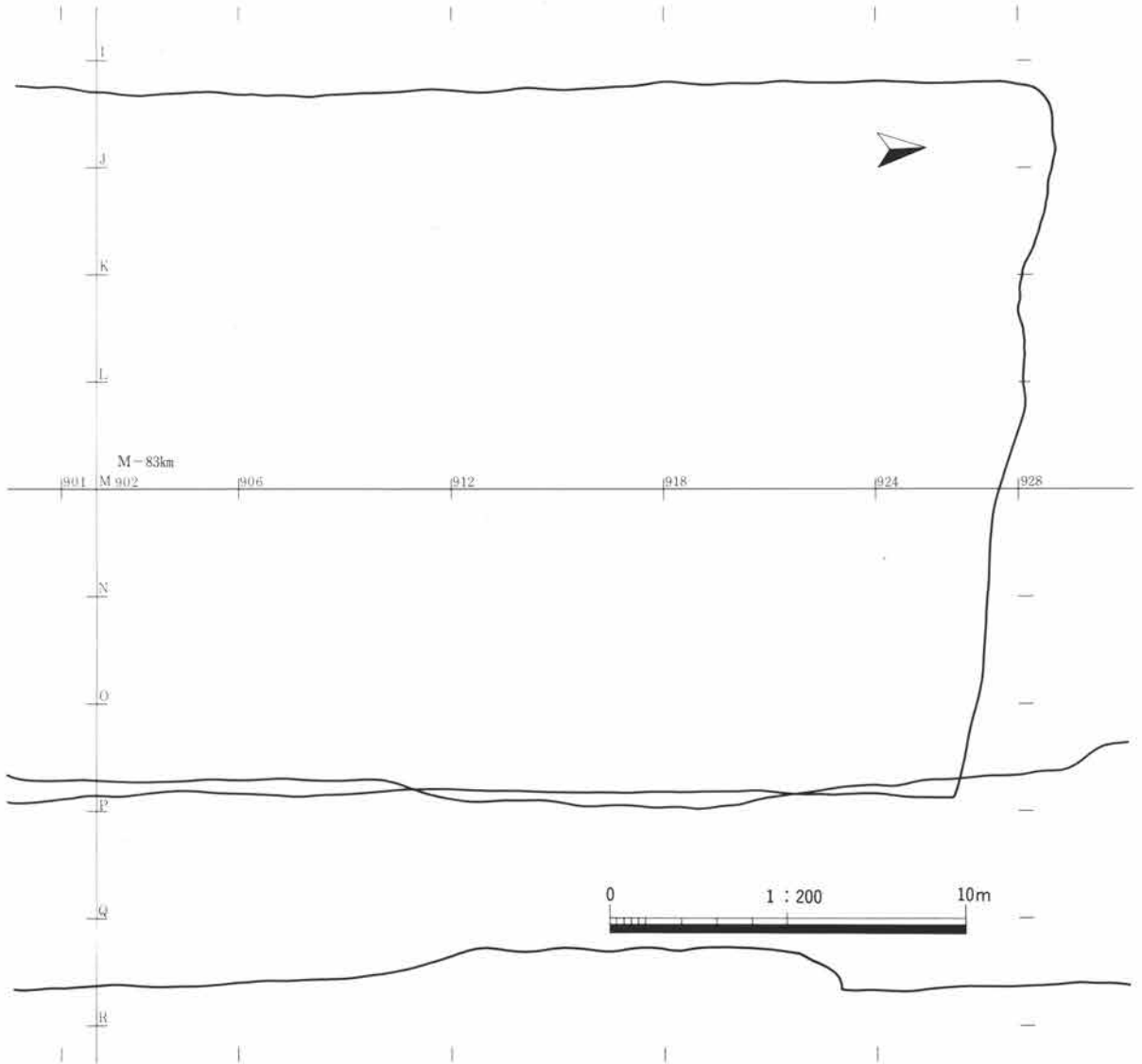
全体図16 縄文・弥生時代16・824~852m



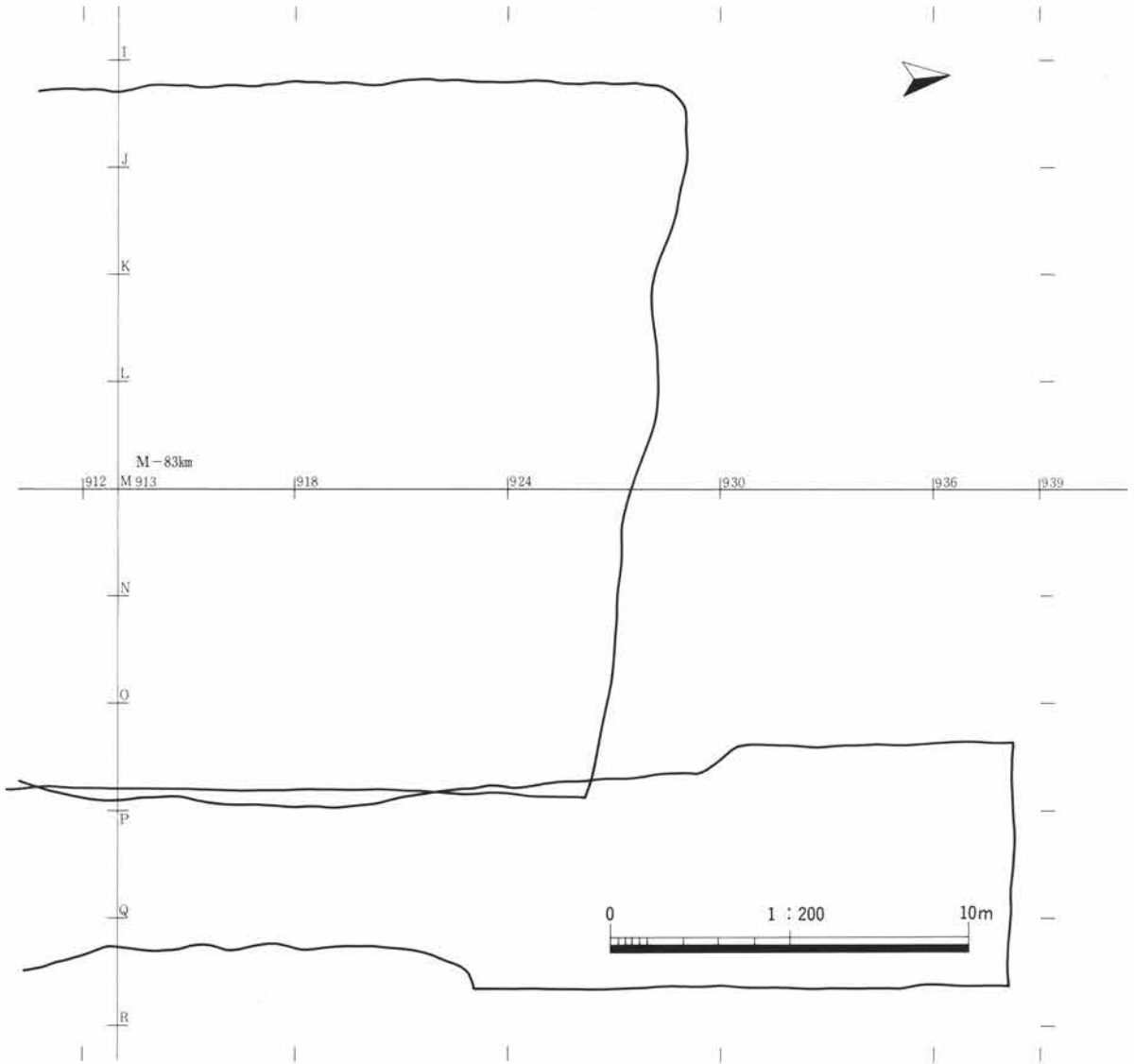
全体図17 縄文・弥生時代17・849~877m



全体図18 縄文・弥生時代18・875~903m

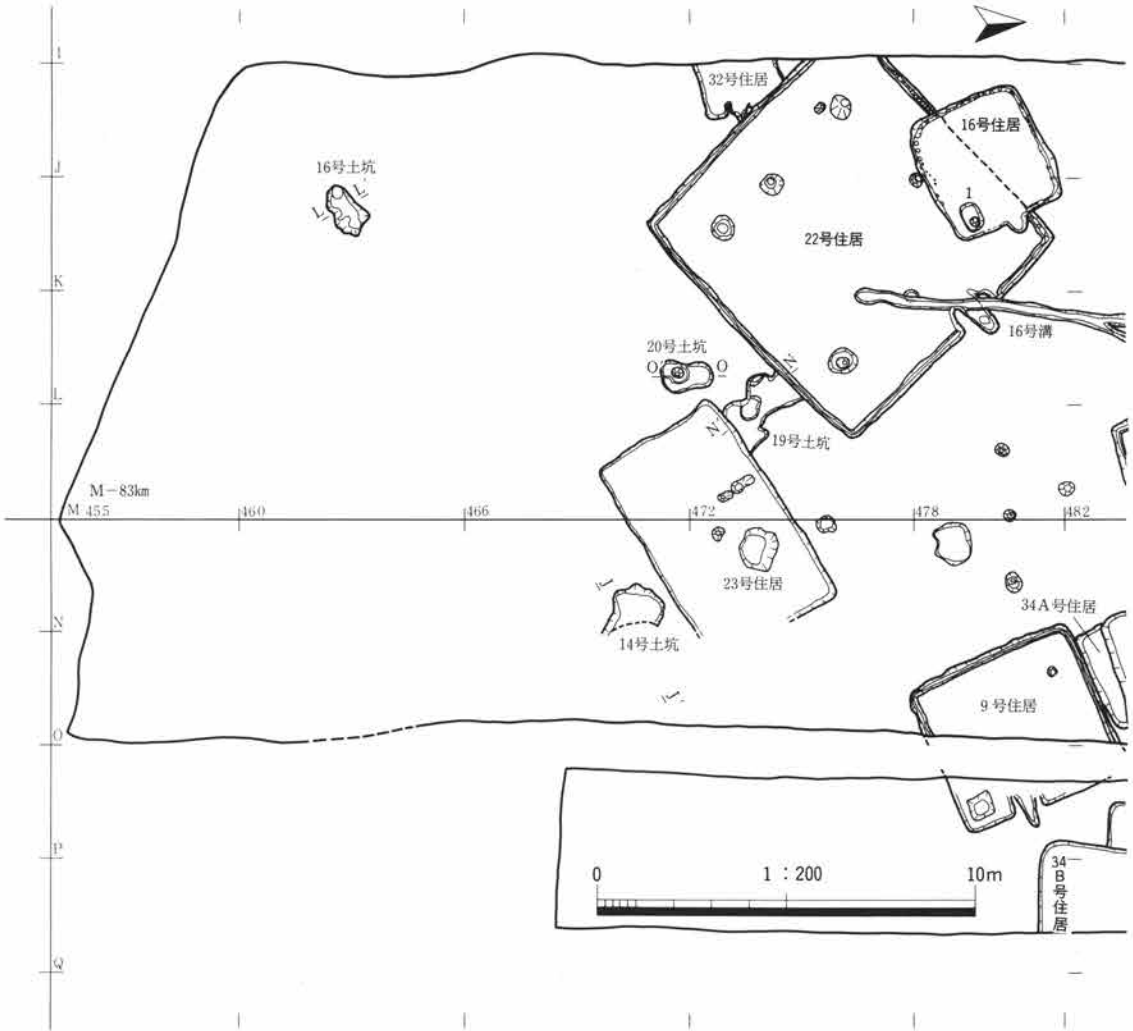


全体図19 縄文・弥生時代19・901~929m



全体図20 縄文・弥生時代20・912～940m

32住←22住→16住, 34A住→6住, 17B坑・20溝→34B住



- 6住=0010
- 9住=0016
- 10住=0017・0018・0019・0020・0021・0022
- 22住=0060・0061・0062・0063・0064・0104
- 23住=0065
- 32住=0071・0072・0073・0074
- 34A住=0075

全体図21 古墳時代1・454~483m

第4章 全体図

1区

22住→16住, 17A・18A坑→20住→17住←19住, 29住→31住→30住

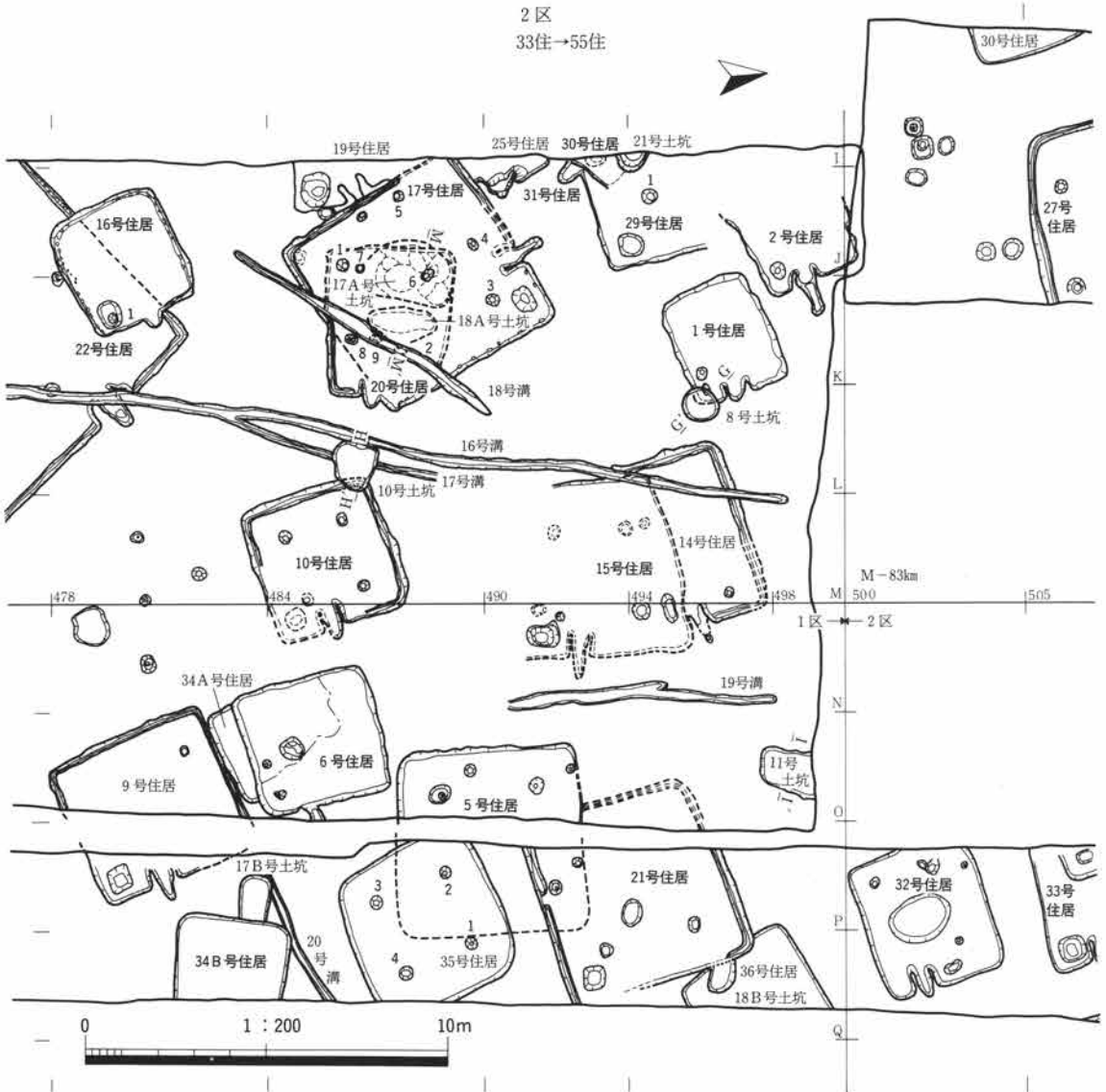
↑
25住

14住→15住, 34A住→6住,
35住←5住・36住→21住→18B坑

17B坑・20溝→34B住

2区

33住→55住



- 1住=0001・0002・0003・0004, 2住=0005・0006・0007, 6住=0010, 9住=0016
 10住=0017・0018・0019・0020・0021・0022
 14住=0081・0082・0083・0084・0085・0086・0087・0088
 15住=0089・0090・0091・0092・0093・0094・0095・0096・0097滑石製玉・0098・0099・0100・0101・0102・0103
 17住=0027・0028・0029・0030・0031・0032・0033・0034・0035・0036滑石製玉・0037水晶?
 19住=0041・0042・0043・0044・0045・0046, 20住=0038・0039
 21住=0047・0048・0049・0050・0051・0052・0053・0054・0055・0056・0057・0058・0059・0180
 22住=0060・0061・0062・0063・0064・0104, 29住=0105・0106, 35住=0076・0077, 36住=0078滑石製白玉
 2区32住=0220・0221・0222・0223・0224

全体図22 古墳時代2・478~506m

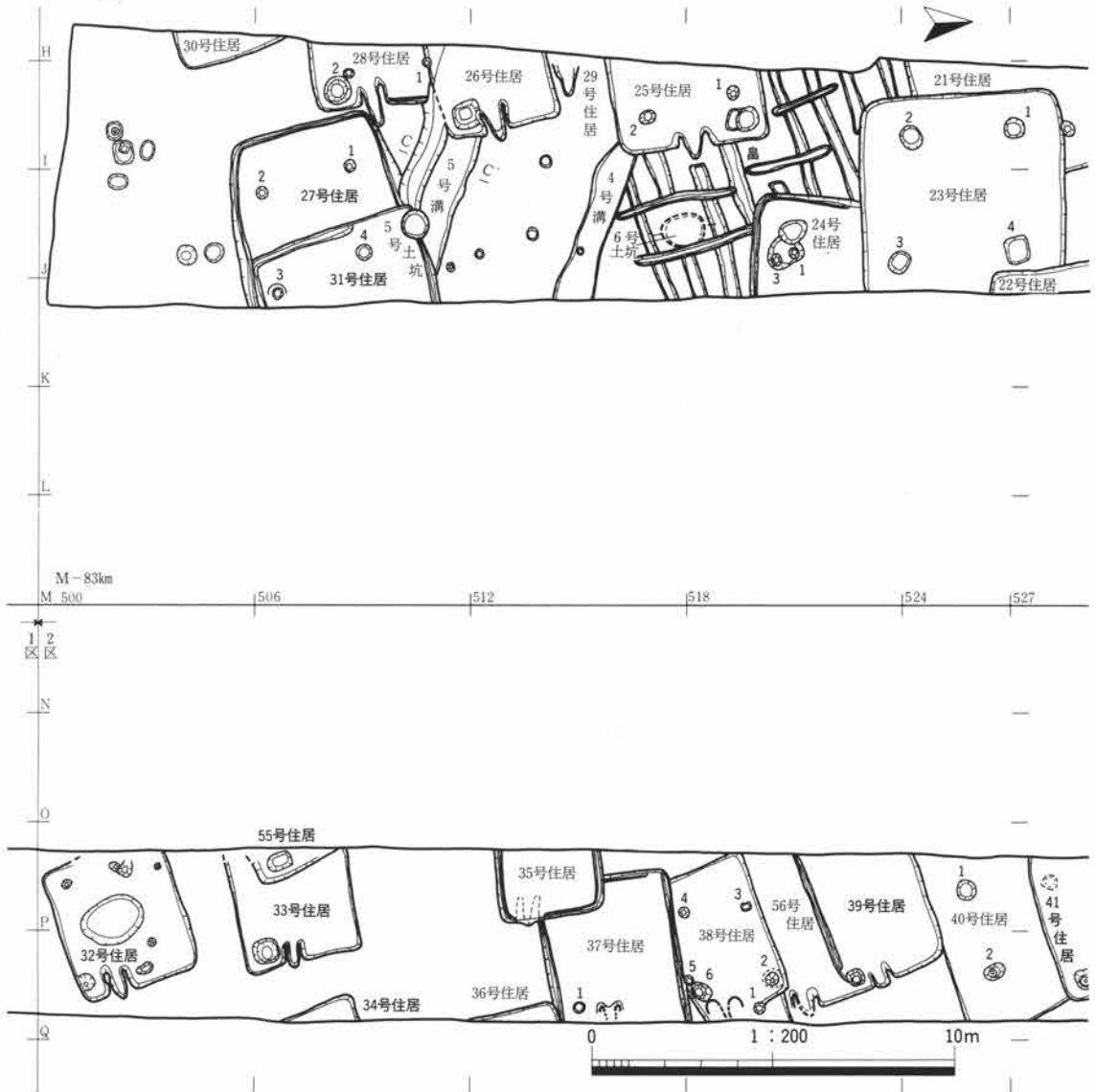
東側道

33住→55住, 35住←37住←38住←56住→39住, 40住→41住

西側道

21住→23住→22住, 28住←26住→29住→25住←4溝・畠, 27住→31住→5坑

↑
24住



- 21住=0181, 23住=0182・0183・0184・0185・0186・0187・0188・0189・0190・0191
 24住=0192・0193・0194・0195, 25住=0196・0197・0198, 26住=0199・0200・0201, 27住=0202
 28住=0203・0204・0205・0206・0207・0208・0209・0210・0211・0212・0213・0214・0215・0216・0217
 32住=0220・0221・0222・0223・0224
 33住=0225・0226・0227・0228・0229・0230・0231・0232・0233・0234・0235
 35住=0236, 37住=0237・0238・0239・0240・0241・0242・0243・0244・0245・0246・0247
 38住=0248, 39住=0249・0250・0251・0252・0253土製曲玉
 40住=0254・0255・0256・0257・0258・0259・0260・0261, 41住=0262・0263, 56住=0303・0304

全体図23 古墳時代3・500~528m

第4章 全体図

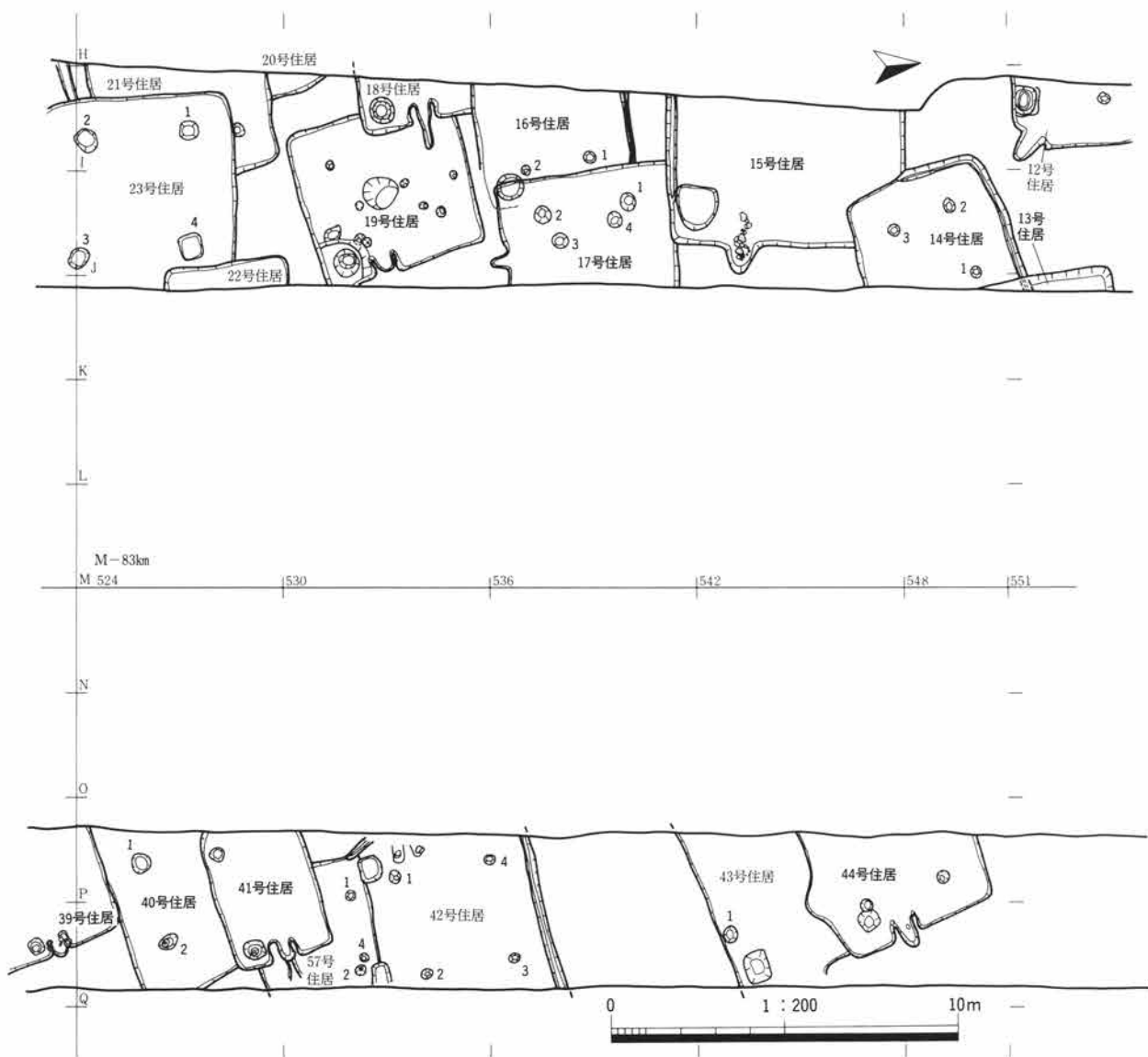
東側道

40住→41住, 42住→57住→41住, 43住→44住

西側道

19住→18住→16住→17住→15住→14住→13住

20住→21住→23住→22住



12住=0152・0153滑石製曲玉, 14住=0154, 15住=0155

16住=0156・0157・0158・0159・0160・0161・0162

17住=0163・0164・0165・0166・0167・0168・0169・0170

18住=0171・0172・0173・0174, 19住=0175・0176・0177・0178・0179

21住=0181, 23住=0182・0183・0184・0185・0186・0187・0188・0189・0190・0191

39住=0249・0250・0251・0252・0253土製曲玉, 40住=0254・0255・0256・0257・0258・0259・0260・0261

41住=0262・0263, 42住=0264・0272・0273・0274・0275・0276・0277・0278・0279・0280・0281

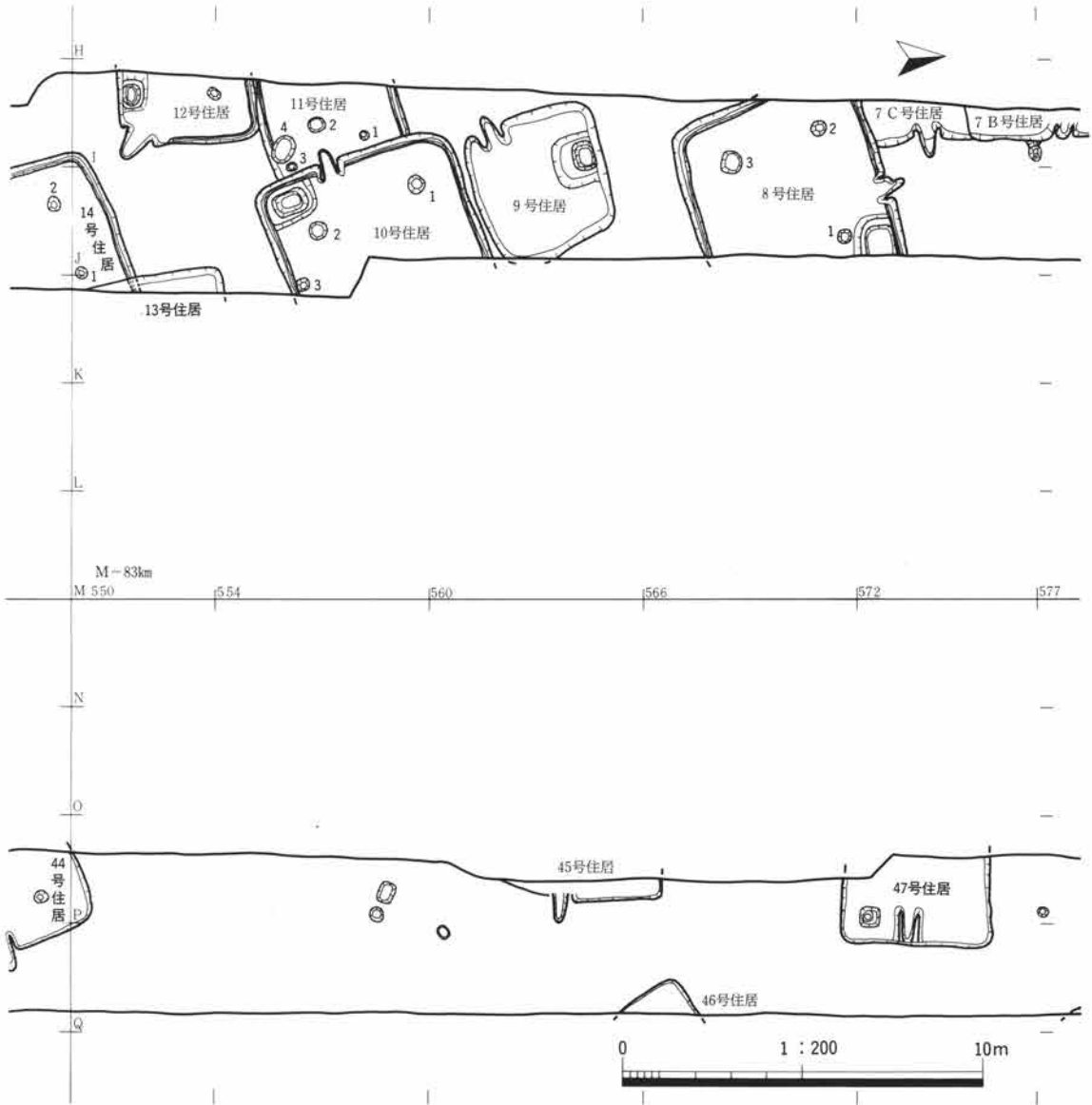
43住=0282・0283・0284・0285・0286・0287・0288・0289・0290・0291・0292・0293・0294・0295・0296・0297
0298・0299

44住=0265・0266, 57住=0305・0306・0307・0308・0309

全体図24 古墳時代4・524~552m

西側道

14住→13住, 11住→10住, 8住←7C住→7A住・7B住



7 A住=0130

7 C住=0131・0132・0133・0134

8住=0135・0136・0137・0138・0139・0140・0141・0142・0143・0144滑石製玉

9住=0145

10住=0146・0147・0148・0149

11住=0150・0151

12住=0152・0153滑石製曲玉

14住=0154

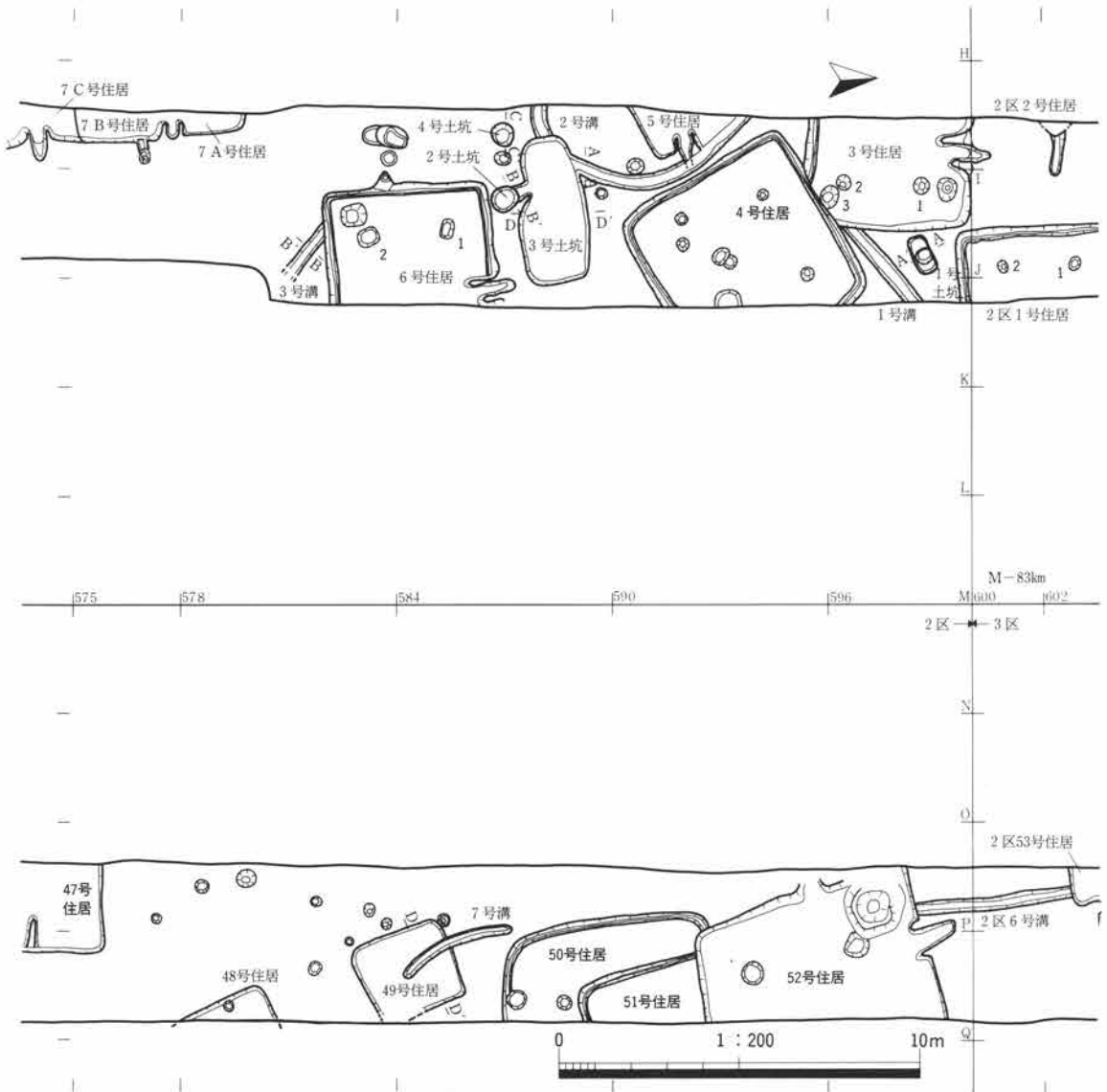
44住=0265・0266

47住=0267

全体図25 古墳時代5・549~577m

第4章 全体図

49住→7溝, 50住→51住→52住, 6溝→53住
 3溝→6住
 5住→2溝
 13溝→3住→4住



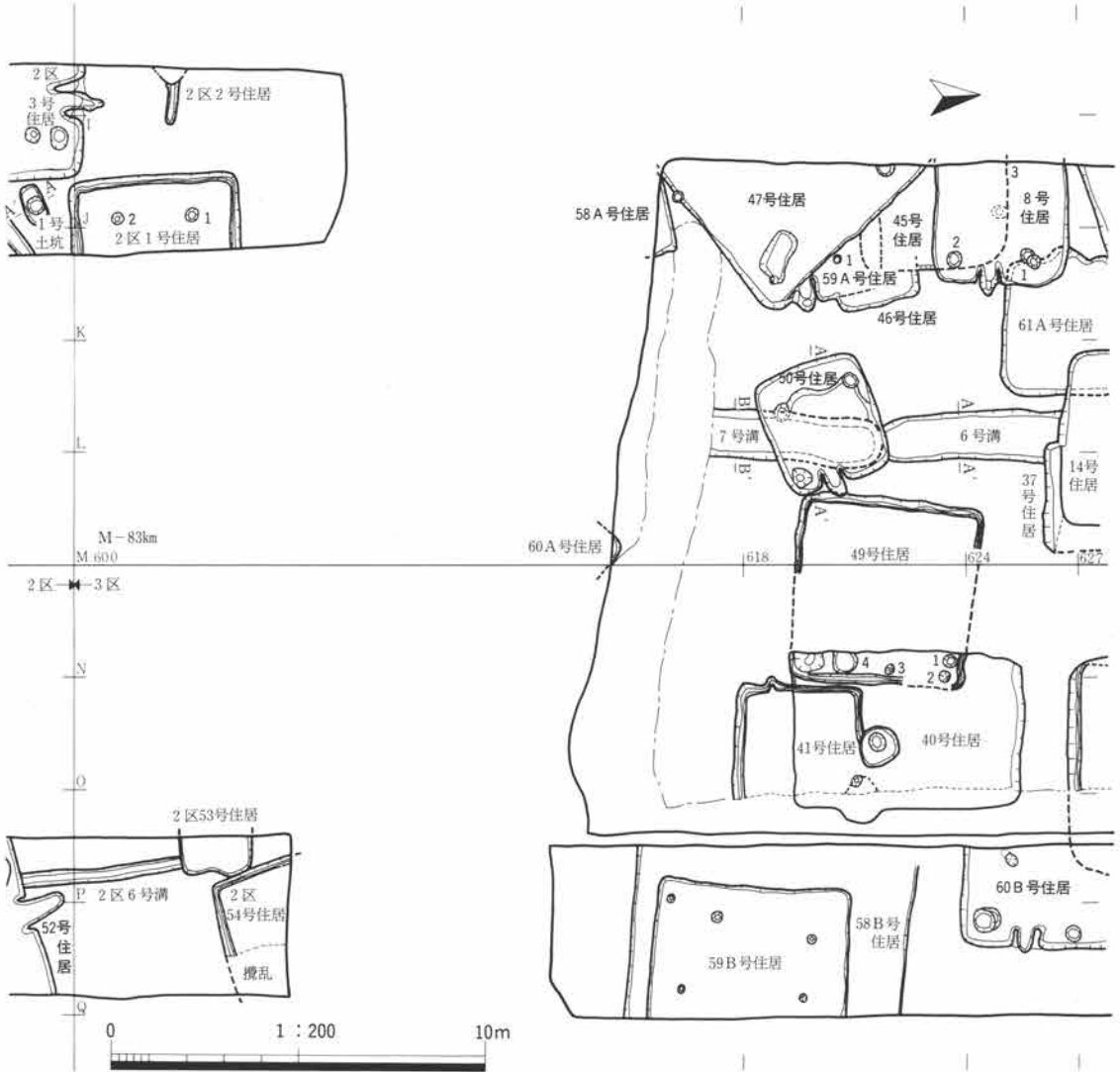
- 2住=0119・0120・0121
- 3住=0122・0123
- 4住=0124・0125
- 6住=0126・0127・0128・0129
- 47住=0267
- 50住=0268・0269・0270
- 51住=0271

全体図26 古墳時代6・575~602m

2区東側道
6溝→53住,

3区
8住←45住←46住→59A住→47住,
6・7溝→50住,
41住→40住←49住,

3区東側道
58B住→59B住
37住→14住
8・14住←61A住→7住

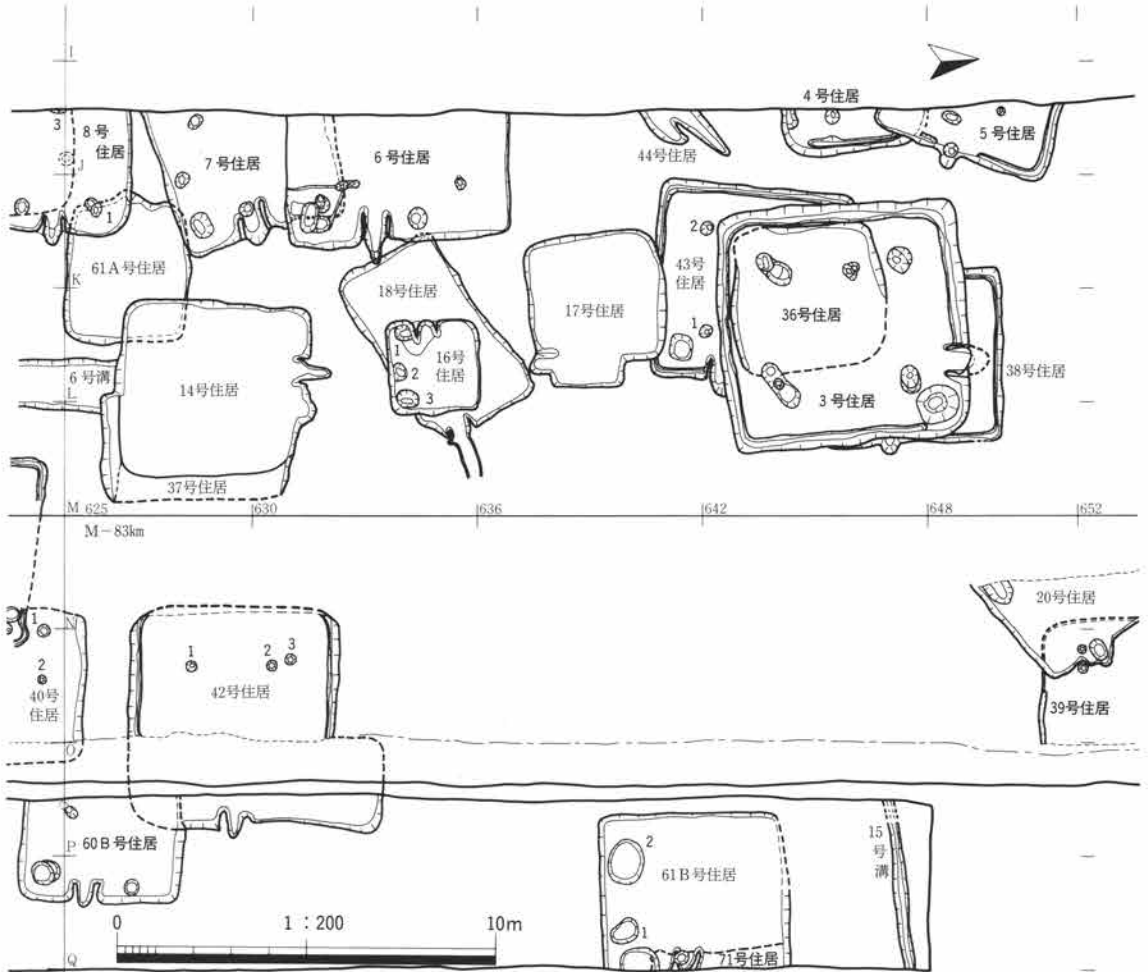


- 2区 2住=0119・0120・0121, 3住=0122・0123
 3区 8住=0345・0346・0347・0348, 40住=0355・0356・0357・0358・0359
 41住=0360・0361, 45住=0373
 47住=0375・0376・0377・0378滑石製白玉・0379滑石製白玉・0380・0381
 49住=0382・0383, 50住=0427・0428・0429・0430
 58B・59B住=0385・0386・0387・0388, 59A住=0384
 60B住=0389・0390・0391・0392・0393・0394・0395・0396・0397・0398・0399・0400・0401・0402・0403
 ・0404・0405・0406・0407
 61A住=0415・0416
 6溝=0431, 7溝=0669管玉

全体図27 古墳時代7・600~627m

第4章 全体図

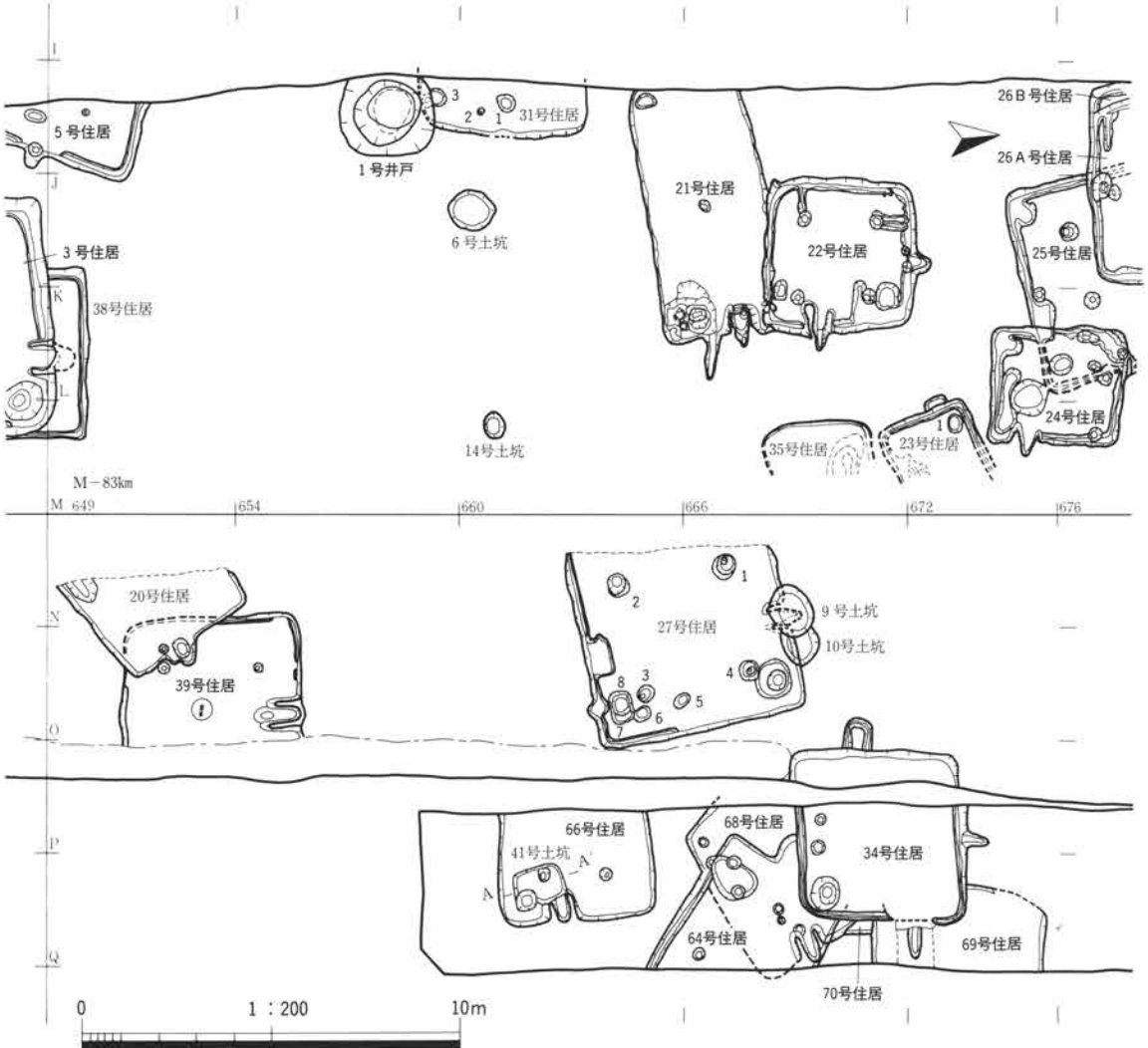
8・14住←61A住→7住→6住, 18住→16住, 4住→5住, 37住→14住
 17住←43住→3住←36住, 39住→20住, 60B住→42住
 ↑
 38住



- 3住=0315・0316・0317・0318・0319・0320管玉・0321滑石製玉・0322滑石製玉・0323滑石製玉・0324滑石製曲玉
 0325・0672鉄, 5住=0326・0327・0328
 6住=0329・0330・0331・0332・0333・0334・0335・0336・0337・0338・0339滑石製紡錘車・0340滑石製玉
 7住=0341・0342・0343・0344, 8住=0345・0346・0347・0348
 16住=0353, 20住=0432黑色土器・0433・0434, 38住=0354
 39住=0435・0436・0437・0438・0439・0440・0441・0442・0443・0444・0445・0446・0447・0448・0449・0450
 0451・0452・0453・0454・0455, 40住=0355・0356・0357・0358・0359・0367
 42住=0362・0363・0364・0365・0366・0368, 43住=0369・0370・0371・0372
 60B住=0389・0390・0391・0392・0393・0394・0395・0396・0397・0398・0399・0400・0401・0402・0403・0404
 0405・0406・0407
 61A住=0415・0416・0426, 61B住=0408・0409・0410・0411・0412・0413・0414滑石製玉, 6溝=0431

全体図28 古墳時代8・624~652m

21住→22住, 27住→10坑→9坑, 66住→41坑
 26住→25住→24住, 64住→68住→34住
 31住→1井, ↑ ↑
 38住→3住, 70住 69住 26A住→26B住
 39住→20住

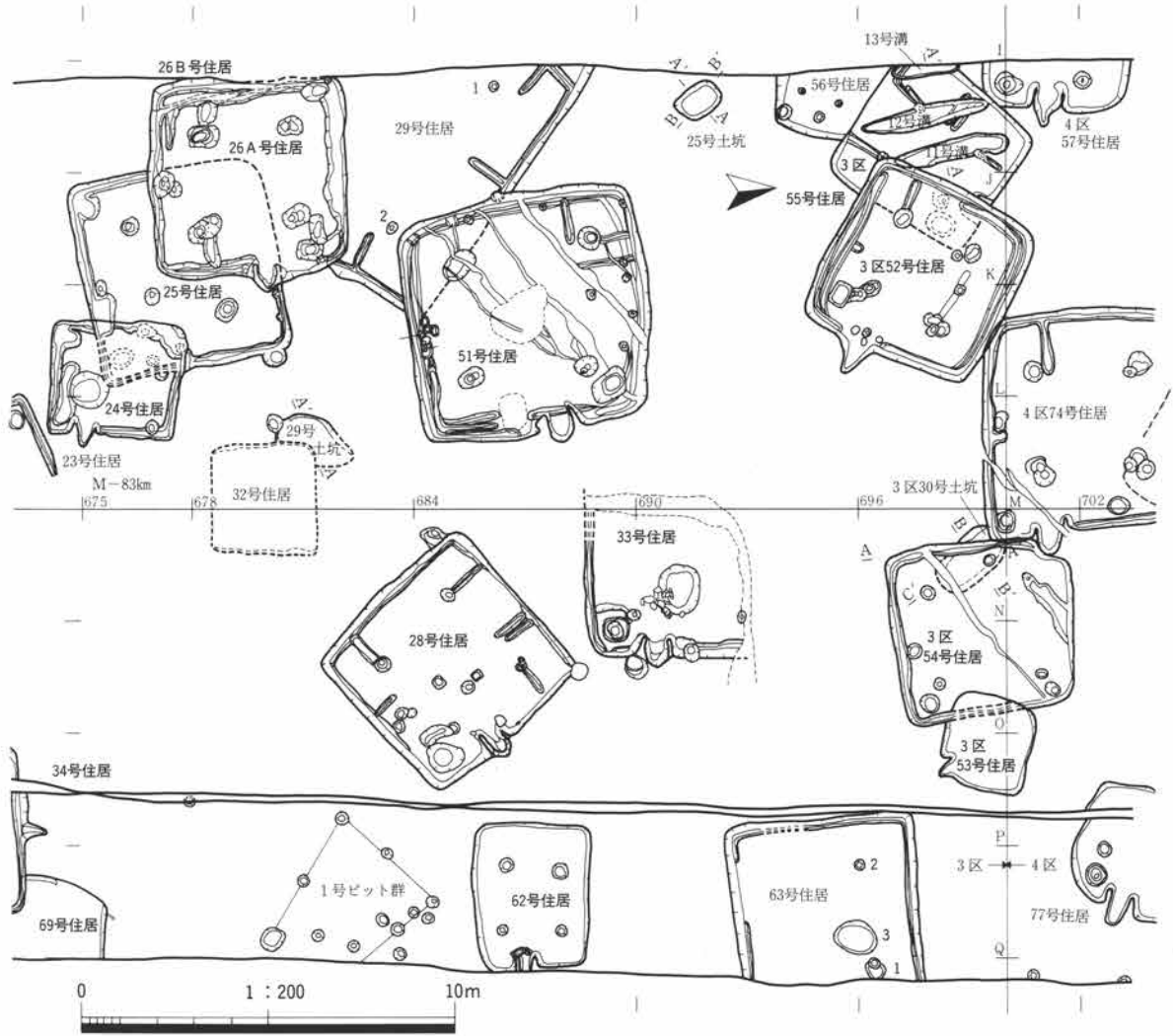


- 3住=0315・0316・0317・0138・0319・0320管玉・0321劍形玉・0322劍形玉・0323滑石製玉・0324滑石製曲玉・0325・0672鉄・鎌
 5住=0326・0327・0328, 20住=0432・0433・0444, 21住=0536・0537・0538・0539滑石製白玉
 22住=0540・0541・0542・0543・0544滑石製劍形玉, 23住=0545滑石製白玉・0546滑石製白玉
 24住=0547, 25住=0548・0549・0550・0551
 26B住=0552・0553・0554・0555・0556・0557・0558・0559・0560・0561
 27住=0562・0563・0564・0565・0566・0567・0568・0569・0570, 34住=0585・0586・0587・0588, 38住=0354
 39住=0435・0436・0437・0438・0439・0440・0441・0442・0443・0444・0445・0446・0447・0448・0449・0450
 0451・0452・0453・0454・0455, 64住=0603・0604・0605
 66住=0618・0619・0620管玉・0621・0622・0623
 68住=0632・0633, 69住=0624・0625・0626, 70住=0627・0628・0629・0630・0631

全体図29 古墳時代9・648~677m

第4章 全体図

26住←25住→24住, 29坑→32住, 4区74住←54住→53住
 29住→51住, 56住→55住→11溝→52住 26A住→26B住
 69住→34住,
 ↓
 12溝・13溝

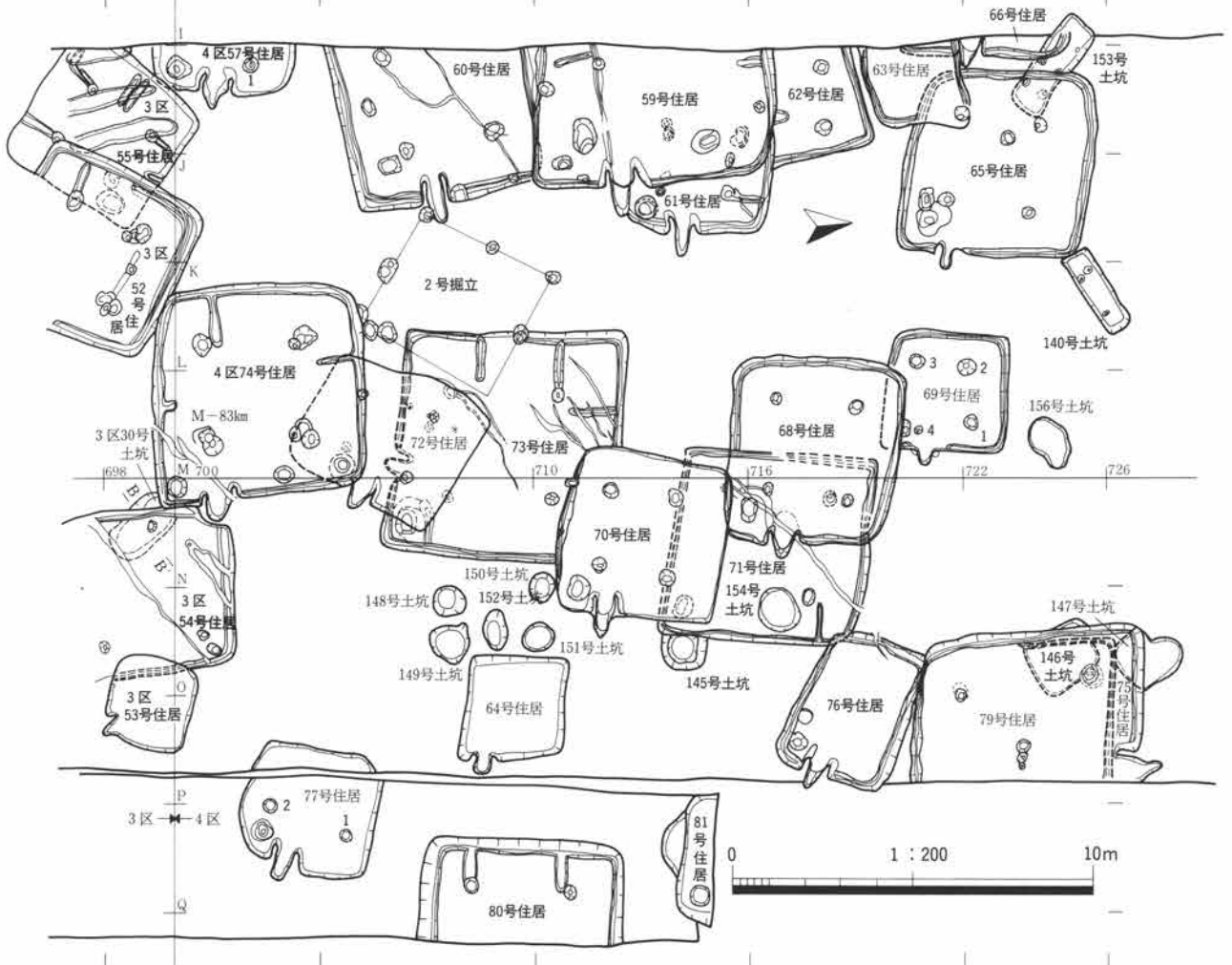


- 23住=0545滑石製白玉・0546滑石製白玉, 24住=0547, 25住=0548・0549・0550・0551
 26B住=0552・0553・0554・0555・0556・0557・0558・0559・0560・0561
 28住=0634・0635・0636・0637・0638・0639・0640・0641・0642・0643・0644・0645・0646・0647・0648・0649
 0650滑石製管玉・0651滑石製管玉・0652・0653・0659
 29住=0571・0572, 33住=0579・0580・0581・0582・0583・0584滑石製剣形玉, 34住=0585・0586・0587・0588
 51住=0489滑石製剣形玉・0490滑石製紡錘車・0491・0492・0493・0494・0495・0496・0497・0498・0499・0500
 0501・0502・0503・0504・0535, 53住=0589・0590・0591・0592
 52住=0475・0476・0477・0478・0479・0480・0481・0482・0483・0484・0485・0486・0487・0488・0593
 54住=0465・0466・0467・0468・0469・0470・0471・0472・0473・0474, 55住=0594・0595・0596
 62住=0597・0598滑石製紡錘車, 63住=0599・0600・0601・0602, 69住=0624・0625・0626

全体図30 古墳時代10・674~703m

3区
55住→11溝→52住,
4区74住←54住→53住,
65住→63住←66住

4区
62住→59住←60住
↑
61住
2掘←74住←72住←73住→70住←71住→68住←69住
79住→75住←76住←71住



- 57住=0710, 59住=0699・0700・0701・0702・0703・0704・0705・0706・0707
 60住=0694・0695・0696・0697・0698, 62住=0796・0797・0798, 63住=0799・0800
 65住=0801・0802・0803, 68住=0711・0712・0713・0714
 70住=0715・0716・0717・0718・0719・0720・0721
 71住=0722管玉・0952
 72住=0950・0951滑石製紡錘車
 73住=0723・0724・0725・0726・0727・0728・0729
 74住=0934・0935・0936・0937
 75住=0730, 76住=0731・0732, 77住=0804
 80住=1044, 81住=0805・0806・0807・0808

全体図31 古墳時代11・698~727m

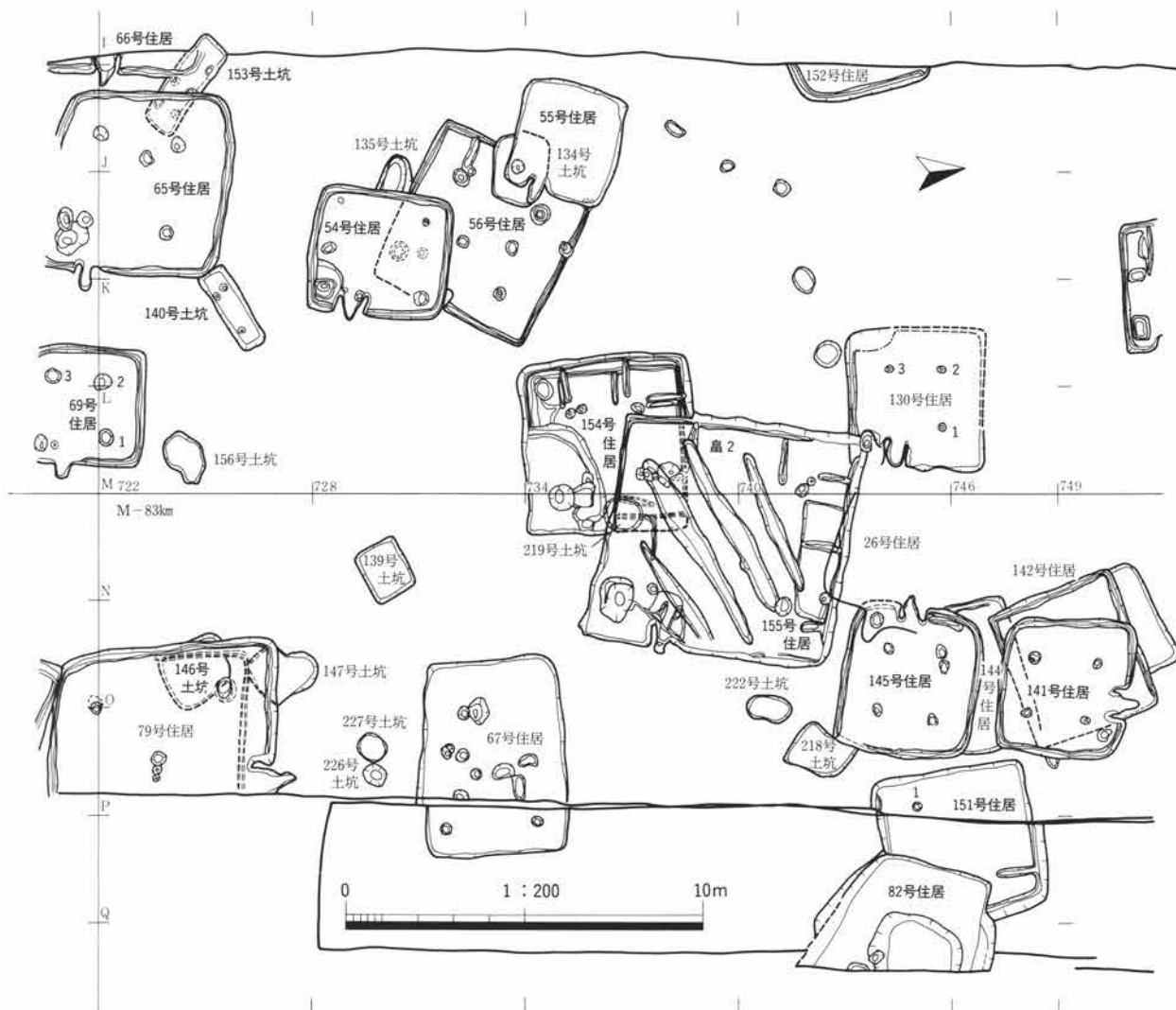
第4章 全体図

79住→75住, 154住→155住←130住, 143住→142住←144住→145住→26住

↓
141住

54住←56住→134坑, 151住→82住→番号なし土坑

↓ ↓
55住



- 54住=0685・0809・0810・0811・0813・0814・0815, 55住=0828
 56住=0812・0832・0833・0834・0835
 65住=0801・0802・0803, 75住=0730
 130住=0864・0865・0866・0867・0868・0869・0870・0871・0872・0873・0874・0875
 141住=0849
 142住=0850・0851
 145住=0840・0841・0842・0843・0844・0845・0846・0847・0848
 152住=0856
 154住=0977・0978・0979・0980・0981
 155住=0961・0962・0963・0964・0965・0966・0967・0968・0969・0970・0971・0972

全体図32 古墳時代12・721~749m

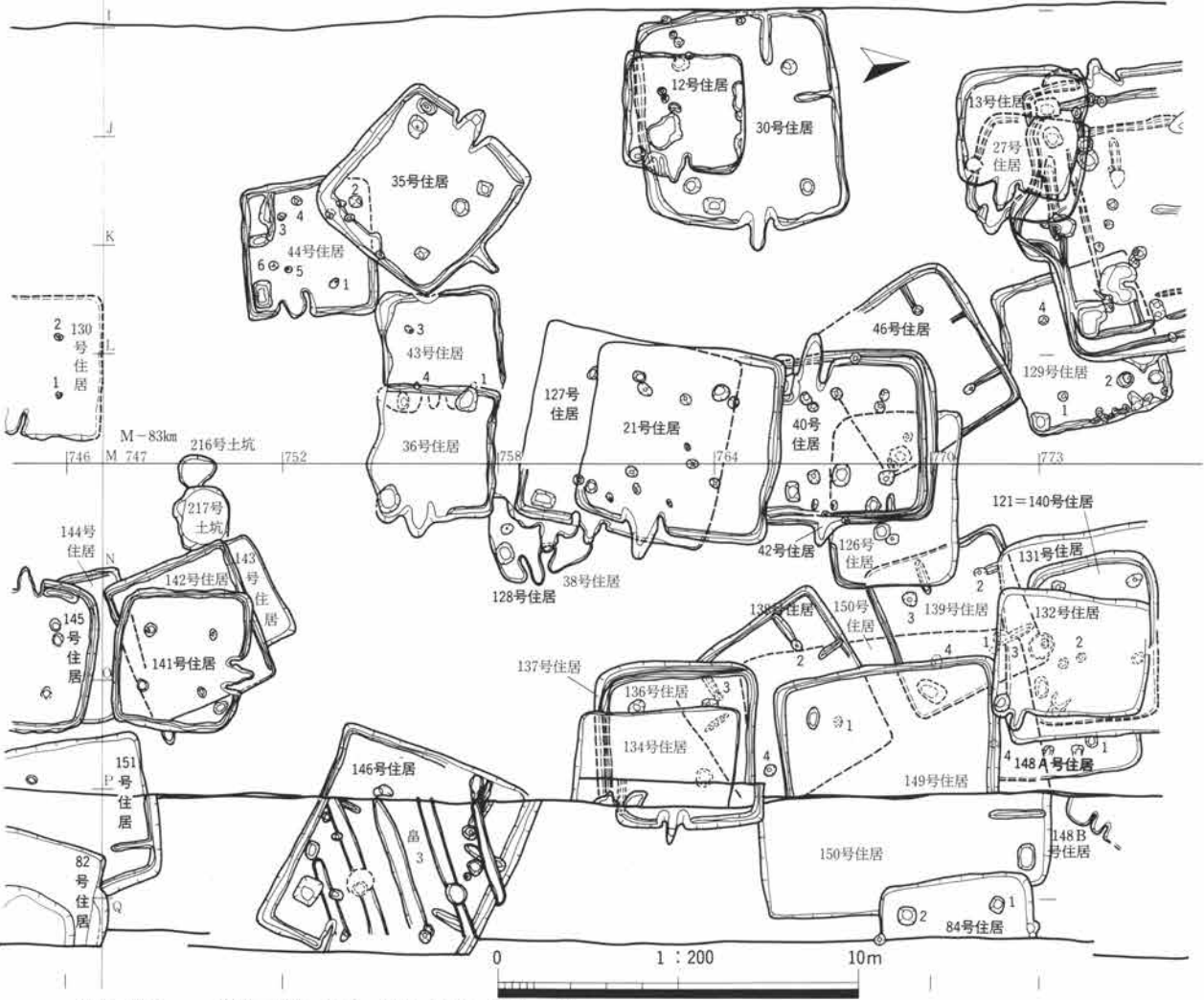
43住→36住,
128住→36住←43住→35住←44住,
138住→136住→137住→134住,

128住→38住→127住→21住←40住,
30住→12住
14・49住→27住→13住
150住←149住←148A住→148B住

139住→126住→42住→40住
↑
46住←129住→14・49・50住

↓
139住→126住
↓
150住=135住 ←149住

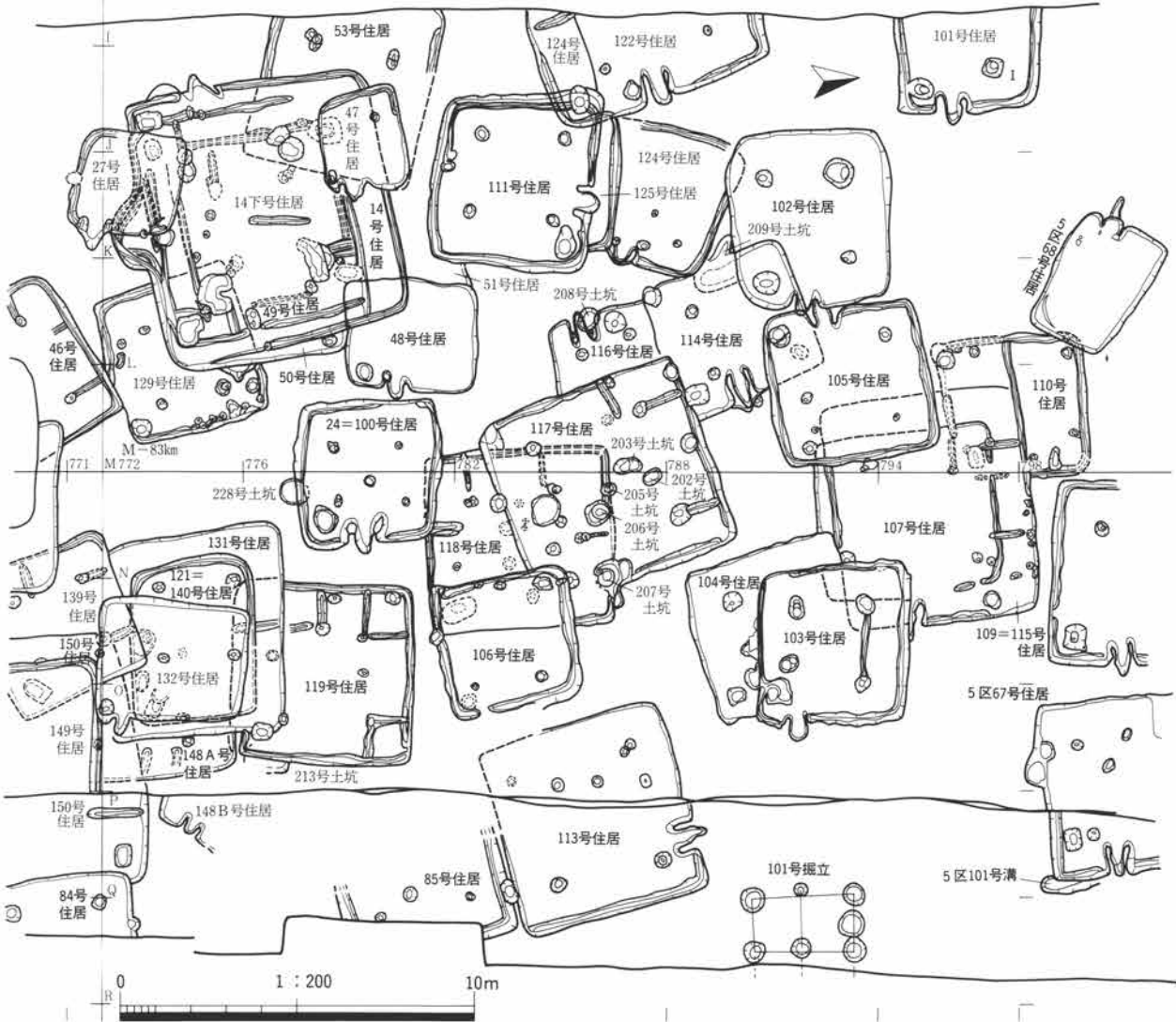
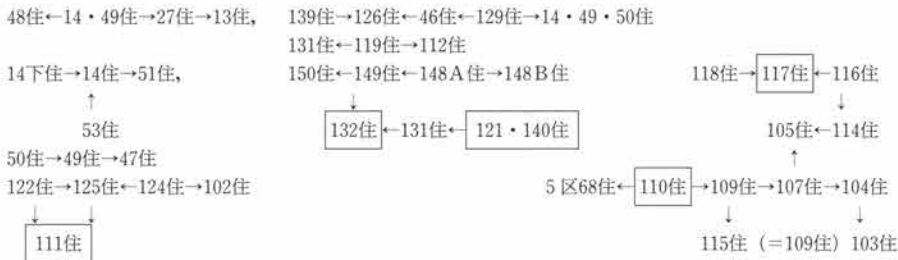
↓
84住 132住
↑
131住 ← 121・140住



- 12住=0914, 13住=1045・1046・1047・1048・1049・1050
 14住=1051・1052・1053・1054・1055・1056・1057・1058滑石製紡錘車, 21住=0929・0930・0931・0932・0933
 30住=0684・0915・0916・0917・0918・0919・0920・0959・0960, 35住=0894・0895・0896, 36住=0903・0904
 38住=0954 40住=0909・0910・0911, 43住=0899・0900滑石製劍形・0901滑石製劍形模造品・0902
 44住=0890・0891・0892・0893, 84住=1523・1524, 127住=0955・0956・0957・0958
 128住=0938・0939・0940・0941・0942・0943・0944・0945・0946・0947・0948・0949, 129住=1021・1022・1023
 130住=0864・0865・0866・0867・0868・0869・0870・0871・0872・0873・0874・0875・0876・0877・0878・0879
 0880・0881, 135住=1092・1093, 137住=1089・1090・1091, 141住=0849, 142住=0850・0851
 145住=0840・0841・0842・0843・0844・0845・0846・0847・0848, 149住=1096滑石製白玉・1097・1098・1099
 146住=0982・0983・0984・0985・0986・0987・0988・0989, 150住=1064・1065・1066・1067

全体図33 古墳時代13・746~774m

第4章 全体图



- 14住=1051·1052·1053·1054·1055·1056·1057·1058滑石製紡錘車
 84住=1523·1524, 85住=1068·1069·1070, 101住=1071·1072·1073
 102住=0995, 103住=0996·0997·0998, 104住=0999·1525
 105住=0991, 106住=1035·1036·1037·1038·1039, 107住=1008, 110住=1006·1007滑石製曲玉
 111住=0686鉄·1009·1010·1011·1012·1013·1014·1015, 113住=1075·1076·1077
 114住=0992·0993·0994, 117住=1078, 119住=1079·1080·1081
 122住=1082·1083·1084·1085·1086·1087·1088
 129住=1021·1022·1023
 149住=1096滑石製白玉·1097·1098·1099
 150住=1064·1065·1066·1067

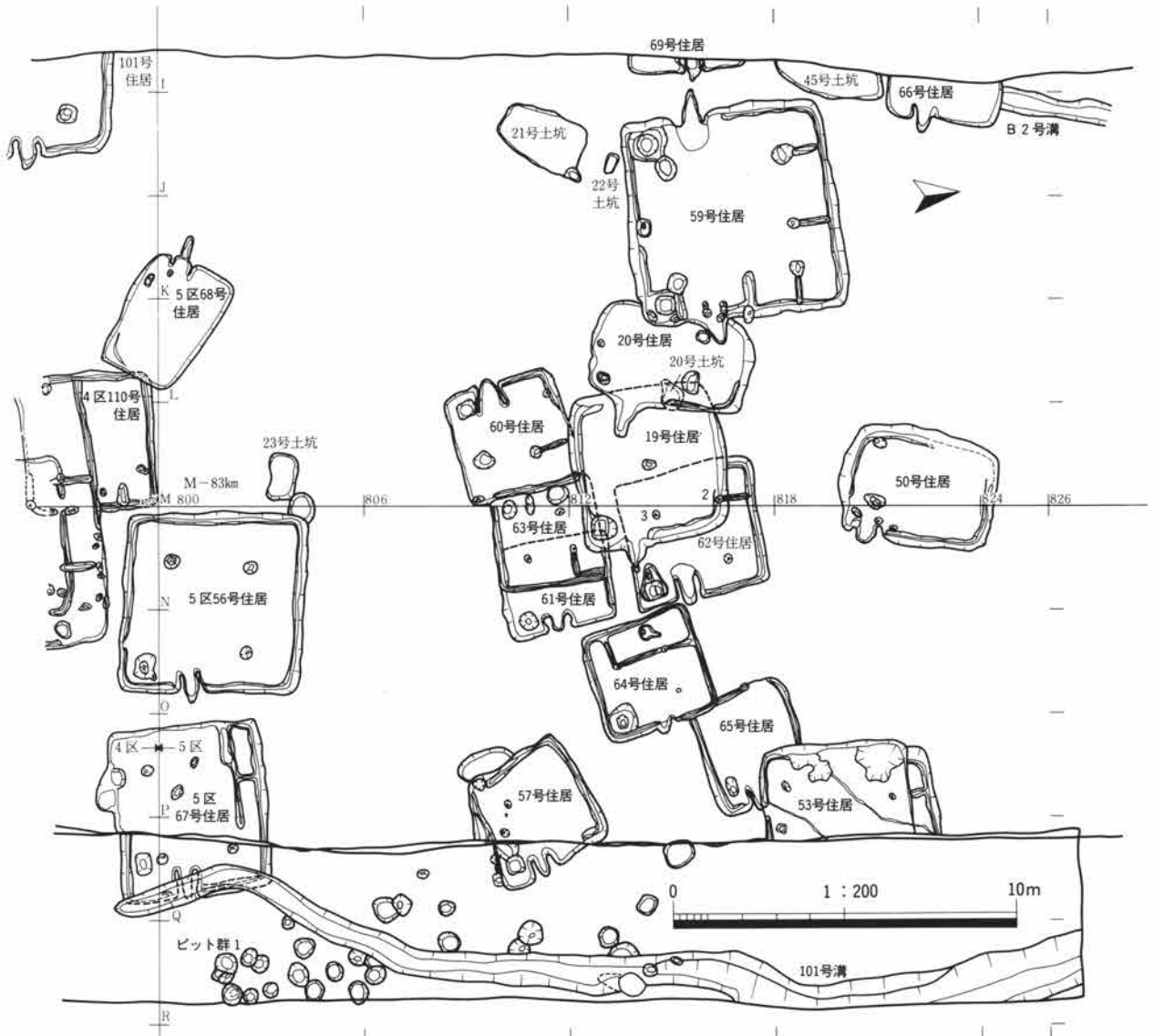
全体图34 古墳時代 14・771~799m

4区109住←4区110住→5区68住, 53住←65住→64住

B2溝→66住

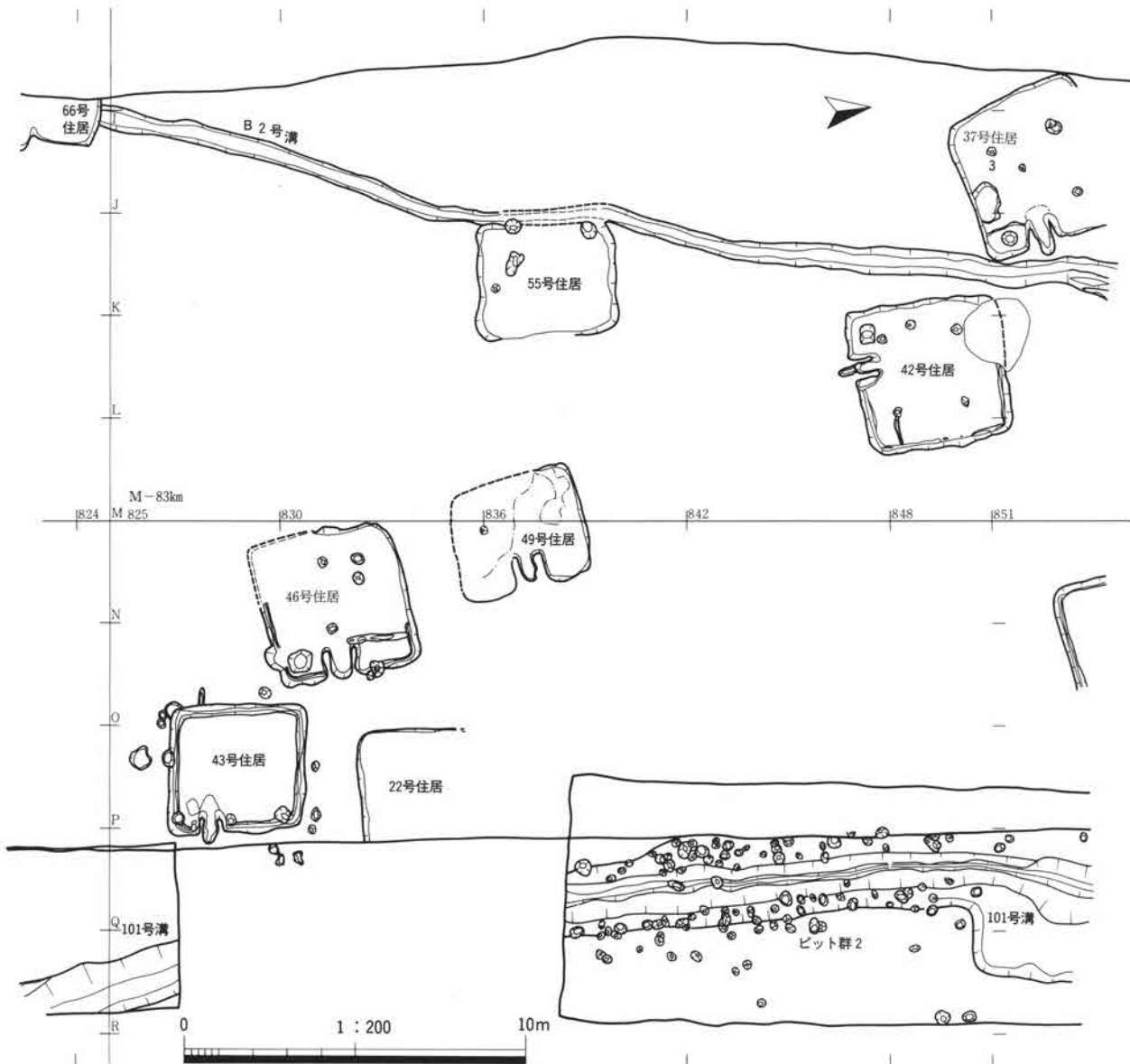
61住→63住→60住→19住←62住

↓
20住



- 4区101住=1071・1072・1073, 109住=1074, 110住=1006・1007滑石製曲玉
 5区19住=1154・1155, 20住=1120・1121, 50住=1156, 53住=1125・1126・1127
 56住=1102・1103・1104・1105・1106・1107・1108, 57住=1116・1117・1118・1119
 59住=0688鉄刀子, 60住=1128・1129・1130・1131・1132・1133・1134
 61住=1145・1146・1147・1148・1149, 62住=1150・1151・1152・1153
 63住=1236・1237・1238・1239・1240, 64住=1139・1140・1141・1142・1144
 65住=1135・1136・1137・1138, 66住=1160・1161・1162
 67住=1110・1111・1112・1113・1114・1115, 68住=1283
 B2溝=1326・1327, 101溝=1322・1323・1324・1325埴輪
 23坑=1331

全体図35 古墳時代15・798~827m



- 22住 = 1253
- 37住 = 1279・1280
- 41住 = 1179・1180・1181滑石製紡錘車・1182・1183・1184・1185・1186・1187 (1183~1187滑石製白玉)
- 42住 = 1218・1219
- 43住 = 1197・1198
- 46住 = 1257・1258・1259・1260・1261・1262・1263・1264・1265
- 49住 = 1169・1170・1171・1172・1173, B 2 溝 = 1326・1327
- 66住 = 1160・1161・1162, 101 溝 = 1322・1323・1324・1325埴輪

全体図36 古墳時代16・824~852m

34住→35住, 47坑→39住→46坑
 B 2 溝→38住→48住←47住
 ↑
 52住
 40住→39住
 B 2 溝→51住
 44住→31住



- 31住=1306・1307・1308・1309・1310・1311・1312・1313, 33住=1188・1189・1190・1191
 34住=1192・1193・1194・1195・1196, 35住=1205・1206・1207・1208・1209
 36住=1220・1221・1222・1223・1224・1225・1226・1227・1228・1229・1230
 37住=1279・1280, 38住=1269・1270・1271・1272・1273・1274
 39住=1210・1211・1212
 41住=1179・1180・1181滑石製紡錘車・1182・1183・1184・1185・1186・1187 (1183~1187滑石製白玉)
 42住=1218・1219, 47住=1199・1200・1201・1202・1203・1204
 48住=0518・1241・1242・1243・1244・1245・1246・1247・1248・1249・1250
 52住=1234・1235, B 2 溝=1326・1327, 101溝=1322・1323・1324・1325埴輪

全体図37 古墳時代17・849~877m

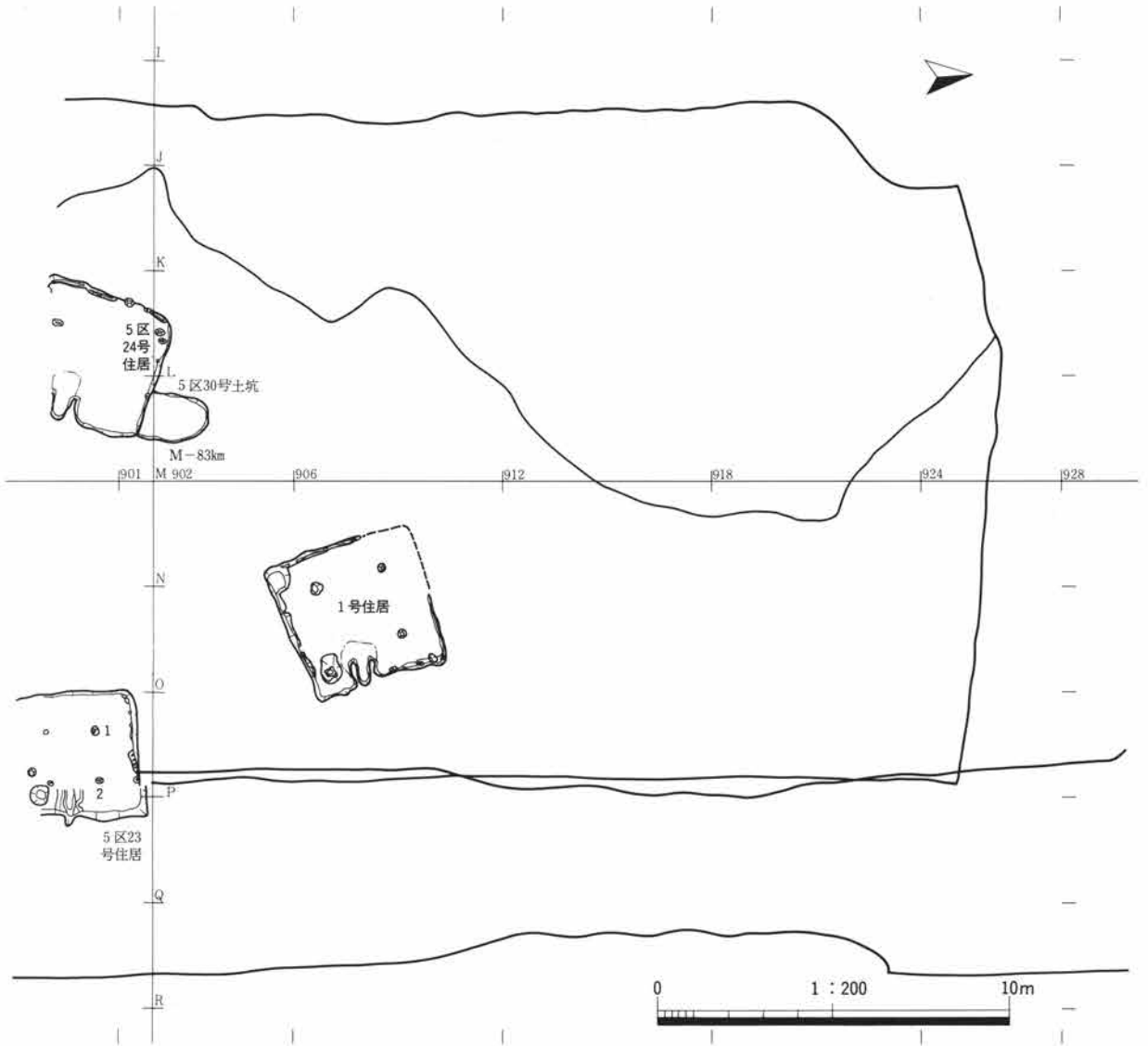
第4章 全体図

47住→48住, 24住→30坑
 25住→27住←30住
 B 2 溝→51住→28住
 44住→31住



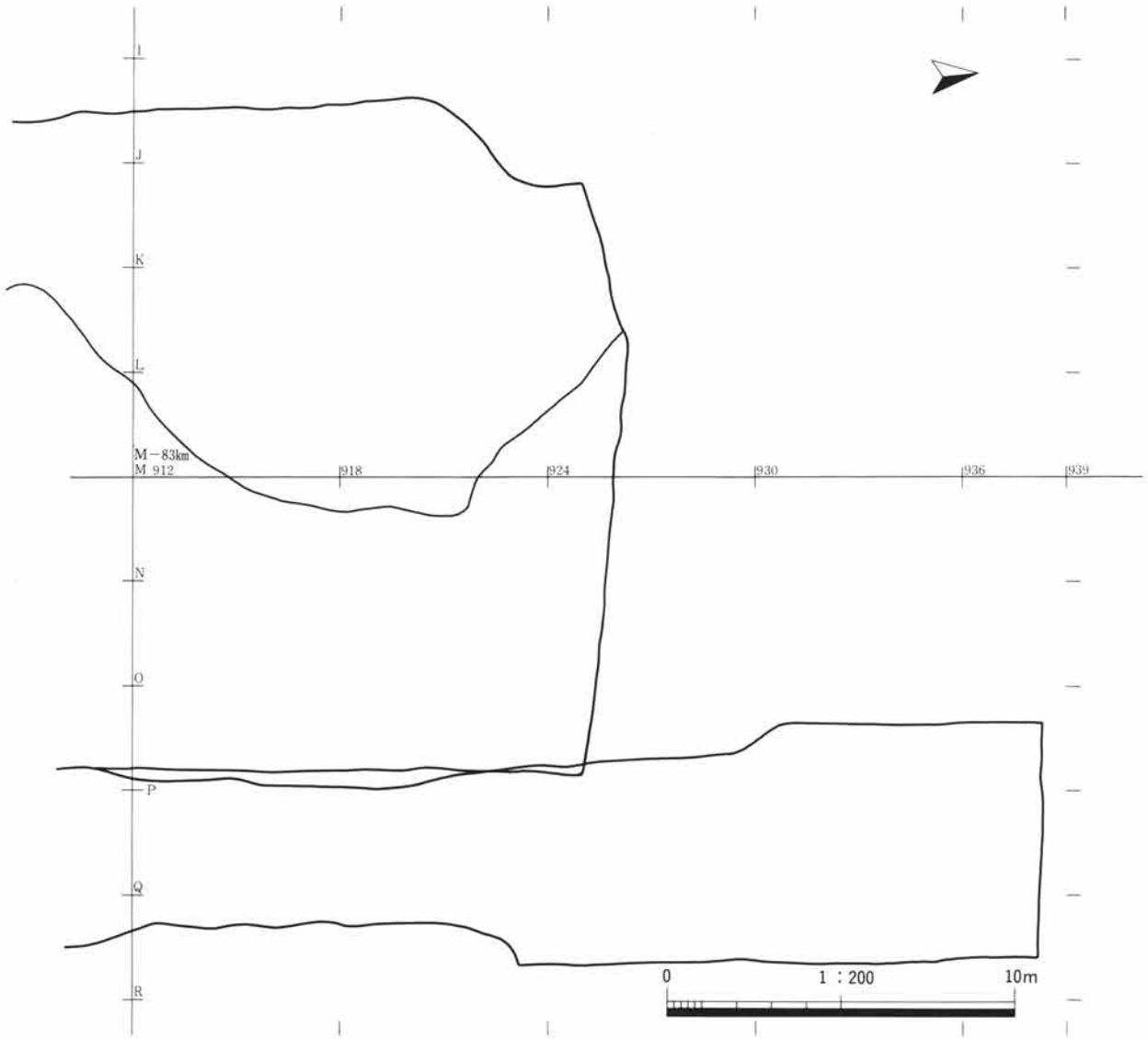
- 23住=1109・1266・1267・1268
 24住=1284・1285・1286・1287・1288・1289・1290, 25住=1277・1278
 26住=1299・1300・1301・1302・1303・1304・1305滑石製紡錘車
 27住=0505・0506・0507・0508・0509・0510・0511・0512・0513・0514・0515・0516・0517・0519・0520・0521
 0522・0523・0524・0525・0526・0527・0528・0529・0530・0531・0532・0533・0534
 28住=1275・1276滑石製玉, 30住=1314・1315・1316・1317・1318・1319
 31住=1306・1307・1308・1309・1310・1311・1312・1313, 32住=1291, 33住=1188・1189・1190・1191
 44住=1292・1293・1294・1295・1296・1297・1298, 47住=1199・1200・1201・1202・1203・1204
 48住=0518・1241・1242・1243・1244・1245・1246・1247・1248・1249・1250, 43坑=1332・1333
 101溝=1322・1323・1324・1325埴輪

5区24住→30坑

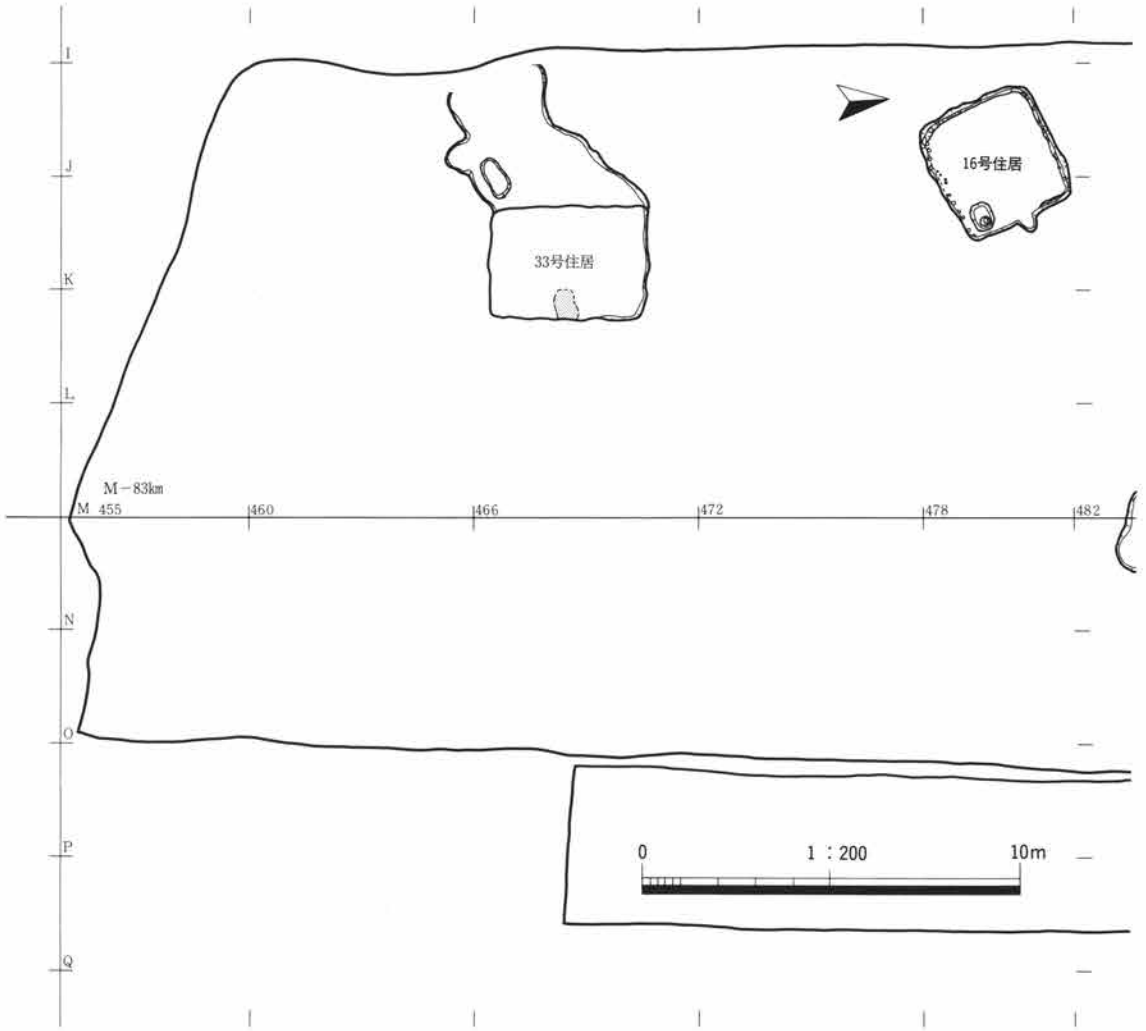


- 5区 23住=1109・1266・1267・1268
 24住=1284・1285・1286・1287・1288・1289・1290
 6区 1住=1336

全体図39 古墳時代19・901~929m



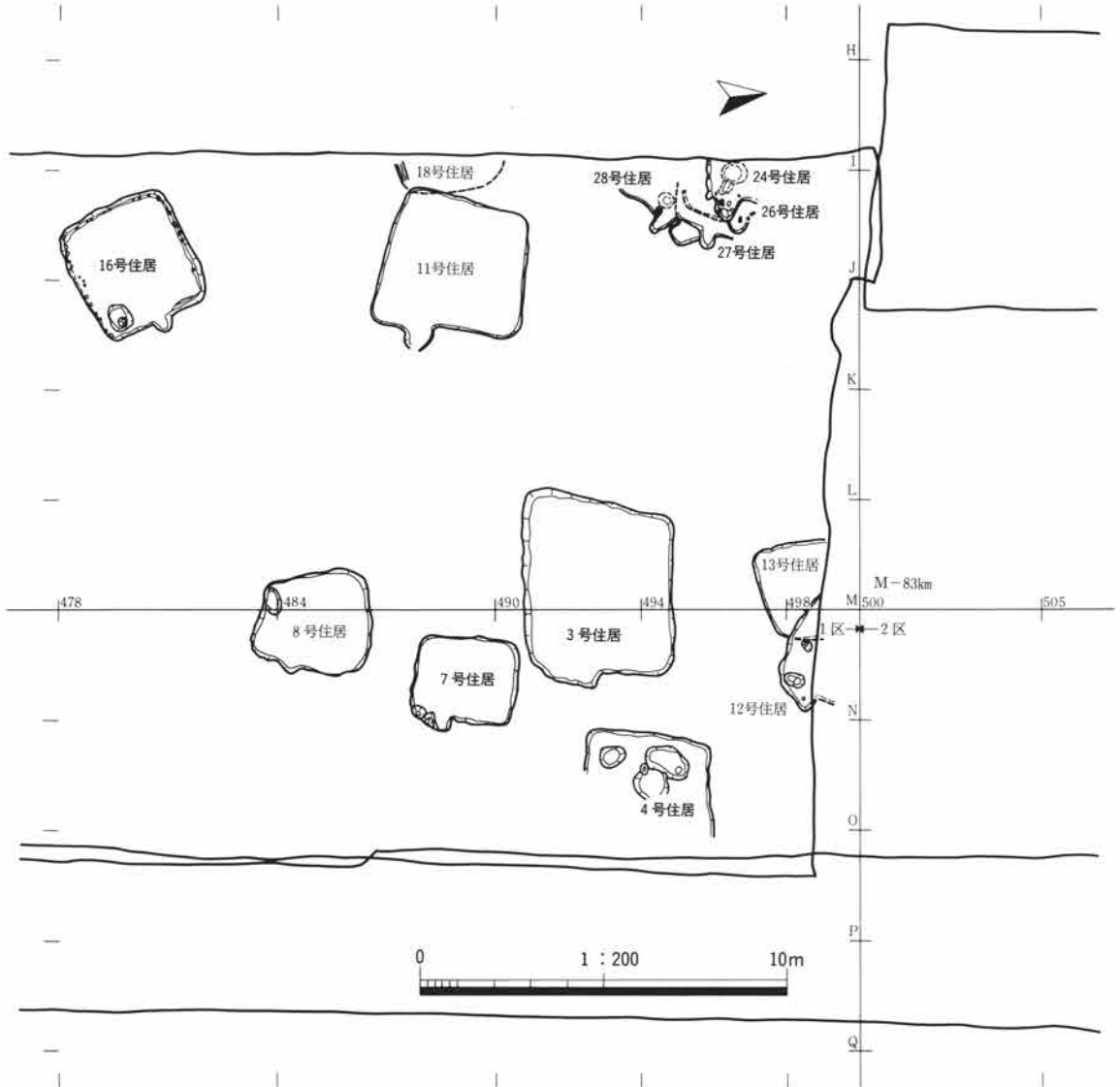
全体図40 古墳時代20・912~940m



全体図41 奈良・平安時代1・454~483m

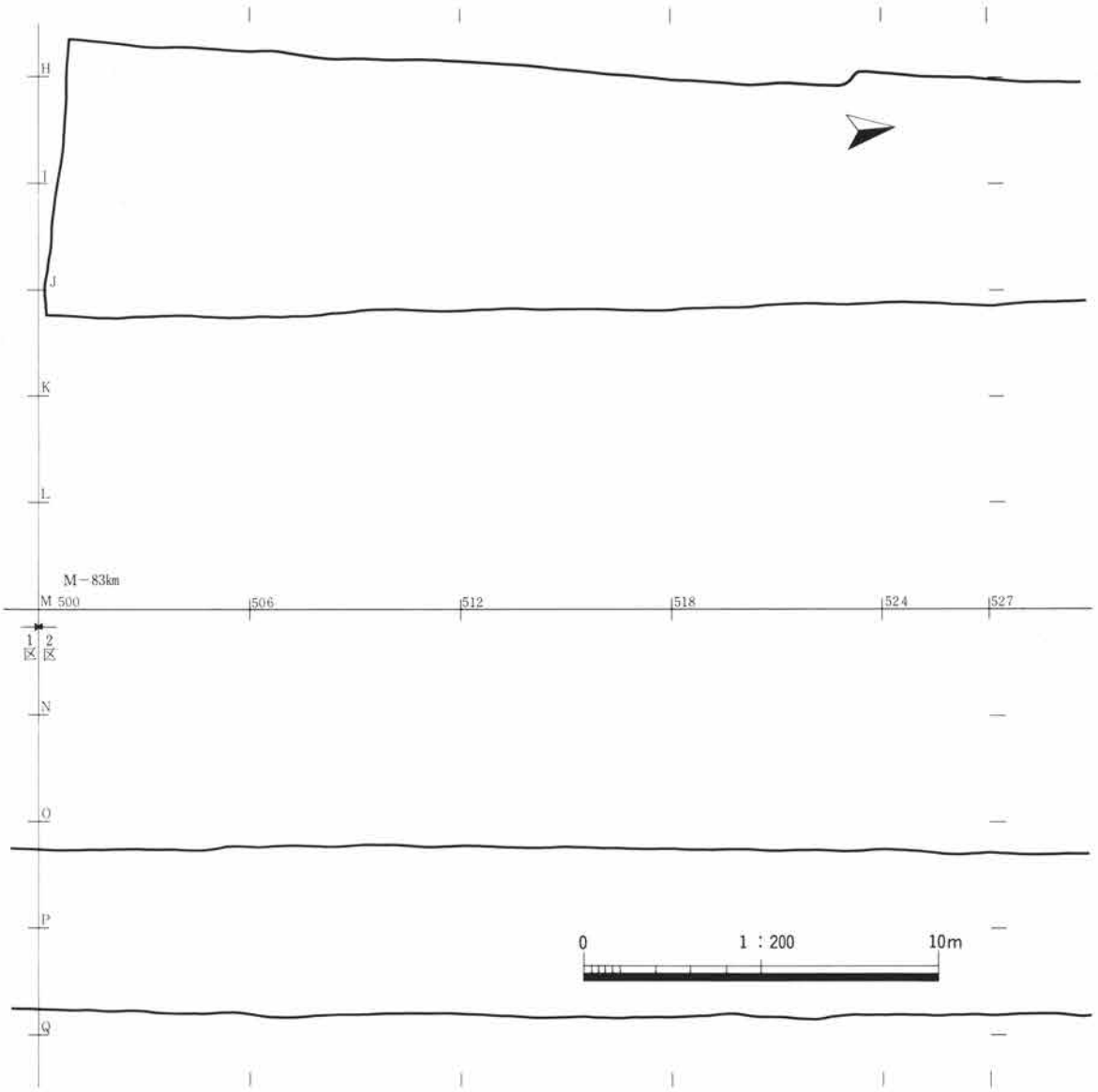
第4章 全体図

28住→27住→26住→24住, 13住→12住

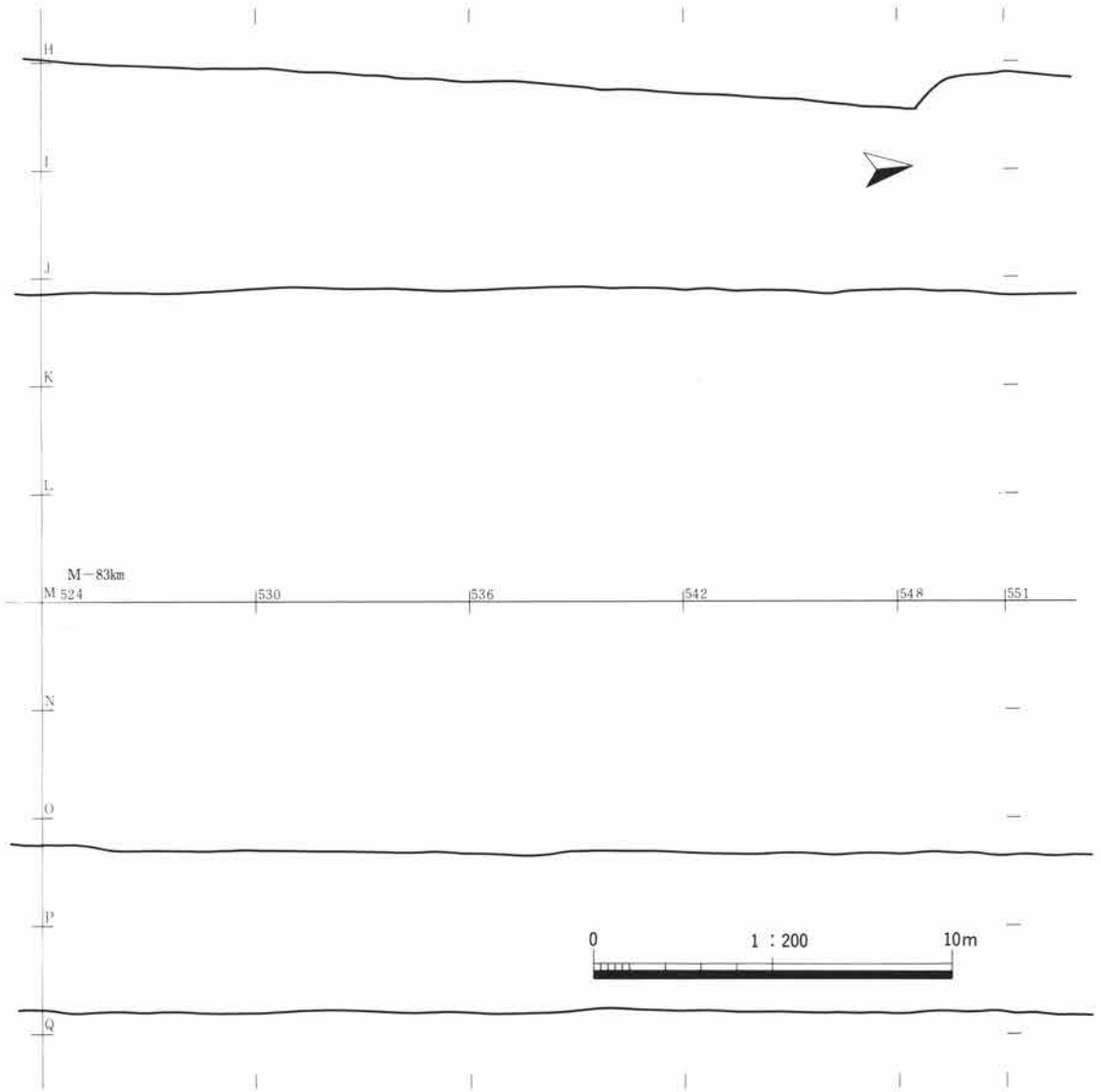


- 3住=0079・0080灰釉陶器, 4住=0008灰釉陶器・0009
 7住=0011・0012・0013, 8住=0014・0015
 11住=0023・0024
 12住=0025灰釉陶器
 13住=0670
 18住=0040灰釉陶器
 24住=0066・0067灰釉陶器
 26住=0068灰釉陶器・0069
 27住=0070
 28住=0107・0108・0109・0110・0111・0112・0113・0114・0115・0116

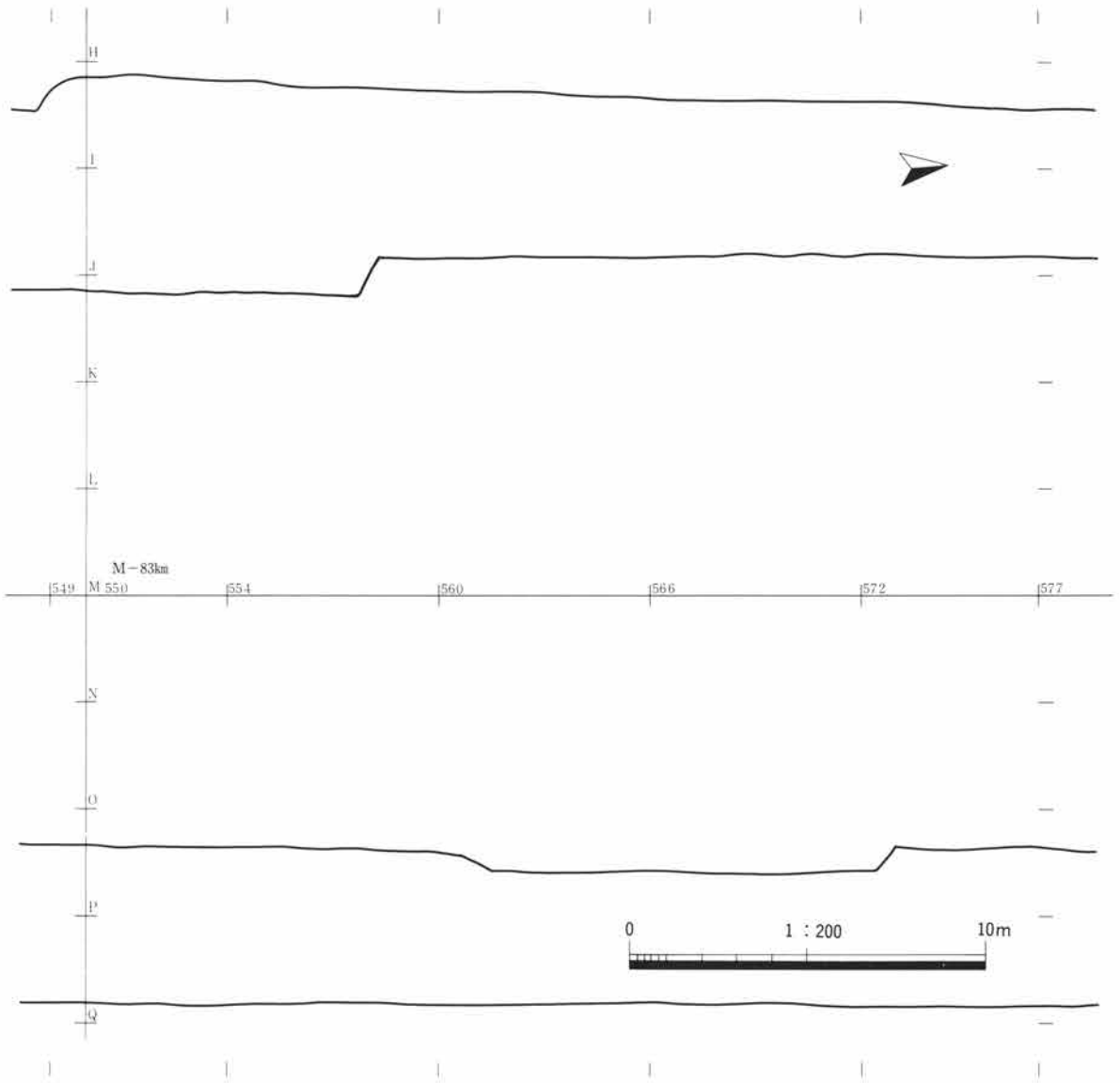
全体図42 奈良・平安時代2・478~506m



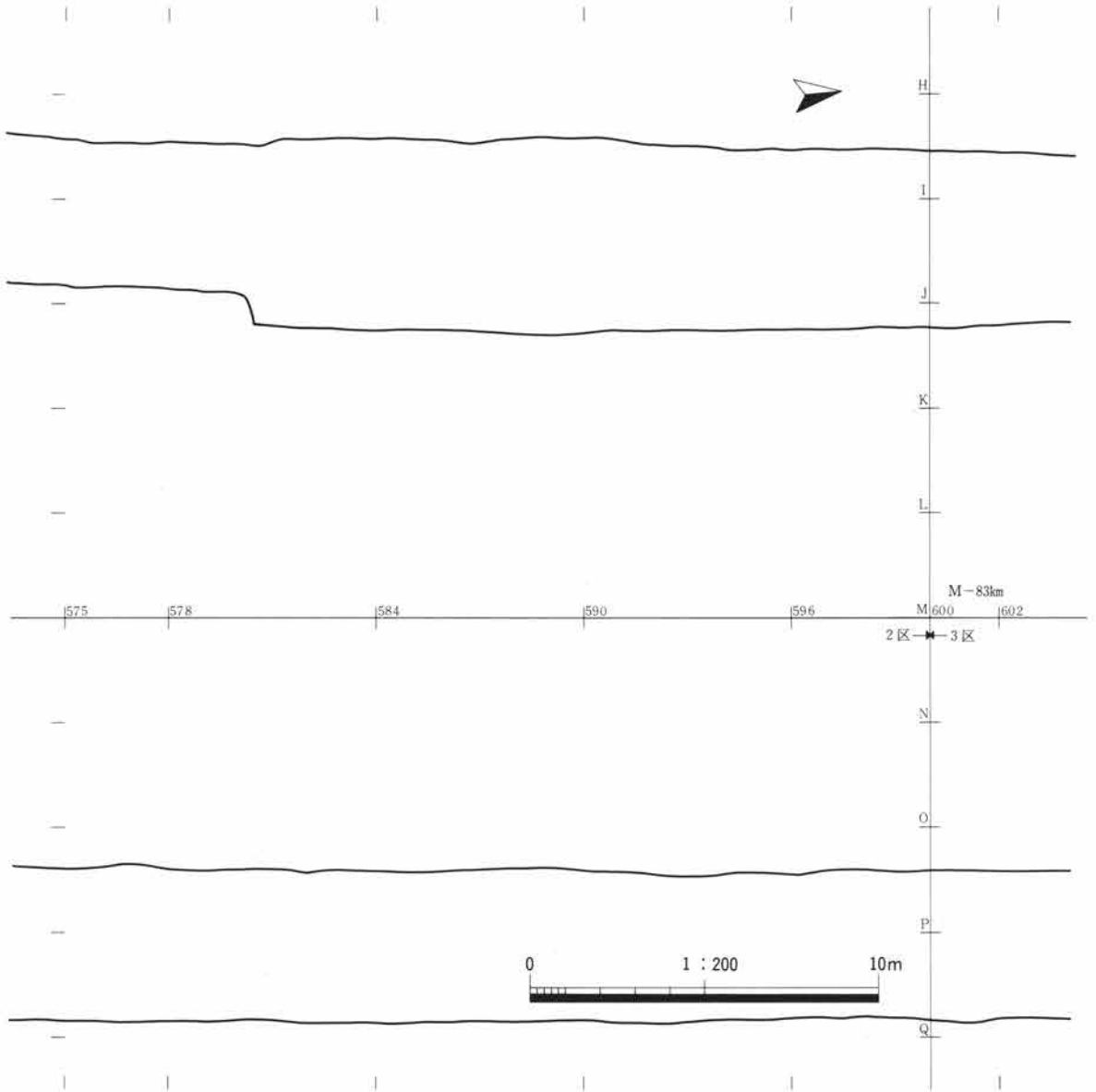
全体図43 奈良・平安時代3・500~528m



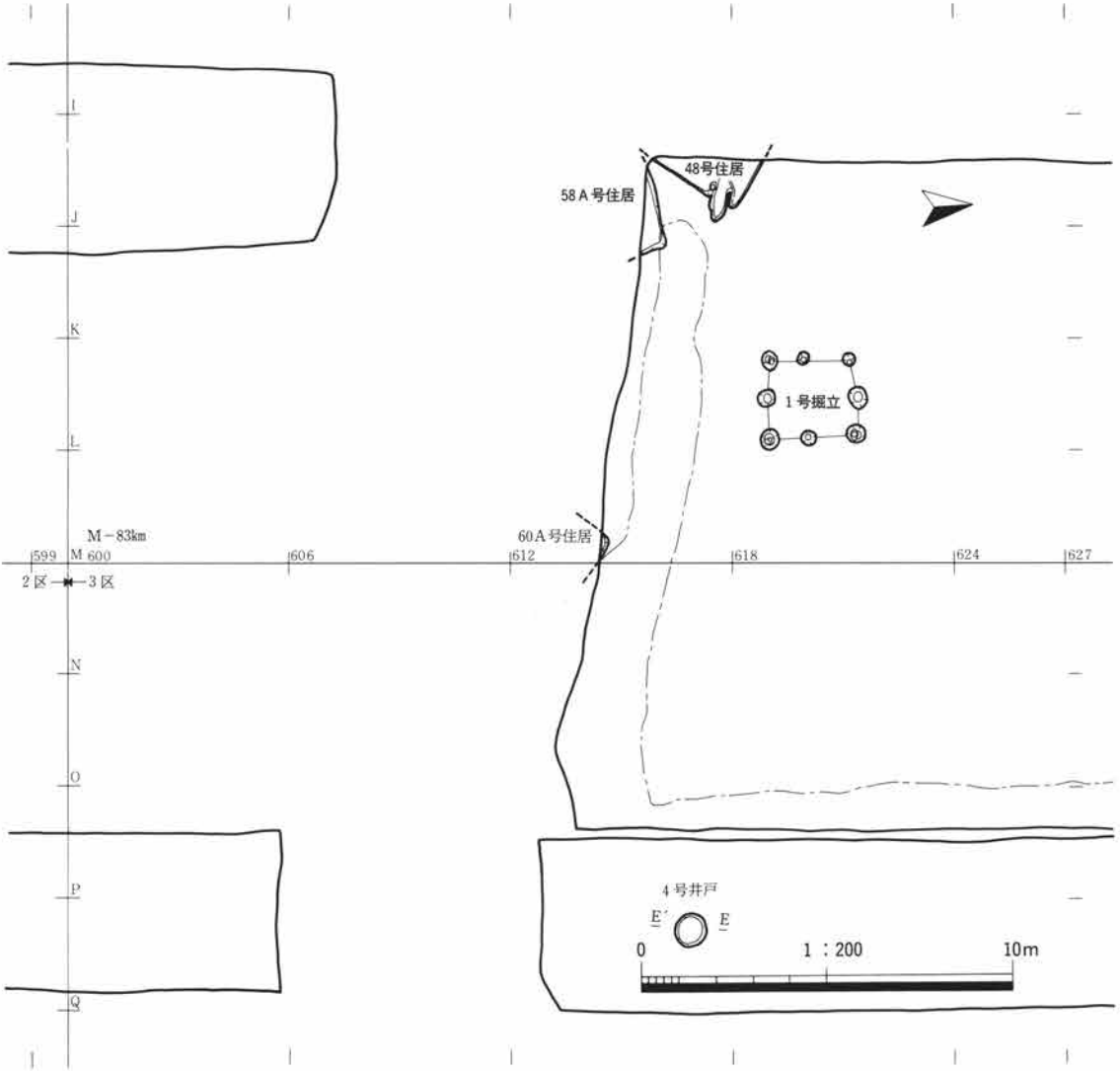
全体図44 奈良・平安時代4・524~552m



全体図45 奈良・平安時代5・549~577m

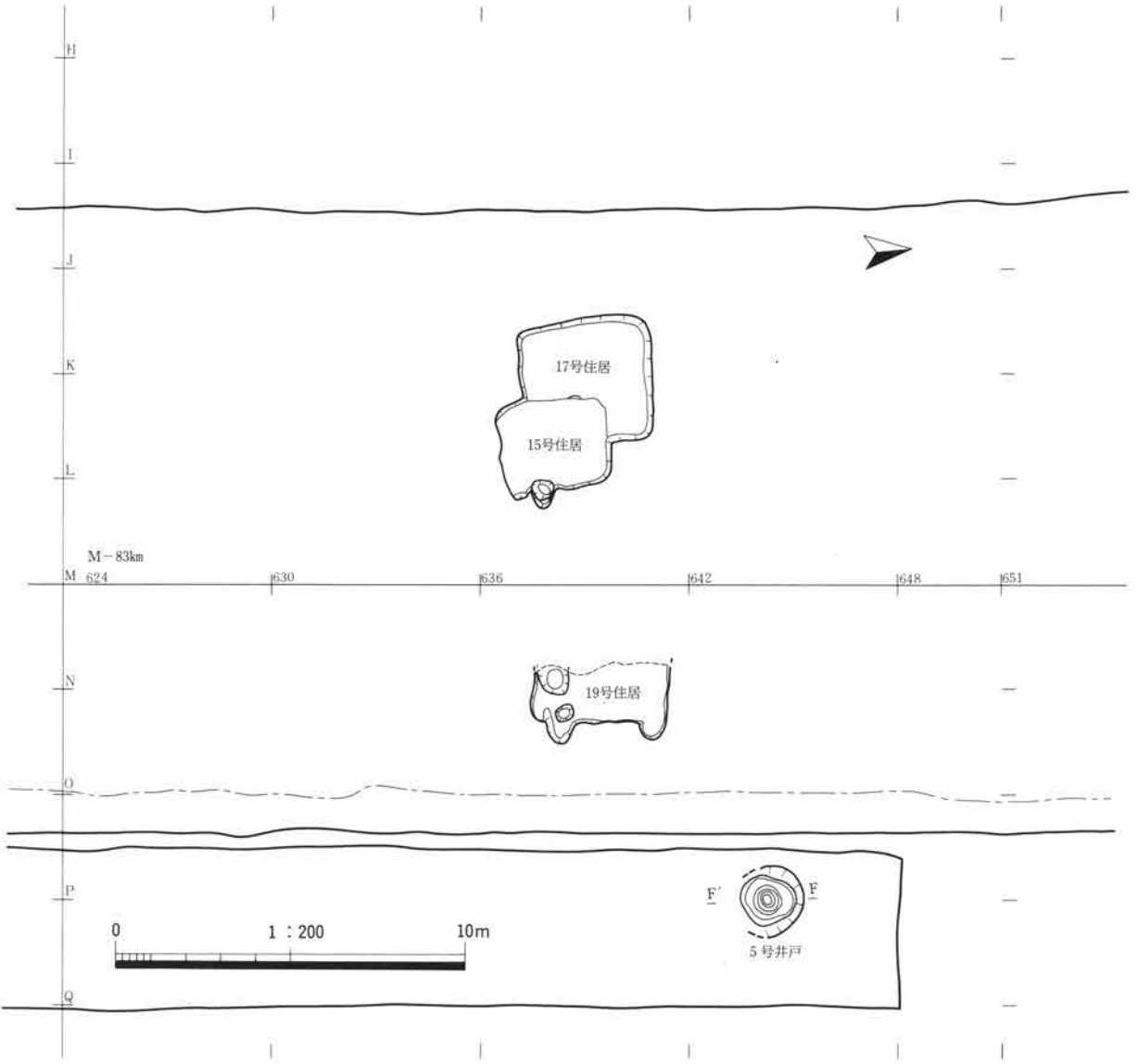


全体図46 奈良・平安時代6・575~602m



全体図47 奈良・平安時代7・600~627m

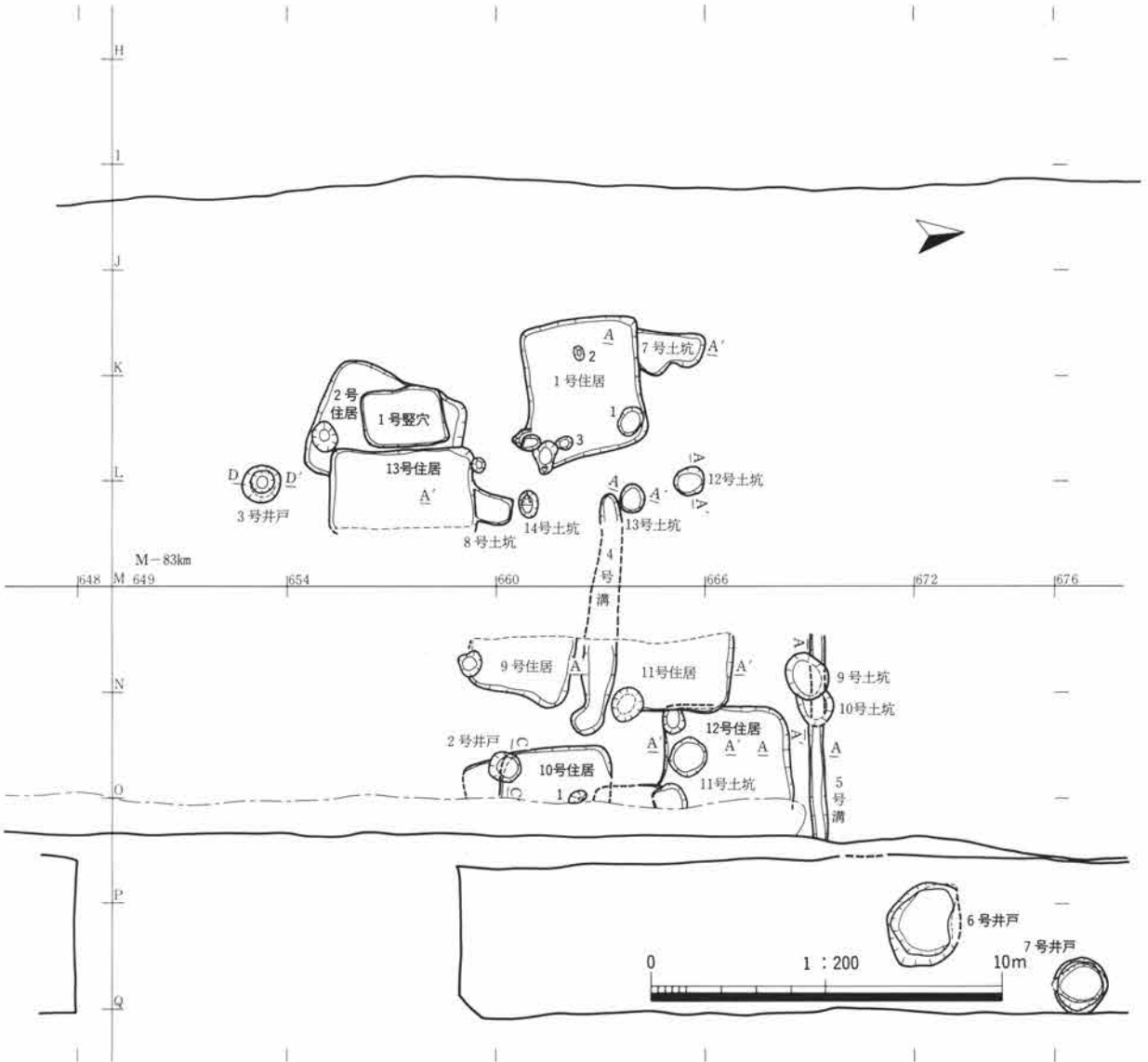
17住→15住



15住=0349・0350・0351・0352滑石製玉
19住=0654・0655・0656・0657・0658・0673鉄
5井=0662・0663

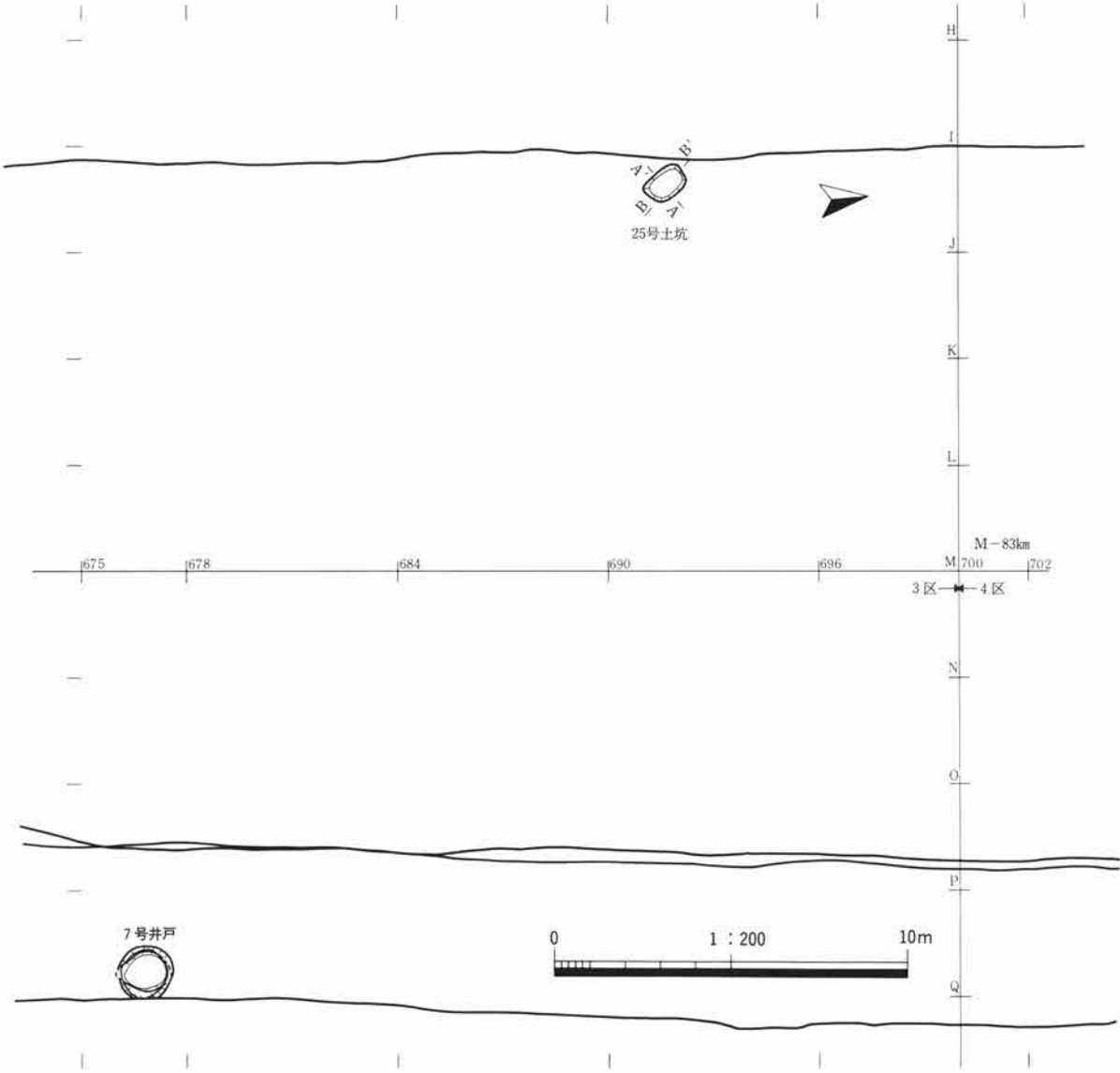
全体図48 奈良・平安時代8・624~652m

1住→7坑, 11住→4溝
 8坑→13住←2住→1竪, 10住→2井
 5溝→10坑→9坑, 11坑←12住→11住



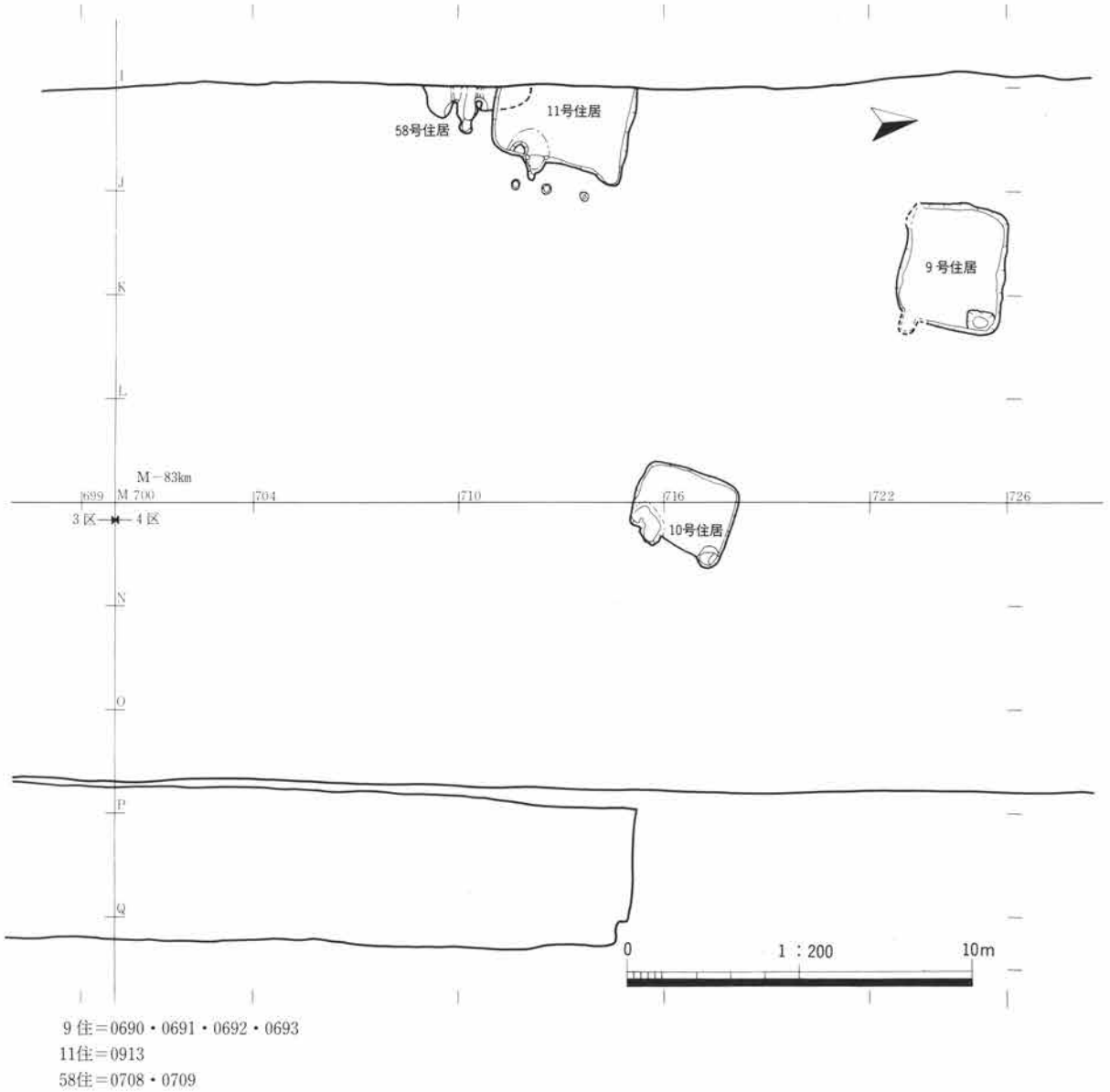
1住=0456・0457灰釉陶器・0458・0671鉄
 2住=0459灰釉陶器
 11住=0460灰釉陶器・0461
 12住=0462・0463・0464
 11坑=0666

全体図49 奈良・平安時代9・648~677m



全体図50 奈良・平安時代10・674~703m

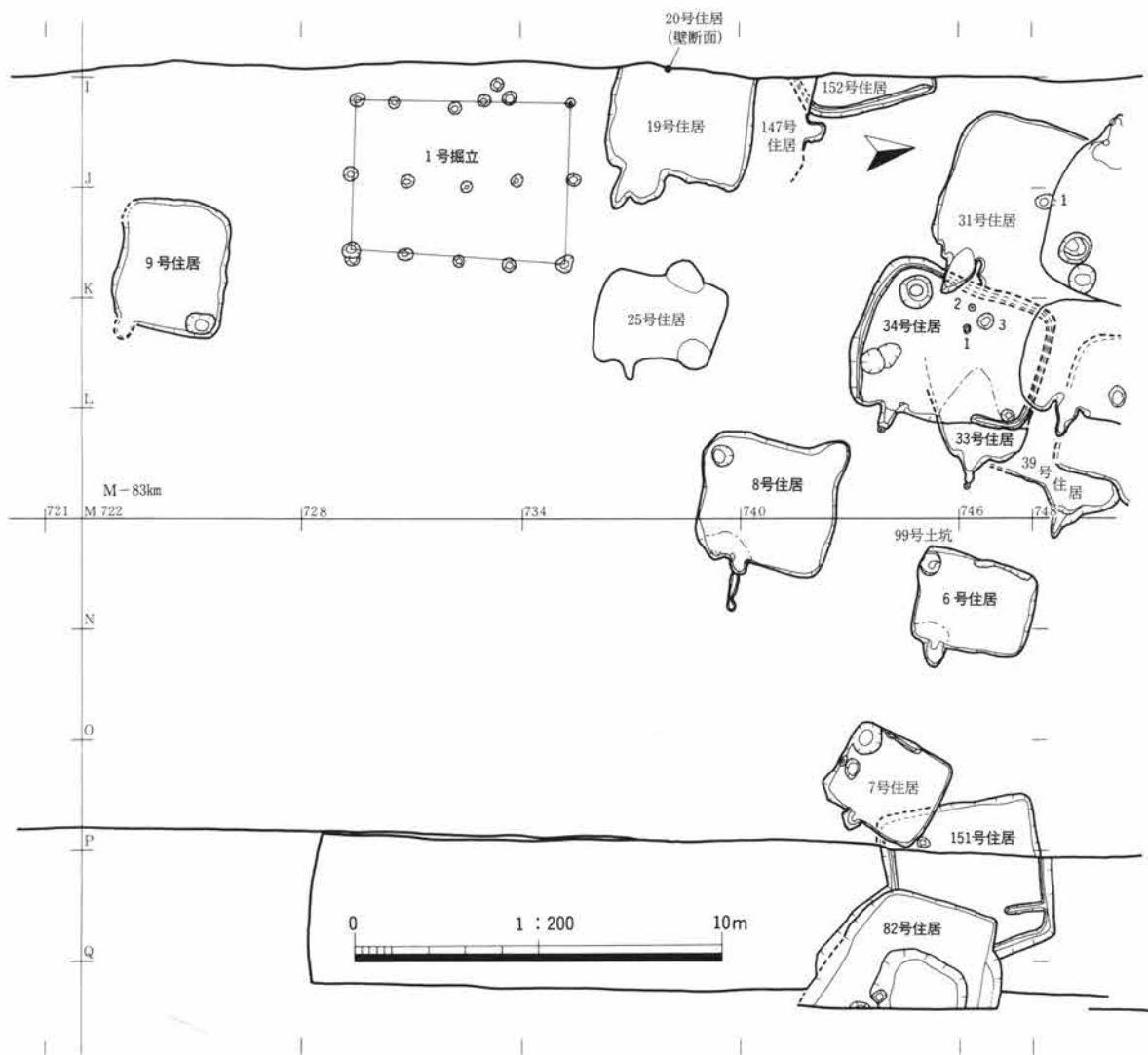
58住→11住



全体図51 奈良・平安時代11・698m~727m

第4章 全体図

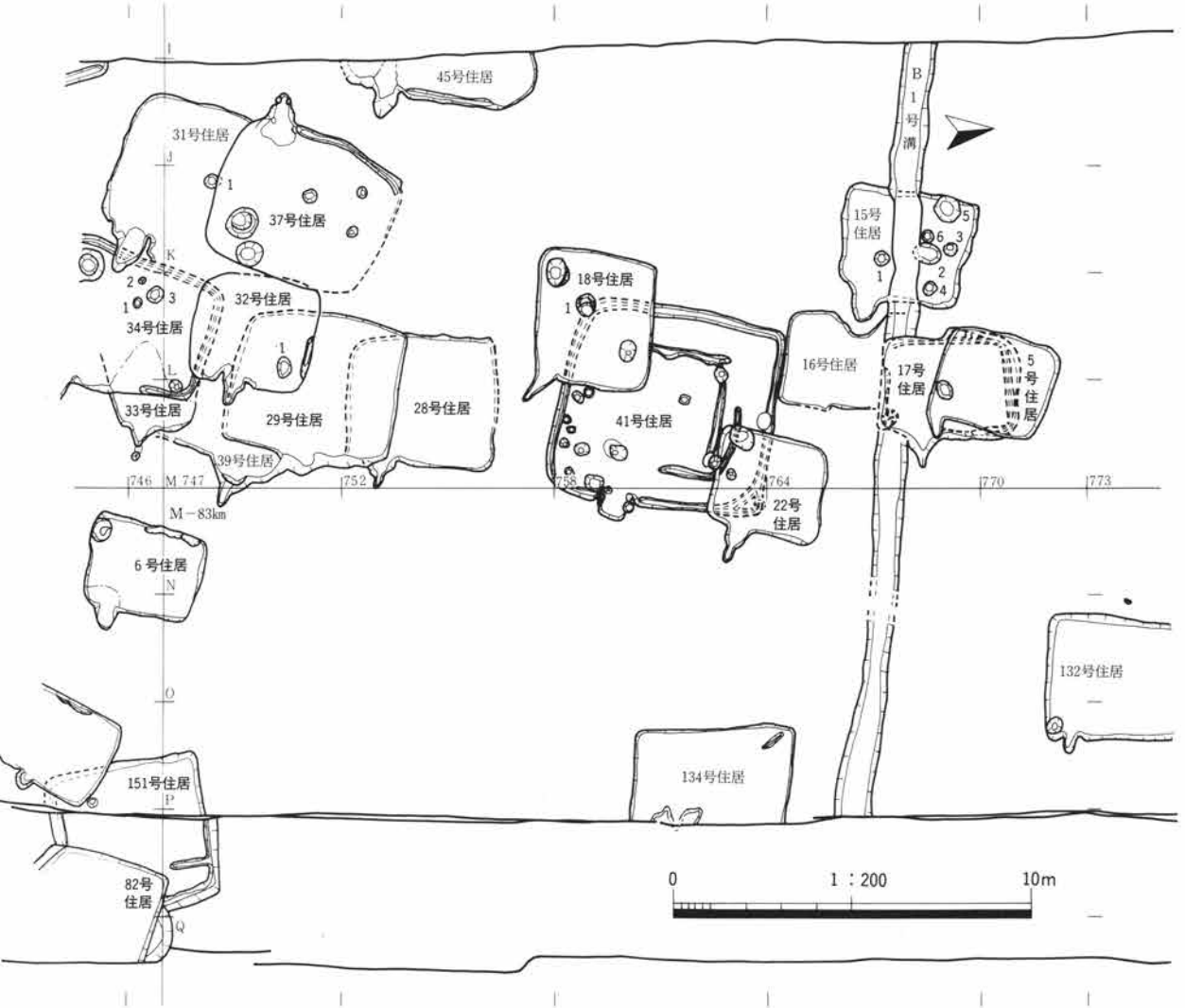
82住←151住→7住, 152住→147住
 39住→29住→34住→32住→31住→37住
 ↑ ↑
 28住 33住



- 6住=0912, 7住=0837・0838灰釉陶器・0839
- 8住=0682鉄・0683鉄・0836, 9住=0690・0691・0692・0693
- 19住=0829・0830灰釉陶器・0831
- 29住=0885黒色土器・0886黒色土器・0887黒色土器・0888・0889
- 32住=0882・0883・0884滑石製剣形玉
- 33住=0862灰釉陶器・0863
- 34住=0857・0858・0859・0860・0861
- 37住=0852・0853・0854・0855
- 147住=0925・0926・0927・0928
- 152住=0856

全体図52 奈良・平安時代12・721~749m

39住→29住→34住→32住→31住→37住, 17住→5住
 ↑
 28住
 18住←41住→22住

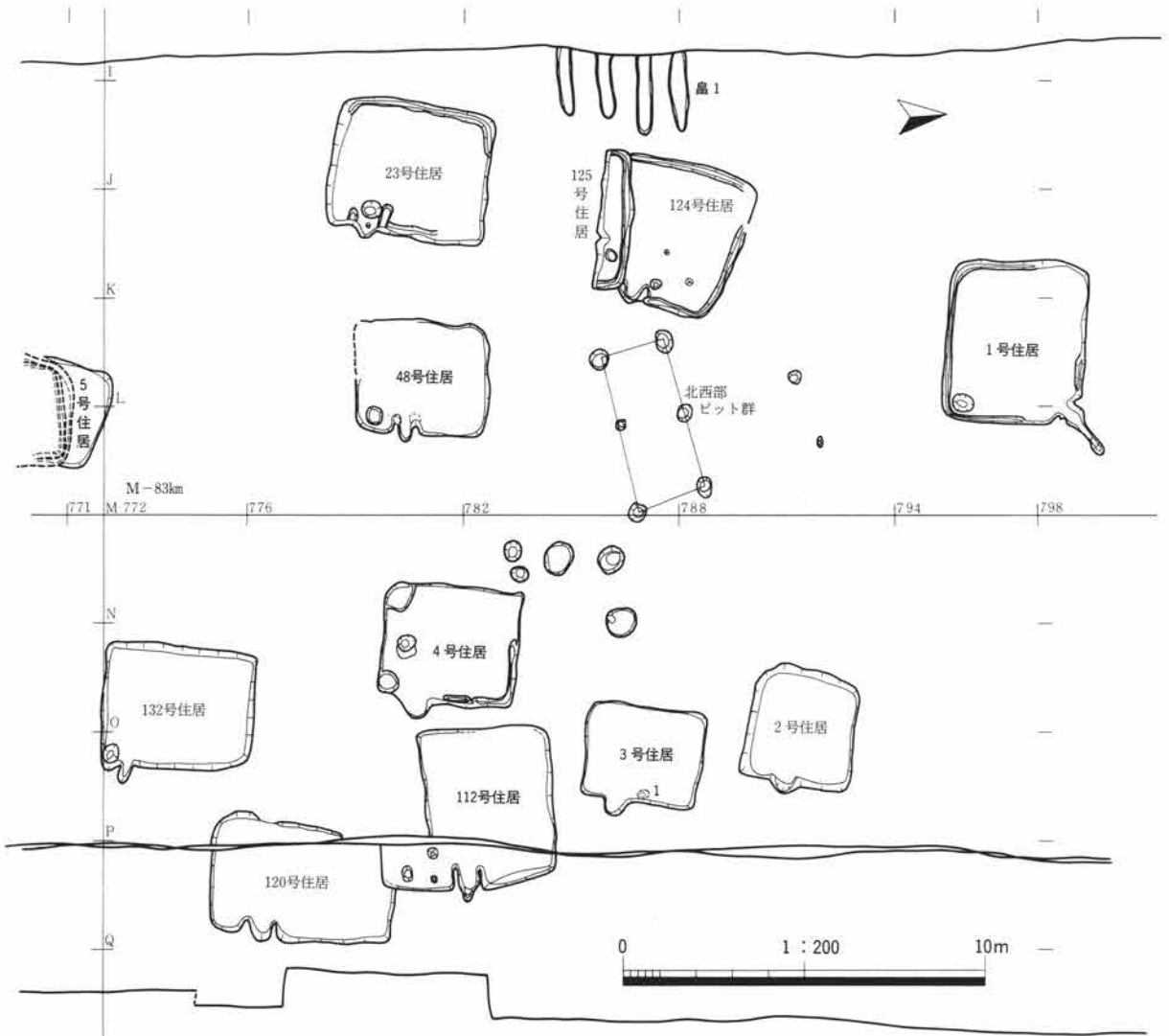


- 6住=0912, 7住=0837・0838灰釉陶器・0839
 15住=0921, 17住=1059・1060・1061・1062
 18住=0897・0898円筒形土製品, 22住=0953灰釉陶器
 29住=0885黒色土器・0886黒色土器・0887黒色土器・0888・0889
 32住=0882・0883・0884滑石製剣形玉
 33住=0862灰釉陶器・0863
 34住=0857・0858・0859・0860・0861
 37住=0852・0853・0854・0855
 41住=0905・0906・0907・0908
 45住=0922・0923

全体図53 奈良・平安時代13・746~774m

第4章 全体図

124住→125住



1住=0681鉄・1000円筒形土製品・1001円筒埴輪・1002円筒埴輪・1003円筒形土製品・1004円筒形土製品・1005

2住=1042

3住=1040・1041

4住=1026・1027・1028・1029

15住=0921

23住=1016・1017・1018・1019・1020

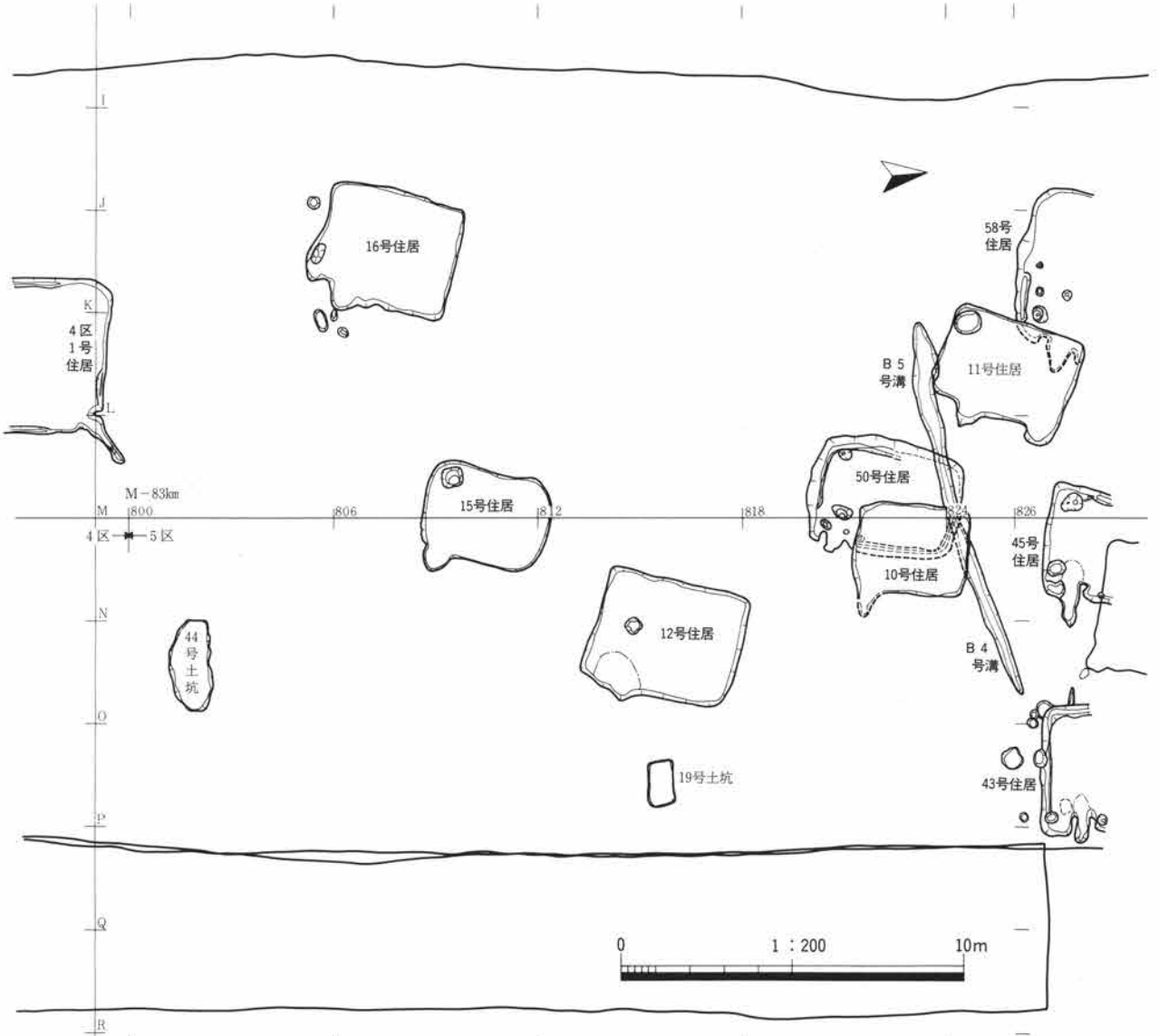
112住=1024・1025

113住=1075・1076・1077

120住=1032・1033・1034

全体図54 奈良・平安時代14・771~799m

50住→10住
58住→11住
45住→9住

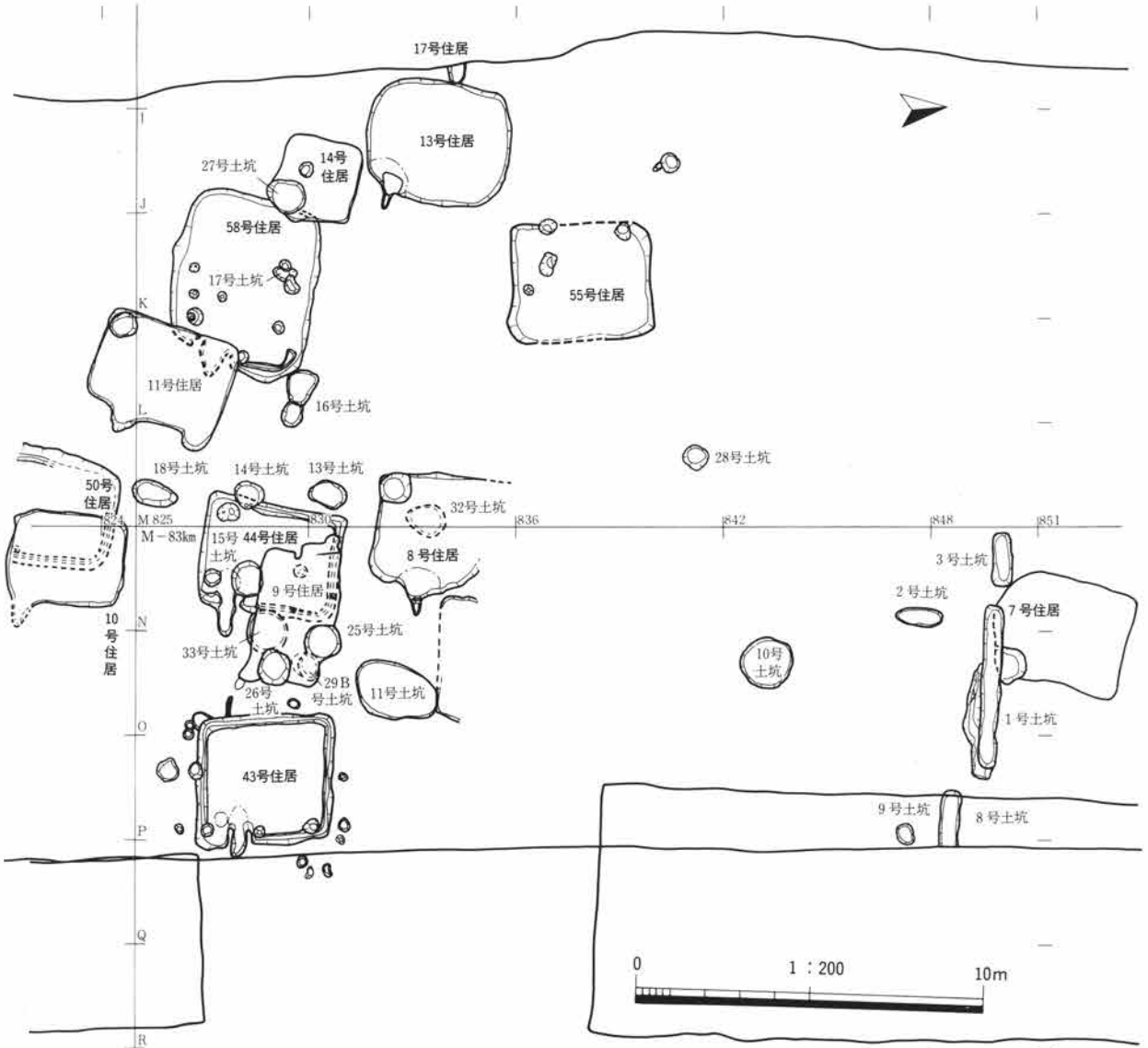


10住=1157・1158・1159
11住=1232内黒・1233内黒
12住=0687鉄・刀子・1122・1123・1124灰釉陶器
50住=1156

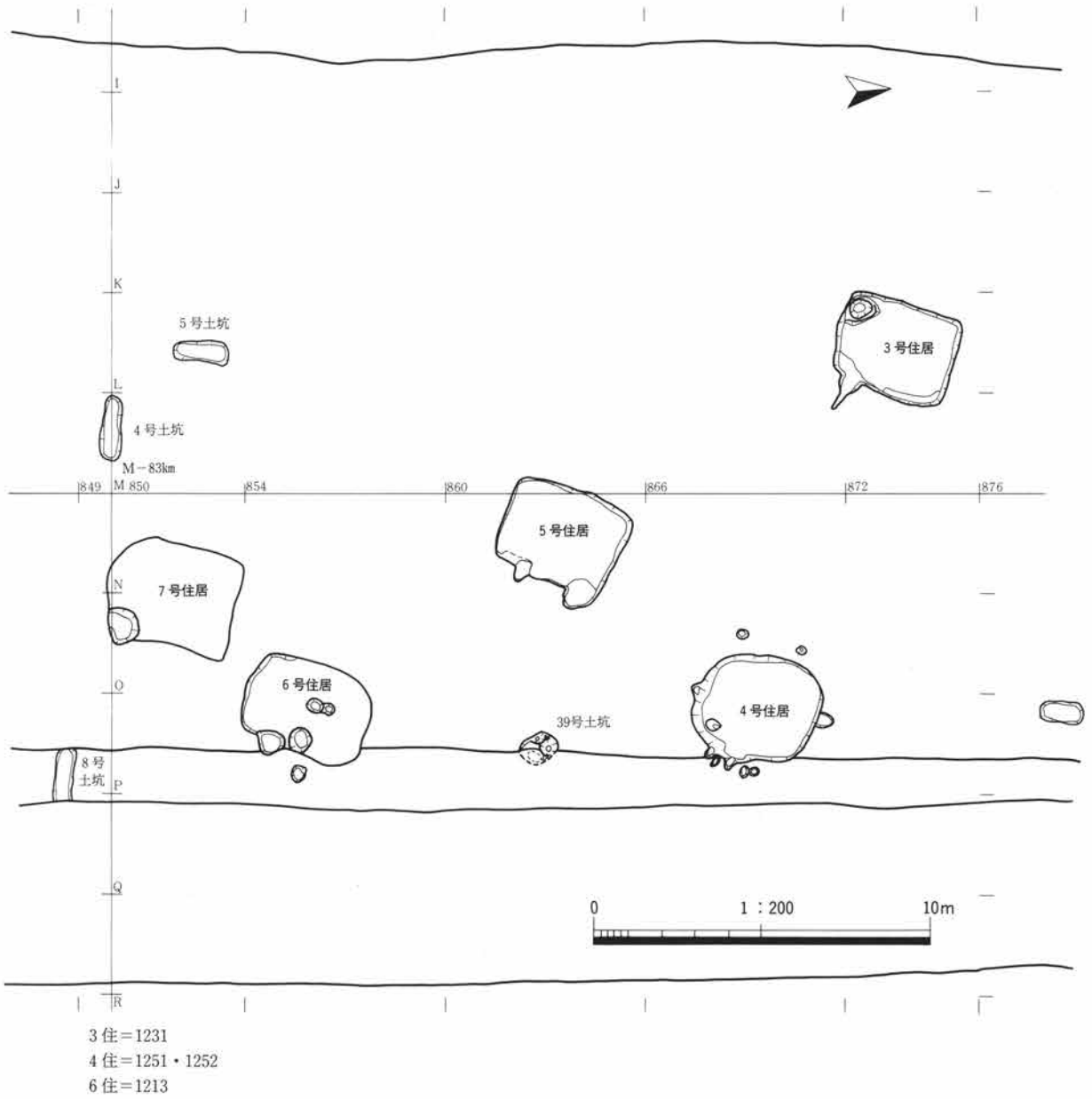
全体図55 奈良・平安時代15・798~827m

第4章 全体図

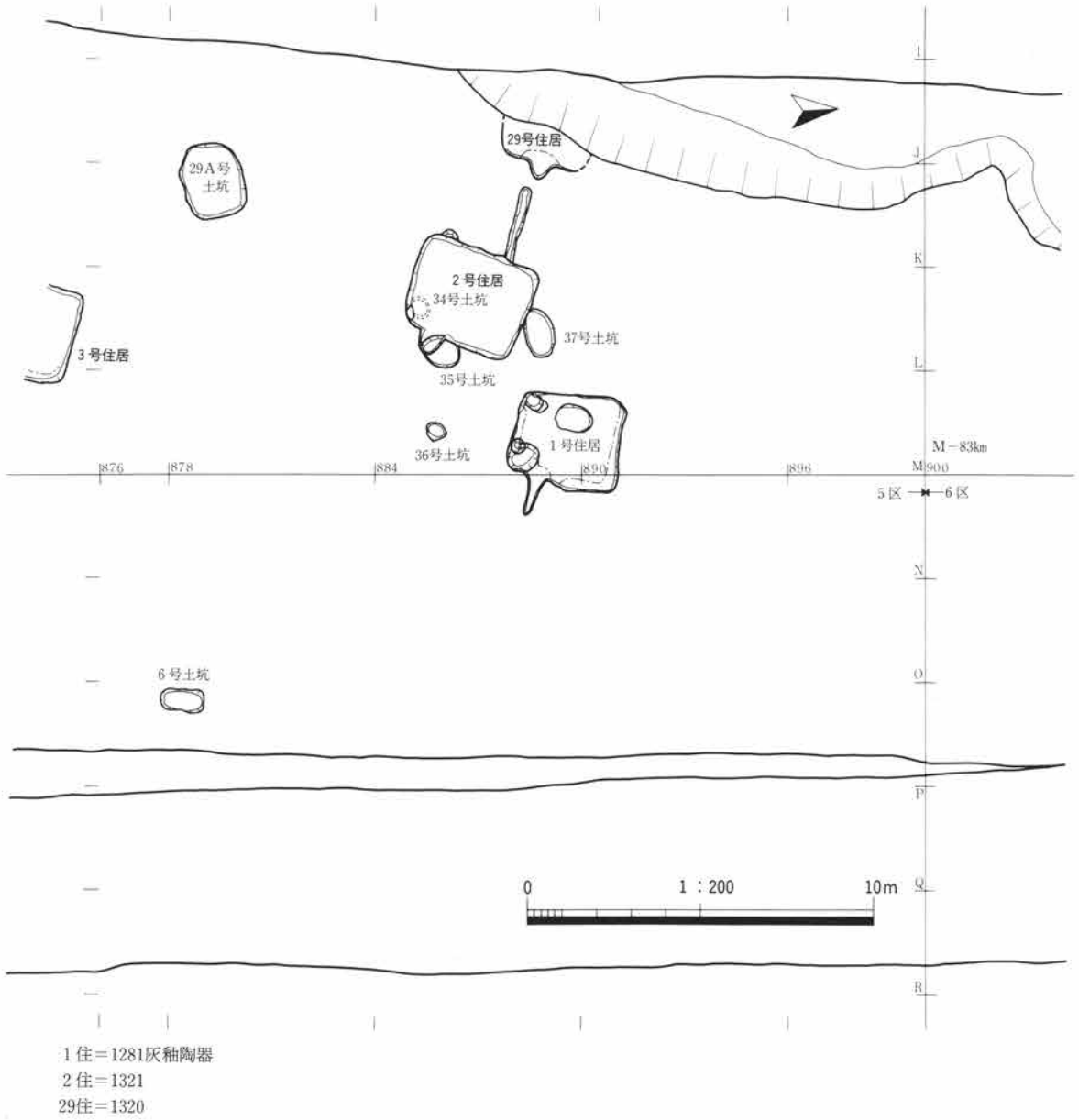
50住→10住, 7住→1坑
 14住←58住→11住,
 45住→9住→25・26坑
 ↑
 29B坑



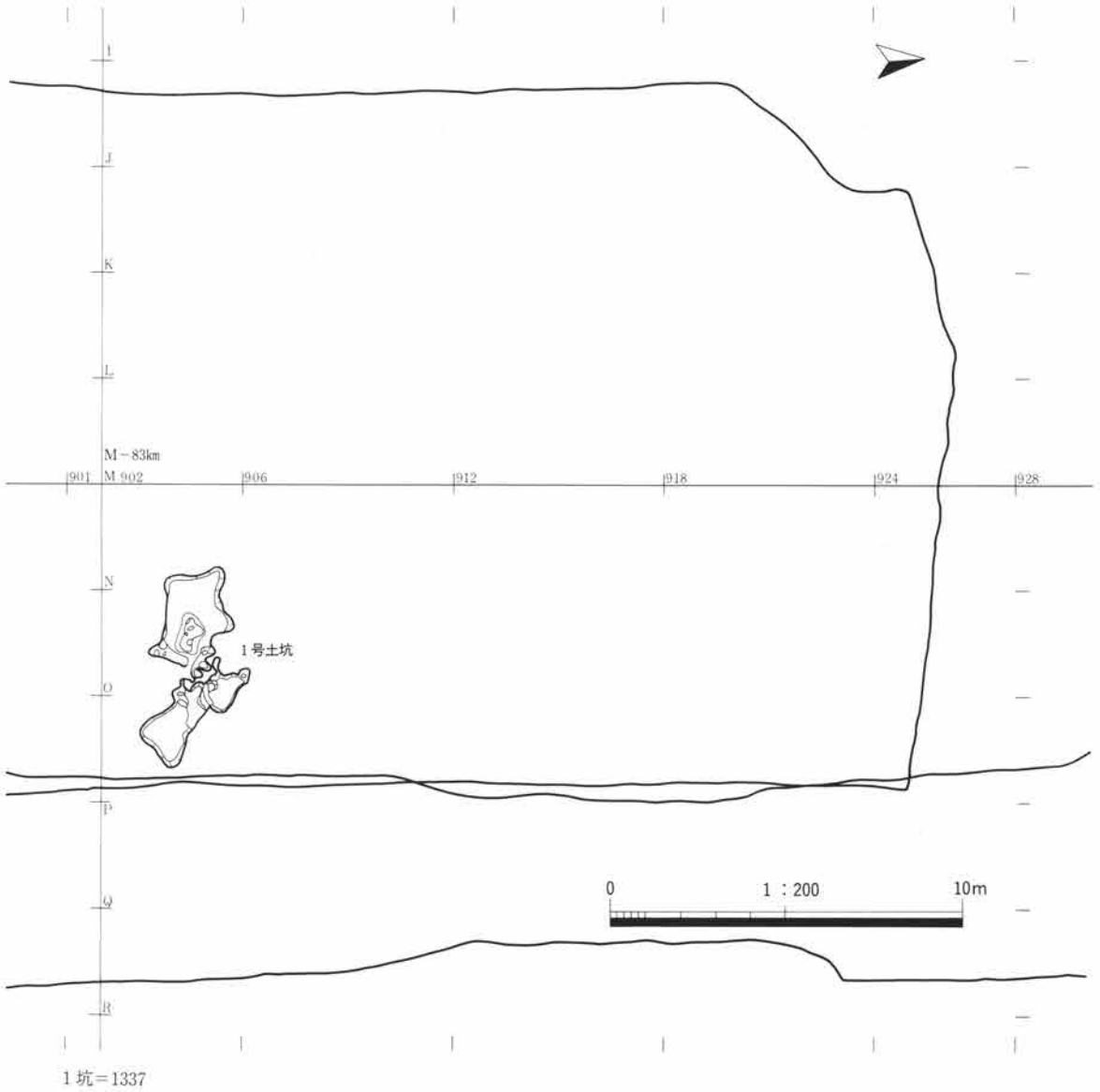
- 8住=1177・1178灰釉陶器
- 9住=1175・1176
- 10住=1157・1158・1159
- 11住=1232内黒・1233内黒
- 17住=1282
- 21住=1174
- 43住=1197・1198
- 45住=1254・1255・1256
- 50住=1156
- 58住=1163・1164・1165・1166・1167・1168



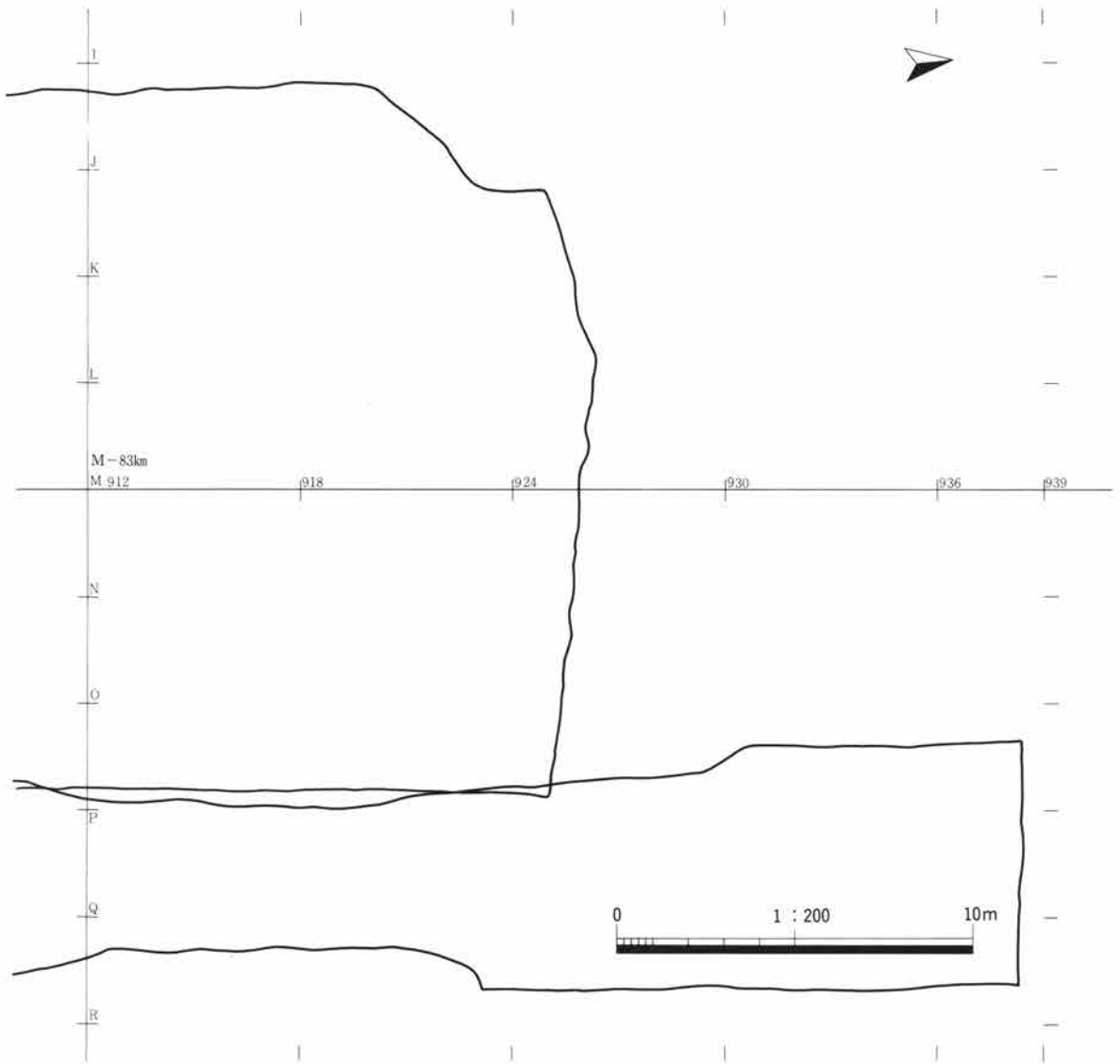
全体図57 奈良・平安時代17・849~877m



全体図58 奈良・平安時代18・875~903m

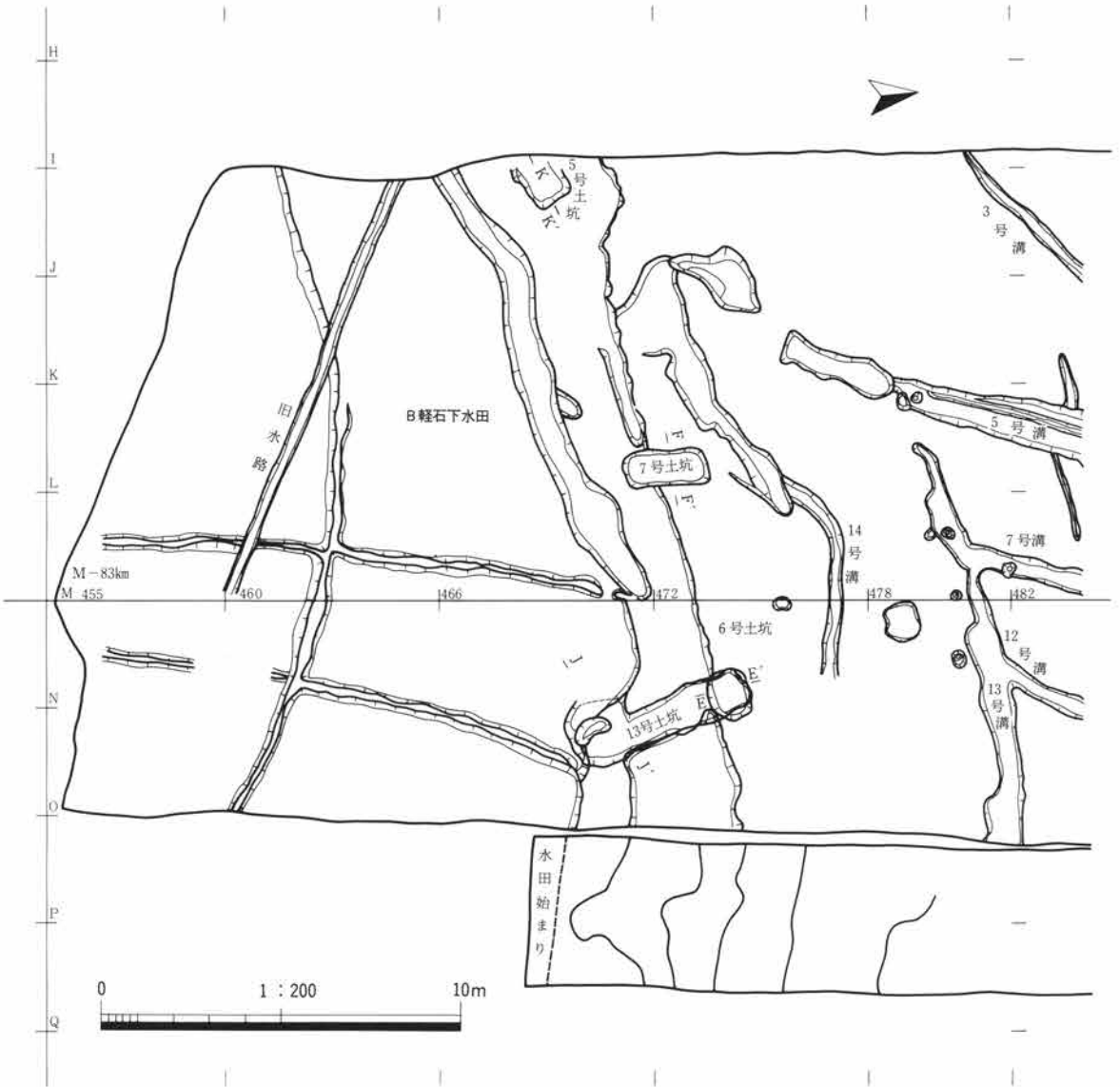


全体図59 奈良・平安時代19・901~929m



全体図60 奈良・平安時代20・912~940m

7坑←水田→6坑

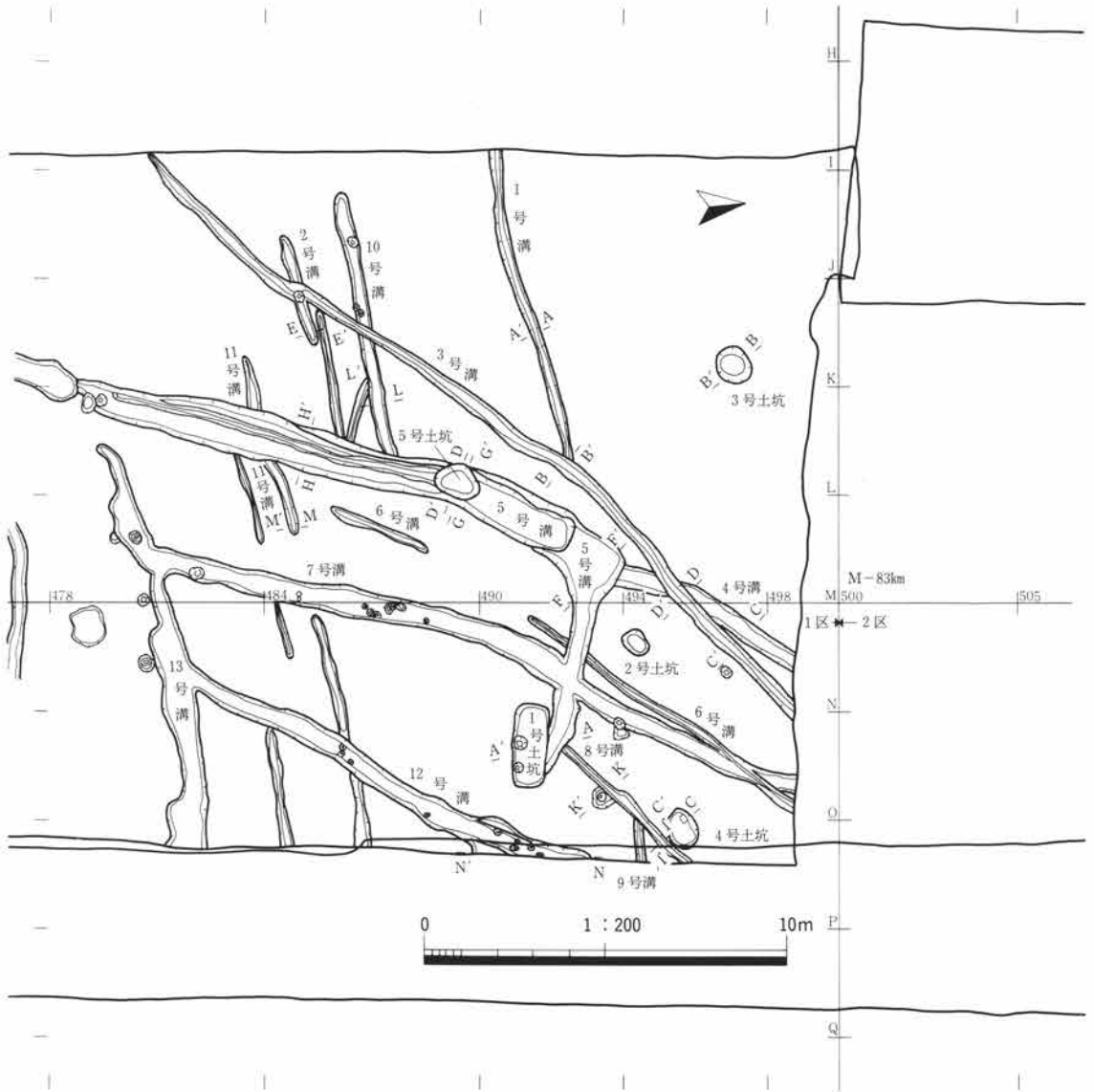


3溝=0118

全体図61 中世以降・不明1・454~483m

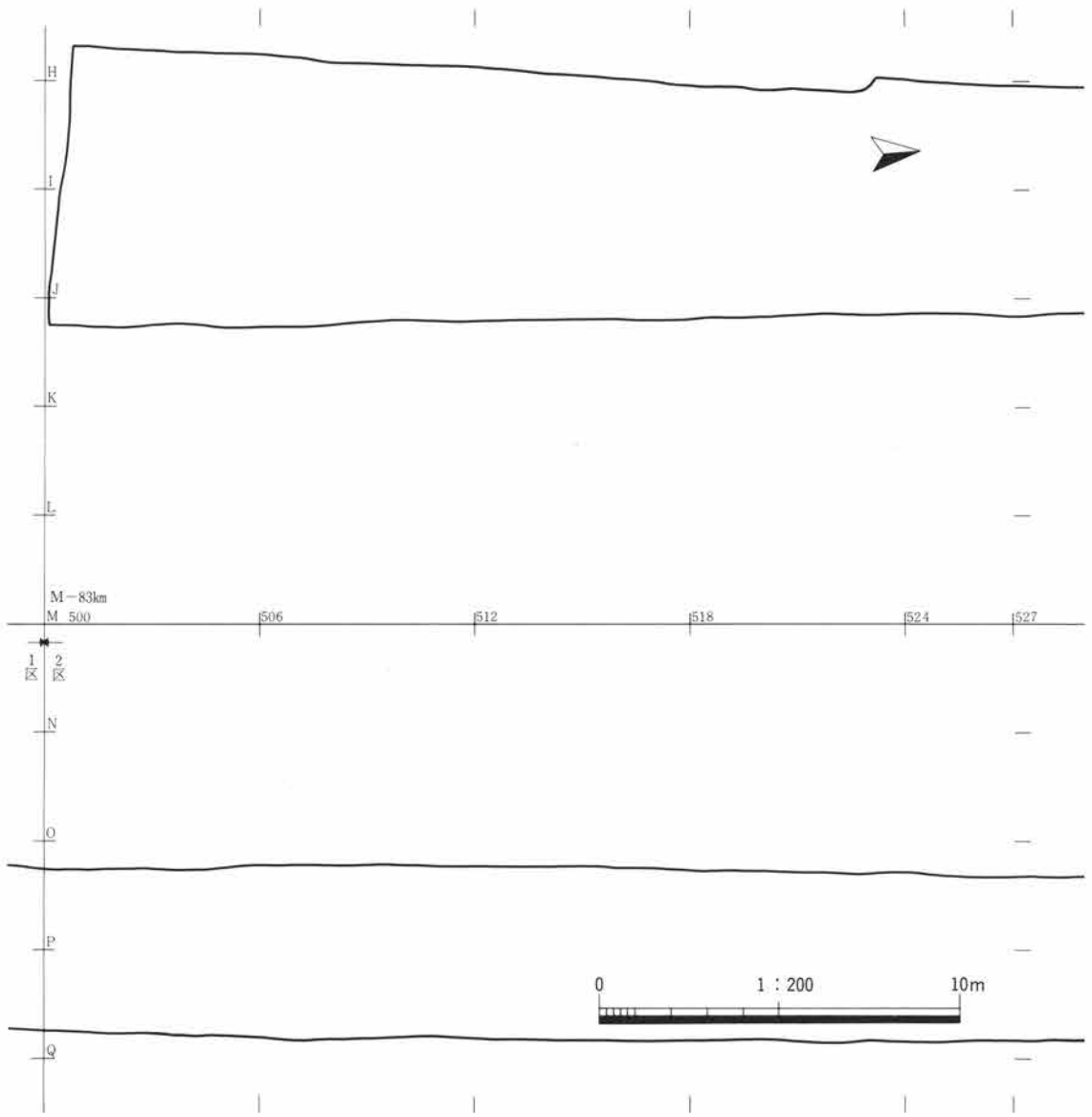
第4章 全体図

4溝→3溝→1溝
 1坑→5溝←5坑
 7溝→6溝

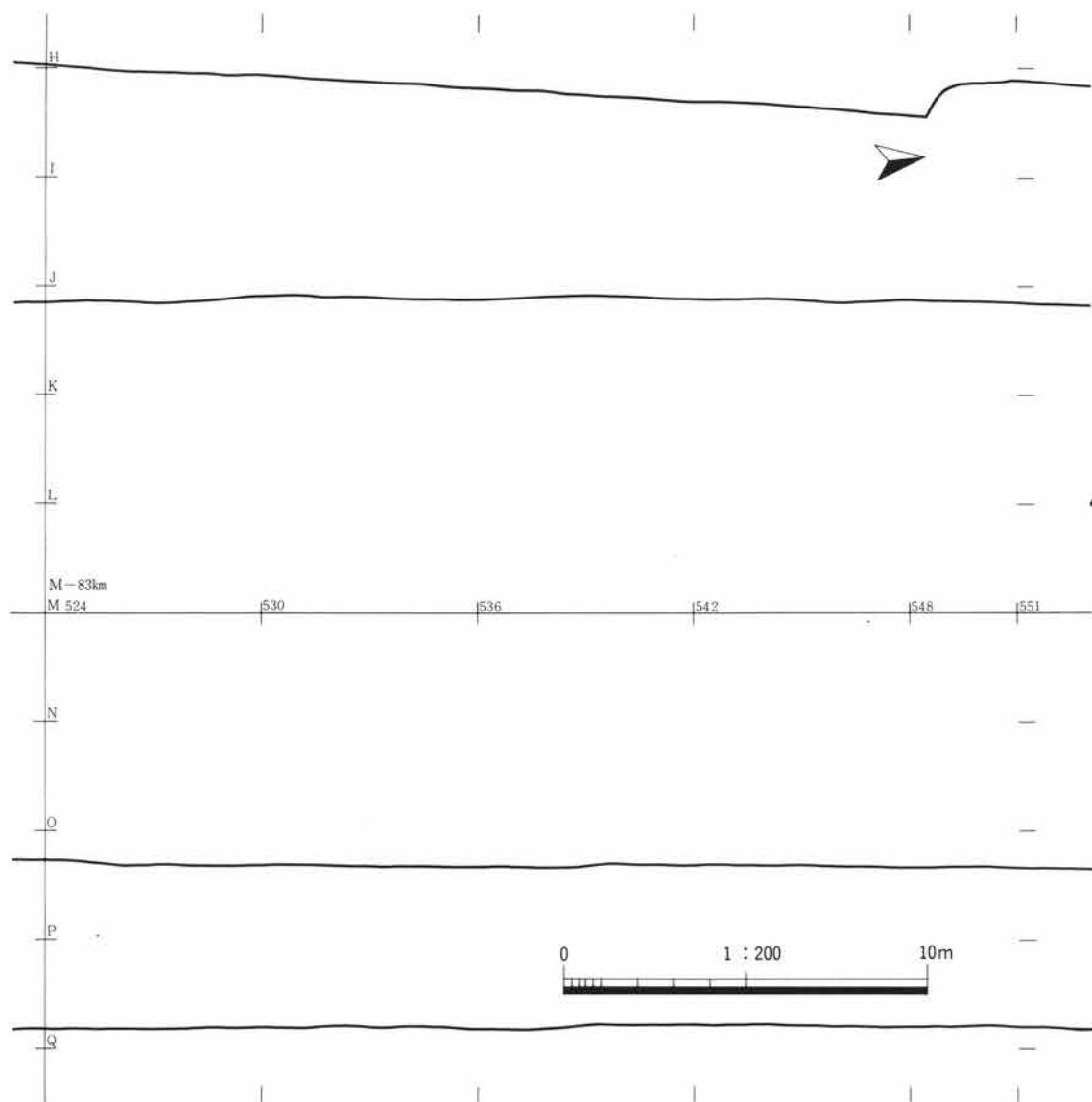


3溝=0118

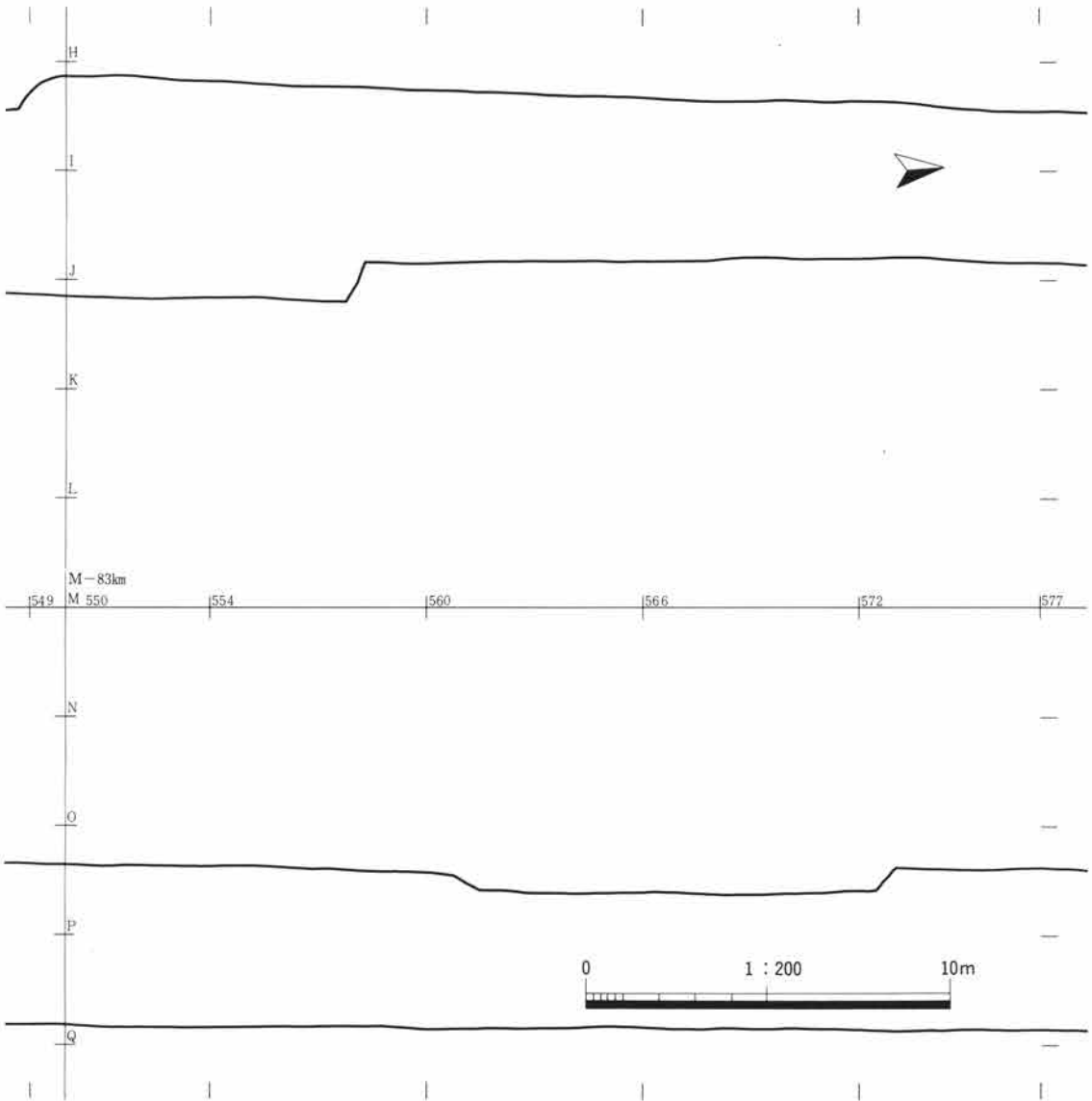
全体図62 中世以降・不明2・478~506m



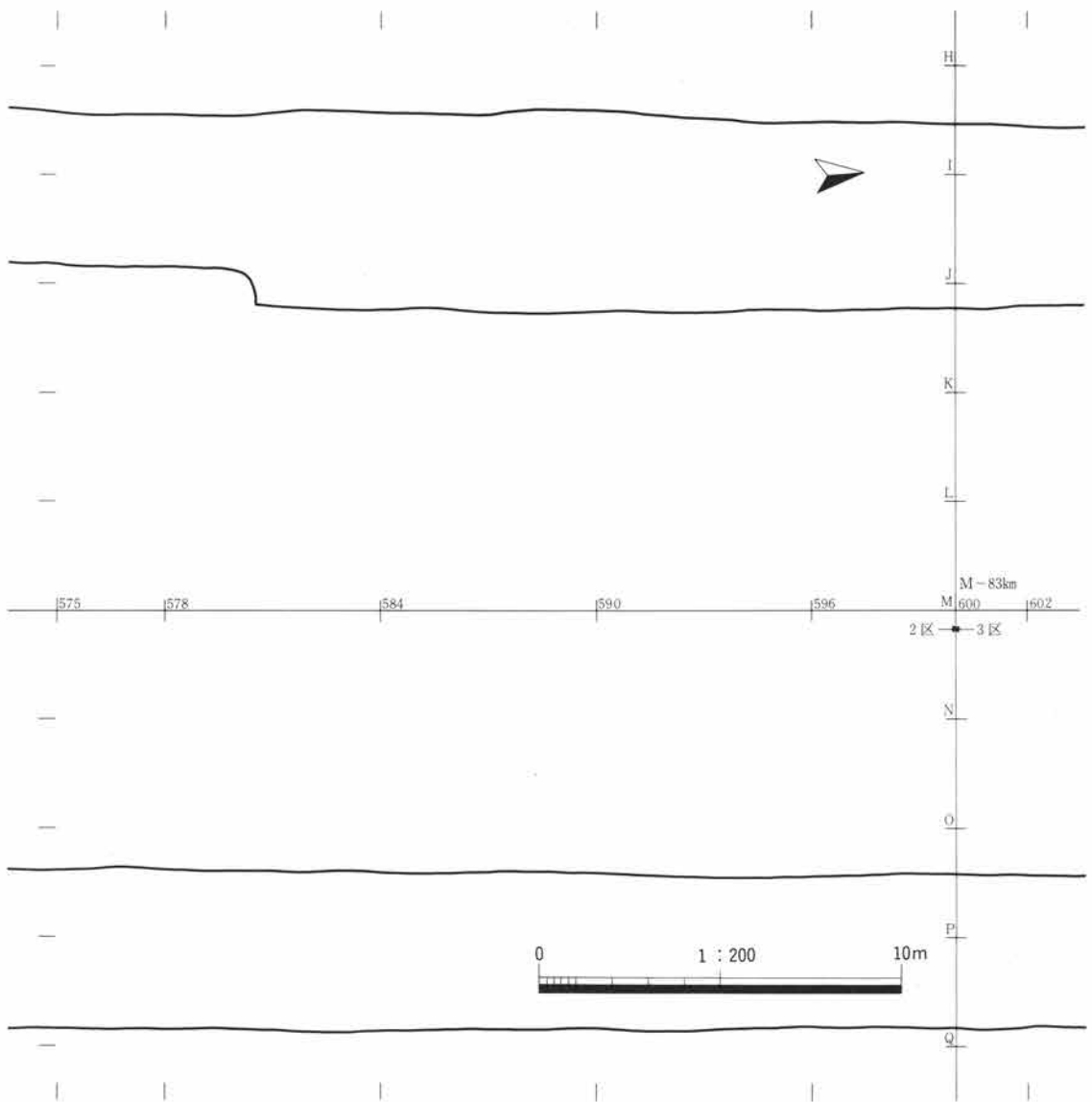
全体図63 中世以降・不明3・500~528m



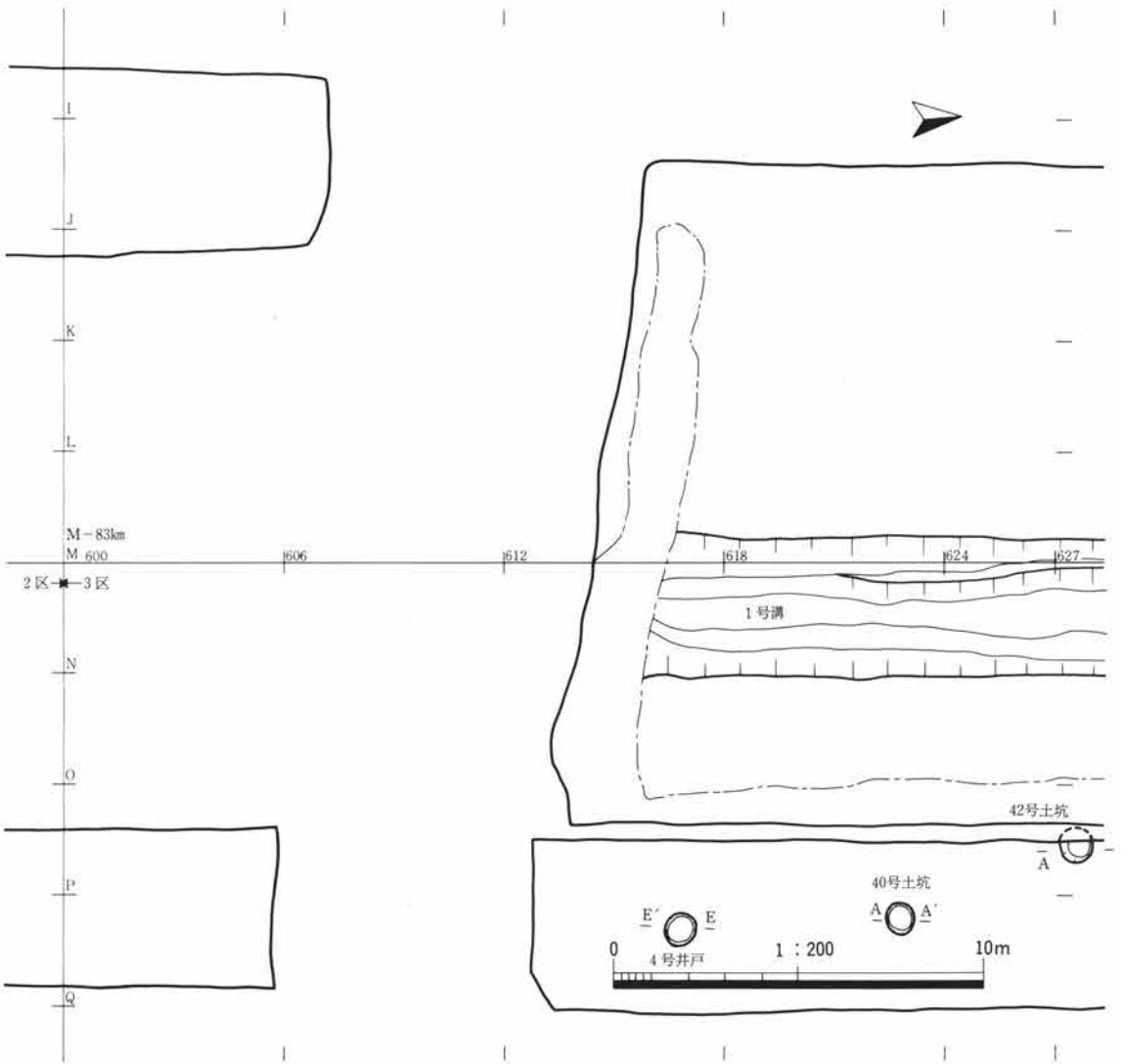
全体図64 中世以降・不明4・524~552m



全体図65 中世以降・不明5・549~577m

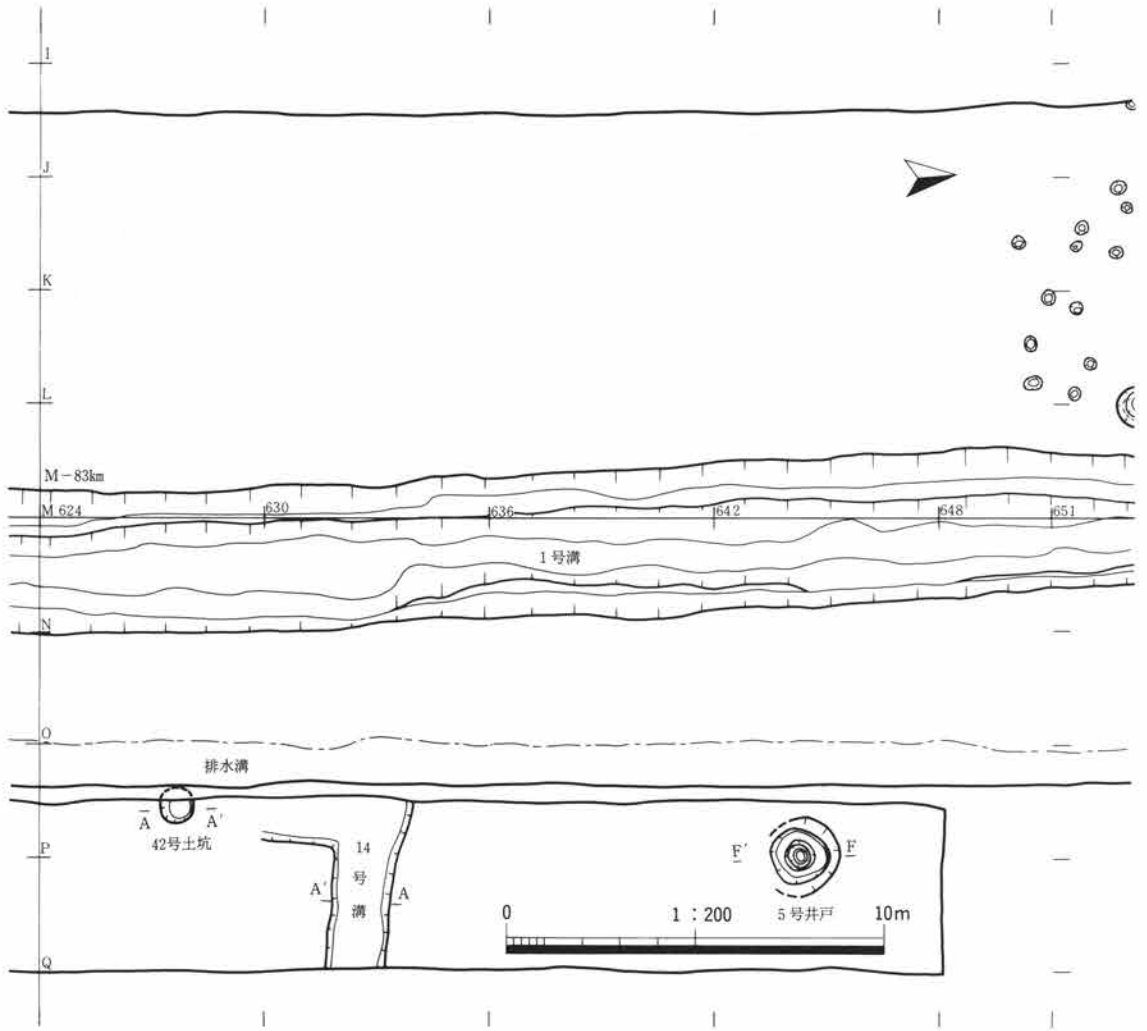


全体図66 中世以降・不明6・575~602m



1溝=0417・0418・0419・0420・0421・0422・0423・0660五輪塔・0661青磁
 40坑=0667・0668
 42坑=0425

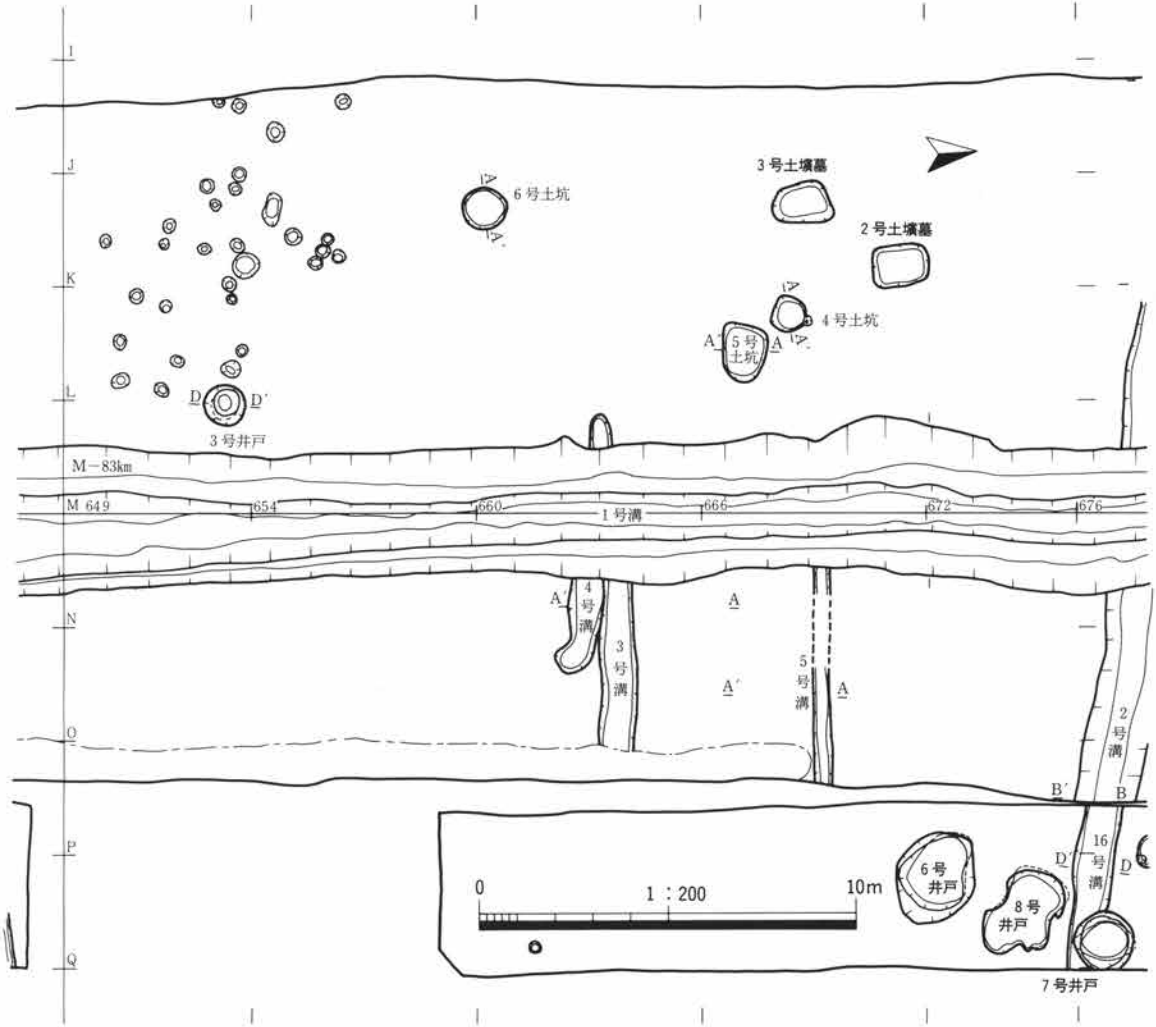
全体図67 中世以降・不明7・600~627m



1 溝=0417・0418・0419・0420・0421・0422・0423・0660五輪塔・0661青磁
 14溝=0424
 42坑=0425
 5 井=0662・0663

全体図68 中世以降・不明8・624~652m

16溝→7井



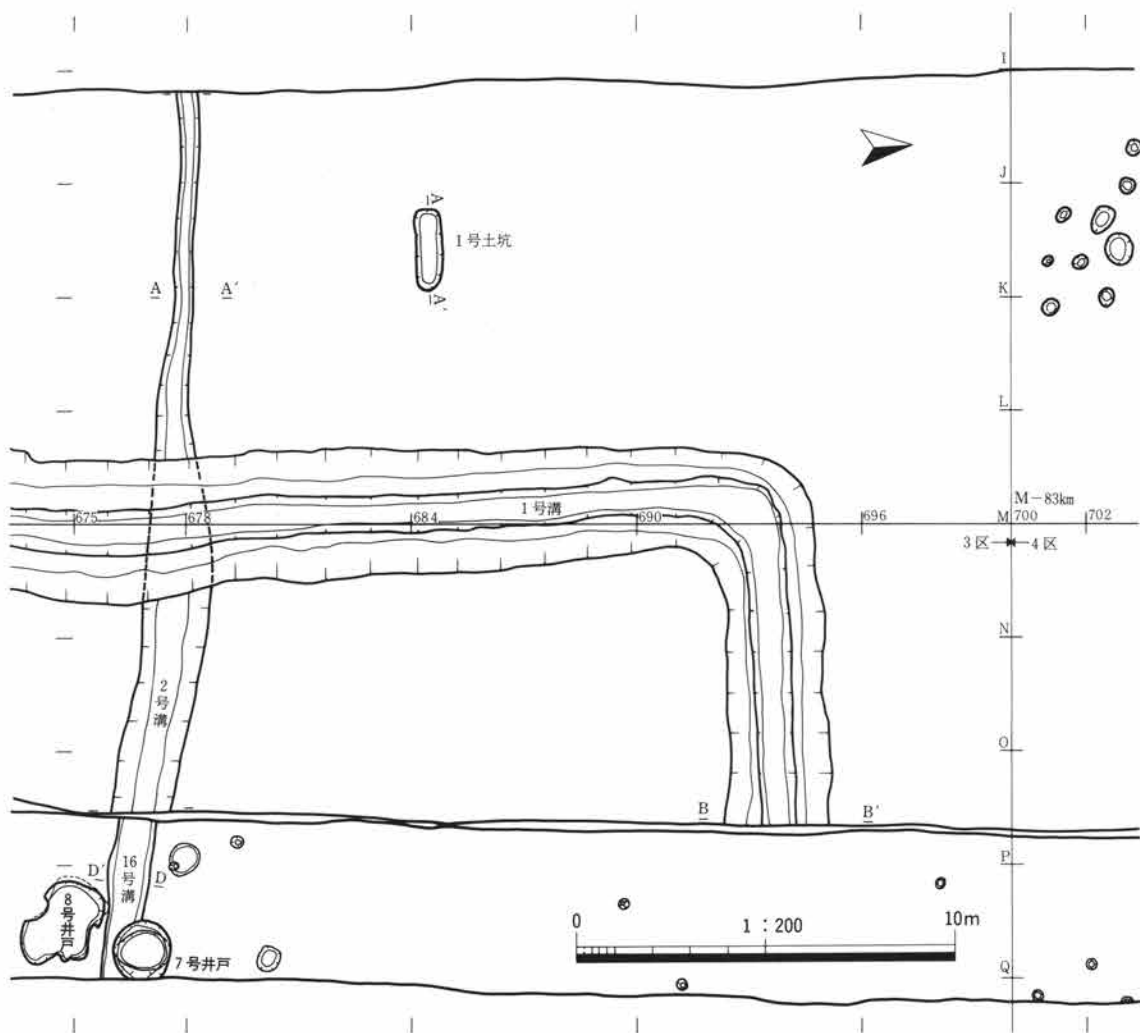
- 1 溝=0417・0418・0419・0420・0421・0422・0423・0660五輪塔・0661青磁
 2 坑=0674古銭
 3 坑=0664・0665・0675・0676・0677・0678・0679・0680 (0675~0680古銭)

全体図69 中世以降・不明9・648~677m

第4章 全体図

2溝→1溝

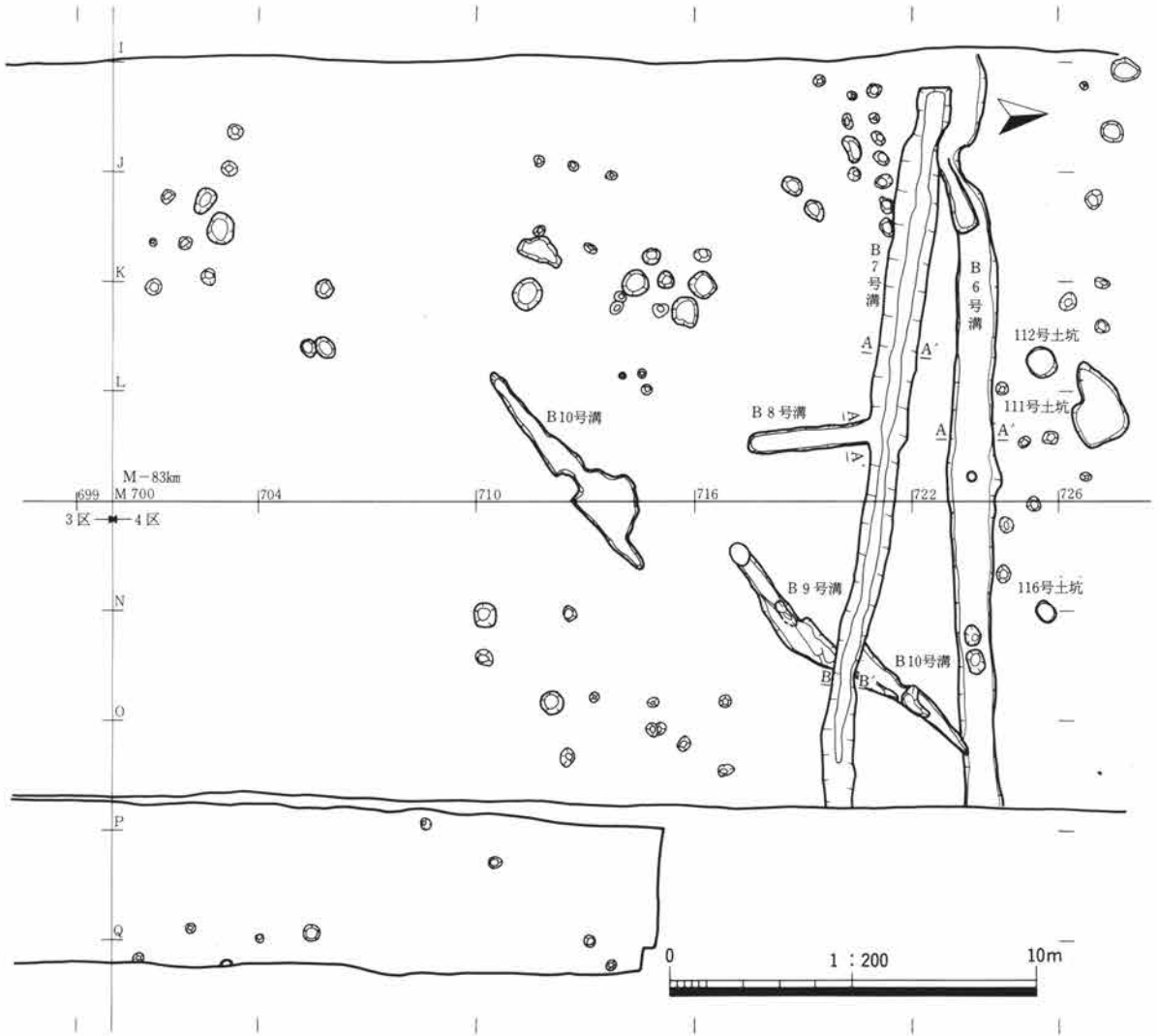
16溝→7井



1溝=0417・0418・0419・0420・0421・0422・0423・0660五輪塔・0661青磁

全体図70 中世以降・不明10・674~703m

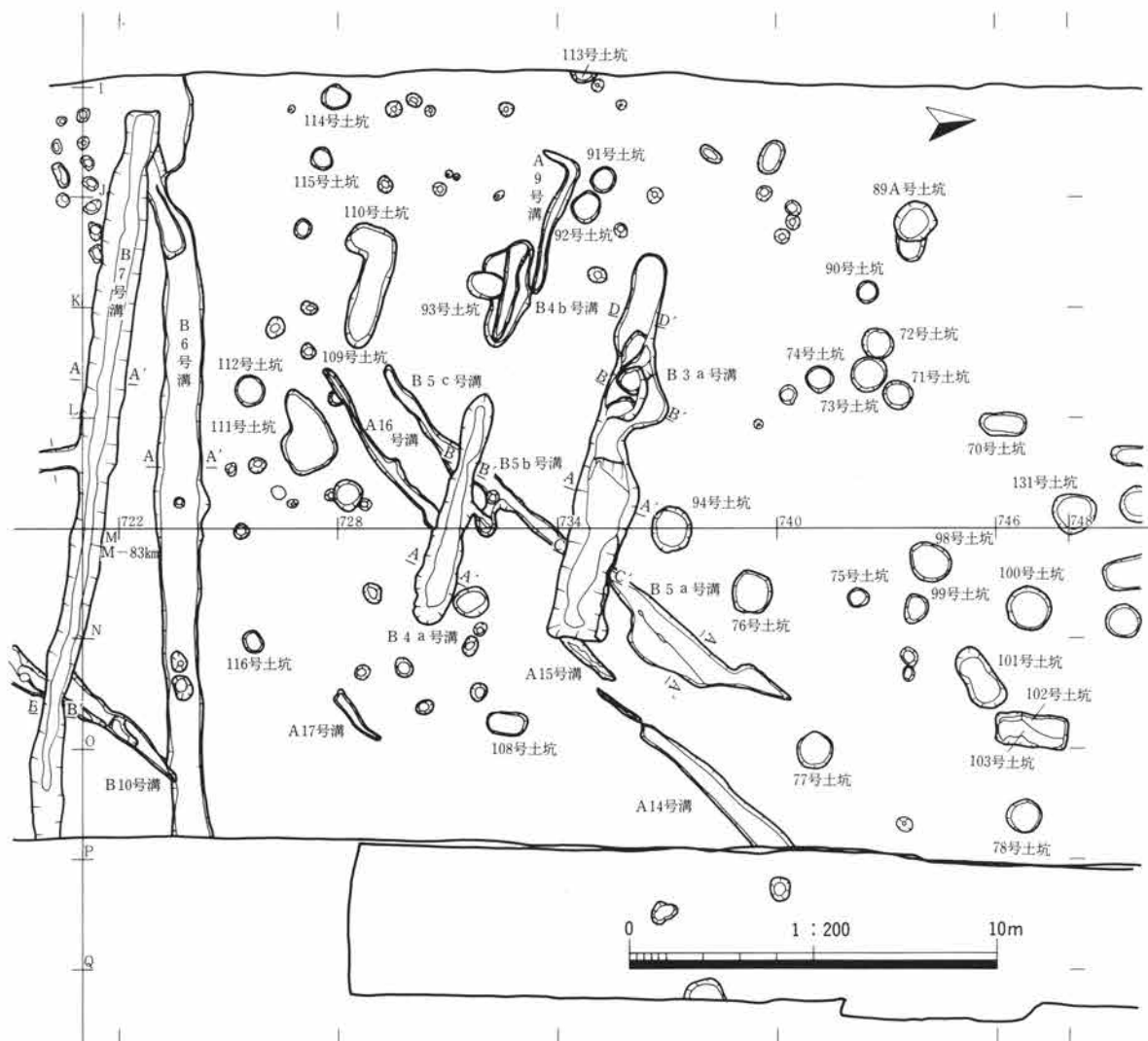
B 9 溝→B 7 溝



全体図71 中世以降・不明11・698~727m

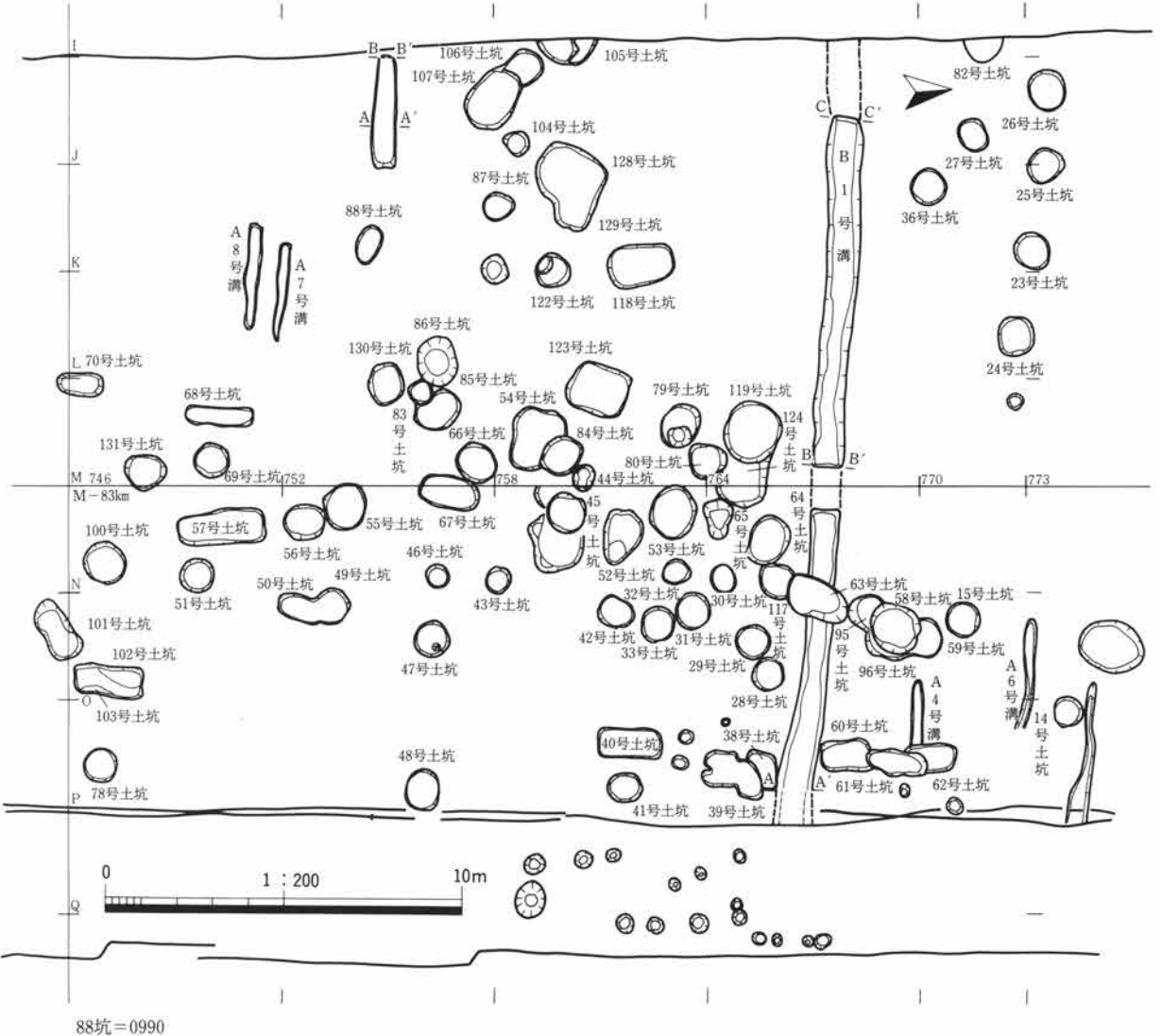
B 9 溝→B 7 溝

B 3 溝←B 5 溝・A16溝→B 4 溝



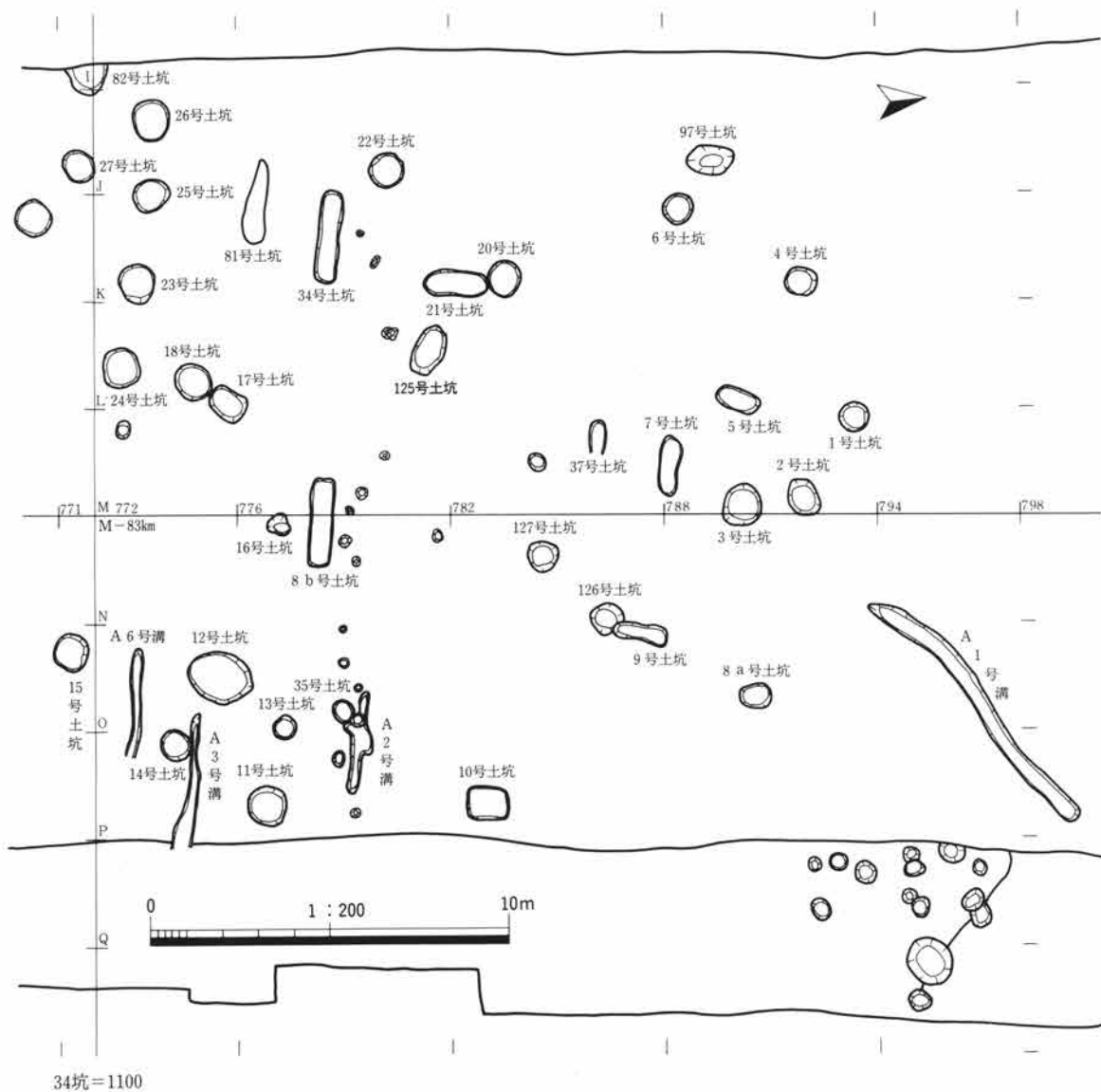
全体図72 中世以降・不明12・721~749m

B 1 溝→63坑
A 4 溝→62坑→61坑←60坑
54坑→84坑

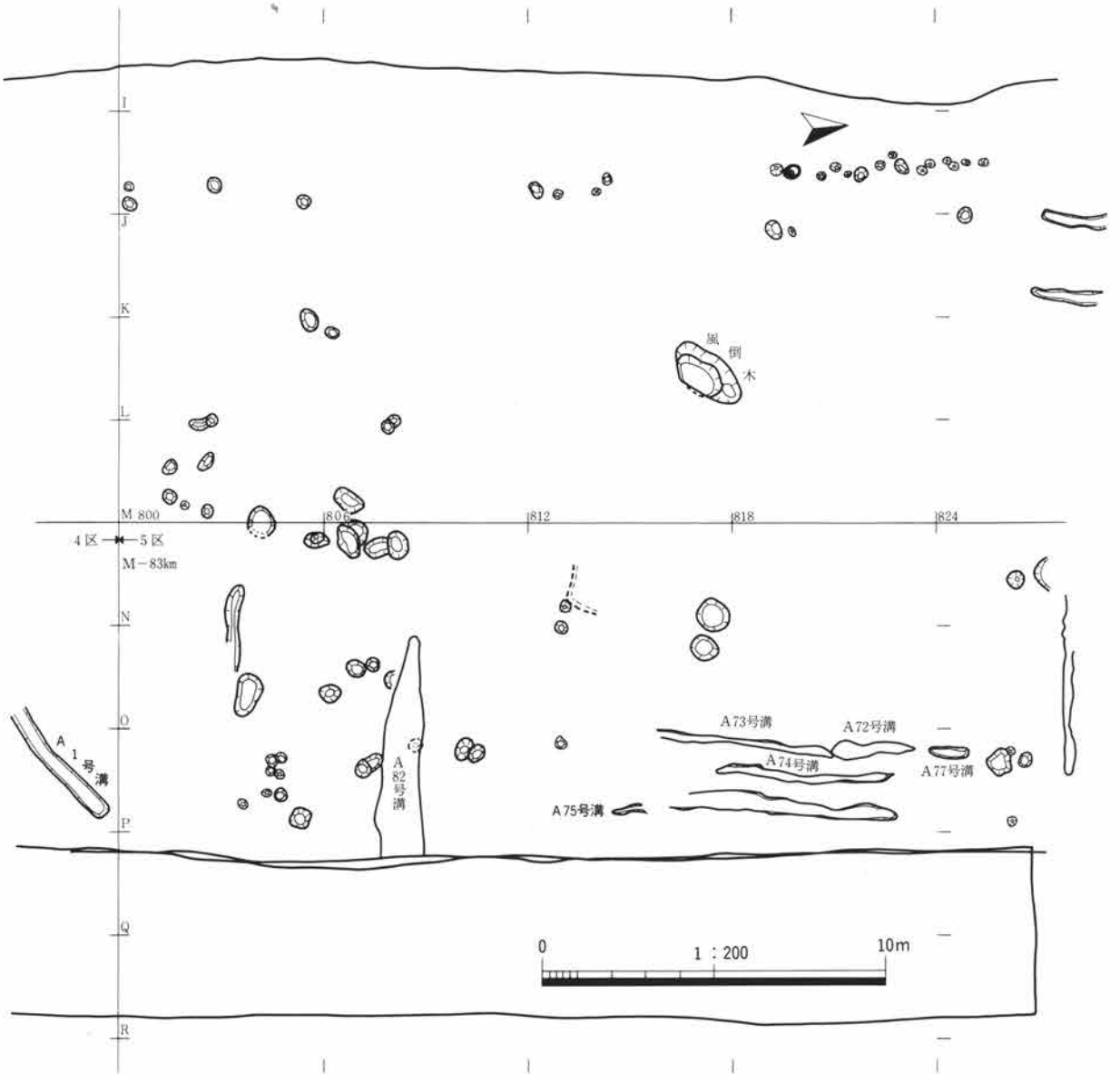


88坑=0990

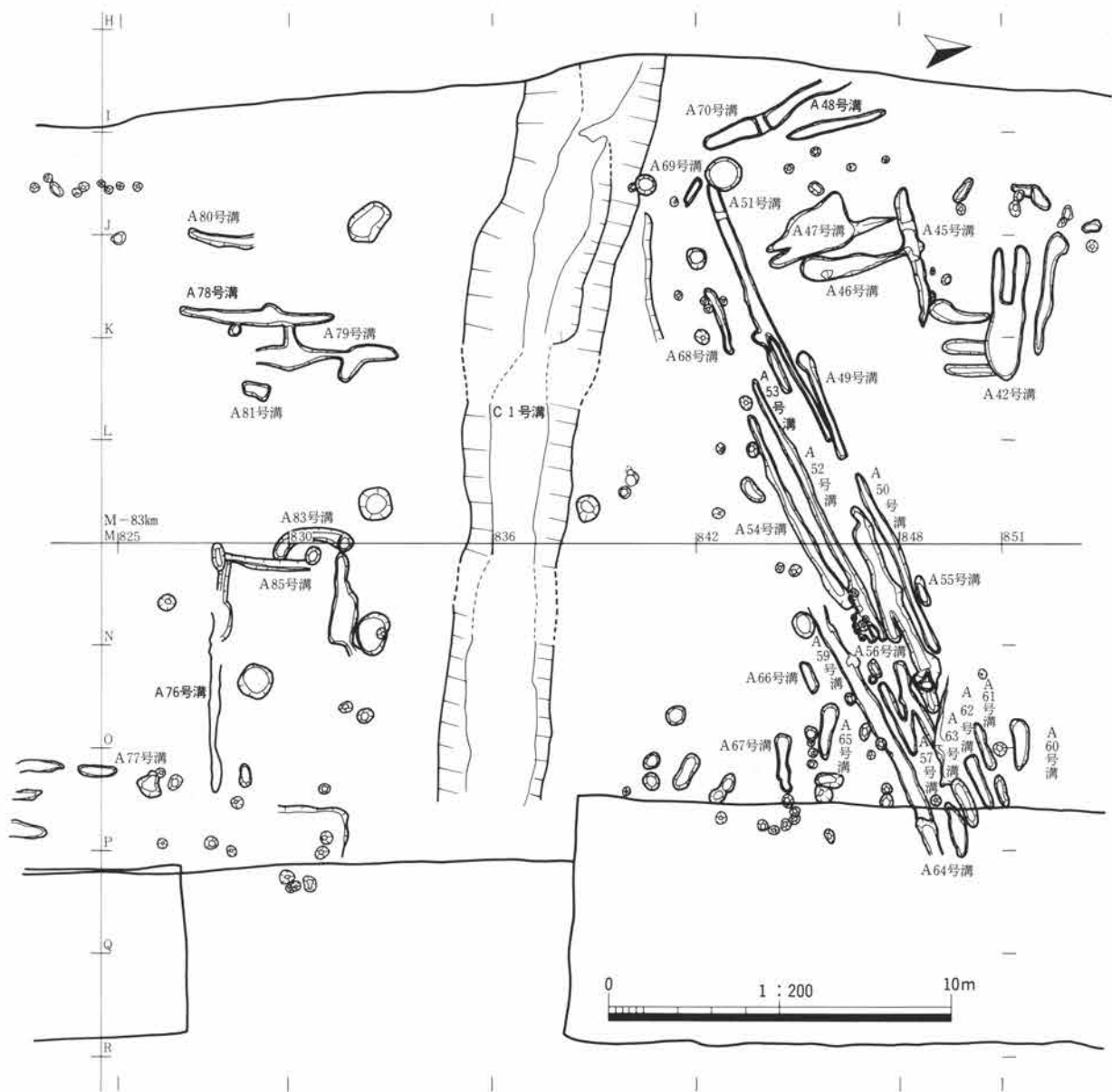
全体图73 中世以降・不明13・746~774m



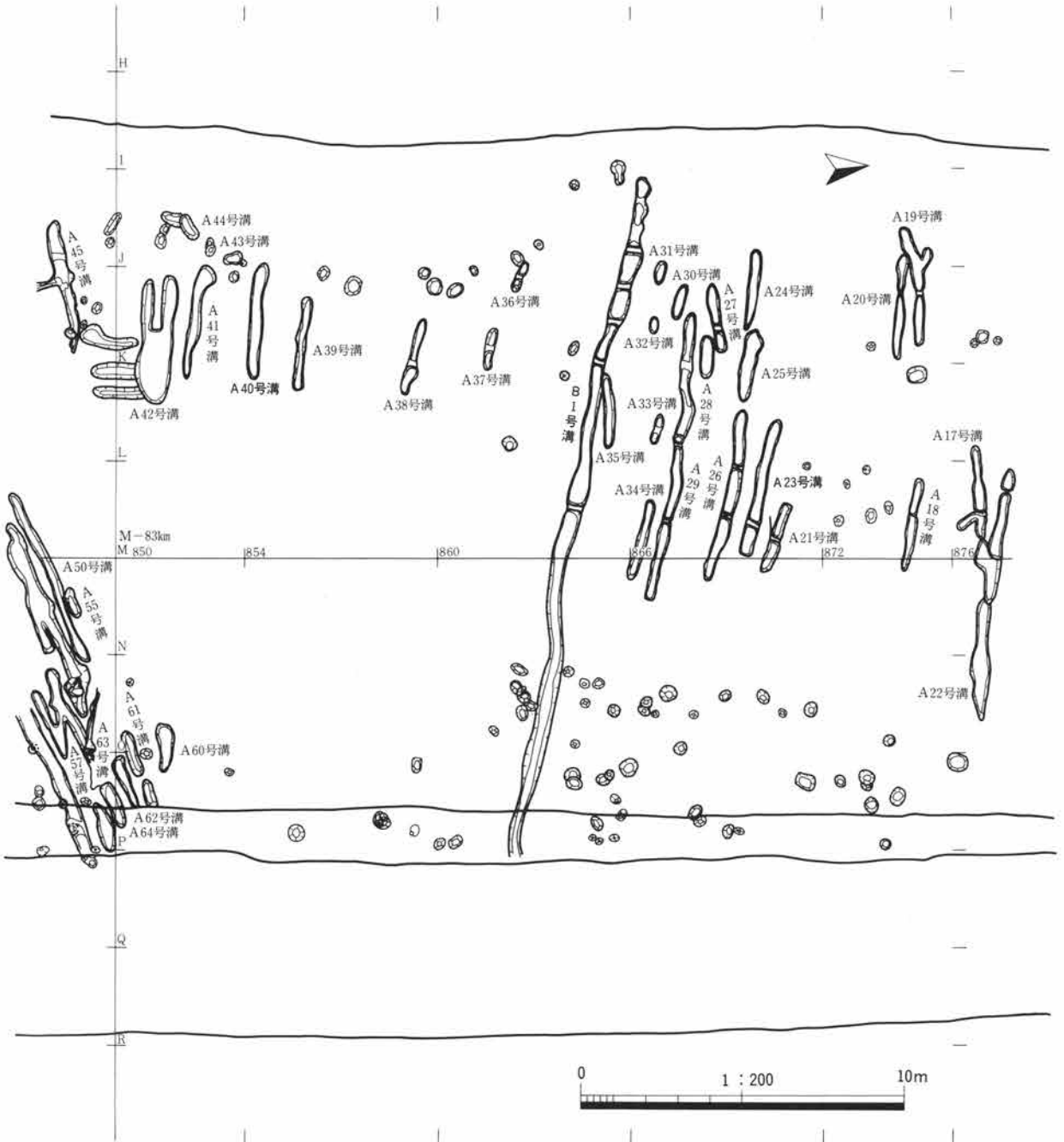
全体图74 中世以降・不明14・771~799m



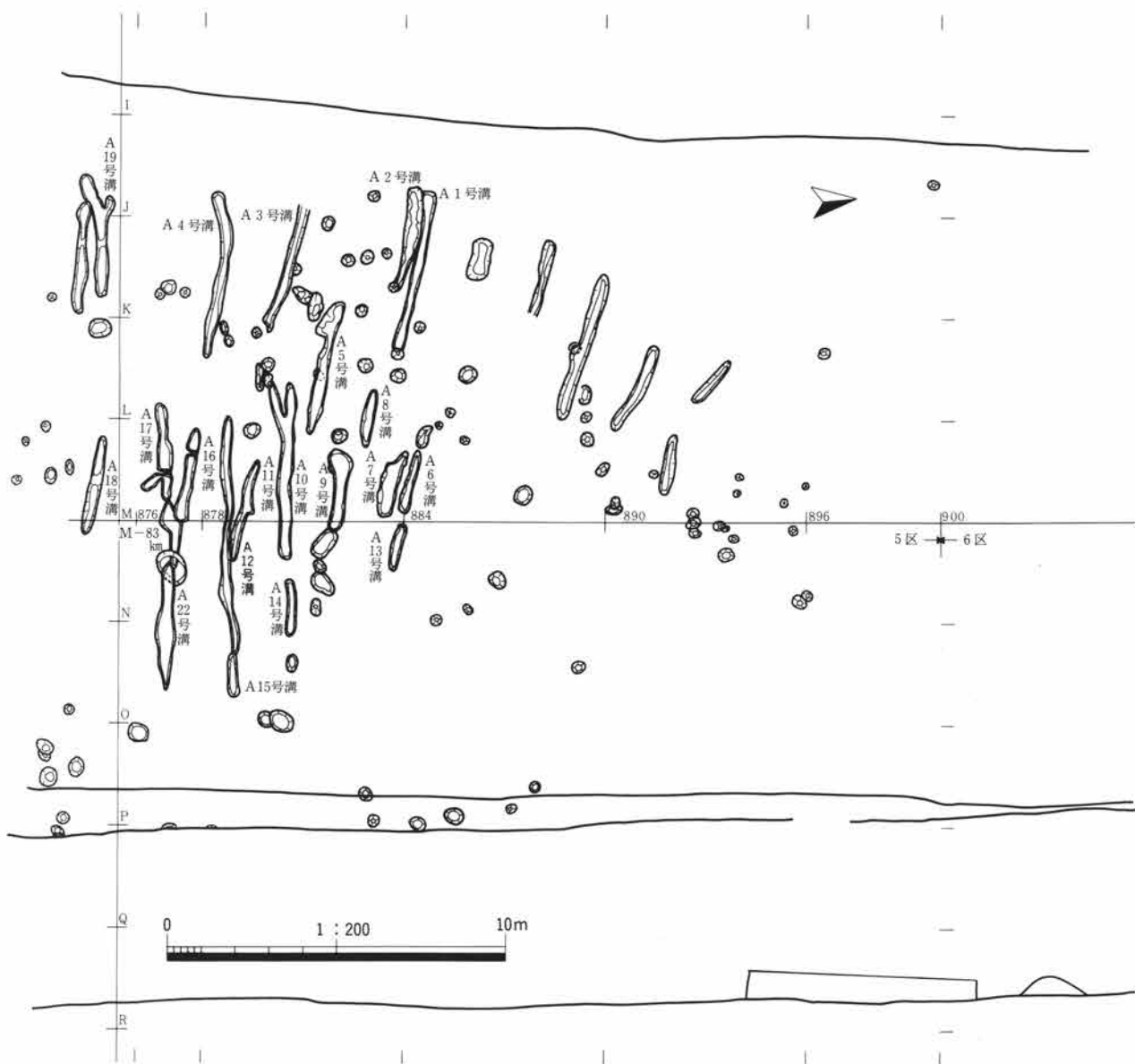
全体図75 中世以降・不明15・798~827m



全体図76 中世以降・不明16・824~852m

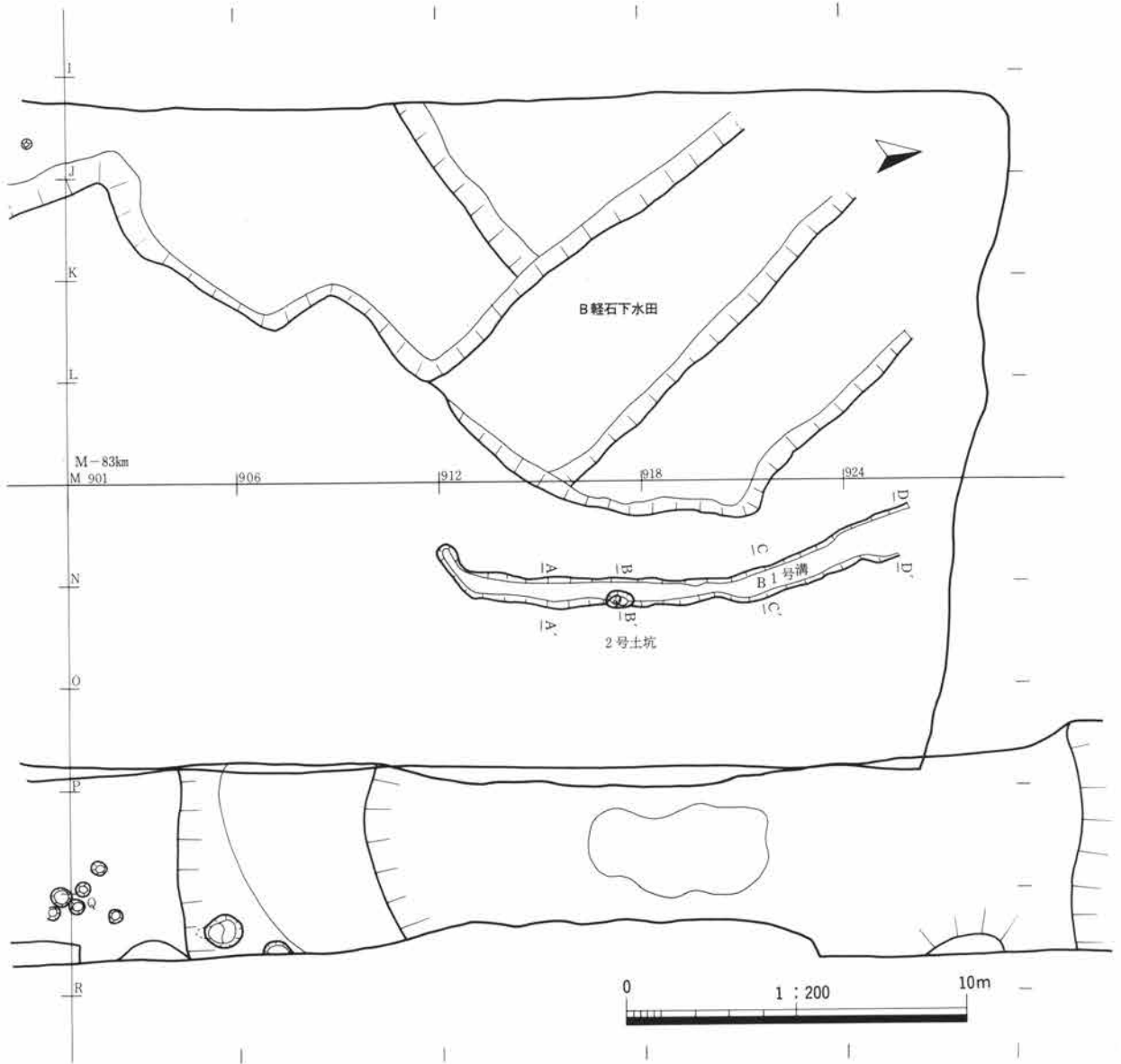


全体图77 中世以降・不明17・849~877m



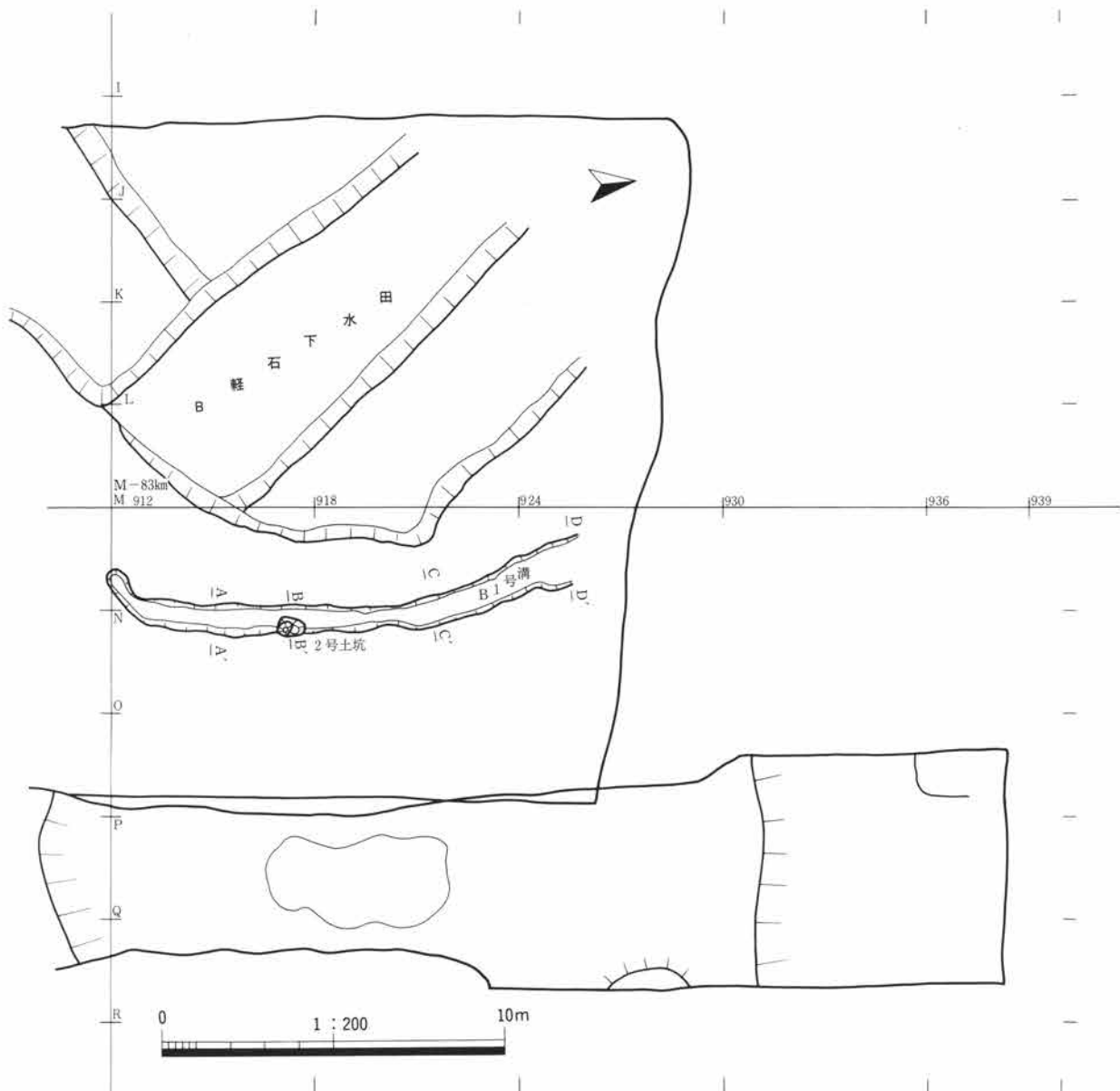
全体图78 中世以降・不明18・875~903m

B1溝→2坑



全体図79 中世以降・不明19・901~929m

B1溝→2坑

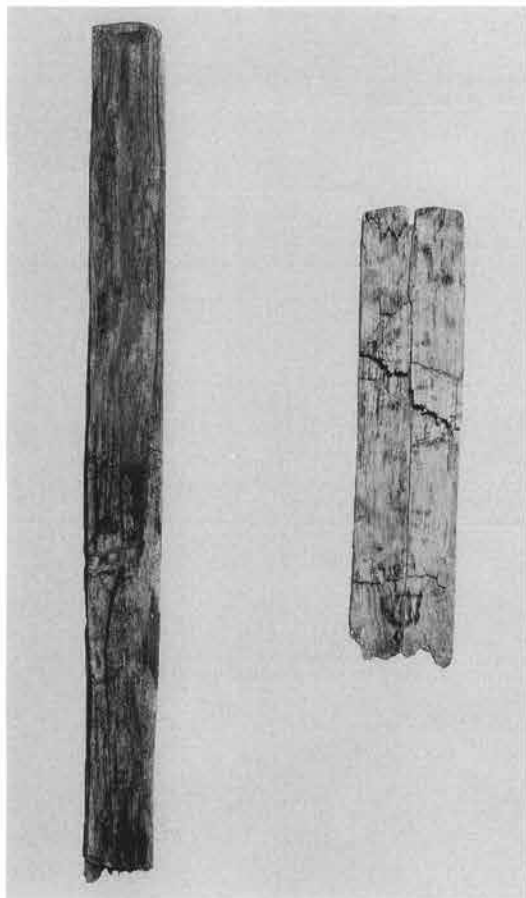


全体図80 中世以降・不明20・912~940m

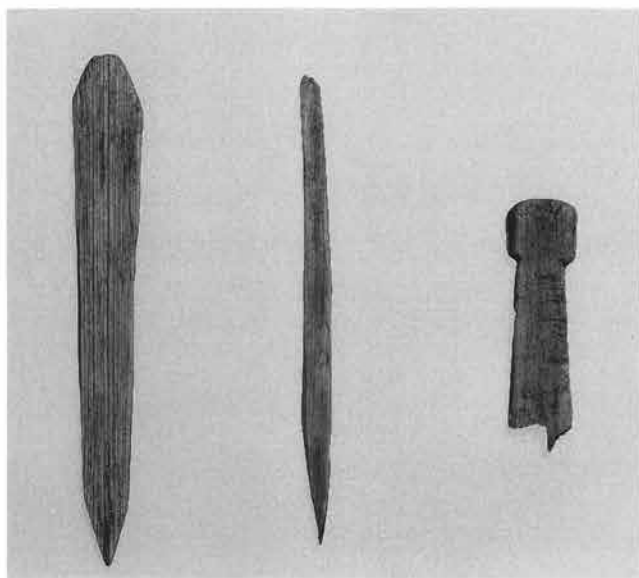
第5章 木簡出土地点 ー調査と成果1ー



5区B 2号溝 古墳時代中期以降の住居に切られている。東側道の調査（電柱付近）では、検出できなかった。



5-1 図 木筒 (1:2)



5-2 図 齋申 (1:2)

〈図〉

5-1 図	木筒 (1:2) 写真	136
5-2 図	齋申 (1:2) 写真	136
5-3 図	第I期~第IV期変遷図	140
5-4 図	第I期~第IV期遺物集成図	141
5-5 図	三ッ寺II遺跡1区1号井戸	143
5-6 図	1区1号井戸出土土器集成(1)	144
5-7 図	1区1号井戸出土土器集成(2)	145
5-8 図	1区1号井戸出土土器集成(3)	146
5-9 図	1区1号井戸完掘状況(南から)	147
5-10 図	1区1号井戸石敷部全景(南から)	147
5-11 図	1区1号井戸出土木製品集成(1)	149
5-12 図	1区1号井戸出土木製品集成(2)	150
5-13 図	1区1号井戸出土木製品集成(3)	
	県内出土齋申	151
5-14 図	1区1号井戸出土木筒	156
5-15 図	1区1号井戸出土墨書集成(1)	160
5-16 図	1区1号井戸出土墨書集成(2)	161
5-17 図	1区1号井戸出土墨書集成(3)	162
5-18 図	1区1号井戸出土墨書集成(4)	163
5-19 図	刻書 奉・葭田・上の字の分類	164

〈表〉

表5-1	三ッ寺II遺跡1区1号井戸出土木製品 観察表	152
表5-2	三ッ寺II遺跡1区1号井戸墨書・刻書土 器施書部位一覧表	159
表5-3	三ッ寺II遺跡1区1号井戸墨書・刻書 土器一覧表	165

第1節 1区1号井戸

女屋和志雄

1 はじめに

2 1号井戸の位置と性格

3 1号井戸の構造

1 はじめに

1号井戸は、三ッ寺II遺跡の南端に位置する、8世紀前半から9世紀前半にかけての『溜井』である。県内における溜井は、水田灌漑用の井戸と定義（注1）されるが、昭和56年の調査当時としては県内で初出の木簡2点や斎串、付札状木製品、148点の墨書土器といった特徴的なものが多量の土器とともに出土し、遺構の性格、集落内での位置付け、周辺遺跡との関連に興味を持たれた。

本項では、井戸の構造と性格の検討と、『三ッ寺I遺跡』として報告（注2）した隣接する遺構との関連から、その変遷と位置付けをめぐって豪族居館の濠外縁部のあり方を再考したい。

なお、1号井戸の出土資料については、本報告に至るまでに下記の研究者、機関に指導並びに協力を得た。記して感謝致します。

木簡については、昭和56年の出土当時に奈良国立文化財研究所 鬼頭清明氏（現在東洋大学教授）に積文の解説を依頼し、その内容を『木簡研究』第4号（1983）、当事業団『年報』1（1983）に発表した。その後、国立歴史民俗博物館教授平川 南氏には文字資料という点で墨書土器を含めて木簡の積文の解説について指導を受け、最終的に木簡の点数を従来発表した4点から2点に確定した。ここに木簡の点数と積文について、既報のものを訂正する。また、出土した当時には、群馬県警察本部科学研究所の協力をえて木簡の赤外線写真による撮影がされ、その後、報告した木簡、斎串、付札状木製品が奈良国立文化財研究所の協力によりPEG（ポリエチレングリコール）含浸による処理が実施されている。

2 1号井戸の位置と性格

1号井戸は、冒頭のべたように三ッ寺II遺跡の南端に位置し、住居のある一画からは南に約20m離れた台地縁辺部にある。調査区では、三ッ寺II遺跡1区1号井戸の名称を持つが、その位置は三ッ寺I遺跡3区の中に飛地様にある（5-3図右下）。

2つの遺跡は、遺構の分布状態や全体の調査結果が示す様に、本来が関連を持つ遺跡、あるいは連続した遺構の広がりと考えられるが、当初の調査範囲からは現在の猿府川以北約140mの範囲、台地部分から見ると一段低い水田部は除外されていた。2遺跡と1号井戸の当初範囲と位置は、上越新幹線用地の中心を通る大宮起点の距離程では下記である。

三ッ寺I遺跡	83km290m～83km380m	三ッ寺II遺跡	83km455m～83km939m
1号井戸	83km435m～83km455m		

しかし、昭和56年度の2つの遺跡の調査で、特に三ッ寺I遺跡での進展に伴い『古墳時代豪族居館』の性格が明らかになるにつれて、この水田部一帯がその北限域として注目されるようになった。

折しも8月中旬、この水田部での工事中、多量の石と遺物の散乱する箇所が確認され、遺構の存在が暗示された。調査は、この内容を得て豪族居館との関連から県文化財保護課の調整のもと、日本鉄道建設公団、工事関係者各位との協議並びに協力により、急遽、昭和56年8月20日から24日まで緊急調査として実施された。

その結果、遺構としては調査対象外でしかも工事中に発見されたために、既に基底面近くまでの約1mの部分が掘削されていて全貌を知るには困難な状態にあったが、下記の特徴があげられる。

- 1) 井戸は集落南端の台地縁辺部にある『溜井』の構造であること。
- 2) 遺物は、廃棄された杯や碗を主体とした多量の土器があり、習書木簡2点をはじめとして斎串、付札状木製品、墨書土器、モモ、クリ、ヒョウタンなどの自然遺物が含まれること。
- 3) 時期は、出土遺物から8世紀から9世紀前半までの比較的長期間に及ぶと判断されること。
- 4) 上記の年代観と位置からは、東西に隣接する三ッ寺I遺跡報告の3区3号井戸→1区1号井戸→3区2号井戸の変遷が考えられ、後述する1基を含めて6世紀後半から9世紀前半まで北濠外縁部の一画に継続して作られている。
- 5) 性格は、遺物組成からすると集落内での『水辺祭祀』の場か隣接する、半ば恒常的に遺物廃棄の場となっていたと考えられる。

5-3・4図は、1号井戸と周辺遺構を含めて、その変遷を示したものである。それは、6世紀から9世紀前半までを5期に区分したもので、豪族居館の存続期から廃絶以後までに相当している。

『第I期』 豪族居館北濠の北西隅の様子を示す。堤状遺構に対応して隅にのみ石垣が施される。この北西隅は、一部だけの調査でしかも3区3号井戸との間に約3m幅の未調査部分を残すことから推定要素が強いが、『石垣の状態が他の箇所と類似すること』、『現状で考えられている北濠の推定線上に位置すること』、『1号井戸とは埋没土を異にし時期差があること』、の3点の理由から性格を判断した。調査では、基底面までの様子がやや不十分ではあるが、『L字形に屈曲した形状であること』、『特定箇所にのみ石垣を施していること』が判明している。位置は、堤状遺構の北西基部と対をなす、大きく矩形に湾入する形状が復元される。

北濠は、残る各濠への導・配水機能と北からの入口施設で、下部に止水用の堰を付設したと推定される橋を堤状遺構との間に持っている。形状は、残る濠の外縁部がほぼ直線的であるのに対してその機能や施設のためか多くの屈曲部を持ち、自然地形に対して最も人工の手が加えられている。そのため構造上の弱点を持った箇所であるともいえ、北濠の中心部を貫流したニッ岳FPに伴う土石流では橋が根こそぎにされる程の被害を受けている。石垣は、北濠の持つ機能保持と地山崩落防止の補強を目的としたもので、ほかが地山削り出しのままであることからすると、その有無は機能の違いと施設あるいは場としての重要度を示すと考えられる。

また、出土遺物では土器が圧倒的に多く、『杯や碗を主体とした器種に偏在』し『使用痕が少ない完形に近い個体が多いこと』、『須恵器の共件が多いこと』などの特徴があげられ古墳時代に類例が多い土器を使用した祭祀に対する供献具が廃棄されたものと考えられる。その土器に見られる特徴は、3号井戸や1号井戸の内容にも共通し、後の先駆形態とも考えられる。

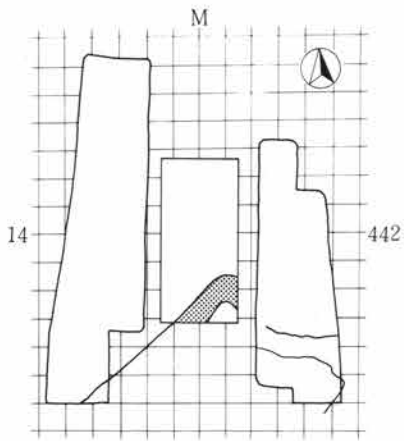
『第Ⅱ期』の3区3号井戸は、出土遺物から6世紀後半の遺構と考えられる。その位置は、西約18mにある3区10号土坑とは東西に対でしかも廃絶後の居館内部にある土坑は河道をはさんで呼応するかの様に構築されている。杯や椀を主体とする遺物組成は、北濠に見た内容と共通している。10号土坑では、杯を主体とする遺物の廃棄が認められ、また覆土中位には一面に広がる炭化物層があるなど人為的に埋没している。この期の遺構は、占地と時期からニッ岳F P後の河道復旧策の一つとして構築されたと考えられる。

『第Ⅲ期』は、7世紀の遺構により構成されるもので、4号井戸と3区1号住居跡があげられる。4号井戸は、詳細な記録はないが3号井戸の北西側の一段浅い掘り方部分を指して、今報告で『遺物出土状態で層位や平面分布に差があること』、『土器の型式にも新旧が見られること』、を理由として分離した。形状は、直径約3m程の円形と推定され、3号からすると約30cm浅くなり、中央部に底を抜いた曲物を据えている。遺物は、杯と椀を主体とした土器に木製模造品の『馬形』が加わる。馬形は、既に用途不明品として報告したが、全長14.5cm最大幅3.5cm厚さ0.4cmのヒノキと思われる柱目材を使用し簡略な裸馬の表現がとられている。この時期は、井戸に隣接して堅穴住居が作られ、遺物の中にも新しい要素の木製模造品の馬形が加わり、第Ⅲ期につづく様相である。

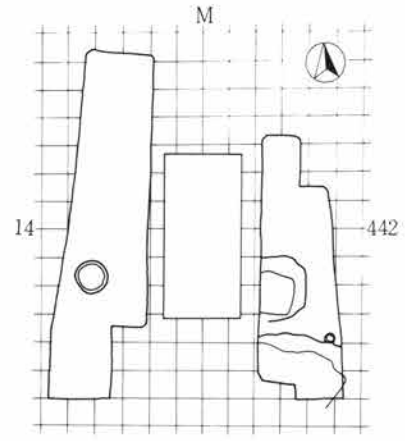
『第Ⅳ期』は、8世紀から9世紀前半の1区1号井戸で構成される。その様相は、占地と構造の点で前代の4号井戸までの特徴を踏襲し、より完備した溜井構造へと発展している。遺物は、依然として杯や椀を主体としており、『斎串』や付札状木製品、習書木簡、墨書土器、曲物といった木製品に加えて、オニグルミ、クリ、モモ、ウメ、ヒョウタンなどの自然遺物が出土している。その内容は、生活用具、官衙での出土例が多いもの、祭祀具、食糧残滓などに分類され、集落内の動きを反映したものと考えられる。しかし、その末期においては、最近、注目されている平安時代前半と推定される地震もしくは河川の氾濫(注3)により埋没し、井戸が廃棄されている。

『第Ⅴ期』は、9世紀前半代の3区2号井戸と隣接する1～9号土坑群で構成される。遺構は、これまでの占地と構造を踏襲するが、特徴的であった土器の出土は殆どなく、灌漑を目的とした井戸へと機能変化していった時期ともいえる。この背景には、先の地震や河川の氾濫により地形の平坦化が進み居住域と生産域の再編成があったと考えられる。それは、隣接する三ツ寺I遺跡では廃絶後の長い空白をへて再び住居が作られ始め、台地状の一画は削平までされて水田と化し、従来までの景観をより画一的なものに変化させている。

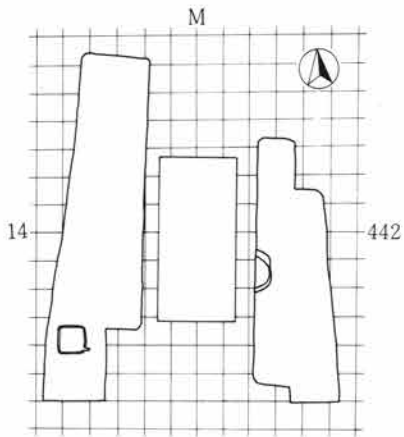
以上の変遷からは、5世紀から10世紀にかけての猿府川の治水と谷筋の開発の跡が窺える。谷筋の旧地形は、井戸のある付近が幅も狭く川も蛇行することから、その流れを取り込む格好で居館が築かれている。ニッ岳FA・FP後は、土石流の堆積などで地形の平坦化が進み河道の復旧策の一つ、不安定な河水に代わる水源として井戸が出現したものであろう。それは、初期には集落に付随する水源の性格を持つが、谷筋の開発が進む中で水田に対する灌漑施設に変化して整備発展していったものである。ついには、その都度河道をとりこみながら生産域が更新されていく中で、制御するに至ると初現的な灌漑であった井戸の機能が衰退し、少なくとも浅間B層で埋没した水田にはその存在が認められなくなっている。



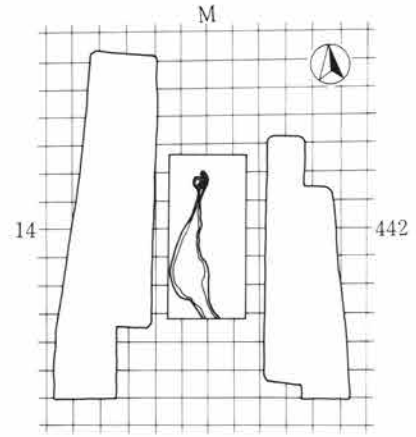
第I期 北濠北西隅



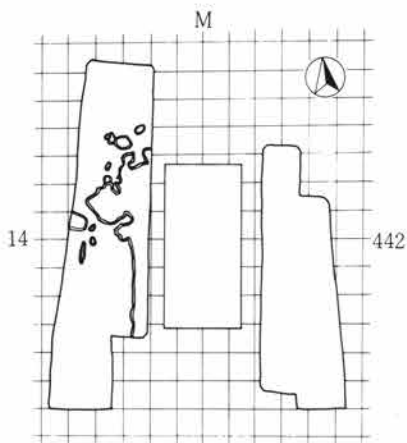
第II期 6世紀後半
3区3号井戸の構築



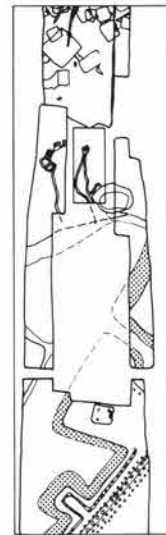
第III期 7世紀
3区4号井戸の構築



第IV期 8～9世紀前半



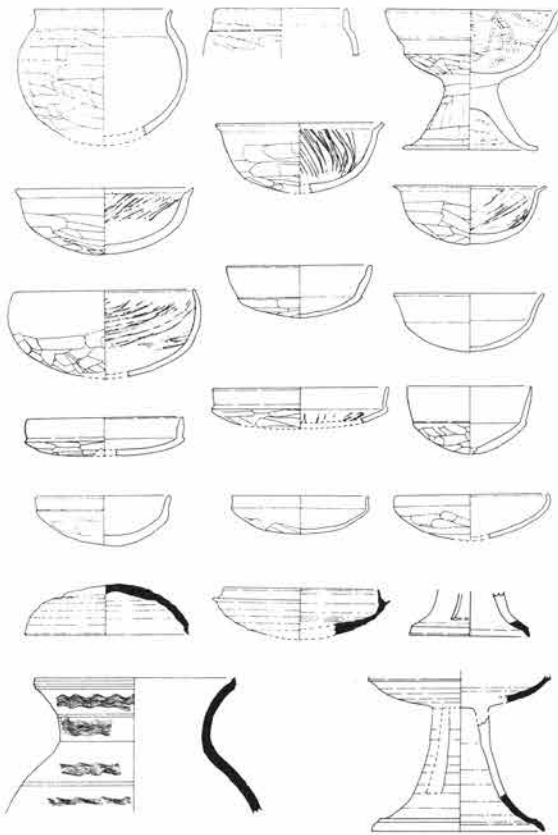
第V期 9世紀前半
3区2号井戸の構築



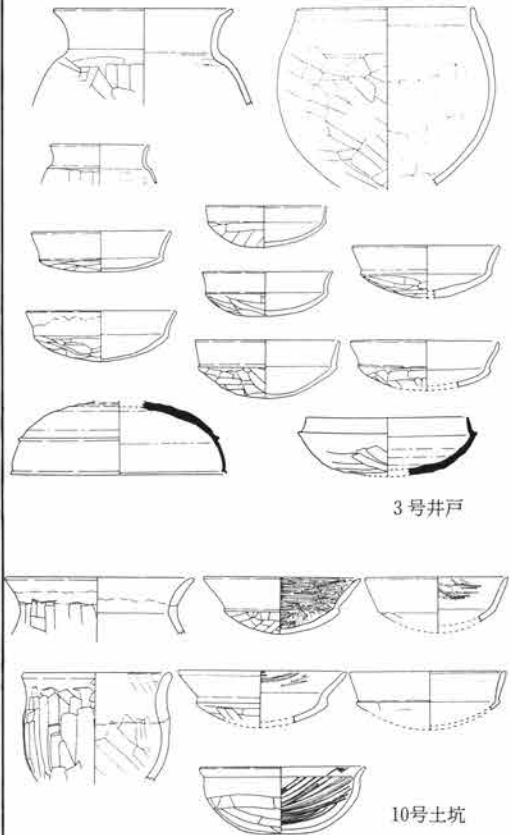
位置図

5-3図 第I期～第IV期変遷図

第I期 北濠



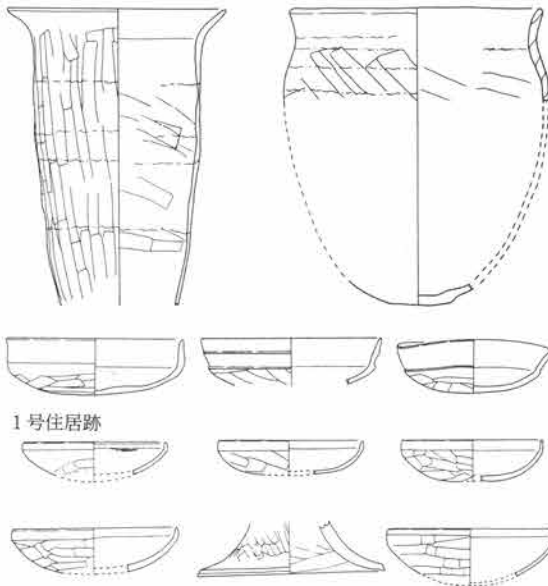
第II期 3区3号井戸・3区10号土坑



3号井戸

10号土坑

第III期 3区4号井戸・3区1号住居跡



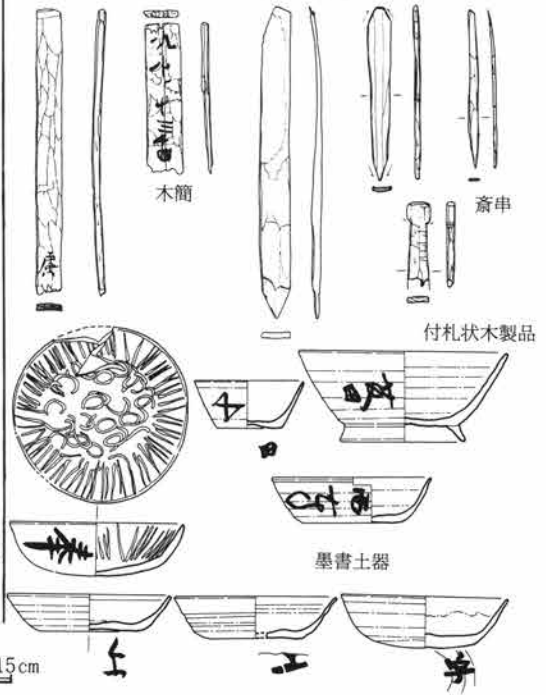
1号住居跡

4号井戸

馬形

0 1:6 15cm

第IV期 1区1号井戸



木簡

畜串

付札状木製品

墨書土器

5-4図 第I期~第IV期遺物集成図

3 1号井戸の構造 (5-5図, 5-9・10図)

井戸は、井筒部、溝部、石敷部からなる溜井である。溜井は、県内では赤城山や榛名山の末端丘陵部で多くが調査され、本遺跡の南約2kmにある熊野堂遺跡でも古墳時代から平安時代のものが3基ある(注4)。ここでは、それらと比較した構造についてのべる。

全長は、北の井筒部から石敷部の南端まで約14mで、その東南隅は豪族居館北濠外縁部の石垣部と重複している。以下に報告する法量は、先述の確認状況のために遺構残存面である標高122、30mを基準としたもので本来の数値を示していない。

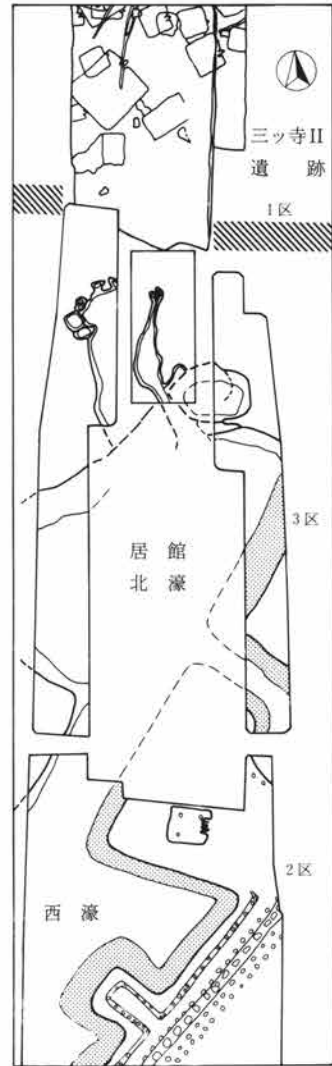
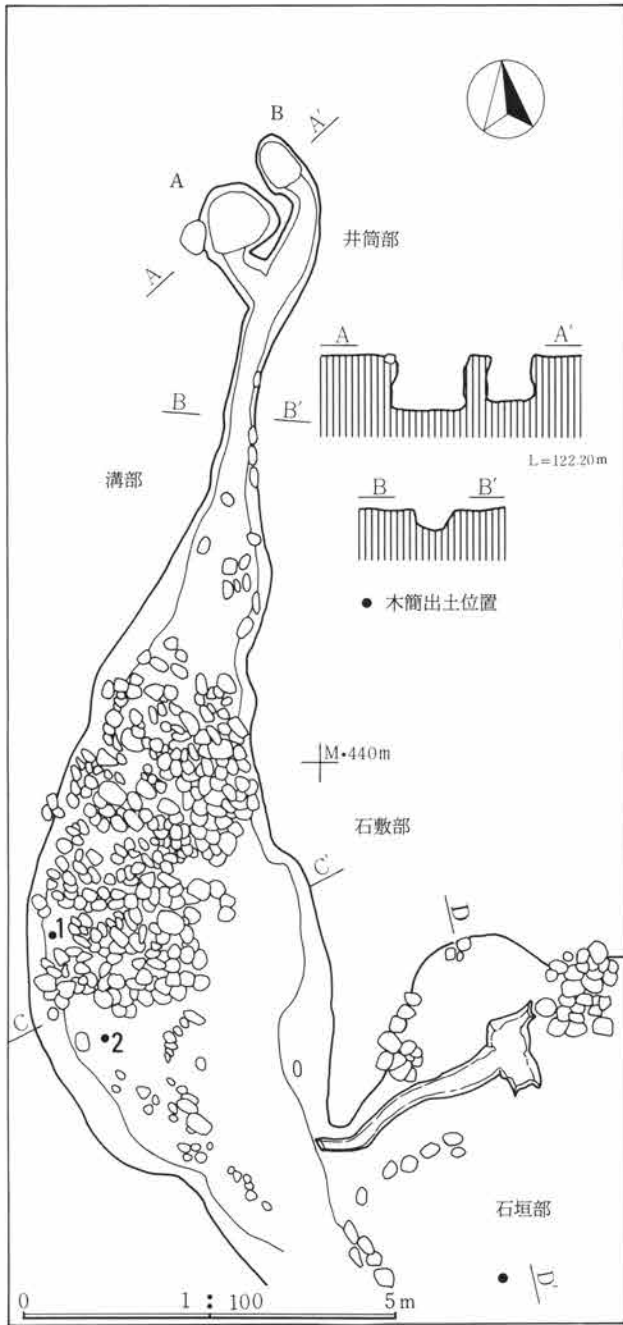
井筒部は、東西に並列する2基がある。Aは、西に分岐した溝の頂部にあり直径約110×100cmのほぼ円形を呈し、断面は灰色シルト質土がえぐれて袋状となった円筒形で深さ約70cmを測る。底面は、地山の灰色シルト質土を掘り込み、ほぼ平坦で接続する溝とは約20cmの段差を持っている。埋土は、下部に拳大の砂礫を主体とし、上方にかけては鉄分の多い細砂礫でほぼ埋め尽くされている。遺物は、土師器や須恵器の杯や椀などの破片ばかりで、少量かつ流れ込みによるものである。Bは、もう一方の溝の頂部にあり、直径約75×70cmのほぼ円形、Aと比較して小型だが約10cm深くなっている。断面形状や底面の様子、遺物の内容については、Aとほぼ同様で時期も底面レベルの違いからすると多少前後するとも考えられるが、明確にできなかった。

溝部は、井筒部と石敷部との間、約6mの範囲をさす。掘り方は、ほぼ直線的で底面には南北でのレベル差が殆どなく、上幅40~50cmと一定し、断面U字形を基調としている。井筒部から4mの位置では、『幅広に移行する箇所であること』、『残る石の大きさや埋土の違い』から止水調整用の簡易な堰が推定される。そして、堰の北両側には護岸用の石垣が付設されていたらしく、東壁には3段相当、拳大の石が列状に残っていた。旧状は、基底面を除く中段まで石垣を持ち、直線的なしっかりした構造と推定される。埋土や遺物の内容は、井筒部と同様である。

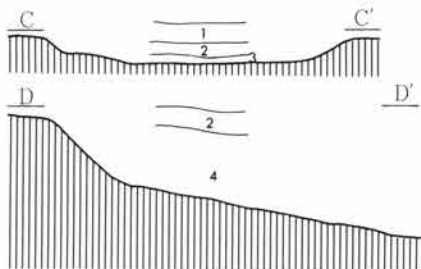
石敷部は、浅い皿状の掘り方の中に人頭大から拳大程度の丸い石が一面に敷かれていたもので、規模は石の最も多い中央部付近で最大幅約4mを測る。石の状態は、面や列を意識したものではないが南半分には極端に少なく、全体では南北の境界付近にさらに仕切り様のものがあって『温(ぬる)めの構造』(注5)が考えられる。

石垣部は、北濠北西隅と判断した箇所の人頭大程の石を用いた石垣が30度前後の勾配で10段程残っていた。石垣は、削り出した地山に裏込めをもって築かれている。この屈曲部には、幹の太さが50cmを越すニレの立木があり、井戸端をおおっていたと思われる。しかし、木は、図示した様に南西方向に倒れて石垣を壊しただけでなく、石敷部の出口をふさぎ、井戸を廃絶させている。その直接の原因は、南西延長線上の北濠外縁部際にある地割れから地震が考えられ、木が倒れて石敷部の南端をふさいだところに、大量の土砂が流入したと推定される。

石敷部から石垣部にかかる埋土は大別3層がある。全体は、1~3層の間層において天仁元年(1108)噴出の浅間B層の下にあり、年代観の下限を知ることができる。上から1層は、有機物や遺物を多く含んだ黒色泥土、中間の2層は1層に小砂利の混入した黒褐色土、最下層の3層は井筒部と同じ鉄分と細砂礫の多い橙褐色土である。



三ッ寺II遺跡(上)と
三ッ寺I遺跡(下)との
位置図(1:1,000)



- | | |
|----------|-------------|
| 1 黑色泥土 | 有機物、遺物を多く含む |
| 2 黒褐色土 | 1層に砂利が混じる |
| 3 橙褐色砂質土 | 鉄分が多い |
| 4 灰黒色泥土 | 有機物、遺物が多い |

5-5図 三ッ寺II遺跡1区1号井戸

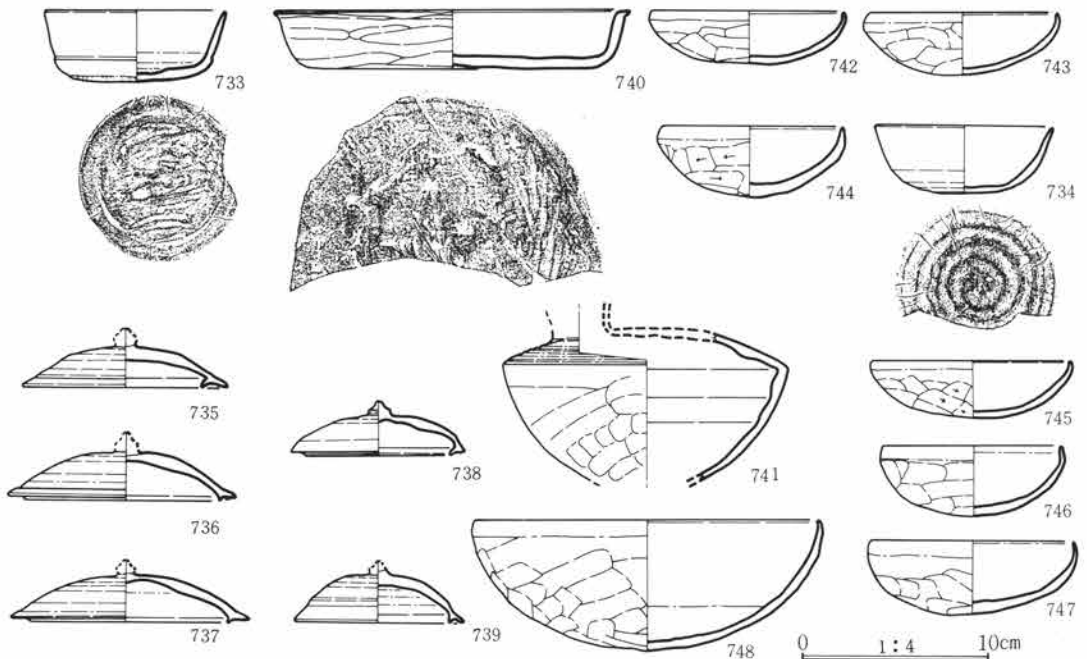
遺物は、石敷部から石垣部にかけての2層と3層に多く土師器、須恵器の杯、椀、甕などと木製品の木簡、斎串、付札状木製品、曲物、自然遺物のモモ、クリ、ヒョウタン、オニグルミなどがある。量比の主体は、土器類が圧倒的に多く破片数で約2万点を越している。その位置と状態からすると、先の土砂流入以前に主に石敷部に廃棄されたか、それ以前に石垣部に流入、埋没していたとものである。しかし、遺物の殆どは、調査の状況から層位別ではなく一括で取り上げており、唯一、木簡や斎串といった特徴的なものについて位置を示すことができる。その他は、傾向を知る程度で、特に土器についてはこれまでの編年に従い区分したにすぎない。

土器は、6世紀末から9世紀中頃までのものが出土している。6世紀代のものは、個体数も少なく摩滅しているものが殆どで、この井戸の時期とは関係なく除外した。同様に0785のように10世紀前半のものも混入として除外した（5-6図～5-8図）。

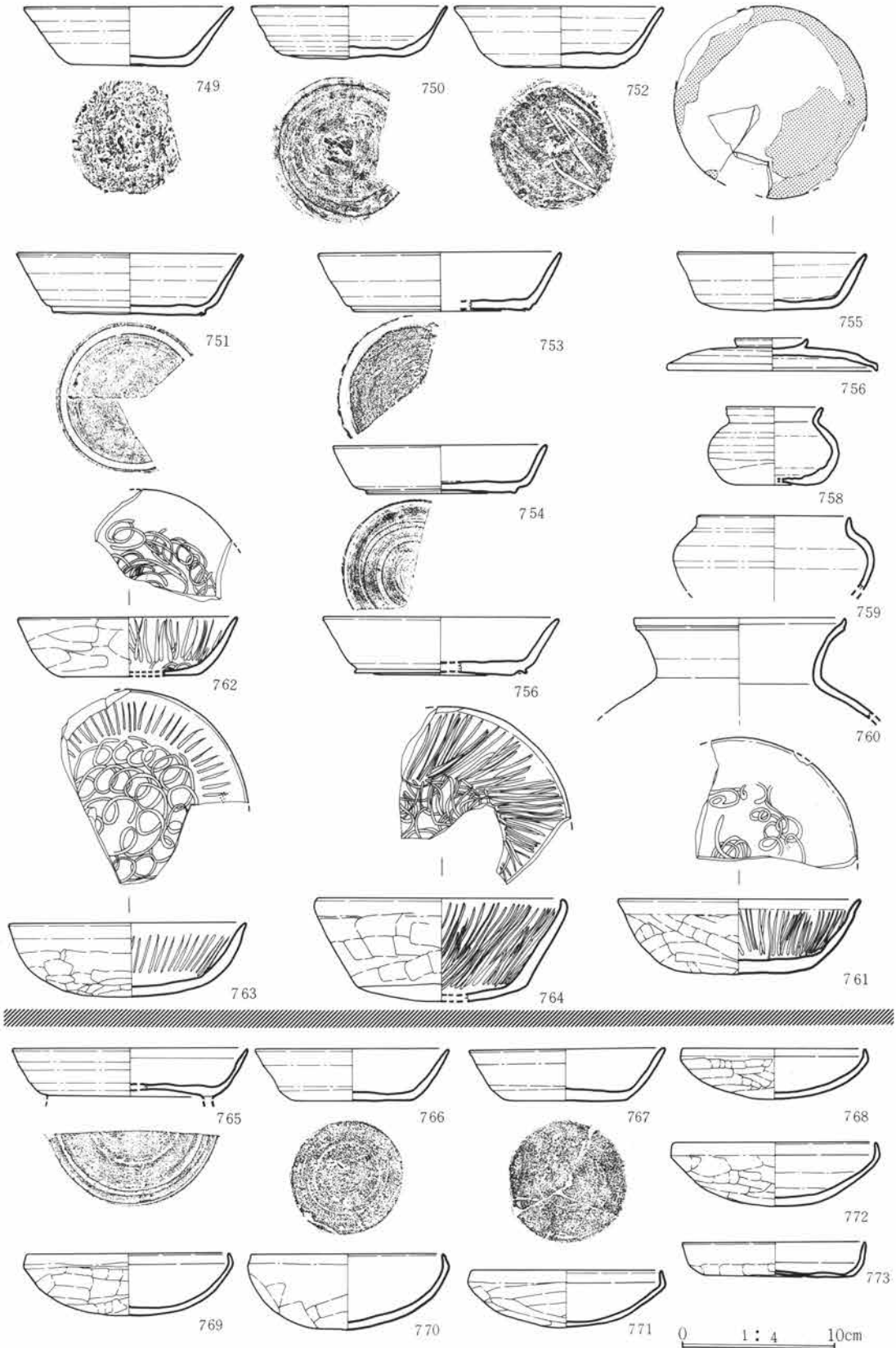
I期は、7世紀後半に比定する。分類上では、須恵器が主体で杯、蓋、瓶、壺などの器種がある。蓋は、擬宝珠のつまみとかえりを特徴とし、杯は擬高台がみられる。この時期には、0791の『字』を墨書した杯があり、最古の墨書土器の可能性はある。

II期は、7世紀～8世紀前半に比定する。組成は、須恵器との比率が逆転し、土師器の杯が圧倒的の主体を占める。杯は、口径の小さなものが特徴で、これらに暗文土器が伴う。暗文土器は、20個体を越す程の数だが『奉』の字を書いた0786の様に墨書が一般化する時期とも考えられ、土器の性格とともに木簡が共伴した可能性が高い。

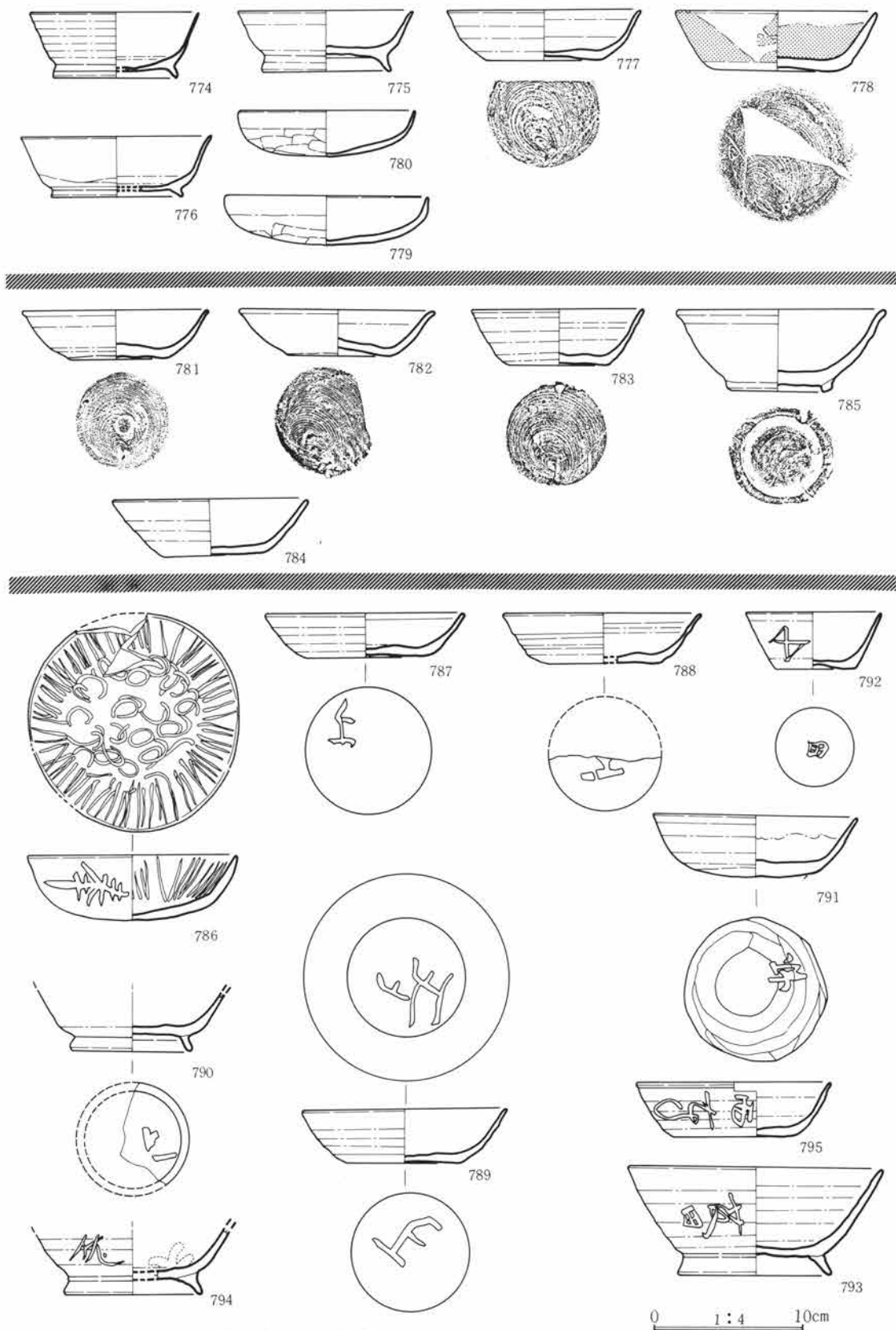
III期は、8世紀後半～9世紀前半に比定する。須恵器が主体になり、回転糸切りと付高台の杯・椀類を特徴とする。墨書は、『上・葭田・西東』といったものがある。



5-6図 1区1号井戸出土土器集成(1)



5-7图 1区1号井戸出土土器集成(2)



5-8图 1区1号井戸出土土器集成(3)



5-9図 1区1号井戸完掘状況(南から)



5-10図 1区1号井戸石敷部全景(南から)

第2節 木製品について

木製品は、石敷部と石垣部の上層部とから出土した。その位置と状態からすると、ほかの遺物と同様に本来は石敷部付近に廃棄され、さらに南の低地部分へと押し出されて埋没、堆積したと考えられる。

その数は、石垣の際に立木としてあったニレの木端材や樹皮を除くと意外に少なく、50点前後で遺存状態も悪い。このうち、加工が施されたものになると、5-11図～5-13図に掲載した付札状木製品1点、齋串3点、横槌1点、曲物の側板や底板乃至蓋板10点程を数えるにすぎない。

組成は、調査状況からすると本来のものとは思えないが、石敷部では木簡、付札状木製品、齋串、曲物が、石垣部からは横槌、曲物がというように出土位置と時期を異にしている。

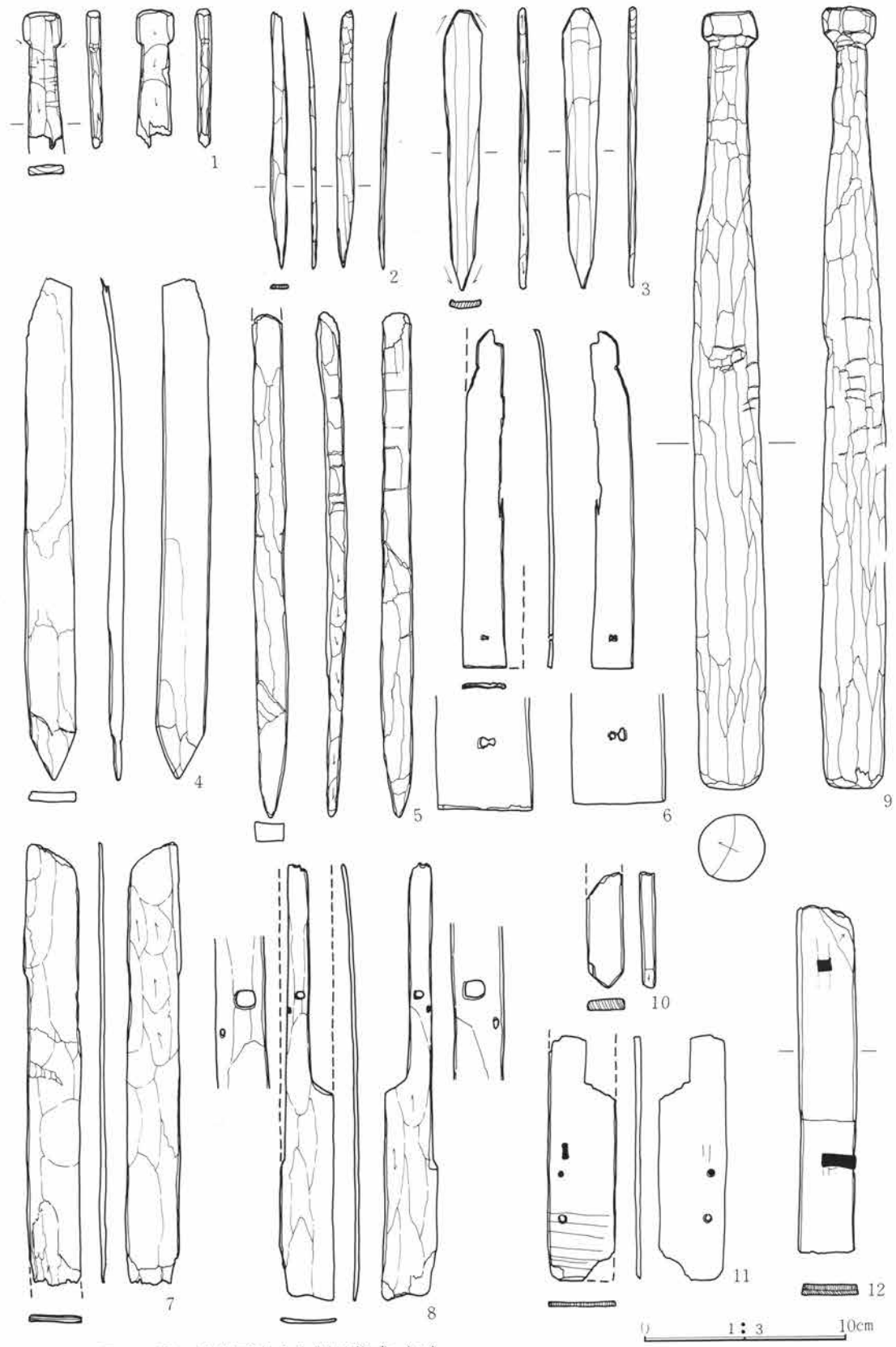
時期は、石敷部ものが共伴する土器から8世紀代、石垣部のもはそれ以前の可能性が高く、曲物としては東側に隣接する3区4号井戸出土品や北濠の中にも類例(注6)があり、年代的な上限として6世紀後半代の可能性もある。

齋串は、県内の出土例としては5世紀後半の前橋市元総社明神遺跡1点(注7)、10世紀代の高崎市日高遺跡2点(注8)、高崎市西島遺跡1点(注9)に次ぐ4例目である。その数は、未報告の中にも短冊状に削った薄い板状のもの断片が数点あり、実際は3点を上回る可能性が高い。

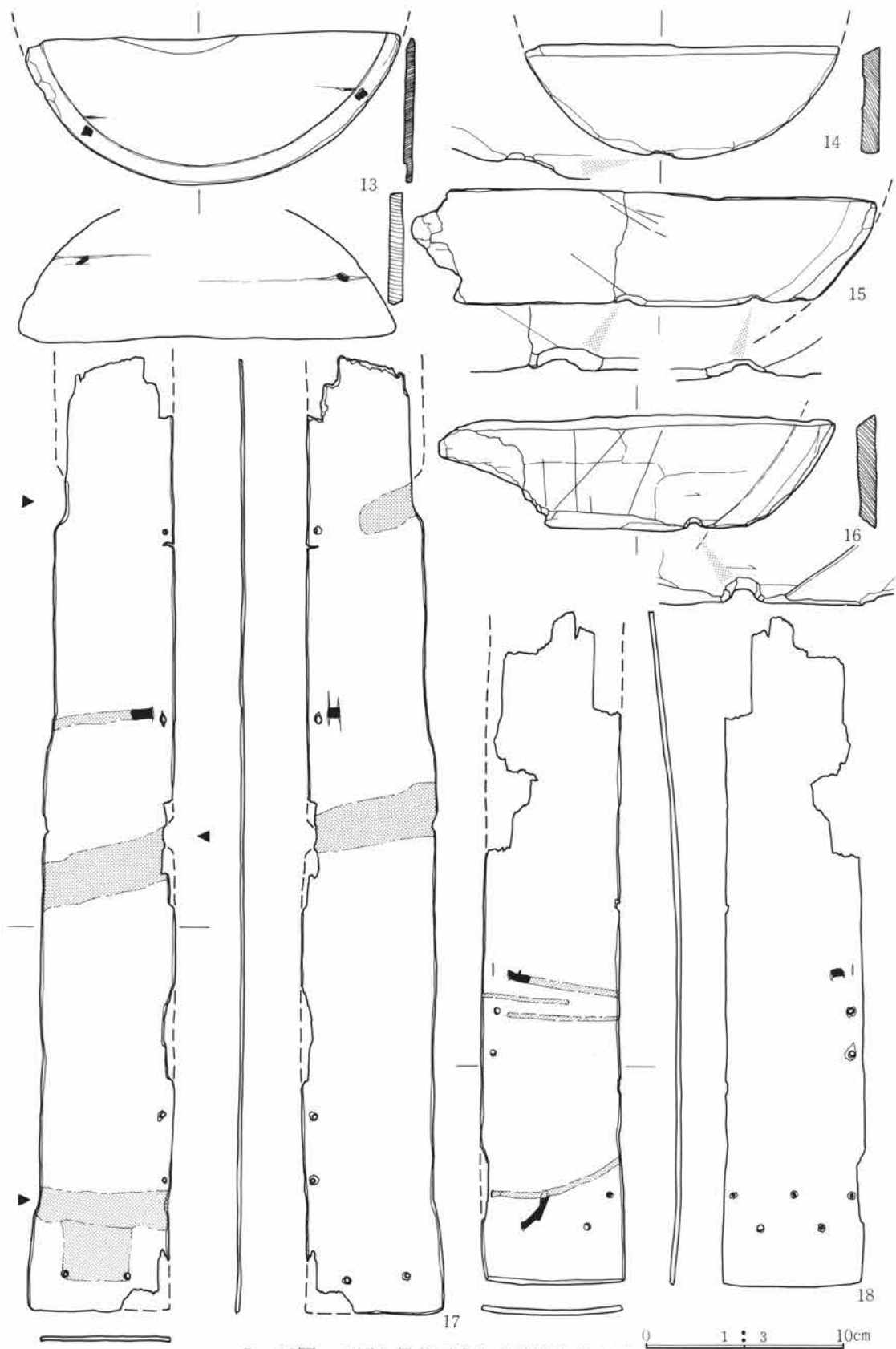
3点は、形状、法量の点で一致しないが、いずれも下端部を山形に削り出しており、報告3と4は黒崎直氏分類のA類である(注10)。残る報告2は、下端部に削り出しを持つだけの単なる削り屑の様で疑問でもあるが、黒崎氏分類のF類に近く、三ッ寺I遺跡西濠出土の3点(233・445・446)を類例としてこれに含めた。いずれも箸状を呈しており、上記とは時期を異にするが形状や法量で近似している。現在、最古の齋串が先の前橋市元総社明神遺跡の5世紀後半という年代観からすると、三ッ寺I遺跡の例も正確にはこれに含めない方がいいかもしれないが、分類項目を異にする祭祀具の可能性と先の年代観の妥当性を指摘しておきたい(注11)。また、5や10は全体に厚いが先端を山形に削り出しており、齋串の可能性がある。

7と8は、曲物の側板としたが、7で指摘した様に全体に薄く削られ先端が切先状をなすことから『刀形』の可能性もある。

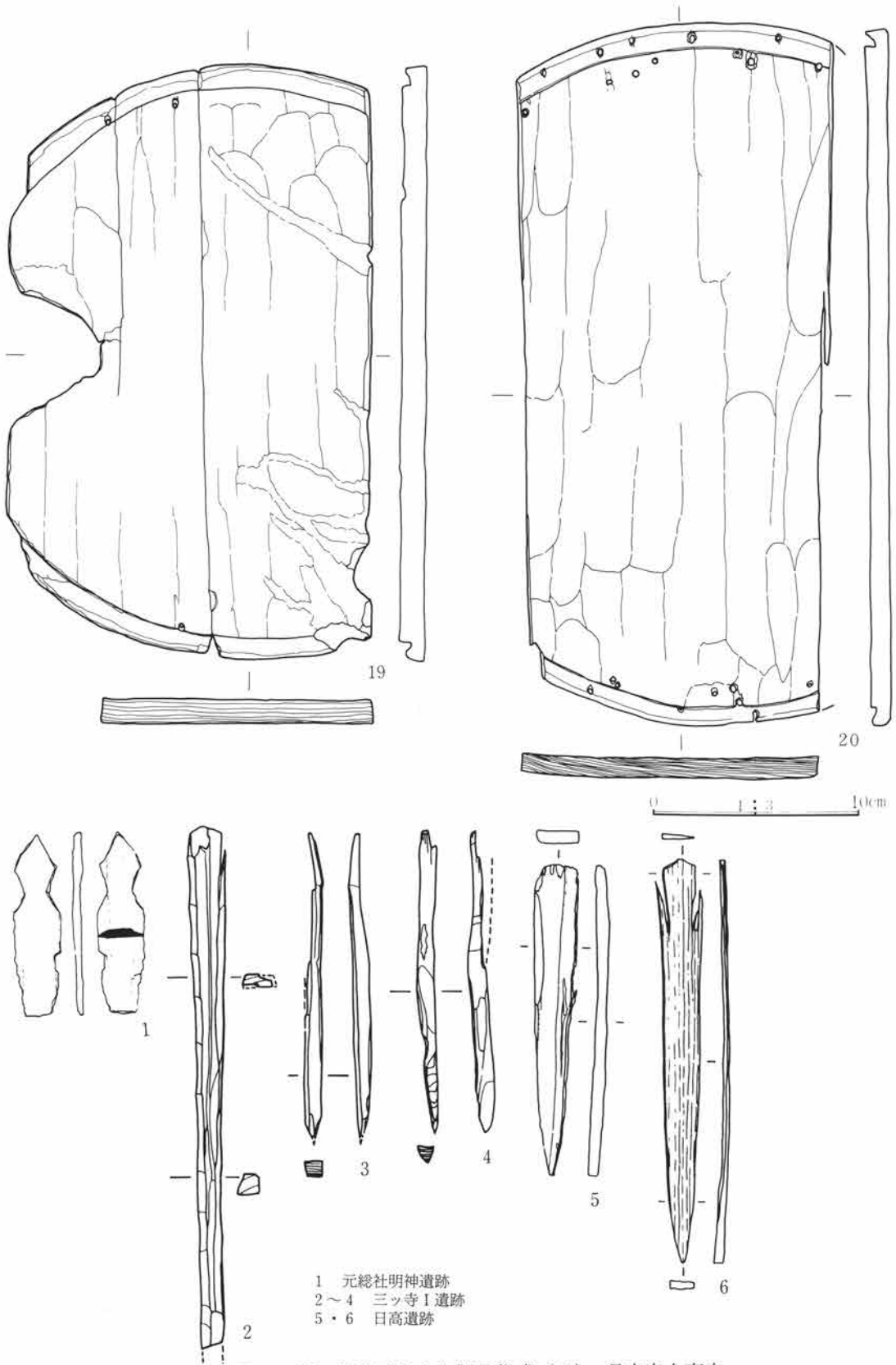
曲物は、殆どが桶と推定される。その特徴は、直径でいう法量上の大小で『材質と木取り』に差異が見られることで、報告19・20といった直径30cm前後の大型品はスギらしい板目材を使用しているのに対して、報告13～16の直径20～25cm前後の小型・中型品はヒノキらしい柁目か矩柁材を使用している。また、いずれも破損後に二次利用しているのが特徴で、刃物痕や部分的に拡大図示した紐かけやきざみの存在からすると、組板や組み合わせの補助部材の用途が考えられる。



5-11図 1区1号井戸出土木製品集成(1)



5-12图 1区1号井戸出土木製品集成(2)



5-13図 1区1号井戸出土木製品集成(3), 県内出土齋串

表5-1 トリツ寺II遺跡1区1号井戸出土木製品観察表

番号	器種名称	長さ・幅・厚さ (cm)	木取り・樹種	遺存状態, 加工・形状の特徴について
1	付札状木製品	現長6.7 最大幅1.7 最大厚0.7	板目・広葉樹	下半部欠損。半截した大枝の一方を短冊状に削る。上端の両側に切りこみを持つ。各側は面取りされて丸みを持つ。一面にだけ、わずかに刃物痕がある。
2	斎串	長さ12.5 最大幅0.8 最大厚0.2	板目・針葉樹	完存。割材か木端材を細く削り出して整形する。裏面の反った様子からすると、そぎおとした削り屑の可能性もあるが、下端は両側から削って尖る。
3	斎串	長さ13.7 最大幅1.9 最大厚0.4	柾目・針葉樹	完存。割材を板状に削り出し、上下両端を含めた側面を削って整形する。上方が幅広になり下端は尖る。PEG含浸後に実測する。黒崎直氏分類のA1類。
4	斎串	長さ24.6 最大幅2.4 最大厚0.8	板目・針葉樹	完存。割材を板状に削り出す。上下両端は三角状に削りおとす。上端はうすくなり、そげおちた様である。下端はやや厚くなり、端部だけに削りが施されたほかは木目に沿って剥落している。黒崎直氏分類のA1類。
5	杭	現長24.5 最大幅1.5 最大厚1.0	柾目・広葉樹か	上部欠損。みかん割りした材を整形する。両側面は分割面を一部だけ調整する。一方の面には細い紐状の痕跡が約5mm間隔で4条見られる。下端は三角状に削られているがつぶれはない。杭と断定するには細い。
6	曲物 桶の側板	現長16.5 最大幅2.0 最大厚0.2	板目・針葉樹	端部欠損。表裏の加工不明。図の下端面は切断している。下端近くに大小対の紐孔がある。紐孔は0.1~0.2cmである。図示していない破片が10点近くある。
7	曲物 桶の側板	現長21.5 最大幅1.8 最大厚0.1	板目・針葉樹	端部欠損。表裏に粗くケズリを施してうすく仕上げる。側面は分割時のままである。8とは同一個体である。下端部は切先状にとがる。刀形の可能性がある。
8	曲物 桶の側板	現長21.3 最大幅2.6 最大厚0.1	板目・針葉樹	端部欠損。表裏に粗くケズリを施す。側面は分割時のままである。下端部はうすく削られている。中央上の紐孔は角と円で尻痕がある。円孔は補助である。
9	横槌	全長 38.4 握部長 約10 握部径 2.4×2.3 敲打部径3.6×3.3	割材・広葉樹	完存。割材から削り出して整形する。握り部は8~9面体に整形され、敲打部よりも細くて密な削りが施されている。敲打部は寸胴形で平滑な端部には使用痕がなく、側面の主に表裏2方向に爪状の長さ1cm強の刃痕が15~18ヶ所見られる。使用痕から見て、その使用頻度は少ない。
10	不明	現長5.6 幅1.8 最大厚0.6	柾目・針葉樹	端部のみ残存。割材から削り出して整形する。端部は山形に両側から削りおとす。
11	曲物 桶の側板	現長11.7 幅3.3 厚さ0.2	柾目・針葉樹	端部のみ残存。側面寄りに樺皮止めとツル紐止めがある。紐孔は4mm強。端部の片面にすべり止めのためか刃物痕が8条ある。
12	曲物 側板	現長17.0 幅2.6 厚さ0.2	柾目・針葉樹	両端部を折損。2枚の板が2ヶ所で樺皮止めされている。
13	曲物 底板	推定長径21.0 厚さ0.3	柾目・針葉樹	受部がめぐり、端部に樺皮止めがある。表裏は摩滅し中央部は円形にすりへる。

第2節 木製品について

番号	器種名称	長さ・幅・厚さ(cm)	木取り・樹種	遺存状態,加工・形状の特徴について
14	曲物 蓋板	推定長径17.0 厚さ1.0	矩柁・針葉樹	受部はなく、周縁端部がわずかに摩滅する。表裏平滑、側面の割れは旧時である。外周中央部に紐かけらしいくぼみがある。
15	曲物の底か蓋板	推定長径32.0 厚さ0.7	柁目・針葉樹	幅広い受部をもつ。表裏平滑で細い刃物痕がある。側面の割れは旧時である。一方の側面に紐かけらしいくぼみが2ヶ所ある。
16	曲物の底か蓋板	推定長径24.0 厚さ0.8	矩柁・針葉樹	幅広い受部をもつ。表裏両面に細い刃物痕をもつ。側面の割れは旧時である。一方の側面端部に紐かけらしいきざみがある。
17	曲物の側板	現長46.9 幅6.6 厚さ0.2	柁目・針葉樹	18と同一個体か表裏2枚重ねにして使用したと考えられる。一方の端部側を欠損するが図示していない破片が約30点ある。とじ方は、樺皮とツル紐の2種類がある。樺皮は現存するもので幅5mm前後である。スクリーントーンは丘痕を表現している。側面に紐かけのくぼみがある。
18	曲物の側板	現長33.5 幅7.0 厚さ0.2	柁目・針葉樹	17と同一個体か。樺皮止めとツル紐止めの痕跡を残す。下端部近くの2孔は17のものと同じ位置にある。それ以外は17と交互の位置にある。
19	曲物の底か側板	長径29.0 内径27.8 厚さ1.1	板目・針葉樹	受部が全周し、紐孔が長軸両端に不揃いにある。穿孔方向はほぼ垂直で円孔である。表裏両面は、かすかに削目が残る程度に全体が摩滅し、図示した面には植物痕によるらしい腐植痕がある。側面の割れは旧時である。左側面中央のU字状の持ちこみは人為的である。
20	曲物の底か蓋板	長径34.0 内径32.0 厚さ1.0	板目・針葉樹	受部が全周し、紐孔が受部に約5cmの間隔でめぐり、内側のものとほぼ対をなす。不定間隔のものは、後の補修孔と考えられる。孔は、外側から内側にむかって斜め方向に穿孔される。径は約3mm強を最大値とし、形状は円孔である。孔の位置からすると、側板の厚さは3mm前後と考えられる。表裏は、粗く削目が残り、図示した裏面側には不定方向の細い刃物痕が多く残る。両側面の割れは旧時のもので、幅15cm強の形状からして組板として再利用されたと考えられる。

第3節 木 簡

高島 英之

木簡は、2点出土した(*1)。他に、形状が木簡に類似する木製品の断片等も数点出土しているが、墨痕が認められるものは存在しない。以下、木簡の积文を掲げ、形状および内容などについて記述する。

〔第1号〕

〔九カ〕

〔中カ〕

〔ママ〕

九 □ □ □ 三 千 四 ×

(126) × 29 × 4 019

下端部は折損しているが、上端部および左右両側面は原形をとどめているものと思われる。なお、現状では4つの小片に分断している。

上端部の調整はやや粗いが、両角を削りおとして面取り加工している。左右両側面も削って調整している。文字が記載されているのは片面のみで、その面は一応、刀子状のもので調整が施されているが、かなり粗雑である。また裏面も同様である。墨痕は全体的にみて比較的明瞭であるが、4小片に分断している上、表面の状態もかなり荒れている。

文字は現状で七文字が確認できるが、そのうち上から3字目は、材の割れ目にかかっている上、墨痕がはなはだ不明瞭であるため、全く判読不能である。また、2字目と4字目も墨痕がやや薄い上、材の割れ目にかかっているため、若干はつきりしない部分もある。一見して判読が可能なのは、1字目および5字目以下である。なお、文字は必ずしも木簡の中心に揃えて記載されているわけではなく、左右にかなり動いている。また、文字自体の大きさもやや不揃いである。

記載内容の意味は不明であるが、7字目の『四』の字が、木簡材の表面が剝離した部分に記されているので、現状でみられる文字群は、本来の材が欠損した後に記されたことが判明する。すなわちこのようなことは、文書や記録、あるいは荷札といった正式な用途の木簡では考えられないことであり、その点からみて本木簡は習書と考えるのが妥当であろう。『九』の字が2文字連続して記されていること、『四』の字が誤字であること、文字の配列が不揃いであること、などの特徴も、本木簡を習書と考える上での例証となるであろう。つまり本木簡は、元来存在した何らかの木簡が欠損した後に、その材を二次的に習書として利用したものと思われる。

〔第2号〕

〔廣カ〕

□ □ □ ×

(226) × (21) × 5 019

上端部および右側面は原形をとどめるが、下端部は欠損、左側面は割損している。

上端部は比較的丁寧な面取り加工が施されており、また右側面は削って調整されている。表裏面と

も刀子状のものできちんとした調整が行われている。

現状で墨痕が確認できるのは片面のみであり、しかもその上半部分はきわめて薄く、ほとんど見いだすことはできない。判読がつく文字もわずかに1字にすぎず、それも墨画は不明瞭である。

本木簡の性格や用途は全く不明である。

まとめ

本遺跡から出土した木簡はわずかに2点にすぎない上、判読不能な部分が多く、木簡そのものの記述から遺跡の性格を直接うかがい知ることはできない。しかしながら木簡の記載内容や性格・用途等が全く不明な2号木簡はさておくとしても、1点とはいえ習書木簡（1号木簡）が出土したことの意義は高いものと思われる。

言うまでもなく習書木簡とは、文字・文章の習得のために書かれたもの、つまり『手習い』である（*2）。習書木簡が存在するという事は、すなわちそこに文字を習う人物＝文字の習得を必要とする階層の人物が居たということに他ならない。現に、習書木簡が出土した遺跡は、特に都城・官衙・寺院などの公的な施設あるいはそれらに関連した施設と考えられるものにしぼられる。短絡的に結論を導くことは厳に慎まねばなるまいが、そうなるそのような性格の木簡が出土した本遺跡の性格もある程度限定して考えることが可能なのではないだろうか。

勿論、他の場所で記された木簡が何らかの事情で当地にもたらされたとする見方もできなくはないが、習書木簡の場合、これまでの全国各地における出土事例からみても、そのようなケースはほとんど考えられず、また本木簡の出土状況からみても遠方から自然に流れついたものとは考え難い。この木簡が、欠損した木簡材を二次的に加工・調整することなくそのままの状態ですべて習書に用いていることから、廃材にその場で習書したものとみてまちがいないだろう（*3）。わずか1点のみの出土であるところが気にかかると言えば気にかかるであろうが、この習書木簡はこの場所で記され、そして廃棄されたものとみてよいだろう。そしてこのような習書木簡が出土した本遺跡も、文字を日常的に操る階層の人々が存在した場所——勿論、木簡のみからでは具体的な性格については何一つわからないが——の一つと想定できるであろう。

注

- * 1 女屋和志雄「1981年出土の木簡—群馬・三ツ寺II遺跡」（『木簡研究』4 1982年3月）、および『群馬県史 資料編 4』（原始古代4—文献 1985年3月）では本遺跡出土の木簡を4点としているが、今回、資料を丹念に調査した結果、確実に墨痕が存在するものは2点のみであったので、以後、本遺跡出土の木簡は2点として扱う。
- * 2 習書木簡については、佐藤 信「習書と落書」（『ことばと文字』 1988年3月）を参照。
- * 3 全国各地から出土した習書木簡のほとんどは欠損木簡あるいは削り屑である。

（付 記）

本木簡の積読にあたっては、国立歴史民俗博物館教授 平川 南 氏にご指導並びにご助言を賜った。記して深甚なる謝意を表する。

一号木簡



九
□
□
□
□
三千
四
×

〔九カ〕

〔中カ〕

〔ママ〕

(126)
×
29
×
4
019

二号木簡



×

〔廣カ〕

(226)
×
(21)
×
5
019

0 1 : 2 10cm

5-14图 1区1号井戸出土木簡

第4節 墨書土器について

1 器種 2 施書部位 3 文字 4 刻書土器

墨書土器は、8世紀中頃から9世紀前半にかけてのものが148点出土した。この数は、単独の遺構から出土したものとしては県内で最も多く、8世紀代のものは県内でも初期のものとして位置付けられる。また、墨書は、習書木簡や硯との共伴から遺跡内か隣接地で書かれたものと考えられる。

字体は、『奉（たてまつる・ほう）、葭田（あしだ・よしだ）、上（たてまつる・うえ）』の3文字に代表される14文字がある。この3文字は、いずれも20点を越す数と複数の書体を持ち、統一的な意図と主体的な文字であることがわかる。また、その書体や施書部位の違いをもって長期間書き継がれていることがわかり、大きな特徴である。従って、148点という数は、土器の変遷で示される様に井戸が継続的に使用された結果として累積されたものである。

墨書土器の変遷は、次の様に考えられる。

第Ⅰ期	『奉』	（たてまつる・ほう）	8世紀中頃～9世紀初頭
第Ⅱ期	『葭田』	（あしだ・よしだ）	8世紀後半～9世紀前半
第Ⅲ期	『上』	（たてまつる・うえ）	9世紀前半

上記の区分は、各文字の主体となる時期を示したもので画期をもって推移するものではない。強いて画期とすると、2文字が盛行する第Ⅱ期が地名や建物といったものに比定しやすく、具体性という意味から木簡との共伴が考えられ前後と比較して質的な差異が認められる。以下、器種、施書部位、文字の3点に分けて特徴を述べる。

1 器 種

全体のうちで器種が判定できたのは146点である。内訳は、杯141点、碗5点である。残る2点も杯か碗とみて大過なく、施書器種は杯と碗が対象と考えられる。この傾向は、井戸全体から出土した土器の組成とも合致する。施書された土器全体は、使用痕を持つものは少なく、完形土器の多いのが特徴といえる。しかし、墨書土器の中でも、11は稜線や墨書自身がすり消えるまで使用され、117は内面に被膜化した『漆』が付着しており実用の器を含んでいる。また、1や2などの様に底部の周縁を円盤状に打ち欠いた破片への施書もあったことがわかる。

時期別では、第Ⅰ期『奉』は土師器の杯が圧倒的に多く、第Ⅱ期の『葭田』になると須恵器への施書が始まり、第Ⅲ期の『上』に至っては須恵器の比率が俄然高くなる。この推移からは、土師器から須恵器への変化が文字どおり読み取れるが、この内容は県内諸遺跡での例とも合致する時期的な傾向でもある（『群馬県内出土の墨書土器集成 1』群馬県教育委員会 1989）。

2 施 書 部 位

部位別では、体部48点、底部100点となる（表5-2）。

時期別の傾向としては、『奉』に代表される様に体部から底部外面さらに底部でも側から中央へと移

行する。『上』に至っては、体部に始まり底部外面から底部内外両面に及んでいる。体部は、書き手のくせもあろうが、口唇部寄り→稜線付近→底部へと変遷している。また、いずれの文字も内面だけに施書したのは132の1点だけで、例外的な存在となっている。底部は、各文字とも中央部への集中が見られるものの、『葭田』や『上』の様に左右の側の上下といった差がある。

この体部から底部への変化は、単に手に持つか伏せてかといった書き方の違いを示すのではなく、墨書自身の意味あるいは性格の変化があると考えられる。すなわち、土器としての実用の有無からすると体部の外面にあって見せる、かつ用途を識別、特定させるものから、底部では見えなくなるように書くことだけの意義、記号としての墨書へと変化したものであろう。

3 文 字

文字は、『奉』、『葭田』、『上』を代表にして14文字があり下記に分類される。

1文字墨書 奉、上、佐、㊦、中、字、淨

2文字墨書 ・井、葭田、・甘、紀殿、西東、蔦蒔 (●は墨痕を示す。以下同様)

文字数は、現状で見る限り最高2文字で、かつ上限である可能性が高い。時期別では、8世紀中頃の1文字の『奉』に始まり、8世紀後半で『葭田』、『紀殿』を始めとする2文字を経て9世紀代の1文字の『上』へと推移している。『上』については、2文字分を重ねた例や底部の内外面に持つ例があり、2文字から1文字への過渡的な様相か、それとも文字を書き重ねることでその意図を強めたものともとれる。

字体は、代表3文字を5-19図で傾向を示した。その特徴としては、複数の字体があること、半ば時期差を持って推移していること、の2点があげられる。大きさの点で見ると『奉』で代表されるように施書部位の変化に伴って『小ぶりで均整感のあるもの』から『大ぶりになって字画が不揃いなもの』さらに『底部中央で大ぶりでのびやかに書かれる』までに変化している。この『小』から『大』への変化は、『葭田』や『上』についても同様である。

書体は、楷書様のものを基準にすると記号風に『略したもの』から書き慣れた様子を示すのか『異体字様のもの』まで個体差があり、時期別や書き手自身の違いなどが理由として考えられる。この違いは、『払い』や縦横の『画』で更に分別が可能で同一の筆跡と見られるものは少ない。

文字の意味は、具体化、特定化することはむずかしいが、第I期の『奉』は井戸か水辺の祭神へのタテマツルやマツル、あるいは単にホウと読ませ祭祀での供献具と考えられる。文字本来の役割は、抽象的なものか、多量の土器の中から特定化する記号様のものが主目的であろう。

第II期は、『葭田』を始めとする『紀殿、蔦蒔、牛甘、西東』といった2文字が盛行し『具体的な地名や建物、人名に比定が可能なもの』へと変化する。中でも『葭田』は、特定の地域をさす地名の可能性がある。直接に結び付ける史料ではないが、本遺跡の南約2kmにある高崎市浜川町には井野川沿いに『芦田貝戸(あしだかいと)』の小字名があり、古墳時代と平安時代の集落跡や水田跡が調査されており関連が注目される(高崎市教育委員会『芦田貝戸遺跡 II』1980)。

第III期は、『上』のほかに『中、佐、㊦』の1文字があり、県内でも類例が見られ何らかの記号か略称かともいえる。

この他『●井』は1号井戸自身をさし、『紀殿』は県内でも太田市賀茂遺跡の『神殿』（注12）、高崎市下佐野遺跡の『田殿』といった出土例（注13）の少なさからすると限定された場所や意図をさすと考えられる。『字』は、建物に対する数詞としての用語例が『上野国交替実録帳』などから知られる。そして、土器に『漆』が付着していたことからすれば、土器の用途だけでなく、それが使用された場所を示していた可能性もある。『牛甘』は、万葉集（巻二十 4404）の防人歌にもある上毛野 牛甘（うしかい）といった人名の可能性もある。

4 刻書土器

刻書土器は、6点が出土している。その内容は、136が焼成前に書かれたもので文字を意識させる複数の線描からなるが判読できない。152～156の5点は底部内面に記号様に書かれたもので本来分類すべきものとする。5点は、9世紀初頭の年代観からすると、この時期に多い暗文様のものを模倣したといえる。

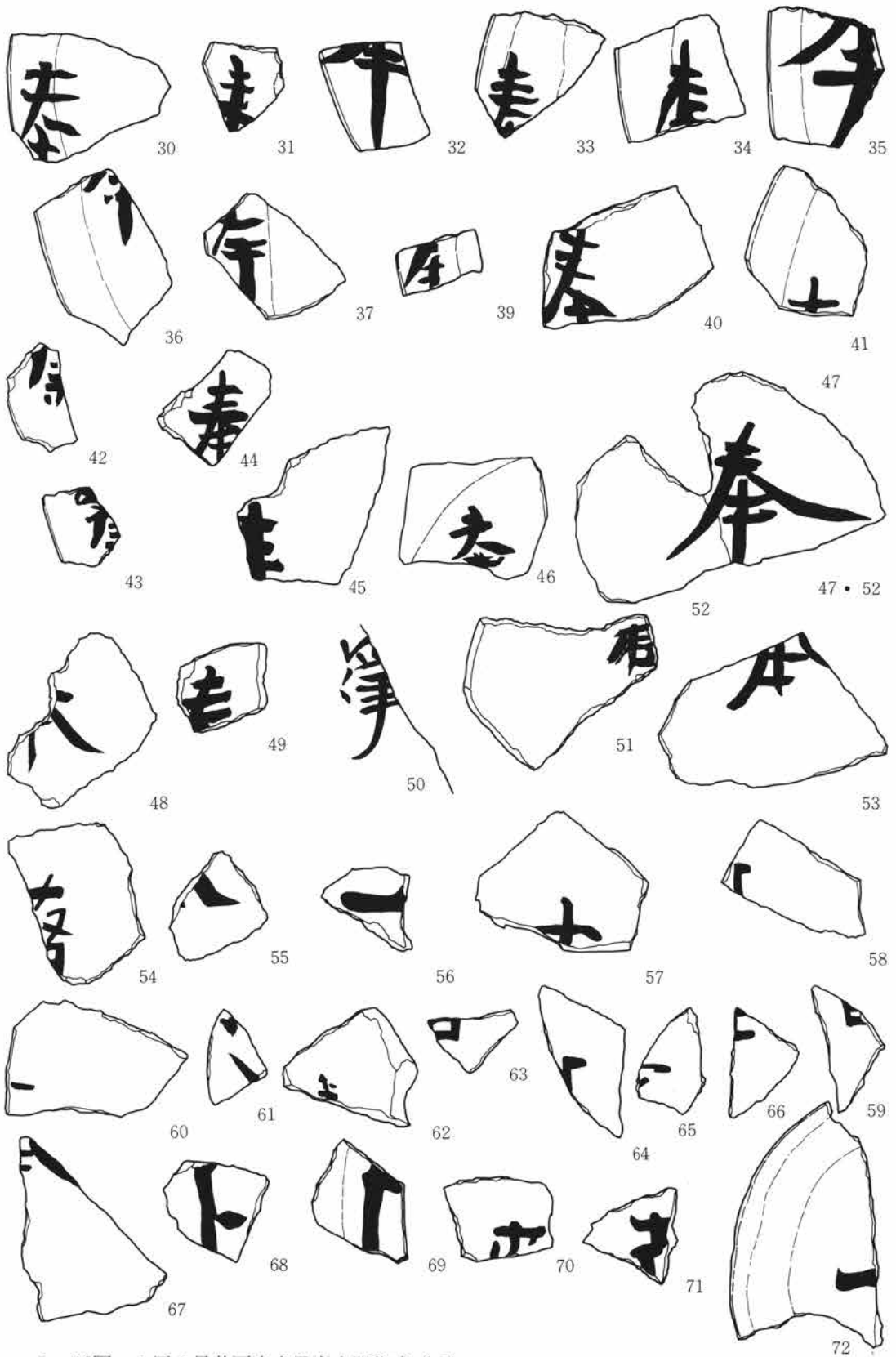
刻書は、墨書の広範な登場以前において、その補完的な役割をはたしたと指摘（注14）されているが、この井戸においては暗文様のものを除くと数も少なく例外的な存在で墨書とは搬入と用途を異にすると考えられる。

表5-2 三ツ寺II遺跡1区1号井戸墨書・刻書土器施書部位一覧表

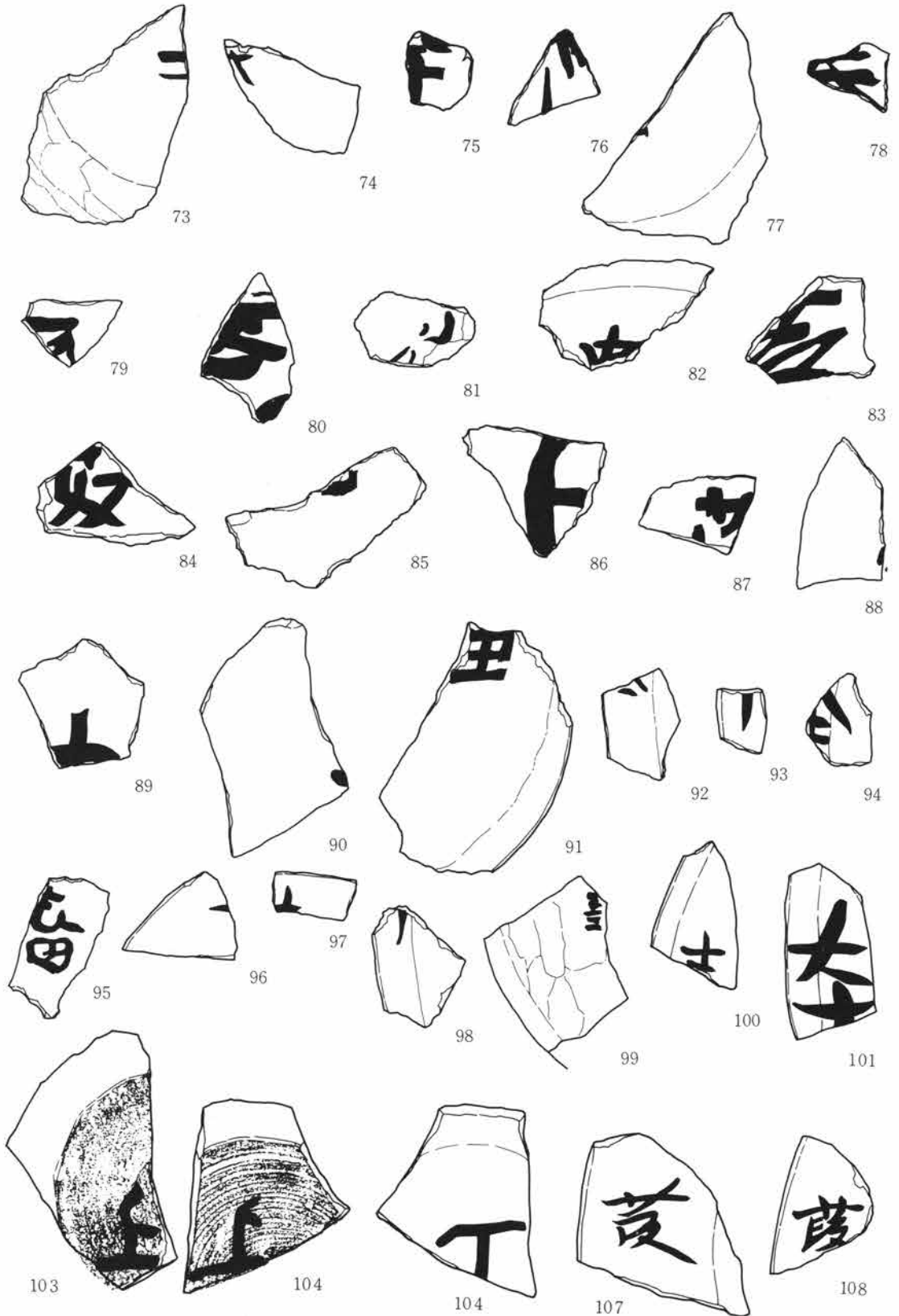
部位 墨書	土 師					器 小 計	須 恵					器 小 計	合 計	
	体 部 外 面	底 部 外 面	底 部 内 面	底 部 内 外 面	底 部 内 外 面		体 部 外 面	体 部 内 面	底 部 外 面	底 部 内 面	底 部 内 外 面			
○井		1				1								1
上	1	7			1	9				7	1		4	12
葭田	4	23		1		28	4							4
千		1				1								1
○甘		1				1								1
奉	27	14				41				3				3
佐							1							1
㊦										1				1
中										1				1
十														
紀殿										1				1
西東							1							1
菖蒔							1							1
㊦, 田							1			1				2
字							1			1				2
浄		1				1								1
不明	2	18		1		21	4	1		11				16
墨書小計	34	66		2	1	103	13	1		26	1		4	45
刻書		1		5		6								6
合 計	34	67		7	1	109	13	1		26	1		4	154



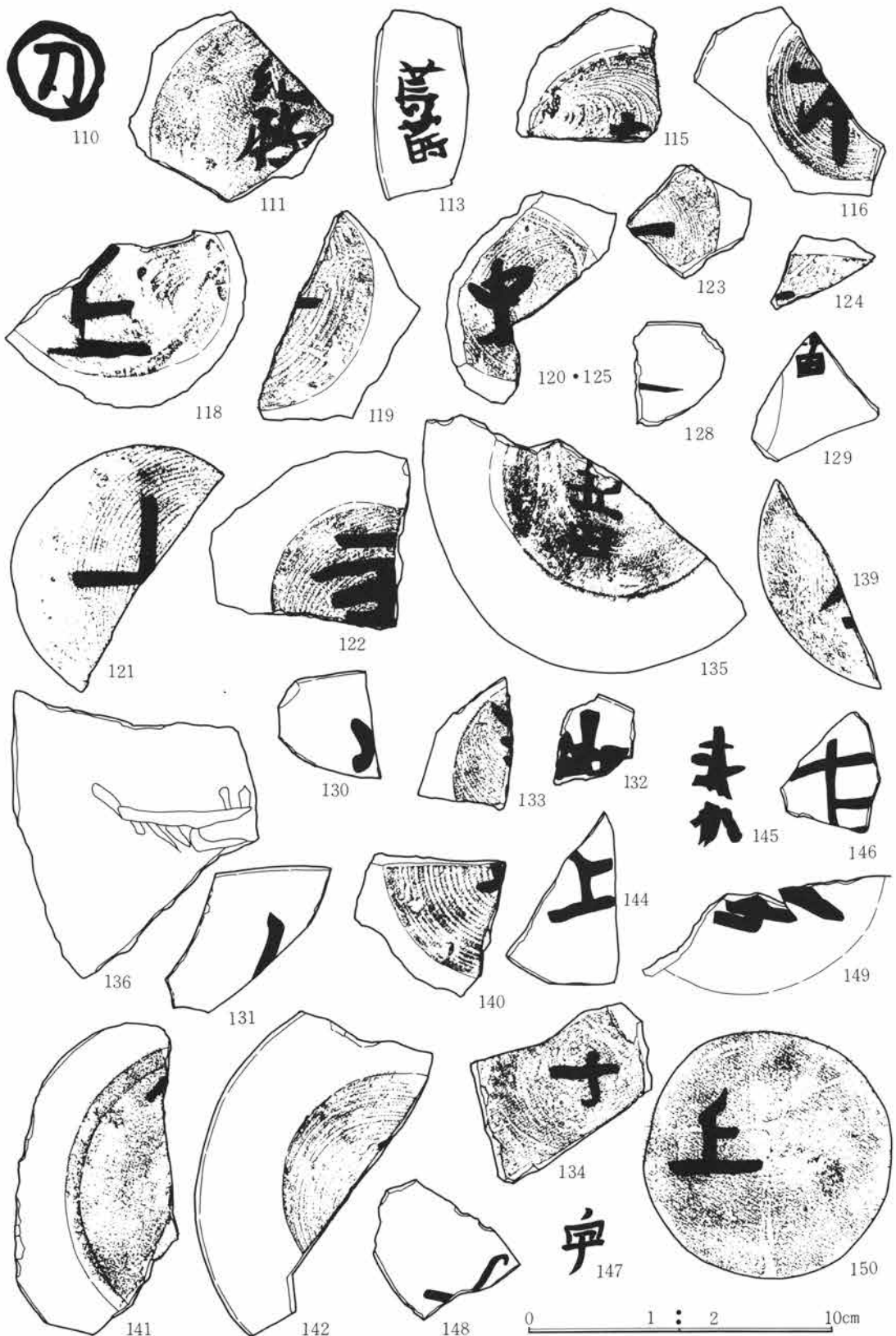
5-15图 1区1号井戸出土墨書土器集成(1)



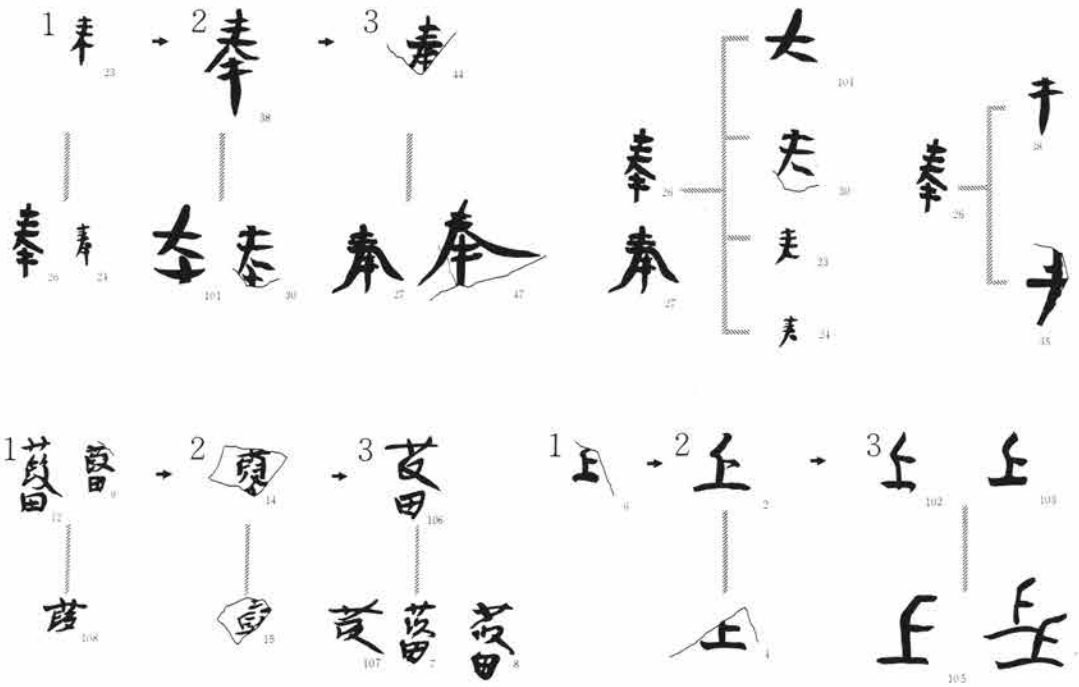
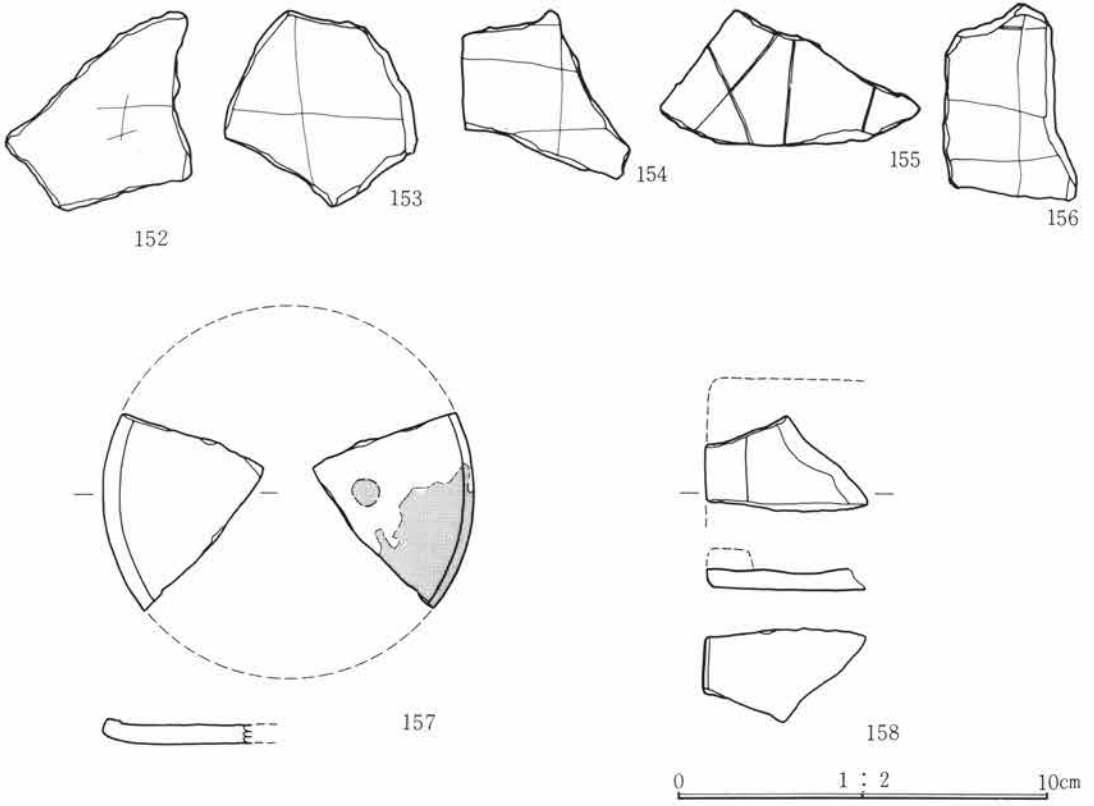
5-16図 1区1号井戸出土墨書土器集成(2)



5-17图 1区1号井戸出土墨書土器集成(3)



5-18図 1区1号井戸出土墨書土器集成(4)



5-19図 刻書 奉・葭田・上の字の分類

表5-3 三ツ寺II遺跡1区1号井戸墨書・刻書土器一覧表

番号	字 体	器 種	施書部位	施 書 位 置	備 考	通番
1	●井	土師器 杯	底部外面	中央		1526
2	上	土師器 杯	底部外面	中央	底部のみ円盤状に周縁がうち欠かされている	1527
3	上, 上	土師器 杯	底部内・外面	両面とも左側下方	口縁部～底面の破片, 両面同筆, 外面は重ね字	1528
4	上	土師器 杯	底部外面	中央	底面のみの破片に施書か	1529
5	上	土師器 杯	底部外面	中央		1530
6	上	土師器 杯	体部外面	正位	底部ヘラナデ	1531
7	葎田	土師器 杯	底部外面	中央上方	底部ヘラナデ	1532
8	葎田	土師器 杯	体部外面	横位 左	底部ヘラナデ	1533
9	葎田	土師器 杯	底部外面	左側上方	底部ヘラナデ	1534
10	葎田	土師器 杯	底部外面	中央	底部ヘラナデ	1535
11	葎●	土師器 杯	体部外面	横位 左	内面暗文	1536
12	葎田	土師器 杯	底部外面	中央	内面暗文, No19と接合	1537
13	葎●	土師器 杯	底部外面	中央上方	口縁部～底面の破片	1538
14	葎田	土師器 杯	底部外面	中央上方	底部の破片	1539
15	葎●	土師器 杯	底部外面	左側上方	底部の破片	1540
16	葎●	土師器 杯	底部外面	左側上方	底部の破片	1541
17	葎●	土師器 杯	底部外面	中央上方	底部の破片	1542
18	葎田	土師器 杯	底部外面	左側中央	底部の破片	1543
19	—	—	—	—	No12と接合したために欠番とする	—
20	●田	土師器 杯	底部外面	中央		1544
21	●甘	土師器 杯	底部外面	中央	1文字目は「牛」と推定, 人名で牛甘	1545
22	千	土師器 杯	底部外面	左側上方	内面暗文	1546
23	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(3:2)	体部との稜線上に施書	1547
24	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(4:2)	体部との稜線上に施書	1548
25	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(3:2)	内面暗文	1549
26	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(3:2)		1550
27	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(3:2)	内面暗文	1551
28	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(-)	伏せて底部から体部にむけて施書	1552
29	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(2:1)		1553
30	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(2:-)		1554
31	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(3:-)	口縁部の破片, 内面暗文	1555
32	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(: 2)	口縁部の破片	1556
33	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(3:-)	口縁部の破片	1557
34	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(-)	口縁部の破片	1558
35	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(-:2)	口縁部の破片	1559
36	奉	土師器 杯	底部外面	左側	28と同様に伏せて施書	1560
37	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(-:2)	口縁部の破片	1561
38	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(3:2)	略完, 内面暗文	0786
39	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(-:2)	口縁部の破片	1562
40	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(3:-)	口縁部の破片	1563
41	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(-:-)	口縁部の破片, 内面暗文	1564
42	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(-:2)	口縁部の破片	1565
43	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左()	口縁部の破片	1566
44	奉	土師器 杯	底部外面	右側 (3:2)	底部の破片	1567
45	奉	土師器 杯	底部外面	左側 (3:)	底部の破片	1568
46	奉	土師器 杯	底部外面	左側上方(2:)	底部の破片	1569

第5章 木簡出土地点

番号	字体	器種	施書部位	施書位置	備考	通番
47	奉	土師器 杯	底部外面	中央 (3:2)	底部の破片	1570
48	奉	土師器 杯	底部外面	中央 ()	底部の破片	1571
49	奉	土師器 杯	底部外面	左側 (3:)	底部の破片	1572
50	淨	土師器 杯	底部外面	中央	口縁部～底部の破片	1573
51	不明	土師器 杯	底部内面	中央	口縁部～底部の破片, 2文字	1574
52	—	—	—	—	No47と接合したために欠番とする	—
53	奉	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1575
54	葎田	土師器 杯	底部外面	中央		1576
55	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 奉の可能性あり	1577
56	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 上の可能性あり	1578
57	奉か	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1579
58	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 字体の一部	1580
59	●田	土師器 杯	底部外面	左側下方	底部の破片	1581
60	不明	土師器 杯	底部外面	側	底部の破片	1582
61	不明	土師器 杯	底部外面	中央, 側	底部の破片, 2文字あり「葎田」か	1583
62	奉か	土師器 椀	体部外面	横位 左	口縁部の破片	1584
63	●田	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1585
64	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1586
65	不明	土師器 杯	底部外面	側	底部の破片	1587
66	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1588
67	奉	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1589
68	上	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1590
69	上か	土師器 杯	底部外面	左側	底部の破片, 内面暗文	1591
70	葎●	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1592
71	葎●	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1593
72	不明	土師器 杯	底部外面	中央	口縁部～底部の破片	1594
73	不明	土師器 杯	底部外面	中央	口縁部～底部の破片	1595
74	奉か	土師器 杯	底部外面	左側	底部の破片	1596
75	奉	土師器 杯	底部外面	中央 (—:2)	底部の破片	1597
76	不明	土師器 杯	底部外面	中央, 右側	底部の破片, 2文字あり	1598
77	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 内面暗文	1599
78	葎か	土師器 杯	底部外面	中央上方	底部の破片	1600
79	葎田	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1601
80	葎田	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1602
81	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1603
82	奉	土師器 杯	底部外面	中央下方	底部の破片, 内面暗文	1604
83	葎●	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1605
84	葎	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1606
85	●田か	土師器 杯	底部内面	中央	底部の破片, 田の横画の一部か	1607
86	上	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1608
87	葎	土師器 杯	底部外面	左側上方	底部の破片	1609
88	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 字体の一部のみ	1610
89	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 奉の可能性あり	1611
90	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 葎の横画の一部か	1612
91	●田	土師器 杯	底部外面	右側上方	口縁部～底部の破片	1613
92	不明	土師器 杯	体部外面	正位か	口縁部の破片	1614
93	奉か	土師器 杯	体部外面	横位 左(—)	口縁部の破片	1615

番号	字体	器種	施書部位	施書位置	備考	通番
94	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(-)	口縁部の破片	1616
95	葭田	土師器 杯	体部外面	横位 左(-)	口縁部の破片	1617
96	不明	土師器 杯	体部外面	横位 左か	口縁部の破片, 字体の一部	1618
97	葭か	土師器 杯	体部外面	横位 左か	口縁部の破片	1619
98	奉か	土師器 杯	体部外面	横位 左か	口縁部の破片	1620
99	奉	土師器 杯	底部外面	中央 (: 3)	口縁部～底部の破片	1621
100	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左	口縁部の破片, 字体の一部	1622
101	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左(1 :)	口縁部の破片	1623
102	上	須恵器 杯	底部外面	左側上方	略完, 回転糸切	0787
103	上	須恵器 杯	底部外面	左側		1624
104	上, 上	須恵器 杯	底部内・外面	両面とも中央		1625
105	上, 上	須恵器 杯	底部内・外面	両面とも中央	略完, 回転糸切, 内面は重ね字	0789
106	葭田	須恵器 椀	体部外面	横位 左	略完, 回転ヘラ切後付高台	0793
107	葭	須恵器 杯	体部外面	横位 左	口縁部～底部の破片, 回転糸切, 内面漆付着	1626
108	葭	須恵器 杯	体部外面	横位 左	口縁部の破片	1627
109	佐	須恵器 椀	体部外面	正位	口縁部～底部の破片, 回転糸切後付高台	0794
110	㊦	須恵器 椀	底部外面	中央	底部の破片	1628
111	紀殿	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 底部ヘラ調整	1629
112	西東	須恵器 杯	体部外面	横位 左	口縁部～底部の破片, 回転糸切	0795
113	葛蒔	須恵器 杯	体部外面	横位 左	口縁部～底部の破片, 書体はNo112に近似	1630
114	㊦, 田	須恵器 杯	体部外面, 底部外面	体部横位, 底部中央	口縁部～底部, 回転糸切	0792
115	奉か	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 底部回転糸切	1631
116	奉か	須恵器 杯	底部外面	中央 (- : 2)	底部の破片, 底部回転糸切	1632
117	字	須恵器 杯	底部外面	左側下方	略完, 内面に漆の被膜付着	0791
118	上	須恵器 杯	底部外面	左側下方	底部の破片, 回転糸切	1634
119	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 回転糸切, 字体の一部	1635
120	中	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 回転糸切, No125と接合	1636
121	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 回転糸切	1637
122	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 回転糸切	1638
123	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 回転糸切, 字体の一部	1639
124	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 回転糸切, 字体の一部	1640
125	-	-	-	-	No120と接合したために欠番とする	-
126	上	須恵器 杯	底部外面	中央	口縁部～底部1/2残, 回転糸切	0788
127	上	須恵器 椀	底部外面	右側下方	口縁部～底部の破片, 糸切後付高台	0790
128	不明	須恵器 -	体部外面	横位 右	口縁部の破片, 字体の一部	1641
129	●田	須恵器 杯	体部外面	横位 右	口縁部の破片	1642
130	不明	須恵器 杯	体部外面	正位	口縁部の破片, 字体の一部	1643
131	不明	須恵器 杯	体部外面	横位 右	口縁部の破片, 字体の一部	1644
132	不明	須恵器 杯	体部内面	横位 右	口縁部の破片	1645
133	不明	須恵器 杯	底部外面	中央下方	底部の破片, 回転糸切, 字体の一部	1646
134	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, ヘラ調整	1647
135	不明	須恵器 杯	底部外面		底部の破片, ヘラ調整, 2文字	1521
136	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 刻書	1649
137	上, 上	須恵器 杯	底部内・外面			1650
138	上	須恵器 杯	底部外面		◆現物未確認	1651
139	奉か	須恵器 杯	底部外面	中央	口縁部～底部の破片, 糸切後ヘラ調整	1652

第5章 木簡出土地点

番号	字体	器種	施書部位	施書位置	備考	通番
140	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	底部の破片, 回転糸切	1653
141	不明	須恵器 杯	底部外面	側	口縁部～底部の破片, ヘラ切	1654
142	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	口縁部～底部の破片, 回転糸切, 字体の一部	1655
143	上	須恵器 杯	底部内面		◆現物未確認	1656
144	上	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1657
145	奉	土師器 杯	体部外面	横位 左 (3:)	口縁部～底部の破片	1658
146	不明	土師器 杯	底部外面	中央	底部の破片	1659
147	字	須恵器 杯	体部外面	横位 右	口縁部～底部の破片	1660
148	不明	須恵器 杯	体部外面	斜位か	口縁部の破片, 腕の可能性はある	1661
149	不明	須恵器 杯	底部外面	中央	口縁部～底部, 内面暗文	0762
150	上	須恵器 杯	底部外面	左側中央	略完, 底部回転ヘラ切, 内面油煙付着	0767
151	上, 上	須恵器 杯	底部内・外面	両面とも左側中央	略完, 底部回転糸切◆現物未確認	1662
152	不明	土師器 杯	底部内面		底部中央の破片, 線刻	1663
153	不明	土師器 杯	底部内面		底部中央の破片, 線刻	1664
154	不明	土師器 杯	底部内面		底部中央の破片, 線刻	1665
155	不明	土師器 杯	底部内面		底部中央の破片, 線刻	1666
156	不明	土師器 杯	底部内面		底部中央の破片, 線刻	1667
157		須恵器 硯				1668
158		須恵器 硯				1669

施書部位の分類基準

部位は、体部、底部内・外面のほかの下記の基準を設けて分類した。さらに口縁部基準の「横位」では口唇部の左右、底部では「中央」、「側」は上下の別と左右いずれかを示した。

体部 正位 口縁部を上にして施書されたもの

横位 口縁部をわかって右側か左側かのいずれかにして施書されたもの

底部 中央 底部の中心線か、その近くに施書されたもの

側 底部の中心線ははずれて左右いずれかの側に片寄って施書されたもの

第5節 ま と め

1号井戸は、8世紀から9世紀前半にかけて使用された溜井としての構造と、多量の土器を始めとする木簡や斎串、付札状木製品、墨書土器といった出土遺物に特徴がある。遺物は、組成や特徴から祭祀の供献具と推定され、井戸の性格を『水をめぐる祭祀』の場合それに隣接する供献具廃棄の場と推定した。

溜井は、『水田開発の画期』を示す4～8世紀の第1次新開集落に特徴的な水田灌漑施設とされる(注15)。本遺跡例は、谷地の開発とそれにとまなう河道の制御という点からすると、河水の補助として出現したものが水田灌漑施設として推移していくことが、構造の変化や継続性の中で読み取れる。類例は、石を特徴的に用いた構造が熊野堂遺跡や今井道上・道下遺跡に、河道に面しては国分寺僧寺・尼寺中間地域や国分境遺跡に少数例(注16)があり、時代や地域ともに広がりが見られる。これを特徴付けるのが、杯を主とするあるいは墨書土器や木簡を伴うといった遺物組成で、遺跡の位置や性格によって地域性があるとみておくのが妥当であろう。また、井戸自身では、廃絶に伴ってかそれを利用して遺物の廃棄の場となっていたことが特徴といえる。その中で、祭祀の様相は画一的にとらえられるものではなく、井戸の機能からすると『水にかかわる農耕祭祀』としてその存在を考えておくのが妥当としたい。

その中で、習書木簡や墨書土器、硯の存在は、遺跡地内か隣接地に識字階層の人達がいたことを推定させ、ひいては出土地が官衙や寺院などに特定されるという木簡や付札状木製品の存在からすると、その可能性も否定できない。しかし、三ッ寺II遺跡内では、推定される遺構の確認はなく、墨書土器や硯の出土傾向も1号井戸に集中しているにすぎない。

官衙の可能性は、遺物の特徴によるものだが、推定上野国府の北約2kmにあつて木簡や定木(じょうぎ)などが出土した国分境遺跡や本遺跡の南約3kmにあつて漆紙文書が出土した下小鳥遺跡(注17)での類例や熊野堂遺跡を東西に横断する推定東山道の存在などからすると、官衙とは直接結びつかないまでも『上野国内の中枢域を取り巻くムラ』といった地域性によると考えられる。すなわち、『国府や国分寺を望見でき、往来が可能な位置と関係』が遺構や遺物の出土背景である。

最後に、これら井戸がある三ッ寺I遺跡北濠の様相から、豪族居館の外縁部についてのべる。

北濠をめぐるっては、1号井戸を中心にして4基の井戸と合わせてI～V期の変遷を提示した。そのI期は、豪族居館の存続期間に相当し、屈曲部は濠の外縁部の中で唯一石垣を施した箇所であることが判明した。また、同じ外縁部でも西濠や南濠と比較すると、遺構の空白域はあるもののなんらかの遮蔽の構造物の跡と考えられる2～3条の小溝を持たず、そのまま三ッ寺II遺跡へ移行すると推定される。このことは、居館をめぐる集落の性格や機能の違いを示し、南側の井出村東遺跡(注18)はなんらかの遮蔽を要する区画乃至集落であるのに対して、北側の三ッ寺II遺跡は主要入口施設である堤状遺構で結ばれた、居館に直結する住居や施設を持っていたものと考えられる。居館の外周は、濠の外縁部に小溝で示される『遮蔽構造物』、『遺構空白域』がめぐり、その外側に『集落』が囲むという同心円状の構造が推定される。その中で、北濠側は、猿府旧河道をとりこんだ構造と水の制御と調整

の機能から重要視され、その維持のために直結した集落を必要としたと考えられる。II期以降のあり方は、居館廃絶後の新たな動向とも考えられるが屈曲部を意識した占地は、集落自身が継続していることからすれば、前代までの河道の制御と調整という機能を新たな集落と生産基盤に踏襲しつつ来たとも考えられる。

注（3節「木簡」はのぞく）

- 1 能登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫 「赤城山南麓における遺跡群の研究—農耕集落の変遷と溜井灌溉の出現」『信濃』第35巻第4号 信濃史学会 1983
- 2 𨔵群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 「三ッ寺I遺跡—古墳時代居館の調査」 1988
- 3 地震は火山性のものが主と推定されるが、『地割れや噴砂らしい痕跡』として確認されている。現在、県内でも10遺跡近い数が調査されている。三ッ寺II遺跡内でも、6世紀代2回、9世紀代1回の都合3回の地震跡が確認されている。河川の氾濫は地震と前後するかは不明だが、同じ猿府川の上流約1kmにある『保渡田東遺跡』のC区では上幅10mを越す河道跡が細砂礫で埋没しており、その可能性は高い。
- 4 𨔵群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 「熊野堂遺跡(1)」 1984 ・「熊野堂遺跡(2)」 1990
- 5 註1に同じ。
- 6 報告書（本文編 P177）では、文章の記述ではないが埋没土中位の黒色土中から曲物1個体がすえた状態で出土した。図は、木器3として底板のみが掲載してある。
- 7 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『元総社明神遺跡III・IV』 1986
- 8 𨔵群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか「日高遺跡」 1982
- 9 高崎市教育委員会『西島遺跡 IV』現地説明会資料 1986
- 10 黒崎 直 「齋申考」『古代研究』10, 1976
- 11 泉 武 「律令祭祀論の一視点」『道教と東アジア—中国・朝鮮・日本』 1989 人文書院
- 12 𨔵群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか「太田賀茂遺跡」 1986
- 13 𨔵群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか「下佐野遺跡 第II地区」 1986
- 14 平川 南・天野 努・黒田正典「古代集落と墨書土器—千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合」『国立歴史民族博物館研究報告』第21集, 1989
- 15 註1を参照。
- 16 𨔵群馬県埋蔵文化財調査事業団 「今井道上・道下遺跡」『年報』6, 1988
同上 『上野国分寺・尼寺中間地域発掘調査報告書』4, 1989
同上 『国分境遺跡発掘調査報告書』 1990
- 17 𨔵群馬県埋蔵文化財調査事業団 「下小島遺跡発掘調査報告書」 1991
- 18 井出村東遺跡調査会『井出村東遺跡』 1983

第6章 考察とまとめ

—調査と成果2—



6区から南を望む 手前は浅間B軽石下の水田。右上（西側）の水路は土地改良により改修された。
B水田の低地は右手の水田につながっていた。

第1節	三ッ寺II遺跡のカマドと煮炊	173
第2節	三ッ寺II遺跡の地震跡	205
第3節	まとめ	239
第4節	三ッ寺II遺跡出土人骨について	243
第5節	三ッ寺II遺跡出土の獣歯・獣骨について	251

挿 図 目 次

第1節	カマド模式図・各部の名称と計測位置	173
1図	カマド模式図・各部の名称と計測位置	173
2図	炉で使われた土器のススのつき方(熊野堂遺跡第II地区)	174
3図	カマドで使われた土器のススのつき方	175
4図	古墳時代のカマド(1)1区14号住居	177
5図	古墳時代のカマド(2)1区14号住居	178
6図	古墳時代のカマド(3)5区36号住居	180
7図	古墳時代のカマド(4)カマドの構造・袖材と焚口天井材	182
8図	古墳時代のカマド(5)カマドの構造・カメの焚口天井	184
9図	古墳時代のカマド(6)石の支脚と高さの調整	186
10図	古墳時代のカマド(7)高杯と杯の支脚	188
11図	古墳時代のカマド(8)小型カメの支脚	190
12図	古墳時代のカマド(9)袖の長いカマドと短いカマド	192
13図	奈良時代のカマドとカメ	194
14図	平安時代のカマド(1)土師器のカメを使っているカマド	196
15図	平安時代のカマド(2)羽釜・土釜を使っているカマド	197
16図	置き去りにされた土器(1)	201
17図	置き去りにされた土器(2)	202
第2節	検出した地震跡の分布	206
1図	検出した地震跡の分布	206
2図	3区24・25・26号住居	208
3図	3区51・57号住居	209
4図	3区52・55・56号住居	210
5図	3区53・54号住居, 4区74号住居(1)	212
6図	3区53・54号住居, 4区74号住居(2)	213
7図	4区77・60号住居	214
8図	4区70・71・73号住居	216
9図	4区10・68・70・71・73号住居	217
10図	4区73・70号住居	218
11図	4区154・155号住居	220
12図	遺構と地震跡の前後関係	222
13図	関東地方の近代地震	222
14図	西埼玉地震における井水混濁区域・土砂噴出区域	223
15図	古代地震の震度V以上の推定範囲	226
16図	二ツ岳を中心とした半径14kmの範囲	228
17図	北関東の活断層の分布と r_5 ・ r_6 の推定範囲	230
18図	地震跡検出遺跡の分布と震度V・VI(M=7.5)の推定範囲	233
19図	西埼玉地震で地鳴りの聞こえた範囲	234
20図	三ッ寺I遺跡の地震跡(東側道)	235
表1	古代の地震一覧(5~11世紀)	225
表2	活火山とその近傍に起きた最大規模の地震	228
表3	北関東の活断層一覧	230
表4	群馬県内の地震跡調査例一覧	232
第3節	片岩系?の小石を含む壁(5区48号住居1248)	239
1図	片岩系?の小石を含む壁(5区48号住居1248)	239
2図	三ッ寺II遺跡時期別住居分布	折込240-241
表1	三ッ寺II遺跡時期別住居数	240
第4節	3区2号土壇出土女性人骨の頭蓋前面観	244
写真1	3区2号土壇出土女性人骨の頭蓋前面観	244
写真2	3区2号土壇出土女性人骨の頭蓋左側面観	245
写真3	中切歯切縁に見られる異常摩耗の比較	246
写真4	3区2号土壇出土女性人骨の主要上・下肢骨片	247
写真5	3区3号土壇出土女性人骨の頭蓋前面観	248
写真6	3区3号土壇出土女性人骨の主要上・下肢骨片	249
第5節	獣骨出土状況	254
1図	獣骨出土状況	254
2図	馬上下顎骨における出土馬歯の部位模式図	255
3図	牛上下顎骨における出土牛歯の部位模式図	255
4図	遺存体実測図①	256
5図	遺存体実測図②	257
6図	遺存体実測図③	258
7図	平安時代における遺跡別出土馬歯・馬骨を有する馬の年令分布	268
写真1	出土獣歯・獣骨①	259
写真2	出土獣歯・獣骨②	260
表1	地区別遺存体出土点数	253
表2	時代別遺存体出土点数	253
表3	地区別遺存体出土個体数	253
表4	時代別遺存体出土個体数	253
表5	遺存体の出土状態	261
表6	遺存体の形態的特徴(歯)	261
表7	遺存体の形態的特徴(骨)	262
表8	出土遺存体計測値(歯)	264
表9	出土遺存体計測値(骨)	265
表10	出土遺存体を有する獣類の年令及び大きさ	265
表11	時代別馬の年令及び大きさ	265
表12	時代別牛の年令及び大きさ	266

第1節 三ッ寺II遺跡のカマドと煮炊

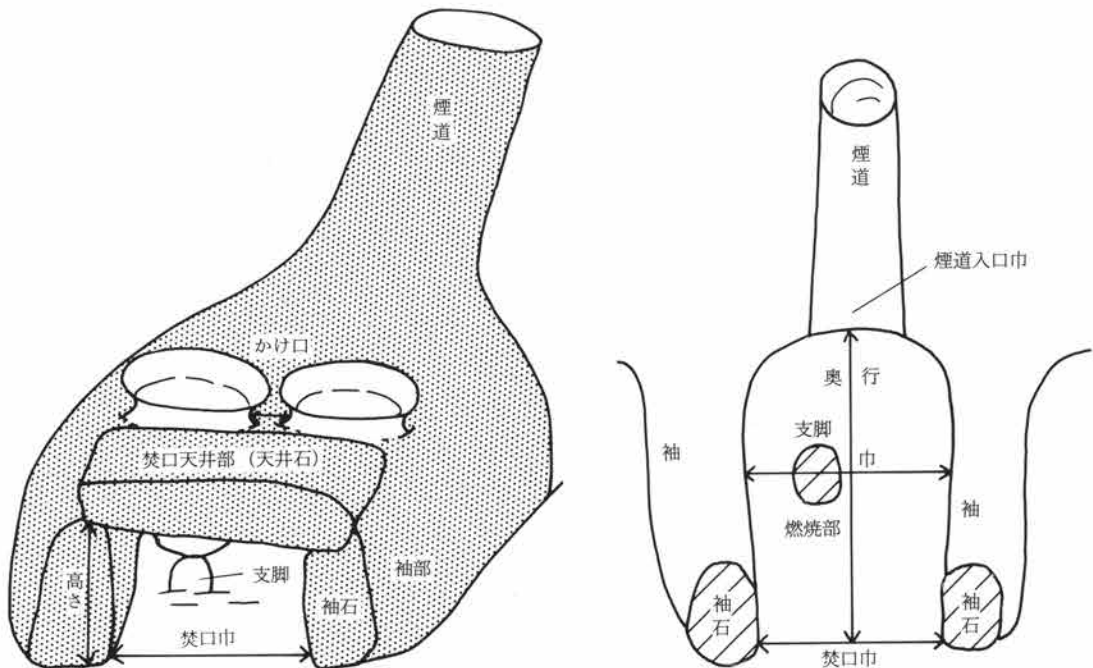
外山 政子

- 1 はじめに 2 炉とカマド 3 古墳時代のカマド 4 奈良時代のカマド
5 平安時代のカマド 6 三ッ寺遺跡のカマドの特徴 7 カマドまわりの遺物出土状況から 8 おわりに

1 はじめに

三ッ寺II遺跡には、縄文時代から中世・近世にいたるまで断続的に人々が生活、活動した痕跡が認められた。なかでも注目されるのは、古墳時代中期後半以降急激に住居が増加していることである。弥生時代から古墳時代前期にかけては、ほんの数軒が散在したのみであったのにたいして、台地全体に住居が展開してくる。この土地が、この時期から改めて居住域として選定されたことを示している。突然ともみえる「村」の出現は、南に位置する三ッ寺I遺跡の「豪族の居館」の創建とほぼ同時期であることから、館の運営を直接支えた人々の村という位置づけが出来るだろう(注1)。しかし、その後の館の消長と、村の存続とは必ずしも同じではない。館の廃絶後も、さらに数度の大きな火山災害にも途絶える事なく人々は住み続けている。村としての規模もかえって拡大の様相が認められさしている。その「村」のありかた、住居のありかたは、多くの問題を提示しているといえる。

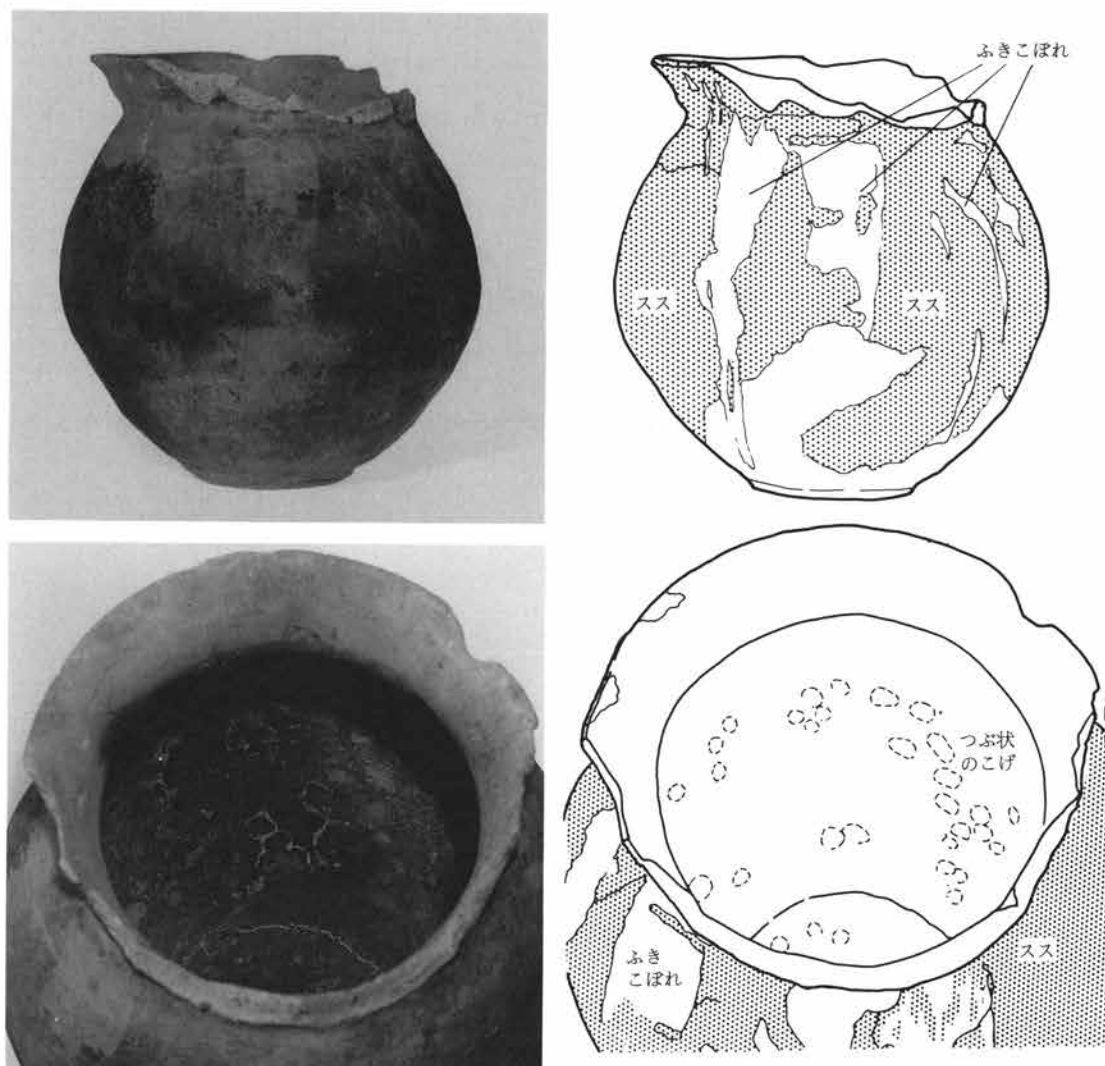
当遺跡には、豪族の居館に象徴される権力にむすびついた、あるいは支えた人々の集落という面と、もう一方では当然ながら、間違いなく日常生活が展開されていたわけで、そこにのこされた生活痕跡も、当時の人々の生活を復原するための豊富な資料を提供してくれている。ここではそうした日常生活の痕跡のうち、加熱施設のカマドをとりあげる。



1節-1図 カマド模式図・各部の名称と計測位置

カマドは、東国においては多少の時間差はあっても、ほぼ同時と言って良いほど一斉に採用される。食生活習慣は、急激には変わりにくいものではないかと思う。しかし、調理と調理器具、施設は密接に結び付いており、カマドの採用、普及の様子は、ほぼ同じ頃に出現している大形甕とあいまって食生活の変換も伴ったことを推測させる。またカマドは、家族あるいはごく親しい人々の合議、協力によって造られ、補修し、使われたと思われるが、それだけに地域の実状を反映しやすく、細かい資料の積み重ねによっては、集団の癖、地域差が抽出できるだろうと考えている。

三ツ寺II遺跡では、古墳時代中期後半から平安時代末までの住居のほとんどに、カマドが造り付けられている。重複や調査区外のためカマドが認められない住居も、他の加熱施設が見付かっていないことと、煮炊用の土器の使用痕跡を合わせて考慮すれば、すべてカマドをもった住居であったと考えて良いだろう。残念ながら、カマド採用直前の時期の住居は見当たらないため、炉とカマドとの中間形態のものや「初源的なカマド」(注2)については検討できないが、カマドの採用直後から終焉までその構造の変遷をたどることができる。煮炊きの実際も想定しながら、食生活の変化についても検討



1節-2図 炉で使われた土器のススのつき方 (熊野堂遺跡第II地区出土)

したい。

2 炉 と カ マ ド

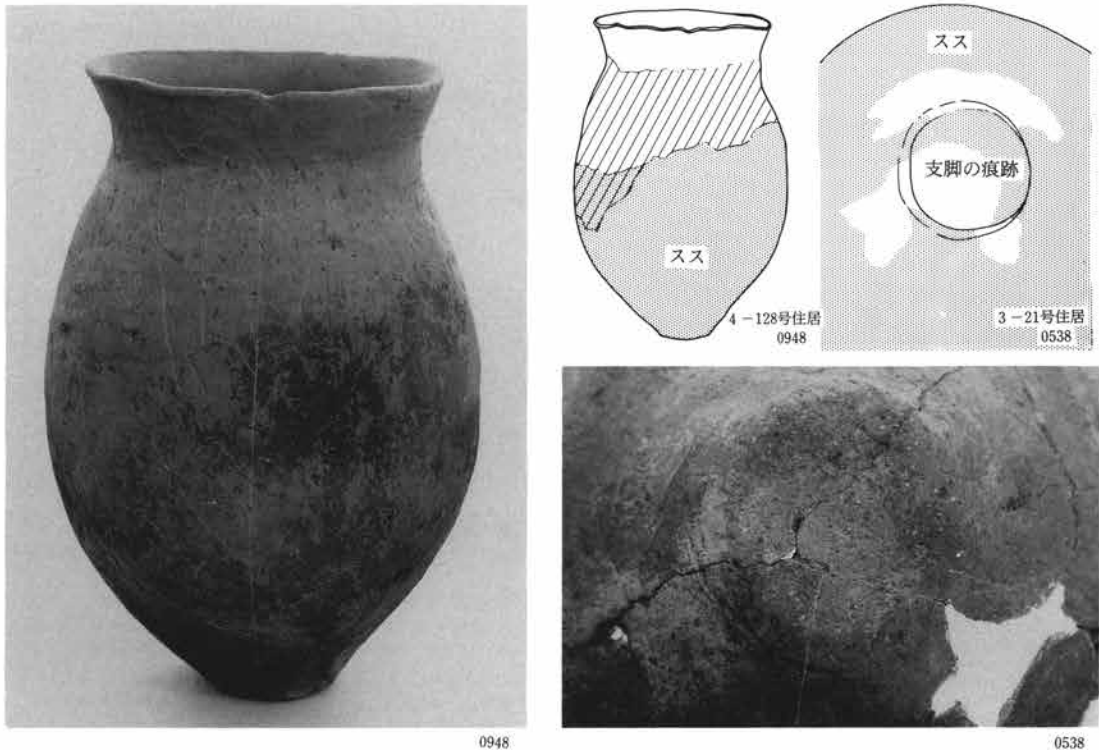
(1) 構造の違いと施設

炉とカマドとは構造の上で大きな違いがある。カマドとはどのような構造の施設であるのか、炉と比較をしながら確認したい。

炉の多くは床面を浅く掘りくぼめ燃焼部としている。地床炉などと呼ばれることが多いようだ。細長い石を横に据え込んで焚口部としているものもある。この石は燃料である薪を地面よりうかせて、空気の供給を確保する役割が考えられる。燃焼部周辺には僅かに粘土の高まりが確認出来ることもあるが、おおくは構造物を持たない。したがって、空気量の調整は全くのぞめない構造である。

カマドは、燃焼部を粘土などを主体とした構築材でぐるりと取り囲んで、焚口部と懸口部を作り出したものである。竪穴式住居内に造り付けられるカマドの場合は、煙り出しの施設を伴うことがおおい(注3)。焚口から空気を送りこみ、上昇する熱を天井で受け、煙りは煙道を通して住居外に導き出される。カマドは空気の供給をコントロールできる施設である。

カマドが出現する古墳時代から現在に至るまで、カマド、ヘツツイ、クドと呼び名も、大きさも様々であるが、燃焼部を閉じ込めるという基本的な構造は共通する。しかし、その閉じ込めかたに違いが見られる。私達が「カマド」といって思い浮かべるものは、懸口が一定の大きさに固定されていて、懸けるナベ、カマの縁や鏝によって懸口はぴったりふさがれる。大きさが合わない場合は、金属の鏝



1節-3図 カマドで使われた土器のスのつき方

状の輪をのせて調整をしているものである。ナベ、カマは壁と一体化した懸口で全重量を支えられている。また、一つの焚口に一つのカマが基本で、いくつものカマドをつなげた連房式のものでも、煙突は共有するが、一つの焚口に一つのカマの基本は守られている（注4）。

これに対して古墳時代のカマドは、複数のカメを据え付けているが、焚口は一つである。懸口は固定した大きさのものではないようで、カメを支脚でささえ、壁とカメどうしでもたせ掛け合って据え付ける。隙間を粘土で密閉して熱効率を良くするとともに、壁と天井部の強度も保持する。カメはカマドと一体化しており、いわば「はめこらし」の状態となる。取りはずしの際には、天井部を壊さなくてはならない（注5）。このような古墳時代のカマドの使用状態を想定したものが第1図左である。

また、カマドの大きさは何を基準に決められているのだろうか。炉の大きさは煮炊きする器の大きさと分量によって、燃焼部の大きさが変化するような性格の施設であるが、カマドの場合は、粘土の土手で燃焼部を取り囲んでしまっている。すでに設計段階で、いくつかの必要条件を加味して、大きさを決定したことだろう。1節-1図に示したような位置での計測値をもとに、考えてみたい。

（2）土器の使用痕の違い

炉とカマドの構造の違いを機能から見れば、炉では空気量（酸素量）の調整が出来ないのに対して、カマドは空気量調整が可能であることが第一に指摘できる。道具は使われることによって使用痕跡が残る。構造と機能が異なる加熱施設に使用される煮炊具には、違った使用痕跡が観察できるはずである。具体的には、土器外面のススやネンドの付きかたと内面のコゲやヨゴレの状態から、炉型の使用痕跡・カマド型の使用痕跡とに区分できる（注6）。

a 炉の場合

炉では火力の調整が難しく、また燃焼部のまわりが覆われていないため火のあたりにむらが出来ると。まんべんなく加熱したい場合は火勢を大きくしなければならぬが、温度が高すぎて焦げを生じる。こうした事情を反映して、炉で使用している土器の外面は強いススが全体に付着し、比例するように内面にのみコゲが認められる。また、しばしば「噴きこぼれ」と思われる筋状の痕跡が、口縁部から胴部、底部にまでたれているのを観察できる。底部は複数の石などを支えにして床から加熱できるようにしてあるのだろう。ススの付かない部分が数箇所みられるばあいが多い。1節-2図に示した土器は、当遺跡から南2kmに位置する熊野堂遺跡第II地区（注7）から出土したものである。残念ながら所属遺構が不明で、施設との関連がとらえられないが、使用痕跡は明らかに炉のタイプである。カメの形態からみた所属時期とも矛盾は無いだろう。内面にはコゲが一面にこびりついて、小さな粒状の付着物も見られる。粒は楕円形で米のような穀類が推定できる。

b カマドの場合

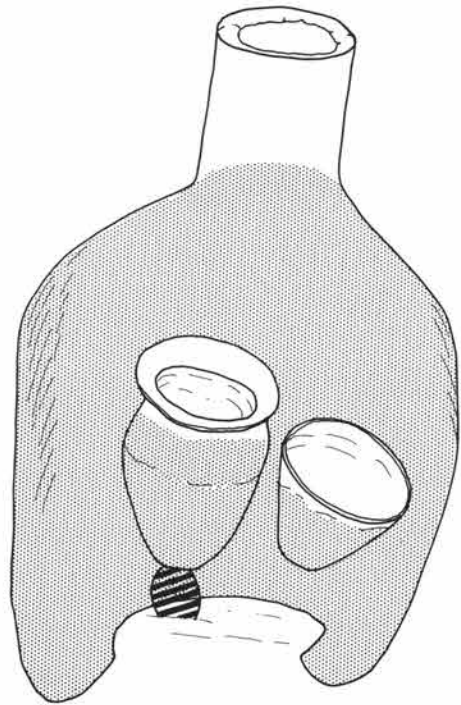
1節-3図に示したものは4区128号住居のカマド内から出土したカメで、燃焼部右よりに、高杯を逆さまにした支脚に据えた状態であった（1節-10図左上段）。カマド内左には小型カメや杯が出土している。頸部から胴部にかけて粘土が付着し、上胴部から底部にかけては強いススが付着する。スス



ネンドでかためたカマドー焚口から燃焼物をのぞく



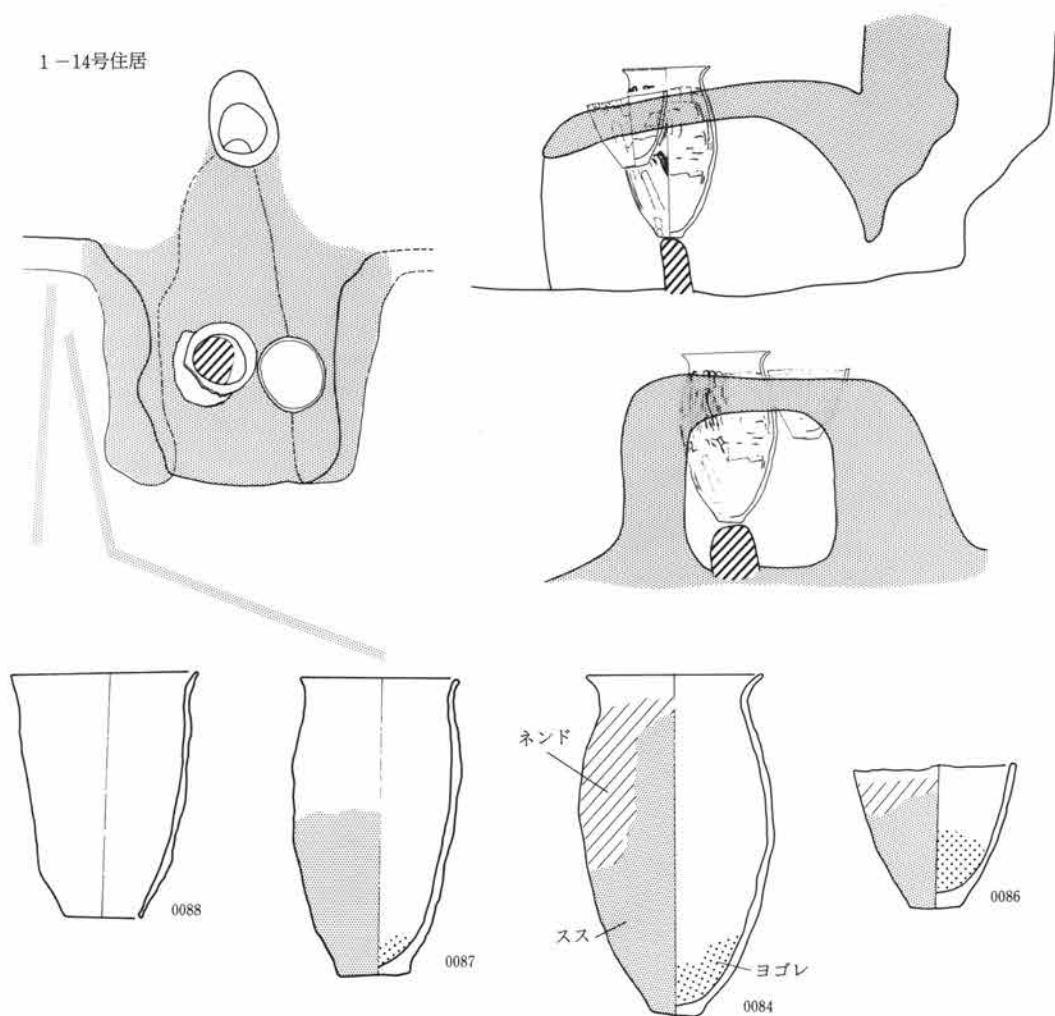
焚口とかけ口・煙道の様子（西から）



復元してみると……

1節-4図 古墳時代のカマド（1） 1区14号住居

1-14号住居



1節-5図 古墳時代のカマド(2) 1区14号住居

は粘土が胴部やや下にまで広がっている部分には重なって付着が認められるが頸部より上には広がらない。しかし多くの場合充填した粘土のひびわれによるのだろう、口縁部の一部分にススもれの状態が観察される。写真では、カメはカマド焚口に対して逆の方向から見た状態を示している事となる。また支脚ののせて使用したためにススが支脚との接点部分だけ抜けていたり、炎の状態によるのか酸化、あるいは還元して変色している底部が観察出来る。0948でもみとめられるが、より状態の良好な3区21号住居のカメ0538の底部を示した。内面のコゲやヨゴレは炉使用の場合に比べて極端に少なく、コゲの多くはカメの底に観察されるにすぎない。ヨゴレは、内容物の表面がカメの内面に接したと考えられるあたりに巡る。加熱されて水分が蒸発する際に、内容物が付着するものにとらえられよう。コゲつきがカマドの場合少ないということは、それだけ火勢の調整が容易になったということも一因だろう。羽釜が煮炊具の主体となる場合にはカマドを使っても、使用痕跡に違いが見られる。カマドの構造の変化と合わせて後述する。

3 古墳時代のカマド

当遺跡には、カマドにカメを据えたまま廃棄している住居がおおく見いだされている。特に古墳時代の住居に認められるようだ。この傾向は、同時期の他の遺跡の中でも指摘されており、なぜ生活用具を置いたまま住居を移すのか、ほとんど残さない住居との差は何なのか、興味深い問題である。しかし、カマドにカメを据えた状態は、当時の使用状態を示しているということには変わりがない。それらの中でも、特に遺存状態がよいカマドをとりあげて、構造や使用の実際を検討し、三ッ寺II遺跡のカマドの特色を考えたい。

(1) ネンドのカマド（1区14号住居，1節-4・5図）

カマドの構造 すべて粘土で作りに上げているカマドである。南側を15号住居によって壊されていて、北半部のみが残った住居で、床面全体に炭化材が認められた。とくに北西部には屋根材と思われる茅類が出土している。北西部及び北方向から、焼失後遺物が投げ込まれたような状態であった。したがって14号住居に伴う遺物は炭化材の下から検出されたものということができ、カマド周辺のカメと甗、数点の杯類のみとなる。

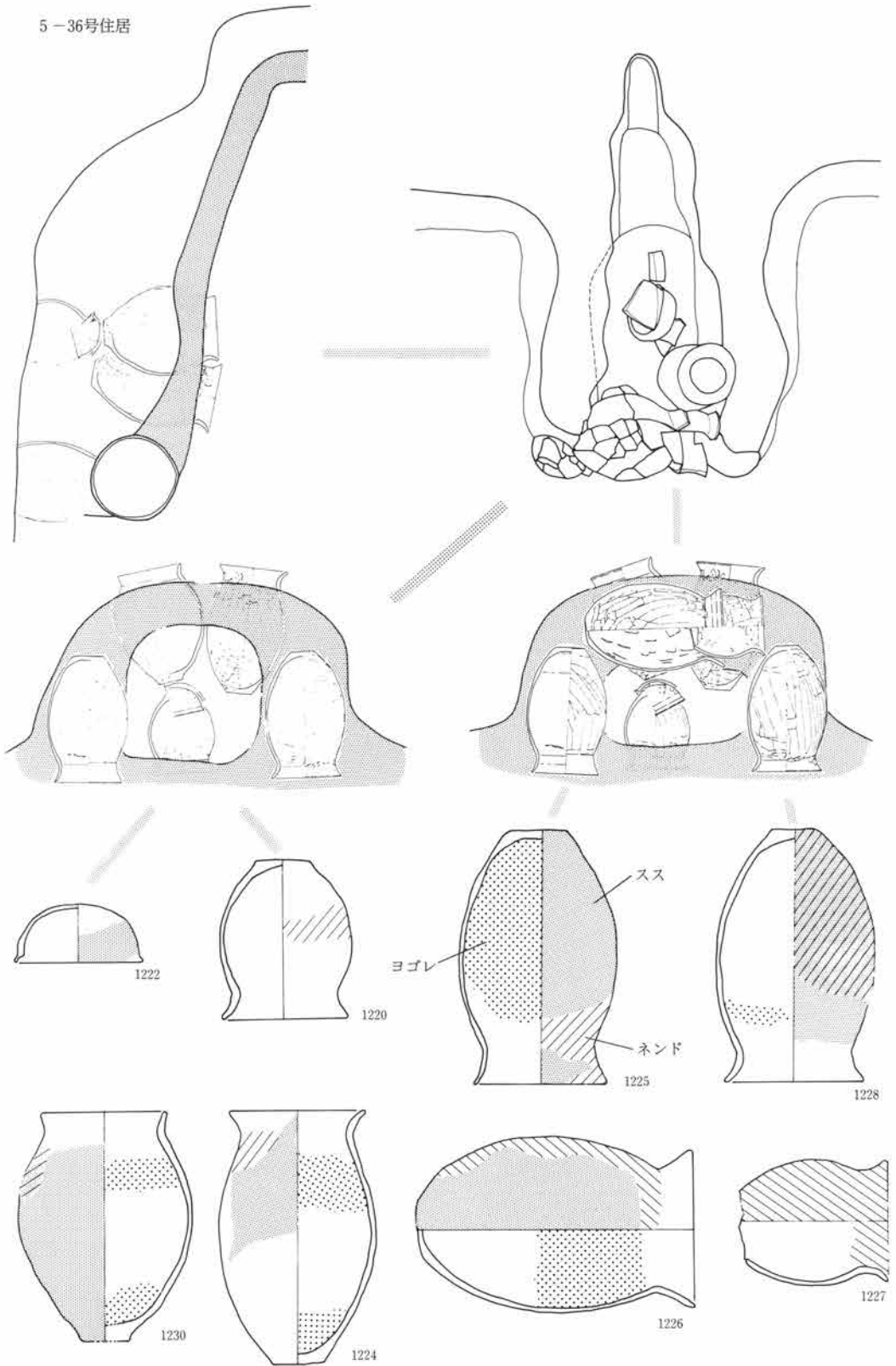
カマドは住居東辺のやや南よりに造られており、左側に長カメ、右側に長カメの上半分を切った鉢の2個体を据え付けている。

カマド材はすべて粘土で、袖部にも、焚口天井部にも石などの芯材を使っていない。右側の袖部は15号住居によって一部壊されているが、一つには粘土のため袖先端部を探し損なった為でもある。左のカメの下には支脚石が倒れており、土器類もカマド天井部も全体に沈んで、つぶれた状態であろう。計測値：焚口巾は推定で30cm、燃焼部巾約35cm、焚口先端から支脚までの距離35cm、奥行き60cm。

煙道は住居壁外に造られている。煙道入り口部は燃焼部の床面と同一で、一旦奥に平坦部をつくってから急角度で立ち上がらせている。燃焼部の天井は奥で弧状を描くよう丸く張りを持つ。

土圧で沈んだ状態を修正して、使用状態を想定したのが1節-4図右下、1節-5図右上の断面図

5-36号住居



1節-6図 古墳時代のカマド(3) 5区36号住居

である。このカマドの特徴は、カマド材がすべて粘土であったことで、特に粘土のみの焚口天井部分が確認されたのは貴重である。またカメ類を複数据えて粘土を充填した状態も横断面の観察から確認できる。カメを据えて粘土で固定し、さらにカマドの天井部を補強する構造である。焚口天井部を粘土で造ったカマドはほかにもかなり造られた可能性がある。粘土のみで造った場合には当然脆く壊れやすい。住居内に適当な石材や、転用したとおもわれるカメ類が出土しない住居のカマドは、1区14号住居タイプである可能性も考えたい。実際に渋川市中筋遺跡の平地式住居のカマドは、焚口天井部を粘土で造っている（注8）。

土器の使用痕跡 カマドに据えてあった長カメ0084と鉢0086は、頸部に「ネンド」の痕跡をのこし、胴部から底部には「スス」が付着する。それぞれ左右のカマド壁に密着する部分には、斜めにネンドが広がって付着している。長カメの底部には、酸化した「変色」が見られる。内面は共に底面を中心に「ヨゴレ」が認められる。

カマド左脇から出土した長カメ0087と甑0088は、胎土、製法ともよく似ており、最初からセットで作られ、使われたと思われる土器である。甑は住居壁にへばり付くように落ち込んで出土していることから、カマド周辺の空間の利用状況も示唆する。0087の長カメは胴部から底部にススが付着し、底部には、支脚の痕跡が観察できる。粘土の痕跡は見いだせなかった。内面は底にヨゴレが見られる。0088の甑は使用痕跡と認定できるヨゴレなどは見いだせなかった。

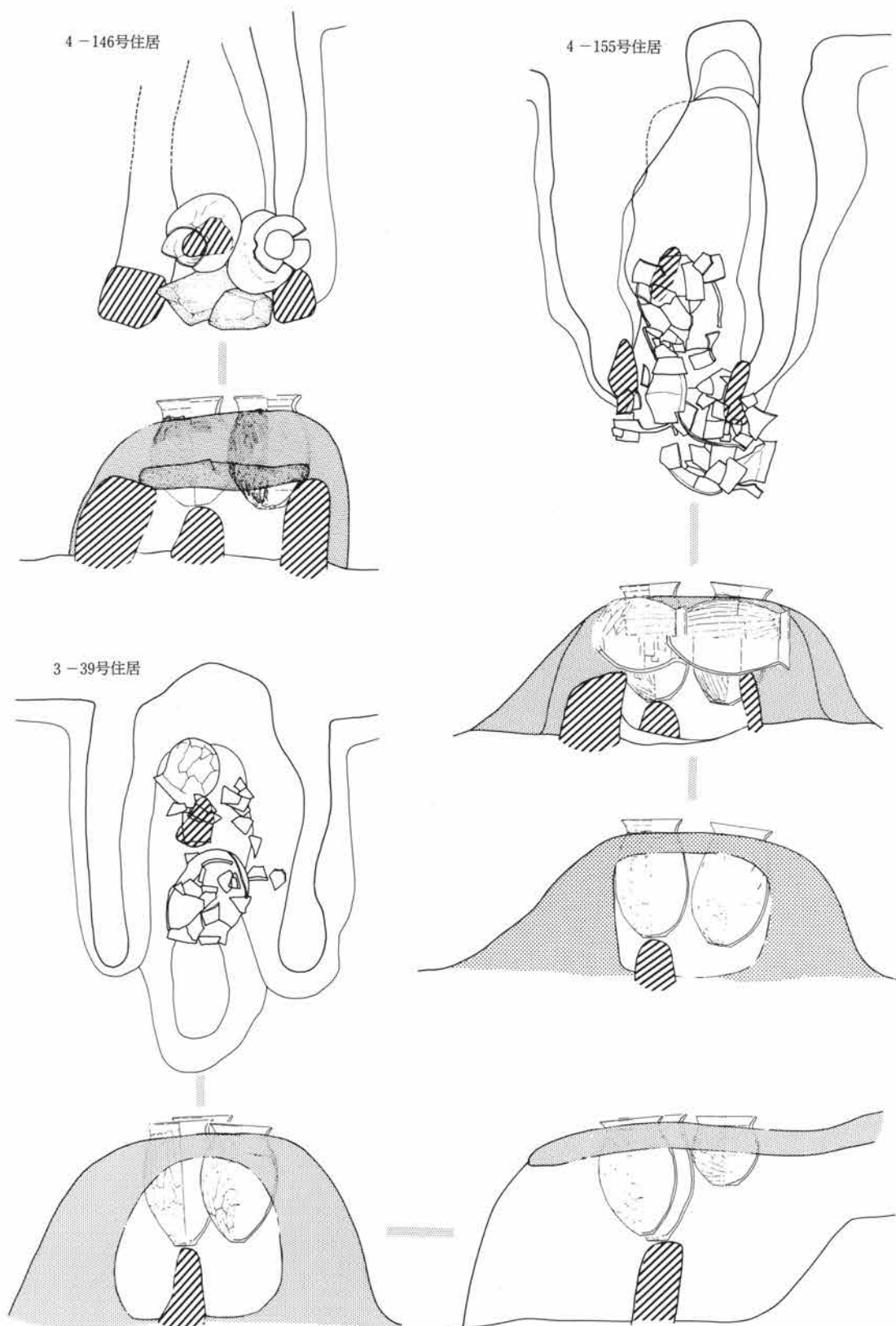
同じくカマド左脇から出土した小型の壺0081は加熱の痕跡が認められる。このような小型のカメ、壺類にも、しばしば加熱の痕跡がみとめられている。カマドの燃焼部手前で、おきの上にも置けば、ちょっとした物の加熱は可能だろうが、実際はどうであろうか。杯類（0082, 0083）にもススがみられるが、使用痕跡とは認定できなかった。

（2）土器のカマド（5区36号住居，1節－6図）

カマドの構造 カマド材に土器を使ったカマドである。5区36号住居は台地の北端に近い一画に近接して営まれている住居群のブロックに属する。三ッ寺村の中では、古手の時期である。さらに古手の溝（B2溝）を壊して作られている。

カマドは東側辺の南寄りに設置されている。カマド内右側に長カメ1224がすくとんと落ち込むようになり、1230のカメも左側よりで出土している。出土位置から復原すると、二つのカメがきちんと横並びにならず、前後にずれる形となる。この場合、左手前の部分に小形カメが差し込まれることがあるようで、3個懸けのタイプと考えて良いだろう。

構築材とカマド道具に土器を多用しているカマドである。袖部は粘土であるが、両袖先端部にカメを伏せて埋め込んでいる。袖の芯材として、カメが使われている好例である。さらに両袖先端部の間に長カメと中型のカメが「いれこ」の状態を組み合わせて横たわって出土している。二つのカメの組み合わせた長さは、袖先端のカメに渡せる長さであり、出土状態からも焚口天井材と考えるべきだろう。支脚は燃焼部のわずかに左側に、小型カメを伏せて利用している。口縁部を少し埋め込んで固定し、底部のうえに椀の破片を二枚重ねて、上に乗せるカメの高さを調整している。計測値：焚口中約30cm、高さ17cm、燃焼部巾35cm、奥行き80cm、焚口から支脚までの距離52cm。煙道は奥壁から緩やかにたち



1節-7図 古墳時代のカマド(4) カマドの構造・袖材と焚口天井材

あげ、住居外に導かれている。

土器の使用痕跡 カマド内出土の1224、1230は頸部と胴部の外側一部に「ネンド」が付着し、「スス」も胴部から底部に広がっている。ススは頸部から口縁部にかけては付着しないが、1224の口縁部には一部分スス漏れがつく。袖材に使用している1225は口縁部から頸部に、1228は胴部から底部にネンドが付着している。焚口天井部の1226と1227も外面や口縁部内側にネンドが付着している。ススや内面のヨゴレは、通常の使いかたをしたものと区別はつけられない。おそらく煮炊きに使用した際のものであろう。転用のものは、本来の使用痕跡と、その後のものが複合していて分離しにくい。支脚の小カメ1220は加熱の痕跡はあるものの、支脚特有の使用痕跡は見いだせなかった。高さ調整に使われている椀1222は外面にススが付着し、転用の様子が認められている。

(3) 石のカマド (4区146号住居, 1節-7図左上)

袖先端部に石を据え、焚口天井部にも石を使い、鳥居状に組んだカマド。これは他の地域でも一般的に見られるタイプで、当遺跡でも数多く認められている。

カマドの構造 カマドは東辺やや南よりに作られており、奥壁と煙道部は調査区外であった。この住居は覆土の上にFAによって埋まった畠が確認されており、カマド採用直後の時期にあたると思われる住居である。

袖石は左右高さを揃えて、上に平らな面を作り出している。天井石は偏平で、おそらく加工したものであろう。天井石にもたれ掛かるようにして、やや丸みを帯びたプロポーションの長カメ(0985・0988)が、横並びで出土している。2個懸けのタイプである。支脚は石で、左側のカメの下にある。燃焼部巾のやや左に位置する。計測値：焚口巾36cm、高さ18cm、天井石巾15cm、燃焼部巾36cm、焚口先端から支脚まで26cm、奥行きは推定で80~90cm、支脚の高さ12cm。

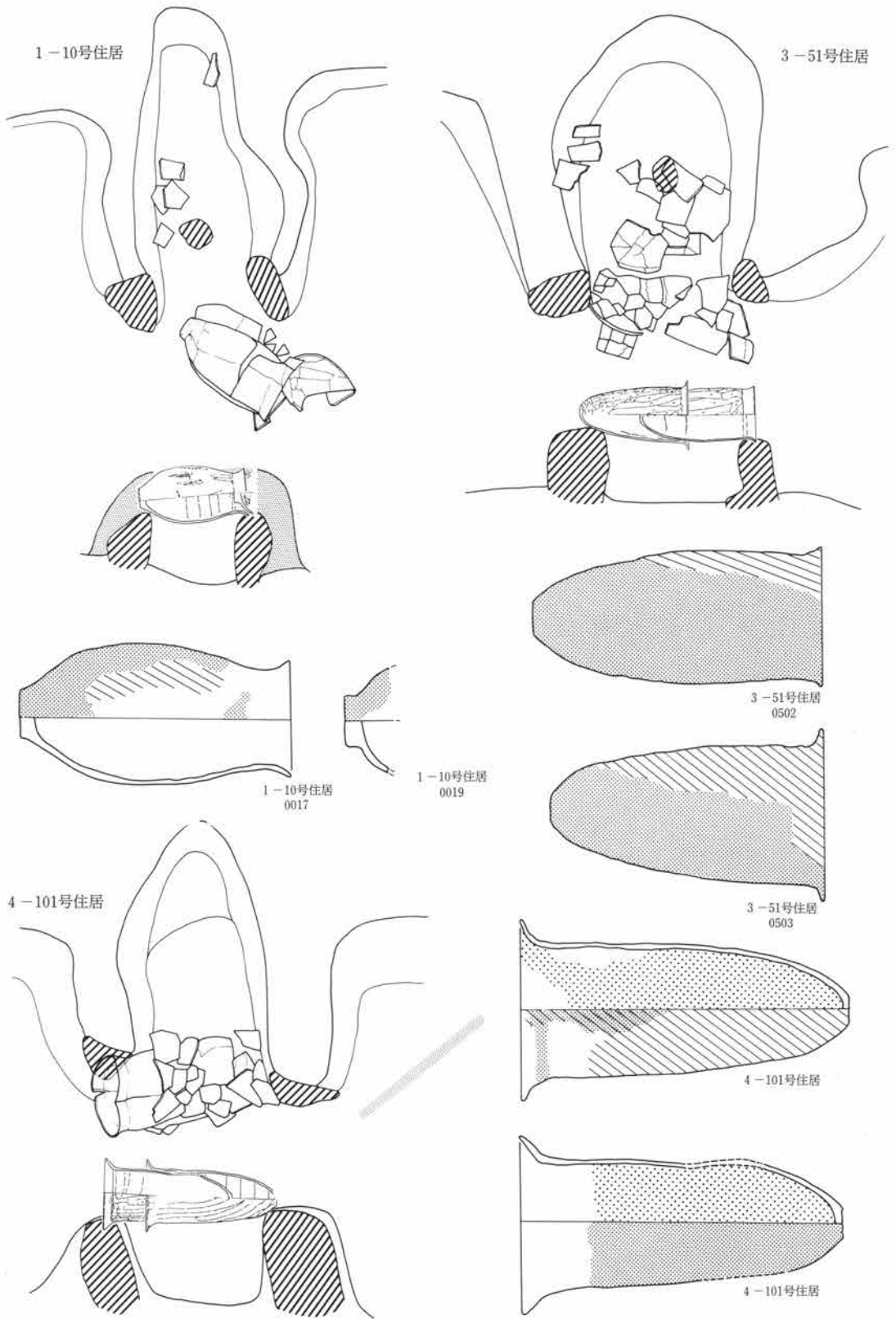
土器の使用痕跡 カマド左側に据えてあった丸胴のカメ0985は、下胴部から頸部のわずか下がった部分にまで「スス」が付着する。内面は、外面のススに対応するように、底部から頸部の下あたりまで炭化した「ヨゴレ」が認められた。右側の長カメ0988は底部から頸部のあたりまでススが付着する。ネンドははっきり観察できなかった。底部外縁にススが巡り、中心部は酸化して赤変している。支脚使用の痕跡であろうか。内面は上胴部までヨゴレが見られる。カマド右側の貯蔵穴脇から出土している丸胴のカメ0987にも加熱の痕跡が見られる。頸部から胴部の一部分には「ネンド」が、底から胴部はススが付着する。内面にもヨゴレが観察できた。また貯蔵穴脇出土の杯0984、椀0982もススが内外面リング状に付着する。支脚に転用した使用痕跡と思われる。

(4) 石と土器のカマド

焚口の袖部は石を使い、天井部にカメを渡したタイプ。

a 4区155号住居 (1節-7図右上)

カマドの構造 カマドは住居東辺やや南よりに造られている。地震による地割れの走る住居で、カマドもずれを生じている。カマド周りには、置き台などに使われたと思われる底を抜いたカメ、壺が据



1節-8図 古墳時代のカマド(5) カマドの構造・カメの焚口天井

えられている。

袖先端部に石を据え、天井部は長カメ0968と小型のカメ0972を「いれこ」の状態に組み合わせて渡している。袖石は加工していないと思われる。支脚は石で、燃焼部巾やや左よりにある。奥に向かって倒れた状態で出土している。支脚の上に長カメ0967が乗っており、口縁部を手前にして倒れ込んでいる。天井部の崩落につれて倒れたように見受けられる。右側に据えてあるはずのカメは、カマド右前に外してあると考えてみた0969。2個懸けあるいは3個懸けのカマドであろう。計測値：焚口巾30cm弱、高さ18cm、燃焼部巾38cm、支脚の位置35cm、高さ15cm、奥行き100cm。

土器の使用痕跡 左に据えられていた長カメ0967は、底部から頸部の下までススが付着する。底部の外縁にもススがあり、中心部は白っぽく還元変色している。内面は底部から胴部に薄いヨゴレが認められ、頸部より下がったあたりにヨゴレが帯状に巡る。カマド前に倒れていた長カメ0969は、底部から頸部の下までススが付着する。内面底部には「コゲ」があり、ヨゴレは薄く頸部下に帯状に巡る。焚口天井材のカメ0972・0968は全体にススけており、特有の使用痕跡を抽出できなかった。

8図に示した1区10号住居、3区51号住居、4区101号住居も石と土器のカマドのタイプで、袖先端部に石を据え、焚口天井部にカメを使っている。

b 1区10号住居（1節－8図左上）

カマドの構造 火災住居である。カマドは住居東辺やや南よりに造られている。出土遺物は少なく、焚口前に組み合った長カメとカメの胴半部、貯蔵穴上に散乱する甕が見られるのみである。焚口天井材が前に落とされ、カマドに使用していたカメ類は外して住居外に持ち出していると考えerるほうが自然だろう。

袖石は無調整で据えている。支脚は石で、燃焼部巾やや左側によっている。煙道は燃焼部奥壁から斜めに立ちあげて、住居外に導かれている。計測値：焚口巾32cm、高さ20cm、燃焼部巾35cm、支脚の位置30cm、支脚の高さ16cm、奥行き80cm。

土器の使用痕跡 長カメ0017は胴部の広い範囲にネンドが付着する。底部の外周に、酸化による変色が認められている。内面の使用痕跡は不明確である。底部から胴下半部のみのカメ0019も転用の痕跡は不明確である。

c 3区51号住居（1節－8図右上）

カマドの構造 カマドは本遺跡には珍しく、東辺のやや北よりに造られていて、貯蔵穴も北東隅にある。地震による地割れの走っている住居である。古墳時代でもやや新しい時期にあたる。

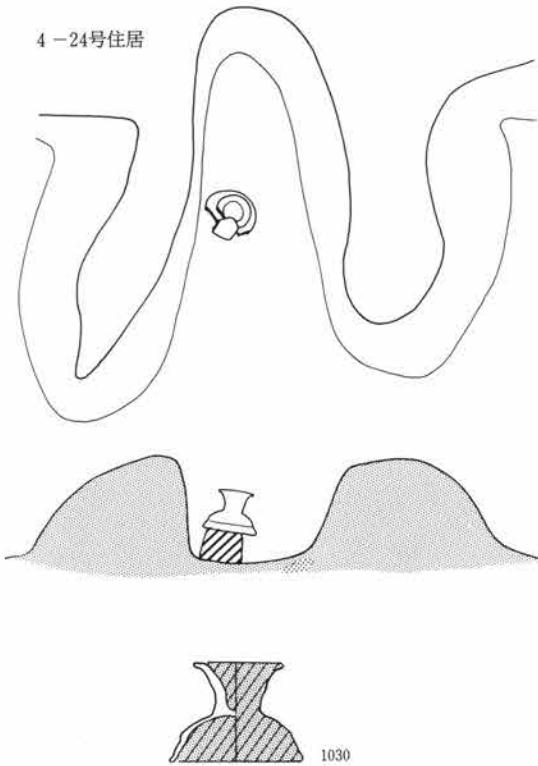
両袖石の間に長カメが2個体崩落していて、焚口天井材と見られる。支脚は石で、燃焼部巾のほぼ中央に位置する。カマド内からもカメが出土しているが破片状態であり、むしろカマド前床面に散在するカメがカマドから取り外したものと考えられようか。計測値：焚口巾45cm、高さ23cm、燃焼部巾50～55cm、支脚の位置45cm、支脚の高さ14cm、奥行き80cm。

土器の使用痕跡 長カメ0502、0503の外表面はネンドとススがそれぞれ半面ずつ広がって観察でき、焚口天井として使用の痕跡とできる。図示しなかったが、カマド前床面から出土した長カメ0497、0504

2-33号住居



4-24号住居



3-22号住居



5-56号住居



4-145号住居

1節-9図 古墳時代のカマド(6) 石の支脚と高さの調整

は胴部の肩のあたりにネンドが付着し、ススは胴部から頸部にかけて認められている。通常の使用痕跡と考えられる。

d 4区101号住居（1節－8図下）

カマドの構造 カマドは住居東辺南寄りに造られている。両袖石の間に、長カメ3個体（1071・1072・1073）が組み合わさって出土している。焚口天井材が崩落しているとみて良いだろう。支脚は不明である。計測値：焚口中45cm、高さ28cm、燃焼部中45cm、奥行き70cm。

土器の使用痕跡 長カメ1071の外面には、底部から口縁部にかけてネンドが広い範囲で付着している。内面のヨゴレも縦に付着しており、焚口としての使用によるものと考えられる。1072・1073はともにススけており、ネンドの付着もみられる。

（5）支脚について

カマド燃焼部には煮炊具を支える「支脚」と呼ばれている台が置かれている。支脚は構造的に弱い天井部や懸口に負担をかけないで、カメ類を床から持ち上げて火の当たりを良くする役割を果たしている。支脚には石製のものと土製品とあるが、石は特別に加工していないものが一般的である。土製品も小形の土器を転用している場合が多い。当遺跡では石と土器の転用による支脚がほとんどで、土製支脚は出土していない。

a 石の支脚

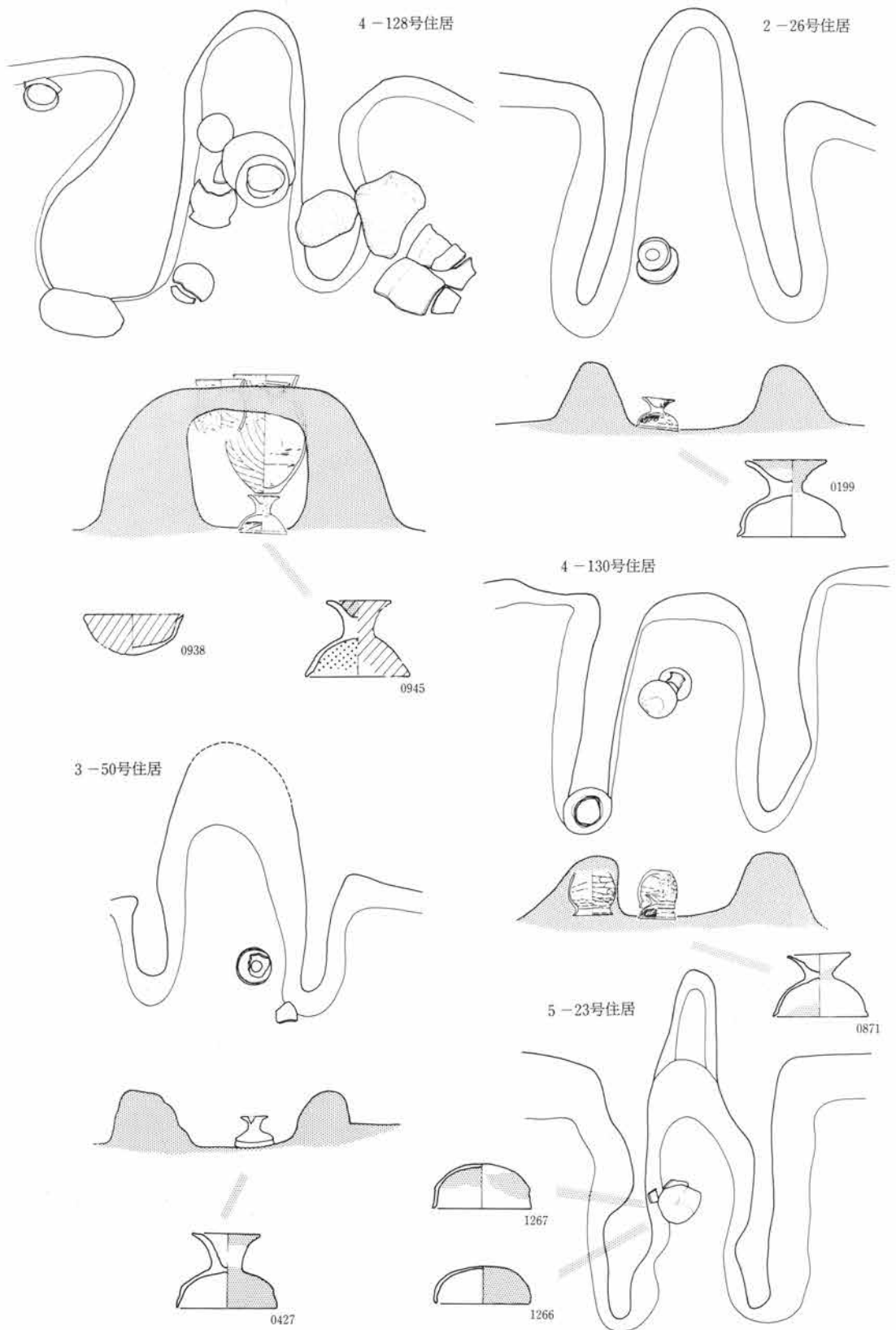
手頃な大きさの石（長さ15cmから20cmで5～6cmの太さのもの）をカマド内に据え付けている。燃料をくべる際に、当たって倒れては危険なのだろう、しっかりと埋め込まれている例が多い。燃焼部の床を掘り込んで据える場合と、打ち込んでいる場合とあるが、石の大きさや作る際の様々な条件によるようで、今のところパターンとしてとらえられない。

前述した1区14号住居（1節－5図）、7・8図に示したカマドも石の支脚である。9図に示したカマドは石のうえに高杯や杯などの土器が乗っているが、基礎は石の支脚である。支脚としての高さはおおよそ10cmから15cmであろう。

b 土器の支脚

カマド内からしばしば高杯が逆さに伏せた状態で出土している。10図に幾つかのカマドを示した。土器の出土位置が支脚の位置であり、土器にススや二次加熱の痕跡が見られること、さらに伏せた高杯上にカメがかかったままで出土している4区128号住居のような例があることから、支脚であることは異論がないだろう。

5区23号住居の場合は、燃焼部左寄りに杯1267が伏せた状態で出土している。杯は内外面にススが付着している。出土位置やススの付きかたからみれば支脚と考えられるが、高さが不足する。カマド左脇からやはりススけた椀と杯が出土している。杯や椀を2枚か3枚重ねれば必要な高さを確保できる。内外面ともにススやネンドが付着した杯椀類は、支脚に使われた可能性が有るだろう。



1節-10図 古墳時代のカマド(7) 高杯と杯の支脚

6図に示した5区36号住居に見られるように、小型カメも支脚として使われている。他地域での例はあまりきかないが、本遺跡では11図にあげたように幾つかの例が見られる。

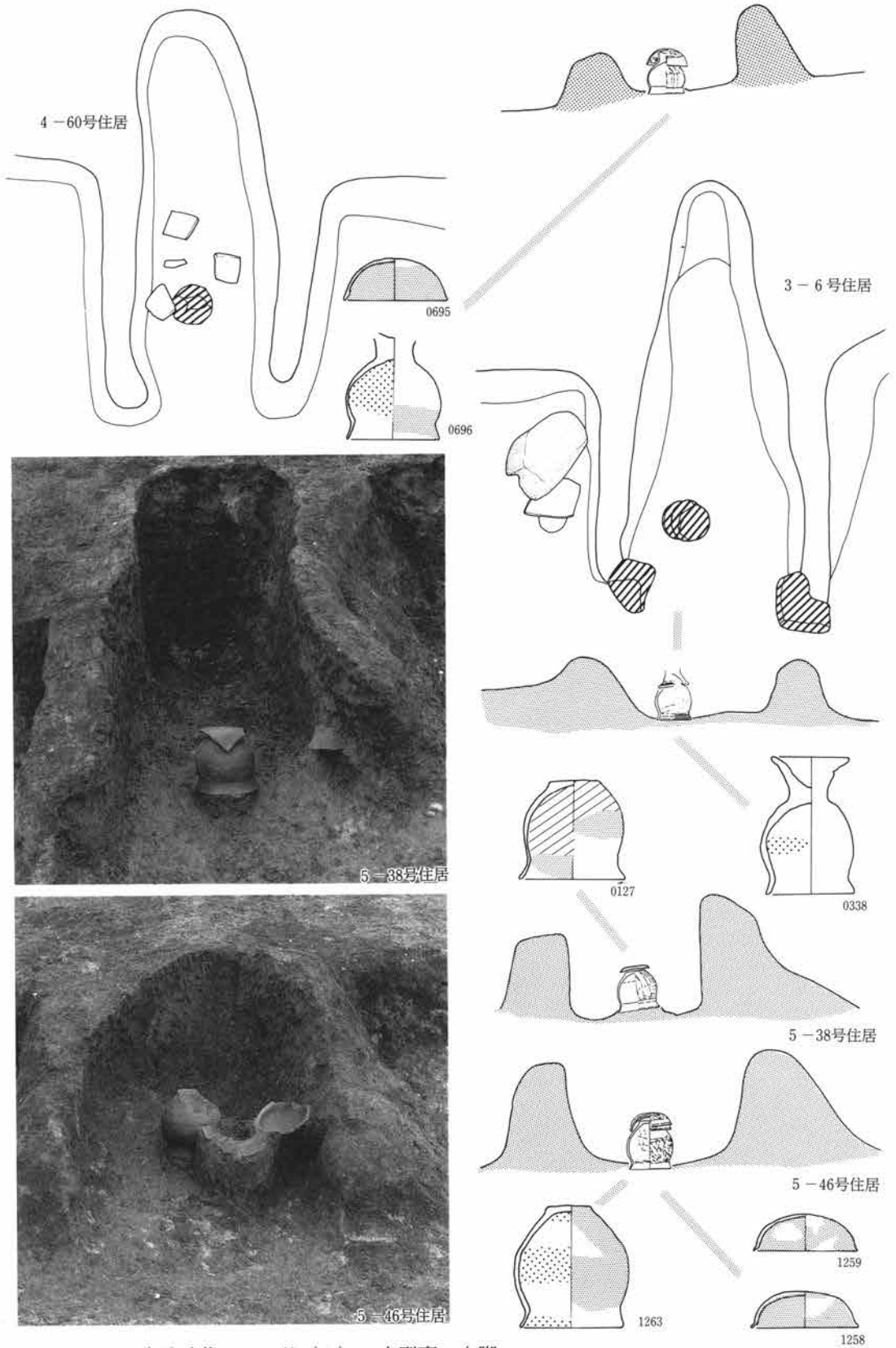
本遺跡では高杯、小型カメ類が支脚に転用されている住居は、ほぼ5世紀末から6世紀前半の時期に限定されるようである。同時期の住居でも支脚材の選択はいろいろであるが、どんな理由で選択が行われるのか解明できていない。たとえば、高杯を使っている住居と使っていない住居とのあいだに差異を見つけることは難しく、したがって支脚に高杯を使っていることで、カマド祭祀などの特別な意味合いは考えにくいだろう。カマドを使う時の実際的な事情を重視して考えてみるべきかと思う。高杯が6世紀後半以降支脚に使われなくなるのは、高杯の形態変化によって支脚としての条件に合わなくなったからではないだろうか。それまでの短脚のものから長脚化する高杯は、杯部も大きく、逆さに据えてもおさまりが悪いだろう。逆に短脚の高杯が使われるのは、カメを支えるために安定も良く、高さも、逆さまにした高杯裾の大きさも都合がよかったのだろう。小型カメ類は支脚としては大きすぎて、火のまわりを邪魔してしまいそうである。他地域で小型カメ類の支脚転用が少ないのはこうした使いにくさによるものではないだろうか。

c 支脚の高さ調整（支脚の上に乗った土器片）

支脚石の上に高杯や杯、碗、カメの破片などが乗った状態で出土している場合がある。9図に示した3区22号住居では、杯を2枚重ねて支脚石のうえにかぶせている。4区24号住居では高杯を、4区145号住居はカメの底部をかぶせている。5区56号住居では、上下を欠いた高杯脚部と土器片を乗せている。支脚の上にさらに土器を乗せているのは、石の支脚の場合だけではなく、高杯や小型カメを転用した支脚の場合にも認められている。土器をカマド材に多用している5区36号住居では、支脚にした小型カメの上に碗の破片を2枚かぶせている。11図に示した小型カメを支脚にしているカマドでは杯やカメの胴部片、台付きカメのはずれた脚台部を乗せたりしている。4区130号住居では、高杯を伏せた支脚のうえに小型カメがかぶさるようにして出土している。

支脚の上に乗せられた土器類は、内外面ともススとネンドの付着が認められ、一部破損していても、また破片でも使用されたことを示すように、割れ口にススやネンドの付着が観察できる例が多い。これらの土器は支脚の高さ調整に使われたものだろうと考えている。

煮炊具をカマドに据える際には、まず支脚を据えるのが順序であろう。煮炊具を支脚に乗せておいて、カマド本体に粘土で固定するのだが、カメの胴部はすっぽりとカマド燃焼室につつまれ、しかも口頸部はカマド天井部より上に出ている必要がある。カメを所定の高さに据えるのは、煮炊きを合理的に進めるためには重要なことであり、また微妙な調整を必要とする作業である。天井部の高さを変えるのは全体の設計変更を伴い、焚口や袖部の高さも変えなければならない。支脚の高さを調整することによって、煮炊具のほうをカマド本体の高さに合わせるほうが容易で实际的だろう。支脚はある程度動かないように固定する必要があるが、固定してしまうと微妙な高さの調整が難しい。高すぎる場合は、たたき込んだり、埋め込んで沈めればよいが、低すぎる場合にはいちど埋め込んだものを動かして調整し直す作業が必要になる。そこで石や土器片を支脚の上に乗せ、煮炊具との間にはさみこむ形にすれば、細かい上下が可能になる。かぶせたり、乗せたりした土器や石が動かないように粘土



1節-11図 古墳時代のカマド(8) 小型甕の支脚

で固定することも工夫しただろう。単に挟み込むだけでなく、杯や高杯をかぶせるように乗せていることから、何度かカメを乗せてみて具合を見ながらカマドを作っている様子が想像できる。おそらくカメをかけかえたり、全体的に緩んで補修するなどという際には、土器を挟み込んだり、はずしたりするような支脚の高さの調整も行われただろう。カマド内から出土する土器片や、カマド脇に置かれた杯などは、ススやネンドの付着の観察から支脚に使われたものと特定できるのではないだろうか。資料の集積を心がけたい。

こうした工夫は各時期を通じて行われており、古墳時代だけのものではないようである。

(6) 古墳時代のカマドの特徴

a カマド材

三ツ寺II遺跡の古墳時代のカマドを、カマド材の在り方から検討してみると、粘土のみで作られられたと思われるタイプが多いことが指摘できるだろう。石を焚口先端に据え、天井部も鳥居状に石で作りあげるタイプは意外と少ない。補うように土器を芯材としたり、焚口天井材としたりするカマドが認められている。

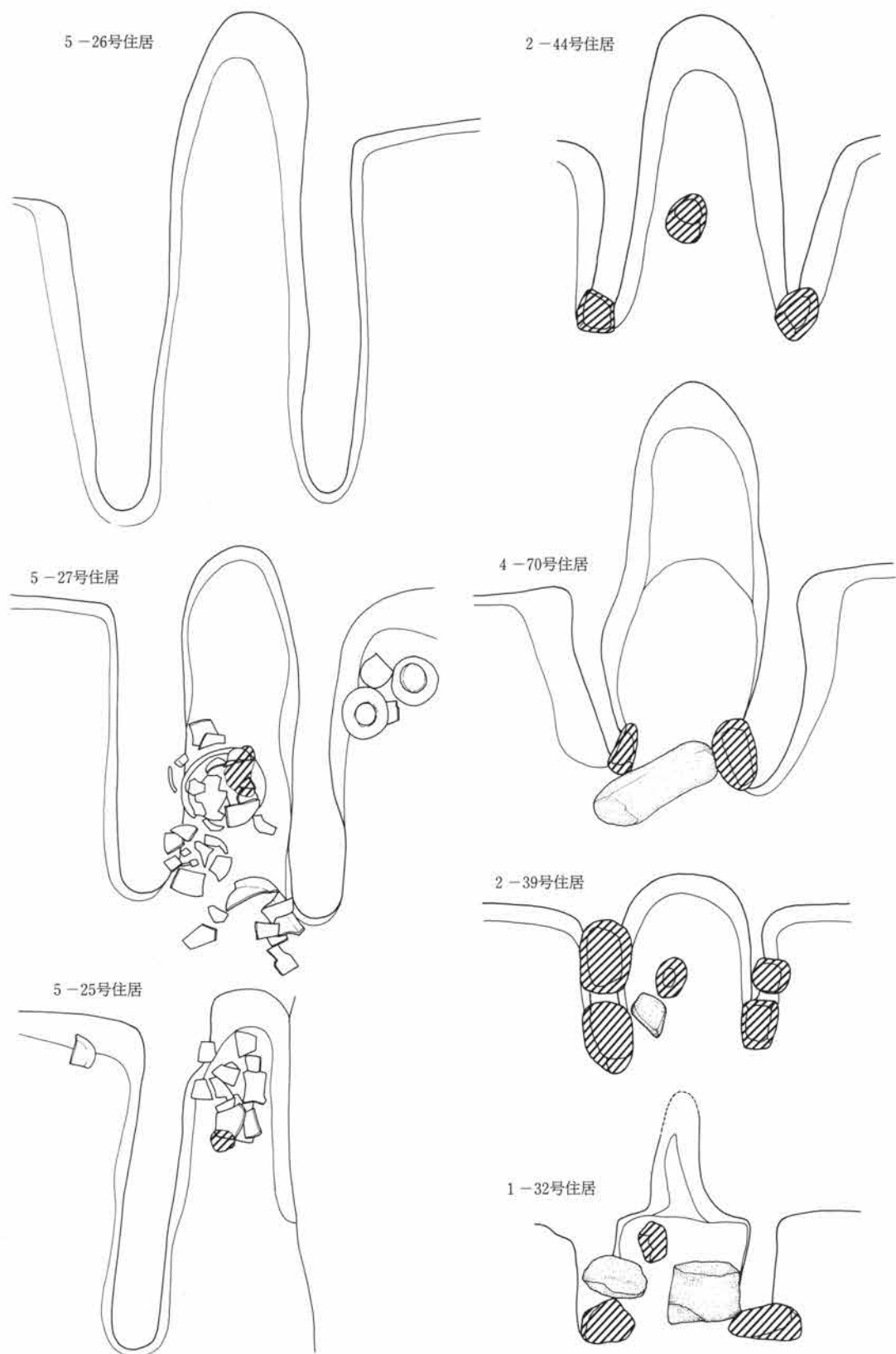
カマド材の組み合わせとしては、構造上の強度にかかわることであるので、あたりまえではあるが、粘土のみの袖に石や土器の焚口天井を取り付けるようなことはしていない。また土器の袖に石の天井という組み合わせも行っていない。袖が粘土の場合は天井部は粘土、袖が土器の場合は粘土の天井か土器の天井である。石の袖であれば粘土、土器、石の天井のいずれかの組み合わせとなっているようである。

カマド材が違っていても、使用されたカメ類の使用痕跡には全く違いは見いだせなかった。支脚材についても同じである。多様なカマド材を使っているが、カメを複数据え、懸け口と天井部をカメと一緒に粘土で固定してしまう構造であると考えてよいだろう。

カマド材の選択は何を基準にしていたのかについては分からないが、日常生活に必要な諸材料はみじかな所から調達するのが原則であろう。特に石の焚口天井が少ないことは、適当な石材が入手困難であったかと思わせる。しかし南に位置する三ツ寺I遺跡の「豪族居館」の濠には見事に石垣が積んである。古墳の葺石であっても、とんでもなく遠くから運んでくるということはないそうである(注9)。濠の石垣のために石が無くなったとも考えられないだろう。居館造営のために運んでくる範囲と、日常生活での調達範囲が多少違っていたと考えれば良いのだろうか。

b カマドの規模

7・8図に示したカマドに1区14号住居、5区36号住居も加えて規模を比べると、焚口巾に違いがある。古墳時代の中でも5区36号住居、4区146号住居、1区10号住居は中期後半に属し、1区14号住居、3区39号住居、4区155号住居は後期の前半に、3区51号住居と4区101号住居は後期後半の7世紀前半に属する。後期前半までのグループは焚口巾30cmから35cmほどの範囲におさまり、後期後半でもやや新しい傾向を示している住居のカマドは、焚口巾45cmであった。おそらく、40～50cmほどの範囲にまとまってくるだろう。焚口巾の大きさが時期によって変化するのであろうか。



1節-12図 古墳時代のカマド (9) 袖の長いカマドと短いカマド

古墳時代のカマド焚口巾は、だいたい40cmがめやすで、人の肩巾ぐらいを基準にしていると考えている(注10)。本遺跡の古墳時代後期前半までのものは、巾が狭い構造であるといえる。この巾のせまい構造が、時期的な様相であるのか、当遺跡の特色であるのか興味深い。北の三ッ寺III遺跡でも同じ傾向が認められている。地域に共通の特色ととらえられるだろう。

本遺跡の5世紀から6世紀代のカマドは、奥行きは計測値に極端なバラつきがある。カマドの奥行きは煙道の設計によって計測値が変化しやすいが、焚口先端から支脚までの間の実際に火を焚く空間は機能上の必要からか、比較的大きな変化は見せない部分である。30cmから35cmの広さが平均的であるようだ。3区51号住居の場合は焚口巾が広がっている分だけ支脚の奥に設置されている。時期が新しくなると支脚より後ろのスペースが狭くなり、カマド全体の奥行きが短くなるのは一般的な傾向で、本遺跡でも7世紀ごろを境として同じような傾向をたどるといえる。

12図に示した1区32号住居のカマドは、焚口先端から燃焼部の奥壁までが40cmに満たない。2区39号住居はおおよそ50cmで、これもやや短いカマドである。ともに支脚の位置は30cmをわずかに欠く程度であるが、支脚より後ろの部分が狭い。2区44号住居や4区70号住居のように奥行きが70cmから80cmで、袖部の長さが60cmはあるカマドが平均的な大きさといえる。5世紀末から6世紀前半にかけての時期のカマドには5区27号住居のように奥行きが長く、袖も70cmから80cmのものが認められている。しかし、5区26号住居のカマドは煙道部の一部も含んでいるのであろうが、140cmの奥行きで、袖部で100cmをこえる長いカマドである。5区25号住居は27号住居とほぼ同じ大きさであるが、支脚の位置が奥まっている。

このように平均的な大きさのカマドが作られる一方で、極端に袖の長いカマドや短いカマドも混在している状態は、7世紀代にはいと少なくなり、さらに後の奈良、平安時代には見だしにくい。

カマドが個々の住居で作られ、使われる施設であるため、個人的な工夫が組み込まれやすい性格を持っているにしても、施設を設計する際には、集団の持っている共通のイメージがあると考えられる。このようにいろいろな種類のカマドが作られていたということは、カマドに対する集団のイメージそのものが強い規制を持たず、ある程度あいまいさを持っていたということになるだろう。

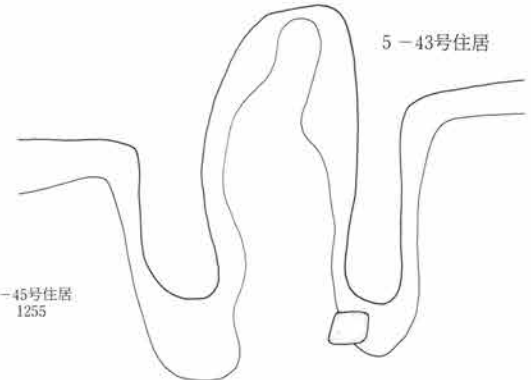
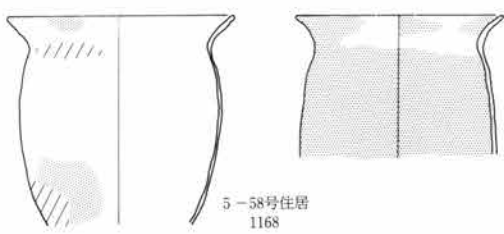
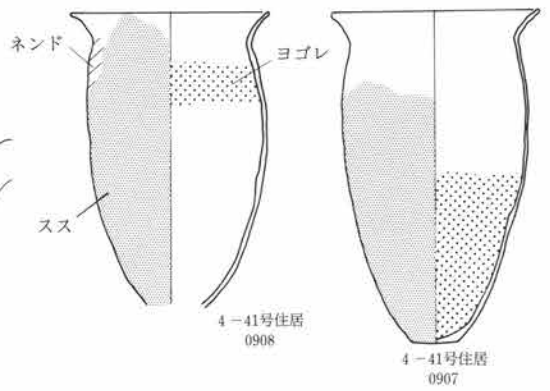
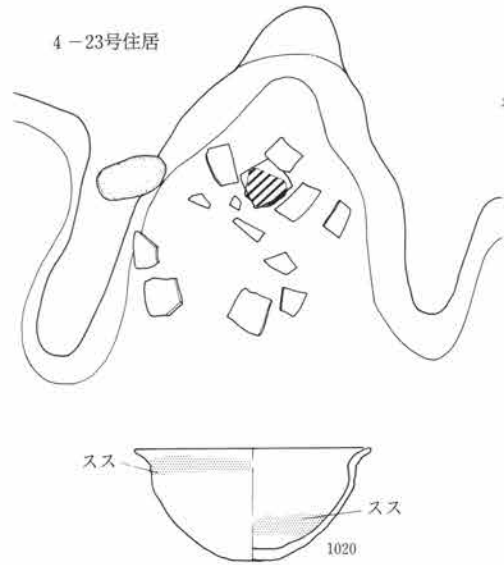
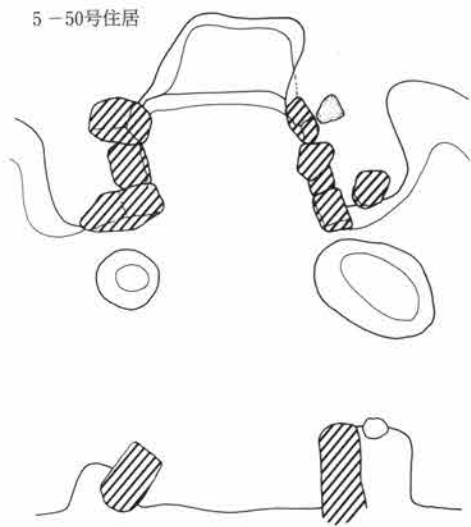
カマドの大きさや、作りが各住居で大きなバラつきを見せなくなることを重視すれば、7世紀代は注目すべき時期だろう。

4 奈良時代のカマド

カマドの構造 本遺跡の奈良時代の住居は、古墳時代の住居軒数に比べて少なくなる。カマドは住居東辺南寄りに設置される場合が多い。

カマドは焚口先端を住居内側に設置し、燃焼部奥は住居壁を掘り込んで作り出している。煙道は燃焼部奥から斜めに立ちあげて、屋外に導かれるスタイルであったと思われる。焚口巾は、45cmに集中するようだ。燃焼部巾も45cmから60cmとやや巾広く、支脚の焚口先端からの位置は45cmから50cmで、燃焼部空間が広く設計されている。

カマド材は粘土のみのものが多く、したがってカマド遺存状態は良くない。カマド芯材として土器



1節-13図 奈良時代のカマドとカメ

を使う例もある（4区48号住居）が、多くは破片状態でカマドの壁の保護材として使われる程度である。石をすえてカマド壁としている5区50号住居、4区41号住居の例もあるが割合としては少ない。袖先端部に石を据えたり、焚口を石で組んだりするようなカマドも見られなかった。支脚もカマド内から出土する例があまりなかった。

奈良時代を概ね8世紀代として、相当する住居のカマドを扱ってみたが、今まで挙げた特徴はすべて7世紀代のカマドを出発点としている。特に7世紀後半から8世紀にかけての時期に相当する住居のカマドは作りや大きさの上から分離できない。奈良時代のカマドは7世紀代からの変化を受け継いだものである。

土器の使用痕跡 カマドの遺存状態が悪く、カマド内にカメが据えられたままの状態出土した住居は皆無であった。家を廃棄する時の考えかたが変わったのだろうか。住居内に放置されたと思われる遺物も極端に少なくなる。そのため、カマドと組み合わせて検討できる遺物はないが、住居内出土のカメを観察してみた。

4区41号住居のカマド前からは長カメが2点出土している。カマド焚口内の右側から出土した0908は、頸部にネンドが付着し、底部から頸部にかけてススが広がる。ススは一部分口縁部にまで付着している。内面は肩部にヨゴレが帯状にめぐっている。カマド左前に散在した0907は、底部から頸部のやや下がったあたりまで薄いススが付着している。内面は、底から胴部の中程までヨゴレが観察できた。

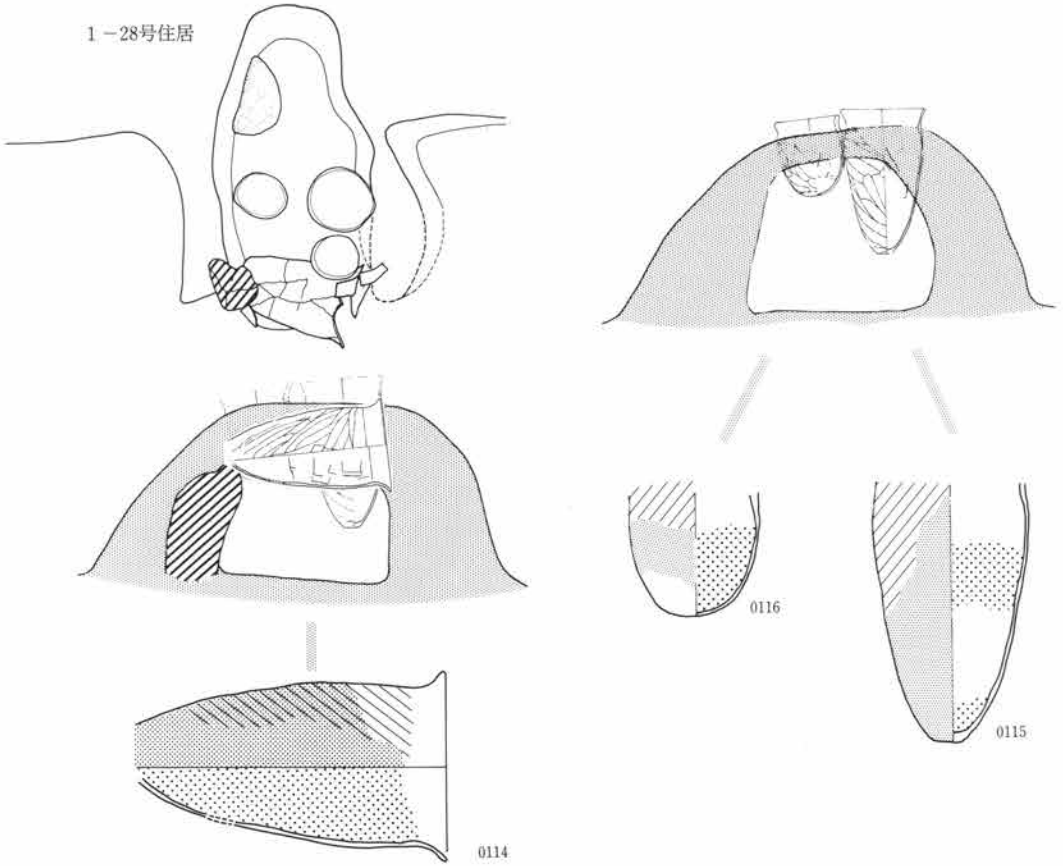
4区23号住居の鉢1020は、カマド内から破片状態で出土している。頸部の辺りにススがめぐり、底部は置くときにあたってスレたような痕跡が観察できた。内面にも底より上の部分にススが付着し、口縁部内側も器面のアレとススが付着していた。底部のスレや口縁部のアレは、鉢としての本来の使用かたをした際についたものと考えて良いだろう。内面のススは、カマド材としての転用によるものだろう。頸部外面のススの付着も転用によると考えているが、どうであろうか。

5区45号住居の長カメ1255は、住居南辺から出土している。内外面と割れ口にもススが付着し、破片状態でカマド材に転用されたものだろう。カマドは住居東辺の南隅に粘土で築かれ、燃焼部は奥部が壁を掘り込んで作り出してある。

5区58号住居の長カメ1168は、カマド内から出土している。口縁部と胴下部の外面にススとネンドが見られる。内面は黒色化している。転用によるものであろう。カマドは東辺南寄りに粘土で築かれている。本住居では、東辺がカマドを挟んでずらして作られている。カマド左側の壁は燃焼部の奥壁にそろい、右側は焚口先端付近で立ち上がっている。他地域でも、同時期に同じような作りの住居が出現している。住居プランとカマドの作りのかかわりを考えるうえで、注目すべきだろう。

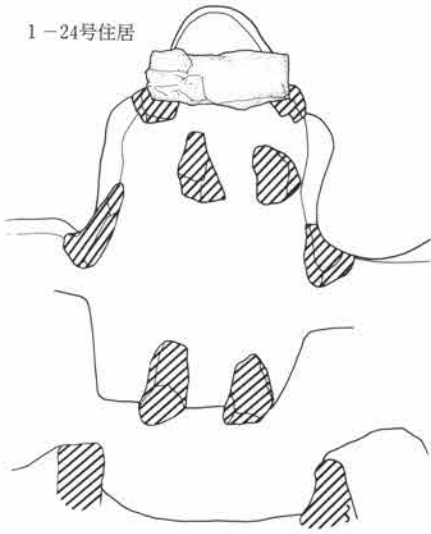
奈良時代のカマドは粘土で築かれたものが多く、遺存状態が不良で遺構から直接構造を明らかにすることができない。数少ない土器の使用痕跡の観察から検討してみると、古墳時代のカマド使用のものと同じである。従って、基本的な構造は、古墳時代のカマドと同一であったと考えられるだろう。

1-28号住居

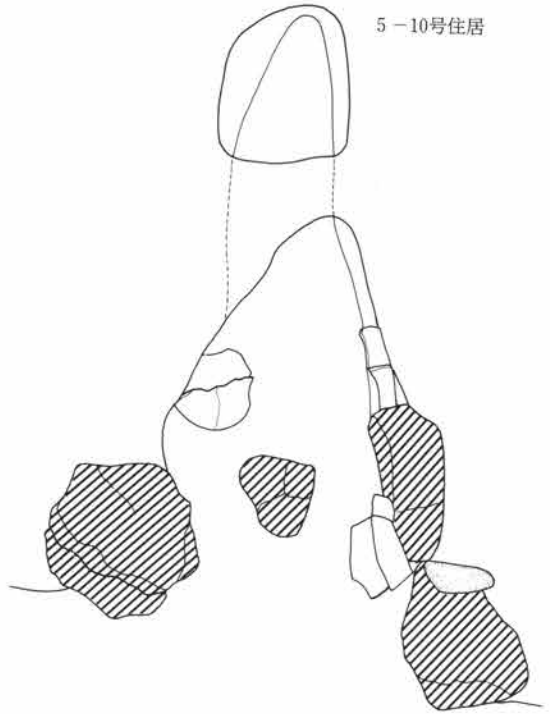


1節-14図 平安時代のカマド（1） 土師器のカメを使っているカマド

1-24号住居



5-10号住居



5-2号住居



4-1号住居



5-3号住居

1節-15図 平安時代のカマド(2) 羽釜・土釜を使っているカマド

5 平安時代のカマド

本遺跡の平安時代の住居は、古墳時代のような密集状態はないが、台地全体に散在して集落を形成していたと想定できる。平安時代の前半9世紀代に相当する住居は少なく、ほとんどが10世紀以降で、羽釜や土釜とよばれる煮炊具を使っていた時期の住居が主体である。カマドは住居東辺南寄りに設置されるものがほとんどである。異なった方位に設置されたものとしては、北東隅の4区1号住居と、西南隅の4区37号住居があるのみである。

(1) 土師器のカメを使っているカマド（1区28号住居，1節-14図）

カマドの構造 焚口を住居内におき、燃烧部奥は住居壁を掘り込んで作り出しているタイプで、奈良時代のカマドとほぼ同一の構造である。煙道は、燃烧部奥から緩やかに斜めに立ちあげて屋外に導かれている。代表としてとりあげた1区28号住居は、この時期の住居としては珍しくカマド内にカメが据えたままの状態で検出されている。カメの形態からは9世紀というよりはむしろ8世紀代に相当するかと思われるが、ほかに良好な例が無いので平安時代に組み込んでおく。

カマド材は粘土のみのものが多いが、1区28号住居では左袖に石を据え、焚口天井部に長カメを渡している。1区27号住居では袖先端に石が使われている。

土器の使用痕跡 カマド内の右側から出土している長カメ0115は、上胴部外面にネンドが、底部から上胴部にかけてススが付着している。内面は底部にコゲと胴部中央に帯状にヨゴレが観察できた。カマド内左側から出土してしている小型カメは、上胴部にネンド、下胴部にススがめぐり、底部は加熱による酸化が見られる。内面はコゲとヨゴレが認められる。この2点は、従来のカマド形の使用痕跡である。焚口に倒れ込んだ状態で出土した長カメ0114は胴部外面に広い範囲でネンドが、底部から頸部にかけてはススが付着する。内面は底部から頸部まで強いヨゴレが観察できた。ススの着きかたからは通常の使用の痕跡と分離できないが、ネンドの広い付着は焚口天井材に転用のためとして良いだろう。

(2) 羽釜、土釜を使っているカマド

カマドの構造 カマド焚口をほぼ住居壁に設置し、燃烧部は住居壁を掘り込んで作り出している。煙道は燃烧部奥から水平に長く引き出し立ちあげるタイプと、斜めに立ちあげるタイプがある。双方とも燃烧部奥壁の両脇に石をたて、あるいは鳥居状に石を組んで煙道の入り口としている例が多い。支脚は燃烧部巾のほぼ中央に据えられる。1区24号住居のように、支脚を2本据える例が見受けられる。大きさは焚口巾50cm、奥行きは60cmが平均であろう。

カマド材は石を多用するようになる。袖部や焚口に据えるのみでなく、燃烧部壁を石で囲うかたちのものもある。支脚も石が使われる。4区1号住居では埴輪と思われる土製品を支脚に使っている。従来のカマド構造との違いは、支脚の位置である。古墳時代以来の土師器を使っているカマドでは、支脚は燃烧部巾の左右どちらかに偏って設置されていた。古墳時代のカマドはカメを複数据える必要

があり、重さの負担が大きい方のカメを支脚で支えるために、支脚の位置が偏っている(注11)。支脚が中央に設置されるようになれば、従来のように複数懸けをすることが難しく、1個懸けに変化したと解釈したい。

土器の使用痕跡 前代に引き続いて、カマド内に煮炊具を懸けた状態で廃棄している住居は検出されなかった。群馬県地域では、月夜野町村主遺跡3号住居の出土例が知られているのみであろうか(注12)。住居内から出土する土器も少なく、とくにカマド内から出土する羽釜や土釜は破片状態の場合が多い。良好な資料が少なく図示できなかったが、羽釜、土釜は内外面ともススやネンドが付着し、破片状態でカマド材に転用されていたことが推測できる。本来の使われかたによる使用痕跡であると思われるのは4区15号住居の土釜0921で、胴部から頸部の下までススが広がり、頸部のくびれた部分をとびこすように口縁部にもススがめぐる。外面にネンドの付着は認められない。頸部まわりや上胴部にネンドが付着していないことは、煮炊具の据えかたに変化があったと考えられるだろう。従来の据え方ではなく、支脚に乗った煮炊具を、土器片や石片をネンドで止めながらせり出させたカマド懸け口に、もたせ掛けて据えたと考えれば、土器の使用痕跡の観察結果と矛盾しない。

6 三ッ寺II遺跡のカマドの特徴

古墳時代から平安時代までのカマドを概観したが、時期によってカマドの形態と構造に変化が認められた。他遺跡での状況とあわせて考えると、群馬県地域全体の動向であると判断できる変化は、およそ次の事項である。

- イ 燃焼部を住居壁の内側に設置するカマドから、壁を掘り込んで作り出すカマドへ
- ロ 奥行きが長いカマドから短いカマドへ
- ハ 焚口巾が狭いカマドから広いカマドへ
- ニ 煙道が燃焼部奥から立ち上がるカマドから、水平に引き出されるカマドへ
- ホ 支脚が燃焼部の壁際寄りに設置されているカマドから、中央に設置されるカマドへ
- ヘ 燃焼部天井部と懸け口を粘土で固めるカマドから、石や土器片をせりださせて作るカマドへ

このうちイ、ロ、ハの変化は7世紀の中頃から後半に始まっている。ニ、ホ、ヘの変化は9世紀から10世紀にかけての時期に明確になる。しかしニの煙道の変化については、早い段階で変わる地域もあるので(注12)、群馬県地域というよりもう少し狭い範囲三ッ寺地域あるいは榛名山南麓地域ぐらいの範囲でとらえられるのではないだろうか。地面を深く掘り込んで家を作る地域と浅く掘り込んで作る地域とでは、上屋の構造が異なるだろう。煙道の出口は家の壁や屋根の葺きおろしの位置とも関連しているためであろう。ホ、ヘの変化は、複数懸けから一個かけへの変化を示している。使用する煮炊具変化も伴っており、各料理にみあった加熱技術を選択できるようになったという点で注目すべき変化である。

三ッ寺II遺跡の特色と思われる事柄は

- 1) 各時期を通じて東にカマドを設置していること

2) 5世紀から6世紀代のカマドでは、①焚口巾が狭い、②カマド奥行きのパラつきが大きい、③カマド材は粘土が主体で、石の使用が少ない、④カマド材に土器を使っている例が多い、⑤支脚に小型カメを使っていることをあげることができる。

5世紀、6世紀代に三ッ寺遺跡という狭い範囲での特色が認められるということは、注目しなければならないだろう。カマドを導入して比較的早い段階であることから、カマドに対するイメージがかたまっていないともいえようか。むしろ7世紀以降、カマドの形や作りがほぼ同じようになっていくことのほうに注目すべきかもしれない。

7 カマドまわりの遺物出土状況から 一置き去りにされた土器一

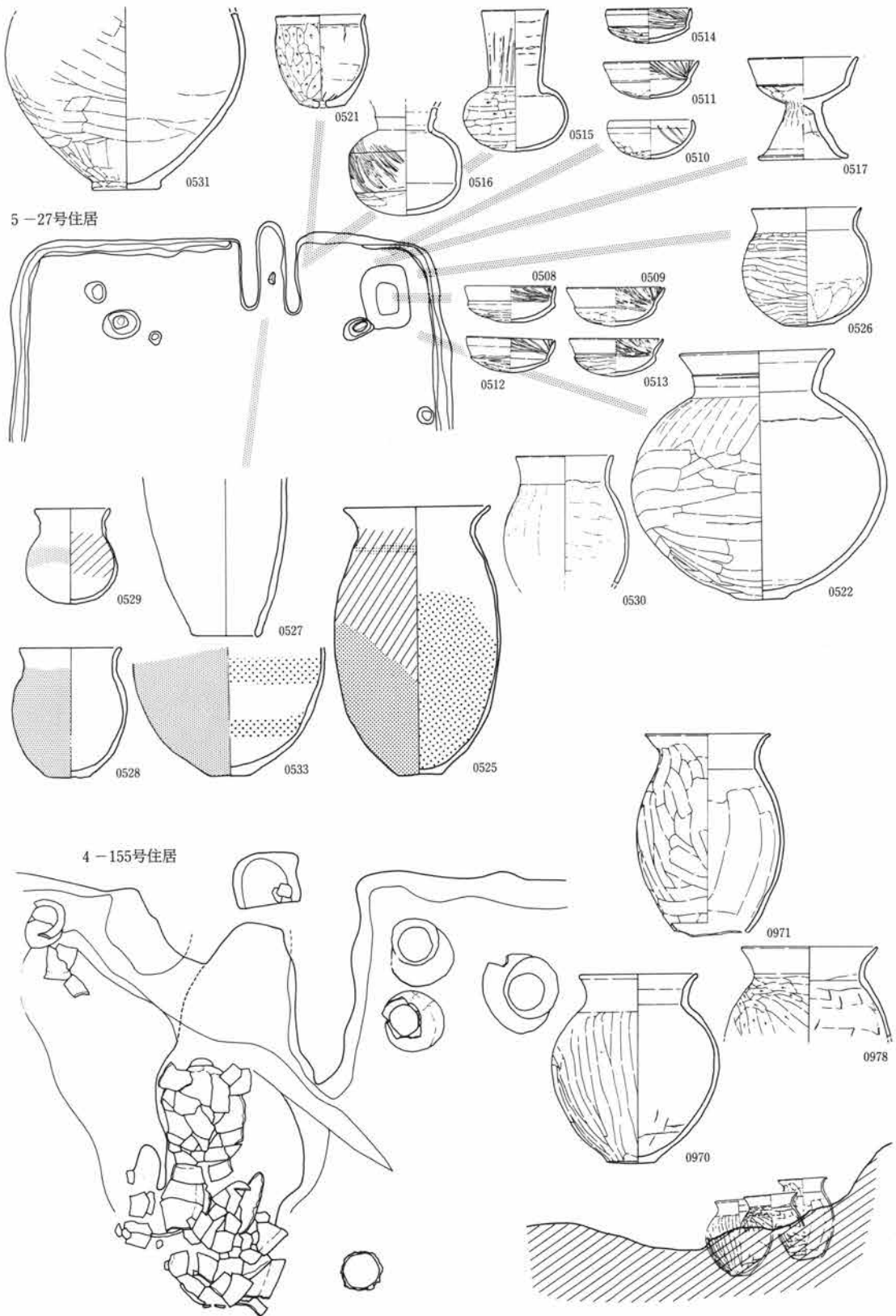
古墳時代には、土器など生活用具を多く遺している住居がしばしば認められる。住まなくなった住居に投げ込んでいる場合もあるが、使っていたままで放置したと思われる状態や意図的に配置したと推測できるような出土例もある。焼失住居でも、土器類を豊富に遺した住居ときれいに持ち出している住居がある。災害によって生活を中断しなければならなかった場合のほか、住居を廃棄する際に意図的に物を遺していった場合も想定しなければならない。これらの現象は、住居を廃棄する場合に幾つかの理由と手続きがあったことを推測させる。

16図に取り上げたものは、特にカマドまわりに集中して遺物が置き去りにされていて、日常的な台所まわりの道具配置を推測できる住居である。

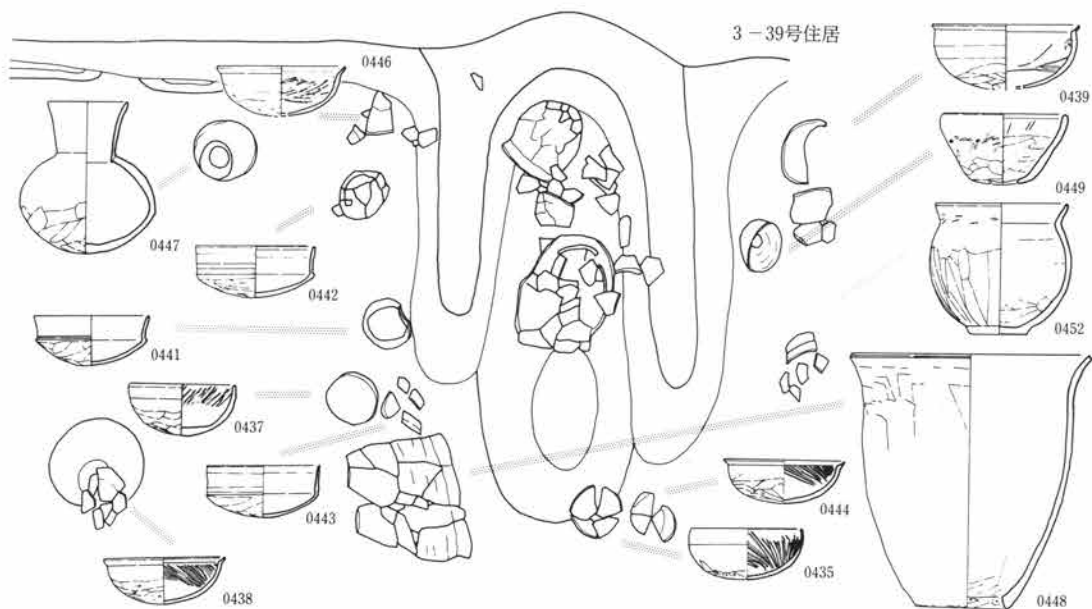
5区27号住居は焼失住居であった。カマドにはカメを懸けたままで、カマド右脇には大型壺の破片を敷き台にして壺・長頸壺・小型甔がおかれている。甔は壺のうえに乗せられていたものか。貯蔵穴の周りは杯・高杯・カメ類が置かれている。4区155号住居も、カマドにカメを懸けたまま放置された住居である。カマド右脇に壺と底を抜いたカメ2個体が埋め込まれている。手前が低く、奥が高く据えられていて、置き台として使いやすいように工夫されている。

土器を転用して置き台、敷き台にすることと、主要な土器類をカマド右側に置いていることが注目される。カマド右側には貯蔵穴が設けられており、カマドまわりと貯蔵穴を含めて、厨房空間であると考えて良いだろう。加熱施設と貯蔵穴のような施設が近接して設置されるようになるのは、カマドの出現を契機とするのではないか。とすれば、厨房空間という考えかたも、カマドの出現とともにもたらされた可能性があるだろう。今後の課題として検討したい。

17図に示した3区39号住居、4区128号住居、2区28号住居では、杯や甔がカマド前に置かれたように散在する。4区128号住居は、袖石を動かしてカマドの一部を破壊していながら、カメはほぼ元の位置に置いたままである。2区28号住居ではカマド内の土器類を取り除いて、脇に立て掛けている。日常的な台所の道具配置では説明しにくいと思われる。住居廃棄にともなう行為の結果だろうか。この問題を解決するためには、通常の住居廃棄の手順と非通常の行為を明確に分離する必要があるだろう。これも今後の検討課題である。



1節-16図 置き去りにされた土器 (1)



1節-17図 置き去りにされた土器(2)

8 おわりに

カマドと煮炊具からみた三ッ寺II遺跡の村の様子を述べて、まとめとしたい。

村のはじまり 5世紀から6世紀代のカマドは、後の時代に比べれば大きさにバラつきがあり統一性に欠けるが、構造上の試行錯誤は認められなかった。カマドをきちんと作れる人々がつくった村であるといえるだろう。土器の様相によれば、カマド出現時期から集落の開始までの時間差はそう大きくない。カマド普及の速度の方を考慮しなければならないだろう。焚口や煙道をつくることなど、どれひとつとっても新しい技術で、素早くしかも誤りなく達成するためには、大変なエネルギーを必要としたことだろう。当時の人々にとって、カマドを取り入れることがどんな意味を持っていたのか考えさせられる。カマドの出現と普及は、ほぼ同時期に認められる大型甕の出現とともに、食生活習慣やその基礎となる食糧生産の変化にうらづけられた大変革の一端を担うものであろう。三ッ寺村の出現は、その典型といえるだろう。

村の存続 カマドの形態変化は漸移的で特に急激な変化は認められない。カマド材の選定などには、地域の特徴が引き続いており、伝統の途絶はない。住居軒数などもかえって増えていて、「豪族の居館」の廃絶や、数度の火山災害によってダメージを受けた様子は見られない。村は発展し、人々は住み続けていると考えられる。

周辺には、火山噴出物に覆われて放棄せざるを得なかった田畠もある。壊滅しないまでも、地力の回復までにはかなりの年数が見込まれる。火山噴火後の気候変動も考えられ、食糧生産高は間違いなく落ちているはずである。まずその後の数年をどう過ごしたのか。どうやって食糧を確保したのか。飢饉は起きなかったのか。気になるところである。土器の使用痕跡の観察からも、煮炊きの内容が変わったために引き起こされるような変化は確認できていない。例えば、普通に炊いていたご飯から水分の多い粥に変えれば、煮炊具の使用痕跡は変わるはずである。文化の伝統という長い目でみれば、火山災害は一時的なものであるため、煮炊具の組み合わせを変えるほどではなかったにしても、食べかたの工夫はしただろう。煮炊具中心に、より詳細な観察と資料の集積を心がけたい。

厨房空間ができたこと カマドの出現から間もなく、貯蔵穴とカマドの位置関係が固定化するようで、家の立て替えやカマド移築の際に、貯蔵穴もセットで作り替えられている場合が多い。煮炊具や食器の出土位置がほぼカマドと貯蔵穴まわりに集中することから、材料や道具の置き場所と作業場所が一つの空間にまとめられたと考えられる。厨房の誕生といって良いだろう。5区27号住居のカマドまわりの土器配置は、台所の道具配置を見ているようだ。しゃがんだり、せいぜい中腰の姿勢で手の届く空間である。出土した例は聞かないが、木製の道具類も使いやすい位置に置かれていただろうと推測している。遺物と遺構のかかわりを、厨房作業をする視点で見なおすことも必要だろう。

生活用具は身近な所で調達 カマド材のありかたが隣の三ッ寺III遺跡ともすでに違っていることから、通常生活用具の調達はごく狭いエリアの中でおこなわれるのが原則なのだろう。土器などは器種によって共有するエリアが異なっており、詳細な検証から集団間の相互関係が把握できるだろう。これも資料の集積が望まれる。

ご飯の炊きかた カメの使用痕跡とカマドの様子から、三ッ寺II遺跡でもカマド出現当初から複数懸けが基本で、1個懸けに変化したのは10世紀頃からと思われる。複数のカメを同時に加熱する方式は、容量も水分も同じような状態であれば、使い易いだろう。甗で蒸す料理は最適であるが、両方とも同じものを作ったとは、今の私達の感覚からは考えにくい。小型カメは内面にコゲがついていることが多いので、違った料理を作ったと納得出来る。2個の長カメの使用痕跡はさらに検討する必要があるだろう。使用痕跡の違いが確認できれば、食生活の内容をより明らかにできるだろう。

家をもる時のこと 7項で述べたように、住居を廃棄する際に非日常的な行為が行われたようだ。理由はいまのところ解明できない。三ッ寺II遺跡ではおもに古墳時代の住居で認められた。地域差や時間の限定も含めて今後の課題である。カマド前を中心に高杯や杯・椀などが出土している様子から、カマドを含んだ空間を家のポイントとして認識していただろうとは、うなずける。しかし、これをカマド祭祀といえるかどうかは別の問題としたい。土器の使われかたについても、日常と非日常の区別を確認するのに、検討すべき課題だと考えている。

三ッ寺II遺跡は古墳時代後期を中心とする大集落であった。遺構の残りもよく、遺物も当時の人々の生活をしのばせる痕跡を遺していた。それだけに、調査した者にとっては、どのようなデータをとれば、当時の人々の生活実態に迫ることができるのかを考えるきっかけとなった遺跡であった。当報告では、カマドや煮炊具の使用痕跡の観察を通じて、不充分ではあるが器の機能やカマド使用の実際を想定できたと考えている。遺構については、調査時点でしか確認出来ないことも多く、データとして生かすきれない部分もあった。遺物についても、洗浄や復原などの段階で、本来の使用痕跡が損なわれてしまう事態もあって、調査、整理の手順を新しい視点でみなおす必要を感じている。

本文を記すにあたって、宇田川千恵氏・高田 文子氏にご協力をいただいた。文末ながら記して感謝の意としたい。

注

- 1 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『三ッ寺I遺跡』1988
- 2 志村 哲「成果と課題」『F9 薬師原遺跡』藤岡市教育委員会 1985
- 3 平地式住居のカマドには、煙り出しの施設がないそうである。石井 克巳、大塚 昌彦両氏の御教示による。
- 4 宮崎 玲子『世界の台所博物館』柏書房 1988
- 5 外山 政子「群馬県地域の土師器甗について」『研究紀要6』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 6 外山 政子「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から」『長根羽田倉遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
「矢田遺跡の平安時代のカマドと煮沸具」『矢田遺跡 平安時代編 1』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 7 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『熊野堂遺跡(2)』1991
- 8 右島 和夫氏の御教示による。
- 9 前掲、注6文献。
- 10 前掲、注5文献。
- 11 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『大原II遺跡・村主遺跡』1986
- 12 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『田端遺跡』1988

第2節 三ッ寺II遺跡の地震跡

1 はじめに 2 検出した地震跡 3 近代の地震 4 古代の地震 5 地震跡の再検討 6 まとめ

1 はじめに

本遺跡の調査で、地震跡とみられる痕跡を検出した。調査は昭和56年度に行われ、調査当時にも地震の跡であろうかという調査担当者間の話しも出ていたが、昨年に至るまで地震跡のもつ意義に余り注意を払ってこなかった。「地震跡」であることを確認する方法が思い付かなかったためである。

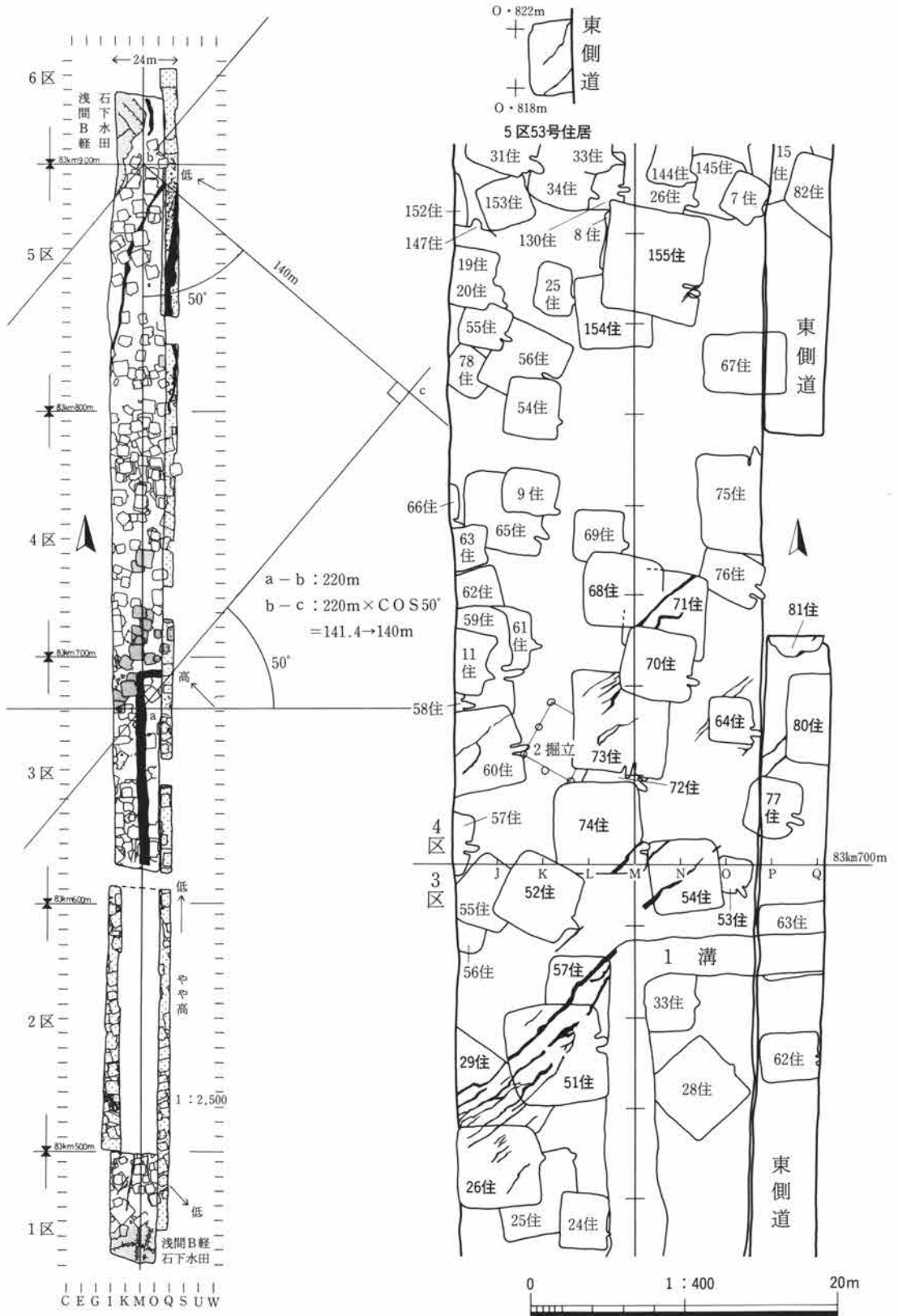
ところが、最近の調査や新聞報道などで噴砂・地割れ等の地震跡が注目され、改めて本遺跡の地割れを写真で見直してみると、それらの報告等に記述された状態に良く似ていることが解り、記録類の再検討を行った結果、地震跡であるとの確認をいただいた（注1）。ここでは、本遺跡検出の地震跡と遺構との切り合い関係から、地震跡の時期が比較的短い期間に限定できること、この地域の地割れを発生させたと考えられる活断層について検討したこと、南に接する三ッ寺I遺跡（居館跡）にも地割れが検出されていることなどを考えてみたい。なお、小考で「地割れ」としたもののなかには、地割れ内に上から土砂が落ち込む通常の地割れと、地割れ内に下から土砂が昇る噴砂を伴った地割れとがみられる。ここではとくに明瞭なものを除き、両者を区別せず「地割れ」という表現を用いた。

2 検出した地震跡

(1) 分布

本遺跡の調査区は南北484m、東西24mの上越新幹線の路線幅を占め、南端の三ッ寺I遺跡寄りから100mを一区として、2・3・4・5・6区と呼んでいる（1区は南北約45m）。地震跡は主として調査区の中央部付近の3区北寄りから4区南半で検出した（2節-1図）。1区・2区・6区では検出していない。5区では南東寄りで地震跡らしきものを検出した。3区～4区の間・5区とも地割れは北東-南西の方向が卓越し、これと方向の異なる地割れは発見していない。とくに3～4区の間で検出した地割れは、ほぼ平行な走行をもち、住居の向きとは無関係にみえる。

ところが、調査区内の地山まで掘り下げた後のエレベーションをみると、3～4区の間は4区に向かって地山が高くなる傾斜面であることが解った。すなわち、3区南端が低く、4～5区が高く、北端の6区がまた低くなっており、3～4区の間は北東-南西方向の帯状の高まり（いわば低い尾根）の南東側傾斜面に相当する。5～6区の間は同じく、北東-南西方向の「尾根」の北西側傾斜面である。4～5区のものる帯状の微高地は、幅約140mの北東-南西方向をもった尾根に復元され、調査区はこれを略南北方向に貫く幅24mのトレンチとして発掘したことになる。地割れの大半は3～4区の間、尾根の南東側傾斜面に相当する位置にあり、南東側が沈降するような状態で検出した（平行する地割れの中に最大の沈降部をもつものもある）。地割れの示す走行は尾根の走行とほぼ一致しており、表層部が傾斜方向の南東側へ向って移動したような状態である。



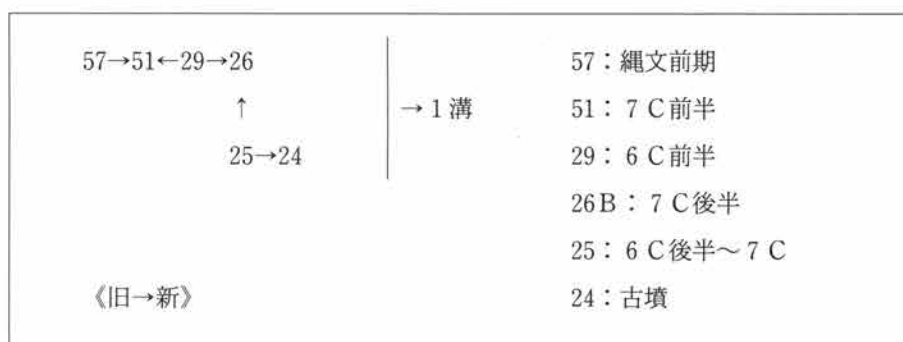
2節-1図 検出した地震跡の分布

(2) 地震跡の規模と重複関係

全体の様相を一時に示すには、調査範囲が長すぎるので、以下、ブロックごとに地震跡の状態と重複関係を、おおむね南から追ってみる。

a. 3区24・25・26・29・51・57号住居、1号溝（2節-2・3図）

3区の調査区中央を南北に貫くのが1号溝で、3区北端の83km696m付近で直角に東へ曲がり、調査区外へ抜けている。本溝は館跡に関連する溝とみられ、埋め土から内耳土器や五輪塔の空風輪が出土し、中世に属する。周辺の重複する住居はすべてこの溝によって切られており、住居→1号溝の順に新しい。26号は25・29号を切っており、24号は25号より新しい。また、51号は29・57号を切っている。これらの重複関係を番号で示すと、次の通りである。



57号・51号の地割れは顕著で、とくに51号では遺構確認面で北東-南西方向の地割れを検出し、埋土の土層断面に垂直方向の土層がみられ、床面出土の遺物が地割れの上に乗った状態で検出されている。床面は地割れに沿って短冊状のくい違いを示し、北東隅-南西隅を結ぶ対角線の帯状部がもっとも低く陥没し、北西・南東の両側に向かって階段状に高くなっている。土層断面にみられる垂直方向の層と床面段差とはほぼ一致し、本住居が埋まっていた段階で地割れが生じていることが解る。57号は51号と同様に確認面で地割れを検出し、土層断面でこれに対応する層を観察している。57号床面の地割れの水平最大幅は約30cmである。

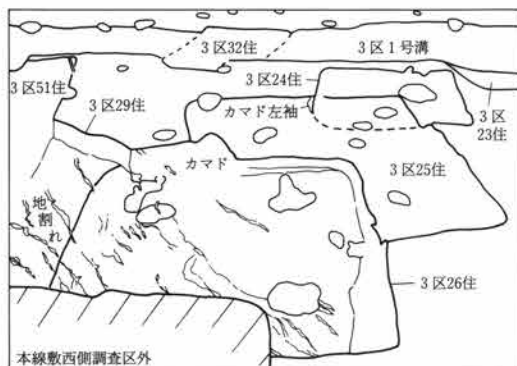
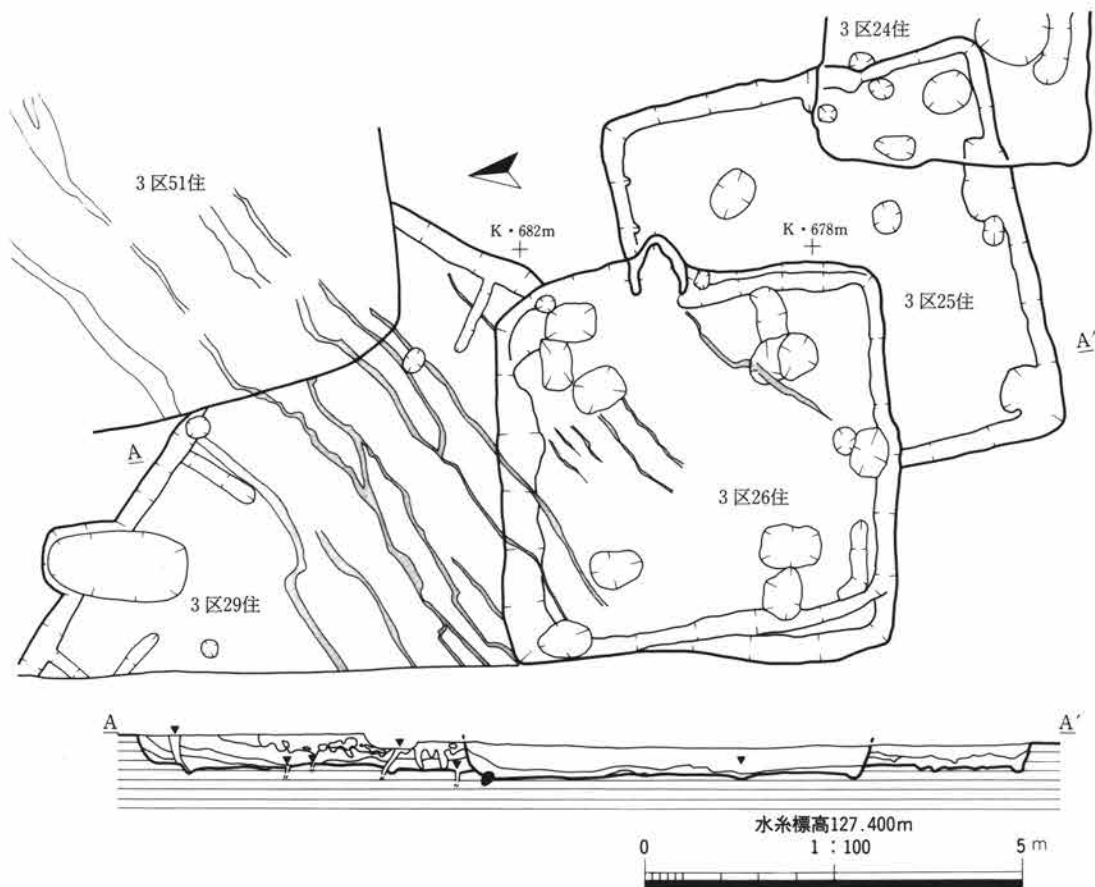
25-26-29号は南北通しの土層断面を記録している。これをみると、北側の29号は重複する51号と同じく垂直方向の土層があり、これらはそれぞれ床面に達する地割れに対応している。26号ではカマド前から南辺に向けて走る地割れに対応して、断面中位の土層が乱れている。29号から連なる北西隅の地割れは、幅約10cmにもなっている。25・24号では、明確な地割れは検出されていない。ほぼ水平な低地側に設置されたためか？

1号溝は51号の北東隅住居外の地割れを明確に切っており、地割れ→1号溝の順に新しい。

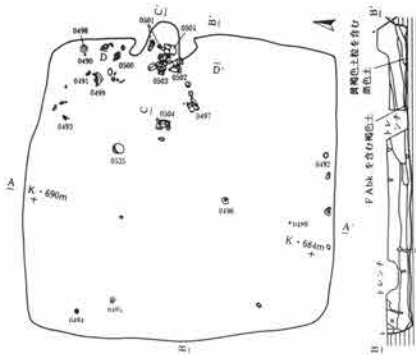
以上のことから、51号→地割れ→1号溝、26号→地割れの順に新しく、この付近を走る地割れが一時期・一連のものとするれば、7世紀後半（26号）→地割れ→中世14～15世紀（1号溝）の時期が推定される。

b. 3区52・55・56号住居（2節-4図）

52号は3区北西隅の、キロ程度83km696m西側に位置する。56号は55号に切られて全形が不明であり、遺物も少なく弥生～古墳時代に属するとみられる。55号は56号を切り、52号に切られている。これらを番号で示すと、次の通りである。



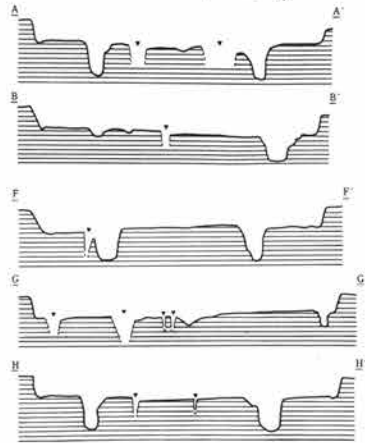
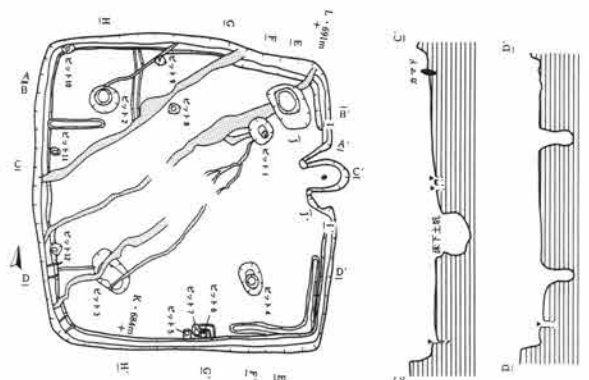
2節-2図 3区24・25・26・29号住居



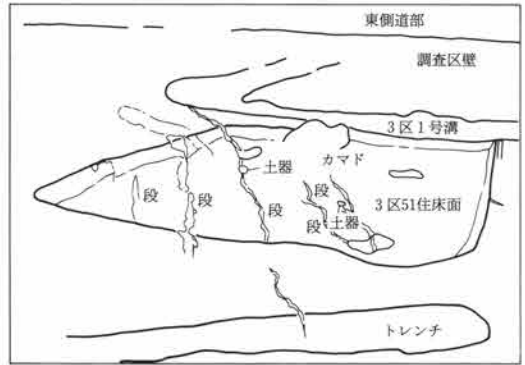
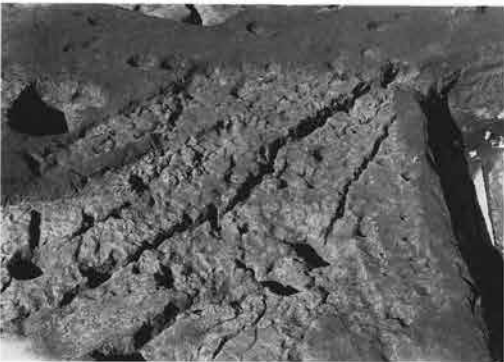
黄褐色土粒を
含む黒色土 黄褐色土粒、黄褐色土粒（ローム）を含む褐色土
トレンチ



※マイナス数字は掘きを示す



1 : 160



2節-3図 3区51・57号住居

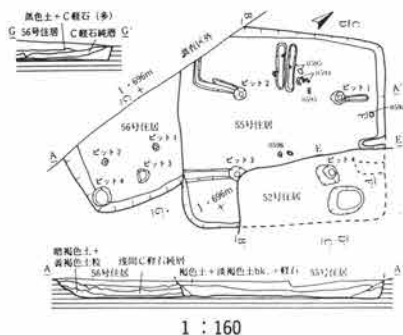
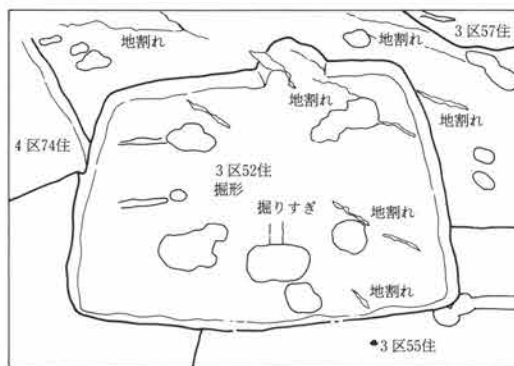
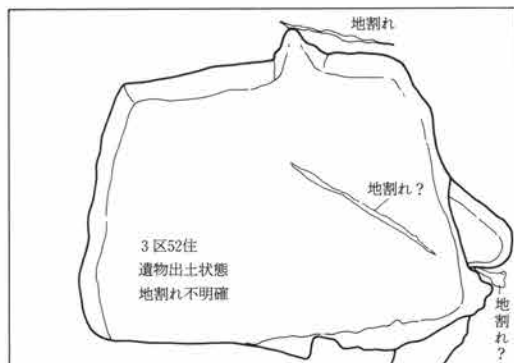
56→55→52

56：弥生～古墳？

55：6 C 後半

《旧→新》

52：6 C 後半



2節-4図 3区52・55・56号住居

52号の遺物出土状態写真をみると、カマド煙道部南東住居外の遺構検出面に地割れがみられ、床面および南西隅住居外の地変の痕跡は明確ではない。しかし、掘形レベルの写真では、地割れ痕跡とみられる地山の亀裂が南辺西寄りと、貯蔵穴～カマドの南隅に認められる。床面で地割れが認められず、掘形で不明確ながら地割れを検出していることから、床面形成以前（住居構築時）に地割れが生じ、これを出来る限り取り除いたことが考えられ、

地割れ→6世紀後半（52号住居）

の順に新しいと推定できる。ただし、傾斜面から5～6m離れ、尾根の上に乗っているために表層部の移動が少なく、地割れも顕著ではなかったことも考えられる。

c. 3区53・54号住居、4区74号住居（2節-5・6図）

3区54号は3区北端のキロ程83km700mライン上にあり、54号の北西隅と4区74号の南東部が重複する。53号は54号を切って造られている。これらを番号で示すと、次の通りである。

4-74←54→53	
	53：6 C前半
	54：6 C前半
《旧→新》	4-74：7 C前半

54号と74号とは、74号のカマドが54号の北西隅で検出されていることから明らかである。54号では遺構確認面で南西-北東に走る地割れを検出している。これは埋土の断面でも垂直方向の層が観察されているため、埋没状態で地割れが生じたことが解る。74号はカマド左袖を北東-南西に走る地割れが住居外に延び、これを境として住居の南東隅が陥没していた。床面での落差は10～17cmである。両者を掘形まで掘り下げると、74号ではカマド下から幅30～40cmの地割れが検出された。74号のカマドが地割れ中に陥没せず、遺存していたのが不思議なくらいである。これらの前後関係は、

①74号カマド→地割れ→遺存

②地割れ→カマド構築→下層の影響で陥没

③カマド使用中→地割れ→カマド修復

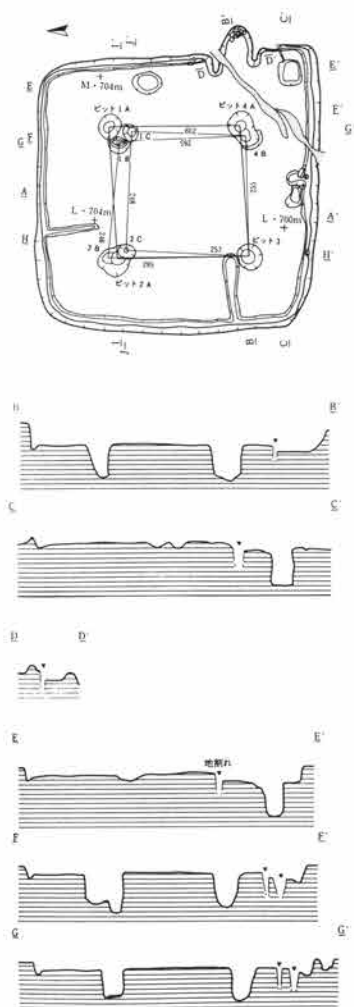
が考えられるが、最も可能性が高い①をとれば、

7世紀前半（74号）→地割れ

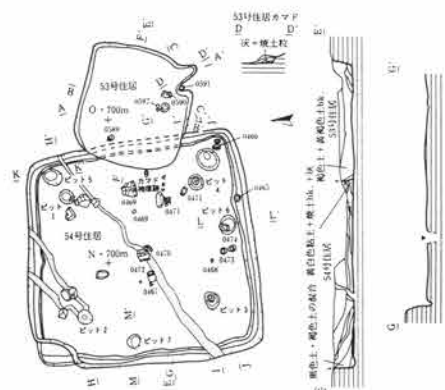
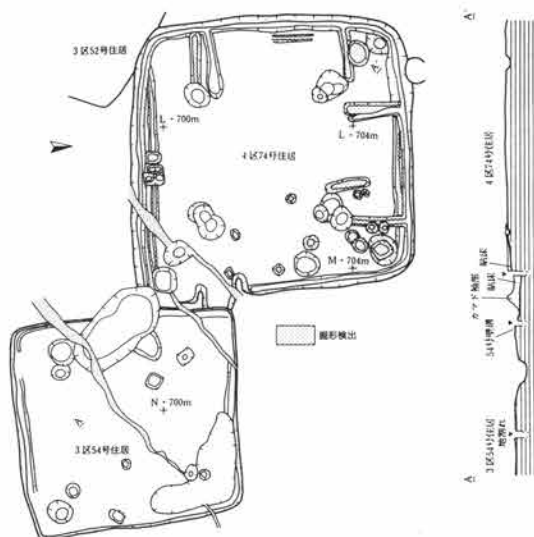
の順に新しいと考えられる。

d. 4区64・77・80・81号住居（2節-7図）

64号は4区南東部で検出した重複のない単独住居である。南東および北西住居外の遺構確認面には、白色の細い線がみられ、地震跡と推定されるのに対し、床面レベル・掘形レベルでも地割れが検出さ

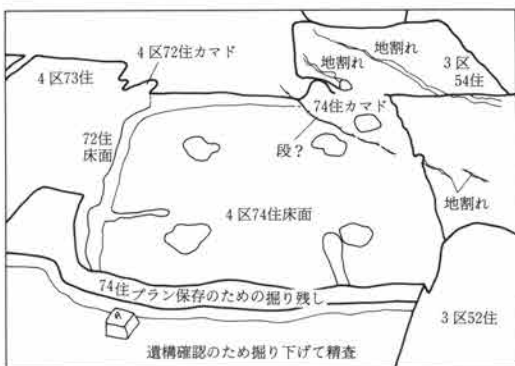
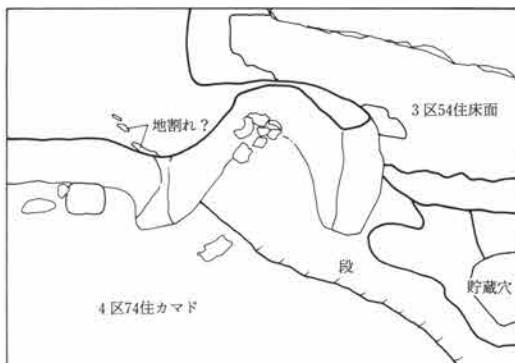


1 : 160

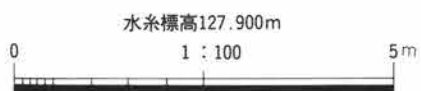
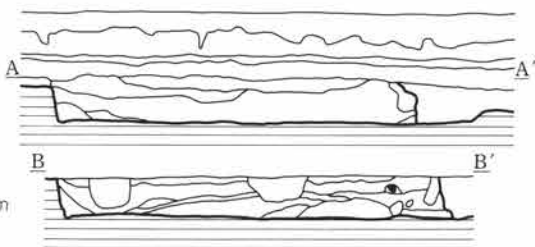
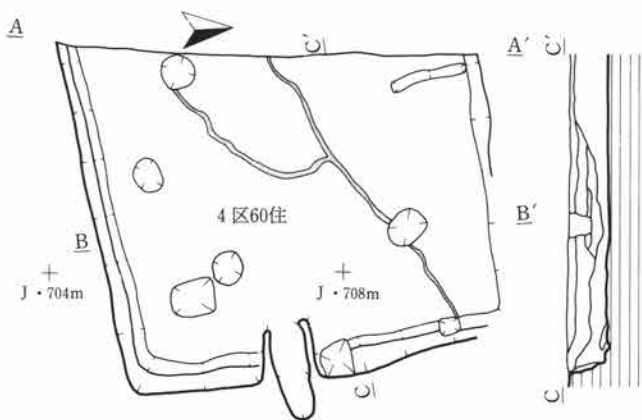
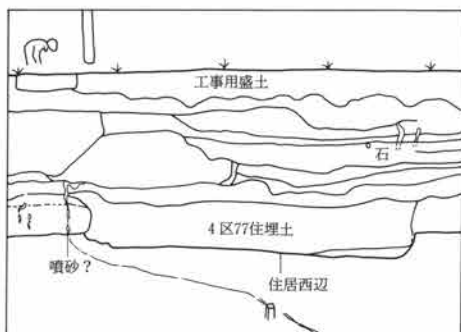


2節-5図 3区53・54, 4区74号住居(1)

第2節 三ッ寺II遺跡の地震跡



2節-6図 3区53・54, 4区74号住居(2)



2節-7図 4区77・60号住居

れていない(写真図版247)。地割れが明確ではないため、積極的な根拠に欠けるが、本住居は地割れ後に構築された可能性がある。時期は古墳時代に含まれるが、遺物量が少なく、限定幅が広い。

77号も4区南東部で検出した住居で、2回に分けて調査されている。西側の第一次調査時の土層断面をみると、住居掘り込みの左手(北側)に、垂直に立ち上がって右側へ流れている灰色層をみる(この土層断面は観察用に削った新鮮な壁面であり、水分などの上方からの流れではない)。この垂直の層は、77号を埋めている土層を貫通しており、もしこれが「噴砂」ならば、本住居埋没後に噴砂が発生して地表に広がったと考えられる。本住居の時期は6世紀後半とみられる。

80号は東側道調査(第二次調査)で検出した住居で、単独・半掘である。その西側から撮影した掘形の写真をみると(写真図版262上)、右下の遺構検出面には白色の地割れが写っているのに対し、推定延長線上の住居土層断面には、その痕跡もみられない。地割れ内の砂が噴砂であった場合、たまたま地表へ達しなかったことも充分あり得るが、周囲の検出面(64・77・81号周辺)には明らかに地割れの痕跡があることをみれば、本住居は地割れ以後に営まれた可能性の方が高い。ただし、本住居の時期は古墳時代に限定できるのみで、所属時期の幅は広い。

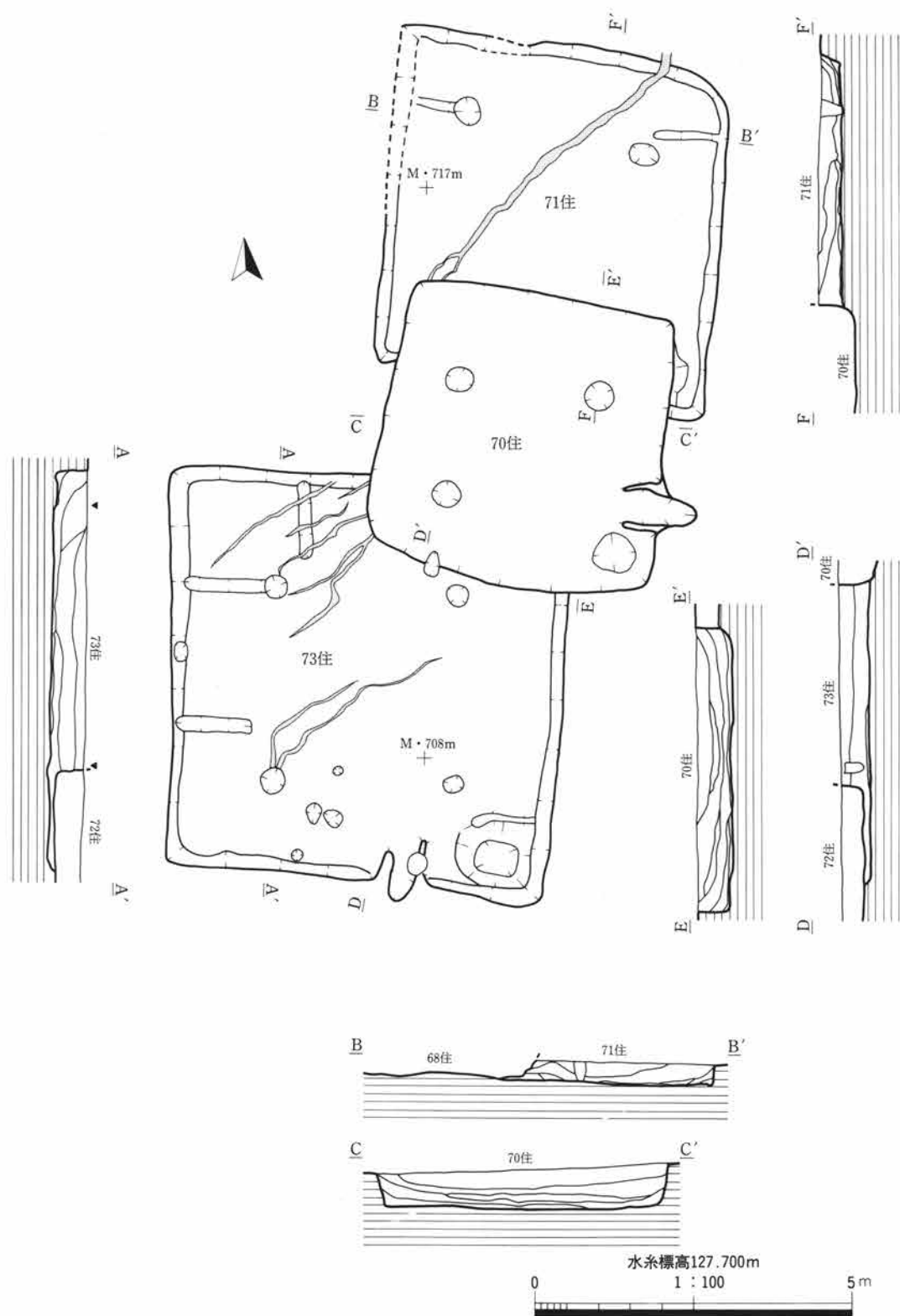
81号は80号の北側で確認しており、南辺と貯蔵穴を検出したにとどまる。東西方向の土層断面をみると(写真図版262下)、東側の住居立ち上がり線の内側に、垂直方向の白色線がみられ、この白色線は床面貯蔵穴の北東部につながり(資料編2, 444頁)、さらに南辺の遺構確認面張出部東側に連なっている(写真図版263上)。この白色線が、もしも噴砂だとすれば、住居掘形を割り、埋土を貫いて立ち昇っていることから、噴砂の発生は住居よりも新しいと推定できる。本住居の時期は6世紀後半とみられる。

これらの4軒の住居と白色線(噴砂?)との関係を番号で示すと、次の通りである。

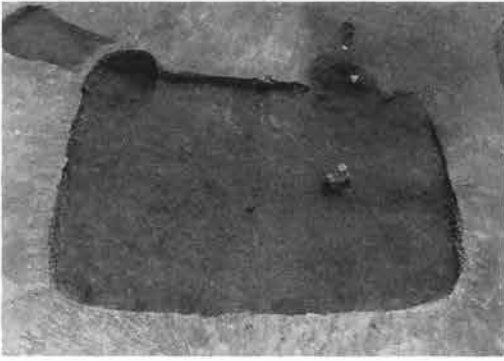
- 白色線→古墳時代(64号) ?
- 6C後半(77号)→灰色土層 ?
- 白色線→古墳時代(80号) ?
- 6C後半(81号)→白色線 ?

e. 4区60号住居(2節-7図)

本住居は4区の南西部に位置し、後述の68・70~73号住居の西側に相当する。北東隅支柱穴を通り、重複する59号と共通の土層断面をみると、床面から丸く盛り上がる状態の層の直下に地割れが生じていることになる。床面近くではわずかの段差を生じているが、顕著な垂直方向の層はみられない。掘り広げた床面では、住居中央部に地割れが検出されている。地割れの幅は約10cm未満で浅く、床面の大きな落差は認められない。地割れと住居との前後関係は判然としないが、掘形写真でみると、明らかに掘形にも地割れが認められ、60号→地割れの順に新しいと考えられる。



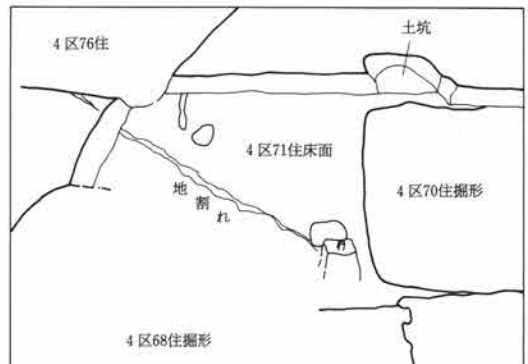
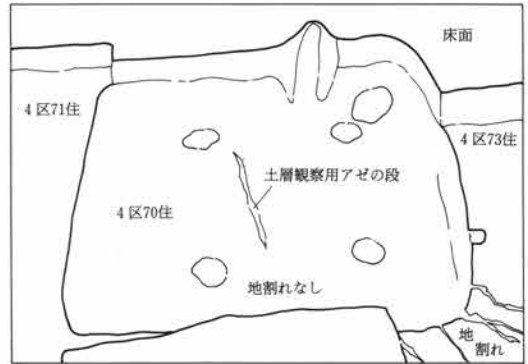
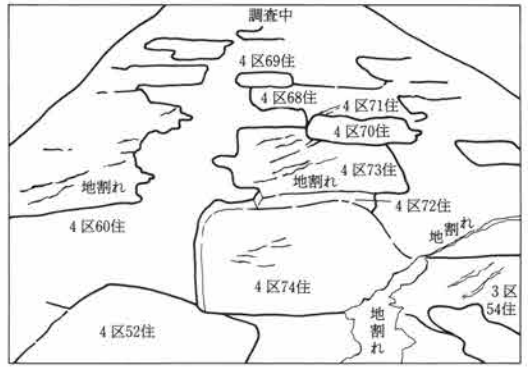
2節-8図 4区70・71・73住居



▲ 4区10号住居



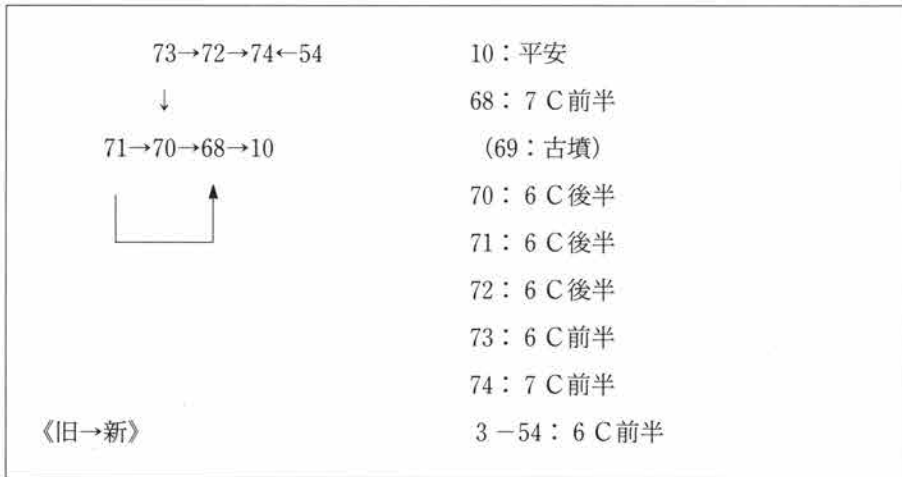
▲ 4区68号住居



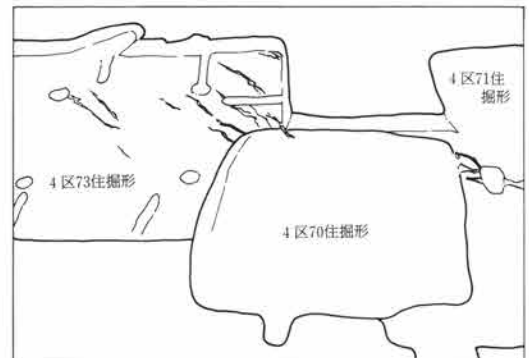
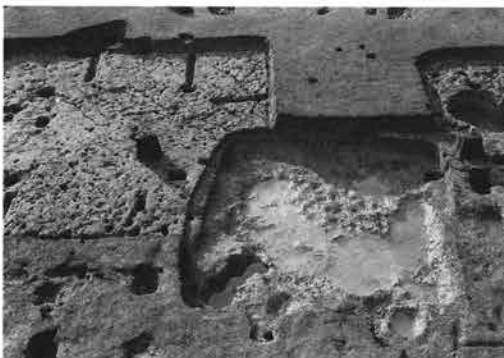
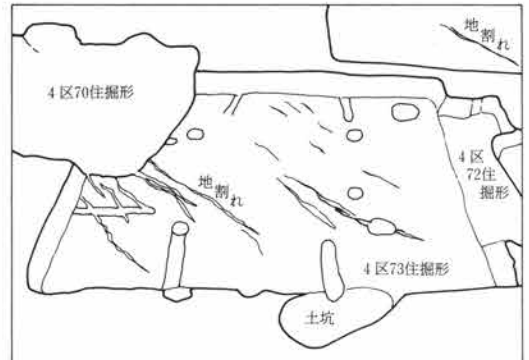
2節-9図 4区10・68・70・71・73号住居

f. 4区10・68・70・71・72・73・74号住居（2節-8・9・10図）

調査区Mラインを中心とする3区54号から、北へ向かって4区69号まで重複する住居群で、4区の南端中央部に位置する。これらの前後関係を番号で示すと、次の通りである。



10号は68・70・71号の上位で検出した住居で、出土遺物から平安時代と考えられる。遺構確認面・床面・掘形の各レベルでは地割れが認められず、直下の住居では地割れを検出しているため、本住居は地割れ発生後に営まれたとみられる。



2節-10図 4区70・73号住居

68号は71号の西半に重複し、68号の方が新しい。68号のカマド付近には、東側の71号床面で検出している地割れが走っているが、地割れの延長線はちょうどカマドの下に相当するにもかかわらず、カマドは何等の影響も受けていない。また、カマド前の床面には、他の住居で見られる地割れが認められない。71号床面の地割れは最大幅約18cm、落差は南西部で7cmである。68号と71号との共通土層断面をみると、71号内では地割れに相当する位置で垂直方向の層が観察でき、71-70号共通断面でも対応する位置に垂直方向の層がある。したがって、

A : 6 C 後半 (71号) → 地割れ → 7 C 前半 (68号)

の順に新しい。

73号は72・70号と重複し、両者に切られている。73号は最大幅8cmの地割れが北東-南西の方向に平行してで10本以上走り、床面・掘形でも地割れが明瞭である。

これに対し、71・73号の両者より後出の70号は、南北の73・71号からの地割れの延長線上に地割れが全くみられず、床面・掘形のいずれも南北からの地割れ線がブツツリと途切れている。これは70号が明らかに地割れを切って掘り込まれたことを示している。すなわち、70号は地割れ以後に構築された住居であり、地割れは

B : 6 C 前半 (73号) → 地割れ → 6 C 後半 (70号)

C : 6 C 後半 (71号) → 地割れ → 6 C 後半 (70号)

の時期に生じたことが推定できる。

以上のことから、重複による遺物の混乱および前後関係の判定に誤りがないとすれば、筆者の土器分類と編年観に破綻が生じるが、それを差し引いても、6世紀代に地割れが起きる程の激しい振動があったことは確かであろう。

g. 4区8・154・155号住居 (2節-11図)

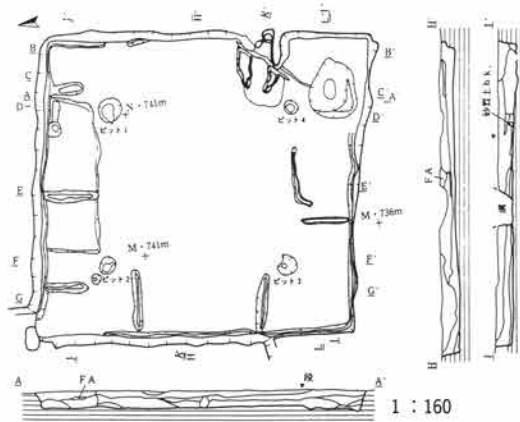
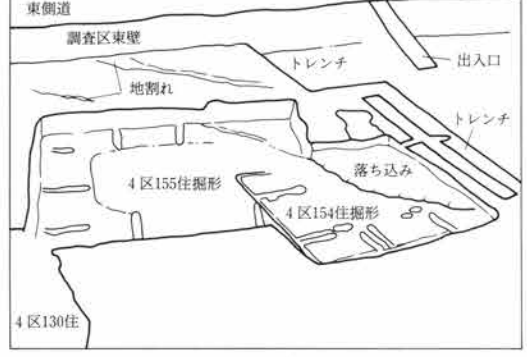
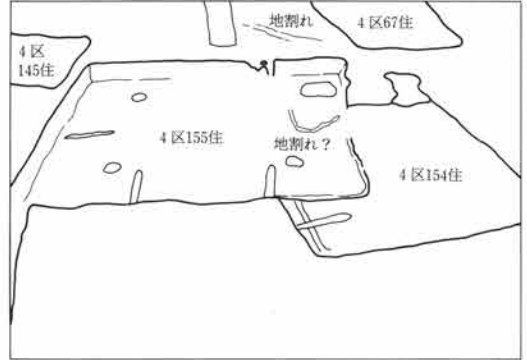
これらの3軒は4区中央部に位置し、8号は確認面中位で、154・155号は下位で検出した。8号の時期は出土遺物から平安時代の11世紀とみられ、154・155号は古墳時代に所属する。これらの関係を番号で示すと、次の通りである。

154→155→8	8 : 11 C
	154 : 5 C (後半～) 末
《旧→新》	155 : 6 C 前半

8号の遺構確認面では地割れを検出していない。また、床面・掘形レベルでも同様である。従って、8号が掘り込まれた頃には、地割れはすでに埋没していたと推定される。

地割れ→11世紀 (8号)

154号は155号と同じ確認面で重複し、155号の掘形調査で154号の北東隅を検出していることから、154→155の順に新しいと認められた。155号ではカマド調査に取り掛かった時点で、カマド両袖部が



2節-11図 4区154・155号住居

直線的に切断されていることを確認している。カマド焚口付近から床面を追求すると、カマド煙道部を含む南東側（貯蔵穴も含む）が、相対的に沈降していることが判明した。地割れの最大幅はカマド袖上端で約20cm、カマド右袖床面で幅約10cm、床面の落差は10cmほどである。南東部を通る土層断面をみると、埋土の略中位に、斜めに落ち込む線が記録されており、この斜め線は住居床面の段差に対応する。

154号の南東隅を含む略三角形の範囲（南辺西寄りまで）は、同住居の他の床面が堅く締まっているのに対して軟弱であり、かつ南東へ向かって傾き低くなる。さらに掘形調査では、この略三角形の範囲の底面（カマド下も含む）が、住居中央部以西に比べて著しい凹凸状態となり、くぼんだようになっていた。この凹んだ部分と北西側底面との境界線を北東に追ってみると、その延長線上に155号のカマド地割れが位置する。すなわち、このくぼみは地山の陥没によってグズグズに地山が破壊されて変形したもので、調査中はそれを認識できず、軟弱なことから（硬い地山に突き当たらなかったために）、掘り下げてしまったものである。地割れは155号カマドからさらに北東側へ延びて行くとみられる。

以上のことから、これらの3軒で地割れ発生の時期を最も狭く限定すると、

6世紀前半（155号）→地割れ→11世紀（8号）

とすることができる。

h. 5区53・65号住居

53号は5区の南半東寄りに位置し、東半部は二次調査で確認されなかった。これに切られている65号は、53号検出の地割れの延長線上に床面の乱れが認められる。重複関係を番号で示すと、次の通りである。

65→53	53：6 C後半
《旧→新》	65：5 C（後半～）末

53号の地割れは、住居検出範囲内の北東隅から南西に走るものと、これにほぼ平行し約1.5m南東側に離れたものとの2本が認められた。両者の中間の床面は南北の側の床面よりも2～3cm低くなっており、さらに南西隅の床面は軟弱であった（資料編2，628頁）。

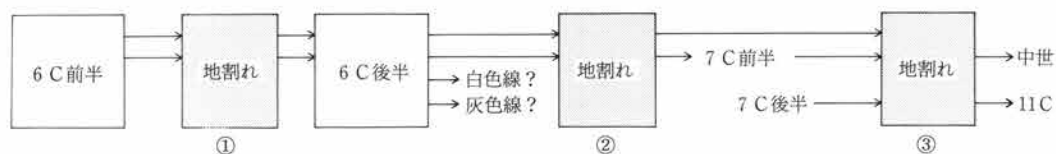
65号の北隅－南隅を結ぶ線の西側では、床面の細かい凹凸が検出されていることや、東隅の貯蔵穴東側を通る土層断面では、落差10cmほどの段が記録されていることなどから、65号は埋没して未固結の状態で地振動を受けたと考えられる（資料編2，650頁，写真図版394）。

以上のことから、

6世紀後半（53号）→地割れ

の順に新しいと推定される。

これまでの個別遺構と地割れとの前後関係と時期とをまとめると、次のようになる（2節-12図）。

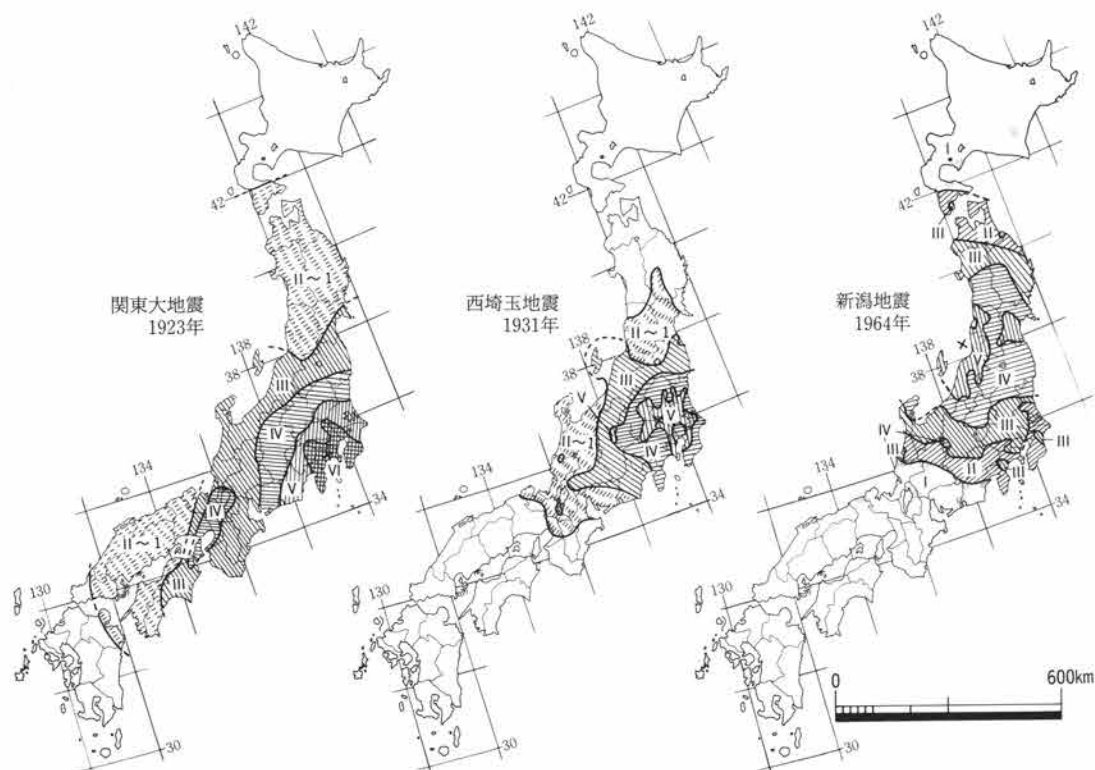


2節-12図 遺構と地震跡の前後関係

3 近代の地震

日本における地震研究は、他の自然科学と同様に、明治政府によって招かれた外国人教師によって始められている。最初の観測は明治5年（1872）に行われ、明治8年（1875）東京気象台創立、明治13年（1880）日本地震学会結成、明治25年（1892）震災予防調査会設立と発展した。さらに大正14年（1925）東京大学に地震研究所が置かれた。いずれも大地震による大きな被害などが契機となって進展していることは、類書にくわしい（注2）。

前橋地方気象台（前橋測候所）は明治29年（1896）に開設され、翌明治30年（1897）1月1日から観測が始められ、以来94年後の今日まで科学的観測が続けられている（注3）。この気象台で震度V以上が記録されたのは、



2節-13図 関東地方の近代地震

1898IX 5	名称なし	震央不明	M不明	-, -
1931IX 21	西埼玉地震	36.2°N, 139.2°E	M6.9 (7.0)	$r_5=44.7$ [50], $r_6=15.1$ [20]
1923IX 1	関東大地震	35.1°N, 139.5°E	M7.9	$r_5=125.9$ [130], $r_6=61.9$ [60]
1964VII 16	新潟地震	38.4°N, 139.2°E	M7.5	$r_5=79.4$ [80], $r_6=33.1$ [30]

の2個がある(注4)。

これらの地震の震度分布は2節-13図の通りで(注5)、県央部が気象庁震度階級でVI(烈震)の揺れを記録したことはない(注6)。

西埼玉地震に関して入手できた資料として、昭和6年(1931)9月22日付(地震の翌日報道)の『上毛新聞』があり、「……佐波郡、多野郡、北甘楽郡方面が最も被害激甚を極め……」と伝え、前橋測候所の発表を次のように掲載した(注7、以下、なるべく当用漢字で表記)。

「地震発表

- 一、発震 午前11時19分57秒8
- 一、初期微動継続時間 5秒5
- 一、震央距離 40杆8(約10里)
- 一、総震動時間 約1時間
- 一、震度 強震 上下動著し
- 一、余震 頻発中

このほか、新聞の見出しを拾ってみると、次のようなものがある。

「煙突の倒壊で一名即死す 煙突折損、工場倒壊等は無数 激甚な藤岡町の被害」

「桐中の石垣崩壊」

「新築家屋が滅茶々に倒潰 佐波郡上陽村の被害」

「煙突倒壊等多数 重軽傷者十一名 高崎の被害は激甚」

「八高線鉄橋破壊 碓氷隧道も復旧せず」

「高崎南部は亀裂多数」

「埼玉県下は一死傷者多数 倒潰家屋、続々と判明」

「安中町は 瓦屋根全部破壊」

「県下一帯に激震襲う」

以上 9月22日付

「震災被害額34万4788円」

「埼玉県の死者11名にのぼる」

「震央を行く 坂東大橋々詰の大亀裂に膽をヒヤリ

深谷地方の震害最も惨憺 附近は阿鼻叫喚」

☆「土蔵倒壊等 群馬郡下も相当被害」

「算を乱した書籍 前橋図書館員書庫を明けて吃驚 きのふの大激震余聞」

「黒滝山不動寺の庫裏倒潰」

以上 9月23日付



2節-14図 西埼玉地震における井水混濁区域・土砂噴出区域(下)

「地震と同時に尾島の井戸湧水」 9月24日付

「地震と同時に 井戸に土砂噴出 尾島世良田附近は水飢饉同様」 9月29日付

各地の被害状況のうち、☆印を付した部分を、以下詳細に記す。

☆「群馬郡下の被害は左の通りで5名の負傷者を出した

△長野村倒壊家屋4戸、亀裂二ヶ所

△中#村#の剝落数ヶ所（#判読不能、以下同じ）

△岩鼻村家屋破壊6戸、工場破壊1、道路亀裂2ヶ所、物置破壊5、戸、橋梁破壊1、同村大字岩鼻81#物商吉村博（八ツ）は##倒壊の破片で一週間の裂傷

△倉賀野町神社損傷1、家屋2物置1、土蔵3、同町醤油職工小川美代#（41）は屋根瓦で肩に2週間の打撲傷

△滝川村大字西横手小林英市方外13戸の土蔵の壁剝落同村大字下斎田田口マツ（53）は打倒れて左足捻挫の重症

▲堤ヶ岡村民家の被害数戸

△佐野村大字下佐野松田竹三郎方土蔵倒壊外物置等の倒潰6戸同村下の#弥次郎妻タツ（76）は屋根瓦で#額部に裂傷

△京ヶ島土蔵倒潰1戸

△新高尾土蔵1戸

▲金古町諏訪神社鳥居倒壊」

やや長い引用になってしまったが、群馬県内では南部に被害が大きく、報道表現の派手さに比較して高崎一前橋付近の被害は少ないようである。三ッ寺II遺跡の所在する群馬町には▲印とした堤ヶ岡村および金古町があげられている。大きな被害は高崎南部から新町・藤岡にかけて多く、また東毛の利根川沿いの尾島町での「噴砂」現象が目立つ。埼玉県内ではこの地震のとき、中部・北部の荒川・利根川沿いの沖積地に被害が多かったという。また、土砂噴出区域の図（注8）をみると、利根川右岸の妻沼低地で一面に噴出しており、対岸の群馬県尾島町での噴砂現象と符合する（2節-14図）。

関東大地震（関東大震災）での県下の震度はIV～V、新潟地震はIII～IVである。蛇足ながら、新潟地震は筆者も小学生の頃高崎市内で体験したが、まっすぐ立っていられず、床に手をついてしまったことを覚えている。

近代の科学的観測が県下で始まってから90年以上になるが、以上の4個の地震のなかでは1931年の西埼玉地震の震央が最も近い。関東大地震の被害は死者0、傷者4、家屋全潰107・半潰170である。これに対して、西埼玉地震では死者5、傷者30、住家全潰13・半潰1、煙突倒壊48を数え、利根川流域、高崎・藤岡・佐波郡に被害が多かったという（注9）。

しかし、これらの地震の記録で考えると、三ッ寺II遺跡の地割れを発生させた可能性は低いとみられる。現在使用されている気象庁震度階級では、地割れを発生するほどの地震の揺れは震度V（強震）以上、通常震度VI（烈震）以上とされている。住居跡その他の重複関係からみた地割れの時期は5世

紀〜11世紀とみられ、近代の科学的観測が始まって以来の震度はIV〜Vであるので、近代の地震による地震跡を誤認した可能性はないと思われる。

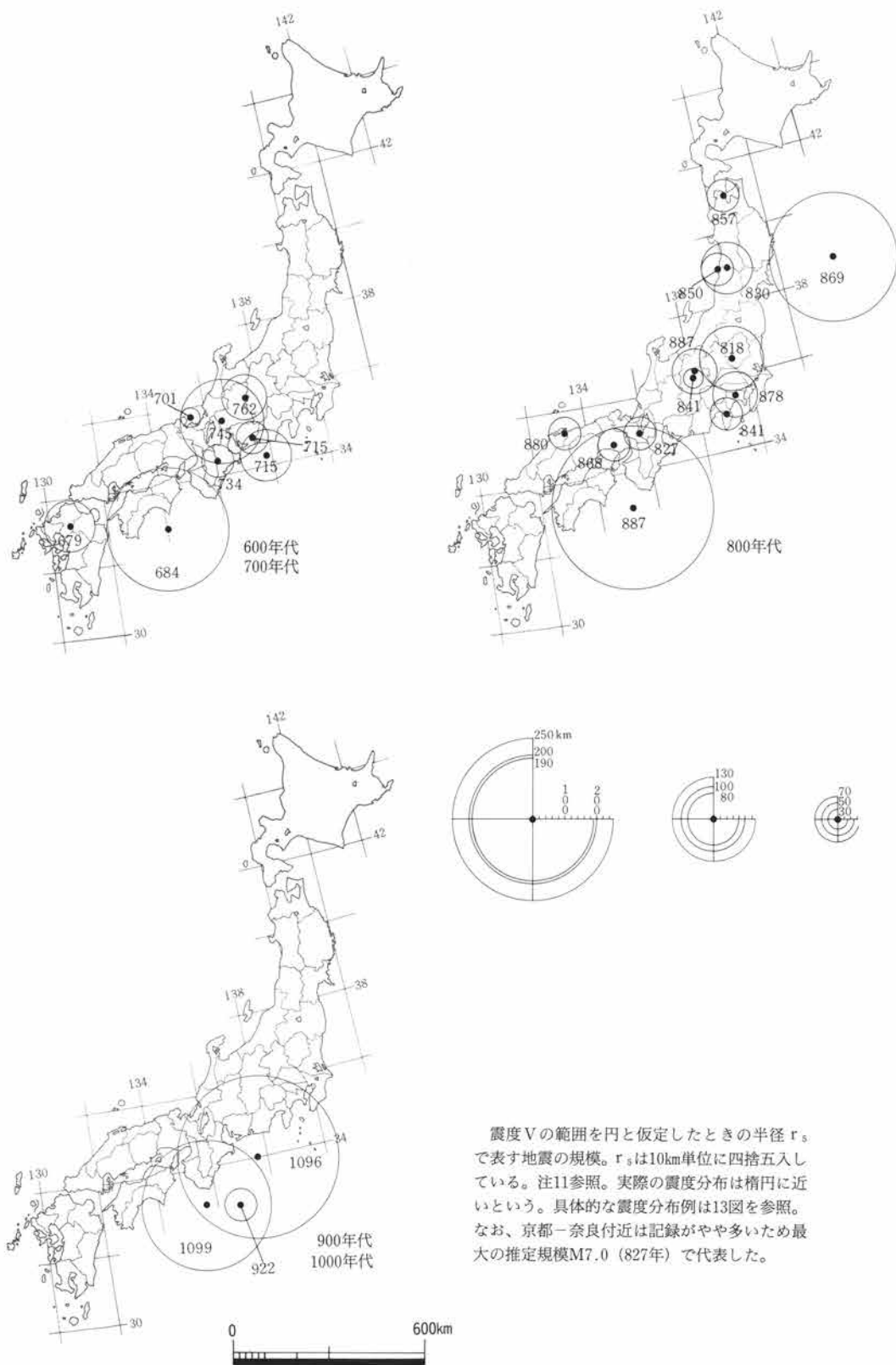
4 古代の地震

明治24年(1891)10月28日の濃尾地震を契機として、翌明治25年に震災予防調査会が発足し、地震に関する史料が集められ始めた。その成果はすでに明治時代に刊行されているが、実見できなかったため、『理科年表』・宇佐美龍夫(1978,1987)を参照する(注10)。

表2節-1 古代の地震一覧(5世紀〜11世紀)

* r_s , r_g =震度V, VI以上の地域(円と仮定)の半径, []内は10km単位に四捨五入したときの数値, ●印は地図にプロットした地震

番号	西暦(和暦)	北緯	東経	M	主な被害地域	* r_s (km)	* r_g (km)	備考
1	416VII23(允恭5VII14)	—	—	—	大和	—	—	最初の地震記録
2	599V28(推古7IV27)	—	—	7	大和	—	—	最初の被害記述
3	● 679—(天武7甲—)	33°~33.5′	130.5°~131°	6.5~7.5	筑紫	79 [80]	33 [30]	
4	● 684XI29(天武13X14)	32.5°~33.5′	133.5°~135.0	8.5	南海・東海他	188 [190]	107 [110]	
5	● 701V12(大宝1III26)	—	—	6.5±	丹後	25 [30]	7 [10]	『古地震』
6	● 715VII4(靈龜1V25)	35.1	137.8	6.5~7.5	遠江	79 [80]	33 [30]	
7	● 715VII5(靈龜1V26)	34.8	137.4	6.5~7.0	三河	45 [50]	15 [20]	
8	● 734V18(天平6IV7)	34.3	136.1	7.0	畿内・七道諸国	45 [50]	15 [20]	震央は『大地震』による
9	744VI30(天平16V12)	—	—	≒ (7.0)	肥後	—	—	豪雨による洪水か
10	● 745VI5(天平17IV27)	35.4	136.5	≒7.9	美濃	126 [130]	62 [60]	M7.9で計算
11	● 762VI9(天平宝字6V9)	35.5~36.5	137.0~138.0	7.0以上	美濃・飛騨・信濃	71 [70]	28 [30]	『大地震』M7.4で計算
12	● 818—(弘仁9VII—)	36.0~37.0	139.0~140.0	7.5以上	関東諸国	100 [100]	45 [50]	『古地震』M7.7で計算
13	● 827VIII11(天長4VIII12)	35.0	135.5	6.5~7.0	京都	45 [50]	15 [20]	
14	● 830II3(天長7I3)	39.8	140.1	7.0~7.5	出羽	79 [80]	33 [30]	
15	● 841—(承和8—)	36.2	138.0	6.5以上	信濃	25 [30]	7 [10]	
16	● 841—(承和8—)	35.1	138.9	≒7.0	伊豆	45 [50]	15 [20]	『古地震』
17	● 850—(嘉祥3—)	39.0	139.7	≒7.0	出羽	45 [50]	15 [20]	M7.0で計算
18	856—(斉衡3III—)	—	—	6.0~6.5	京都	25 [30]	7 [10]	M6.5で計算
19	● 857IV4(天安1III3)	40.3	140.6	7.0	出羽	45 [50]	15 [20]	震央Mは『大地震』による
20	863VIII10(貞観5VIII7)	—	—	—	越中・越後	—	—	『大地震』M7.0以上
21	● 868VIII3(貞観10VIII8)	34.8	134.8	7.0以上	播磨・山城	45 [50]	15 [20]	M7.0で計算
22	● 869VIII13(貞観11V26)	37.5~39.5	143~145	8.3±	三陸沿岸	200 [200]	116 [120]	M8.3で計算
23	● 878XI1(元慶2IX29)	35.5	139.3	7.4	関東諸国・相模・武蔵	71 [70]	28 [30]	『古地震』
24	● 880XI23(元慶4X14)	35.4	133.2	≒7.0	出雲	45 [50]	15 [20]	M7.0で計算
25	881I13(元慶4甲6)	—	—	6.4	京都	22 [20]	6 [10]	
26	887VII2(仁和3VII6)	37.5	138.1	6.5	越後	25 [30]	7 [10]	震央Mは『大地震』による
27	● 887VIII26(仁和3VIII30)	33.0	135.0	8.0~8.5	五畿七道	251 [250]	158 [160]	M8.5で計算
28	● 887VIII26(仁和3VIII30)	36.6	138.1	7.4	信濃北部	71 [70]	28 [30]	震央Mは『大地震』による
29	890VIII10(寛平2VIII6)	—	—	≒6.0	京都	14 [10]	3 [5]	M6.0で計算
30	● 922—(延喜22—)	33.8	136.7	7.0	紀伊	45 [50]	15 [20]	震央Mは『大地震』による
31	934VIII16(承平4V27)	—	—	≒6.0	京都	14 [10]	3 [5]	M6.0で計算
32	938V22(天慶1IV15)	35.0	135.8	≒7.0	京都・紀伊	45 [50]	15 [20]	M7.0で計算
33	976VIII22(貞元1VIII18)	34.9	135.8	6.7以上	山城・近江	32 [30]	9 [10]	M6.7で計算
34	1038—(長暦1甲—)	34.3	135.6	6.7	紀伊	32 [30]	10 [10]	Mは『大地震』による
35	1041VIII25(長久2甲22)	—	—	6.4	京都	22 [20]	6 [10]	Mは『大地震』による
36	1070甲1(延久2X20)	34.8	135.8	6.0~6.5	山城・大和	25 [30]	7 [10]	
37	1091IX28(寛治5VIII7)	34.7	135.8	6.2~6.5	山城・大和	25 [30]	7 [10]	M6.5で計算
38	1093III19(寛治7II14)	—	—	6.0~6.3	京都	20 [20]	5 [10]	M6.3で計算
39	● 1096甲17(永長1XI24)	33.75~34.25	137~138	8.0~8.5	畿内・東海道	251 [250]	159 [160]	M8.5で計算
40	● 1099II22(康和1I24)	32.5~33.5	135~136	8.0~8.3	南海道・畿内	200 [200]	116 [120]	M8.3で計算
41	1099IX20(康和1VIII27)	—	—	6.4	河内	—	—	Mは『大地震』による
42	1177XI26(治承1X27)	34.7	135.8	6.0~6.5	大和	25 [30]	7 [10]	



震度Vの範囲を円と仮定したときの半径 r_s で表す地震の規模。 r_s は10km単位に四捨五入している。注11参照。実際の震度分布は楕円に近いという。具体的な震度分布例は13図を参照。なお、京都-奈良付近は記録がやや多いため最大の推定規模M7.0(827年)で代表した。

2節-15図 古代地震の震度V以上の推定範囲

ここで対象とする地震は、三ッ寺II遺跡において地割れを発生させる程の震度をもち、時間的には5世紀後半から11世紀までの間に含まれるものである。理科年表1990によれば、西暦416年（允恭天皇5年）の記録から1099年（康和1）までの35個の地震があげられる（もちろん、記録に残らなかった地震も予想されるが、当座ここでは考えないでおく）。1884年までは宇佐美龍夫（1987）から引用しており、これで補うと表2節-1のように42個となる。

これらの古地震は記録の質と量とで一部のデータに欠落がみられるが、発生年月日・震央・大きさ（マグニチュードM）などが推定されている。そこで、経験式から求められた震度V以上の範囲を地図上にプロットすると、2節-15図のようになる（注11）。

これらのうち、三ッ寺II遺跡の地震跡を発生させる条件に近いものは、No12(818年)・No23(878年)・No27(887年)・No28(887年)・No39(1096年)の5個で、可能性のもっとも高いのはNo12(818年)である。しかし、8世紀以前の地震に関しては、『理科年表』・宇佐美龍夫（1987）には該当するものがなく、記録の欠落や調査未了の場合を除けば、別の原因を考えなくてはならない。

5 地震跡の再検討

(1) 8世紀以前の地震

前項までに近代の地震の影響、古代の地震の可能性について考えてみたが、三ッ寺II遺跡の地震跡は、近代の地震による揺れでは生じないと推定された。また、古代の地震では平安時代前期の弘仁9年(818)の地震が有力候補にあげられるものの、8世紀以前の地震については、別の原因を考える必要が出てきた。ここで8世紀以前の地震の候補のひとつとして、6世紀代における榛名山二ッ岳の噴火に伴う火山性地震をとりあげてみたい。

火山活動のひとつとして火山性地震があり、その他の非火山性地震は「構造地震」として区別される（注12）。

火山性地震と一般の構造性地震との大きな違いは、震源の深さであるといわれている。火山性地震は震源の深さが10km以下とされ、震源が比較的深く構造性地震に似たものはA型、火口周辺の浅いところで発生する微小地震はB型と呼ばれる。ここではA型の地震が対象になる。また、噴火活動との関連から、火山に起こる地震は(1) 静穏期に平常起きているもの、(2) 噴火の前に発生するもの、(3) 噴火活動中および噴火後に発生するものに分けられている。表2節-2は活火山周辺で起きた最大規模の地震である。これをみると、M7程度の地震は起きる可能性があり、M5～6程度は噴火に伴って発生するようである。

2節-16図は榛名山二ッ岳を中心として、半径14kmの円を描いたものである。地震の規模と、ある震度の揺れを感じる範囲の関係式に、 $r=14$ を代入してみると（注13）、三ッ寺II遺跡で震度VのときM6.0、震度VIのときにはM7.0ほどの地震が、榛名山二ッ岳付近で起こったと想定できる。この地震の規模は、表2節-2の最大規模と（とりあえず）矛盾しない。

1989年12月13日の『鹿児島新報』は、指宿市内の二つの遺跡で開門岳の噴火活動による土石流の跡と、火山性地震による噴砂の跡が発見されたことを報道した（注14）。下山覚氏によれば（注15）、橋

表2節-2 活火山とその近傍に起きた最大規模の地震

火 山	年 月 日	M	備 考
三宅島	1962VIII26	5.9	噴火後
	1983X 3	5.7	噴火後
桜 島	1914 I 12	7.1	大噴火
浅間山	1912VII16	5.7	牙山付近
	1916II22	6.2	浅間山北麓
霧島山	1968II21	6.1	えびの地震
有珠山	1910VII24	5.1	噴火前兆
箱根山	1920XII27	5.6	
雲仙岳	1792 V 21	6.4	眉山大崩壊
キラウエア (ハワイ)	1983XI16	6.7	カオイキ断層
	1975 XI 29	7.2	カラバナ地震
セントヘレンズ (北米)	1980 V 18	5.1	大噴火開始
メチスショール (トンガ)	1979IV28	5.7	海底噴火
ガラバゴス (エクアドル)	1968VII15	5.4	カルデラ崩壊

下鶴大輔「火山活動をとらえる」1985から抜



牟礼川遺跡の調査の結果、そこで検出された火山灰のうち、紫色固結火山灰層のもっとも下位のものが貞観16年(874)に起きた開門岳の噴火によるものと同定された。さらに、2kmほど北方の中島ノ下遺跡では、平安時代から鎌倉時代頃までに発生した噴砂跡が発見され、火山性地震の発生が想定されている。両遺跡は開門岳の北東約10kmに位置し、M5.7~6.7程度の地震が起きると震度V~VIの範囲に納まってくる。

以上、これまでの火山性地震の規模と比較して、その最大規模のものはM7にもなること、最近の調査では一例のみであるが、火山性地震による噴砂跡を検出し、構造性の大地震でなくても地震跡を残す例があることを記した。ここでは、三ッ寺II遺跡の地震跡が、榛名山ニッ岳の噴火に伴う火山性地震によって生じた可能性を指摘しておくにとどめる。

(2) 9世紀~11世紀の地震

関東地方の平安時代の地震に関しては、先行する考察がある。荻原 尊禮氏が「地震史料の再吟味が必要だと感じる」きっかけとなった、弘仁9年(818)の地震がそれである(注16)。

従来、相模湾が震央とされていた弘仁9年の地震は、記録にあげられている被災国が上野・下野・常陸・武蔵・相模・下総であることや、記述文字の検討から内陸の地震の可能性が高く、上総・安房などの国名があがっていないことから、その震央は上野・下野・常陸・武蔵の国境付近と判断されるようになった。地震の規模もM7.7と推定され、上野・下野の大規模な山崩れが起こったことも説明できるとされた。震源断層の候補として検討されたのは、関谷断層(栃木県)・深谷断層(埼玉県)・楢引断層(埼玉県)だが、「……これらの活断層、またはこれを含む活断層群の活動によって、弘仁の地震が起こったと考えることは、史料から受ける地震像とどうもマッチしない。」とされ、茨城県南西部に震央の可能性を想定し、「謎を秘めた地震」と呼んでいる。

堀口 万吉氏は1974年以来、埼玉県北部の遺跡の発掘調査に注目され、妻沼低地における深谷パイパス遺跡の調査で検出した噴砂について検討されている(注17)。噴砂の時期は「古墳時代後期以降-奈良・平安時代以前」であるが、「弘仁9年(818)の地震に対応する可能性をもつ」とされた。

2節-17図は北関東の活断層の分布図(注18)、表2節-3はそれらの活断層の一覧である(注19)。この表の「最大規模地震」とは、その断層の起こす可能性のある地震の最大規模を予想したもので、基本となったのはM=8の地震の断層長が80km、M=7の地震の断層長が20kmという値である(日本の内陸地震の場合)。

表2節-3のなかの北関東地域では、深谷断層、平井断層、荒川断層の三つがM7以上と算出されるが、『古地震』で復元されたマグニチュード7.7(半径100kmの範囲が震度V以上として、注20)に比べると、そのエネルギーには10倍以上の差がある。仮に震度V以上の地域を半径80kmに置き換えても、そのMは7.5になり、エネルギーの差は依然として5~6倍である(注21)。M7.7の地震を起こすことの出来る断層の長さは52.5km、少なくとも50kmなければならないし、M7.5の地震の断層長は39.8km、つまり40km程度の断層長をもっているはずである(注22)。ところが表2節-3にあげた断層は、いま

表2節-3 北関東の活断層一覧

断層名	活動度 *4	長さ (km)	走向	最大規模地震 マグニチュード	r_s (km)	r_e (km)	備考
深谷断層	B	20*1	NW	7.0	45	15	埼玉県
櫛引断層 (神川断層)	B	5*2	NW	6.0	14	3.2	埼玉県
平井断層	B	8*2	NW	6.3	20	5.1	埼玉県
磯部断層	B~C	20*3	NW	7.0	45	15	群馬県・埼玉県
荒川断層	B	8*2	NW	6.3	14	3.2	群馬県
立川断層	B	30*3	NW	7.3	63.1	24.2	埼玉県・東京都
立川断層	A	20*3	NW	7.0			東京都(参考)

*1 宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』1987 東京大学出版会

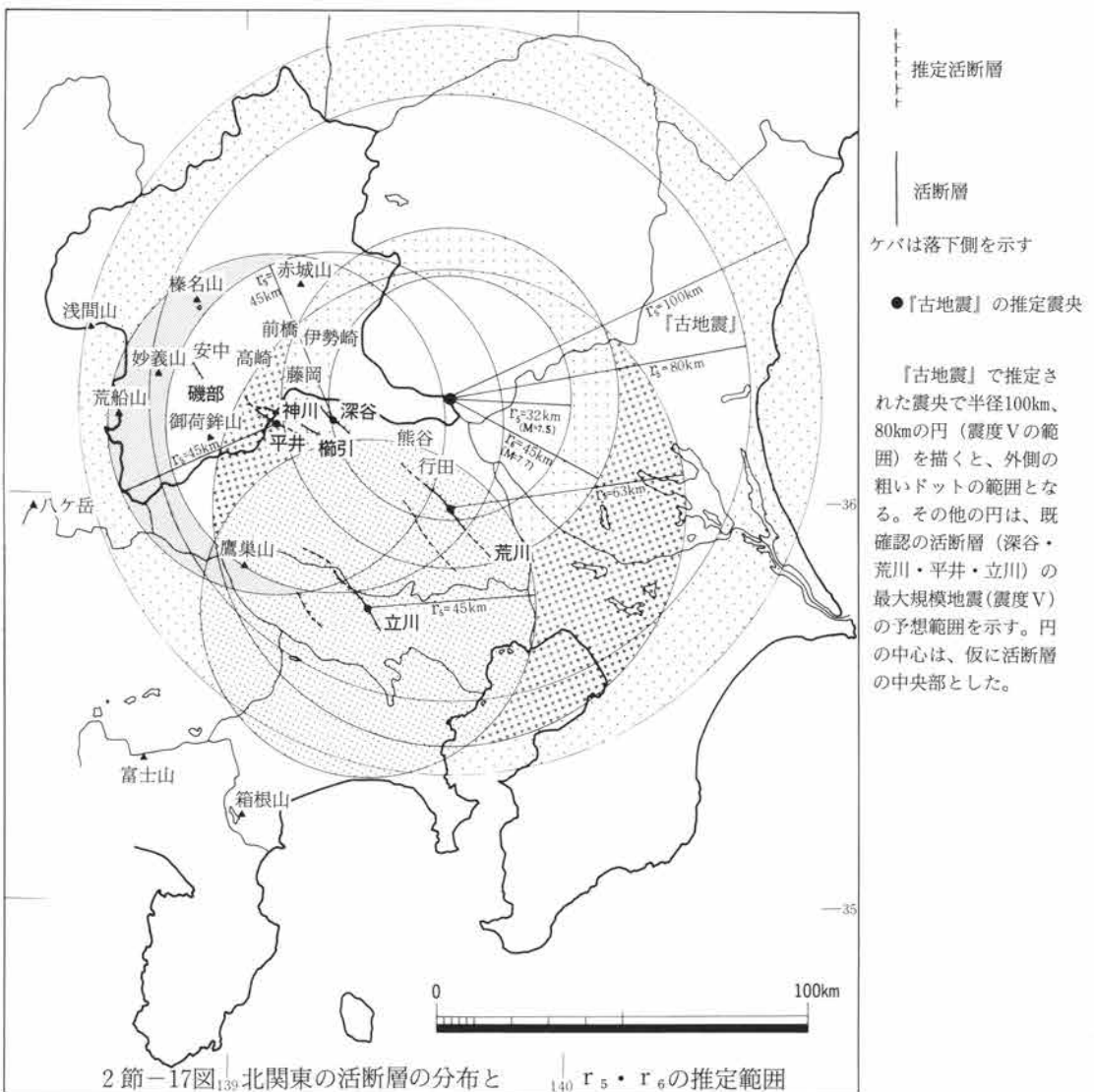
*2 活断層研究会編『日本の活断層』1985 東京大学出版会

*3 小出仁他『地震と活断層の本』1979 国際地学協会

*4 活動度・最大規模地震は松田時彦(1975)による。

活動度=1000年間の平均変位速度(平均的喰違い速度)をSとすると、

AA級: $10 \leq S < 100m$, A級: $1 \leq S < 10m$, B級: $0.1 \leq S < 1m$, C級: $0.01 \leq S < 0.1m$, D級: $0.001 \leq S < 0.01m$ とする。



のところ手元の資料では、単独でそれを満たすだけの長さが確認されていない。また、M7.7のとき震度VI以上の地域の予想範囲は半径45km程度、M7.5のとき半径33kmほどである。これがM7.0になると、震度VI以上の地域の予想範囲は半径15km、Vの範囲は45km程度になって規模が小さくなる。

ところで、半径100kmの範囲が震度V以上と仮定することは、 M_k （河角マグニチュード）の定義から考えれば、 $M_k = 5$ とすることに相当する（注23）。 $M = 0.46M_k + 4.42$ （宇佐美龍夫）の式を使えば、 $M = 6.72 \rightarrow 6.7$ となり、だいぶ小さくなってしまいます。震度V以上の範囲 $r_s = 100\text{km}$ から推定した地震の規模と、 $M_k = 5$ から推定した地震の規模が、Mの値で1.0も異なっている。これを地震のエネルギーで比較すれば1:32、すなわちM7.7の地震はM6.7の地震約30個分に相当する。

地震の規模をリヒター・マグニチュードとみるか（『古地震』）、 M_k とみるかで復元される古地震の規模が1:30の比をもつということは、古い地震のマグニチュードでは

「0.5程度の差を云々することはあまり意味がない場合が多いであろう。」（注24）

ということか。

いずれにしても、弘仁9年の地震はマグニチュード7.0~7.5程度と考えても良いのではないだろうか。ただ、前述の活断層のうちの二つ以上が連動したとすれば、それぞれ単独で活動した場合に比べ、地震の規模はより大きくなるだろう。

7月という季節から、大雨で山の土がゆるんでいたときに地震が起こり、大規模な山崩れが発生したことも考えられる。善光寺地震（1847）のように、崩れた土砂が一時的に谷川をせき止め、それが決壊して大洪水が生じたかも知れない。

（3）最近の調査例

ところで、最近の発掘調査によって、いくつかの地震跡が検出されている。

埼玉県では、前記の深谷バイパス調査に続き、妻沼低地において上武道路（国道17号線バイパス）建設に伴う事前の発掘調査が行われ、地震跡が多数発見されている（注25）。とくに居立遺跡では住居を破壊した地割れと噴砂が検出されていることに注目したい。この遺跡では8世紀中頃の住居を破壊した噴砂は10世紀代の遺物包含層の下部で止まり、さらにその上位をAs-Bが覆っていることから、9~10世紀の地震跡と推定され、弘仁9年と元慶2年（878）の古地震がその候補として上げられている。同地域の柳町遺跡、城北遺跡の調査でも地震跡が発見されており（実見）、これまでに深谷市を中心に22か所で確認されているという（注26）。

群馬県では表2節-4のように、前橋市東部・新里村・大胡町・渋川市などで調査例があり、それぞれ弘仁9年地震の跡と考えられている。

これらの調査例で注目される現象として、

- ① 浅間Bテフラ（As-B）またはこれの混入する土層が地震跡の上位に自然堆積している
- ② 奈良時代までの遺構が地割れや陥没などで破壊されている
- ③ 砂田遺跡例では、泥流が水田を覆っており、9世紀初頭の土器が泥流に直接覆われている
- ④ 地震跡分布は渋川市・子持村付近までの広がりをもつ

などがあげられ、一時期1回の地震跡ならば弘仁9年の地震と考えて良いのではないだろうか。

表2節-4 群馬県内の地震跡調査例一覧

遺 跡 名	地震跡	概 要	時 期	備 考
下縄引遺跡 前橋市西大室	地割れ	長さ53m、最大幅5.5m、深さ3.3m、陥没落差50cm古墳周溝を切る。埋没段階でAs-Bの純層が堆積。埋没途中の須恵器出土。土器は地割れの下限を示す。	6C後半～須恵器 (9C中頃)～As-B	未見*1
上諏訪山A遺跡 前橋市下大屋町	地割れ	長さ31m、幅1m、断面漏斗状。上位にAs-B堆積。	As-B以前	未見*2
明神山遺跡 前橋市下大屋町明 神山574-1ほか	地割れ	長さ数十m、上幅5m、走行南北。14号住居・31号住居の床面が陥没。陥没最大落差は12cm。31号住居がある程度埋没してから陥没した。埋土最上位にAs-B純層堆積。	5C末ないし6C初 頭～平安時代終末期 (1108年)	未見*3
柳久保遺跡 前橋市荒子町柳久 保1516-10他	地割れ	北西-南東方向の低い台地上にある。地割れは調査区北端の南北方向の一群、尾根南端の東西方向(尾根末端)の等高線に平行な一群の2か所。重複住居の床面に落差10cmの陥没あり。H-38住居掘形南下がりに陥没。地割れ9条。X-1～X-4は北端の一群、X-5～X-9は南端の一群。北群；長さ7～11m、幅1～2.4m、最深部1.2～1.6。南群；幅10～60cm、深さ40～90cm。	X-6はH-37住居を 切る。地割れは8C 後半以降。	未見*4
砂田遺跡 勢多郡新里村大字 武井字砂田・鎮守	地割れ 泥流	標高約173m付近。集落の東側に水路があり、上流の鑄木川から取水する灌がい用水路に沿って、泥流が流下し、水路から溢れて周辺の水田跡を埋めた。地割れの幅は10cm、長さ約10mを検出。	9世紀初頭の土器を 泥流が直接覆ってい る。	実見*5
上ノ山遺跡 勢多郡大胡町茂木	地割れ	赤城山麓の台地(尾根?)の上。帯状に陥没して住居を破壊。地割れが縄文中期(加曾利E)の住居を切る。振動による地滑りか?	縄文中期→地割れ→ As-B	実見*7
今井白山遺跡 前橋市今井町	地割れ 噴砂 円形陥 没?	赤城山麓の低台地。標高約85m。地割れの幅10cmとこれに伴う噴砂。長さ10m、幅10cmの地割れと、これに伴う噴砂・隆起・小規模亀裂。直径約1m、深さ60cmの逆円錐形の陥没。	住居との重複関係から 地震跡は7C～9 C第3四半期の間。	実見*6
半田中原・南原遺 跡 渋川市半田	地割れ 噴砂	奈良時代計画集落。現利根川西岸から約1kmの地域。榛名土石流・火山灰(6C代、厚さ8m)が割れる。地割れの最長400m、深さ1m以上、大小50か所以上。利根川へ向かって地滑りを起こしたか?	地割れが奈良時代住 居を切る。住居埋土 上位にAs-Bが自然 堆積	実見*8
中宮関遺跡 勢多郡大胡町	泥流	荒砥川左岸の水田跡に泥流がかぶる。泥流層の厚さ30cm。地震の二次災害。	?	未見*9
中組遺跡 北群馬郡子持村	地割れ	地割れを切って平安時代の羽釜を伴う住居が作られていた。	平安時代住居が地割 れを切る。地割れは 10C以前	未見*10
大日遺跡 勢多郡新里村奥沢	地割れ	標高385mのローム台地上。住居、陥穴検出。縄文時代早前期の陥穴が地割れに切られていた。	縄文前期以後	未見*11
上大屋・桶越地区 遺跡群E区 勢多郡大胡町	地割れ	標高163mほどの赤城山麓ローム台地上。北面する緩斜面の南側に東西方向の卓越する地割れが平行して並ぶ。	遺構との重複関係は なし	未見*12

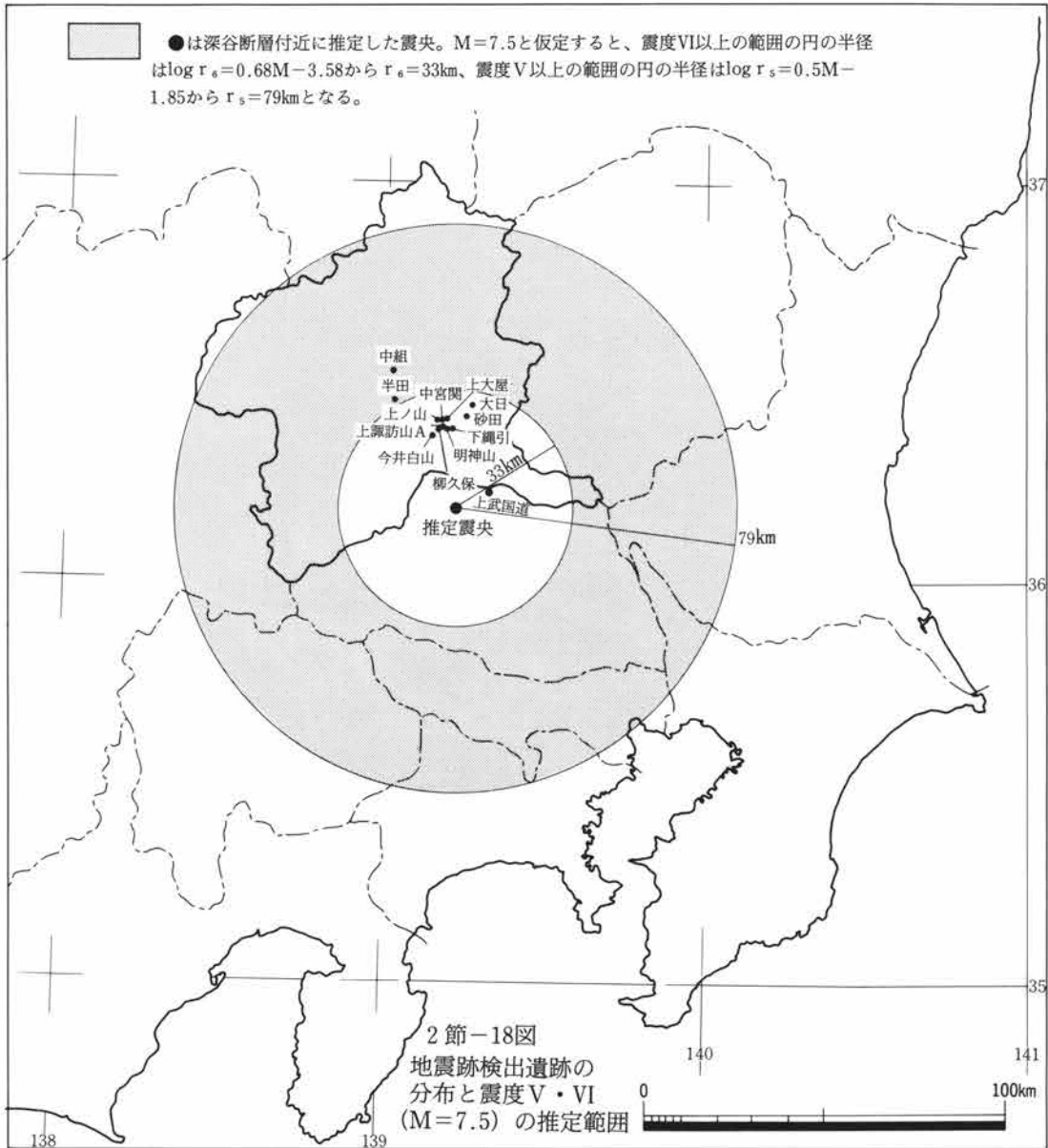
*1 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『内堀遺跡群II』1989

*2 荒砥北部遺跡群調査会・群馬県教育委員会『荒砥北部遺跡群発掘調査概報』1988

*3 群馬県教育委員会『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』1989
西田健彦氏の御好意により、記録写真を拝見した。

*4 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『柳久保遺跡群I』1985及び同『柳久保遺跡群VII』1988

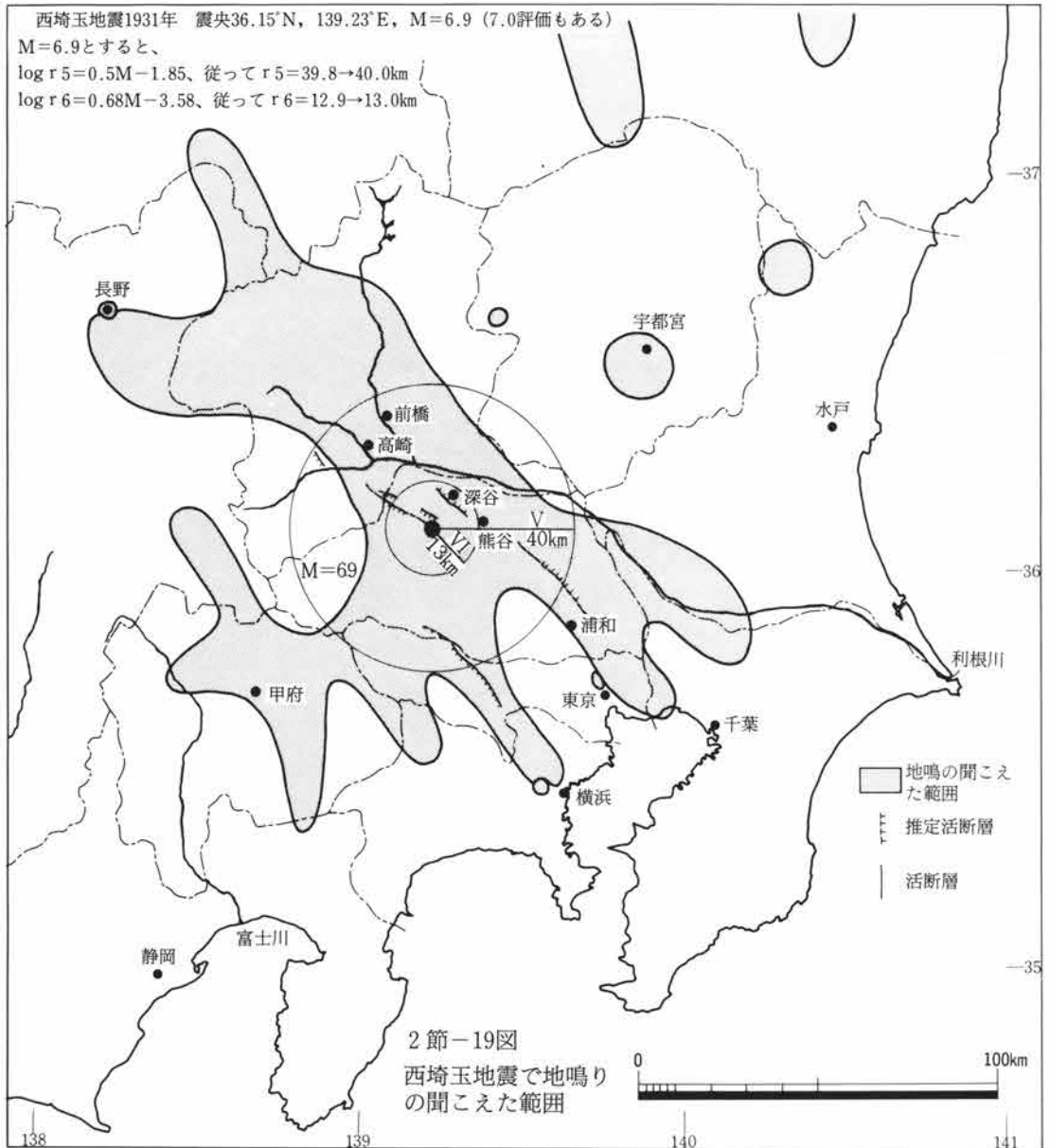
- * 5 実見。新里村教育委員会「砂田遺跡の概要」1989 現地説明会資料，1989年11月16日付け『上毛新聞』・『讀賣新聞』・『毎日新聞』・『朝日新聞』，新里村教育委員会内田憲治氏から御教示を得た。
- * 6 実見。当事業団平成元年度（1990）調査。飯島義雄・神谷佳明両氏から御教示を得た。
- * 7 大胡町教育委員会山下歳信氏から御教示を得た。
- * 8 1990年6月14日付け『讀賣新聞』・『上毛新聞』・『朝日新聞』・『毎日新聞』，1990年7月10日付け『朝日新聞』，1990年10月20・21日現地説明会資料，渋川市教育委員会大塚昌彦氏の御教示を得た。
- * 9 1990年7月9日付け『上毛新聞』
- * 10 1988年子持村教育委員会調査。子持村教育委員会石井克巳氏から御教示を得た。
- * 11 1990年10月5日付け『朝日新聞』
- * 12 大胡町教育委員会「上大屋・桶越地区遺跡群」1986，大胡町教育委員会 山下歳信氏の御教示を得た。



6 ま と め

これまでに火山性地震、近代の地震、古代の地震、地震跡の調査例と検討してきた。これらをまとめると、次のとおりである。

- ① 三ッ寺II遺跡の地震跡の時期は5世紀後半ないし末～11世紀の間に限定され、それらの期間中で3時期に分けられる地震跡が検出された。第1は6世紀前半～6世紀後半の間、第2は6世紀後半～7世紀前半の間、第3は7世紀後半～11世紀の間である。
- ② 第1および第2の地震跡は、榛名山の噴火に伴う火山性地震によって生じた可能性がある。



③ 第3の地震跡は、弘仁9年(818)地震によって生じた可能性が高い。

火山性地震は一般にその火山およびそのごく近くで発生する震源の浅い地震のことであり、震源の深さは10kmほどといわれている。そして、ごくまれにM7の地震が起こるが、通常M5クラスを最大とし、「局地的な被害が出る」という(注27)。三ッ寺II遺跡の地震跡が火山地震によるものだとすれば、榛名山周辺の遺跡で古墳時代の類例が発見されても良いと思うが、いまのところそうした例を聞いていない。今後の調査に期待するところである。

第3の地震跡は、本遺跡の所在地が検出例の範囲に含まれ、弘仁9年地震の可能性が高いと考えられる。仮に深谷付近の断層を震源とし、マグニチュード7.5の地震が弘仁9年(818)に発生したとすれば、古記録にある相模国も震度V以上の予想範囲に入り、群馬県の高崎-前橋付近と赤城山南麓は震度VI(烈震)、妻沼地域はおそらく激震となったであろう。山崩れ・地割れや噴砂が震度VI以上の予想範囲に起こると推定され、砂田遺跡で発見された泥流がこのときのものであったとみることもできる(2節-18図)。

この場合、昭和6年(1931)の西埼玉地震の例が参考になる。このとき前橋地方気象台の記録では、高崎・渋川・五料(玉村町の烏川と利根川の合流点付近)が震度Vをとり、前橋ほかの県内の大部分は震度IVと記録されている(注28)。また、このとき山崩れが起こっており、地鳴りの聞こえた範囲は(注29)、群馬県ではおおむね利根川に沿った地域が該当する(2節-19図)。古記録のなかで、8月の記事中の「……、上野等の境、地震い災いを為し、水潦相仍り、人物凋損す。」の上野等の境に注目すれば、上野国の被害情報が最も多く、災害の程度がひどかったという解釈ができないだろうか。

本遺跡に南接する三ッ寺I遺跡でも、北濠の北側斜面に地割れを検出しており(2節-20図)、この地割れの下限は浅間B軽石を含んだ土層である(注30)。従って、三ッ寺I遺跡の地割れは居館築造後～浅間B軽石降下の間であり、第1～第3の3つの地震がその候補となり得る。居館の変遷と併せて考えれば、『III-1期』とされているFA降下後の時期に第1の地震が発生しており(注31)、これが榛名山の爆発に伴う火山性地震だとすれば、FAの降下と火山性地震は一連の火山災害ととらえるこ



2節-20図 三ッ寺I遺跡の地震跡(東側道)

写真中央下に見えるのが地割れ。浅間B軽石よりも下位で検出しているため、三ッ寺II遺跡検出の三時期の地震が候補となる。側道調査(1983年)で検出。

とができ、居館の「機能が停止し衰退を始める時期」にほぼ一致する。降下する火山灰のみならず、地震による破壊が居館衰退の契機となったかも知れない。さらに、居館の変遷における「Ⅲ-2期」～「Ⅳ期」の画期となったF P土石流後の時期に、第2の地震が発生したことが推定され、居館は潰滅的な打撃を受けたとも考えられる。

しかし、第2の地震も榛名山の噴火に伴う火山地震だとすれば、「爆発→土石流→地震」という経過よりも、「地震・爆発→土石流」という経過の方があり得る事態であり（注32）、この点、時間的な逆転を生じている。

本遺跡で検出した第3の地震跡は、北関東一円に多大な災害をもたらした弘仁9年(818)地震と推定され、9世紀代の集落がどのように発展したかを考える上で、ひとつの重要な視点を与えるものとなる。とくに、被害の甚大であった「上野等の境」では、埼玉県での調査結果からの問題提起（深谷地方の平安時代前半の集落が少ない傾向にあるという指摘、注33）に注目したい。

謝辞

小考を草するにあたり、寒川 旭氏(工業技術院地質調査所)より貴重なご指導を賜り、今井 宏(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)・下山 覚(指宿市教育委員会)・前原 豊(前橋市教育委員会)・西田 健彦(群馬県教育委員会)・内田 憲治(新里村教育委員会)・山下 歳信(大胡町教育委員会)・大塚 昌彦(渋川市教育委員会)・石井 克巳(子持村教育委員会)・桜場 一寿(現 桐生女子高等学校)・飯島 義雄・神谷 佳明・女屋和志雄(以上群馬県埋蔵文化財調査事業団)の諸氏ならびに前橋地方気象台には有益な助言とご協力をいただいた。文末ながら記して感謝の意を表します。(関)

注

- 1 通商産業省工業技術院地質調査所 近畿・中部地域地質センター主任研究官 寒川 旭氏による。なお、その後の地震跡の現地踏査や文献資料、県内外の調査所見などの御指導をいただいた。
- 2 力武常次『巨大地震』1976 講談社、宇佐美龍夫『大地震』1978 そしえて、地震学会編『地震の科学』1979 保育社、大崎順彦『地震と建築』1983 岩波書店、浜野一彦『地震のはなし』1986 鹿島出版社、池上良平『震源を求めて』1987 平凡社など。
- 3 明治29年(1896)「群馬県前橋測候所」として開設、明治30年(1897)観測開始、昭和14年(1939)文部省管掌の「前橋測候所」、昭和18年(1943)運輸通信省管掌、昭和32年(1957)「前橋地方気象台」に昇格。現在の観測事項は地上気象、地域気象、生物季節、地震、火山、高層風がある。前橋地方気象台のご教示による。
- 4 財団法人日本気象協会前橋支部『群馬県気象災害史』1982、および『理科年表』1990版による。それぞれの震央を中心とした、震度V・VIの地域を、経験式による半径 r_5 ・ r_6 で示す。
- 5 震度分布図は宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』1987 に加筆した。
- 6 前橋地方気象台の観測記録による。前掲『群馬県気象災害史』によれば、1897～1981年の間で震度IV以上の地震は25個あり、そのうちの2個が1898年と1931年の地震である。1898年地震の基本データは不明だが、同年の有感・無感の地震回数は50回を数えている。
- 7 新聞記事の「激震」は地震の振動が強く、被害の著しいことを表現したもので、気象庁震度階級の「激震」ではない。
- 8 前掲、宇佐美龍夫1987

- 9 前掲、宇佐美龍夫1987の被害データ。
 『群馬県気象災害史』によると、
 関東大地震：負傷9、家屋倒壊49、半壊8のほか一部破損多し、鉄道、通信等被害。
 西埼玉地震：死者5、傷者30、家屋倒壊166、家屋半壊1769、煙突倒壊155、橋梁破損55、山くずれ31500(坪)
 となっており、関東大地震よりも西埼玉地震の被害の多かったことが解る。新潟地震では、主として利根・吾妻郡で被害があり、高山村の被害が大きかったという。
- 10 「大日本地震史料」田山実 明治37年(1904) 允恭天皇5年(416)～慶応元年(1865)
 『増訂大日本地震史料』武者金吉他 昭和16～18年(1941～1943) 古代～弘化4年(1847)
 『日本地震史料』武者金吉 昭和26年(1951) 弘化年間～慶応年間
 があるという。ここでは下記の文献を参照した。
 『理科年表』1990年版、丸善
 宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』1987、東京大学出版会
 宇佐美龍夫『大地震』1978、そして文庫
- 11 経験式と震央およびMに関しては前掲、宇佐美龍夫(1978,1987)のほか、荻原尊禮他『古地震』を参照した。
 近代の科学的観測が始まる前の地震の大きさについては、震度を利用してマグニチュードを求める経験式が提案されており、被害の記録から推定されている。

$$M = 0.5M_k + 4.85 \text{ (河角広)}$$

$$M = 0.46M_k + 4.42 \text{ (宇佐美龍夫)}, M = \text{リヒター・マグニチュード}, M_k = \text{河角マグニチュード}$$
 また、 S_4 = 震度IV以上の地域の面積(単位 km^2)、 M = マグニチュードのとき、

$$\log_{10} S_4 = 0.82M - 1.0 \text{ (勝又護・徳永規一)}$$

$$\log_{10} S_5 = M - 3.2 \text{ (村松郁栄)}, S_5 = \text{震度V以上の地域の面積}$$

$$\log_{10} S_6 = 1.36M - 6.66 \text{ (村松郁栄)}, S_6 = \text{震度VI以上の地域の面積}$$
 である。
 S_4 、 S_5 、 S_6 を半径 r_4 、 r_5 、 r_6 の円と仮定すると、

$$\log_{10} r_4 = 0.41M - 0.75 \text{ (単位km)}$$

$$\log_{10} r_5 = 0.5M - 1.85 \text{ (単位km)}$$

$$\log_{10} r_6 = 0.68M - 3.58 \text{ (単位km)}$$
 である。これらは経験式(実験式)であることが明言されており、「精密な議論には使ってはならないもの」(藤井陽一郎『日本の地震』1984 新日本出版社)であることは承知しているが、将来の災害予測の目安になるものならば、過去の災害の推定復元にもある程度の目安となろう。古地震のM(マグニチュード)の推定は、記録にある災害の程度や広がりから被災面積と震度(気象庁震度階級)とを推定し、そこからMを推算出するという方法をとっており、あらかじめMを推定して被災地域の面積を出したのではない。
 ここでは参照した現代文献に記されているMの大きさ(科学的根拠のある判断とみなしている)を前提にして r_5 ・ r_6 を算出し、さらに [] で示したように10km単位に読み替えてから(この列島地図の場合10km未満は表現できないと判断した)地図に落としている。上のプロセスとは逆であることを記しておく。
- 12 木村政昭『噴火と大地震』1978 東京大学出版会、下鶴太輔『火山活動をとらえる』1985 東京大学出版会を参照した。
- 13 震度V、VI以上の地域の面積 S_5 、 S_6 を円と仮定したときの円の半径を r_5 、 r_6 とすると、

$$\log r_5 = 0.5M - 1.85, \quad \log r_6 = 0.68M - 3.58$$
 従って、震度V以上の円の半径 $r_5 = 14\text{km}$ ならば、 $M = 5.99 \rightarrow 6.0$
 震度VI以上の円の半径 $r_6 = 14\text{km}$ ならば、 $M = 6.95 \rightarrow 7.0$
- 14 寒川 旭氏のご教示による。
- 15 下山覚『鹿児島県指宿市橋牟礼川遺跡に見る火山災害史と文化変異』『日本考古学協会第56回総会研究発表要旨』1990.5。
 『中島ノ下遺跡』鹿児島県指宿市教育委員会 1990.3
- 16 荻原尊禮ほか『古地震』1982 東京大学出版会、この地震の記録は菅原道真撰修『類聚国史』寛平四(892)にある。
 『新訂増補 国史大系 類聚国史 第三』1981 吉川弘文館 159頁 巻171 災異部五
 『弘仁九年七月。相模。下総。常陸。上野。下野等国地震。山崩谷埋数里。压死百姓不可勝計。』八月庚午。遣使諸国。巡省地震其損害甚者加賑。恤詔曰。朕以虚味欽若寶凶。撫育之誠無忘武步。王風猶鬱。帝載未熙。咎徵之臻。此為特甚。如聞。上野等国等境。地震為災。水潦相仍。人物凋損。……以下、略』
- 17 堀口万吉『埼玉県北部でみられる古代の噴砂について』『歴史地震』第2号 1986
- 18 中村一明ほか『火山と地震の国』日本の自然1 1987 岩波書店
 [1:500,000活構造図 東京] 通商産業省工業技術院地質調査所 昭和154-55年
- 19 松田時彦『活断層から発生する地震の規模と周期について』『地震』28-3 1975
 日本の内陸地震の規模Mと、断層(系)線の長さLとの経験式が提案されている。

$$\log L = 0.6M - 2.9 \quad (6)$$
 「長さLの断層系において、(6)式から得られる地震のマグニチュード(M_L)は、その断層系から生じ得る地震の規模の最大値をあたえる。すなわち、 M_L とLの関係は(6)式から、

$$M_L = (1/0.6) \log L + 4.85 \quad (7)$$
 」

第6章 考察とまとめ

- 20 なぜ半径100kmなのかという根拠は、ここでは説明されていない。上野・下野・武蔵・常陸4国の国境付近を震央とすると、半径100kmの円を描くと相模国も範囲内になり、これを震度Vとしたとき、M7.7が算出される。例えば半径80kmで円を描くと、相模国は外れてしまう。しかし、「半径100km」というのは、経験式と現在の踏査、および様々な条件やデータを総合した結果の数値であるから、科学者のデータとそれへの判断は尊重されるべきであり、確かに「マッチ」しないところがある。「100km」が過大なのだろうか？
- 21 地震のマグニチュードMとそのエネルギーEとの関係の経験式（リヒター）
 $\log E = 1.5M + 11.8$ （エルグ）
M=6.7のとき、E=7.079×10²¹ , M=7.0のとき、E=1.995×10²²
M=7.2のとき、E=3.981×10²² , M=7.5のとき、E=1.122×10²³
M=7.7のとき、E=2.239×10²³
したがって、(2.239×10²³) ÷ (1.995×10²²) ≒ 11（倍）
(1.122×10²³) ÷ (1.995×10²²) ≒ 5.6（倍）
(3.981×10²²) ÷ (1.995×10²²) ≒ 2.0（倍）
(2.239×10²³) ÷ (7.079×10²¹) ≒ 32（倍）
- 22 前掲注18, $\log L = 0.6M - 2.9$ で計算すると、
M=7.7のとき、L=52.48→52km, M=7.5のとき、L=39.81→40km, M=7.0のとき、L=19.95→20km, M=6.7のとき、L=13.18→13km
- 23 M_Kの定義：「震央距離100キロメートルのところにおける、気象庁震度階級を用いて表した平均の震度をもってM_Kとする」河角広（前掲、「古地震」から引用）。ただし、筆者の理解が及ばず、地震学上の理由によってM=0.46M_K+4.42の式を適用できない場合は別である。
- 24 力武常次『巨大地震』1976 講談社
また、浅田敏『地震 [第2版]』1984 東京大学出版会 では、「内陸にはこれほど（太平洋沿岸のM8級の地震ほどの一引用者）大きな地震は生じない。1891年の濃尾地震のマグニチュードは、河角広によれば8.4と記載されているが、気象庁のスケールに合わせると7.9で、あるいはもっと小さいかもしれない。内陸の地震では、濃尾地震は例外的に大きく、およそのところマグニチュードは7.5どまりというべきであろう。」という判断もある。内陸最大の地震といわれている濃尾地震の規模がM7.9（理科年表でM8.0）と小さく見積もられていることからみれば、弘仁9年地震はM7.5程度ではないだろうか。
- 25 埼玉県関係の調査例については、埼玉県埋蔵文化財調査事業団 今井宏氏のご教示を得た。
- 26 『埼玉新聞』1989年12月21日付けの記事ほか による。
- 27 下鶴大輔『火山活動をとらえる』1985 東京大学出版会
- 28 前掲、『群馬県気象災害史』1982 財団法人日本気象協会
- 29 前掲、宇佐美龍夫（1987）掲載図に加筆。
- 30 三ッ寺I遺跡の調査担当者女屋和志雄氏のご教示による。
- 31 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『三ッ寺I遺跡』1988
- 32 村山 馨『増補 世界の火山災害』1982 古今書院、伊藤和明『地震と火山の災害史』1977 同文書院
ただし、火山噴火前の地震と噴火後の地震はともに観測されている事実があり、個々の火山によって火山地震の発生状況が異なっているようである。したがって必ずしも「地震・爆発→土石流」が一般的なパターンとはいえないとみられる（前掲、下鶴大輔 1985）。
- 33 前掲、『埼玉新聞』1989年12月21日付けの記事

《付記》

脱稿後、能登 健・内田 憲治・早田 勉「赤城山南麓の歴史地震」（『信濃』第42巻第10号）が発表され、同地域におけるAs-Bテフラ下の山崩れと地割れの発生年代が、弘仁9年地震によるという見解が明らかにされた。

第3節 ま と め

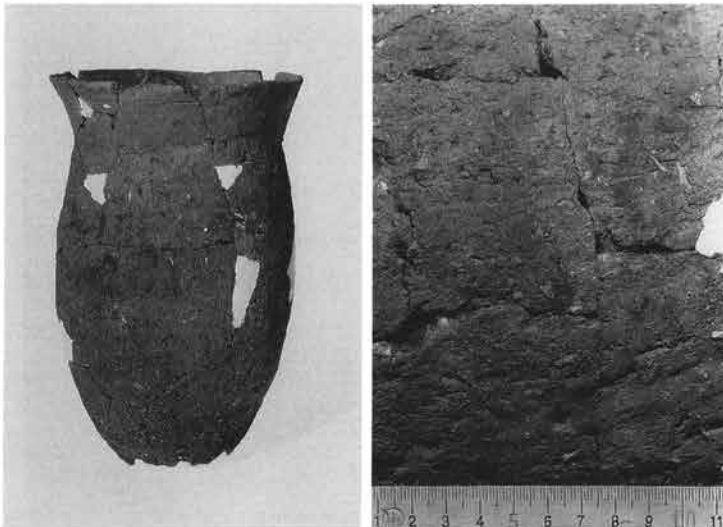
1 遺 物

以下、特徴のある遺物について、いくつか列挙する（注1）。

- a 4区73号住居出土の杯（0724）は腰が丸く、口縁部が薄くなって外反するもので、ほかの同時期の杯類と比較して、形態が異なっている。
- b 2区43号住居出土の高杯（0292）は杯部外底にカキ目が施されており、三ッ寺I遺跡出土品に類似する（注2）。
- c 5区56号住居出土高杯（1106）は杯部が大きく、直線的に開くもので、内斜口縁杯を乗せた高杯よりも先行するとみられる。三ッ寺III遺跡に類例がある（注3）。
- d 甕類は胎土に注目した。大きく分けて①ガサガサの小石（片岩系？）を含むもの（1248・1229）、②細かい砂粒を多量に含むもの（→ケズリ甕1120）、③褐色粒を含むもの、④白色不透明粒を含み砂粒の多いもの（0524・1287）があげられる。③褐色粒を含むものは、③a やや細かい砂粒を多く含む鈍い褐色を呈するもの（0525・1290）、③b 砂粒少なく赤褐色を呈するもの（1262）がある。①は移入品か（3節-1図）
- e 匙形土器は1区22号住居（0060・0061）と5区48号住居（1245）の2カ所から出土している。本遺跡の出土例では、把手部を欠いているが、本宿・郷土遺跡では完形のものが出土しており、全形が判明する（注4）。木製品などの器形を模倣したものか。
- f 特殊な器形として須恵器器台（0308・0325）がある。0325は杯類のの子持器台とみられる。
- g 古墳時代の住居からは滑石製模造品の出土が比較的多いが、床面出土のものは少なく、住居周辺や覆土出土の例が多い。本遺跡の調査では、覆土出土の滑石製模造品は出土地点の記録が殆どない

ため、住居のどこからの出土が多いか不明であるが、滑石製模造品は床面から出土しないことに意味があるのかも知れない。もしそうだとすれば、模造品の類いは出土位置に注意して記録を残しておく必要があった。反省点としてあげておきたい。

- h 4区1号住居・18号住居から円筒形土製品が出土している。完形ではないが、様



3節-1図 片石系?の小石を含む甕（5区48号住居1248）

子の判明する遺物として4区1号住居出土の土製品(1000)がある。円筒埴輪破片が同住居から出土しているが、この土製品は明らかに埴輪とは異なる胎土をもつ(注5)。

2 遺 構

(1) 住居分布(3節-2図,表3節-1)

ここでは竪穴式住居の分布状態を主体に、現象的な面をとらえる。竪穴式住居は「集落」の一部である。平地式住居は全く検出していない。

縄文時代 住居は前期のもののみであるが、土坑を含めると3区北寄りから5区にかけて分布しており、その他の区では検出していない。遺構分布には偏在性が認められる。

弥生時代 全体で2軒を検出したのみで、そのほか2軒は確実な遺物の出土がなく、古墳時代に下る可能性がある。2区58号住居・3区30号住居とも、覆土に浅間C軽石が自然堆積している。

古墳時代 4世紀代の住居は、確実なものとしては2区50号住居1軒のみである。5世紀後半～末とみられる住居は1～6区に散在し、とくに集中した分布は示さない。6～7世紀代の住居は1～5区に広がるが、一部に分布の薄いところがある。4区北半部は張出部をもつ14号住居を中心に建て替えや重複が著しいが、その北側の5区南半部には何故か住居の分布が少ない。竪穴住居の空白部には平地式住居やその他の未検出遺構の存在、あるいは何も無い空間が考えられるが、本遺跡ではデータ不足である。

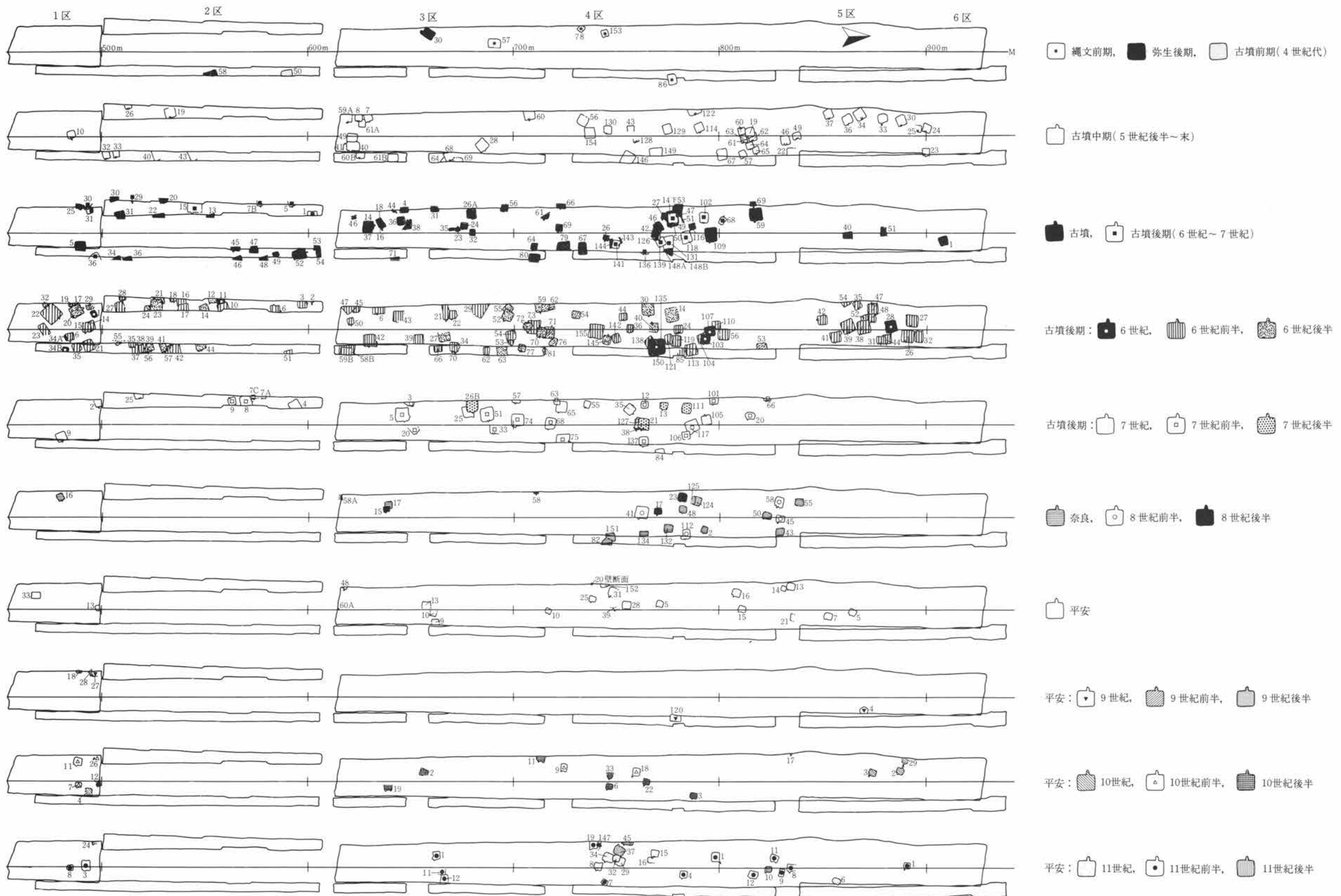
古墳時代としか限定できない住居59軒および弥生～古墳時代と限定幅の大きい2軒を除くと、5世
表3節-1 三ッ寺II遺跡 時期別住居数 紀代51軒、6世紀代108軒、7世紀代37軒である。4世紀代が

時代	住居数	内		訳		
縄文	4	縄文前期	4			
弥生	2	弥生後期	2			
古墳	277	古墳前期	1	4世紀代	1	
		古墳中期	51	5世紀後半～末	51	
		古墳後期	164	6世紀前半	68	
				6世紀後半	31	
				6世紀	9	
				7世紀前半	20	
				7世紀後半	4	
		7世紀	13			
		古墳			59	
		弥生～古墳			2	
奈良	22			8世紀前半	4	
				8世紀後半	4	
		古墳～奈良			14	
平安	71	9世紀	5	9世紀前半	1	
				9世紀後半	1	
				9世紀	3	
		10世紀	18	10世紀前半	5	
				10世紀後半	9	
				10世紀	4	
		11世紀	26	11世紀前半	11	
				11世紀後半	3	
				11世紀	8	
10世紀後半～11世紀	4					
平安	22					
欠番	10					
計	386					

1軒であることを考えれば、本遺跡は5世紀代の後半以後発展し、そのピークは6世紀代である。

古墳時代の住居の中で、とくに規模の大きい住居が数軒ある。1区22号住居は815×781cmと、本遺跡中最大の規模をもち、主柱穴は6本である。さらに壁溝内に点々と小ピットが並び、匙形土器が出土している。他の住居に比べて特殊な要素をもっている住居である。このほか、3区南東端の58B号住居の南北が738cm、4区の14号住居が694×東西691cmである。14号住居は南側に半円形の張出部をもち、2～3回の建て替えが行われている。3区29号住居は全形が判明しないが、北東辺は推定780cm以上あり、特大住居とみることができる。これらの住居は互いに100m以上離れた位置にあり、いずれも古墳時代後期の6世紀代住居である。

奈良時代 限定幅の広い古墳～奈良時代の14軒を除くと、8世紀代には8軒となり、急速に住居数が減少する。その大半は4区で検出しており、1・2区および5区では1軒も検出



3節-2図 三ツ寺II遺跡時期別住居分布

※時代をわたるものは新しい時代を含めた。(1:2000)

していない。この偏在性は前後の時代に比較しても、著しい特徴である。

平安時代 1～6区に散在して分布する。2区では検出していない。平安時代としか限定できない住居22軒を除くと、9世紀代の住居は5軒、10世紀代18軒、11世紀代26軒で、古墳時代以降では9世紀代が最も少ない。

(2) FA 畠跡

2区西側道・3区55号住居上・4区146号住居上・4区155号住居上の4カ所で、覆土に榛名山二ツ岳のFAを含む溝状遺構を検出した。いずれもその形状から畠跡とみられる。2区西側道では周辺の住居に切られており、住居の年代観（6世紀後半）とFAの年代観（6世紀初頭）とは矛盾しない。3区55号住居は56号住居（覆土に浅間C軽石が堆積する）を切っており、畠とみられる11～13号溝は55号住居の上で検出している。したがって55号（6世紀後半）と溝群（畠跡）との前後関係は逆転している。4区146号住居と4区155号住居は、住居確認面で畠跡を検出しており、少なくとも両住居が埋没した時点で畠が耕作されていたとみられる。古墳時代後期に住居周辺で畠が営まれていたことは、黒井峯遺跡に類例がある（注6）。

(3) 竪穴遺構

4区153号土坑は286×98cm・深さ8cmの長方形を呈し、長辺に沿ってそれぞれ3本、計6本のピット（土坑底面からの深さ50cm以上）が掘り込まれている（資料編2-523頁）。この土坑は重複する66号住居によって一部が破壊されており、住居（古墳時代後期?）よりも古い。本遺跡ではこれに類似した遺構はほかにない。北側の三ッ寺III遺跡では略方形を呈し、覆土に浅間B軽石を含む竪穴遺構を検出している（注7）。70号住居（遺構の番号・名称は記録との同定上便宜的に継承している）は古墳時代住居の69号を切り、覆土は浅間B軽石を主体としている。従って70号住居は古墳時代以後から浅間B軽石降下以前の間におさまる。三ッ寺III遺跡では同様の遺構がほかに8基あるが、覆土に浅間B軽石を含むのは70号を除き79・81号の2基で、98号は9号井戸（室町～江戸時代）を切っている。また、田端遺跡田端地区D区の1号竪穴では、壁際にピットが並び、やはり覆土上位に浅間B軽石を含んだ層が確認されている（注8）。これらと比較して本遺跡の153号土坑は形状や規模が異なり、遺構の時期も古墳時代以前とみられるため、同様の遺構とみることはできないが、今後も類例とデータを積み重ね、この種の遺構の性格を解明する必要がある。

3 結

本遺跡の盛衰をみると、弥生時代後期から古墳時代前期（4世紀代）までは、わずかの住居が営まれていたのみで、古墳時代中期の5世紀後半～末に至って住居数が増加する。ちょうど、三ッ寺I遺跡の居館が築造・改築された時期に相当し、いわば『三ッ寺時代』ともいうべき、居館を中心とした豪族の支配する世界が現出したと考えられる。近傍の集落こそ居館を支えた住民たちの居住地であった。

さらに6世紀代になると、三ッ寺居館の「衰退」や榛名山の噴火にもかかわらず住居数は増大し、

三ッ寺II遺跡は最盛期を迎えている。このことは、居館の衰退が必ずしも周辺集落の盛衰と連動しないことを窺わせる。前代における開発の「果実」を味わっているかのようである。求心的な指導者はもはや不要になったのだろうか。居館近傍の集落はそのピークを過ぎたとはいえ、存続する。

ところが、8世紀から9世紀にかけては、住居数をもっとも少なく、このことは1区1号井戸における祭祀の停止と軌を一にするようである。9世紀前葉には地割れを生じさせるほどの地震が起こり、集落住民は立地上の不安からこの地を離れていったのではないだろうか。古墳時代以来の度重なる自然災害の記憶が作用したかも知れない。

9世紀後半以後、三ッ寺II遺跡の住居数は漸増の傾向にあるが、居館の内部にも竪穴住居が営まれるようになる。三ッ寺II遺跡でみられる9世紀代の集落衰退傾向は、周辺遺跡では必ずしも認められない。坂口一氏の研究によれば(注9)、本遺跡の南2kmに位置する熊野堂遺跡では、9世紀代の住居数が最大であり、保渡田東遺跡でも同様である。限られた調査範囲ではあるが、5世紀代に出現し、8～9世紀代に住居数が減少するという三ッ寺II遺跡の盛衰と似た傾向を示すのは、中林遺跡・井出村東遺跡・三ッ寺III遺跡などの、居館近傍の遺跡である。8～9世紀代に居館近傍の遺跡で住居数が減少し、それらを取り巻く外側の遺跡で住居数が増加するという、『ドーナツ化』現象が指摘できる(注10)。この住居数のドーナツ化が資料の制約によるものなのか、実際にあった現象なのかは不明であるが、少なくとも居館を支えた近接する集落で、この時期に人口減少が起こったことは、確かなことであろう。

(関)

注

- 1 土器の編年については、主として次の諸論考を参照した。
坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24号 1986、坂口 一「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化』208号 1986、「榛名山二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥北原遺跡」1986ほか、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「三ッ寺I遺跡」1988、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「三ッ寺III・保渡田遺跡・中里天神塚古墳」1985、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「舟橋遺跡」1989
- 2 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「三ッ寺I遺跡」1988、79頁
- 3 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「三ッ寺III遺跡」1985、29頁
- 4 富岡市教育委員会「本宿・郷土遺跡発掘調査報告書」1981、181頁、GD12号溝出土土器
- 5 勢多郡柏川村前田遺跡5号住居出土品に類似する。柏川村教育委員会「前田F1」1982、50頁
- 6 子持村教育委員会「黒井峯遺跡確認調査概報」1986、現地説明会資料ほか
- 7 前掲注3、182頁ほか
- 8 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「田端遺跡」1988、173頁ほか
- 9 坂口 一「5世紀代における集落の拡大現象」『古代文化』第42巻2号、1990
- 10 東山道開設に伴う路線沿い集落の廃絶という推定は、熊野堂遺跡第I地区(推定東山道を検出している)における当該時期の住居数増加現象と合わない。

第4節 三ッ寺II遺跡出土人骨について

聖マリアンナ医科大学 森本岩太郎

1 はじめに 2 人骨の出土状態および所見 3 若干の考察 4 まとめ

1 はじめに

昭和56年9月、群馬県群馬町三ッ寺II遺跡3区の土壌内から室町時代に属すると思われる古人骨2個体分が出土した。群馬県埋蔵文化財調査事業団からこの人骨の鑑定を依頼されたので、ここに報告する。

2 人骨の出土状態および所見

3区の2号・3号土壙から各1体分の土葬人骨が出土した。これらの人骨の保存状態は良くない。人骨片は一応の形を保っているが、少し強く触れると壊れてしまう程度の強さでしかない。したがって、土圧により変形しているものが多い。また、欠損部分も多い。残存する大小の骨片は、接合してできるだけ復元につとめたが、元の形に戻らないほど変形していたり、欠損部があるため相互に接合できない場合が多かった。

(a) 3区2号墓壙出土人骨(写真1~4)

壮年期の女性人骨1個体分であると思われる。長軸を南北にとる、ほぼ120×80cm大の方形墓壙内の北寄り3/8部において、北頭位右側臥屈位で出土した。頭蓋は墓壙の北壁付近にある。背をゆるく丸め、左肩が右肩より西に位置するように上体が右にねじれているので、頭蓋は顔面を墓壙底に向けている。左肘は上腹部(ミズオチ)の前にあり、強く屈曲しているが、右肘については分からない。左右の股関節・膝関節も強く屈曲している。左膝が右膝より頭側にあるので、左の大腿骨・脛骨・腓骨が右大腿骨の上を斜めに横切っている。古銭1枚が伴出した。

頭蓋は、かろうじて輪郭が分かる程度に復元できた。骨質は薄い。額の下半が垂直に近い。眉間は発達せず、正中線上で額から眉間・鼻根・鼻背に至るプロフィールは凹凸が少ない。外後頭隆起・乳様突起が小さい。頭蓋冠の主要縫合を見ると、内板は閉鎖しているのに、外板はまだ部分的に閉鎖しているに過ぎない。下顎骨はきしゃで、揺り椅子型に属し、下顎角が内反する。左眼窩上孔が存在するが、左鼓室骨裂孔・左右の副オトガイ孔は見られない。これとは別に、頭蓋の復元に際して接合の不能な骨片としては、大小様々な頭蓋冠片・左側頭骨の錐体片などがある。歯および歯槽の状況を次にしめす。

××××4321	×234××××
×6●543●●	●2345678

ただし、アラビア数字は残存する永久歯、●印は歯の病的脱落による歯槽閉鎖、×印は欠損のため状況不明であることを、それぞれ示す(以下も同様)。下顎の左第1・2大臼歯は舌側に、また右第2

大臼歯は前にそれぞれ傾いている。歯の咬合様式は鉤状咬合型で、歯槽性突顎が見られる。咬耗度は前歯が Broca 2 度、後歯が同 1 度である。齶蝕は認められない。注目されるのは、上顎右側中切歯の切縁外側およそ 3/5 部に限局的な軽度の異常摩耗が認められることである。この異常摩耗面は後上方から前下方へ向かって傾斜している。

椎骨については、頸椎・下部胸椎・腰椎の骨片しか残っていないが、いずれも極度に保存が悪く、正確な所属部位を確認できるのは第 2 頸椎（軸椎）1 個だけである。

上肢骨では、左の鎖骨片・肩甲骨の肩甲棘片のほか、左右の上腕骨体・橈骨体・尺骨体の各骨片がある。鎖骨・上腕骨・橈骨・尺骨はいずれも細い。



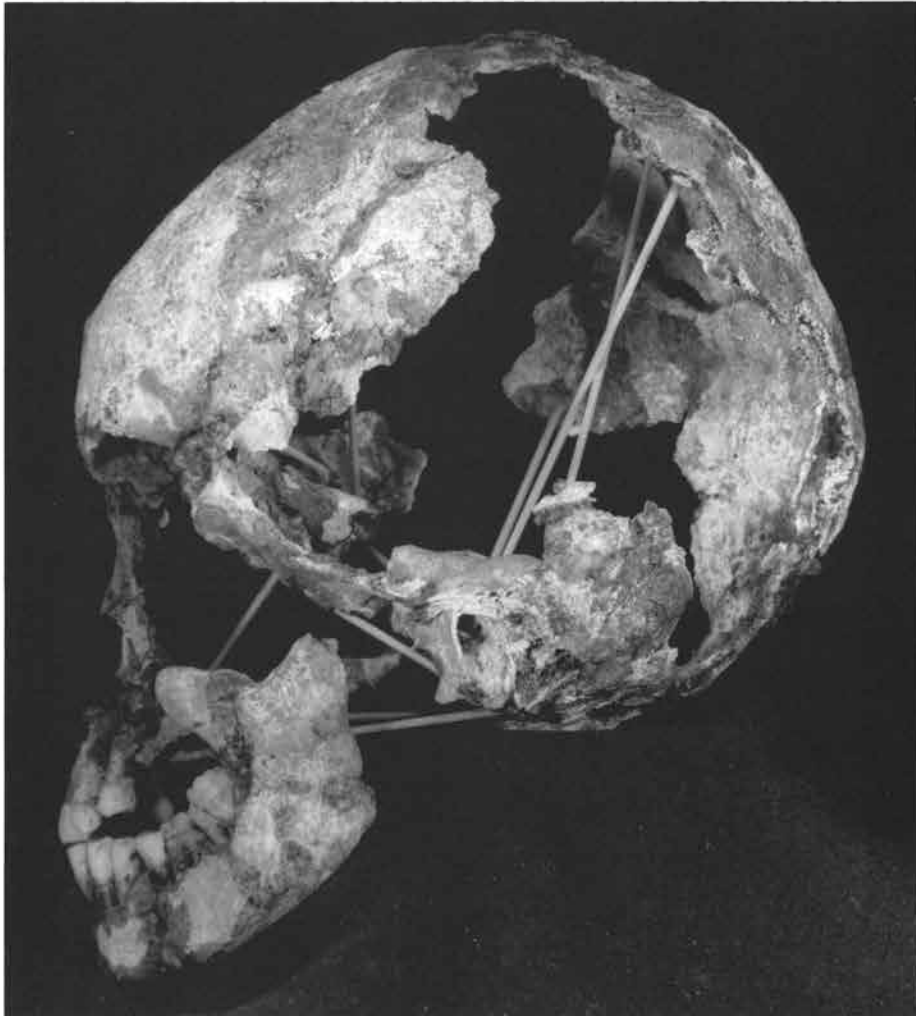
4 節-写真 1. 3 区 2 号土壌出土女性人骨の頭蓋前面観。

下肢骨では、左右の腸骨片・大腿骨体と大腿骨頸・脛骨体・腓骨体の各片が残っている。下肢長骨も太くない。

(b) 3区3号墓墳出土人骨(写真5～6)

成人直前の年齢かと思われる青年期男性人骨1個体分である。ほぼ140×90cm大で、長軸を南北にとり東側に底辺をもつ台形状の墓墳内の西寄り半分において、北頭位右側臥屈位で出土した。土圧により胸が下方を向くように体幹が右にねじれているので、左肩が西、右肩が東に位置し、その結果上半身だけについて言えば俯臥位のように見える。それに関連して、頭蓋は顔面部の右半を斜めに墓墳底側に向けている。左右の肘関節は強く屈曲し、左肘は上腹部(ミズオチ)の前にあり、右肘は体幹の下にある。左手は下顎骨の右側に位置する。左右の股関節・膝関節も極度に屈曲し、左膝が右膝のやや前にある。古銭3枚が伴出した。

頭蓋については、脳頭蓋のおよそ右前半分と顔面頭蓋のほぼ正中下半部が残存する。骨質はそれほど厚くない。頭蓋冠の3主要縫合を見ると内板も外板もほとんど開いている。前頭結節・頭頂結節は

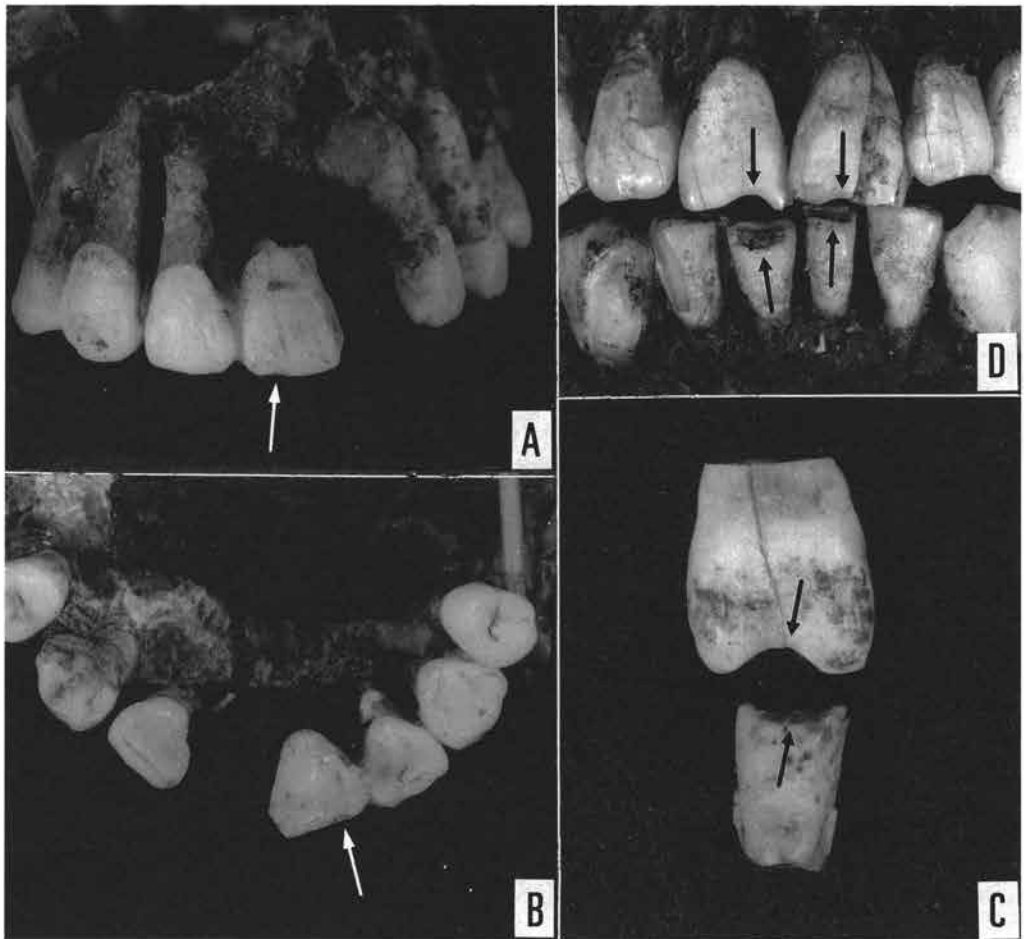


4節一写真2. 3区2号土墳出土女性人骨の頭蓋左側面観。

目立たない。上・下顎が比較的良く残っているにもかかわらず、眉間部を欠き、眼窩部も部分的に欠落しているため、顔面の全形を復元できない。したがって、顔の輪郭は不明である。鼻は中鼻型に属し（鼻指数=49）、歯槽性突顎がある。歯および歯槽の状況を次に示す。

8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	×
8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8

上・下顎の第3大臼歯（智歯）はいずれも萌出途上にある。歯の咬合様式は鉗状咬合型で咬耗度は上顎第1大臼歯・下顎中切歯が Broca 2度であるが、他はすべて同1度である。齶蝕は見られない。

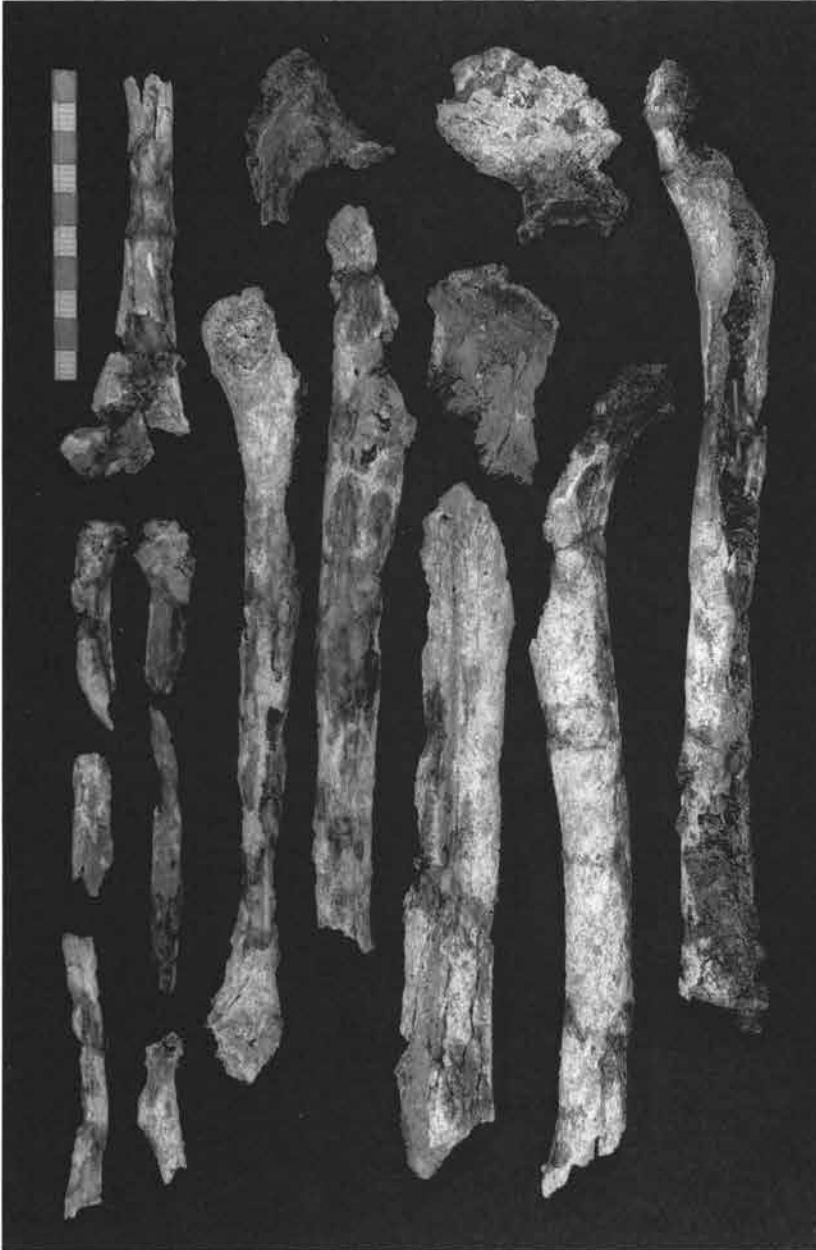


4節一写真3. 中切歯切縁に見られる異常摩耗（矢印）の比較。AとBは三ッ寺II遺跡3区2号土壇出土女性人骨の上顎右中切歯の場合で、Aが唇側面観、Bが舌側面観。Cは長野県佐久市前田遺跡出土女性人骨の上・下顎右中切歯の場合（唇側面観）。Dは山梨県北巨摩郡白州町教来石民部館跡遺跡出土女性人骨の上・下顎両側中切歯の場合（唇側面観）。

椎骨については、胸椎の破片が残存するだけである。左右の肋骨片が数個ずつ残っている。

上肢骨では、左肩甲骨の外側角と肩甲棘片のほか、左右の鎖骨・上腕骨体・橈骨体・尺骨体の各骨片がある。橈骨および尺骨の遠位骨端は骨端線で骨体から離れている。ほかに、左手の大稜形骨・小稜形骨・有頭骨・有鉤骨などの手根骨、第一中指骨底、指骨片5個なども残っている。

下肢骨では、まず左右の寛骨片がある。左は恥骨片であるが、右は腸骨・坐骨・恥骨の3骨からなる比較的大きな破片で、寛骨臼が大きく、大坐骨切痕がJ字形を呈する。自由上肢骨としては、左右、の大腿骨・脛骨体・腓骨体の各骨片がある。比較的保存状態の良い左大腿骨体についてみると、骨体、



4節-写真4. 3区2号土壌出土女性人骨の主要上・下肢骨片。

上部の横断示数は86.2で正型に属するが、骨体中央部の横断示数は116.0で中等度のピラステルの形成が認められる。この骨体中央部は比較的太く、その周径は81mmである。足骨片はいずれも小さく、かつ左右の判別もできないほどの保存の悪さである。

3 若干の考察 (写真3)

2号墓壙から出土した壮年期女性の上顎右側の中切歯切縁の外側𪔐部には、軽度ながら異常摩耗が認められた。これに対応する下顎右側の中切歯は病的に脱落しているので、下顎中切歯の切縁に異常



4節一写真5. 3区3号土壙出土女性人骨の頭蓋前面観。

摩耗が存在するかどうかについては、残念ながら不明である。この程度の切歯切縁の軽度の異常摩耗は、普通は問題にならないが、最近これに類似の顕著な異常摩耗を室町時代の古人骨で2例ほど経験したので、本遺跡出土女性人骨の切歯の異常摩耗にも注目した次第である。

本例に類似する異常摩耗の第一例（写真3C）は、長野県佐久市の前田遺跡出土の室町時代に土葬された成人女性3個体中の壮年期女性1個体に見られた上・下顎の右側中切歯の切縁の異常摩耗である。上顎右側中切歯の切縁中央に正規分布曲線形の、深さ約1mmに達する摩耗があり、これに対応して下顎右側中切歯の切縁も全縁にわたって弓状に異常摩耗している。そのために上・下顎とも、中切



4節-写真6. 3区3号土壌出土女性人骨の主要上・下肢骨片。

歯の異常摩耗部は象牙質が露出するに至っている。上下の異常摩耗面は後上方から前下方に向かって傾斜しているため、上顎切歯の場合は舌側から、下顎切歯の場合は唇側から見ると、摩耗面が唇側で見るとより大きく見える。この例では左側の上・下顎が欠損しているため、左側切歯に異常摩耗があるかどうかについては分からなかった。

第2例（写真3D）は、山梨県北巨摩郡白州町の教来民部館跡遺跡出土の14世紀前半～16世紀中葉の壮年期女性土葬人骨1個体において、上・下顎の両側切歯に見られた異常摩耗である。右側の切歯についての所見は前記の前田遺跡出土の女性人骨の場合とほぼ同様であるが、摩耗ピークが、切縁の中央ではなく、切縁の内側1/3部に偏っている。これに対し、上顎左側の中切歯では異常摩耗は切縁の中央にあり、摩耗の程度も右側の半分ぐらいの浅いものである。下顎左側の中切歯切縁の摩耗は弓形というよりほぼ直線的であり、前後方向の傾斜が少なく、摩耗の程度も右側に比べて軽かった。

これらの2女性の例から考えられることは、(1) 中切歯切縁の異常摩耗の形態が特殊なため、摩耗が食事のためではなく日常の習慣的作業によるものであるらしいこと、(2) 異常摩耗が限局的で、滑らかであり、また摩耗面が前下方に傾斜しているため、その作業は糸状の繊維を口に含み糸を前下方に向けて緊張させるような仕事ではなかったかということ、(3) 摩耗は右側のほうが著しいため、この作業に主として右手が用いられたということ、(4) 異常摩耗が認められるのは、総ての女性ではなく、限られた個体だけであるため、この作業は職業的ないし専従的に行われたと推定されること、などである。具体的にどのような仕事であるかは不詳であるが、女性に限られることから、裁縫とか、染色とか、紡績とかに関連する作業ではないかと思われる。もし、文化史的に、または民俗例として、どのような作業であるかを具体的にご存じの方があれば、ぜひご教示にあずかりたい。

このような類似の2例があるので、三ツ寺II遺跡出土女性の上顎右側中切歯切縁の異常摩耗が、たとえ軽度の摩耗ではあっても、今回は問題とされた。第1例が長野県、第2例が山梨県、そして第3例とも言うべき三ツ寺II遺跡の女性が群馬県と、これらの3例は地域的にも隣接している。またそれらがいずれも室町時代に属することから、上記の3地域に当時は女性に共通な一種の作業が日常的に行われていたと想定することができよう。切歯切縁の異常摩耗度の軽重は、作業内容の変異も多少影響があるかもしれないが、それよりは主として作業量の大小ないし作業期間の長短に関係すると思われる。このように考えてみると今回三ツ寺II遺跡で注目された中切歯の異常摩耗は、信濃（佐久）・甲斐・上野の3国が、室町時代には一種の共通文化圏に属していたという確かな身体的（形質人類学的）証明になり得るとと思われるのである。

4 ま と め

群馬町三ツ寺II遺跡3区の室町時代に属する2号墓から壮年期女性土葬人骨1個体分、同3号墓から青年期男性土葬人骨1個体分が出土した。いずれも北頭位右側臥屈位で、古銭が副葬されていた。2体のうち、壮年期女性人骨はきゃしゃで、病的脱落歯が多く、彼女の上顎右側の中切歯の切縁には、裁縫・染色ないし紡績などに関連した日常的作業によると思われる異常摩耗が認められた。

第5節 三ッ寺II遺跡出土の獣歯・獣骨について

大江 正直

1 はじめに 2 使用した基準 3 結果 4 考察

1 はじめに

上毛野では古墳時代には大和政権の皇宗と近従の豪族がこの地を治め、大和政権の東路の防衛線として重要な地位にあり、古代の群馬県としては最も栄えた時代の一つであった。その東路の防衛線を確保するために馬は重要な役割りを果していたのに違いないが、群馬県では古墳時代に属する馬歯・馬骨の出土例は誠に少なく、僅かに本遺跡の南に接し古墳時代中期・後期に属する有力首長館址とされている三ッ寺I遺跡居館の濠から馬歯・馬骨が出土しているが、これについて宮崎重雄（注1）は「1号馬はこれまで群馬・長野両県から出土した13個体の歯列長のどれよりも長く、居館居住者あるいはその関係者により飼養されていたものであろう。」と述べている。また同時代の馬歯・馬骨の出土例としては筆者が鑑識を担当していた国分寺中間地域（注2）において体高130cm及び135cmと推定される2例の馬歯・馬骨並びに群馬郡北原国分境遺跡（注3）において古墳時代—平安時代に属する馬歯1例が報告されているに過ぎない。

国分寺中間地域においては平安時代以降に属する多数の馬歯・馬骨が出土しており、上野国における平安時代以降の馬の姿及び飼養状況は大部明らかになってきた。しかし前述のように群馬県としては古墳時代に属する馬歯・馬骨の出土例が少ないため大和政権の東路の防衛線確保の一翼を担ったであろうと思われる馬達の姿その他については未だ不明な点が多い。

本遺跡は前述のとおり古墳時代中・後期に属する有力首長館址の北側に接し、それらの人々の居住地域と考えられている遺跡であるため古墳時代に属する群馬県における古代家畜を知るうえでは重要な遺跡である。このような意味で整理担当者から出土した獣歯・獣骨について、種類、性、年令、大きさ等を明らかにし、出土した獣歯・獣骨を通じて本遺跡の性格づけに寄与するよう申し入れがあったので、これらの出土した獣歯・獣骨を検討することにより三ッ寺II遺跡における古墳時代から中世に至る間の馬・牛の実態を少しでも明らかにしたい。

調査方法

- ① 出土獣歯・獣骨を有する獣の種類を検討を行う。
- ② 出土獣歯・獣骨を有する獣の性の検討を行う。馬については犬歯の有無と寛骨について、牛については寛骨について夫々性的特徴を調べて性別を検討する。
- ③ 出土獣歯・獣骨を有する獣の年令を検討する。
- ④ 出土獣歯・獣骨を有する獣の大きさ及び改良度を検討する。出土獣歯については既往の古代及び中世の出土獣歯の計測値（注4）、及び現代の小格馬（注5）及び黒毛和種の計測値（注2）と、出土獣歯の計測値と夫々対比して検討する。出土獣骨はいずれも小骨片であるため獣骨による検

討はさけた。

2 使用した基準

(1) 獣歯・獣骨の部位、記号、各部の各稱及び測定部位

注6、7、8参照。

(2) 獣の大きさの表現方法

- ① 馬の大きさは林田重幸（注9）の体高区分による中形馬、小形馬の表現を用い、中形馬以上のものを大形馬とした。
- ② 牛の大きさは既往の出土した在来の和牛種及び現代黒毛和種の大きさと比較し、「在来の和牛種より大きい」、「黒毛和種よりやや小さい」と言った表現方法を用い、具体的な推定体高は計測値の集積がなく不明のため記載しなかった。

なお馬歯によって馬の体高を推定する場合、現代馬の馬歯を用いて古代～近世の馬の大きさを推定しているが、①在来馬は体の大きさに比較して頭部が大きいいため現代馬の馬歯を用いて古代～近世の馬の大きさを推定する時は実際の大きさよりも多少大きい体高を示す傾向にある。②馬歯は馬骨に比較して個体差が大きく、馬歯による体高推定結果は馬骨による体高推定結果より誤差が大きくなる傾向にあるが、他に代るべき方法がないので推定しないよりは better な方法と考えている。

(3) 獣の年令の表現方法

- ① 馬の年令については市井正次（注10）の幼令馬、壮令馬、老令馬の区分を用いた。
- ② 牛の年令。豊田裕（注11）は主要家畜の性成熟と繁殖供用期間について、牛の繁殖供用開始は14～18ヶ月、繁殖供用限界は14～15年であり、馬の供用開始34～36ヶ月、繁殖供用限界は15～20年としている。直良信夫は『古代遺跡発掘の家畜遺体』（注12）の中で、「生後おそらくは10年を経過していた老牛と思われる」と言う表現を用いている。市井正次は永久歯萌出完了時5才をもって馬の幼令と壮令の区分としている。従ってここでは牛の永久歯萌出完了時4才を基準とし、4才以下を幼令とし、豊田裕の繁殖供用限界を用い14～15才以上を老令とした。牛は切歯によるBaronの年令鑑定法（注13）が用いられている。ただ今回は牛の切歯の出土例がなく、頬歯については長歯タイプと短歯タイプがあり個体によって異なり、磨耗度による具体的な年令判定が出来ないので年令区分のみを記載した。

(4) 単位

獣歯・獣骨の計測値は特別に記載のない限りmmを表わし、比率は%を表わす。

(5) 番号

図中の通番は本文、写真及び附表中の通番と一致する。また明らかに番号が記載されている歯・骨から分離したと思われる小歯片、小骨片は除いた。

3 結 果

(1) 獣歯・獣骨の出土状況

三ツ寺II遺跡の古墳時代から平安時代—中世に至る遺構、住居跡、土坑等の埋土の中から5節—1

図及び5節-4～6図並びに写真に示すとおり馬の上顎切歯6、上顎頬歯29、下顎切歯2、下顎頬歯15、切歯1、小歯片7、下顎小骨片1、軀幹小骨片1計62、牛の上顎頬歯2、下顎頬歯24、小歯片2計28、獣種不明小骨片1、合計91が出土している。

地区別に遺存体の出土状態を見ると表5節-1に見られるとおり、1区が58、63.7%で最も多く、次いで4区が27、29.7%、2区が5、5.5%、3区が1、1.1%の順である。

出土遺存体について獣の種類別に言えば表5節-2に示すとおり、馬62、68.1%、牛28、30.8%、獣種不明1、1.1%で、約70.0%が馬である。時代別に言えば平安時代-中世が最も多く、40、44.0%を占めており、古墳時代以降28、30.7%が之に次ぎ、古墳時代13、14.3%、平安時代5、5.5%の順である。種類別に言えば、馬については平安時代-中世が40、64.5%で最も多く、次いで古墳時代12、19.4%、平安時代5、8.1%の順である。

(2) 出土獣歯・獣骨を有する獣の個体数(最少限度で)

表5節-3及び表5節-4に見られるとおり出土遺存体について個体別に言えば馬が16個体、84.2%、牛が2個体、10.5%、獣種不明1個体、5.3%であり84%が馬である。時代別に言えば古墳時代及び平安時代-中世が夫々5個体、26.3%で、古墳時代以降及び平安時代が夫々2個体10.5%である。種類別に言えば、馬は平安時代-中世が5個体、31.3%で最も多く、次いで古墳時代4個体、25.0%、平安時代2個体、12.5%の順である。牛については古墳時代以降に2個体が出土しているのみである。

この遺跡の特徴は遺存体の出土点数から言えば、馬の出土点数が約70%を占めており、個体数から言えば馬が84%を占めている。また群馬県では古墳時代における馬の出土点数が少ない中でこの遺跡は古墳時代に出土点数で言えば馬が12点、19.4%、個体数で言えば4個体、25.0%を占めていることである。

この遺跡では

- ① 古墳時代の馬歯は殆んど短冊状の小歯片であり、僅かにNo8RM³が殆んど完形を保っているがM³は歯冠長その他に個体差が大きく、1個の馬歯だけでは標式とするには適さないこと。
- ② 平安時代-中世に属するものの中では馬歯の良く整ったものもあるが時代の中が広すぎること。
- ③ 牛は古墳時代以降のものが見られるが小歯片が多く標式牛としては適さないこと。

表5節-1 地区別遺存体出土点数

区	歯			骨			合計
	馬	牛	小計	馬	不明	小計	
1	29	28	57	1		1	58
2	4		4		1	1	5
3	1		1				1
4	26		26	1		1	27
計	60	28	88	2	1	3	91

表5節-3 地区別遺存体出土個体数

区	歯			骨			合計
	馬	牛	小計	馬	不明	小計	
1	12	2	14	1		1	15
2	1		1		1	1	2
3	1		1				1
4	1		1				1
計	15	2	17	1		2	19

備考 3区馬骨1は馬歯1と同一個体であるため小計は0とした。

表5節-2 時代別遺存体出土点数

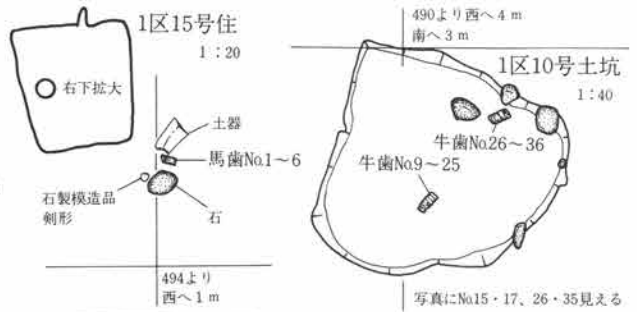
時代	歯			骨			計	%
	馬	牛	小計	馬	不明	小計		
古墳時代	11		11	1	1	2	13	14.3
古墳時代以降		28	28				28	30.7
平安時代	5		5				5	5.5
平安時代~中世	39		39	1		1	40	44.0
不明	5		5				5	5.5
計	60	28	88	2	1	3	91	100.0

表5節-4 時代別遺存体出土個体数

時代	歯			骨			計	%
	馬	牛	小計	馬	不明	小計		
古墳時代	3		3	1	1	2	5	26.3
古墳時代以降		2	2				2	10.5
平安時代	2		2				2	10.5
平安時代~中世	5		5				5	26.3
不明	5		5				5	26.3
計	15	2	17	1	1	2	19	100.0

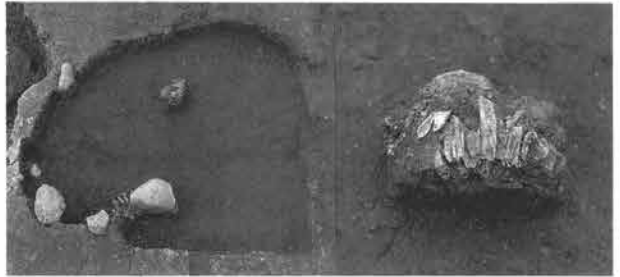


5節-1図 獣骨出土状況



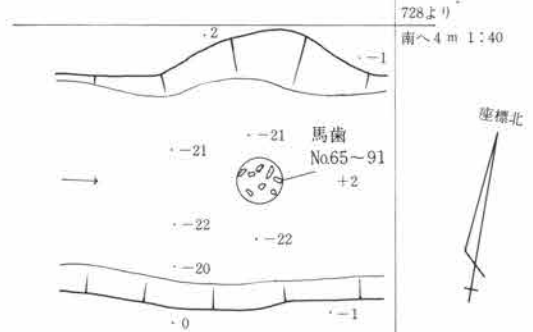
1区15号住

1区15号住居跡より古墳時代後期6C前半に属する馬の左右下顎類歯片5が出土している。土器及び石製模造品を伴って出土し、祭祀に用いられたものと考えられる。小歯片である。



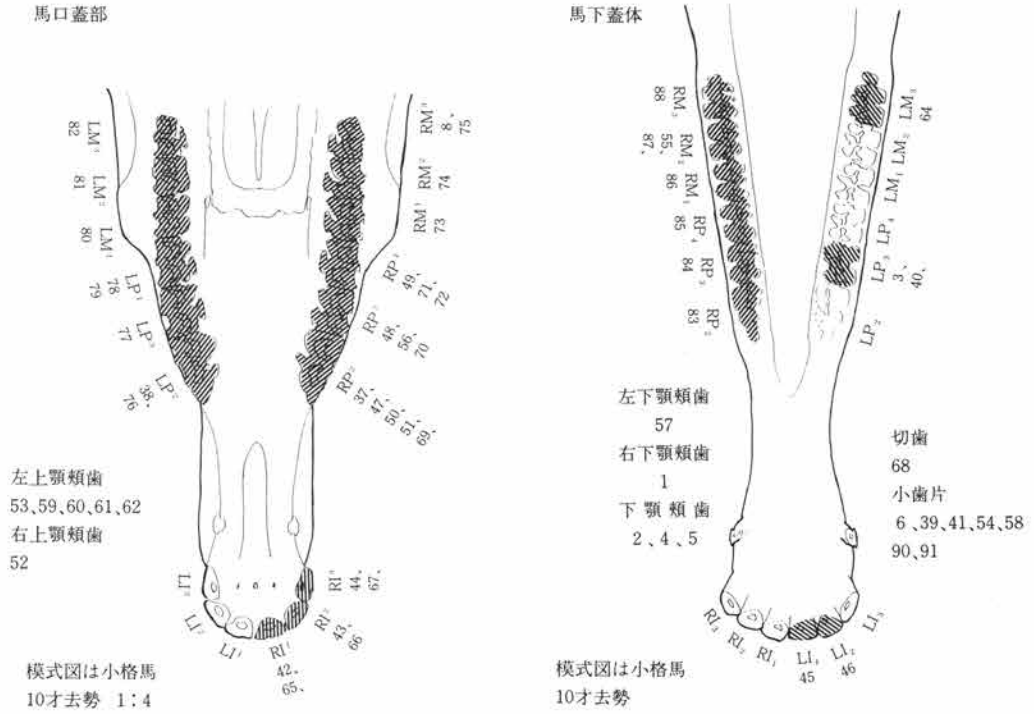
1区10号土坑

1区10号土坑跡より古墳時代以降に属する牛の左右上下顎歯及び左右下顎歯の2個体の牛の類歯が出土している。2個体とも小歯片及び内部エナメル装で、下顎類歯の4歯片のみがNoを確認し得た。

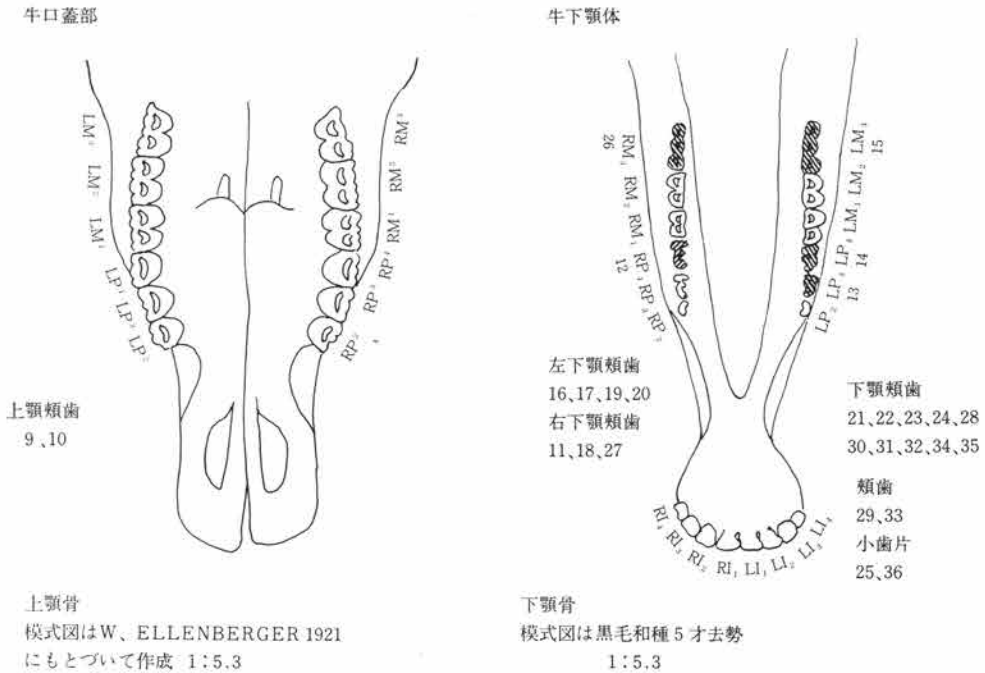


4区B6号溝

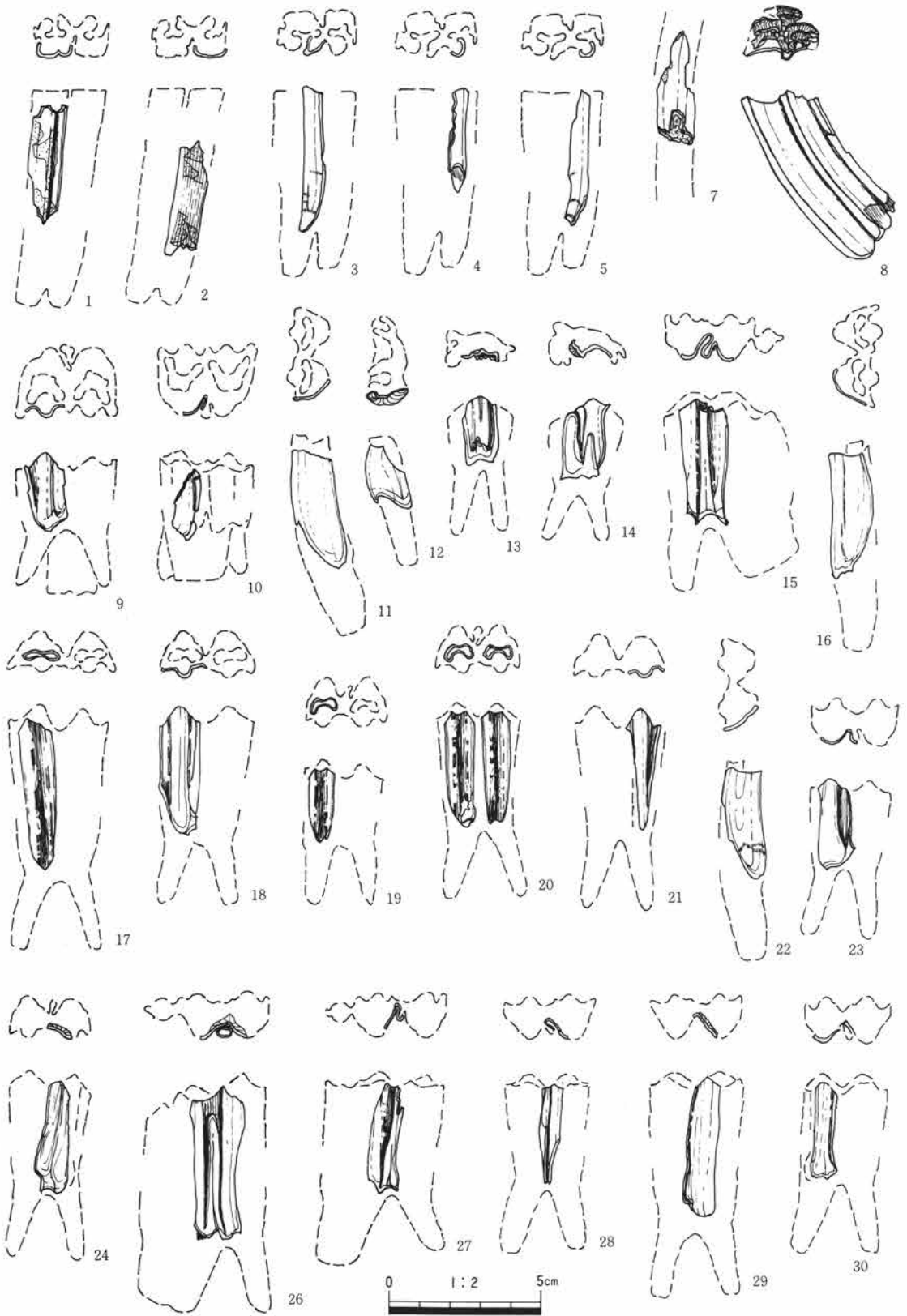
4区B6号溝から平安時代~中世に属する27個の馬歯と数片の下顎骨臼歯部の小骨片が出土している。左上切歯及び下顎切歯並びに左下顎歯を除けば総ての歯がほぼ完形で出土しており、2.5才の幼令馬の歯であるにも拘らず遺存状態は極めて良好であって1体分の頭骨の埋納があったものと考えられる。数字は検出高でcm。



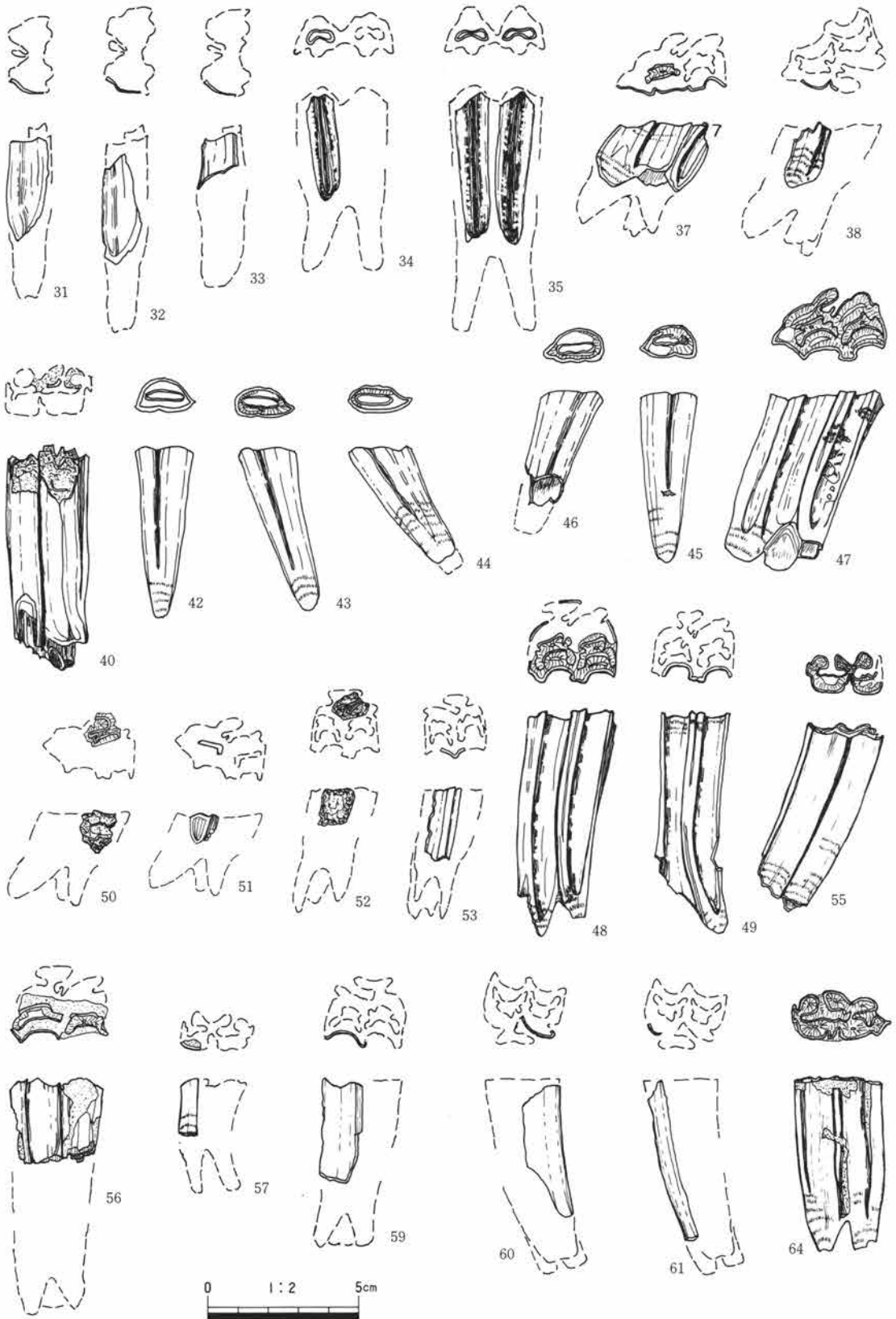
5節-2図 馬上下顎骨における出土馬歯の部位模式図



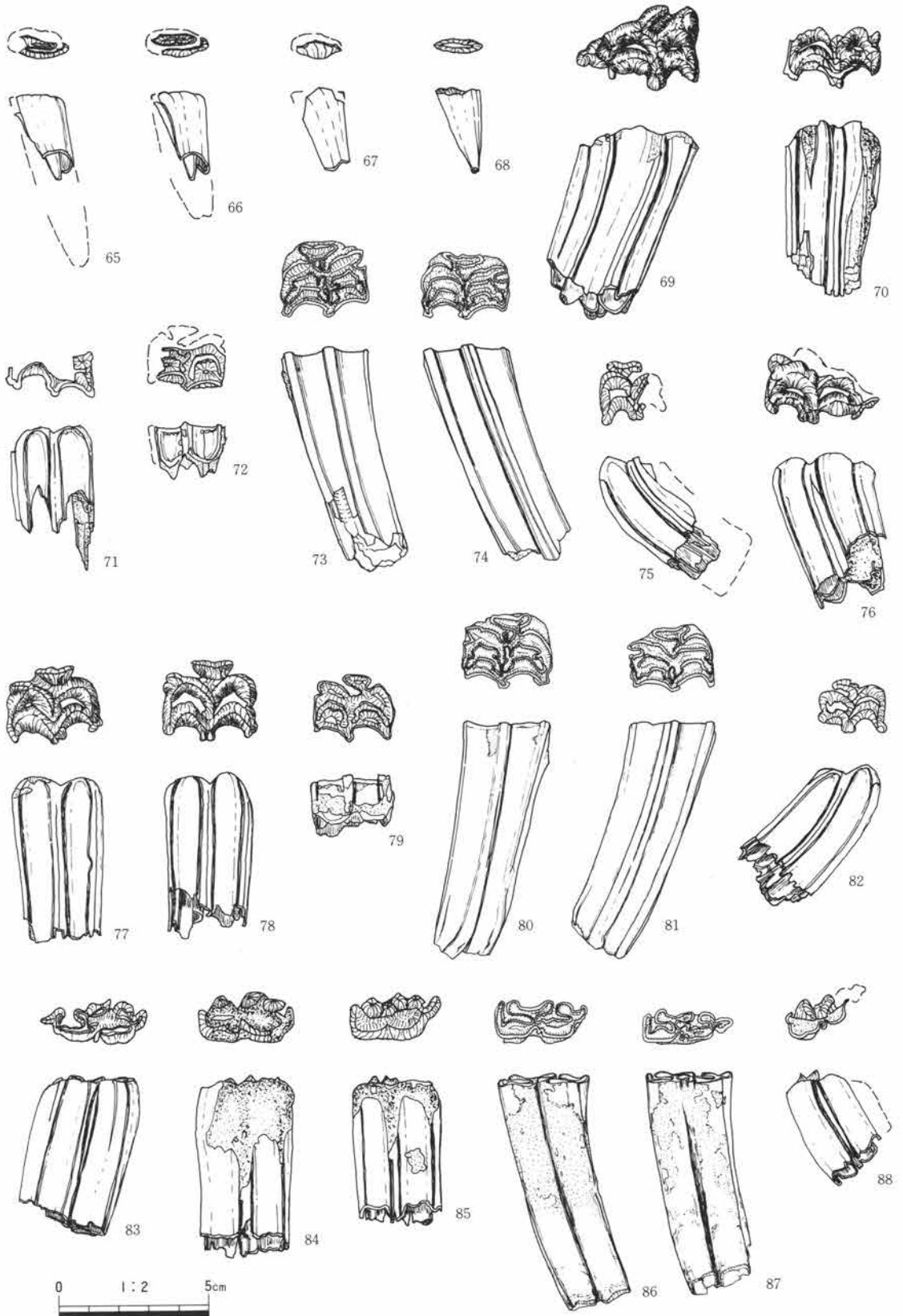
5節-3図 牛上下顎骨における出土牛歯の部位模式図



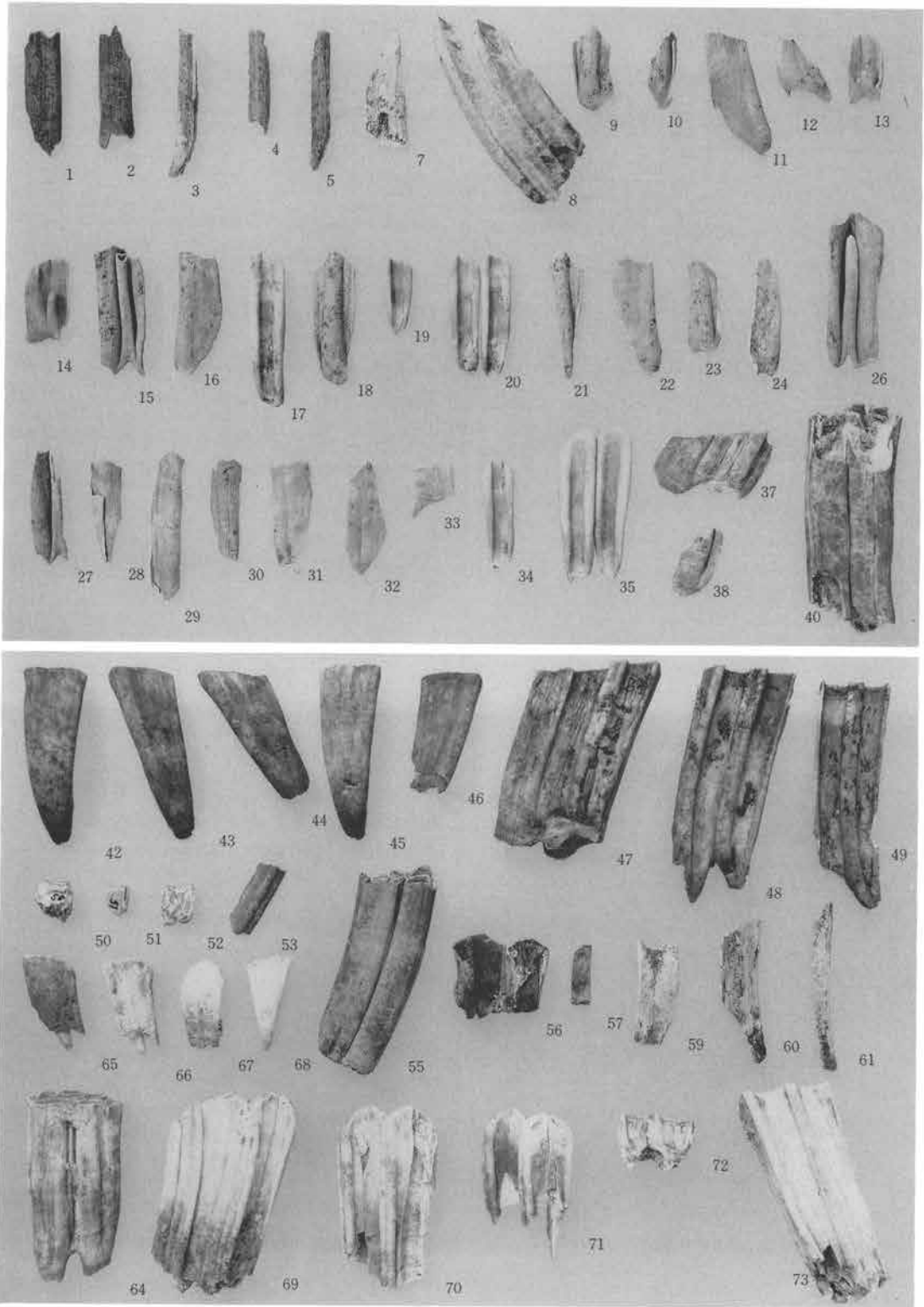
5節-4図 遺存体実測図① No.6, 25は小歯片のため除いた。



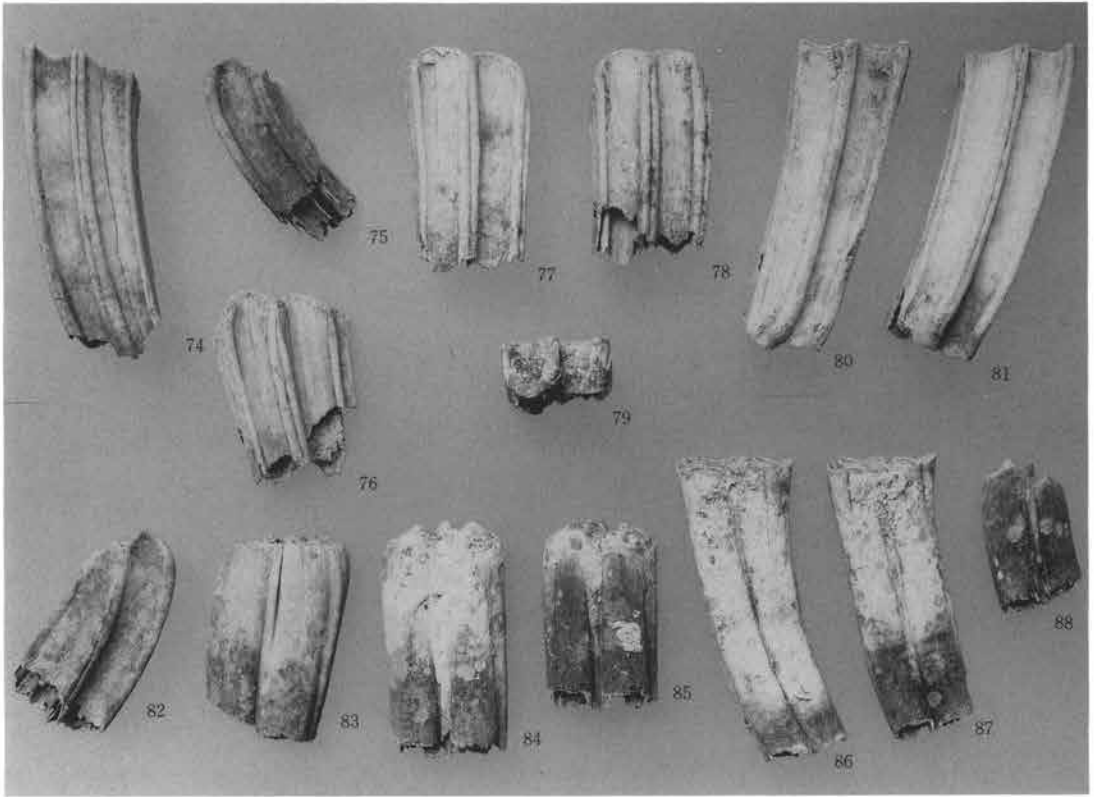
5節-5図 遺存体実測図② No.36, 39, 41, 54, 58, 62, 63は小歯片・小骨片のため除いた。



5節-6図 遺存体実測図③ No.89, 90, 91は小歯片・小骨片のため除いた。



5節一写真1 出土獣歯・獣骨① およそ1:2

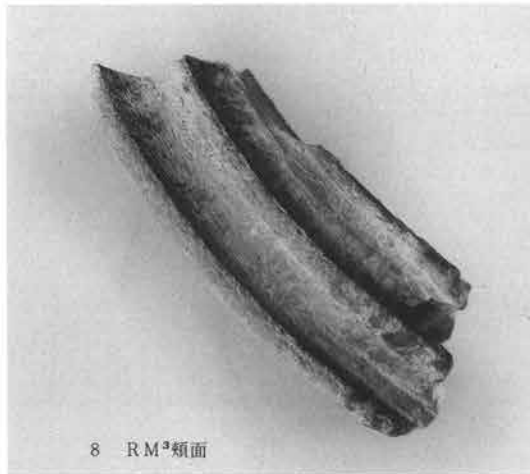


No 8 RM³について (古墳時代)

淡褐色を呈し歯冠表面は風化による無数の細かい縦溝が走り表面は粗ざうで光沢を失っている。歯冠上部は後方に傾き美しい弧状湾曲を示している。全般的にエナメル質は薄く、特に左右に走る内部エナメル質は紙のように薄くなっている。前・中附錐は細い。内部エナメル質は大きく、ちりめん状に細かく波打ち一見複雑に見えるが何となく単純な感じがしている。例えば原錐後谷が大変大きいのに馬歯が全くなかったり、また次錐の一部が後小窩と連結していたりして何となしに不思議で古墳時代ならではの歯相である。



8 RM³咬合面



8 RM³頬面



8 RM³舌面

5節一写真2 出土獣歯・獣骨② 74~88はおよそ1:2 No.8はおよそ1:1

表5節-5 遺存体の出土状態 注：動物名の無いのは馬

出土場所	時代	出土状況	個体の同一性	出土獣歯	獣骨
1区15号住居跡	古墳時代後期6C前半	1区北部に位置する中程度の大きさの15号住居跡北側覆土中から一塊となって出土	同一個体	[1] 右下顎類歯下次歯の一部、[2] 下顎類歯下原歯の一部、[3] LP ₃ 下後附歯、[4] 下顎類歯下後歯、[5] 下顎類歯下後歯又は下内歯、[6] 小歯片、	
1区17号住居跡	古墳時代後期6C後半	1区北部に位置する比較的大きい17号住居跡カマド内から出土		[7] 左前胸部肋骨片、	
1区22号住居跡	古墳時代後期6C前半	1区北部中央に位置する比較的大きい22号住居跡より出土		[8] RM ³ 、	
1区10号土坑跡	古墳時代以降	1区中央部やや東寄りの小さな土坑跡の南側床面より一塊となって出土	同一個体	[9] 牛上顎後臼歯類面主柱エナメル襞、[10] 牛上顎後臼歯前葉舌面エナメル襞、[11] 牛右下顎後臼歯前葉側面エナメル襞、[12] 牛RP ₂ 後側エナメル襞、[13] 牛LP ₃ 舌面中葉エナメル襞、[14] 牛LP ₃ 舌面前・中葉エナメル襞、[15] 牛LM ₃ 類面前・中葉境エナメル襞、[16] 牛左下後臼歯後葉側面エナメル襞、[17] 牛左下後臼歯後葉内部エナメル襞 [18] 牛右下後臼歯舌面前葉主柱エナメル襞、[19] 牛左下後臼歯前葉内部エナメル襞、[20] 牛左下後臼歯内部エナメル襞、[21] 牛下顎後臼歯舌面主柱の一部、[22] 牛下顎後臼歯前側エナメル襞、[23] 牛下顎後臼歯類面柱状膨大部、[24] 牛下顎後臼歯舌面主柱の一部、[25] 牛小歯片、	
1区10号土坑跡	古墳時代以降	1区中央部やや東寄りの小さな土坑跡の北側床面より一塊となって出土	同一個体	[26] 牛RM ₃ 類面前・中葉境エナメル襞、[27] 牛右下後臼歯類面前・中葉境エナメル襞、[28] 牛下顎後臼歯類面葉境の一部、[29] 牛後臼歯柱状膨大部の一部、[30] 牛下顎後臼歯柱状膨大部の基部、[31] 牛下顎後臼歯側面エナメル襞、[32] 牛下顎後臼歯側面エナメル襞、[33] 牛類歯側面エナメル襞、[34] 牛下顎後臼歯前葉内部エナメル襞、[35] 牛下顎後臼歯内部エナメル襞、[36] 牛小歯片、	
1区水田跡	平安時代11C後半～12C初頭	1区B軽石直下の水田跡より出土	同一個体	[37] RP ² 類面の一部、[38] LP ² 舌面原小歯エナメル襞、[39] 小歯片、	
1区474東	平安時代12C初頭～14C	1108年浅間山の噴火によるB軽石中より出土し、この年代に極めて近いものと考えられる	同一個体	[40] LP ₃ 、[41] 小歯片、	
1区5号溝	平安時代～中世	1区の北部中央より西南に走るやや大きい5号溝の覆土中より出土	同一個体 同一個体	[42] RP ¹ 、[43] RP ¹ 、[44] RP ¹ 、[45] LI ₁ 、[46] LI ₂ 、[47] RP ² 、[48] RP ³ 、[49] RP ⁴ 類面エナメル襞、 [50] RP ² 原歯後谷、[51] RP ² 前小窩、[52] 右上顎類歯原歯後谷、 [53] 左上顎後臼歯中附歯の一部、[54] 小歯片、	
1区	不明	詳細不明		[55] RM ₃ 、[56] RP ³ の一部、[57] 左下顎類歯舌面エナメル襞の一部、[58] 小歯片、	
2区西側道6号住居跡	古墳時代後期6C前半	2区北部に位置する大きき中位の住居跡より出土	同一個体	[59] 左上顎後臼歯類面後葉エナメル襞、[60] 左上顎類歯次歯、[61] 左上顎類歯次附歯の一部、[62] 左上顎類歯小歯片、	
2区18号住居跡カマド内	古墳時代後期6C前半	2区西側道中央部南端に位置するやや小さい18号住居跡カマド内より出土		[63] 不明小骨片、	
3区表面	不明	表面採取によるため詳細不明		[64] LM ₁ 、	
4区B6号溝	平安時代～中世	4区南部を東西に走るB6号溝のほぼ中央より溝底面より24cm浮いた状態で出土	同一個体	[65] RP ¹ の一部、[66] RP ¹ の一部、[67] RP ¹ の一部、[68] 切歯内部エナメル質輪、[69] RP ² 、[70] RP ³ の一部、[71] RP ⁴ の一部、[72] Rdm ¹ の一部、[73] RM ¹ 、[74] RM ² 、[75] RM ³ の一部、[76] LP ² の一部、[77] LP ² 、[78] LP ² 、[79] Ldm ¹ 、[80] LM ¹ 、[81] LM ² 、[82] LM ² 、[83] RP ₂ 、[84] RP ₃ 、[85] RP ₄ 、[86] RM ₁ 、[87] RM ₂ 、[88] RM ₃ 、[89] 下顎後臼歯部小骨片 [90] 小歯片、[91] 小歯片、	

表5節-6 遺存体の形態的特徴(歯)

No	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	大きさ及び全体の形	咬合状態	エナメル襞の特徴	欠損状態その他
1～6	馬	下顎類歯の一部5、小歯片1	古墳時代後期6C前半	同一個体である確率は高い	各歯は扁平または丸い楕円状をなす	咬耗は進んでいる	右下顎下次歯は1本の太い縦溝走り、下原歯の断面は軽いアーチ状をなし表面は細かい縦溝が走っている	類面の歯は咬合面と歯根を、舌面は歯根を欠
8	馬	RM ³	古墳時代後期6C前半		四角柱状で美しい弧状湾曲を示す	咬耗の度合いは軽い	淡褐色灰色を呈し歯冠表面は風化により無数の細かい縦溝が走り表面粗ざらうで光沢を失っている。全般的にエナメル襞は薄く、特に左右に走る内部エナメル襞は紙のように薄くなっている。前・中附歯は細い。内部エナメル襞は大きくちりめん状に波を打ち、一見複雑そうに見えるのに何となしに単純で、例えば原歯後谷が大きいのに馬鬃が全くなかったり、また次歯の一部が後小窩と連結したりしていて、何となしに不思議である。後附歯の一部と歯根部を欠くのみで殆んど原相を保っている	
9～25	牛	上顎後臼歯2、下顎類歯14、小歯片1	古墳時代以降	同一個体である確率は高い	短冊状又は楕円状の小歯片	後臼歯の咬耗はやや進む	No.9及びNo.18以外は主柱及び葉片の柱状膨出部の発達悪く輪郭不鮮明。LM ₃ 類面前・中葉境の歯状結節は長く咬合面は袋状をなす	外部または内部エナメル襞の小歯片

第6章 考察とまとめ

No	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	大きさ及び全体の形	咬合状態	エナメル嚢の特徴	欠損状態その他
26~36	牛	下顎後臼歯8、頬歯2	古墳時代以降	同一個体である確率が高い	短冊状又は三角柱状の小歯片	全般的に咬耗軽い	RM ₃ 舌面前・中葉境は大きく、錐状結節の形成は良好。下顎後臼歯は葉片の柱状形成は良好で輪郭鮮明である。側壁のエナメル嚢はやや広い	下顎後臼歯の葉境側壁、内部エナメル嚢のみ
37~39	馬	前臼歯2、小歯片1	平安時代11C後半~12C初頭	同一個体である確率が高い	扁平な薄いエナメル嚢	咬耗著しい	前附離は低く、中附離は僅かに太く、前後離は平らである。前小窩は扁平でエナメル嚢は単純である	頬面及び舌面のエナメル嚢と前小窩のみ
40、41	馬	左下前臼歯1、小歯片1	平安時代12C初頭	同一個体である確率が高い	LP ₃ は太くて長い四角柱	咬耗は軽い	LP ₃ の内外エナメル嚢は厚く、各離は大きくて力強い。特に下後附離、下後離、下次離、下内離谷の大きいことが目立つ。	LP ₃ は咬合面及び歯根を失う
42~49	馬	切歯5、右上前臼歯3	平安時代~中世	同一個体の確率が高い	太くて大きく力強い	咬耗僅かに進んでいる	全体としてエナメル嚢は厚い。切歯の頬面には太い縦溝が走り、内部エナメル質輪は左右に長く、RP ³ の咬合面後端は燕尾を形成している。前臼歯は前附離・中附離極めて大きく、前後小窩及び原離後谷は大きく力強い	切歯は一部に内部象牙質及び歯根舌面を失う RP ³ は頬面のみである
50~52	馬	右上頬歯3	平安時代~中世	同一個体の確率が高い	1×1cm程度の小歯片	咬耗著しい	小さな原離後谷であるが馬嚢は明瞭である。RP ² の原離の一部がP ² 特有の大きな弧を描いている。RP ² 前小窩は極めて薄く、咬合面はL字形を示す	原離後谷は風化した象牙質を伴っている
53	馬	左上後臼歯1	平安時代~中世		細くて短い短冊状	不明	中附離細く、低く、弱々しい。(高さ1.6、巾2.7)	中附離の小歯片
54	馬	小歯片	平安時代~中世				土壌とともに小骨片らしいものが見られるが海綿組織がなく馬歯の内部組織である。極めて小さい原離後谷片を含む	
55	馬	RM ₃	不明		やや扁平な四角柱	咬耗は軽い	下原離と下後離谷の発達の良いことが目立っている	下前隆起の一部と歯根先端を失う
56	馬	RP ³ の一部	不明		大きくて極めて短い四角柱	咬耗は著しい。咬頭山形波形	前附離極めて大きく、前離の湾曲強い。前・後小窩は極めて大きく横に長い。両耳部は大きく頬面に展開する	頬面後葉及び舌面を失っている
57	馬	下顎頬歯の一部	不明		短い櫛状をなす	咬耗著しい	歯根附近は風化のため軽く傾斜に反っている	離の歯根附近の小歯片
58	馬	小歯片	不明				小歯片で土壌を混ざす	
59~62	馬	上顎頬歯片3、小歯片1	古墳時代後期 6C前半	同一個体である確率が高い	短冊状の小歯片	欠損していて不明	エナメル嚢は薄い。後臼歯の中附離は低くて細い。後離の湾曲は少ない	短冊状に割れている
64	馬	LM ₃	不明		扁平な四角柱	咬耗は進んでいる	内外のエナメル嚢は一定の厚みを有し、各離の谷部には外部セメント質が遺残し余り古い時代のものではない。各離は大きくて力強い	歯根先端を欠くが良く原相を保つ
65~91	馬	切歯4、上顎頬歯12、乳歯2、小歯片2	平安時代~中世	同一個体である確率が高い	全般に大きく力強い	未萌出歯10で、萌出永久歯の咬耗は軽い	未萌出歯の咬合面における各離は錐状に閉鎖し凹部を外部セメント質が覆っている。萌出歯の中で上顎後臼歯は内部エナメル嚢やや複雑であって大きくて力強い。特に両小窩、原離後谷の大きいことが目立っており、馬嚢は大きくて長い。上顎頬歯の歯冠の歯冠近く、下顎頬歯の頬面に外部セメント質の遺残顕著である	

注 同一個体である確率高いとは、出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状、歯相等から同一個体である確率が高いと言う意味である。

表5節-7 遺存体の形態的特徴(骨)

No	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特徴	欠損状態その他
7	馬	左前胸部肋骨	古墳時代後期 6C後半		灰白色の焼骨の小骨片である。軽く後方に反り、断端は半月状を示し、肋骨の上部であることを示している。緻密骨は薄く、内部は細かい海綿骨によって満たされている。	胸椎前端に近い肋骨の一部である
63	不明	小骨片	古墳時代後期 6C前半		灰白色で白い壁土状の多数の小骨片が土壌中に混在している。いずれも管状骨の一片であって、直径1cm程度の小さい管状骨から大きい股骨と思われる骨までの焼骨の小骨片である。	多量の土壌を含む
89	馬	下顎体臼歯部小骨片	平安時代~中世	No65~No91と同一個体である確率が高い	灰白色を呈し、粗ぞうで脆い。厚さ5~6mmの扁平な10数個の小骨片である。内面には歯根痕、歯冠根等の凸凹はないため部位は不明である。表面には無数の細いひび割れが平行に走っている。	

注 同一個体である確率が高いとは、出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状、骨相、歯相、等から同一個体である確率が高い、と言う意味である。

などの理由から今回は標式獣の設定は避けた。また出土遺存体の出土状況は表5節-5に示すとおりである。

(3) 出土獣歯・獣骨の遺存状態並びに形態

この遺跡の出土獣歯・獣骨は古墳時代から平安時代までに属する歯・骨が50.5%、平安時代-中世に属する歯骨が44%を占め時代的には古いものが多いだけに馬歯・牛歯とも短冊状に割れた小歯片が多く、また獣骨も小骨片であるため、時代的には貴重なものが多かったにも拘らず詳しいことがわからなかったことは残念であった。No.1～No.91の出土獣歯・獣骨の遺存状態並びに形態的特徴は表5節-6及び表5節-7のとおりである。

(4) 出土獣歯・獣骨を有する獣の性別

〔馬〕 犬歯及び寛骨を確認することが出来なかったので性別は不明である。

〔牛〕 寛骨を確認することが出来なかったので性別は不明である。

(5) 出土獣歯・獣骨を有する獣の年齢

餌料が異なるので現代馬、現代牛の歯の磨耗度をもって古代及び中世の馬、牛の年齢を類推することは妥当でないと考えられるが、一応現代馬、現代牛の歯の磨耗度をもって出土した馬歯、牛歯を有する獣類の年齢を類推すると表5節-10のとおりである。なお夫々の獣歯・獣骨の計測値は表5節-8、9に示すとおりである。

〔馬〕

- ① 古墳時代 表5節-11に示すとおり古墳時代出土個体数は5個体でそのうち年齢を判定し得る個体は4個体である。その4個体の平均年齢は 9.2 ± 3.2 才であった。5個体の年齢区分は壮令3、幼令1、不明1で、60%が壮令で、20%が幼令であり、老令馬はいなかった。

4個体の平均年齢が 9.2 ± 3.2 才であることについては国分寺中間地域出土の269個体のうち年齢を判定出来た132個体の平均年齢が 9.3 ± 5.9 才であることから三ッ寺II遺跡における平均年齢は1時代の平均年齢としては普通のものであると言い得る。

- ② 平安時代 表5節-10に示すとおり平安時代に属する出土個体数は2個体であり、それらの年齢は17.0才及び4才であった。
- ③ 平安時代-中世 表5節-10に示すとおり平安時代-中世に属する出土個体数は2個体であり、それらの年齢は6.7才及び2.5才で若いものであった。

〔牛〕

古墳時代以降 表5節-12に示すとおりこの時代の牛の出土個体数は2個体であって、年齢区分から言えば2個体とも壮令に属している。

(6) 出土獣歯・獣骨を有する獣の大きさ

〔馬〕

表5節-11に示すとおり全時代を通じて大きさ判定可能な個体は合計11個体の馬歯・馬骨が出土しているが、その11個体の平均体高は 133.5 ± 3.8 cmで全時代を通じての平均体高としては高いものである。

- ① 古墳時代 群馬県は古墳時代に属する馬歯の出土例は誠に少なく、僅かに三ッ寺I遺跡及び国分

表5節-8 出土遺存体計測値(歯)

No	種類	獣歯の部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頰側・唇側 歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頰側-舌側)	重量g	摘 要
1	馬	右下顎歯下次錐	長11.4	巾5.5		現 39.5	39.5	1.2-不能	1.2	
2	馬	下顎歯下原錐	長10.8	巾5.3		現 38.1	38.1	1.2-不能	0.9	
3	馬	LP ₃ 下後付錐	長 8.3	巾5.6		40.1	45.9	不能-1.2	1.1	
4	馬	左下顎歯下次錐	長 6.4	巾2.8		現 33.1	33.1	不能-1.2	0.7	
5	馬	下顎歯の一部	長 6.5	巾3.9		36.2	43.4	不能-1.3	0.8	
6	馬	小歯片							9.3	
8	馬	RM ¹	23.8	19.1	80.3	56.2	65.6	1.4-0.8	22.6	
9	牛	上顎後臼歯頰面	長11.9	巾4.3		24.8	24.8	1.1-不能	1.0	
10	牛	上顎後臼歯前葉舌面	長 8.2	巾2.4		欠損		不能-1.2	0.5	
11	牛	右下顎後臼歯前葉		巾12.9		欠損	39.8	厚 1.2	1.5	
12	牛	RP ₃ 後側エナメル襞		巾13.2			23.6	厚 1.1	1.0	
13	牛	LP ₃ 舌面中葉	長11.0	巾6.3		21.8	21.8	不能-1.2	0.9	
14	牛	LP ₃ 舌面前・中葉	長13.8	巾4.3		舌側26.2	26.2	不能-1.2	1.3	
15	牛	LM ₃ 頰面中葉境	長14.3	巾7.6		40.6	40.6	1.3-不能	2.4	
16	牛	左下顎後臼歯後葉	長 4.9	巾11.6			38.2	厚1.2	1.6	
17	牛	左下顎後臼歯後葉	長11.1	巾4.8			高49.5	舌側1.2	3.2	
18	牛	右下顎後臼歯舌面	長13.2	巾4.0		舌側41.6	41.6	不能-1.1	1.5	
19	牛	左下顎後臼歯前葉	長 8.8	巾4.5			23.7	舌側1.2	0.8	
20	牛	左下顎後臼歯内部エナメル襞	長 9.6	巾5.3			37.3	舌側1.2	2.1	
			長 9.6	巾4.8			37.7	舌側1.2	1.9	
21	牛	下顎後臼歯舌面主柱	長11.7	巾3.2			39.8	-1.2	0.9	
22	牛	下顎後臼歯前側		巾7.1			37.4	厚0.7	1.0	
23	牛	下顎後臼歯頰面	長 8.8	巾2.5		28.6	28.6	1.0-不能	1.2	
24	牛	下顎後臼歯舌面主柱	長 7.4	巾1.7		舌側37.1	37.1	不能-0.9	1.0	
25	牛	小歯片							9.6	土壌を含む
26	牛	RM ₃ 頰面前・中葉境	長16.9	巾7.6		48.3	48.3	1.3-不能	3.3	
27	牛	右下顎後臼歯頰面	長 9.1	巾5.8		35.9	35.9	1.2-不能	1.2	
28	牛	下顎後臼歯頰面葉境		巾9.8		欠損	32.4	1.2-不能	1.1	
29	牛	後臼歯柱状膨大部	長 7.9	巾1.8		46.5	46.5	1.3-不能	1.4	
30	牛	下顎後臼歯葉片	長 9.5	巾1.8		欠損	31.8	1.2-不能	0.8	
31	牛	下顎後臼歯側面		巾12.1			32.4	厚1.2	0.9	
32	牛	下顎後臼歯側面		巾12.6			34.8	厚1.2	1.0	
33	牛	頰面側面エナメル襞	長11.4				16.0	厚1.2	0.2	
34	牛	下顎後臼歯前葉	長 9.7	巾5.5			舌側35.1	厚1.4	1.2	
35	牛	下顎後臼歯内部エナメル襞	長10.0	巾5.1			舌側48.8	厚1.2	3.1	
			長10.6	巾4.5			舌側48.5	厚1.4	3.0	
36	牛	小歯片							4.1	土壌を含む
37	馬	RP ² 頰側の一部	現32.5			19.0	22.5	1.3-不能	3.6	推定歯冠長33.6
38	馬	LP ² 舌面原小錐	現11.4			舌側23.4	23.4	不能-1.0	0.7	
39	馬	小歯片							5.7	
40	馬	LP ₃	26.6	16.1	60.5	59.6	72.7	1.2-1.1	24.3	
41	馬	小歯片							9.3	
42	馬	RI ¹	19.3	10.9	56.5	46.1	54.7	1.4-1.4	6.2	
43	馬	RI ²	19.2	10.4	54.2	46.8	56.4	1.2-1.3	7.5	
44	馬	RI ³	21.6	9.7	44.9	44.9	48.2	1.2-1.3	5.3	
45	馬	LI ¹	18.6	11.1	59.7	45.6	54.1	1.5-1.1	7.9	
46	馬	LI ²	19.9	10.9	54.8	現 36.1	40.1	1.4-1.3	5.2	
47	馬	RP ²	37.1	24.2	65.2	48.1	64.2	1.6-1.0	26.8	
48	馬	RP ² の一部	27.9			55.8	73.5	1.2-不能	19.9	
49	馬	RP ² 頰面エナメル襞	現22.1			57.9	76.7	1.2-不能	6.3	
50	馬	左上顎後臼歯中附錐	長 8.8	巾3.1			24.9	厚1.2	0.5	中附錐高1.6、巾2.7
51	馬	RP ² 原錐後谷	長12.1	巾8.3			11.4	厚0.8	0.7	原錐後谷先端巾5.1
52	馬	RP ² 前小窩	長 8.0	巾4.2			9.2	厚0.7	0.2	
53	馬	右上顎歯原錐後谷	長10.5	巾5.6			12.3	厚0.8	0.7	原錐後谷先端巾4.8
54	馬	小歯片							34.6	
55	馬	RM ₂	24.9	13.4	53.0	56.1	61.7	1.2-0.9	20.9	
56	馬	RP ² の一部	現29.0	現17.2		26.3	26.3	0.9-不能	6.5	推定歯冠長29.5
57	馬	左下顎頰歯舌面	長 5.8	巾3.4			高19.1	不能-0.8	0.1	
58	馬	小歯片							0.6	
59	馬	左上顎頰歯頰面後葉	現13.4				33.4	0.5-不能	1.2	
60	馬	左上顎頰歯次錐	現12.6				45.1	不能-0.6	1.1	
61	馬	左上顎頰歯次附錐	現 5.4				53.2	不能-0.6	0.8	
62	馬	小歯片							42.9	多量の土壌を含
64	馬	LM ₃	29.6	14.8	50.0	43.2	57.1	1.4-1.1	22.1	
65	馬	RI ¹ の一部	現15.2	現13.3	欠損	欠損	31.9	1.1-不能	1.5	
66	馬	RI ² の一部	現16.7	現6.1	欠損	欠損	31.2	1.1-不能	2.2	咬合面欠損
67	馬	RI ³ の一部	現14.5	現5.2	欠損	欠損	27.8	1.4-不能	2.1	
68	馬	切歯内部エナメル輪	長14.5	巾6.3			26.5	不能-0.4		重量№67に含

第5節 三ッ寺II遺跡出土の獣歯・獣骨について

No	種類	獣歯の部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頬側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚(頬側-舌側)	重量g	摘	要
69	馬	RP ²	37.0	24.0	79.5	64.1	64.1	咬耗開始	36.4		
70	馬	RP ³ の一部	30.2	欠損	欠損	欠損	57.6	未咬耗	18.6		
71	馬	RP ⁴ の一部	27.4	欠損	欠損	欠損	48.4	未咬耗	6.2		
72	馬	Rdm ₁ の一部	現22.8	現15.9	欠損	9.8	17.4	1.3-不能	4.1		
73	馬	RM ¹	28.1	25.3	90.1	62.4	77.0	1.2-1.1	45.6		
74	馬	RM ²	28.6	22.8	79.6	70.3	79.5	1.4-0.9	44.2	推定正常歯冠長26.3萌出歯	
75	馬	RM ³ の一部	現20.4	現19.4	欠損	欠損	50.1	未咬耗	12.9		
76	馬	LP ² の一部	34.5	現19.5	欠損	欠損	51.8	未咬耗	21.3		
77	馬	LP ³	30.1	24.8	82.4	欠損	56.2	未咬耗	31.9		
78	馬	LP ⁴	28.8	24.6	85.4	欠損	54.9	未咬耗	25.2		
79	馬	Ldm ⁴	27.1	25.5	94.1	10.2	15.2	1.0-0.8	7.8		
80	馬	LM ¹	28.6	25.2	88.1	72.2	81.1	1.2-1.1	50.7	推定正常歯冠長26.4萌出歯	
81	馬	LM ²	27.4	22.4	81.8	74.3	83.4	1.2-1.0	48.4		
82	馬	LM ³	25.3	19.5	77.1	欠損	56.7	未咬耗	17.8		
83	馬	RP ₂	31.0	14.2	45.8	40.1	52.3	咬耗開始直後	19.9		
84	馬	RP ₃	31.5	16.2	51.4	51.3	61.2	未萌出歯	26.8		
85	馬	RP ₄	29.5	15.0	50.8	38.9	49.8	未萌出歯	17.5		
86	馬	RM ₁	29.9	15.4	51.5	66.8	75.5	1.3-0.8	32.4	推定正常歯冠長26.8萌出歯	
87	馬	RM ₂	29.1	13.4	46.0	60.4	72.4	1.2-1.0	27.1	推定正常歯冠長26.0萌出歯	
88	馬	RM ₃	現22.6	11.8	欠損	27.7	40.0	未萌出歯	17.9		
90	馬	小歯片							32.7		
91	馬	小歯片							18.9	土壌を含む	

表5節-9 出土遺存体計測値(骨)

No	種類	獣骨の部位	測定部位と測定値	重量	摘	要
7	馬	左前胸部肋骨片	現最大長	1.1		
			現最大巾 厚さ			
			36.6 13.1 4.0			
63	不明	小骨片		44.0		
89	馬	下顎体臼歯部小骨片		8.3		

表5節-10 出土遺存体を有する獣類の年令及び大きさ

通番	種類	獣歯・骨の部位	時代	性	年令		大きさ			摘	要
					推定年令	年令区分	推定体高cm	体高区分	同時代及び現代獣との比較		
1~6	馬	下顎類歯の一部5、小歯片1	古墳時代後期6C前半	不明	11~13才	社令	132.8(130~140)	中形馬の中では中位の馬	欠損甚しく不明		
7	馬	左前胸部肋骨片	古墳時代後期6C後半	不明	不明	不明	不明	不明	不明		肋骨の巾が小さいので小さい馬
8	馬	RM ¹	古墳時代後半6C前半	不明	4才	幼令	133.9	中形馬の中では中位の馬	当時の馬とすると巾率はほぼ同じ。現代小格馬と比較すると歯冠巾、巾率ともに同じ		
9~25	牛	上顎後臼歯2、下顎前臼歯3、下顎後臼歯11、小歯片1	古墳時代以降	不明	不明	社令	不明	現代黒毛和種よりやや小さい	不明		
26~36	牛	下顎後臼歯8、類歯2	古墳時代以降	不明	不明	社令	不明	現代黒毛和種よりやや小さい	欠損甚しく不明		
37~39	馬	前臼歯2、小歯片1	平安時代11C後半~12C初頭	不明	17.0才	老令	127.2	小形馬の中では大きい馬	欠損甚しく不明		
40, 41	馬	左下顎前臼歯1、小歯片	平安時代12C初頭	不明	4才	幼令	130.0	中形馬の中では小さい馬	同時代の馬と比較すると歯冠巾やや大きく、巾率や大き。現代小格馬と比較すると歯冠長はほぼ同じであるが歯冠巾、巾率ともに30%小さい		
42~49	馬	上顎切歯5、右上顎前臼歯3	平安時代~中世	不明	6.7才(5.6~8)	社令	135.8(129.0~142.3)	中形馬の中では大きい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともに同じ。現代小格馬と比較するとほぼ同じ		1 ¹ 燕尾を形成し8才と考えられるが咬耗の度合いは若い
50~52	馬	右上顎類歯の一部3	平安時代~中世	不明	23.4才	老令	不明	小形馬	欠損甚しく不明		RP ² 原産後谷先端巾5.1, 4.8
53	馬	左上後臼歯の一部	平安時代~中世	不明	不明	不明	不明	小形馬	欠損甚しく不明		
54	馬	小歯片1	平安時代~中世	不明	不明	不明	不明	不明	不明		

第6章 考察とまとめ

通番	種類	獣歯・骨の部位	時代	性	年令		大きさ			摘要
					推定年令	年令区分	推定体高cm	体高区分	同時代及び現代獣との比較	
55	馬	RM ₂	不明	不明	7.6才	壮令	131.0	中形馬の中では小さい馬	現代小格馬に比較すると歯冠巾、巾率ともに30%小さい	
56	馬	RP ³ の一部	不明	不明	18.9才	老令	140.0	大形馬の中では小さい馬	欠損甚しく不明	
57	馬	右下顎頰歯の一部1	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
58	馬	小歯片1	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
59~62	馬	左上顎頰歯片3、小歯片1	古墳時代後期6C前半	不明	9才(8~10)	壮令	不明	中形馬の中では小さい馬	欠損甚しく不明	
63	不明	不明小骨片1	古墳時代後期6C前半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
64	馬	LM ₃	不明	不明	11.6才	壮令	133.7	中形馬の中では中位の馬	現代小格馬に比し歯冠長、歯冠巾、巾率ともに同じ	
65~91	馬	切歯4、上顎頰歯12、下顎頰歯6、乳白歯2、下顎体小骨片1、小歯片1	平安時代~中世	不明	2.5才	幼令	140.0	大形馬の中では小さい馬	当時の馬と比較するとやや大きい。現代小格馬と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともに同じ	萌出後間もないため咬合面附近膨張。推定歯冠長を用う

表5節-11 時代別馬の年令及び大きさ

時代	古墳時代	平安時代	平安時代~中世	不明	計
出土個体数	5	2	5	5	17
年令判定可能個体数	4	2	2	3	11
平均年令	9.2±3.2	17.0, 4	6.7, 2.5	12.7±4.7	9.5±5.1
不明	1		3	2	6
幼年令	1	1	1		3
壮令	3		1	2	6
老年令		1		1	2
計	5	2	5	5	17
体高判定可能個体数	4	2	2	3	11
平均体高	132.6±1.6	127.2, 130.0	135.8, 140.0	134.9±3.8	133.5±3.8
不明	1		3	2	6
体高分	大		1		1
	中形馬	3	1		5
	小	1			2
	大形馬			1	1
	小形馬		1		1
小形馬					
計	5	2	5	5	17

表5節-12 時代別牛の年令及び大きさ

時代	古墳時代以降	計
個体数	2	2
年令判定個体数	0	0
不明	2	2
幼年令		
壮令	2	2
老年令		
不明		
大きさ	同時代の牛と比較	
	大きい	
	同じ	
	小さい	
	不明	2
現代黒毛和種と比較		
大きい		
同じ		
小さい	2	2
不明		
摘要	短冊状の小歯片で同時代の牛との比較は困難	

寺中間地域（注2）出土の馬歯・馬骨についての報告があるのみである。三ッ寺I遺跡については上毛野の有力首長の居館の3区東の濠から6世紀初頭に属する馬の頬歯10、中足骨1、前肢基節骨1（個体数2～4）が出土している。宮崎重雄はこれについて「1号馬はこれまで群馬・長野の両県から出土した13個体の歯列長のどれよりも長く、当時としてはかなり大きい馬で名馬として聞えた個体であつたろう。（中略）居館居住者あるいはその関係者により乗用又は兵馬として飼養されていたものであろう。」、またNa712前肢基節骨の4号馬については「最大長72.2で林田の体高推定式に代入すると101.5cmが算出され小型馬相当の馬格が予想される。」と述べている。また国分寺中間地域については、古墳時代に属する4個体（左上顎頬歯及び頬歯片3、前肢骨片4、肢骨片1、上顎骨片1）のうち体高を推定出来たのは僅かに2個体で、それらの推定体高は130cm及び135cmであつた。

三ッ寺II遺跡については表5節-11に示すとおり古墳時代に属する出土個体数は5個体であつたが、そのうち体高を推定出来たのは4個体であつた。その平均体高は 132.6 ± 1.6 cmであり、体高区分から見ると4頭とも中形馬であつた。また国分寺中間地域の各時代を通じての平均体高を見ると、平安時代 128.7 ± 9.6 cm（ $n=41$ ）、中世 125.1 ± 9.2 cm（ $n=73$ ）に比較すると1時代の平均体高としては最も高く、上毛野地域の有力首長居館に属する関係者の飼養する馬にふさわしい馬であつたと言ひ得る。古墳時代の馬の大きかつたことについて直良信夫（注14）は『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』の中で「古墳時代はおしなべて大陸文物交流の旺盛な時代であつたから、大陸から新たに大形馬の移入がこころみられていたことを想定しないわけにはいかない。」と述べているので、古墳時代に属する馬が比較的大きかつたことは全国的な傾向であつたものと推察することが出来る。

- ② 平安時代 表5節-11に示すとおり平安時代の馬の出土個体数は2個体で、それらの体高は夫々127.2cm及び130.0cmである。これらの数字は国分寺中間地域における平安時代に属する馬の平均体高 128.7 ± 9.6 cm（ $n=32$ ）とほぼ同じで納得の行くものである。
- ③ 平安時代-中世 表5節-11に示すとおりこの時代の出土個体数は5個体であり、そのうち体高を判定出来たものが2個体である。それらの体高は夫々135.8cm及び140.0cmで大きいものである。

〔牛〕

古墳時代以降 表5節-12に示すとおり古墳時代以降に2個体出土している。現代黒毛和種と比較するとやや小さいが、短冊状に割れた小歯片であるため同時代の牛との比較は避けた。

4 考 察

（1）三ッ寺II遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬を飼養した人々

前述のとおり表5節-11に示すように三ッ寺II遺跡出土の馬歯・馬骨の個体数の合計17個体である。そのうち体高を判定出来た個体は11個体である。その11個体の体高を時代別に見ると、古墳時代=平均体高 132.6 ± 1.6 cm（ $n=4$ ）、平安時代=127.2cm, 130.0cm（ $n=2$ ）、平安時代-中世=135.8cm, 140.0cm（ $n=2$ ）、不明=134.9 \pm 3.8cm（ $n=3$ ）、合計=平均体高 133.5 ± 3.8 cm（ $n=11$ ）である。

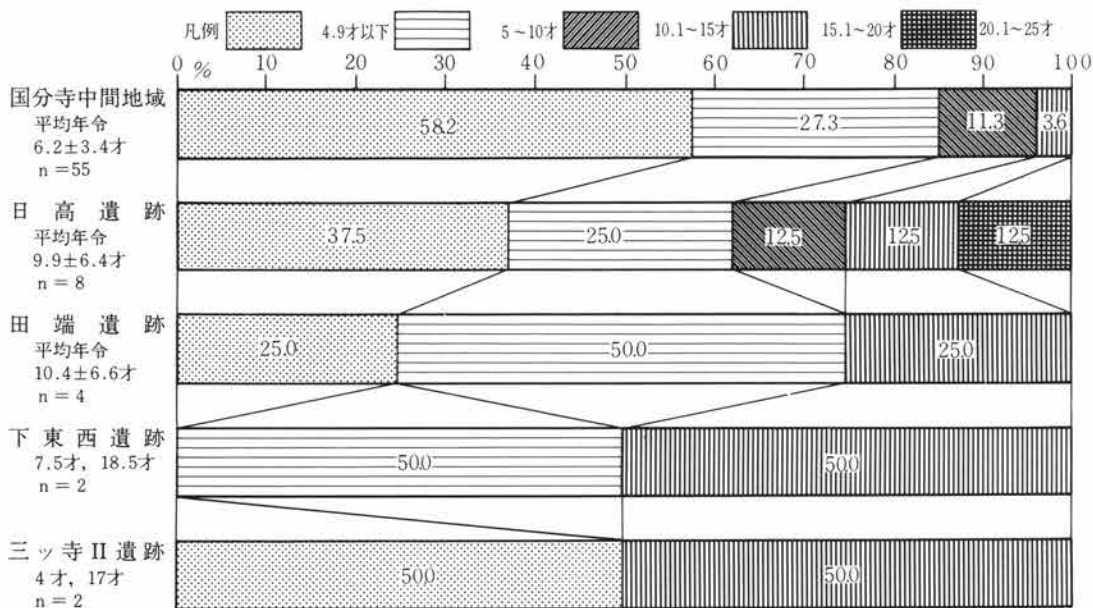
この合計の平均体高を既報の県下5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬の平均体高と比較して見る。

三ッ寺III遺跡(注15)=110~130cm(n=1)、日高遺跡(注5)=131.8±11.9cm(n=14)、下東西遺跡(注16)=132.8±7.9cm(n=9)、田端遺跡(注17)=125.9±6.5cm(n=9)、国分寺中間地域(注2)=127.2±9.6cm(n=162)と比較すると三ッ寺II遺跡の平均体高は県下5遺跡のいずれよりも高い。また上記のとおり三ッ寺II遺跡の各時代の平均体高を見ると平安時代に1個体127.2cmの馬が見られる以外は全個体とも130cmを越え、上野国の馬としては大変大きい部類に属しており、三ッ寺I遺跡が6世紀中葉榛名山二ツ岳のFP土石流によって館の機能を失ったとは言えなおその後裔の人々が三ッ寺I及びII遺跡において祖先伝来の卓越した馬飼養技術を持っており、遺跡そのものの経営規模の縮小は別として、各時代とも経営規模に見合った繁栄と充実をしていたことがうかがわれる。

(2) 平安時代における三ッ寺II遺跡の性格

表5節-8に示すとおり平安時代における出土馬歯・馬骨は僅かに2個体であり、それらの年令は17.0才及び4才である。平安時代における既報の県下5遺跡における死亡年令を年令区分別に見ると5節-7図のとおりである。下東西遺跡は調査担当者によれば7世紀末~8世紀の頃の上毛野氏と有縁または血族と見られる豪族の居館跡が調査され、その竪穴住居跡群は平安時代に継続されるということである。従って出土している馬歯・馬骨は階層社会の上級に位置する人々が飼育していたと考えられる馬の馬歯・馬骨が出土している。それは5節-7図に示すとおり僅か2例ではあるが7.5才及び18.5才の馬の馬歯・馬骨である。今ここで4.9才以下で死ぬことを幼年死、5.0~6.9才で死ぬことを若

5節-7図 平安時代における遺跡別出土馬歯・馬骨を有する馬の年令分布



老令に関する注

- 日高遺跡における15.1~20才, 20.1~25才は夫々17.5才, 22.0才である
- 下東西遺跡における15.1~20才は18.5才である
- 田端遺跡における15.1~20才は18.5才及び20.0才である
- 国分寺中間地域における15.1~20才は16.1才及び16.5才である

年死、7.0～16.9才で死ぬことを壮年死、17.0才以上で死ぬことを老年死と呼ぶこととすると、下東西遺跡では、幼年死がなく、壮年死が50%を占め、また老年死が50%を占めており、中間地域の幼年死が50%を占め老年死が皆無であったことと対照的であった。三ッ寺II遺跡における平安時代に属する出土馬歯・馬骨が僅か2個体であり、それらの年齢が4才及び17.0才であったことは前述のとおりであるが三ッ寺I遺跡が6世紀中葉迄上毛野国の有力首長の居館であり二ツ岳のF P土石流で館の機能を失い主力は他に移動して行ったがその後裔の人々が平安時代にもなお三ッ寺I及びII遺跡に居住し続けていたことは下東西遺跡を想起させるところがある。また僅か2例のことではあるが50%が幼年死を示しているとは言え、50%が老年死を示していることは下東西遺跡と性格的に似ており興味深いところである。このように5つの遺跡を通覧すると平安時代には中間地域のように国の中枢機関の所在地であって公の力の強かった地域においては馬の平均死亡年齢は若年死であり、幼年死が50%を越え、老年死が0であった。これに対して民の力の強かったと思われる日高遺跡及び田端遺跡においては平均死亡年齢は壮年死を示し、中間地域に比較して幼年死の比率が小さく、老年死が25%を占めている。また階層社会における上級の人々が居住していたと思われる下東西遺跡及び三ッ寺II遺跡においては老年死が50%を示していることは興味深いことである。これらのことから三ッ寺II遺跡に居住する人々が平安時代においても上野国の有力首長の後裔の一員として、即ち階層社会における上級の人々として取り扱われていたものと考えられるし、またその人々の誇りと力が優れた馬を飼養し続けさせる背景となったものと推定される。

備考

○国分寺中間地域

上野国分僧寺・尼寺の中間地域であり上野国府推定地より1km、上野国軍団推定地より2kmの地点にある、いわゆる上野国の中枢機関の所在地で公の力の強いところである。動物の歯・骨1059点が出土し、そのうち馬歯・馬骨が619点出土している。平安時代に属する馬歯・馬骨は172点（73個体）出土している。

○日高遺跡

上野国府推定地より南方約1.2kmにあり、しかも古道の国府道に東面する位置関係から一部には公の影響を受けているが、一部には出土する瓦や墨書土器から推定されるように集落に小寺院を有する私的な活動が考えられ、集落像に公と民との両面の性格を合せもつ形が想定されている。

○田端遺跡

和銅4年（711）に建郡された多胡郡山等郷にあり、同郷は天平10年（738）、宝亀11年（780）の記事に見える法隆寺封戸にほぼ誤りない史的背景が存在するという。発掘調査では7世紀終末に存在した田端廃寺の隣接地と8世紀以降の集落が調査されている。馬歯・馬骨については、平安時代の集落内容が、公の影響よりも民的な活動の下での展開と考えられているので、馬歯・馬骨の所産の背景をここでは民の有様を示す例として扱いたい。

○下東西遺跡

下東西遺跡は7世紀代における上毛野氏の基盤地帯の一角にあり、発掘調査では7世紀末～8世紀

頃の上毛野氏と有縁または血族と見られる豪族居館跡が調査され、遺構に掘立柱建物と区画、変形または大形竪穴住居跡を含む竪穴住居群が見られ、その竪穴住居群は平安時代に継続すると言う。馬歯・馬骨については奈良時代及び平安時代の遺構から10点が出土している。ここでは出土の背景を階層社会の上級に位置する人々の私的な生産活動の所産として扱いたい。

注

- 1 宮崎重雄「第XI章 4三ッ寺I遺跡出土の獣骨類について」『三ッ寺I遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1988
- 2 大江正直「付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1990
- 3 大江正直「第5章 第2節 国分境遺跡出土の馬歯・牛歯について」『国分境遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1990
- 4 馬歯 大江正直「13 日高遺跡出土の馬歯・馬骨」『日高遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1982、大江正直「第4節 三ッ寺III遺跡2号土壌墓出土の馬歯・馬骨について」『三ッ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1985、大江正直「付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1990
- 牛歯 大江正直「第4節 田端遺跡出土の獣歯・獣骨について」『田端遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1988
- 5 大江正直「13 日高遺跡出土の馬歯・馬骨」『日高遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1982
- 6 獣歯の部位、記号、並びに各部の名称
〔馬歯〕 G. G. SIMPSON 『HORSES』 OXFORD UNIVERSITY 1951、直良信夫『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』（日本中央競馬会）1970により、和名については原田俊治訳『馬と進化』1979による。
〔牛歯〕 加藤嘉太郎「第2章歯の構造と咀嚼との関係」『家畜の生理と解剖』1979、直良信夫『古代遺跡発掘の家畜遺体』（日本中央競馬会弘済会）1973による。
- 7 獣骨の名称 加藤嘉太郎『家畜比較解剖図説（上巻）改版増訂』1981、川田信平・醍醐正之『図説家畜解剖学（上巻）新改訂』1974による。
- 8 獣歯・獣骨の測定部位
〔馬歯・牛歯〕 [A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES] HARVARD UNIVERSITY 1976による。
〔馬骨・牛骨〕 J. U. DUERST BERN 『METHODEN DEN VERGLEICHENDEN MORPHOLOGISCHEN FORSCHUNG』1926により、馬骨については林田重幸『日本在来馬の系統に関する研究』（日本中央競馬会）1978、直良信夫『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』（日本中央競馬会）1970を参考とし、牛骨については直良信夫『古代遺跡発掘の家畜遺体』1973を参考とした。
- 9 林田重幸『日本在来馬の系統に関する研究』（日本中央競馬会）1978
- 10 市井正次「第24章 年令鑑定」『馬学精説』1943
- 11 豊田裕（並河澄外10名著）『V.4.性成熟と性周期』『新畜産学』1985
- 12 直良信夫『古代遺跡発掘の家畜遺体』（日本中央競馬会弘済会）1973
- 13 R. BARON ANATOMIE COMPAREE DES MAMMIFÈRES DOMESTIQUES, TOME3. SPLANCHNOLOGIE (FETUS ET SES ANNEXES) FASCICULE I, APPAREIL DIGESTIF, APPAREIL RESPIRATOIRE, LABORATOIRE D'ANATOMIE ÉCOLE NATIONALE, VÉTÉRINAIRE LYON, PP. 155-179 1976
- 14 直良信夫『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』（日本中央競馬会）1970
- 15 大江正直「第4節 三ッ寺III遺跡2号土壌墓出土の馬歯・馬骨について」『三ッ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1985
- 16 大江正直「第2節 下東西遺跡出土の獣歯・獣骨について」『下東西遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1987
- 17 大江正直「第4節 田端遺跡出土の獣歯・獣骨について」『田端遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1988

1 番号順遺物索引

- 1 遺物番号は三ッ寺II遺跡出土遺物の登録番号（遺物ラベル）と同じである。
- 2 4桁の番号は実測図・写真などの掲載された遺物番号と一致する。
- 3 遺物番号と遺構番号とは無関係である。
- 4 整理の過程で所属が変更になり、遺物注記と出土遺構が一致しない場合もある。
- 5 遺物注記は掲載スペースの都合により、注記を網羅していない。
- 6 JS34は事前の分布調査における三ッ寺II遺跡の包蔵地（地点）番号である。

* H = 土師器、S = 須恵器（H' = 土師質土器）、K = 灰釉陶器

番号	遺物		出土遺構	掲載 図番 番号	写真 図版 番号	遺物注記 JS34 = 三ッ寺II その他
	焼物種*	器形				
0001	H	鉢	1-1住	222	418	1-1-P1
0002	H	甗?	1-1住	222	-	1-1-P7・14
0003	H	甗	1-1住	222	-	1-1-P20
0004	H	土製 紡錘車	1-1住	222	-	1-1-P23
0005	H	甗	1-2住	222	-	1-2-P11・13・14
0006	H	杯	1-2住	222	-	1-2-P1
0007	H	甗	1-2住	222	418	1-2-P10
0008	K	高台付椀	1-4住	222	418	1-4-P11
0009	H'	羽釜	1-4住	222	-	1-4-P8
0010	H	高杯	1-6住	222	-	1-6-P14
0011	S	甗	1-7住	223	-	1-7-P11・13
0012	H'	高台付椀	1-7住	223	-	1-7-P14
0013	S	羽釜	1-7住	223	418	1-7-P3・7・8・15
0014	H'	羽釜	1-8住	223	-	1-8-P11・16
0015	H'	甗	1-8住	223	-	1-8-P14・23
0016	H	甗	1-9住	223	-	1-9-P2
0017	H	甗	1-10住	224	418	1-10-P1・8
0018	H	甗	1-10住	224	418	1-10-P1・8
0019	H	甗	1-10住	224	-	1-10-P2・4
0020	H	甗	1-10住	224	-	1-10-P7・9
0021	H	杯	1-10住	224	-	1-10-貯
0022	H	杯	1-10住	224	-	1-10-P15
0023	S	杯	1-11住	224	418	1-11-P9
0024	S	羽釜	1-11住	224	-	1-11-P6
0025	K	高台付皿	1-12住	224	-	1-12-P1
0026	H	甗	1-20住	230	421	1-17-P1・13
0027	H	甗	1-17住	228	421	1-17-P28
0028	H	杯	1-17住	228	421	1-17-P4
0029	H	杯	1-17住	228	421	1-17-P8
0030	H	杯	1-17住	228	-	1-17-P16
0031	H	杯	1-17住	228	-	1-17-P9、内黒
0032	H	高杯	1-17住	228	-	1-17-P22
0033	H	甗	1-17住	228	-	1-17-P10・11
0034	H	円盤	1-17住	228	421	1-17-P29

番号	遺物		出土遺構	掲載 図番 番号	写真 図版 番号	遺物注記 JS34 = 三ッ寺II その他
	焼物種*	器形				
0035	H	円盤	1-17住	228	421	1-17
0036	H	滑石製 模造品	1-17住	228	421	1-17、剣形
0037	H	水晶? 丸玉	1-17住	228	421	1-17
0038	H	円盤	1-20住	230	422	1-17-P32
0039	H	円盤	1-20住	230	422	1-17-P36
0040	K	高台付椀	1-18住	229	-	1-18
0041	H	甗	1-19住	229	422	1-19-P1
0042	H	杯	1-19住	229	422	1-19-P4
0043	H	高杯	1-19住	229	422	1-19-P6・貯
0044	H	杯	1-19住	229	-	1-19-P3・貯・カマド
0045	H	甗	1-19住	229	-	1-19-P2・3・カマド
0046	H	丸胴甗	1-19住	229	-	1-19-P7・10・貯
0047	H	甗	1-21住	230	422	1-21-P23
0048	H	杯	1-21住	230	422	1-21-P25
0049	H	杯	1-21住	230	422	1-21-P21・24
0050	H	杯	1-21住	230	-	1-21-P16
0051	H	杯	1-21住	230	-	1-21-P2・14
0052	H	杯	1-21住	230	-	1-21-P13
0053	H	杯	1-21住	230	-	1-21-P4・フク土
0054	H	杯	1-21住	230	-	1-21-P13・フク土
0055	H	甗	1-21住	230	422	1-21
0056	H	甗	1-21住	230	-	1-21-P13
0057	H	丸胴甗	1-21住	231	-	1-21-P5・10・18
0058	H	甗	1-21住	231	-	1-21-P2
0059	S	甗	1-21住	231	423	1-21-P6・8・17他
0060	H	胎形土器	1-22住	232	423	1-22-P6、把手欠
0061	H	胎形土器	1-22住	232	423	1-22-P25・カマド
0062	H	高杯	1-22住	232	424	1-22-P1
0063	H	高杯	1-22住	232	-	1-22-P15・カマド
0064	S	蓋	1-22住	232	-	1-22-P24
0065	H	高杯	1-23住	232	-	1-23-P1
0066	H'	杯	1-24住	233	-	1-24-P28
0067	K	高台付皿	1-24住	233	-	1-24-P18
0068	K	高台付椀	1-26住	233	-	1-25-P7

2 番号順住居索引

- 1 住居は1～6区の順に1号、2号、3号、……と掲載した。
- 2 「表」は住居表、「図」は遺構図または遺物図のことで、それぞれ掲載頁である。
- 3 「写」は『写真図版編』の図版番号である。
- 4 「―」は個別図または個別写真図版の掲載がないことを示す。

*資料編の掲載頁、*写真図版編の図版番号

区	遺 構			遺 物			備 考
	番 号	表*	図*	写*	図*	表*	
1	1住	4	5	9	221	283	418 古墳後期,6c
	2住	6	5	9	221	283	418 古墳後期,6c後半～7c
	3住	7	8	10	221	283	― 平安,10c後半～11c
	4住	9	8	10	221	283	418 平安,10c
	5住	10	11	11	―	―	― 古墳
	6住	12	13	11	221	284	― 古墳後期,6c前半
	7住	14	13	12	222	284	418 平安,10c前半
	8住	15	―	12	222	284	― 平安,10c後半～11c
	9住	16	―	13	222	284	― 古墳後期,6c後半～7c
	10住	17	18	14	223	284	418 古墳中期,5c末
	11住	19	―	16	223	285	418 平安,10c前半
	12住	19	―	―	223	285	― 平安,10c後半
	13住	20	―	16	223	285	425 平安?
	14住	21	―	17	224	285	419 古墳後期,6c前半
	15住	23	24	18	225	286	420 古墳後期,6c前半
	16住	25	26	19	―	―	― 不明,古墳～奈良?
	17住	27	28	20	227	287	421 古墳後期,6c後半
	18住	29	―	―	228	288	― 平安,9c後半
	19住	29	―	―	228	288	422 古墳後期,6c前半
	20住	30	28	20	229	288	421 古墳後期,6c前半
	21住	31	32	22	229	289	422 古墳後期,6c前半
	22住	33	34	24	231	290	423 古墳後期,6c前半
	23住	36	―	25	231	290	― 古墳後期,6c前半
	24住	37	43	26	232	290	― 平安,11c
	25住	38	43	26	―	―	― 古墳
	26住	39	43	―	232	290	― 平安,10c前半
	27住	40	43	―	232	291	― 平安,9c
	28住	41	43	―	232	291	424 平安,9c前半
	29住	42	43	27	233	291	425 古墳後期,6c後半
	30住	43	43	―	―	―	― 古墳後期?
	31住	43	43	―	―	―	― 古墳後期
	32住	44	―	27	233	292	425 古墳後期,6c後半
	33住	45	―	28	―	―	― 平安
	34A住	46	―	29	233	292	― 古墳後期,6c
	34B住	46	46	29	―	―	― 古墳後期,6c
	35住	47	―	30	233	292	425 古墳後期,6c前半
	36住	47	―	31	233	292	― 古墳後期?

区	遺 構			遺 物			備 考
	番 号	表*	図*	写*	図*	表*	
2	1住	58	―	51	―	―	― 古墳後期
	2住	58	―	51	234	293	434 古墳後期,6c後半
	3住	59	―	52	234	293	434 古墳後期,6c前半
	4住	60	60	53	234	293	― 古墳後期,7c
	5住	61	―	54	―	―	― 古墳後期?
	6住	62	―	55	234	293	434 古墳後期,6c前半
	7A住	63	―	56	235	294	― 古墳後期,6c後半～7c
	7B住	63	―	57	―	―	― 古墳後期
	7C住	64	―	57	235	294	434 古墳後期,7c前半
	8住	65	―	58	235	294	434 古墳後期,7c前半
	9住	67	―	58	236	295	― 古墳後期,7c前半
	10住	68	―	61	237	295	436 古墳後期,6c前半
	11住	69	―	62	237	295	― 古墳後期,6c
	12住	70	―	63	237	295	436 古墳後期,6c後半
	13住	71	71	―	―	―	― 古墳?
	14住	71	71	64	237	296	― 古墳後期,6c後半
	15住	72	72	66	237	296	― 古墳後期?
	16住	73	75	65	237	296	436 古墳後期,6c前半
	17住	75	75	65	238	296	437 古墳後期,6c前半
	18住	76	―	67	238	297	437 古墳後期,6c前半
	19住	77	78	67	239	297	― 古墳中期,5c末
	20住	79	―	65	―	―	― 古墳
	21住	79	―	65	239	298	438 古墳後期,6c後半
	22住	79	―	65	―	―	― 古墳
	23住	80	―	70	239	298	438・439 古墳後期,6c後半
	24住	81	―	71	240	299	439 古墳後期,6c後半
	25住	81	―	72	241	299	439 古墳後期,6c後半～7c
	26住	82	―	73	241	299	440 古墳中期,5c末
	27住	83	83	74	241	300	― 古墳後期,6c前半
	28住	84	―	75	241	300	440 古墳後期,6c前半
	29住	85	―	76	―	―	― 古墳後期?
	30住	85	―	77	―	―	― 古墳
	31住	85	83	75	―	―	― 古墳
	32住	86	87	77	242	301	442 古墳中期,5c末
	33住	88	89	78	243	301	442 古墳中期,5c末
	34住	89	89	―	―	―	― 古墳?
	35住	90	―	79	244	302	― 古墳後期,6c前半

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第93集

本文編

三ッ寺II遺跡

—上越新幹線関係埋蔵
文化財発掘調査報告第13集—

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月29日 発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

群埋文報告第93集,上越新幹線関係第13集 三ッ寺Ⅱ遺跡『本文編』 正誤表

19910329開

頁	行	誤	正
3	下から8行目	日本道路公団などと覚書を結んで、	日本道路公団などと覚書を結んで、
3	下から6行目	関する覚書」を締結	関する覚書」を締結
3	下から6行目	本県でもこの覚書に基づき	本県でもこの覚書に基づき
4	上から15行目	同日付けで調査し年度の	同日付けで調査し年度の
6	本文上から2行目	埋蔵文化財調査は次表のような	埋蔵文化財調査は1-1表のような
7	上から15行目	調査が全国的に展開されており、	調査が全面的に展開されており、
8	上から8行目	シートパネルを打つ本格的	シートバイルを打つ本格的
8	上から19行目	ラーメン(橋脚)ごと公設定、	ラーメン(橋脚)ごとに設定
9	上から27行目	公団用地内なら問題ないが	公団用地内なら問題ないが
10	上から11行目	大原遺跡では3カ月	大原遺跡では3日
10	上から15行目	土壌の中の居住地	土壌の中の住居址
10	上から21行目	どう動いているかの動向を	どう動いているかの動向を
154	下から13行目	7字目の「四」の字が、	7字目の「四」の字が、
154	下から9行目	「四」の字が誤字であること、	「四」の字が誤字であること、
154	下から4行目	[廣カ] 	[廣カ] 
155	* 1	『1981年出土の本館・群馬・三ッ寺Ⅱ遺跡』	『1981年出土の本館・群馬・三ッ寺Ⅱ遺跡』
155	* 2	佐藤「信」『習書と落書』	佐藤「信」『習書と落書』

群埋文報告第93集,上越新幹線関係第13集 三ッ寺Ⅱ遺跡『資料編1』 正誤表

19910117開0118改

	誤	正
25頁	第27図1区16_住居跡壁跡ピット列(西から)	第27図1区16号住居跡壁跡ピット列(西から)
143頁	第143図3区21号住居跡Bカマド遺物(西から)	第143図3区21号住居跡貯蔵穴脇遺物(西から)
248頁	第249図2区43-44号住居跡出土遺物 0295H・0294H	0294H・0295H
253頁	第254図3区7・8・11・12号住居跡出土遺物 0348H・0347H	0347H・0348H
255頁	第256図3区20・21・22号住居跡市遺物 0540H・0541H	0541H・0540H

群埋文報告第93集,上越新幹線関係第13集 三ッ寺Ⅱ遺跡『資料編2』 正誤表

19910117開0119

	誤	正
423頁	第377図4区65号住居跡 右下図土坑番号 135号	153号
501頁	4区147号住居跡→住居表に追加	カマドは東向き,住居プランは調査区外の西へ広がる カマド対称軸方位 N90度前後E
615頁	第800図5区46号住居跡遺物出土状態(西から)	住居中央床面の割れた礎の遺物番号=1262
681頁	第687図4区1号住居跡出土遺物 左上遺物番号	1000
694頁	第700図4区83・85・88・70号住居跡出土遺物0712	0721
762頁	4区81号住居跡 0807重さ15.2kg	重さ1.52kg
762頁	4区81号住居跡 0808重さ15.1kg	重さ1.51kg